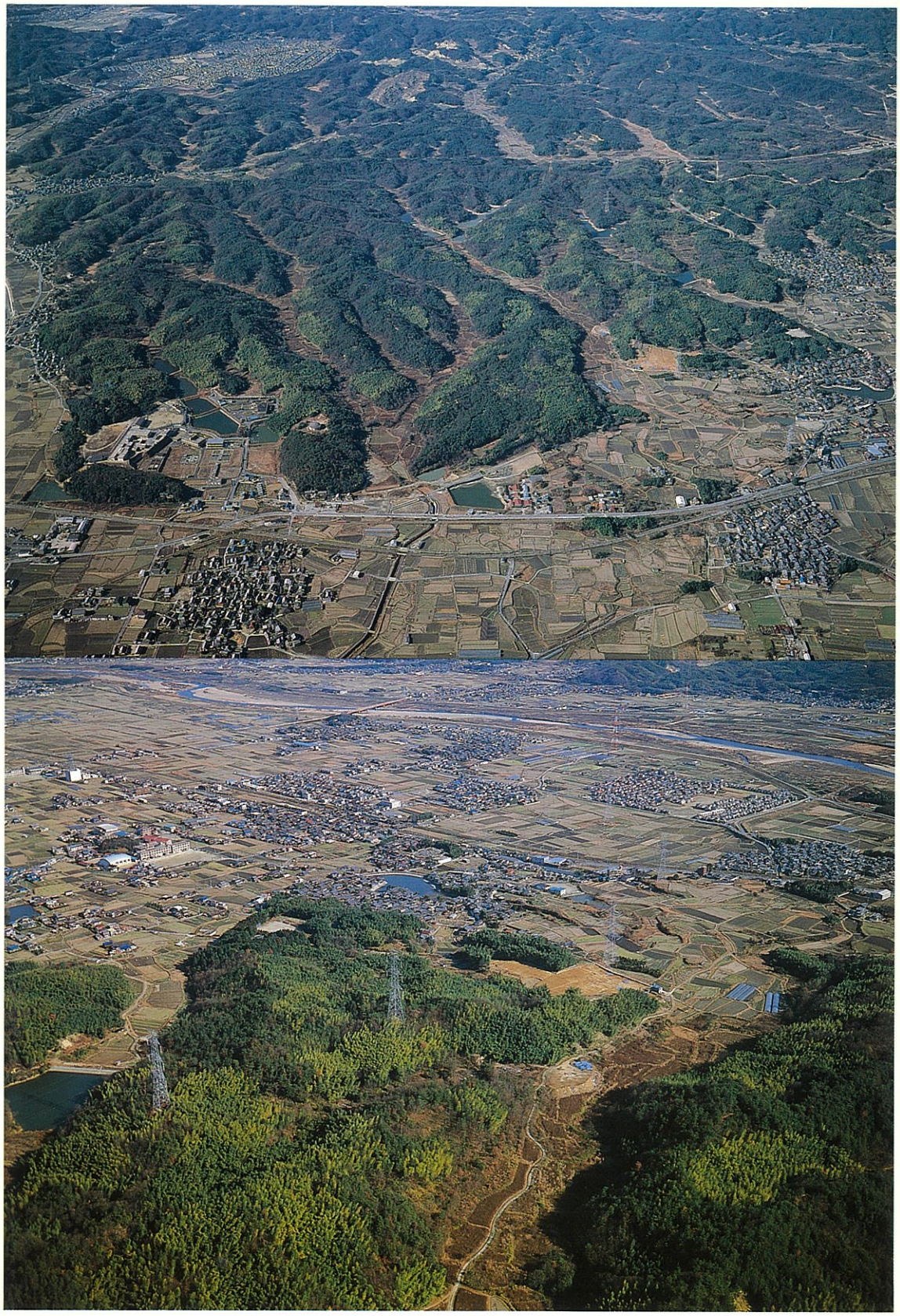
京都府

(仮称)精華ニュータウン予定地内
遺跡発掘調査報告書

—煤谷川窯址・畑ノ前遺跡—

財團法人　古代學協會

昭和62年



精華ニュータウン予定地航空写真
上：予定地全域(東方より)，下：畑ノ前遺跡と木津川(南西方より)

畑ノ前遺跡・調査後航空写真(上が北)

畑ノ前遺跡・奈良時代遺構集中部航空写真(上が西)

畑ノ前遺跡・奈良時代５Ｈ井戸１断ち割り状況(東より)

序　　文

京阪奈丘陵地帯に計画されました関西文化学術研究都市の建設は，昭和60年４月に本町域での学研施設第一号として京都府花き総合指導センターが開園し，また住宅・都市整備公団による祝園土地区画整理事業が起工されるなど，ようやくその本格的な取り組みが進められるようになってまいりました。

このたびの(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡の発掘調査も，この関西文化学術研究都市建設の関連事業として，野村不動産株式会社・三井不動産株式会社・京阪電気鉄道株式会社の三社が計画されました宅地開発事業の事前調査として実施したものです。調査は，京都府教育委員会のご紹介により，財團法人古代學協會・平安博物館に委託することとし，昭和59・60年度に発掘調査を，昭和61年度にその整理作業をお願いいたしました。

発掘調査の成果は本書に詳細に報告されているところですが，中でも畑ノ前遺跡の調査は，発掘面積が約12,000m²にも及ぶ広大な調査となり，弥生時代の住居址，古墳，奈良時代の掘立柱建物群及びこれに伴う井戸・溝等多数の遺構が検出され，また多くの遺物が出土するなど，多大の成果をあげることができました。奈良時代の建物群は，当時の豪族の居住地がほぼ完全な形で検出された例として，また，この建物群の南東部の井戸に埋設されていた井戸枠は，その規模・残存度から見て，わが国で他に例を見ない資料として，学術上極めて重要な価値を有しているといえましょう。

この井戸枠については，昭和62・63年度の２ケ年計画で京都府立山城郷土資料館に保存処理をお願いいたしております。

今後，関係機関と協議を重ね，今回の調査成果の充分な保存と活用が図れるよう努力する所存であります。

最後になりましたが，発掘調査・整理作業と３ケ年にわたって調査にあたっていただきました財團法人古代學協會・平安博物館の皆様方，ならびに調査の実施にあたって種々のご指導・ご協力を賜わりました関係機関・関係各位，また，本町の文化財行政にご理解をいただき最後までご協力を惜しまれなかった開発関係者，地権者，地元住民の方々に心からお礼申し上げるとともに，今後ともご支援・ご協力賜わりますようお願い申し上げます。

昭和62年３月

精華町教育委員会教育長
松　井　寛　治

序　　文

京阪奈丘陵の一画を占める京都府相楽郡精華町のニュータウン予定地内遺跡調査に，財團法人古代學協會・平安博物館が始めて関与したのは，昭和59年のことであった。その年には既知の遺跡候補地について試掘調査を実施し，翌60年には，畑ノ前遺跡ならびに煤谷川窯址について全面を調査するとともに，若干の試掘調査を併行した。そうして，いまここに調査結果を刊行するはこびとなったのである。まさに3ケ年にわたる長く大きい事業であったといえる。

調査結果の細目については，酷暑や厳寒をいとわず発掘作業に従事した若い人達の記述にゆだねるが，そのなかで，奈良時代の掘立柱建物群が畑ノ前遺跡で検出されたことは，予想を越えるものであった。この建物群は，孝謙女帝の寵をうけて位階を進められた内侍の正五位上勲四等・仲村女を出した稲蜂間氏の居宅であったともいわれるが，この点は，今後多くの論議を呼ぶことであろうし，またそうなることをひそかに望んでもいる。

さらに，建物群の一画から検出された井筒は檜の巨木を刳りぬいたもので，工具の痕をとどめる残存状態の良さは，見る者を驚かせるに充分であった。調査員の努力によって，さいわいにも取りあげることが可能となり，さらに保存処理が施されるという。この発見もまた学界に裨益するところが少なくないと信ずる。

このように幾多の成果を残し，このたび刊行にまでたち至ったことは，まことに欣懐に堪えない。この間に御助力を忝うした京都府や精華町の当局，京阪三社をはじめ関係諸方面のかたがたに，篤く感謝の意を表する次第である。

昭和62年3月

財團法人古代學協會専務理事
平安博物館館長兼教授
角　田　文　衛

例　　言

1．本書は，昭和59・60年度に(財)古代學協會・平安博物館が京都府精華町教育委員会の委託を受けて実施した，(仮称)精華ニュータウン予定地内の所在遺跡発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は，川西宏幸・定森秀夫・植山 茂・山田邦和・鈴木忠司・寺島孝一(現東京大学)・藤本孝一・南 博史・辻村純代(以上，平安博物館)，千喜良 淳・大下 明(以上，関西大学大学院)，朴 賢淑(同志社大学大学院)が分担し，花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社，樹種同定は林 昭三氏(京都大学木材研究所助教授)・島地 謙氏(京都大学名誉教授)，^{14}C年代測定は山田 治氏(京都産業大学教授)，掘立柱建物は杉山信三氏(京都市埋蔵文化財研究所所長)，胎土分析は三辻利一氏(奈良教育大学教授)，中世の文献的考察を四倉俊昭氏(平安高等学校講師)に執筆いただいた。
執筆分担は目次に示した。

3．遺構・遺物の実測・写真撮影・トレースは，調査員・調査補助員・整理員が各々分担して行った。

4．座標の値は平面直角座標系VIによる。

5．方位は，真北を使用した。水準線に添えてある数字は標高を示す。

6．本書の構成は4部に分けたが，挿図・表は通し番号とし，図版は巻末に一括した。註は末尾に一括したが，後論では各章の末尾に掲げてある。

7．遺物実測図は原則として縮尺を4分の1とした。図版の遺物写真は縮尺不同であり，図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。

8．本書の編集は，平安博物館考古学第3研究室の川西宏幸・定森秀夫，考古学第4研究室の植山 茂・山田邦和が協議して行い，川西が統括した。

9．出土遺物は精華町教育委員会で保管し，遺構・遺物の図面・写真などの調査の記録は平安博物館で保管している。

目　　次

頁

はじめに

第１章　位置と環境(川西宏幸) …… 3
　第１節　位置と地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
第２章　調査に至る経過と調査体制(川西) …… 7
第３章　昭和59年度試掘調査の経過と結果(鈴木忠司・寺島孝一) …… 11
　第１節　遺跡と調査日程 …… 11
　第２節　高樋遺跡 …… 11
　　１．調査経過 …… 11　　３．出土遺物 …… 13
　　２．調査結果 …… 13
　第３節　畑ノ前遺跡 …… 13
　　１．調査経過 …… 13　　３．出土遺物 …… 15
　　２．調査結果 …… 14
　第４節　平尾谷遺跡 …… 15
　　１．調査経過 …… 15　　３．出土遺物 …… 17
　　２．調査結果 …… 17
　第５節　まとめ …… 17
第４章　昭和60年度本調査・試掘調査の経過(川西) …… 18

煤谷川窯址

第１章　調査の経過とトレンチの設定(山田邦和) …… 23
第２章　遺構(山田) …… 25
第３章　遺物(山田) …… 31
第４章　小結(山田) …… 46

畑ノ前遺跡

第１章　遺跡の概要(定森秀夫) …… 49
　第１節　現状と調査経過の概略 …… 49

第２節　層位と遺構の概略 ……52
第２章　弥生時代の遺構と遺物(千喜良 淳) ……56
第１節　主要な遺構 ……56
１．竪穴住居址 ……56
１)竪穴住居址１ ……56
２)竪穴住居址２ ……58
３)竪穴住居址３ ……58
４)竪穴住居址４ ……59
５)竪穴住居址５ ……59
６)竪穴住居址６ ……59
７)竪穴住居址７ ……59
８)竪穴住居址８ ……59
２．不明遺構 ……60
１)３Ｅ不明遺構１ ……60
２)４Ｅ不明遺構１ ……60
３．土壙 ……61
１)２Ｇ土壙１・３ ……63
２)３Ｄ24・25土壙１ …63
３)３Ｅ土壙７ ……63
４)４Ｈ土壙４ ……63
第２節　遺物 ……63
１．弥生土器 ……63
１)竪穴住居址出土土器……63
２)不明遺構出土土器……65
３)土壙・溝状遺構出土土器66
４)包含層出土土器……70
５)各地区包含層出土土器76
６)その他の出土土器…78
２．石器(大下 明・千喜良) 81
１)石器の概要……81
２)石器各説……81
第３章　古墳時代の遺構と遺物(朴 賢淑) ……104
第１節　主要な遺構 ……104
１．１号墳 ……104
２．２号墳 ……104
３．３号墳 ……104
４．４号墳 ……106
５．５号墳 ……106
６．６号墳 ……107
７．７号墳 ……109
第２節　遺物 ……110
１．３号墳出土遺物 ……110
２．４号墳出土遺物 ……112
３．６号墳出土遺物 ……113
４．７号墳出土遺物 ……114
５．６Ｉ２区出土遺物 ……116
第４章　奈良時代の遺構と遺物 ……117
第１節　主要な遺構 ……117
１．掘立柱建物(植山 茂) ……117
１)Ａ類……117
２)Ｂ類……125
３)Ｃ類……127

4）D類……129
5）E類……131
6）掘立柱建物群の規格性…132
2．5H井戸1（山田邦和）……135
3．溝 ……139
1）3D溝1（辻村純代）……139
2）5F石組溝（定森）……139
3）5G溝1（定森）……139
4）古墳周濠（定森）……142
4．土壙（定森）……143
1）2G土壙16……143
2）5F溝2南・ほりこみ …144
3）3H13土壙1……144
4）6H土壙3……145
第2節　遺物 ……145
1．5H井戸1出土遺物（山田，曲物は南 博史）……145
2．溝出土遺物（山田，3D溝1出土土馬は辻村）……148
3．土壙出土遺物（山田）…170
4．包含層出土遺物（山田）172
5．発掘区出土瓦（植山）…172
第5章　その他の遺構と遺物（定森）……180
第1節　主要な遺構 ……180
1．側壁が焼けた土壙 ……180
2．中世溝状遺構 ……182
3．4H不明遺構1 ……182
4．6F井戸1 ……183
第2節　遺物 ……183
第6章　畑ノ前遺跡試料花粉分析報告（パリノ・サーヴェイ社）……185
1．試料 ……185
2．分析方法 ……185
3．結果および考察 ……186
第7章　畑ノ前遺跡5H井戸1およびその周辺から発掘された木質遺物の樹種（林昭三・島地謙）190
1．はじめに ……190
2．同定方法 ……190
3．樹種同定結果 ……190
4．むすび ……198
第8章　畑ノ前遺跡の^{14}C年代測定（山田 治）……199
1．畑ノ前遺跡の^{14}C年代測定結果 199
2．結果の考察と年輪年代 199
第9章　小結（川西宏幸）……201

後　論

第1章　弥生時代の畑ノ前遺跡（千喜良 淳）……207
第1節　山城の弥生時代遺跡と畑ノ前遺跡 ……207
第2節　畑ノ前遺跡の遺構 ……207

第3節　畑ノ前遺跡出土の弥生土器 ……211
第4節　畑ノ前遺跡出土の近江系土器 ……213
第5節　畑ノ前遺跡出土の石器 ……216
第6節　畑ノ前遺跡の性格 ……218
第2章　畑ノ前遺跡の掘立柱遺構について(杉山信三) ……223
第3章　山城の須恵器生産(山田邦和) ……227
第1節　はじめに ……227
第2節　山城における窯址の分布 ……227
第3節　古墳時代の須恵器生産 ……229
第4節　飛鳥・白鳳時代の須恵器生産 ……232
第5節　奈良時代の須恵器生産 ……233
第6節　平安時代の須恵器生産 ……234
第4章　土馬をめぐる祭祀(辻村純代) ……238
第1節　はじめに ……238
第2節　漢神祭祀と土馬 ……239
第3節　生馬奉献と土馬 ……240
第4節　大祓と土馬 ……241
第5節　土馬の消滅 ……242
第5章　煤谷川窯址・畑ノ前遺跡出土須恵器の蛍光X線分析(三辻利一) ……245
第1節　須恵器の産地推定の考え方 ……245
第2節　分析方法 ……246
第3節　分析結果 ……246
第6章　畑ノ前遺跡の文献学的考察(藤本孝一) ……251
第1節　はじめに ……251
第2節　稲蜂間宿祢仲村女 ……251
第3節　稲八間荘 ……254
第7章　中世における精華町の景観(四倉俊昭) ……257
第1節　はじめに ……257
第2節　概観 ……257
第3節　精華町の荘園 ……258
第4節　中世精華町の住民 ……260
第5節　「山城国一揆」と精華町 ……263
第6節　まとめにかえて ……266

巻頭図版目次

巻頭図版第１　精華ニュータウン予定地航空写真
巻頭図版第２　畑ノ前遺跡・調査後航空写真
巻頭図版第３　畑ノ前遺跡・奈良時代遺構集中部航空写真
巻頭図版第４　畑ノ前遺跡・奈良時代５Ｈ井戸１断ち割り状況

図　版　目　次

図版第１　精華ニュータウン予定地全景
図版第２　煤谷川窯址・遺構(1)
図版第３　煤谷川窯址・遺構(2)
図版第４　煤谷川窯址・遺構(3)
図版第５　煤谷川窯址・遺構(4)
図版第６　煤谷川窯址・出土須恵器(1)
図版第７　煤谷川窯址・出土須恵器(2)
図版第８　畑ノ前遺跡・調査前全景
図版第９　畑ノ前遺跡・調査後全景(1)
図版第10　畑ノ前遺跡・調査後全景(2)
図版第11　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(1)
図版第12　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(2)
図版第13　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(3)
図版第14　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(4)
図版第15　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(5)
図版第16　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(6)
図版第17　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(7)
図版第18　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(8)
図版第19　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(9)
図版第20　畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(1)
図版第21　畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(2)
図版第22　畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(3)
図版第23　畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(4)
図版第24　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(1)
図版第25　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(2)
図版第26　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(3)
図版第27　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(4)
図版第28　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(5)
図版第29　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(6)
図版第30　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(7)
図版第31　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(8)
図版第32　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(9)
図版第33　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(10)
図版第34　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(11)
図版第35　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(12)
図版第36　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(13)
図版第37　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(14)
図版第38　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(15)
図版第39　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(16)
図版第40　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(17)
図版第41　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(18)
図版第42　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(19)
図版第43　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(20)
図版第44　畑ノ前遺跡・奈良時代包含層遺物出土状況
図版第45　畑ノ前遺跡・その他の遺構(1)
図版第46　畑ノ前遺跡・その他の遺構(2)
図版第47　畑ノ前遺跡・その他の遺構(3)
図版第48　畑ノ前遺跡・その他の遺構(4)
図版第49　畑ノ前遺跡・その他の遺構(5)
図版第50　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(1)
図版第51　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(2)
図版第52　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(3)
図版第53　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(4)
図版第54　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(5)
図版第55　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(6)

図版第56　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(7)
図版第57　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(8)
図版第58　畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(9)
図版第59　畑ノ前遺跡・古墳時代の遺物(1)
図版第60　畑ノ前遺跡・古墳時代の遺物(2)
図版第61　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(1)
図版第62　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(2)
図版第63　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(3)
図版第64　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(4)
図版第65　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(5)
図版第66　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(6)
図版第67　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(7)
図版第68　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(8)
図版第69　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(9)
図版第70　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(10)
図版第71　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(11)
図版第72　畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(12)

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図…３
第２図　(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡分布図……７
第３図　高樋遺跡試掘トレンチ位置図……12
第４図　高樋遺跡試掘調査終了状況写真…13
第５図　畑ノ前遺跡試掘トレンチ位置図…14
第６図　畑ノ前遺跡試掘調査終了状況写真15
第７図　平尾谷遺跡試掘トレンチ位置図…16
第８図　平尾谷遺跡試掘調査終了状況写真16
第９図　古墳候補地試掘調査終了状況写真18
第10図　遺跡候補地試掘調査終了状況写真19
第11図　煤谷川窯址地形測量図およびトレンチ位置図……23
第12図　煤谷川窯址発掘前灰原露出状況写真……24
第13図　煤谷川窯址発掘後地形測量図……25
第14図　煤谷川窯址中央・南両区断面実測図……26
第15図　煤谷川窯址南・北両区断面実測図26
第16図　煤谷川窯址灰原(上層)実測図……27
第17図　煤谷川窯址灰原(下層)実測図……28
第18図　煤谷川窯址東区溝実測図……29
第19図　煤谷川窯址東区溝断面実測図……29
第20図　煤谷川窯址東区溝遺物出土状況実測図……30
第21図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(1)…32
第22図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(2)…35
第23図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(3)…37
第24図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(4)…38
第25図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(5)…39
第26図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(6)…41
第27図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(7)…42
第28図　煤谷川窯址出土杯・皿法量分布図43
第29図　煤谷川窯址出土須恵器爪形状圧痕拓影……43
第30図　煤谷川窯址出土瓦実測図および拓影……44
第31図　畑ノ前遺跡本調査前地形測量図…50
第32図　畑ノ前遺跡グリッド配置および発掘区域図……51
第33図　畑ノ前遺跡南方山頂試掘調査終了状況写真……52
第34図　畑ノ前遺跡Ｇ区北側層位図……53
第35図　畑ノ前遺跡地形断面図……54
第36図　畑ノ前遺跡弥生時代主要遺構分布図……56
第37図　畑ノ前遺跡竪穴住居址１・２実測図……57
第38図　畑ノ前遺跡竪穴住居址２内炉址(３Ｇ土壙８)実測図 ……58

第39図　畑ノ前遺跡竪穴住居址３実測図…58
第40図　畑ノ前遺跡竪穴住居址４・５実測図……59
第41図　畑ノ前遺跡３Ｅ不明遺構１実測図60
第42図　畑ノ前遺跡４Ｅ不明遺構１実測図61
第43図　畑ノ前遺跡弥生時代土壙実測図…62
第44図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(1)64
第45図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(2)65
第46図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(3)67
第47図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(4)69
第48図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(5)71
第49図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(6)72
第50図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(7)73
第51図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(8)74
第52図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(9)75
第53図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(10)77
第54図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(11)79
第55図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(12)80
第56図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(1)……85
第57図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(2)……86
第58図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(3)……87
第59図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(4)……88
第60図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(5)……89
第61図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(6)……90
第62図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(7)……91
第63図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(8)……92
第64図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(9)……93
第65図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(10)……94
第66図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(11)……95
第67図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(12)……96
第68図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(13)……97
第69図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(14)……98
第70図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(15)……99
第71図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(16)……100
第72図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(17)……101
第73図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(18)……102
第74図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(19)……103
第75図　畑ノ前遺跡古墳群分布図……104
第76図　畑ノ前遺跡１・２・３号墳実測図105
第77図　畑ノ前遺跡３号墳主体部実測図…106
第78図　畑ノ前遺跡４号墳実測図……106
第79図　畑ノ前遺跡４号墳主体部実測図…107
第80図　畑ノ前遺跡５・６号墳実測図……108
第81図　畑ノ前遺跡６号墳主体部実測図…109
第82図　畑ノ前遺跡７号墳実測図……110
第83図　畑ノ前遺跡７号墳主体部実測図…111
第84図　畑ノ前遺跡３号墳出土遺物実測図112
第85図　畑ノ前遺跡４号墳出土遺物実測図113
第86図　畑ノ前遺跡６号墳出土遺物実測図114
第87図　畑ノ前遺跡７号墳出土遺物実測図115
第88図　畑ノ前遺跡6Ｉ2区出土遺物実測図116
第89図　畑ノ前遺跡掘立柱建物群遺構配置図……119・120
第90図　畑ノ前遺跡掘立柱建物２実測図…121
第91図　畑ノ前遺跡掘立柱建物１実測図…122
第92図　畑ノ前遺跡掘立柱建物20実測図…123
第93図　畑ノ前遺跡掘立柱建物４実測図…123
第94図　畑ノ前遺跡掘立柱建物13実測図…123
第95図　畑ノ前遺跡掘立柱建物６実測図…124
第96図　畑ノ前遺跡掘立柱建物21実測図…124
第97図　畑ノ前遺跡掘立柱建物８実測図…124
第98図　畑ノ前遺跡掘立柱建物３実測図…125
第99図　畑ノ前遺跡掘立柱建物７実測図…125
第100図　畑ノ前遺跡掘立柱建物12実測図…126
第101図　畑ノ前遺跡掘立柱建物11実測図…126
第102図　畑ノ前遺跡掘立柱建物23実測図…127
第103図　畑ノ前遺跡掘立柱建物５実測図…127
第104図　畑ノ前遺跡掘立柱建物９実測図…128
第105図　畑ノ前遺跡掘立柱建物10実測図…128
第106図　畑ノ前遺跡掘立柱建物22実測図…128
第107図　畑ノ前遺跡掘立柱建物19実測図…129
第108図　畑ノ前遺跡掘立柱建物14実測図…130

第109図　畑ノ前遺跡掘立柱建物15実測図…130
第110図　畑ノ前遺跡掘立柱建物柱穴土層剝ぎ取り標本作成作業状況写真……131
第111図　畑ノ前遺跡掘立柱建物16実測図…131
第112図　畑ノ前遺跡掘立柱建物17実測図…132
第113図　畑ノ前遺跡掘立柱建物18実測図…132
第114図　畑ノ前遺跡掘立柱建物類別遺構配置図……134
第115図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１実測図……136
第116図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１下部井戸側取り上げ状況写真……137
第117図　畑ノ前遺跡３Ｄ溝１実測図……138
第118図　畑ノ前遺跡５Ｆ石組溝実測図……139
第119図　畑ノ前遺跡５号墳周濠断面実測図140
第120図　畑ノ前遺跡５号墳周濠遺物出土状況平面実測図……140
第121図　畑ノ前遺跡６号墳周濠断面実測図141
第122図　畑ノ前遺跡６号墳周濠遺物出土状況平面実測図……141
第123図　畑ノ前遺跡７号墳周濠断面実測図142
第124図　畑ノ前遺跡２Ｇ土壙16実測図……143
第125図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土遺物実測図(1)……144
第126図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土遺物実測図(2)……145
第127図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土遺物実測図(3)……146
第128図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土上部井戸側実測図……147
第129図　畑ノ前遺跡３Ｄ溝１出土土馬実測図……148
第130図　畑ノ前遺跡５号墳周濠出土遺物実測図(1)……151
第131図　畑ノ前遺跡５号墳周濠出土遺物実測図(2)……152
第132図　畑ノ前遺跡５号墳周濠出土遺物実測図(3)……153
第133図　畑ノ前遺跡５号墳周濠出土遺物実測図(4)……154
第134図　畑ノ前遺跡５号墳周濠出土遺物実測図(5)……155
第135図　畑ノ前遺跡５号墳周濠上層出土遺物実測図(1)……157
第136図　畑ノ前遺跡５号墳周濠上層出土遺物実測図(2)……158
第137図　畑ノ前遺跡５号墳周濠下層出土遺物実測図……158
第138図　畑ノ前遺跡６号墳周濠出土遺物実測図(1)……161
第139図　畑ノ前遺跡６号墳周濠出土遺物実測図(2)……162
第140図　畑ノ前遺跡６号墳周濠出土遺物実測図(3)……162
第141図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(1)……164
第142図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(2)……165
第143図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(3)……166
第144図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(4)……167
第145図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(5)……167
第146図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(6)……168
第147図　畑ノ前遺跡５Ｇ溝１出土遺物実測図……169
第148図　畑ノ前遺跡５Ｆ溝２南・ほりこみ出土遺物実測図……170
第149図　畑ノ前遺跡３Ｈ13土壙１出土遺物実測図……171
第150図　畑ノ前遺跡６Ｈ土壙３・奈良時代包

含層出土遺物実測図……171
第151図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(1)……173
第152図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(2)……174
第153図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(3)……175
第154図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(4)……176
第155図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(5)……177
第156図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(6)……178
第157図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(7)……179
第158図　畑ノ前遺跡側壁が焼けた土壙実測図……181
第159図　畑ノ前遺跡4H不明遺構1排水施設実測図……182
第160図　畑ノ前遺跡中世溝状遺構出土遺物実測図……183
第161図　畑ノ前遺跡における花粉化石群…185
第162図　畑ノ前遺跡5H井戸1内土壌の花粉化石顕微鏡写真……187
第163図　畑ノ前遺跡各採集試料の顕微鏡下状況写真……188
第164図　畑ノ前遺跡5H井戸1出土木質遺物細胞組織顕微鏡写真(1)……193
第165図　畑ノ前遺跡5H井戸1出土木質遺物細胞組織顕微鏡写真(2)……194
第166図　畑ノ前遺跡5H井戸1出土木質遺物細胞組織顕微鏡写真(3)……195
第167図　畑ノ前遺跡5H井戸1出土質遺物細胞組織顕微鏡写真(4)……196
第168図　山城の弥生時代遺跡分布図……208
第169図　近江系甕形土器の口縁部形態分類213
第170図　山城の窯址分布図……228
第171図　山城出土須恵器実測図……231
第172図　煤谷川窯址出土須恵器のRb—Sr分布図……247
第173図　煤谷川窯址出土須恵器のK量……247
第174図　煤谷川窯址出土須恵器のCa量　…248
第175図　煤谷川窯址出土須恵器のFe量　…248
第176図　畑ノ前遺跡出土須恵器のRb—Sr分布図……249
第177図　寒風2号窯址出土須恵器のRb—Sr分布図……249
第178図　寒風2号窯址出土須恵器のK，Ca，Fe量　……250
第179図　臼井明家文書第204号　……255
第180図　精華町周辺の荘園……259
第181図　南山城の城館……262
第182図　稲屋妻城跡平面図……263

付　図　目　次

付図第1　畑ノ前遺跡遺構全体図

表　目　次

第1表　相楽郡木津町・竹野郡弥栄町の気象条件一覧表……4
第2表　(仮称)精華ニュータウン予定地内分布遺跡一覧表……8
第3表　煤谷川窯址出土杯蓋および皿蓋分類表……33
第4表　煤谷川窯址出土有台杯および有台皿分類表……36

第５表　煤谷川窯址出土無台杯および無台皿分類表……40
第６表　畑ノ前遺跡出土石器一覧表(1)……82
第７表　畑ノ前遺跡出土石器一覧表(2)……83
第８表　畑ノ前遺跡出土石器一覧表(3)……84
第９表　畑ノ前遺跡掘立柱建物一覧表……118
第10表　畑ノ前遺跡５・２号墳周濠および５Ｈ井戸１内花粉分析試料表……185
第11表　畑ノ前遺跡試料花粉分析結果表…186
第12表　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土樹種表191
第13表　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土樹種別件数表……191
第14表　畑ノ前遺跡^{14}Ｃ年代測定値表 ……199
第15表　^{14}Ｃ年代から年輪年代への読み替え表……200
第16表　山城の弥生時代遺跡一覧表 …209・210
第17表　壷形土器の口縁部に於ける櫛描文施文頻度表……211
第18表　壷形土器の頸部・胴部に於ける櫛描文施文頻度表……212
第19表　石鏃組成表……216
第20表　石庖丁用石材の割合表……216
第21表　石器組成表……218
第22表　山城の主要窯址群変遷略表……236

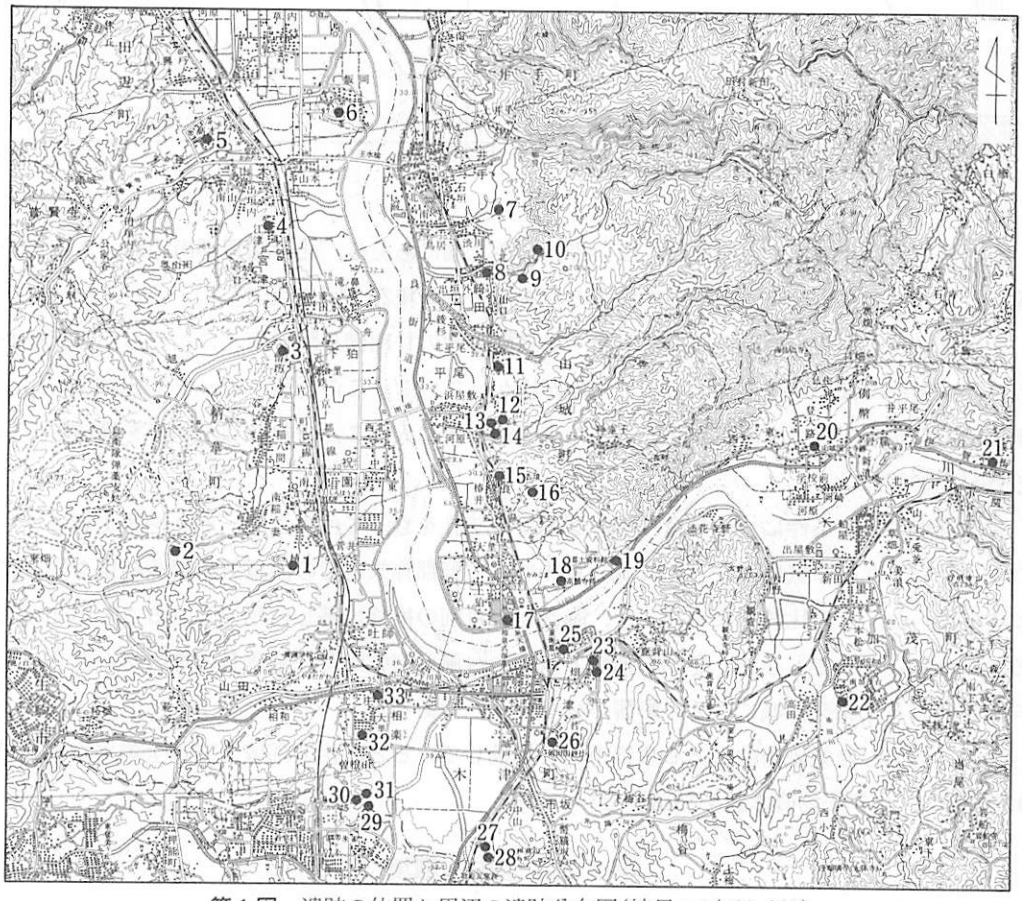
はじめに

第１章　位置と環境

第１節　位置と地理的環境

発掘調査の対象となった遺跡ならびに試掘地は，京都府相楽郡精華町に所在し，畑ノ前遺跡は大字植田小字新田・畑ノ前に，煤谷川窯址は大字南稲八妻小字福生坊・堀割にまたがって広がっている。相楽郡は，山城南部にあって，北は綴喜郡，東は滋賀県甲賀郡や三重県阿山郡，南は奈良県添上郡や奈良市，西は奈良県生駒市と接する。

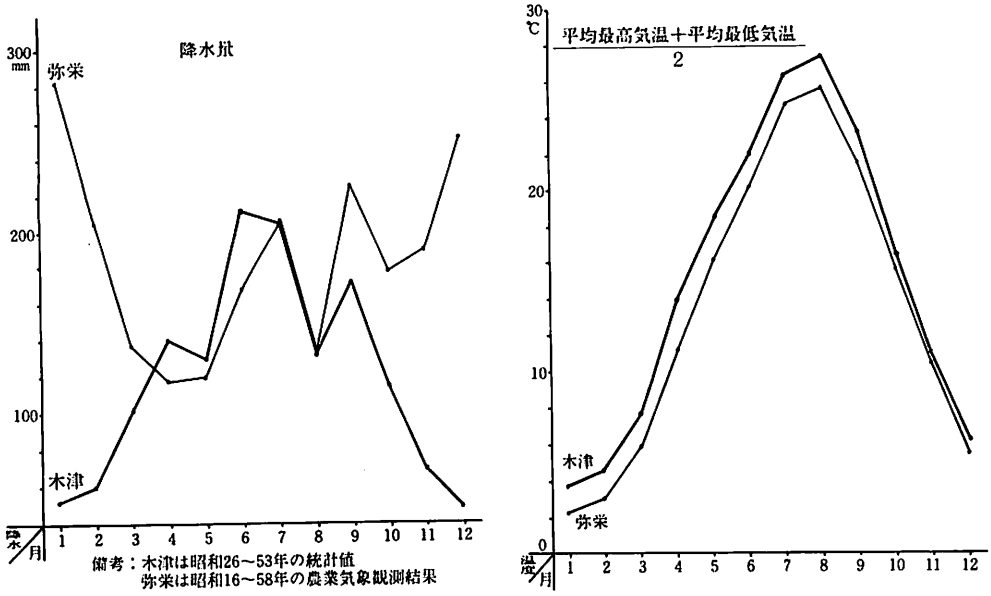
伊賀に源を発する木津川が，相楽郡内の東部を西に向かって貫流し，郡域内で北に流れを転



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図(縮尺：1/100,000)

1：畑ノ前遺跡　2：煤谷川窯址　3：鞍岡山古墳群　4：三山木廃寺址　5：天神山遺跡
6：飯岡遺跡　7：鳥休遺跡　8：蟹満寺址　9：山際古墳　10：車塚古墳群
11：涌出宮遺跡　12：城山古墳　13：稲荷山古墳　14：北谷横穴　15：大塚山古墳
16：宮城谷古墳群　17：泉橋院址　18：高麗寺址　19：千両岩古墳群　20：山城国分寺址
21：銭司遺跡　22：砂原山古墳　23：燈籠寺遺跡　24：内田山古墳群　25：上津遺跡
26：岡田国神社遺跡　27：市坂古墳群　28：上人ケ平古墳群　29：音乗谷古墳　30：相楽山遺跡
31：大畠遺跡　32：曾根山遺跡　33：相楽遺跡

第1表　相楽郡木津町・竹野郡弥栄町の気象条件一覧表



じる。精華町はその西岸に位置し，広い郡内の西北端にあたる。北は綴喜郡田辺町，木津川を隔てた東は相楽郡山城町，南は同木津町と境を接し，町域25.6㎢に及ぶ。

西半部には，生駒山地からのびた鮮新・洪積層台地の甘南備丘陵が南北になだらかな起伏をみせ，東半部には，木津川に至るまで平地が広がっている。この丘陵をぬって，北に煤谷川，南に山田川が東流して木津川に注ぎ，また支谷が複雑に入りこんで錯綜した地形を構成している(第1図参照)。

相楽郡域の気象条件については，木津観測所の統計をもって代表させ，それを第1表に示した。京都府下北端の気象条件と比較する意味で，竹野郡弥栄町での農業気象観測結果を同表に添えておいた。その比較結果をみると，降水量の月別の推移に著しい相違のあることが知られる。これはいうまでもなく，冬期の積雪と秋期の台風とが弥栄町に降水量の増大をもたらせ，同町に較べると相楽郡域にはその影響が少ないせいである。

また，類似した気象条件にある京都市内と比較してみると，相楽郡域の方が全年平均気温で0.7℃低く，全年平均降水量で59㎜少ない。

第2節　歴史的環境

相楽郡内で人跡がたどれるのは，旧石器時代にさかのぼる公算があり，木津町岡田国神社境内で出土したサヌカイト剝片1点が，旧石器であろうという[1]。また，近傍では綴喜郡井手町上井手の鮮新・洪積層台地縁辺部で有舌尖頭器が採集されており，これは縄文時代草創期の遺品である[2]。相楽郡内では精華町下狛から石棒が採集され[3]，山城町椿井大塚山古墳の封土内から縄文土器が出土している[4]。そのほか平尾涌出宮遺跡から前期の土器が採集されており，石匕・

石鏃・叩石も混じる[5]。また周辺では，綴喜郡井手町石垣鳥休遺跡から，中期初頭の船元II式を中心とする土器や石鏃が採集されている[6]。同期の縄文時代遺跡は畿内全域でも稀有である。

弥生時代に移ると，山城町平尾涌出宮遺跡・木津町木津燈籠寺遺跡[7]で前期の土器が出土しており，扇状地末端や低台地に集落を営み，稲作をはじめたことが知られる。涌出宮遺跡は，昭和43年に京都府教育委員会によって発掘調査が実施され，土器・磨製石剣・石庖丁・石鏃などが出土していた。これらの遺物の時期は中期を中心とし，前後の時期を含む。また，木津町相楽大畠遺跡は，木津町教育委員会によって昭和57・58両年に発掘調査され，弥生時代中期の竪穴住居址3棟，方形周溝墓1基が検出された[8]。出土遺物として土器・磨製石剣・磨製石戈・石庖丁・石鏃などがあり，磨製石剣には有樋の銅剣形と無樋の石剣形とがみられる。昭和57年に，大畠遺跡に接する西方の丘陵から，銅鐸が出土した。相楽山遺跡と名付けられたこの遺跡は大畠遺跡と至近距離にあり，出土鐸の型式が中期の扁平鈕式であるところから，双方を関連づけることが許されよう[9]。笠置町笠置山頂から銅剣形石剣が発見されている[10]。これもまた中期の遺品とみてよい。

弥生時代後期の遺跡も郡内に散見される。木津町相楽曽根山遺跡で土器が出土し[11]，また山城町平尾城山古墳や同椿井大塚山古墳の封土中に後期の土器が包含されており，そこに遺跡のあったことが知られる。さらに，隣接する綴喜郡田辺町域には，高木天神山遺跡[12]や飯岡飯岡遺跡[13]などの後期の遺跡が少なくない。中期にひきくらべ，後期の遺跡には丘陵上に占地を移す傾向がある。

弥生時代の墓として，木津町大畠遺跡の方形周溝墓や加茂町高田砂原山遺跡[14]などの方形台状墓がみられるが，相楽郡域における古墳の営造は，椿井大塚山古墳をもって嚆矢とする。本墳は全長185mをはかる前方後円墳であり，わが国における最古の古墳のひとつとして，前期の古墳のなかで有数の規模をそなえている。郡内においてこれに続く前期の古墳として，同じ山城町域に所在する前期中葉の平尾城山古墳(前方後円墳，全長110m)[15]，前期後葉の北河原稲荷山古墳(円墳，直径30m)[16]，があげられる。そのほか，加茂町域では，前期末ないし中期初頭の円筒埴輪が，佐藤虎男の手で採集されている[17]。この頃の古墳が同町域にあったようである。また，精華町北端にあたる下狛平谷古墳群から採集されている円筒埴輪の時期もこれに近い[18]。同古墳群中にもこの頃の古墳が存在していたことが知られる。

ところが，山城町域における古墳の営造は永く続かず，稲荷山古墳を最後に衰退に至る。そうして，中期にはかわって木津町域にそれが移る。木津内田山A2号墳・市坂上人ケ平古墳群・吐師七ツ塚古墳群などをこの時期のものとしてあげることができる[19]。これらの古墳は，円墳・方墳・帆立貝形墳からなり，前方後円墳をみない。また，同じく中期の古墳として，横矧板鋲留短甲の出土した和束町原山原山古墳がある[20]。木津町相楽遺跡は，この時期の集落遺跡である[21]。

古墳時代後期に入ると，木津町域における古墳の営造がいくぶん衰退の色をみせて存続するいっぽう，ふたたび山城町域に古墳が出現する。山城町域では綺田山際1号墳・上狛千両岩1

号墳があり[22]，木津町域では相楽音乗谷古墳がある[23]。これらの古墳は，横穴式石室を内蔵し，墳丘に埴輪をたてめぐらせており，後期前半に比定しうる条件をそなえている。また，木津町木津内田山A１号墳も，円筒埴輪の特徴からこの一群に入れてよい[24]。

そうして，群集墳の形成が盛んな後期後半には，山城町域が形成の中心を占める。綺田車谷古墳群や椿井宮城谷古墳群などに盛行のあとをみることができる[25]。また，同町域には北河原北谷横穴があり，横穴墓の存在も知られる[26]。

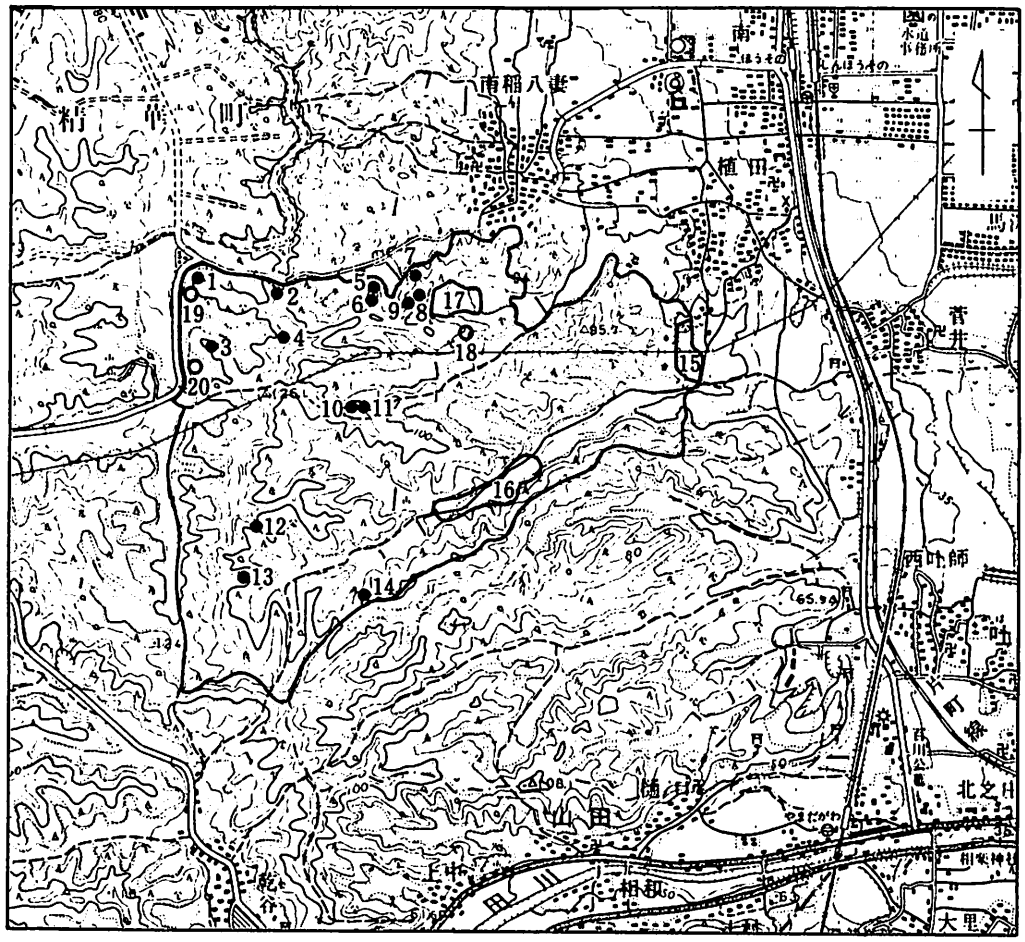
古墳時代後期後半における群集墳の盛んな形成をひきつぐかのように，次代における寺院の造営もまた山城町域に集中する観がある。高麗寺は出土瓦から創建が飛鳥時代にさかのぼるらしく[27]，また白鳳期には，蟹満寺や行基ゆかりの泉橋院が知られる[28]。さらに山背国府もここに置かれた。東に隣接する加茂町域では，天平12年(740)に恭仁京の造営がはじまり，これは未完に終って同18年(746)大極殿が山背国分寺に施入された。また，同町銭司銭司遺跡は，文字通り鋳銭司のあととして知られ，鞴羽口や坩堝などの関連遺物が出土している[29]。

いっぽう，木津町域をみると，木津川に面する木津上津遺跡から，掘立柱建物址や溝址などの奈良時代の多数の遺構が検出され，土器・瓦などが出土している[30]。この遺跡は，平城京の外港としての機能を果たした泉津に関係づけられている。また，瓦窯址や須恵器窯址も判明しており，このうちの上梅谷梅谷瓦窯址では，平城京や興福寺の瓦と同笵のものが採集されている[31]。さらに，精華町域では下狛寺の存在が想定されている[32]。これは白鳳期の創建という。

第２章　調査に至る経過と調査体制

西は煤谷川から東は植田に至る間の丘陵地約1.587㎢が，京阪三社(野村不動産株式会社・三井不動産株式会社・京阪電気鉄道株式会社)による(仮称)精華ニュータウンの開発予定地(第２図，巻頭図版第１上参照)となったことから，昭和55年４月14日～４月22日に京都府教育委員会が遺跡の分布調査を実施した[33]。その結果をうけて，財團法人古代學協會・平安博物館が京都府教育委員会のあっせんで，遺跡確認の調査の鍬を入れるはこびとなった。そうして，精華町教育委員会とのあいだで契約を交し，昭和59年度に試掘調査を実施した。

試掘調査の経過および結果の詳細は次章に譲るが，そのなかで，遺跡の存在が確認された畑ノ前遺跡ならびに煤谷川窯址について，次年度に全域にわたる発掘調査を同館が担当することになった。それと並行して，京都府教育委員会の分布調査によって認定された古墳候補地14地



第２図　(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡分布図(縮尺：1/25,000)
黒丸印は古墳推定地，他は散布地・窯址(番号は第２表の番号と一致)

第2表　(仮称)精華ニュータウン予定地内分布遺跡一覧表

番号	遺跡名称	所在地	種類	立地	現状	遺跡の概要・遺物	調査結果
1	福生坊1号墳	京都府相楽郡精華町 大字南稲八妻小字福生坊	古墳	丘陵尾根	山林	(約) 径5m　高1m	無
2	〃 2号墳	〃　〃	〃	〃	〃	径12m　高1.5m	〃
3	堀割1号墳	〃　堀割	〃	〃	〃	径12m　高1.5m	〃
4	〃 2号墳	〃　〃	〃	谷奥	〃	径13m　高2m	〃
5	砂留1号墳	〃　砂留	〃	丘陵尾根	〃	径8m　高1.5m	〃
6	〃 2号墳	〃　〃	〃	〃	〃	径10m　高1m	〃
7	〃 3号墳	〃　〃	〃	〃	〃	径15m　高2m	〃
8	〃 4号墳	〃　〃	〃	〃	〃	径10m　高1.5m	〃
9	〃 5号墳	〃　砂留 平尾谷	〃	〃	〃	径10m　高2m	〃
10	永谷1号墳	南稲八妻　堂所 植田　水谷	〃	〃	〃	径7m　高1.5m	〃
11	〃 2号墳	〃　大松 永谷	〃	〃	〃	径12m　高1.8m	〃
12	美濃谷1号墳	植田　美濃谷	〃	〃	〃	径8m　高1.5m	〃
13	〃 2号墳	〃　〃	〃	〃	〃	径7m　高1.5m	〃
14	植田大谷古墳	〃　大谷	〃	〃	〃	径11m　高2m	〃
15	畑ノ前遺跡	〃　新田 畑ノ前	散布地	丘陵裾 ～平地	果樹園 畑地	須恵器・土師器片	第3章
16	高樋遺跡	〃　南原，芦谷 高樋他	〃	谷間	水田 畑地	陶磁器片	無
17	平尾谷遺跡	南稲八妻　平尾谷	寺院跡	〃	水田(休耕)		〃
18	堂所遺跡	〃　堂所		丘陵斜面	竹林	瓦片(1片)	〃
19	煤谷川窯址	〃　福生坊 堀割	窯址	〃	山林	須恵器・窯壁片	第2章
20	馬坂遺跡	〃　馬坂	散布地	丘陵裾	水田	須恵器片(1片)	無

点，遺跡候補地2地点についても，試掘調査を実施するはこびとなった。これらの発掘調査の実施について，昭和60年4月1日付をもって精華町教育委員会とのあいだであらためて契約を交し，同年4月11日から調査に着手した。

翌昭和61年2月10日をもって発掘調査を終了した。それとともに，整理作業にとりかかり，年度の更新をまって，精華町教育委員会とのあいだで昭和61年度報告書作成について契約を結び，整理作業の続行をはかった。

調査団の構成

昭和59年度試掘調査

事務局　財團法人古代學協會・平安博物館

団　長　角田文衛(平安博物館館長兼教授)

調査団　鈴木忠司(平安博物館助教授，調査主任)

寺島孝一(平安博物館講師)

鈴木まどか(平安博物館講師)

山下秀樹(平安博物館助手)

水口　薫(平安博物館技士)

調査事務　金田　暁(平安博物館事業課)

森　礼子(平安博物館経理課)

昭和60年度本調査・試掘調査

事務局　財團法人古代學協會・平安博物館

団　長　角田文衛(平安博物館館長兼教授)

調査団　寺島孝一(平安博物館助教授，調査主任，現東京大学助教授)

川西宏幸(平安博物館講師，寺島の転出により調査主任)

片岡　肇(平安博物館助教授)

鈴木忠司(平安博物館助教授)

藤本孝一(平安博物館助教授)

植山　茂(平安博物館助手)

定森秀夫(平安博物館助手)

山下秀樹(平安博物館助手)

南　博史(平安博物館助手)

山田邦和(平安博物館助手)

水口　薫(平安博物館技士)

調査事務　金田　暁(平安博物館事業課)

森木礼子(平安博物館経理課)

昭和59年度試掘調査

調査補助員　清滝　龍，出口瑞鳥，久末美貴子，藤田有利子，森脇清隆，千喜良　淳，綿貫俊一

調査作業員　岩前光子，岩前良幸，植田　実，浦井茂子，浦井清一，浦井光子，片桐且裕，川井峯雄，田中秀雄，田中　弘，田中康夫，辻本キミエ，南旨光，野中ムメノ，前田千代子，松井和子，松井弘子，向井幸子，中山組(中山光男，渡辺　一ほかの方々)

調査整理員　綿貫俊一，藤田有利子

昭和60年度本調査・試掘調査

調査補助員　浅井正治，井口澄恵，池上元子，上杉英世，上野智裕，宇野克実，梅木謙一，岡宏，川内由美子，河野史郎，小山知佐子，坂田孝彦，坂本千代美，佐長正子，三宮昌弘，鹿野吉則，高橋　潔，千喜良　淳，辻村純代，出口瑞鳥，中島　正，西尾智樹，西村健司，朴　賢淑，林真理子，早見昭夫，原田昭一，久末美貴子，平松良雄，藤平　寧，前田　誠，前田美樹，松村　優，宮下貴治，宮本純二，森脇清隆，柳井富美，山浦　修，山岸靖治，山本啓貴，吉川真帆，四倉俊昭

調査作業員　生島笑子，井上英二，岩井弘美，岩井美紀，岩前光子，植西洋嗣，浦井光子，浦井柳栄，大倉要太郎，尾山孝一郎，河井政次，田中秀雄，辻本キミエ，野中ムメノ，福井政治，藤村善三，藤村良一，前田千代子，松井長嗣，水島より子，本井重光，本井スガノ，森島四郎，薮内一男，中山組(中山光男，渡辺　一ほか多数の方々)

調査整理員　飯田美佐子，井口澄恵，池上元子，小野木裕子，川内由美子，小山知佐子，坂田孝彦，坂本千代美，佐長正子，柴田潮音，千喜良　淳，出口瑞鳥，中島陽子，西村健司，西村典子，朴　賢淑，林真理子，原　真一，原田昭一，久末美貴子，船戸裕子，山浦　修，横田清恵，脇上礼子

調査協力者および機関

精華町教育委員会　松井寛治，田中善次，山田　淳，川嶋一生，古川　晃，庄司一昭，村川俊明

京都府教育委員会　東條　寿，中谷雅治，平良泰久，金村允人

京都府埋蔵文化財調査研究センター　福山敏男，堤圭三郎，松井忠春，戸原和人，田代　弘

京都府立山城郷土資料館　布村忠雄，髙橋美久二，橋本清一

京都市埋蔵文化財研究所　杉山信三，木村捷三郎，江谷　寛

奈良国立文化財研究所　田中　琢，佐原　真，宮本長二郎，巽淳一郎，千田剛道，玉田芳英，西村　康，西口寿生，上原真人，毛利光俊彦，山中　敏

京阪電気鉄道株式会社　小野繁雄，神風　弘

大阪防衛施設局・陸上自衛隊関西地区補給処

精華町　岡尾兵部(南稲八妻区自治会長，昭和59･60年度)，松井祥治(植田区自治会長，昭和59年度)，森本庄太郎(植田区自治会長，昭和60年度)，臼井　明，倉崎武雄，堀池義博，山崎林三，松浦久男

山崎秀二(守口市埋蔵文化財センター)，野島　稔(四條畷市教育委員会)，塩山則之(寝屋川市教育委員会)，下條信行(愛媛大学)，西口陽一(大阪府教育委員会)，森田克行・大船孝弘・宮崎康雄(髙槻市教育委員会)，岩崎　誠(長岡京市埋蔵文化財センター)，秋山浩三･國下多美樹(向日市教育委員会)，上田健夫(平安博物館)，狐塚省三，奥田裕之，奥田　勲，范　培松(中華人民共和国陝西省文物管理委員会)

第３章　昭和59年度試掘調査の経過と結果

第１節　遺跡と調査日程

(仮称)精華ニュータウン予定地内では，古墳候補地14ケ所，窯址１ケ所，遺物包含(散布)地５ケ所の存在が明らかになっている(第２図，第２表)。このうち遺物包含地は面積が広く，大規模な集落遺跡である可能性があった。長期的に予定地内の埋蔵文化財への対応策を立案するためには，まずこの包含地の実態が把握される必要があった。

このために，本年度は下記３遺跡の試掘調査を，昭和59年６月１日～同年11月７日までの間に実施した。

調査対象地

１．高 樋 遺 跡：精華町大字植田小字高樋・南原・芦谷他所在
　　遺跡面積：約20,000㎡

２．畑ノ前遺跡：精華町大字植田小字新田・畑ノ前所在
　　遺跡面積：約11,000㎡

３．平尾谷遺跡：精華町大字南稲八妻小字平尾谷所在
　　遺跡面積：約17,000㎡

以下，遺跡ごとに調査の概要を記す。

第２節　高樋遺跡

１．調査経過

遺跡は，鮮新・洪積層が開析されて生まれた，細長い谷の谷底部に位置している。したがって，狭隘な谷地形中の水田分布範囲が遺跡所在地に相当している。

遺跡は，東西約360m，南北約80mほどの広さを有する。ここに，東西19区画(１～19)，南北５区画(Ａ～Ｅ)に分けた20m四方のグリッドを設定した。調査区の東西ラインは谷の走向に従っており，南北ラインは谷を横断する。したがって，時間の許すかぎり，谷の走向に沿うトレンチと谷を横断するトレンチとを設定して，谷の地形上の特徴と遺跡の形成過程との関連を求めつつ，発掘作業を実施するよう努めた(第３図)。

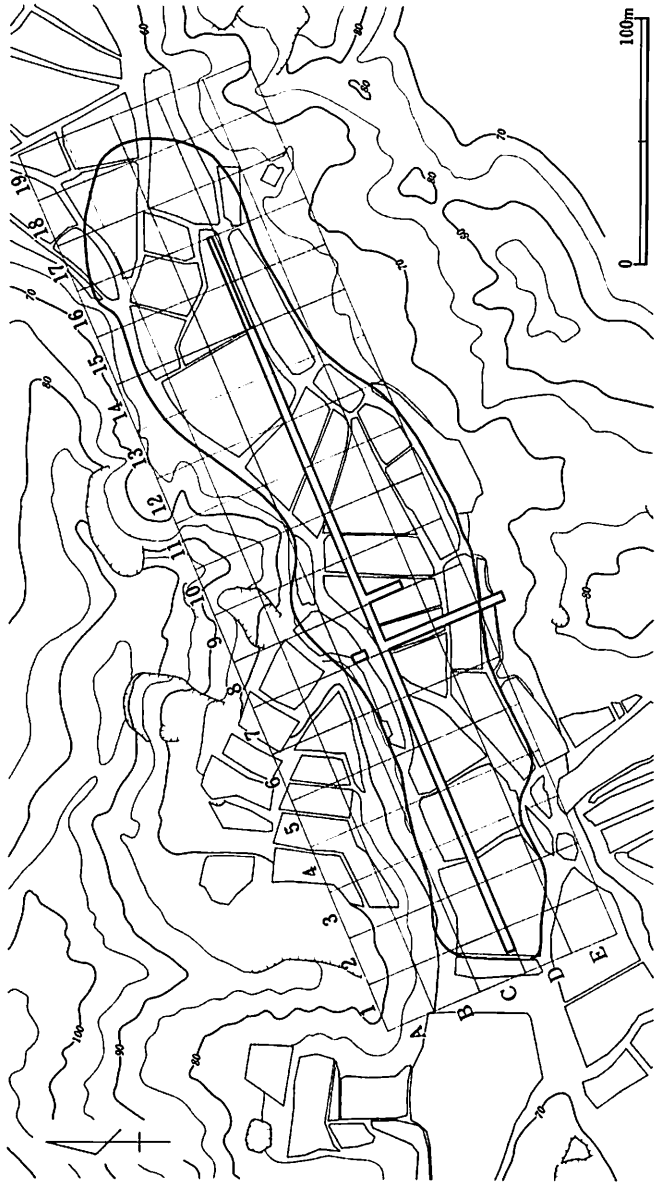
まずはじめに，谷底の走行に沿って，Ｃ区南隅に１区～16区まで，幅４m，長さ320mのＣトレンチを設定して，西から順に作業に着手した。６月１日の調査着手日から６月30日までの１ケ月間に，９区までの約180mを調査することができた。

これによって，当地の開田期がおおむね近世以降にあること，また今日までの間に，田一筆ごとの面積の拡大と改修が行われたことがはっきりした。また，出土遺物は開田に伴う整地層中と，整地層下の水成層(砂層・砂礫層・粘土層・シルト層)中の一部から発見された。特別な

集中区域はないが，Cトレンチ2・3区付近および8区付近では，他の区域に比べて多少なりとも濃い散布状態を認めることができた。しかしながら，いずれも遺物は細片で，これに関連する遺構は全く見出せなかった。

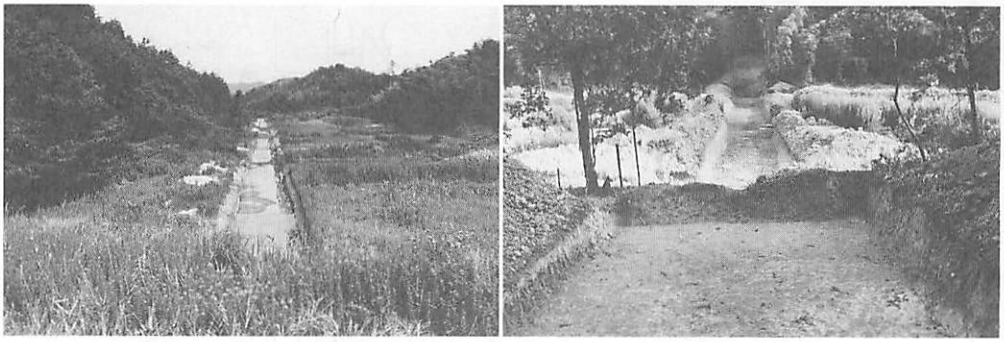
6月中は降雨がつづき，これに冲積層中の発掘という条件が加わって，作業は難渋した。このため一旦，作業地を鮮新・洪積層の台地上に立地する畑ノ前遺跡へ移し，梅雨明けを待って再開することとした。

こうして，8月13日から作業が再開されることになった。9月5日の終了日までの間に，11区～16区まで(10区付近は未買収地)を完掘した。この間には，谷を横断する8トレンチ・9トレンチを設定し，谷底の冲積層と周囲の台地(鮮新・洪積層)との関係を観察することができた。8・9トレンチは，遺物分布の濃かった部分に設定したもので，冲積地外に存する台地状地形上に，これらの遺物に伴う遺構の存在を想定したためである。



第3図　高縄遺跡試掘トレンチ位置図(縮尺：1/3,000)

この間の作業によっても，Cトレンチ11区～16区間ではまとまった遺物の検出はなかった。遺構も同様であった。8・9トレンチC・D・E区域は，Cトレンチ調査において，多いとは言えないが，多少なりともまとまった遺物の検出されたところであり，これに関連する遺物の発見が予想されたが，結果的には無遺物に近い状況であった。8トレンチE区は，冲積層から離れており，遺構存在の適地とみなしえたが，ここにも考古学的な調査対象となるものは皆無であった。



第4図　高樋遺跡試掘調査終了状況写真
左：C列トレンチ(東より)，右：8列トレンチ(北より)

2．調査結果(第4図参照)

Cトレンチ2・3・8区において，土師皿を中心とする遺物群が発見された。その量は多くはないとは言え，一応一定の分布範囲を有している。このため，この遺物の由来，あるいは遺構との関係を求めるのが，この遺跡の調査過程からの最大の課題であった。谷の走向に沿い谷底中央部冲積層(現水田面)の中心を貫ぬくCトレンチ，谷を横断し谷底から鮮新・洪積層の高台(現竹藪，8トレンチC・E区)に及ぶ8トレンチは，これらの目的によく合致したものであった。

調査の結果，調査地内には何らの遺構も検出しえず，遺物の由来に関する合理的な説明も与えることができなかった。遺物細片の散布はたしかに認められるが，ここを性格の明瞭な遺跡と認めることはできなかった。

調査面積は，約1,600m²であった。

3．出土遺物

土師質土器　　コンテナ1箱，室町時代。器形は小皿・羽釜から成る。細片。
瓦　　1点，奈良時代末～平安時代初期。
陶磁器類　　コンテナ1箱，近世以降。

第3節　畑ノ前遺跡

1．調査経過

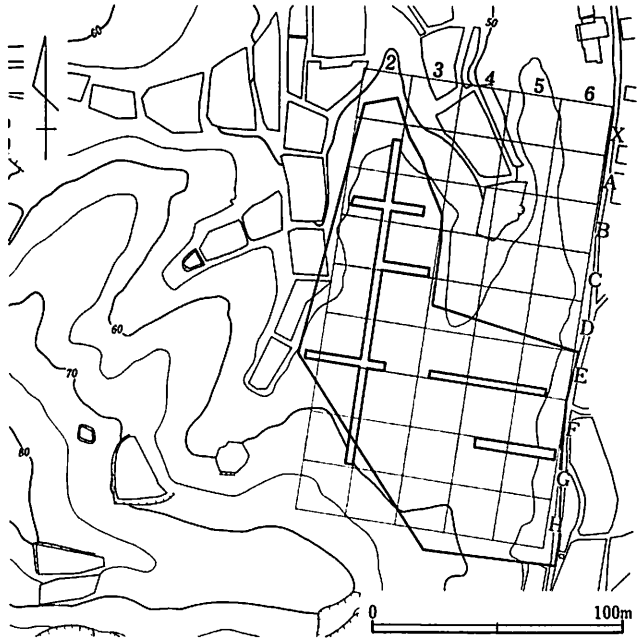
遺跡は，鮮新・洪積層の裾部にあって，平坦な台地となっている。この台地は，東西100m，南北180mの範囲にわたる。台地先端は大きく谷が入り込んでいる。

ここに，東西6区(1～6)，南北10区(X・A～I)の20m四方のグリッドを設定した。調査地域の南半部には，未買収地域が所々に存在し，ここを避けるように幅4mのトレンチを設定した(第5図)。

トレンチは，東西方向の2トレンチ，南北方向のB・C・E・Gトレンチを設定し，Eトレンチ，2トレンチ，C・B・Gトレンチの順で作業をすすめた。7月2日～8月12日までの間

に，合計約1,100㎡を調査することができた。

調査は，本調査を前提にしたものであるため，遺構確認面をもって掘り下げを中止することにして進めた。遺跡は鮮新・洪積層の台地上に立地するので，ここにはいわゆる堆積物はない。しかし地表下30cmほどは，風化土の再堆積作用によって，軟らかく暗褐色を呈する土層が一様に分布する。この下半部が遺物の包含層であり，ここを過ぎて，未風化の鮮新・洪積層である含礫砂・粘質土層に到ると，遺構の輪郭がはっきりする。したがって，トレンチの多くは，30～40cmの深さで作業を止めた。



第5図　畑ノ前遺跡試掘トレンチ位置図(縮尺：1/3,000)

Gトレンチ以外のトレンチ調査を終了した時点で，遺構・遺物は，トレンチ内のほぼ全域から発見されたと言ってよい検出状況であった。遺構は，住居址・土壙墓・柱穴状ピットなどであると考えられるが，個々の遺構を掘り上げていないので，正確なことは分らない。出土遺物からみて，弥生時代の所産たることが知られた。

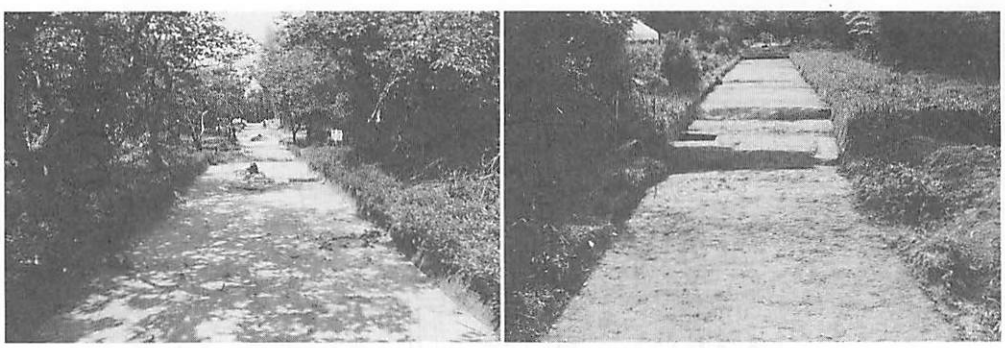
調査日程も終盤に入って，Gトレンチの調査にとりかかった。ここでは，従来の知見と相違し，奈良時代を主体に，一部鎌倉時代の遺物から成るものであることが次第にあきらかになってきた。ここでは，奈良時代の住居址・柱穴状ピットが検出された。

以上のように，畑ノ前遺跡は，弥生・奈良時代の遺構・遺物を主とする遺跡であることが判明したわけだが，この両時代は，遺跡内に混在するのではなく，遺跡を2分するような位置関係を有している。弥生時代は，2トレンチG区，Eトレンチ5区を結ぶライン以北に，奈良時代は，これ以南を中心として集落を設営していることが分った。言いかえれば，台地上面を弥生時代，台地東面スロープを奈良時代に主に利用している。

2．調査結果(第6図参照)

調査経過でも述べたように，本遺跡は弥生時代・奈良時代の集落遺跡であることが判明した。

弥生時代では，住居址2，土壙墓8，柱穴状ピット多数の遺構の存在が予想された。集落地と言っても，検出された住居址推定地は遺跡南端の2トレンチG区における2例にすぎず，むしろ土壙墓を主体とする遺跡であるかもしれない。



第6図　畑ノ前遺跡試掘調査終了状況写真
左：2列トレンチ(南より)，右：E列トレンチ(東より)

奈良時代では，住居址2の他，柱穴状土壙が検出されている。またこの他に，Gトレンチ南半部ではいくつかの遺構が重複しており，この上に鎌倉時代の掘り込みが加わる。多数の遺構がここにも存在することはたしかだが，その数量と性格は明らかではない。

3．出土遺物

弥生土器	コンテナ11箱，弥生時代中期後半のものを主とする。
弥生時代石器	20点，太型蛤刃磨製石斧・石鏃・石槍など。
奈良時代須恵器・土師器	コンテナ5箱，円面硯の破片が含まれている。この他に，同時代の瓦片10点ほどが出土している。
鎌倉時代土器類	コンテナ1箱，土師質土器を主とし，青磁が若干加わる。

第4節　平尾谷遺跡

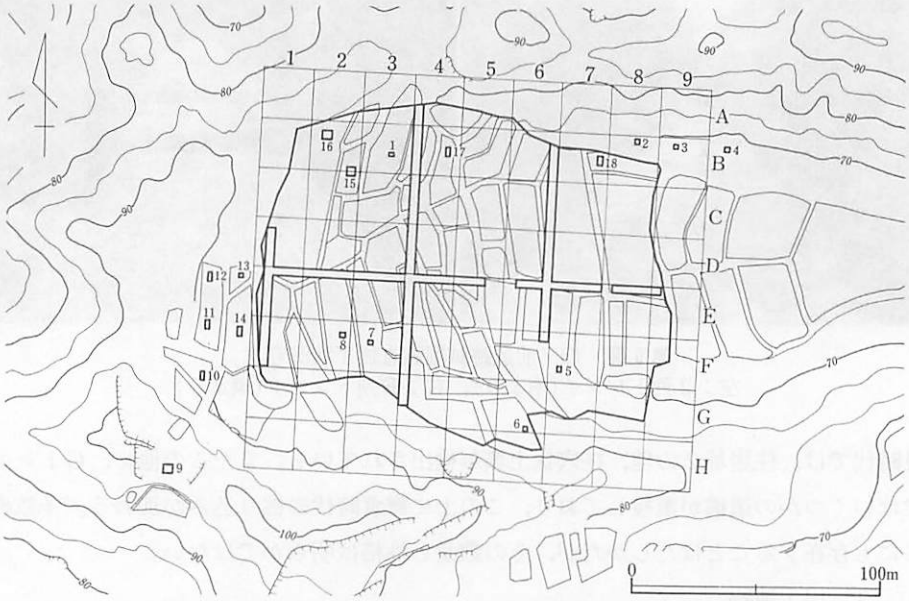
1．調査経過

対象地全体に一辺20mのグリッドを設定し，西から順に1～9の番号を，北から順にA～Hの記号を付した。調査は平尾谷を縦断するトレンチを1本(Eトレンチ)，横断するトレンチを3本(西から1トレンチ，4トレンチ，6トレンチ)設定することとした(第7図)。トレンチの幅はいずれも4mとした。

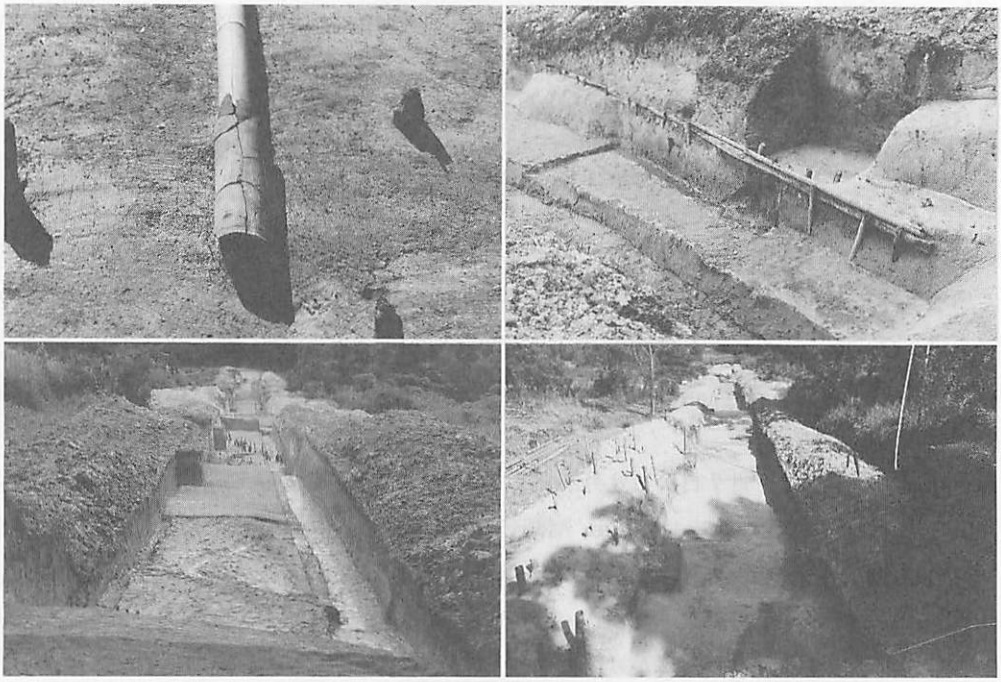
Eトレンチの調査は9月7日から9月26日まで，池および急斜面を除く144mについて行った。

4トレンチは，Eトレンチの北側67m，南側46mを9月26日～10月10日にかけて調査した。6トレンチは，Eトレンチの北側54m，南側21m(南端に池があるため，この部分は除外した)を10月10日～10月23日にかけて調査した。1トレンチについては，Eトレンチの北側16m，南側36mについて10月18日から10月25日にかけて掘削した。いずれのトレンチも掘削終了後，清掃・写真撮影の後，土層の観察・実測を行って，調査を終了した。

当初予定した各トレンチの調査が終了した後，平尾谷の比較的高い部分，特に西側・北側の斜面について，立地条件などから遺跡の存在の可能性が想像されたので，合計18ケ所に4～16㎡のトレンチを設定して調査を行った(10月25日～11月6日)。このトレンチについては調査終



第7図　平尾谷遺跡試掘トレンチ位置図(縮尺：1/3,000)



第8図　平尾谷遺跡試掘調査終了状況写真
上左：4E池排水管,上右：4A土留柵,下左：4列トレンチ(南より),下右：E列トレンチ(西より)

了後，総て埋め戻しを行った。

総ての調査終了後，危険防止のため道路に面した部分に柵を作り，また一部を埋め戻した。

2．調査結果(第8図参照)

遺跡の存在は確認できなかった。

調査地全域にわたって，近世以降のほ場の造成および改修のための整地作業の痕跡が認められたが，他の遺構は皆無であった。

遺物から見ても，幕末以降と考えられる瓦片が特に谷の周辺部分で多く発見されたが，建築遺構は確認できなかった。また，弥生土器かとも考えられる土器片が4～5点発見されているが，いずれも摩滅が著しく，遺跡の存在を予想させるには至らなかった。発掘地面積は約1,100㎡であった。

3．出土遺物

瓦片　　コンテナ2箱，いずれも古く考えても幕末以降のものである。

土器片　　コンテナ1箱，瓦に対応する時期のものが大半である。陶磁器類には江戸時代初期と考えられるものもあったが，数は少ない。また鎌倉時代～室町時代の土器類も10点前後発見されているが，いずれも小片であった。弥生土器かとも考えられる土器片も4～5点出土したが，摩滅が著しいため確定できない。

第5節　まとめ

(仮称)精華ニュータウン予定地内の3遺跡，高樋・畑ノ前・平尾谷の試掘調査を実施した。この結果，高樋・平尾谷の両遺跡においてはみるべき成果がなく，これを遺跡と認定することができなかった。

これにひきかえ，畑ノ前遺跡は弥生時代・奈良時代の広範囲で良好な集落遺跡であることが判明した。精華町の位置する南山城地域においては，弥生・奈良のいずれの時代においても，当時の良好な集落遺跡はほとんど知られていない。隣接する田辺町の同志社大学校地で発見された弥生時代の田辺天神山遺跡などは例外の部類に属す。

このような意味で，畑ノ前遺跡の調査結果は予期以上のものがあったといえる。

第４章　昭和60年度本調査・試掘調査の経過

昭和60年４月11日に器材等を現地に搬入し，13日から煤谷川窯址と畑ノ前遺跡の発掘作業，15日から古墳候補地・遺跡候補地の発掘作業をそれぞれ同時併行で開始した。

煤谷川窯址と畑ノ前遺跡に関しては，それぞれのところで調査経過の概略が述べられているが，ここでも若干記述しておく。

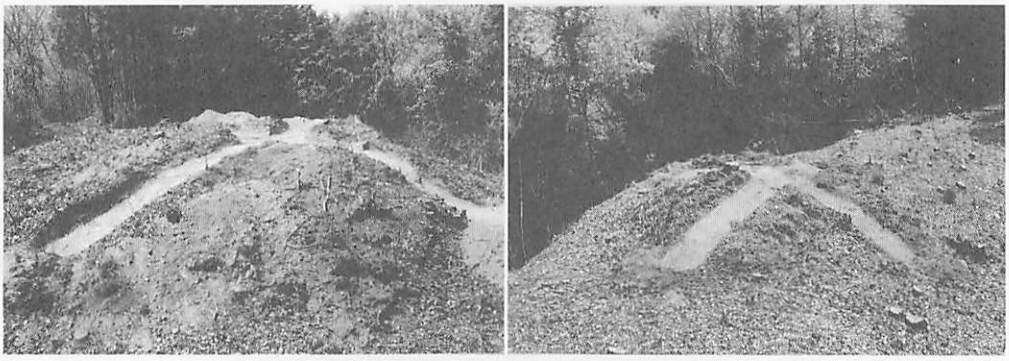
煤谷川窯址の調査に関しては，

４月13日～４月17日	伐採，地形測量およびトレンチ設定
４月18日～７月17日	発掘調査，実測および写真撮影
７月18日～７月20日	埋め戻し作業

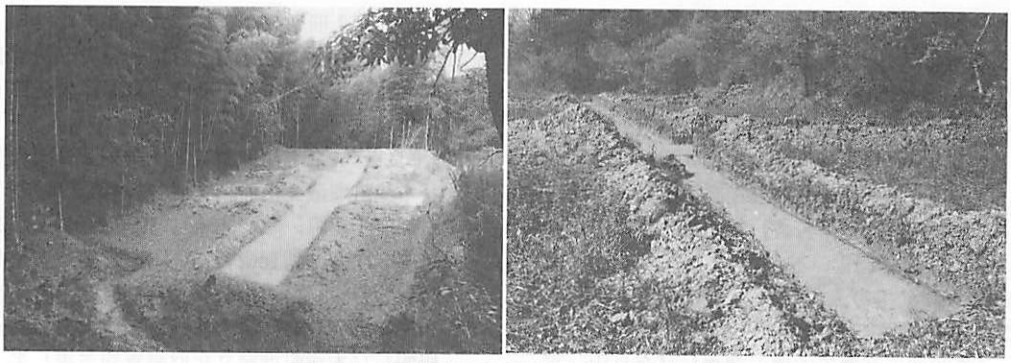
という，約３ケ月にわたる日程であった。現地説明会は６月８日に実施した。

畑ノ前遺跡の調査に関しては，

４月13日～４月17日	伐採，グリッドの設定および地形測量
４月18日～７月18日	表土除去作業
７月19日～７月20日	清掃・写真撮影
７月22日～11月22日	弥生時代・奈良時代包含層の除去作業
８月８日～12月29日	検出遺構の発掘調査・実測および写真撮影
９月13日～10月４日	南拡張区の表土除去作業
10月５日～11月30日	南拡張区の包含層除去および検出遺構の発掘調査
12月30日	航空撮影，器材整理および一部撤収
１月４日～１月13日	５Ｈ井戸１の発掘調査，実測および写真撮影
１月14日	器材撤収
１月16日～２月６日	５Ｈ井戸１の断ち割り，実測および写真撮影
２月７日	下部井戸側取り上げ，京都府立山城郷土資料館へ運搬



第９図　古墳候補地試掘調査終了状況写真
左：№２地点，右：№12地点（第２表参照）



第10図　遺跡候補地試掘調査終了状況写真
左：№18地点，右：№20地点(第２表参照)

２月８日～２月10日　　５Ｈ井戸１開掘部の埋め戻し作業

という，約11ケ月にわたる日程であった。現地説明会は，10月19日に掘立柱建物群と3Ｄ溝１土馬出土状況を中心に，そして12月22日に掘立柱建物群と古墳群を中心にして実施した。

古墳候補地および遺跡候補地の試掘調査に関しては，４月15日～５月２日に古墳候補地№１～№14地点および№９地点南西の盛り上がり(無番)を含めた計15ケ所と遺跡候補地№20地点に試掘トレンチをいれて調査したが，遺構は全く検出されず，いずれの地点も古墳・遺跡と認定することができなかった。残りの遺跡候補地№18地点に関しては，これらより遅れて９月３日～９月11日に試掘トレンチをいれて調査したが，遺構は全く検出されず，ここも遺跡と認定することができなかった(第２表参照，第９・10図)。

註

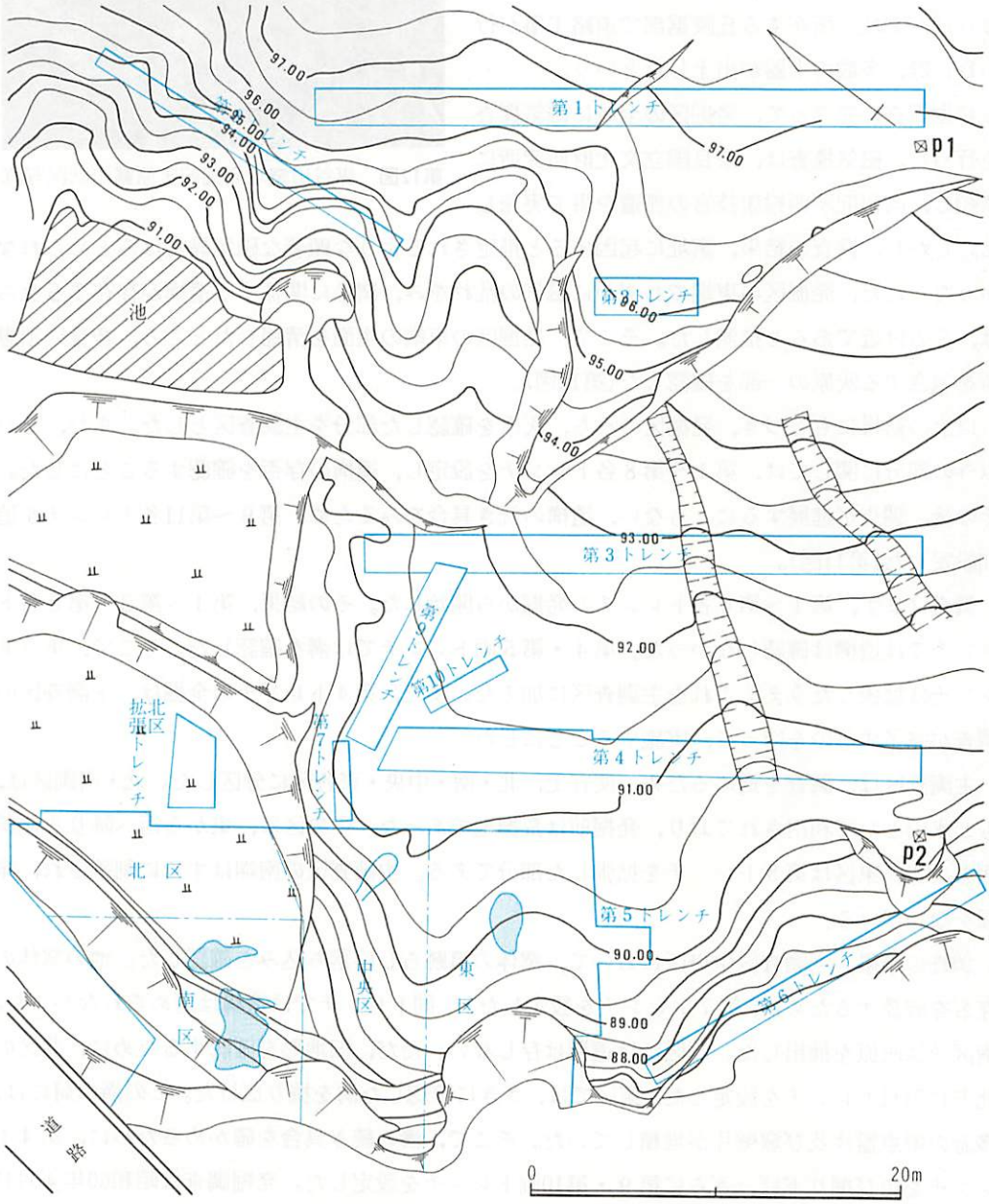
1)木津町史編纂委員会編『木津町史』史料編Ⅰ(京都府木津町，昭和59年)。
2)梅原末治『府下発見ノ石器ニ就テ』(『京都府史蹟勝地調査会報告』第４冊所収，京都，大正12年)。
3)同上。
4)梅原末治『椿井大塚山古墳』(『京都府文化財調査報告』第23冊所収，京都，昭和39年)。
5)高橋美久二・林和広『涌出宮遺跡発掘調査概要』(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1969所収，京都，昭和44年)。
6)奈良大学考古学研究会『文化財保護問題に関する一考察』(『楯列』第５号掲載，奈良，昭和54年)。
7)註１，前掲書。
8)木津町教育委員会『相楽山銅鐸出土地・大畠遺跡―発掘調査の記録』(京都府木津町，昭和57年)。
9)奥村清一郎・松本秀人『相楽山銅鐸出土地の発掘調査』(『京都府埋蔵文化財情報』第６号掲載，京都，昭和57年)。
10)高橋美久二『相楽・綴喜両郡第二次遺跡分布調査概要』(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1971所収，京都，昭和46年)。
11)註１，前掲書。
12)森浩一編『田辺天神山弥生遺跡』(『同志社大学文学部考古学調査記録』第５号，京都，昭和51年)。
13)同上。
14)安藤信策『砂原山古墳試掘調査速報』(『京都考古』第28号掲載，京都，昭和58年)。
15)梅原末治『棚倉村平尾ノ古墳』(『京都府史蹟勝地調査会報告』第３冊所収，京都，大正11年)。平安博物館考古学第３研究室『京都府相楽郡山城町平尾城山古墳第１次発掘調査概報』(京都，昭和52年)。
16)山城町史編さん委員会編『山城町史』本文編(京都府山城町，昭和62年)。

17)京都大学蔵。
18)精華町教育委員会蔵。
19)註1，前掲書。
20)末永雅雄『日本上代の甲冑』(東京，昭和19年)。
21)平良泰久・奥村清一郎『相楽遺跡』(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第1集，京都府木津町，昭和52年)。
22)註16，前掲書。
23)奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部『第20地点音乗谷古墳の調査』(『奈良山　平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』所収，奈良，昭和48年)。
24)平良泰久『相楽郡木津町大字木津小字内田山の須恵器』(『京都考古』第13号掲載，京都，昭和50年)。
25)註16，前掲書。
26)池田一郎『京都府相楽郡山城町稲荷山古墳現況報告』(『史想』第12号掲載，京都，昭和38年)。
27)梅原末治『高麗寺址』(『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊所収，京都，大正8年)。
28)梅原末治『泉橋寺』(『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊所収，京都，大正8年)。
29)梅原末治『銭司ノ遺跡』(『京都府史蹟勝地調査会報告』第4・7冊所収，京都，大正12・15年)。
30)平良泰久他『上津遺跡第2次発掘調査概報』(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集所収，京都府木津町，昭和52年)。松本秀人『上津遺跡第3次発掘調査概報』(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第4集所収，京都府木津町，昭和56年)。松本秀人『上津遺跡第4次発掘調査概報』(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第4集所収，京都府木津町，昭和56年)。
31)長谷川達『日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要』(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1981―1所収，京都，昭和56年)。
32)田中重久『平安奠都前の寺址と其出土瓦に就いて』(『夢殿論誌』第18冊掲載，奈良県法隆寺，昭和13年)。
33)分布調査は，精華町教育委員会が京阪三社の依頼により，京都府教育委員会に調査員の派遣など協力を受けて実施した。

煤谷川窯址

第１章　調査の経過とトレンチの設定

京都府相楽郡精華町の西部に広がる山地が甘南備丘陵であり，この丘陵を貫いて煤谷川が流れる。同川は精華町大字東畑に端を発して東に進み，大字南稲八妻付近で北に向きを変え，さらにゆるやかに向きを東に変えつつ，木津川にそそぐ。煤谷川窯址の所在する土地は，この煤



第11図　煤谷川窯址地形測量図およびトレンチ位置図(縮尺：1/400)
Ｐ１：Ｘ＝－138652.108m，Ｙ＝－20718.883m
Ｐ２：Ｘ＝－138674.034m，Ｙ＝－20748.685m

谷川が北に向きを変える付近である。同所には，煤谷川のつくる狭い平地があり，窯址はその平地に面した丘陵の裾部に立地する(第2図,図版第2上，巻頭図版第1上，図版第1参照)。発掘調査以前には，丘陵東裾部の崖面付近に須恵器の散布がみとめられた。また，地元の人からの伝聞によるならば，窯址の所在する丘陵裾部で道路工事が行われた際，多数の土器が出土したという。

第12図　煤谷川窯址発掘前灰原露出状況写真

発掘調査に先立って，発掘区の全域に磁気探査を行った。磁気探査は，奈良国立文化財研究所に依頼し，同研究所西村康技官の派遣を得て実施した。しかし，探査の結果，窯址に起因すると推定されるような顕著な磁気異常はみとめられなかった。ただ，発掘区の東端でわずかに磁気の乱れをみ，窯址に関係する遺構が存在するならば，その付近であると推測した。そこで，発掘区の東端の崖面を清掃したところ，多量の須恵器を包含する灰原の一部を確認した(第12図)。

以上の結果にもとづき，発掘区のうち，灰原を確認した部分を主調査区とした。また，それ以外の部分に関しては，第1～第8各トレンチを設定し，遺構の存否を確認することにした。その後，調査が進展するにともない，遺構の続き具合をみるため，第9～第11各トレンチを追加設定した(第11図)。

調査はまず，第1～第6各トレンチの発掘から開始した。その結果，第1～第3・第6各トレンチでは遺構は確認しなかった。第4・第5両トレンチでは溝を確認した。そこで，第5トレンチは拡張したうえ，これを主調査区に加えた。また，第4トレンチの全掘は，主調査区の調査が完了するのを待って，実施することにした。

主調査区は，調査を進めるため，便宜上，北・南・中央・東各区に分区した。北・南両区は，もと水田として利用されており，発掘前は荒撫地であった。中央区は，東から西へ降りる傾斜面をなす。東区は第5トレンチを拡張した部分である。主調査区の南端はすでに削平され，崖面をなしている。

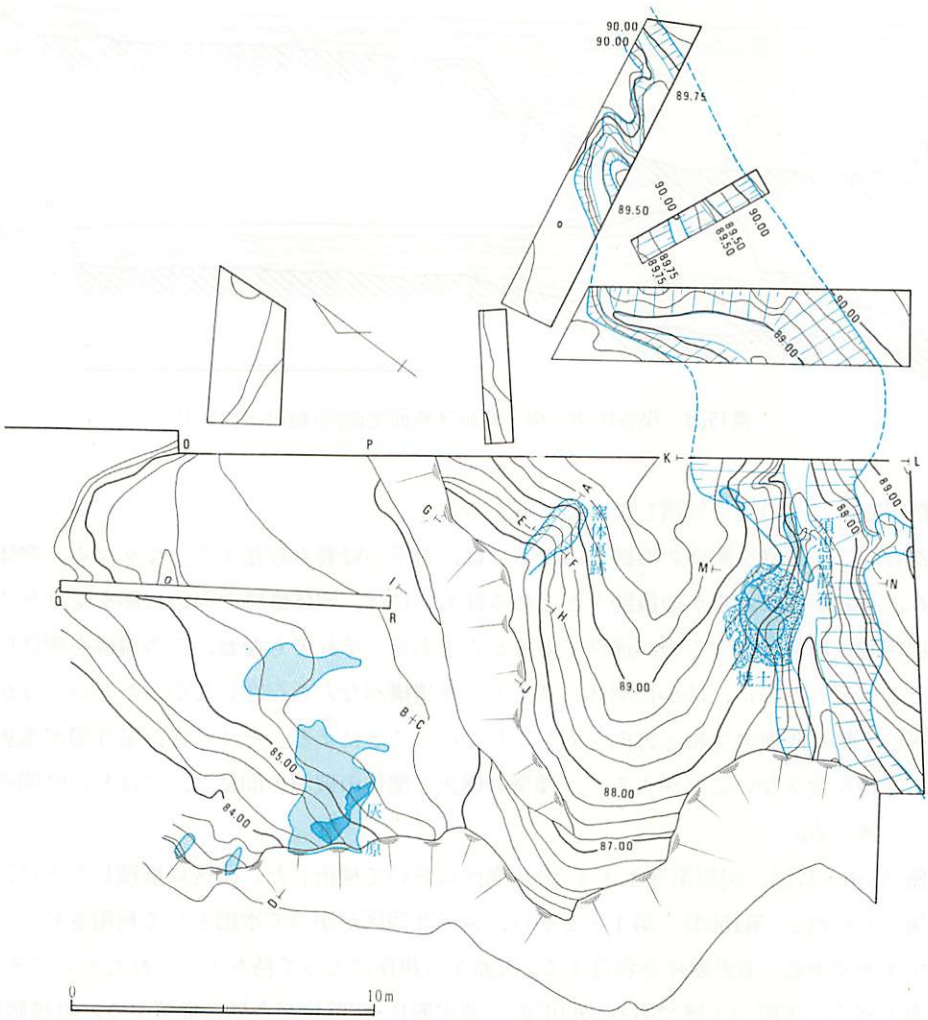
調査の結果，主調査区中央区において，窯体の痕跡らしい落ち込みを確認した。他の窯体の存否を確認するために，第7トレンチを設定したが，同トレンチでは遺構は認められなかった。南区では灰原を検出した。北区には遺構は存しない。ただ，旧地形を確認するために，北区の北方に第11トレンチを設定した。東区では，さきに確認した溝を掘り広げた。この溝の肩には，多量の須恵器片及び窯壁片が堆積していた。そこで，溝の続き具合を確かめるために，第4トレンチを再び掘り下げ，さらに第9・第10両トレンチを設定した。発掘調査は昭和60年4月13日に始まり，同年7月20日に終了した。

第2章　遺　構

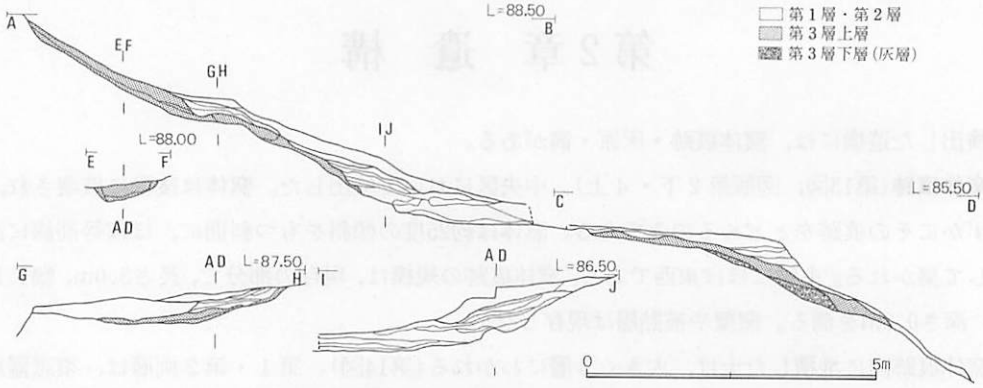
検出した遺構には，窯体痕跡・灰原・溝がある。

窯体痕跡(第13図，図版第2下・4上)　中央区において検出した。窯体は後世に破壊され，わずかにその痕跡をとどめるのみである。窯体は約25度の傾斜をもつ斜面に，ほぼ等高線に直交して築かれる。主軸はほぼ東西である。窯体痕跡の規模は，現存の部分で，長さ3.0m，幅1.15m，深さ0.3mを測る。窯壁や被熱層は現存しない。

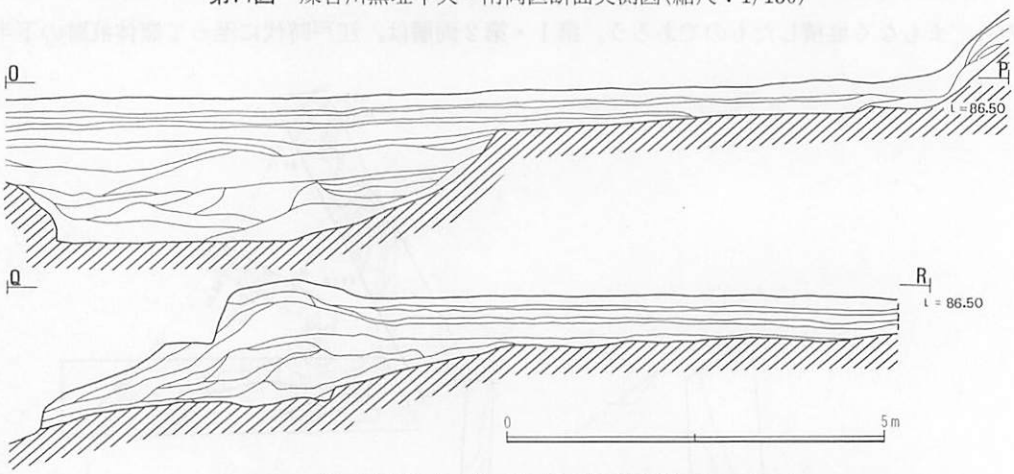
窯体痕跡内に堆積した土は，大きく3層にわかれる(第14図)。第1・第2両層は，須恵器片および江戸時代の陶磁器片を含む。第3層は，須恵器片を含む。第3層は，窯体が破壊されたのち，まもなく堆積したものであろう。第1・第2両層は，江戸時代に至って窯体痕跡の下半



第13図　煤谷川窯址発掘後地形測量図(縮尺：1/250)



第14図　煤谷川窯址中央・南両区断面実測図(縮尺：1/130)

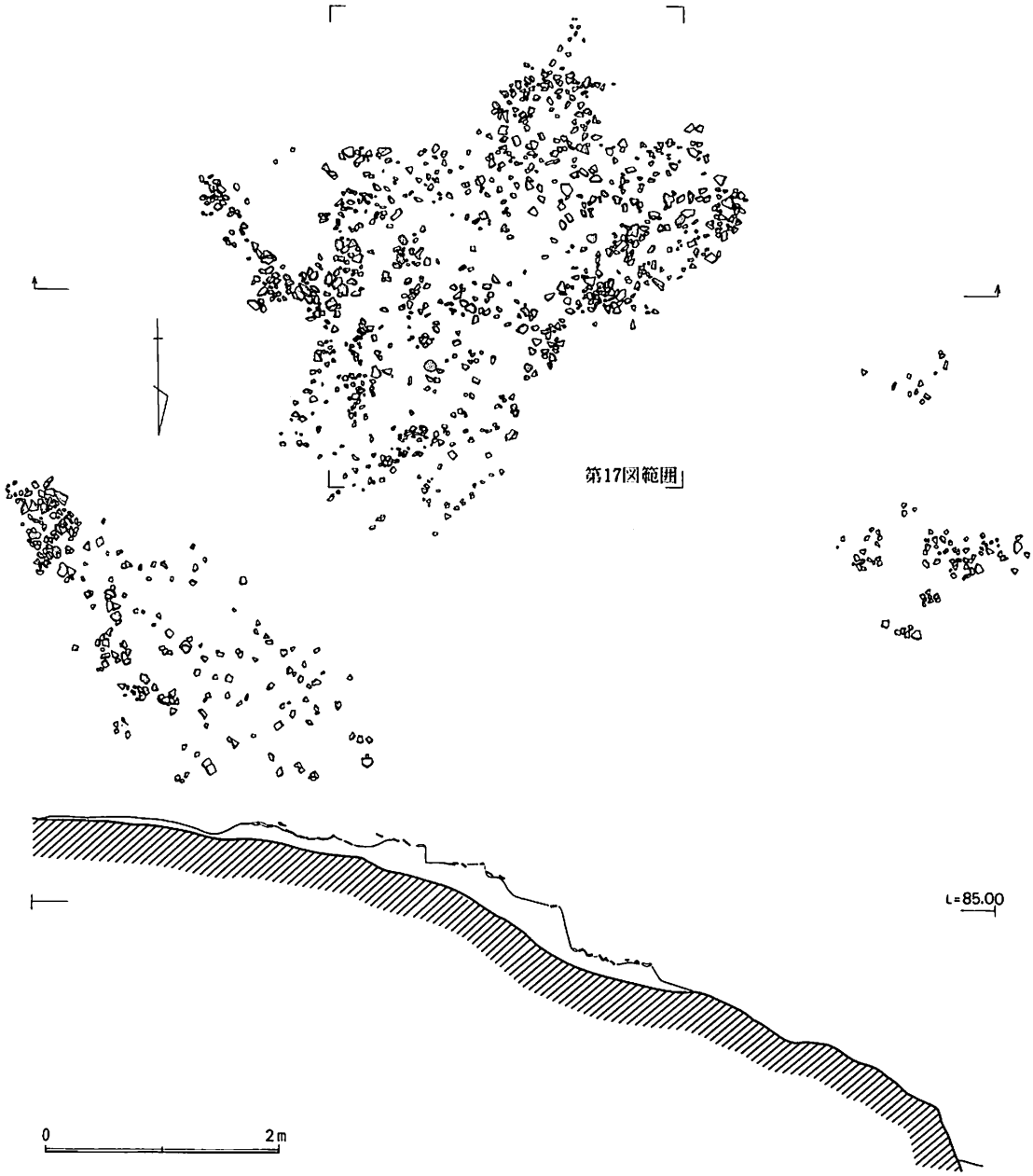


第15図　煤谷川窯址南・北両区断面実測図(縮尺：1/100)

分が削平され，その後に堆積したものと考える。

ただし，この遺構を窯体の痕跡と考えるには，若干の疑義も存在する。なぜなら，窯体が破壊され，なおかつなんらかの痕跡をとどめるばあいには，窯体痕跡の周辺に熱を受けたことを示す赤色酸化層が残存するのが通例であるからである。それでもなお，この遺構を窯体の痕跡と考えるに至ったのは，ほかに窯体と考えるべき遺構がなんら存在しなかったというほかに，同遺構の主軸が灰原の主軸と方向を同じくしていることによる。そうして，第3層が須恵器片以外の遺物を含まないことからみて，操業の停止と窯体の破壊の間には，さほどの時間差はなかったと考える。

灰原(第16・17図，図版第3上・4上)　南区において検出した。南区に堆積した土は，大きく4層にわかれる(第15図)。第1・2層は，南・北両区がかつて水田として利用されていた時の耕作土層である。須恵器片を包含する。灰原から耕作によって持ち上げられたものであろう。第3層上層は，灰原の上層である(第16図)。須恵器片・窯壁片が多量に堆積する。堆積範囲は，南北6.6m，東西8.8m，厚さ0.2mを測る。第3層下層は灰原の下層である(第17図)。黒色の灰



第16図　煤谷川窯址灰原(上層)実測図(縮尺：1/60)

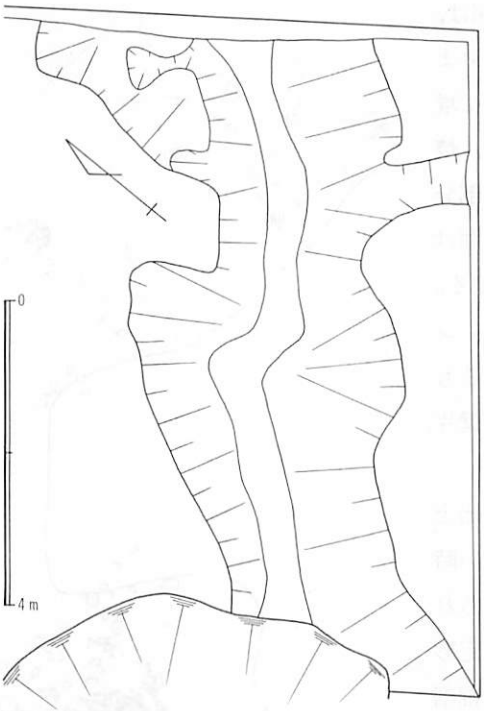
層が堆積し，その中に須恵器片・窯壁片を多量に包含する。堆積範囲は，南北0.9m，東西2.5m，厚さ0.2mを測る。

溝(第18～20図，図版第3下・4下・5)　東区および第4・第10・第9各トレンチにおいて検出した。東北から西南にかけて蛇行しつつのびる。溝は，東北では浅く，西南にいくほどに深さを増す。そうして，第10・第9両トレンチで見るならば，溝中央部に島状の高まりがあるようである。すなわち，溝は第9トレンチの北方から続き，第9トレンチ内で島状の高まりを

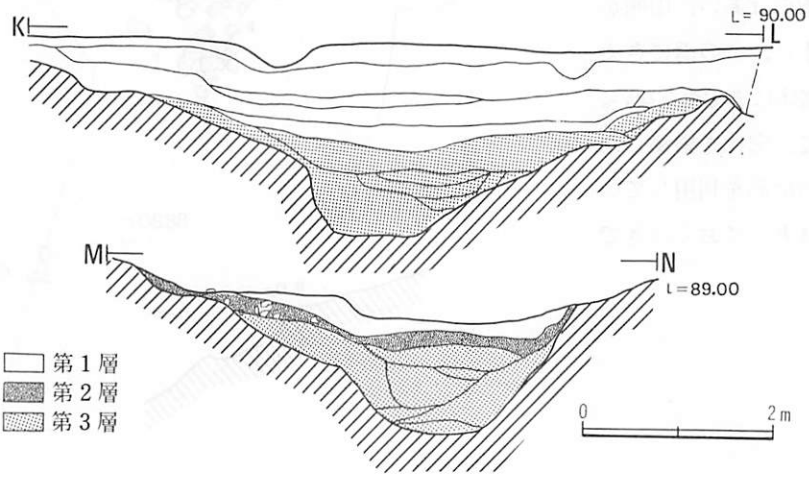
第17図　煤谷川窯址灰原(下層)実測図(縮尺：1/25)

はさんで二つの細流にわかれる。西側の細流は，第4トレンチ内で南へ向きを変え，さらに西南に向きを変えて東区に至る。東側の細流はそのまま南進し，第4トレンチ内で西側の細流と合流する。

溝の規模は，場所によって変動があり，一定しない。第9トレンチ内では幅6.0m，東区北端では幅5.8m，同区南端では幅3.2mを，それぞれ測る。深さは，第9トレンチ内で0.7m，東区



第18図　煤谷川窯址東区溝実測図(縮尺：1/100)



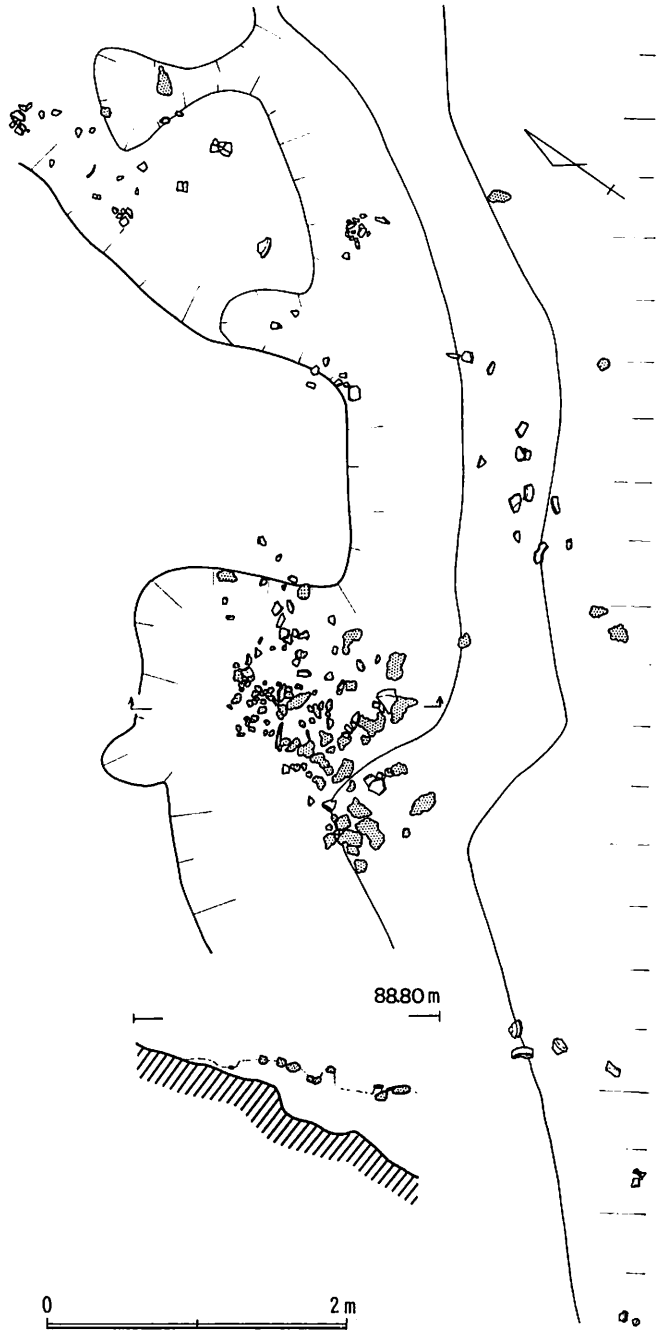
第19図　煤谷川窯址東区溝断面実測図(縮尺：1/80)

北端で1.4m，同区南端で0.75mを，それぞれ測る。溝の断面を東区北端でみるならば(第19図)，北岸はゆるやかな傾斜で溝底にいたり，また南岸はゆるやかに傾斜してのち，段をなして溝底にいたる。

溝内に堆積した土は，大きく３層にわかれる(第19図)。第１層は表土層である。第２層は溝埋土の上層で，焼土・窯壁片・須恵器片を多量に包含する。第３層は溝埋土の下層で，砂層である。第２層に堆積した窯壁片・須恵器片は，特に溝の北肩部に集中し，南肩部にはほとんど

みない。遺物の集中の範囲は，南北1.3m，東西3.0mにおよぶ。窯体が破壊された際に堆積したのであろう。また，焼土は遺物の最も集中する部分を中心に堆積し，その範囲は南北2.9m，東西3.7mを測る。なお，東区および第9トレンチにおいて，溝の下底からも少量の須恵器片および窯壁片が出土した。

溝は，下底より遺物が出土しており，窯の操業と近い時期にすでに存在したとみられる。しかし，溝平面が不定形を呈する点で，人工的に掘削されたものとは考えにくい。ただ，降雨のばあい，山側から流れる水は，この溝にさえぎられて窯体にまで至らない。したがって，窯体を構築した際に，この地形を利用していた可能性は考えておくべきであろう。



第20図　煤谷川窯址東区溝遺物出土状況実測図(縮尺：1/50)

第3章　遺　物

煤谷川窯址から出土した遺物は，ほとんどが須恵器である(第21～27図，図版第6・7)。ほかに，若干数の瓦(第30図)，少量の江戸時代の陶磁器片，弥生時代の石鏃1点が出土した。

須恵器は，遺物整理箱にして約100箱分ある。その数量は，破片数にして21991点を数える。器種には，杯蓋・有台杯・無台杯・有台皿・無台皿・壺類・壺蓋・甕・瓶類(平瓶・瓶子など)・高杯・鉢・円面硯，がある。

これを器種別に破片数でみてみよう。総数21991点のうち，器種のわからないものは5063点あり，これを除くならば，器種の判明するものの数は16928点になる。うち，杯蓋は3193点で，器種の判明する破片数の18.9%をしめる。以下同様に，有台杯は1876点で11.1%を，無台杯は2848点で16.8%を，杯であるけれども高台の有無がわからない破片は8586点で50.7%を，それぞれ数える。皿は96点を数えるが，皿のばあい，破片では杯と区別がつけにくいため，その実数はより多いものになるだろう。以上，杯蓋・杯・皿をあわせた総量は，破片数にして16599点を数え，器種の判明する破片総数の98.1%をしめる。他の器種は，壺類が202点，同蓋が32点，甕が37点，瓶類が27点，高杯が7点，鉢が23点，円面硯が1点を，それぞれ数える。杯皿類が多い一因は，それが他の器種に比べて，破片になっても器種の見分けがつきやすいところにあるのかもしれない。ただし，総出土破片数をとってみても，杯皿類はその75.5%をしめており，杯皿類が総量のほとんどを数えるという傾向は動かないといえる。

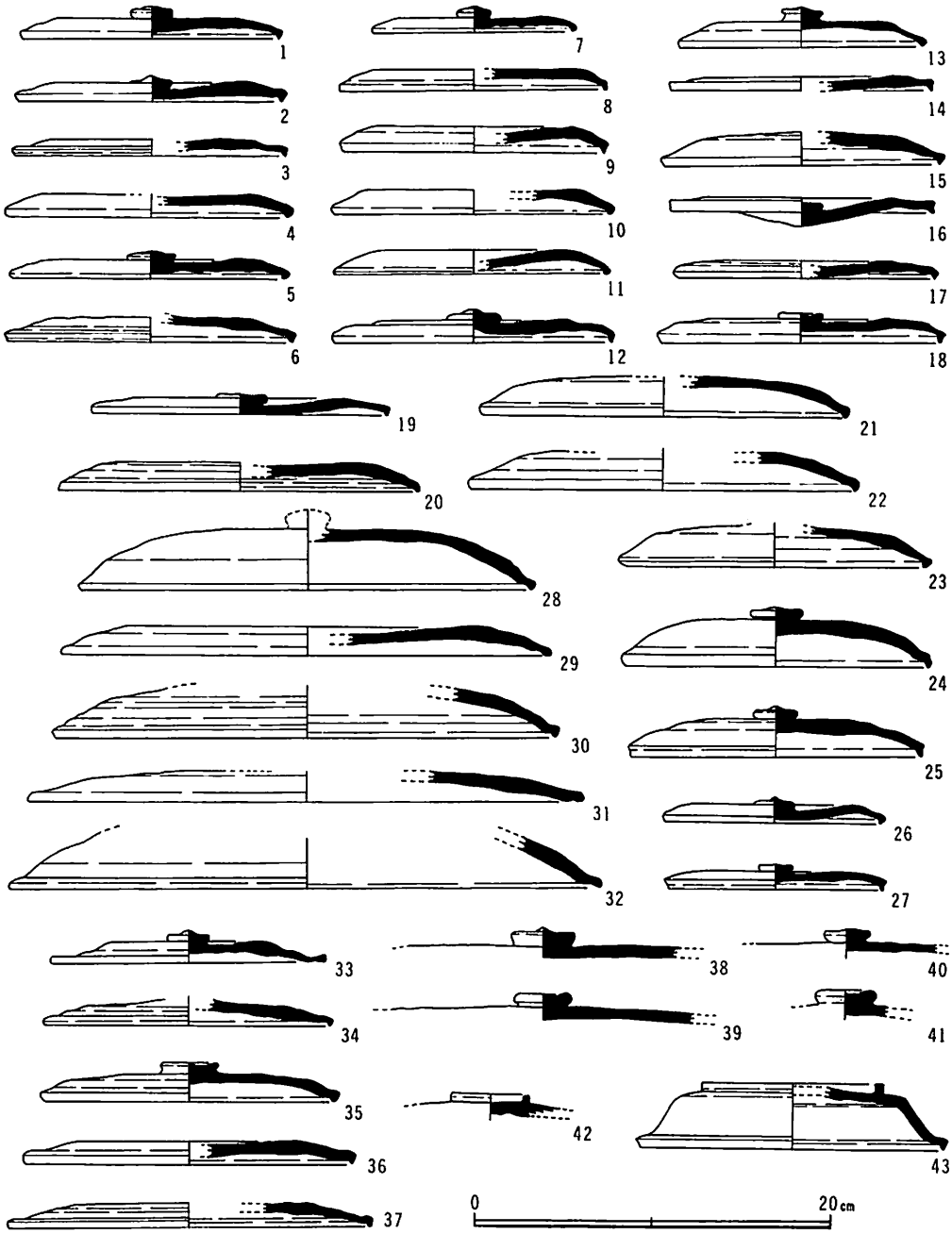
なお，出土須恵器の大きさによる比率を計測するために，破片数計算法と，口縁部計測法の両者を試みた。どちらも口径を復元するにたる大きさの破片を資料とする。前者は，資料をその破片数によって計算する方法である。後者は，宇野隆夫や中谷雅治らが提唱したもので，残存率(残存する口縁周の長さを，復元した口縁周の長さで割った値)を破片数に掛けて，出土土器が完形品に換算するならば何個体分にあたるかを計算する方法である[1]。

杯蓋および皿蓋(第21図)　杯蓋および皿蓋は，その形態によってA・B・C各類にわかれ，さらに法量によって，杯蓋はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴに，皿蓋はⅠ・Ⅱ・Ⅲに，それぞれ分類する。

A類(第21図33～37)　天井部と口縁部の境界は段をなし，口縁端部はさらに下方へ屈曲する。天井部に擬宝珠形の鈕をもつ。天井部は回転ケズリ調整を行ったのち，回転ナデ調整を施す。口縁部は回転ナデ調整による。天井部内面には，不定方向のナデ調整痕がみられる。この型式の杯蓋は，奈良時代中葉以降に盛行する。本窯址出土例は，口縁部の屈曲がゆるやかで，その点に古い特徴をみる。

B類(第21図1～25)　口縁端部が下方に屈曲し，天井部に擬宝珠形の鈕をもつものである。天井部は，ほぼ平坦なもの(1～20)と，笠形を呈するもの(23～25)とがある。調整の特徴はA類と変わらない。

C類(第21図42・43)　天井部にリング形の鈕をもつ。出土点数は2点にとどまる。42は鈕部



第21図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(1)（縮尺：1/4）

のみが残存する。鈕径4.4cmを測る。外面に回転ナデ調整を，内面に不定方向のナデ調整を，それぞれ施す。43は，口径17.0cm，高さ3.6cm，鈕径10.0cmを測る。天井部は平坦で，体部は斜め下方におりる。口縁部は下方に屈曲し，端部はするどくおさめる。天井部は回転ケズリ調整ののち，回転ナデ調整を施し，それから鈕を貼り付ける。天井部内面は，一定方向のナデ調整を施す。つくりは精良である。これらC類の蓋は，金属器の椀蓋の形態を須恵器で模倣したもの

である。形態・質感ともに金属器のおもかげを残す。

これを型式別の比率でみてみよう。杯蓋および皿蓋は，破片数にして3193点を数える。そのうち，型式の判明するものは2645点である。型式のわからないものは，鈕のみを残す65点を含み，548点を数える。A・B・C各類のうちわけは，A類837点，B類1806点，C類2点である。A・B両類の比率を比較するならば，A類の31.7%に対し，B類は68.3%をしめることになる。さらに，口径を復元するにたる大きさの破片は1841点あり，これを資料として口縁部計測法を行った。同法によると，A類は59.6個体分，B類は136.4個体分であり，百分率に換算するならば，A類は30.4%，B類は69.4%になる。すなわち，破片数計算・口縁部計測の両法で計算した値がほぼ等しい比率を示すことになる。

次に，法量による比率をみる。後述するように，杯および皿は，杯Ⅰ～Ⅴ，皿Ⅰ～Ⅲに分類できる。したがって，蓋のばあいも，セットとなる杯・皿にあわせて，杯Ⅰ～Ⅴ蓋，皿Ⅰ～Ⅲ蓋の各種に分かれる。ただし，杯Ⅰと皿Ⅱ，杯Ⅱと皿Ⅲは，口径を等しくするため，それぞれの蓋を区別することはできない。杯Ⅰ蓋は口径20.5cm～25.4cm，杯Ⅱ蓋は口径16.0cm～20.4cm，杯Ⅲ蓋は口径13.5cm～15.9cm，杯Ⅳ蓋は口径11.5cm～13.4cm，杯Ⅴ蓋は口径11.4cm以下のものとし，皿Ⅰ蓋は口径25.5cm以上，皿Ⅱ蓋は口径20.5cm～25.4cm，皿Ⅲ蓋は口径16.0cm～20.4cmのものとする。

そうしたばあい，図示したものでいうならば，第21図21・22・28は杯Ⅰ蓋もしくは皿Ⅱ蓋に，同図20・23～25・35～37は杯Ⅱ蓋もしくは皿Ⅲ蓋に，同図1～6・8～12・14～19・33・34は杯Ⅲ蓋に，13・26・27は杯Ⅳ蓋に，7は杯Ⅴ蓋に，29～32は皿Ⅰ蓋に，それぞれ該当する。

法量別の比率をだすために，口径を復元するにたる大きさの破片1841点を資料として，口縁部計測法および破片数計算法を試みた(第3表)。ただし，両法による値は，直径を2cmごとに算出したため，厳密に杯Ⅰ蓋～杯Ⅴ蓋・皿Ⅰ蓋～皿Ⅲ蓋の分類に対応させることはできない。いま仮に，両法による復元口径10cmのものを杯Ⅴ蓋に，12cmのものを杯Ⅳ蓋に，14・16cmのものを杯Ⅲ蓋に，18・20cmのものを杯Ⅱ蓋もしくは皿Ⅲ蓋に，22・24cmのものを杯Ⅰ蓋もしくは皿Ⅱ蓋に，26cm以上のものを皿Ⅰ蓋に，それぞれ対応させることにしよう。そうすると，いず

第3表　煤谷川窯址出土杯蓋および皿蓋分類表

破片数計算法

復元口径(cm)	10	12	14	16	18	20	22	24	26以上	資料数
A類(%)	*	4	22	32	19	11	5	3	3	577片
B類(%)	1	5	19	35	18	10	6	3	3	1262片
計(%)	1	5	20	34	18	11	6	3	3	1841片

口縁部計測法

復元口径(cm)	10	12	14	16	18	20	22	24	26以上	資料数
A類(%)	1	4	24	37	17	8	5	2	2	59.6個体分
B類(%)	1	7	20	39	15	8	5	3	2	136.4個体分
計(%)	1	6	21	38	16	8	5	3	2	196.0個体分

れの計測法をとったばあいも，杯III蓋が半数をしめ，杯II蓋もしくは皿III蓋がそれについで3割程度，杯I蓋もしくは皿II蓋が1割程度を数える。さらに，杯V・同IV・皿I各蓋が残りの1割をしめることになる。

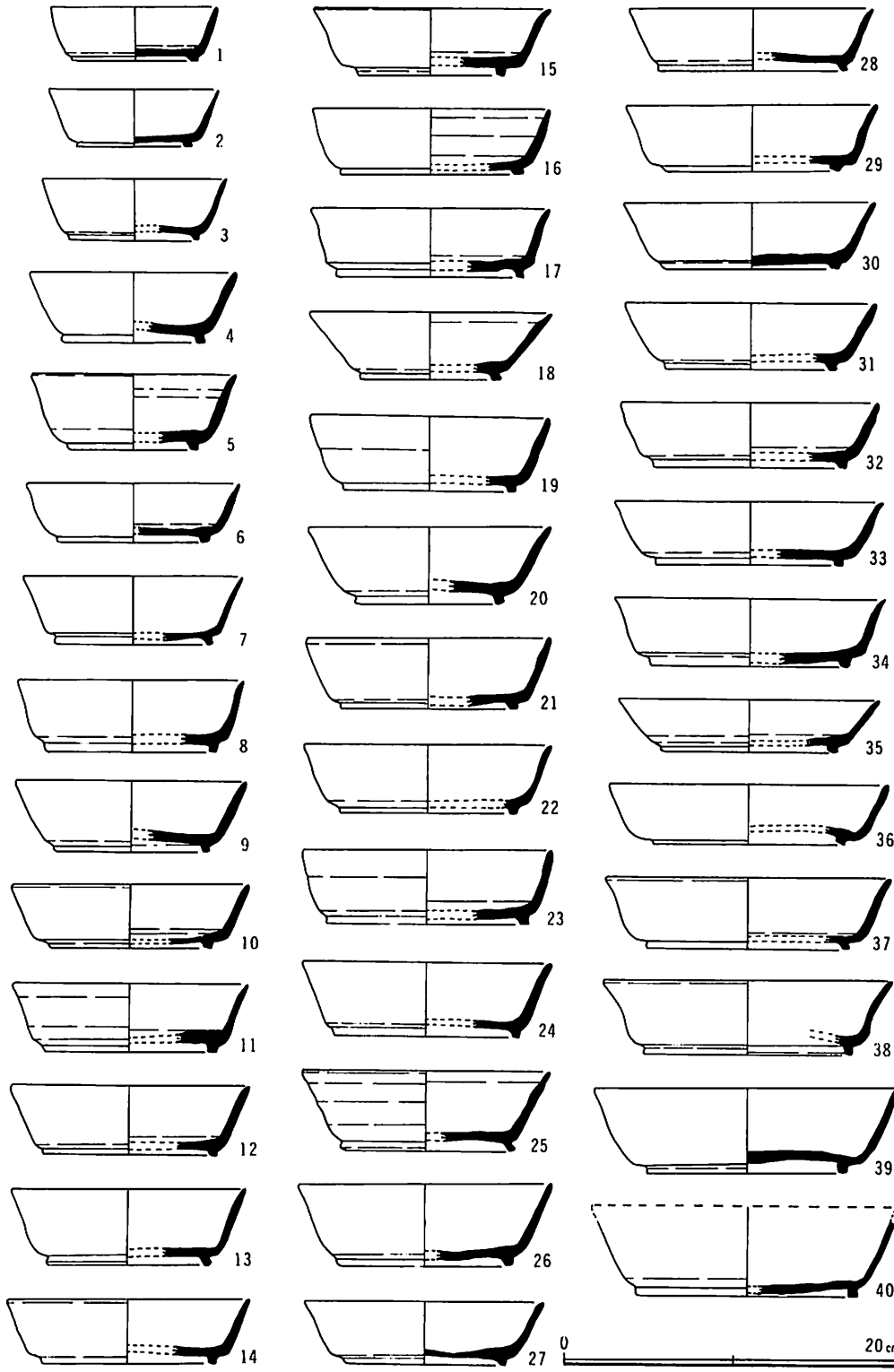
有台杯および**有台皿**(第22・23図)　杯および皿のうち，高台をもつものである。平坦な底部と斜め上方にたちあがる体部をもつ。底部端よりやや内側に低い高台を付す。高台は，ほぼ垂直につくものと，「ハ」の字形にわずかに外反するものとがある。また，底部と体部の境界は，稜をなすものと，丸味をもつものとがある。口縁端部は丸くおさめる。底部は，回転ヘラキリののち，軽く回転ナデ調整を施す。有台杯のばあい，底部内面には一定方向のナデ調整を行う。有台皿のばあい，底部内面には不定方向のナデ調整を施す。

有台杯のなかに，口縁部が外反する一群がある(第23図7～10)。7は全形を復元することができる例で，口径に比して器高が高い。体部はほぼ垂直にたちあがり，口縁部に至ってゆるやかに外反する。底部と体部の境界は丸い。高台はわずかに外方にふんばる。8～10は7に比して器高が低い。体部は斜め上方にたちあがり，口縁部はその端部で強く外反する。これらは，金属製の椀を模倣した須恵器である。蓋C類とセットをなすものであろう。

さて，奈良時代の食器類は，法量によって分化し，一定の規格性をもつことが知られている。そのばあい，食器の法量のちがいは，器高の値を口径の値で割り，その値を百倍した数値であらわすことができる。この数値は，径高指数と呼ばれる。この分類の要点は径高指数の近似するものを一群にまとめることによって，法量分化の様子を示すことができるところにある。すなわち，法量を異にし，径高指数を同じくする二つの土器があったばあい，両者はその大きさの違いにもかかわらず，形態が相似する。言いかえるならば，両者は，形態はそのままにして法量を拡大もしくは縮小した関係にあるわけである。この関係は，有台杯および有台皿のばあいだけではなく，無台杯および無台皿のばあいにも，むろんあてはまる。

この関係を示すために作成したのが，第28図である。同図によって有台杯および有台皿の型式分類を試みるならば，まず口径の大小によって，有台杯をI～Vの5種に，有台皿をI・IIの2種に，それぞれ分けることができる。ただし，皿IIと杯Iは口径を等しくしており，その区別は径高指数によらねばならない。杯Iは口径19.3cm～25.0cm，杯IIは15.0cm～19.2cm，杯IIIは12.5cm～14.9cm，杯IVは10.2～12.4cm，杯Vは8.0cm～10.1cmのものとし，皿Iは口径25.0cm，皿IIは19.3cm～24.9cmのものとした。さらに，径高指数の大小によって，有台杯を1～4に，有台皿を1～3に，それぞれ分類した。有台杯1は径高指数41～35，2は34～29，3は28～24，4は23～20のものとし，有台皿1は径高指数15～19，2は12～14，3は10～11のものとした。この両分類を組み合わせることによって，有台杯および有台皿の型式を，有台杯I－1，有台杯I－2，有台皿I－1のようにあらわすことができる。

第28図によるならば，有台杯と有台皿のちがいを，径高指数の差であらわせることがわかる。すなわち，両者は径高指数20を境とし，それ以上を示すものが有台杯であり，それ未満を示すものが有台皿であるのである。なお，金属器模倣須恵器である第23図7は，径高指数41を示し，



第22図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(2)　(縮尺：1/4)

第4表　煤谷川窯址出土有台杯および有台皿分類表

破片数計算法

復元口径(単位cm)	10以下	12	14	16	18	20	22	24	26以上	計
数　量(単位%)	3	11	41	16	7	2	3	6	11	275片

口縁部計測法

復元口径(単位cm)	10以下	12	14	16	18	20	22	24	26以上	計
数　量(単位%)	6	12	46	15	6	1	2	4	7	35.7個体分

杯III－1に属する。その径高指数は，有台杯中の最高値を示す。

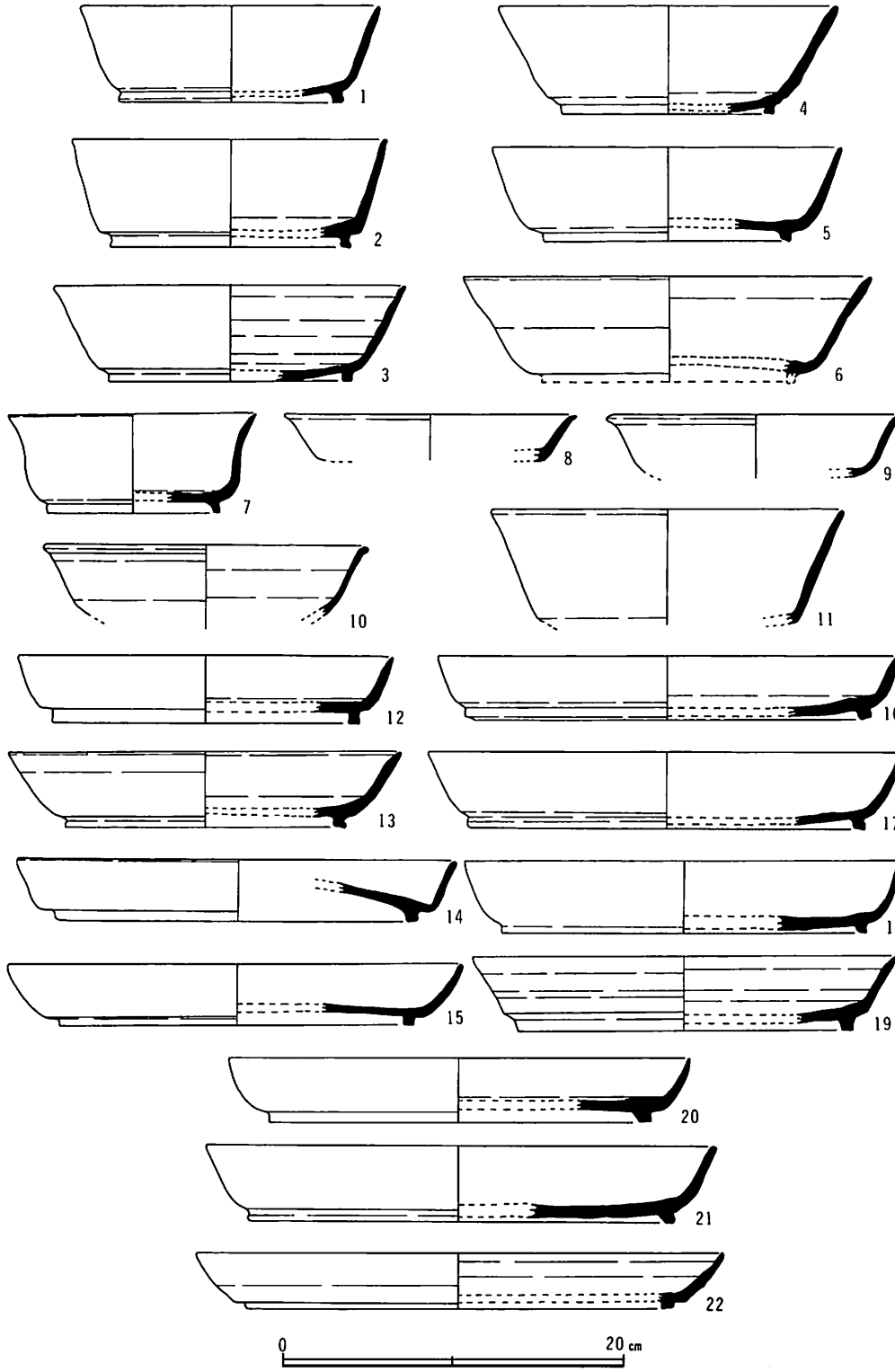
有台杯および有台皿は，破片数にして1876点を数える。ただし，杯もしくは皿で，口縁部のみしか残存しないため，高台を持つか持たないか判断できないものが8586点ある。したがって，有台杯および有台皿の実際の数量は，さらに多いものとなるだろう。1876点のうち，口径を復元するにたる大きさの破片は275点を数える。

この275点を，破片数計算・口縁部計測の両法によって分類したものが，第4表である。いま，両計測法による復元口径26cm以上のものを皿Iに，20～24cmのものを杯Iおよび皿IIに，16～18cmのものを杯IIに，14cmのものを杯IIIに，12cmのものを杯IVに，10cm以下のものを杯Vに，それぞれ近似的に対応させることにしよう。そうすると，有台杯および有台皿のうち，杯IIIが半数近くをしめることがわかる。それに次ぐものは杯IIで2割強をしめる。さらに，皿I・杯Iおよび皿II・杯IVは，それぞれ1割程度を数えることになる。

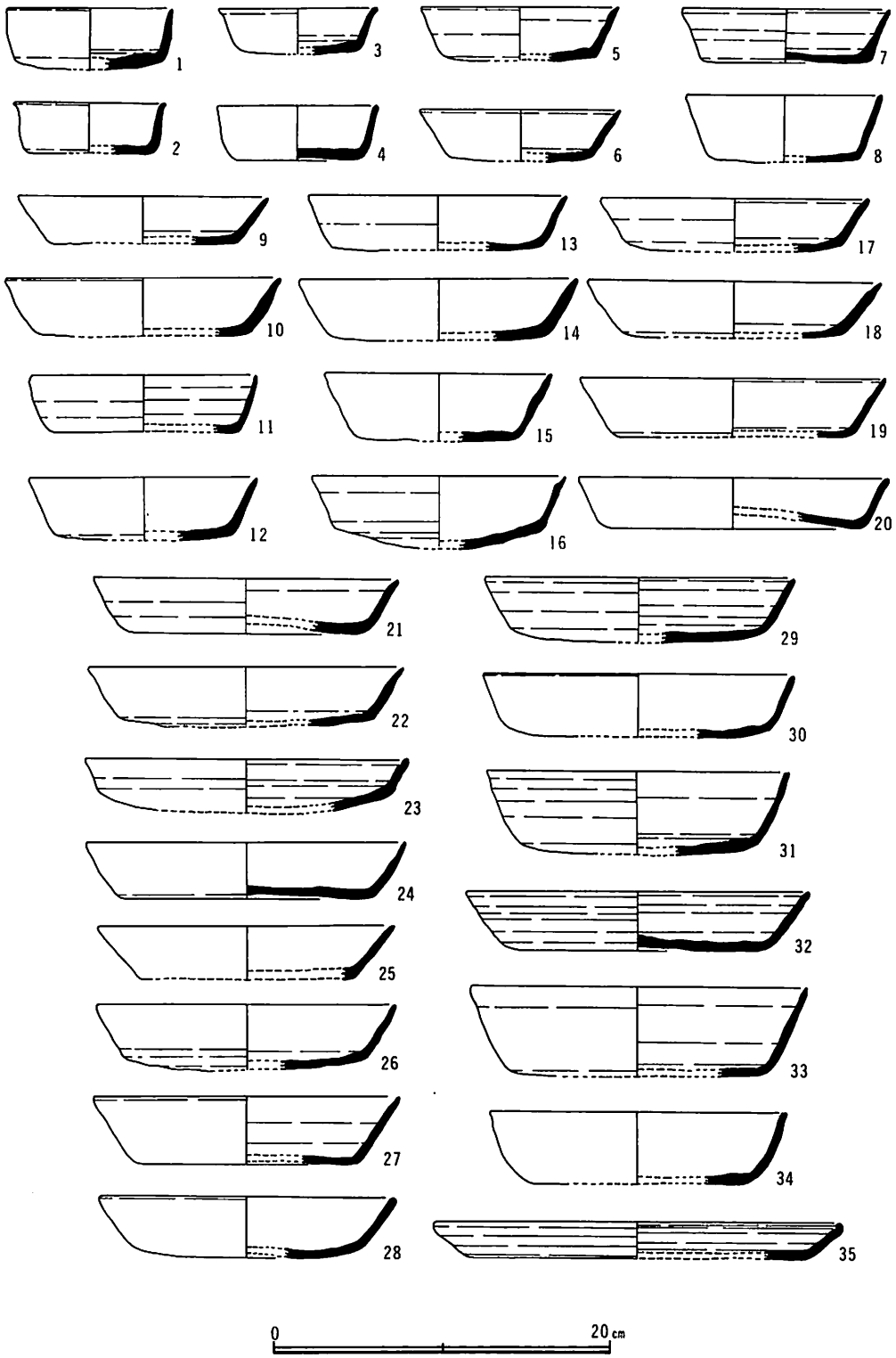
なお，有台杯および有台皿の内に，底部外面に連続して施されたある種の圧痕を残すものがある。この圧痕は，その形状が爪の形に似ており，事実その中には爪を用いて施したと推測されるものをも含むため，爪形状圧痕と総称されている[2)]。煤谷川窯址出土須恵器の中には，この爪形状圧痕を施すものが25点含まれる(第29図)。これらには，爪の型と思われる短い弧状の痕跡と，ヘラ状の工具を用いて施したと思われる長く直線的な痕跡とがある。また，施す位置は，高台沿いであるばあいと，高台からやや離れたばあいとがある。爪を用い，高台沿いに施すものとして，第29図8・18があり，また，爪を用い，高台から離れて施すものに，同図1・2・3・4・7・24・25がある。ヘラ状工具を用い，高台沿いに施すものとして同図6・9・10・15・16・17・18があり，また，ヘラ状工具を用い，高台から離れて施すものに，同図5・7・11・12・13・14・19・20・21・22・23がある。うち，7・17・18は，爪とヘラ状工具の双方を用いる。

無台杯および**無台皿**(第24・25図)　杯および皿のうち，高台をもたないものである。斜め上方にのびる体部をもつ。杯のばあい，底部は平らなものとやや丸味をおびるものとがある。底部の平らなものに，もし高台をつけるならば，有台杯になる。無台皿は平底である。無台杯には，底部を回転ケズリ調整するものと，切り離したまま調整を施さないものとがある。

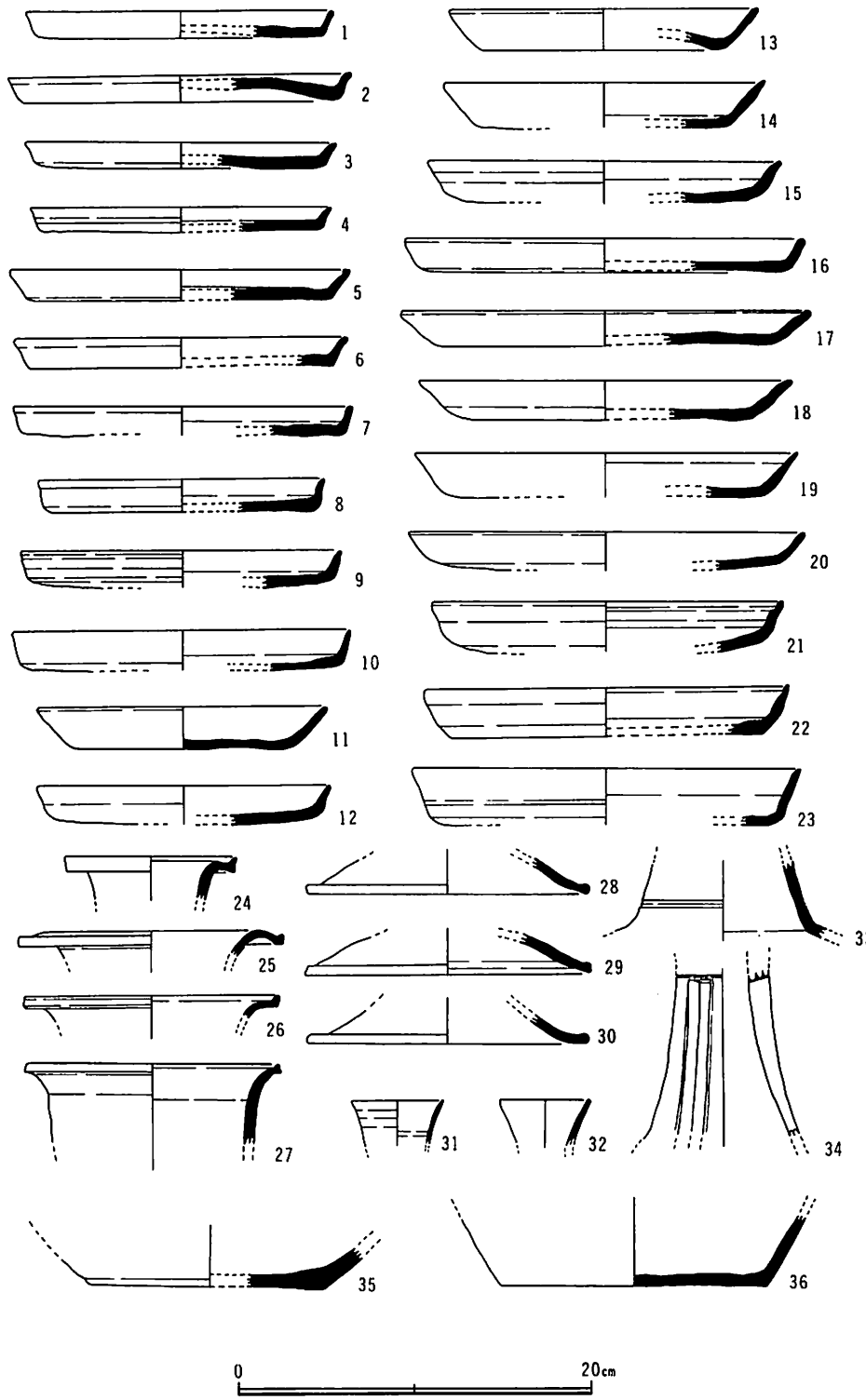
なお，無台皿のうちに，口縁部を内側に折りまげるもの(第24図35)がある。こういった形態は，同時期の土師器皿に見るものであり，土師器から影響があったことが知られる。また，金



第23図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(3)　(縮尺：1/4)



第24図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(4)　(縮尺：1/4)



第25図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(5)　(縮尺：1/4)

第5表　煤谷川窯址出土無台杯および無台皿分類表

破片数計算法

復元口径(単位cm)	10以下	12	14	16	18	20	22	24	26以上	計
数　量(単位%)	2	9	21	29	24	9	3	3	1	581片

口縁部計測法

復元口径(単位cm)	10以下	12	14	16	18	20	22	24	26以上	計
数　量(単位%)	2	12	23	29	24	7	2	2	*	71.8個体分

属製椀を模倣した無台杯がある(第24図31・34)。口縁端部に平坦な面をもつ。底部は平らで，調整を施さない。

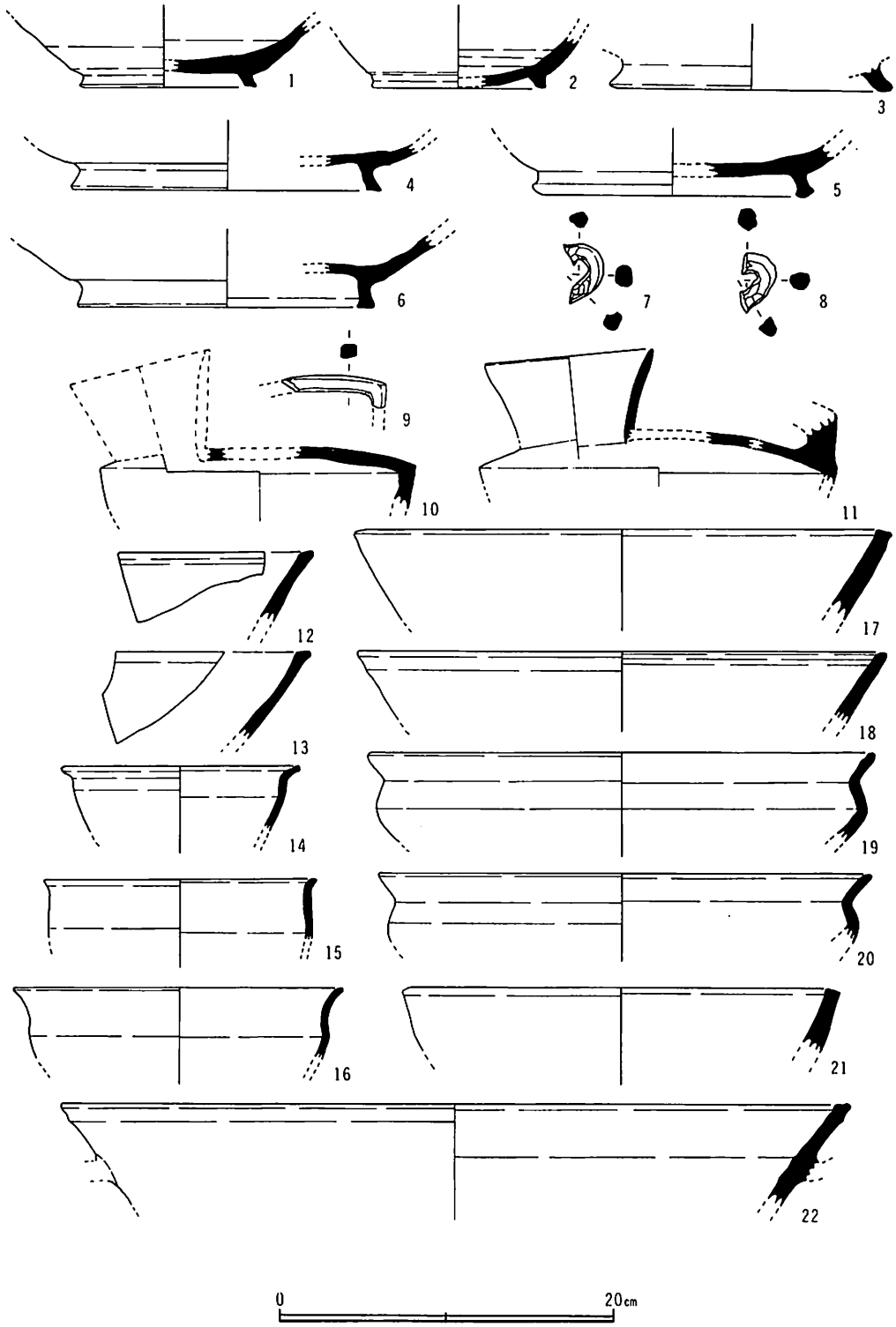
無台杯および無台皿を型式分類するために，その法量をグラフ化した(第28図)。その結果，まず，杯と皿とは，径高指数16を境として分かれることが知られる。そうして，口径によって分類するならば，無台杯は杯Ⅰ～Ⅴの5種に，無台皿は皿ⅡおよびⅢの2種に分かれる。このばあいの分類基準は，有台杯および有台皿のそれとかわらない。すなわち，杯Ⅰは口径19.3～25.0cm，杯Ⅱは15.0～19.2cm，杯Ⅲは12.5～14.9cm，杯Ⅳは10.2～12.4cm，Ⅴは8.0～10.1cmを測る。皿Ⅱの口径は杯Ⅰと，皿Ⅲの口径は杯Ⅱと，かわらない。さらに，これに径高指数による分類を加えるならば，杯は，径高指数40～32の杯1，31～26の杯2，25～21の杯3，20～16の杯4に，それぞれ分かれ，また，皿は，径高指数13～15の皿1，10～12の皿2，8～9の皿3，5～7の皿4に，それぞれ分かれる。

第28図の皿の部分に注目するならば，有台皿のばあい，皿Ⅰが主体であり，ほかは皿Ⅱがわずかに存在するのみであり，皿Ⅲをみない。ところが無台皿のばあい，そのすべてを皿Ⅱと皿Ⅲがしめ，皿Ⅰをみない。これは，同じ皿でも，有台のそれと無台のそれには性格の違いがあったことを示すものかもしれない。

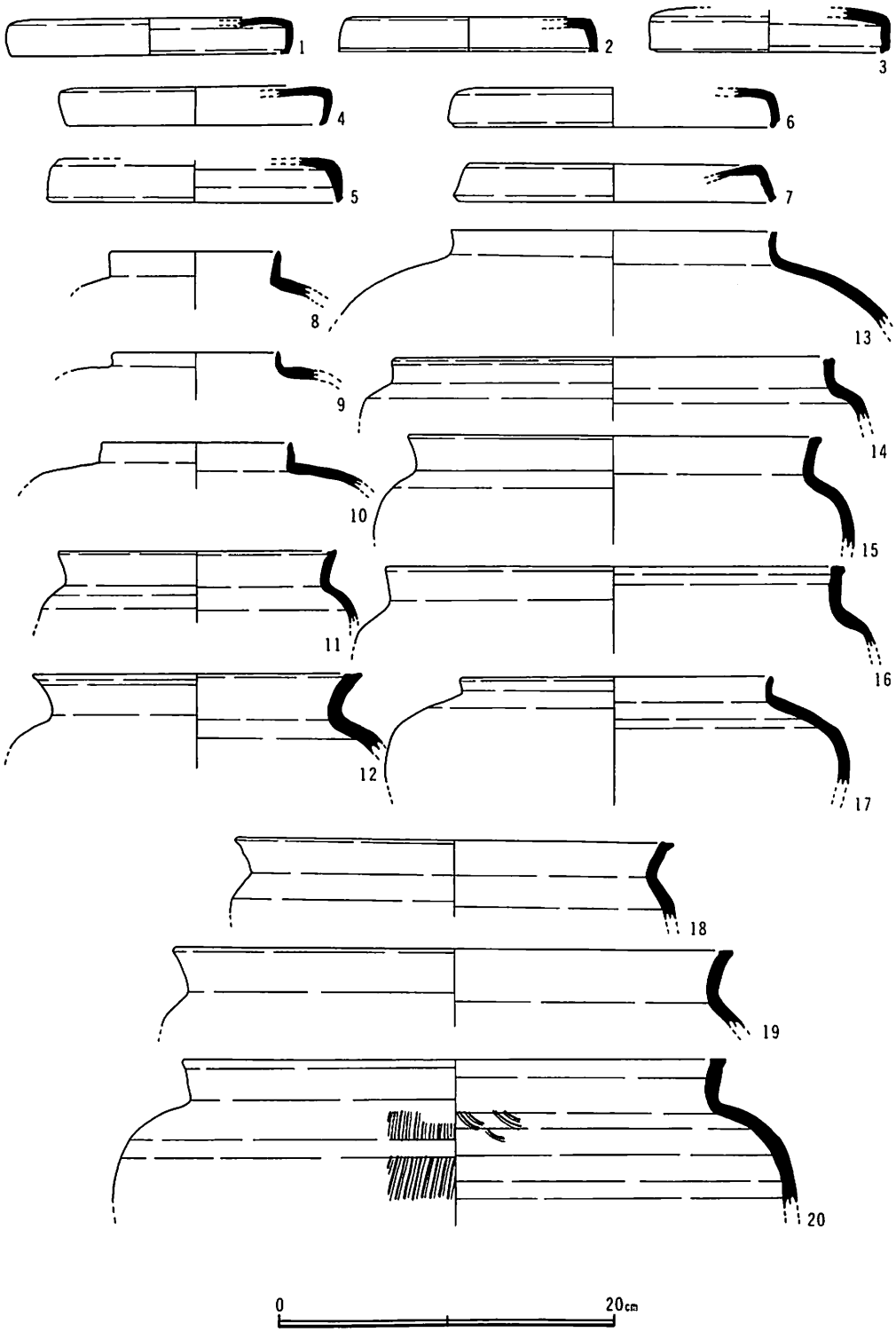
無台杯および無台皿の数量は，破片数にして2848点を数える。ただし，前述のように高台の有無がはっきりしない破片が8559点あり，これを考えにいれるならば，無台杯および無台皿の総量は，さらに多くなることになる。そうして，この2848点のうち，口径を復元するにたる大きさの破片は，581点存在する。この581点を資料として，口縁部計測法および破片数計算法を試みた(第5表)。そうして，有台杯のばあいと同様，復元口径10cm以下のものを杯Ⅴに，12cmのものを杯Ⅳに，14cmのものを杯Ⅲに，16～18cmのものを杯Ⅱおよび皿Ⅲに，20cm以上のものを杯Ⅰおよび皿Ⅱに，それぞれ近似的に対応させてみよう。すると，無台杯および無台皿の総量のうち，杯Ⅱおよび皿Ⅲが半数強をしめることがわかる。それに次ぐものは杯Ⅲで，2割強を数える。そうして，杯Ⅰおよび皿Ⅱ・杯Ⅲはそれぞれ1～2割を数える。杯Ⅴは少量存在するにすぎない。

高杯(第25図28～30・34)　全形のわかるものはない。脚裾部は大きくひらき，同端部はやや肥厚する。34は透孔をもつもので，3方に開ける。透孔には面取りを施す。

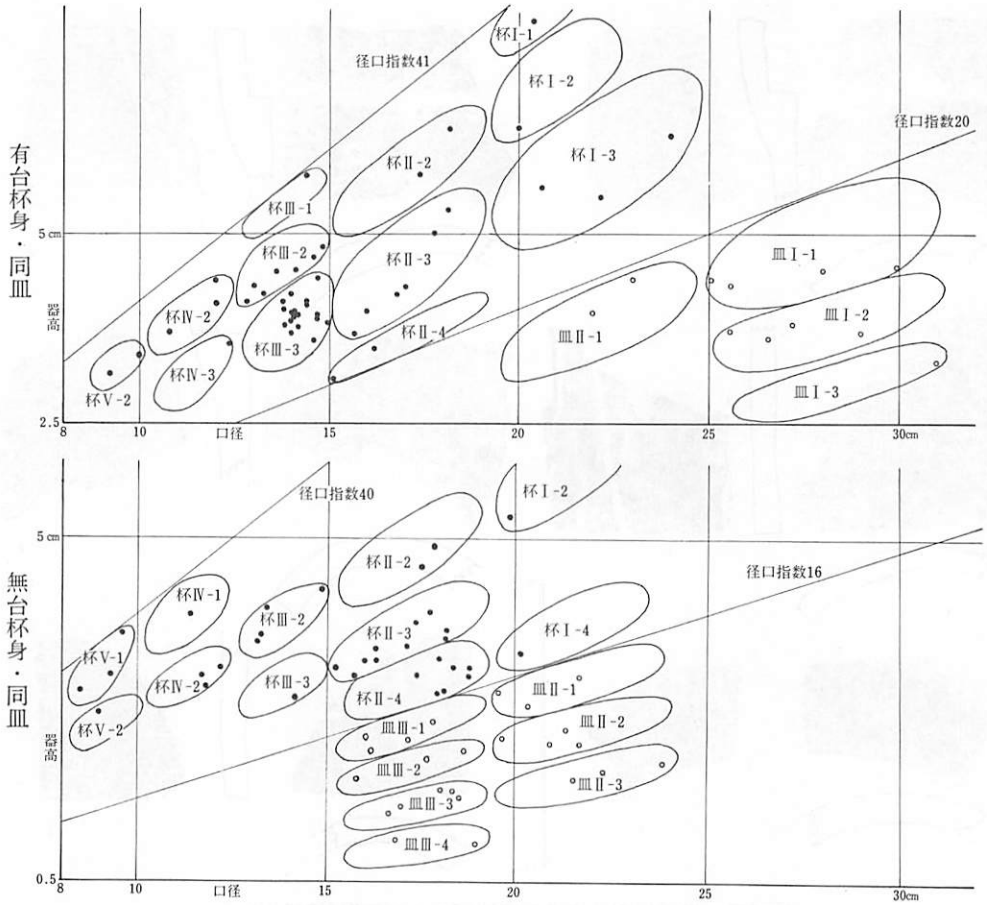
長頸瓶(第25図24～27・33)　口縁部は大きく外反する。口縁端部は上方に屈曲し，外側に面



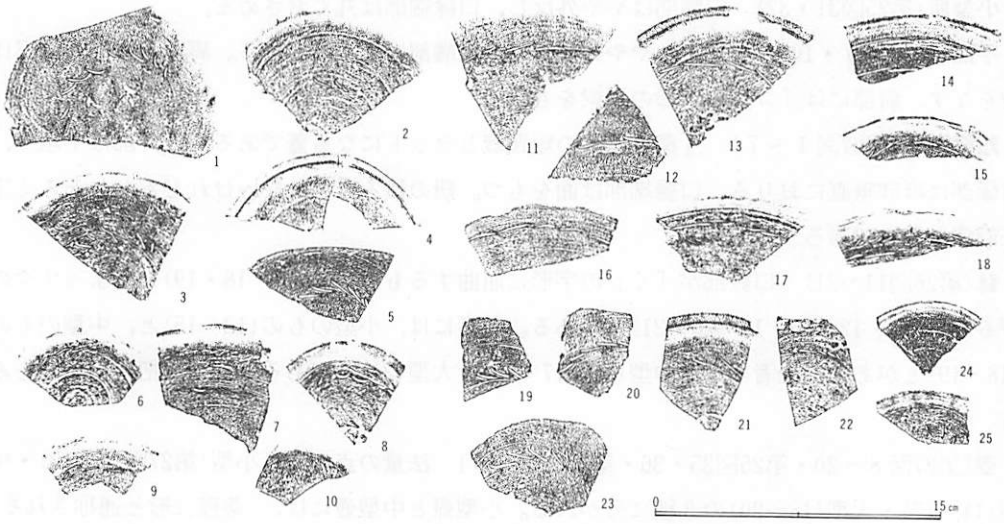
第26図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(6)　(縮尺：1/4)



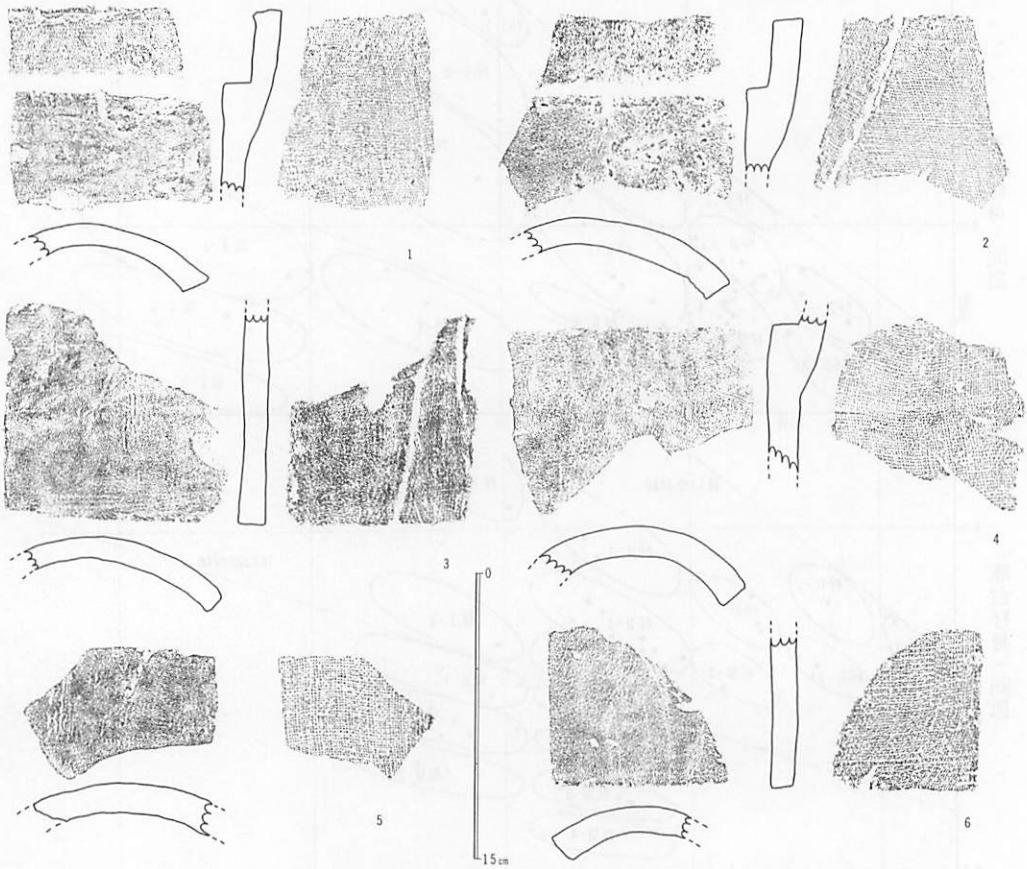
第27図　煤谷川窯址出土須恵器実測図(7)（縮尺：1/4）



第28図　煤谷川窯址出土杯・皿法量分布図



第29図　煤谷川窯址出土須恵器爪形状圧痕拓影(縮尺：1/4)



第30図　煤谷川窯址出土瓦実測図および拓影(縮尺：1/4)

をもつ。肩部に把手をもつもの(第26図７・８)もある。

小型瓶(第25図31・32)　口頸部はやや外反し，口縁端部は丸くおさめる。

平瓶(第26図９・10)　口頸部はやや外反し，口縁端部は丸くおさめる。肩部と体部の境界は稜をなす。肩部には「コ」の字形の提梁をもつ。

短頸壺蓋(第27図１～７)　「薬壺」型の短頸壺とセットになる蓋である。天井部は平坦で，口縁部はほぼ垂直におりる。口縁端部は面をもつ。鈕の残るものはないけれども，おそらく宝珠形鈕を付すであろう。

鉢(第26図11～21)　口縁部が「く」の字形に屈曲するもの(13～15・18・19)と，まっすぐのびるもの(11・12・16・17・20・21)とがある。前者には，小型のもの(13～15)と，中型のもの(18・19)とがある。後者には，中型(16・17・20)と大型(21)とがある。21には把手の痕跡をみる。

壺(第27図８～20・第25図35・36・第26図１～６)　法量の点から，小型(第27図８～10)・中型(11～17)・大型(18～20)の３種に分かれる。小型壺と中型壺には，「薬壺」形と通称される，口縁部が直立するもの(８～10・13・17)をみる。第27図１～７はこれとセットになる蓋である。

大型壺は，口縁部がやや外反し，端部は面をもつ。外面に平行タタキ，内面に同心円タタキの痕跡を残す。なお，壺類の底部には，高台をもつもの(第26図１～６)と，もたないもの(第25図35・36)とがある。高台は外方に強くふんばる。

瓦(第30図)　瓦は65点出土した。すべて丸瓦であり，平瓦をみない。凸面は縄目タタキを施したのちナデにより調整する。凹面には布目痕をとどめる。焼成は，硬質のものと軟質のものとがある。また，二次焼成を受けて赤褐色に変色したものもある。須恵器窯址から瓦が出土する理由としては，その窯で瓦を併焼したばあいと，焼き台や窯に伴う何らかの設備のために瓦を使用したばあいとが考えられる。前者のばあいには，その出土品の大半が平瓦であるのが普通である。したがって，煤谷川窯址出土の瓦は，窯に関する何らかの設備に使用されたものと考える。二次焼成の痕をとどめる個体と，そうでない個体とがあることは，この設備が，窯体内と窯体外の両方にかかわるものであったことを示唆する。設備の実体はよくわからないけれども，一案としては排水溝の可能性を考えておきたい。

第4章　小　結

煤谷川窯址出土須恵器の編年的位置を考えたい。まず注目したいのは，数量の点で，杯蓋の主体をしめるのがB類であり，杯蓋A類の比率が低いことである。大阪府南部窯址群(陶邑窯址群)から出土した須恵器の編年研究の成果によるならば，B類とA類は，一般的には前者が古く，後者が新しい型式である[3]。そうして，同窯址群において両者は，奈良時代前半のある段階をもって交替することが知られる。また，奈良市平城宮跡出土の土器編年では，平城宮ⅠではB類のみであり，平城宮Ⅱ以降，両者の共存がみられる[4]。平城宮跡出土須恵器において両者が完全に交替することがないのは，同宮跡出土須恵器に生産地の違いがあることに起因するらしい。すなわち，同宮跡出土須恵器には互いに胎土の異なる4群があり，うち第Ⅰ群の須恵器ではB類からA類への変化がみられるのに対し，第Ⅰ群以外の須恵器では時期を問わずB類の蓋が普遍的なのである。大阪府南部窯址群以外の須恵器生産地で，B類からA類への変化が必ずしもたどれるわけではないことは，愛知県猿投山西南麓窯址群の須恵器杯蓋には，時期を問わずB類のものが一般的であることからも知られる。ただし，煤谷川窯址の位置する南山城では，京都府綴喜郡田辺町松井の松井[5]・交野ケ原両窯址[6]，相楽郡加茂町西椚の西椚窯址[7]などの出土須恵器にみるように，奈良時代後半にはA類の蓋が普遍的となっており，その点で大阪府南部窯址群と軌を一にする。

つぎに，無台杯をみるならば，径高指数16～25の無台杯3・4が量的に主体をしめる。平城宮跡出土の須恵器編年の成果によるならば，須恵器無台杯は平城宮Ⅱ以降しだいに小型化し，同Ⅱにおいては径高指数23前後のものおよび33前後のものが主流をしめるようになる。そうして，同Ⅲにおいては径高指数20前後のものおよび27前後のものが主体となるのである。

したがって，煤谷川窯址出土須恵器は，杯蓋において蓋B類が主流をしめ，なおかつ無台杯の小型化が始まった当初の段階，すなわち平城宮跡出土土器の編年でいうところの平城宮Ⅱ～Ⅲに併行する時期のものであると考える。実年代では8世紀前葉～中葉をあてることができるであろう。

註

1)宇野隆夫『考察の方法』(『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ所収，京都，昭和56年)，中谷雅治『器種別個体数の試算について』(『西椚窯跡』所収，京都府加茂町，昭和56年)。

2)爪形状圧痕については，林日佐子『いわゆる「爪形状圧痕」について』(『マムシ谷窯址発掘調査報告書』所収，京都，昭和58年)参照。爪形状圧痕のある須恵器は，山城・和泉・摂津・播磨・美濃・尾張・備前において確認されている。

3)田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ(京都，昭和41年)，中村　浩『和泉陶邑窯出土遺物の時期編年』(『陶邑』Ⅲ所収，大阪，昭和53年)。

4)西　弘海『土器』(『平城宮発掘調査報告』Ⅶ所収，奈良，昭和53年，のち，『平城宮の土器』と改題，『土器様式の成立とその背景』所収，京都，昭和61年)。

5)江谷　寛『松井窯跡群』(『田辺町遺跡分布調査概報』所収，京都府田辺町，昭和57年)。

6)昭和54・56両年，八幡市教育委員会調査。

7)長谷川達他『西椚窯跡』(京都府加茂町，昭和56年)。

畑ノ前遺跡

第１章　遺跡の概要

第１節　現状と調査経過の概略

畑ノ前遺跡は，京都府相楽郡精華町大字植田小字新田と小字畑ノ前にわたって所在しており，関西文化学術研究都市計画に関連した開発事業，（仮称）精華ニュータウン予定地内の東端に位置する（第１・２図，巻頭図版第１上・図版第１参照）。なお，本遺跡は畑ノ前遺跡と命名されているが，今回発掘調査を行った地点に関しては，小字畑ノ前に所在する部分は極く僅かで，大部分は小字新田に所在している。

本遺跡は鮮新・洪積層台地の上にのっており，遺跡の南方にある標高74.50mの山頂から北に傾斜面をなして下っていき，その裾部に標高56～58mの平坦面が広がっている。この台地の北側は東西を谷で限られた舌状の張り出しとなっていて，台地の東側は緩く下る傾斜面をなしている（第31図，図版第８）。調査時点では，東側の緩傾斜面が畑地として，他は果樹園・竹林として利用されていた。

この遺跡の東方には，北流する木津川の冲積層が広がり，主に水田として利用されている（巻頭図版第１下参照）。また，この遺跡の南は，標高74.50mの山頂からかなりの急斜面をなして下り，そこに西の方へ奥深く入り込む谷が形成されている。

昭和59年度に行った試掘調査の結果，各トレンチでほぼまんべんなく弥生・奈良時代の遺構・遺物が確認されたので，この台地全面にわたる調査の必要性が認められ，昭和60年度の本調査では，最終的に，この台地全面約12,000m²の発掘調査を実施した。

発掘調査地の地区割りは，試掘調査の際に設定していたグリッド（第５図参照）を本調査でも踏襲した。グリッドは，まず大グリッドを一辺20m四方とし，西から東へ０～６，北から南へＡ～Ｊとして，その組み合わせで１Ａ・２Ａ・３Ａ……と呼ぶことにした。そして，各大グリッドをさらに一辺４m四方の小グリッドに分けて，北西隅の区画を起点に東方向へ１～25と番号を付け，大グリッドの名称の次にその番号を付して呼ぶことにした（第32図）。

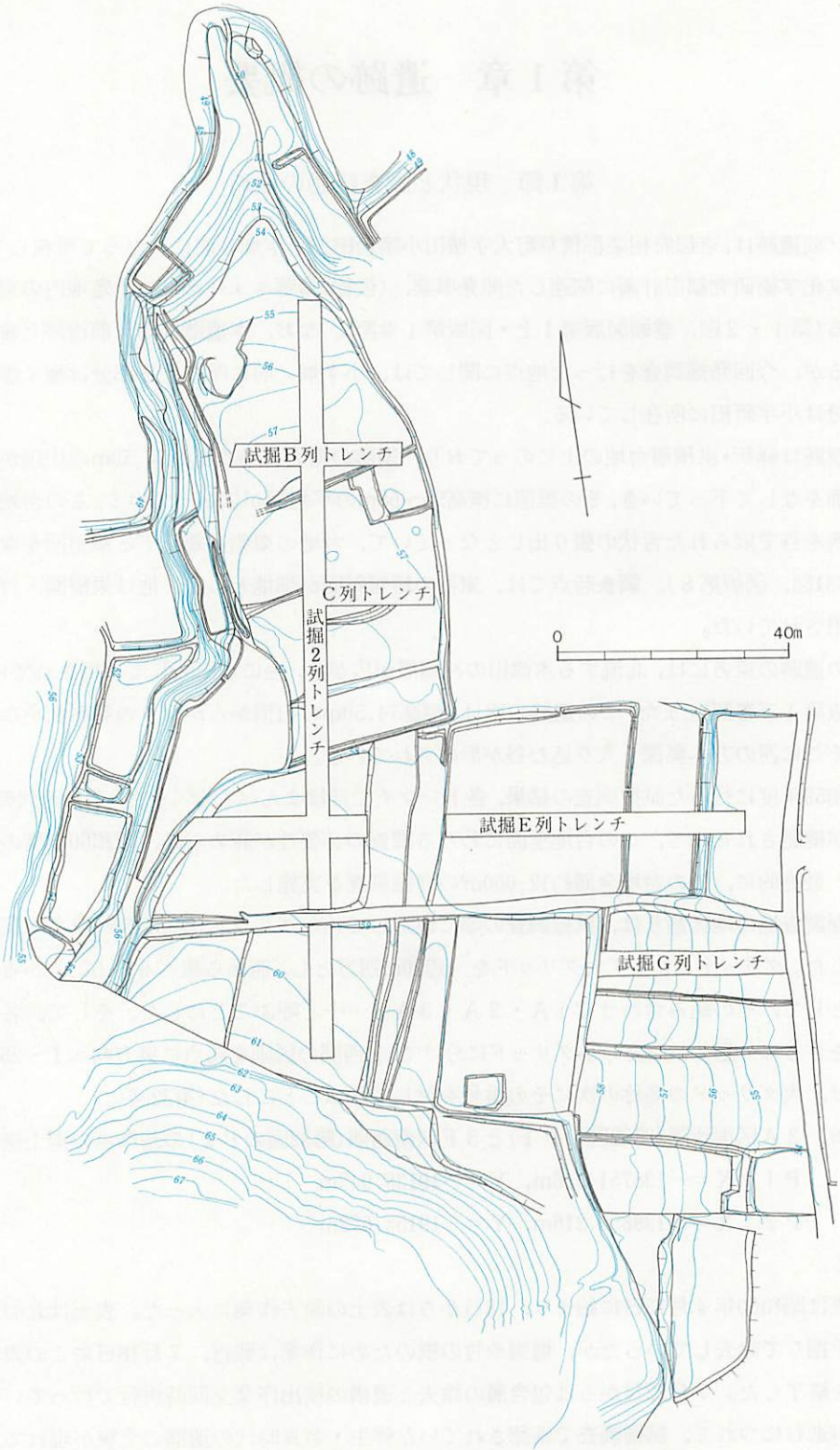
なお，３Ａ区南西隅（第32図のＰ１）と３Ｆ区南西隅（第32図のＰ２）の基準点の国土座標は，

Ｐ１：Ｘ＝－138751.516m，Ｙ＝－19138.949m

Ｐ２：Ｘ＝－138850.216m，Ｙ＝－19154.672m

である。

調査は昭和60年４月13日に始まり，18日からは表土の除去作業に入った。表土は北の方から順次手掘りで除去していったが，梅雨や竹の根のために作業は難行，７月18日にこの表土除去作業を終了した。７月22日からは包含層の除去と遺構の検出作業を同時併行で行っていった。調査が進むにつれて，試掘調査で確認されていた弥生・奈良時代の遺構の全貌が現れてきた他に，新たに古墳群などを確認するに至った。そして，12月30日に５Ｈ井戸１の断ち割りを残し

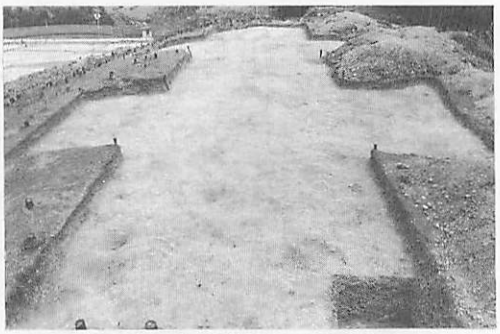


第31図　畑ノ前遺跡本調査前地形測量図(縮尺：1/1,200)

第32図　畑ノ前遺跡グリッド配置および発掘区域図(縮尺：1/1,500)

て発掘作業を終了し，同日ヘリコプターによる航空写真撮影を行った。

この間，当初予定していた調査区域の南の方にも遺構が存在する可能性があったので，8月8日から幅4mのトレンチを任意に数本南に延ばしたところ，3～5区にかけて遺構がかなり確認されたため，可能な限り南方へ調査区域を拡張し(南拡張区)，当初予定地の調査と併行して調査を進めた。また，南方の山頂には古墳が存在する可能性があったため，東西に4×20mのトレンチ1本，その間に南北4×8mのトレンチ2本を入れたが，遺構は検出されなかった(第32・33図)。



第33図　畑ノ前遺跡南方山頂試掘調査終了状況写真(西より)

5H井戸1の断ち割りに関しては，翌昭和61年1月4日から作業を再開した。井戸の東側地山を井戸側下底部まで掘り下げ，実測および写真撮影を行った。そして，2月7日に巨大な一木刳り抜きの下部井戸側を取り上げて，保存処理を行うため，同日京都府立山城郷土資料館に運搬した。

第2節　層位と遺構の概略

本遺跡における層位は，基本的には，上から表土層(これは2層に分かれ，上が黒色腐蝕土で，その下に灰色土や暗褐色土がみられるところがある)，暗茶褐色土層(奈良時代遺物包含層)，黄白(灰)色土層(弥生時代遺物包含層)の3層に分かれるが，黄白(灰)色土層や暗茶褐色土層は，その分布に偏在がみられる。第34図は，G区北側セクションの東西方向土層図である。

弥生時代遺物包含層である黄白(灰)色土層は，主に1～3区の南北方向に平均20cmほど堆積していたが，それより東側へはほとんど延びない。4区は後世の削平のためか，地山面の上はほぼ表土層となっている。

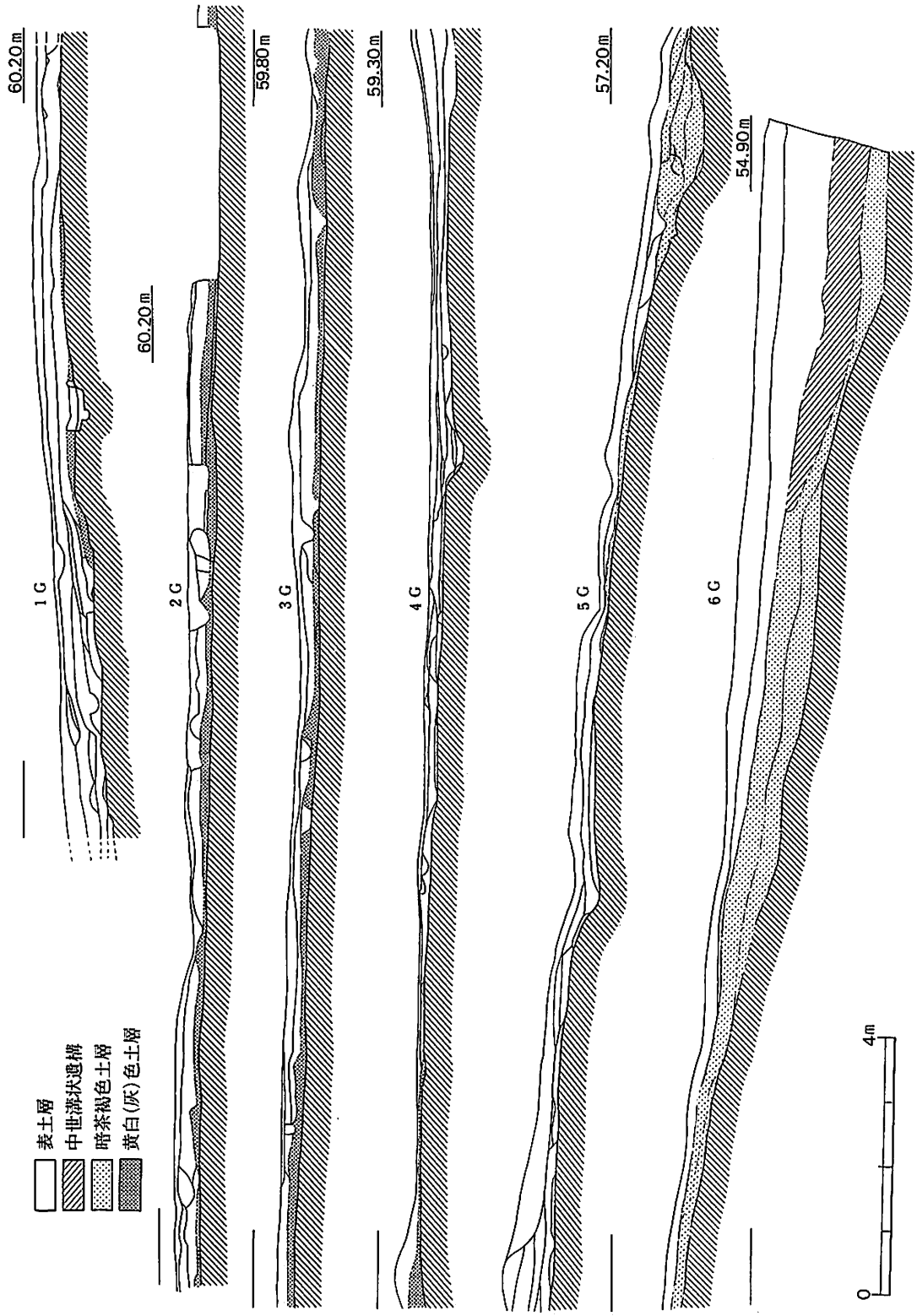
奈良時代遺物包含層である暗茶褐色土層は，主に5・6区の東側の緩傾斜面に分布し，厚いところでは50～70cmほど堆積していた。

旧地形は，削平を受けてはいるものの，現状の地形とほぼ変わりがなかったようである。第35図に，本遺跡の東西・南北の地形断面を示しておく。

畑ノ前遺跡は，今回の発掘調査の結果，主に弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代・中世にわたる複合遺跡であることが判明した(付図参照)。

各時代の遺構に関しては各章で詳しく述べるが，小さな土壙などに関しては，出土遺物がほとんどないものが多く，時期判定しえないものも多い。

弥生時代の遺構としては，竪穴住居址・不明遺構・土壙などが検出された。昭和59年度の試掘調査では土壙墓の存在も予測されていたが，本調査では確認することができなかった。竪穴

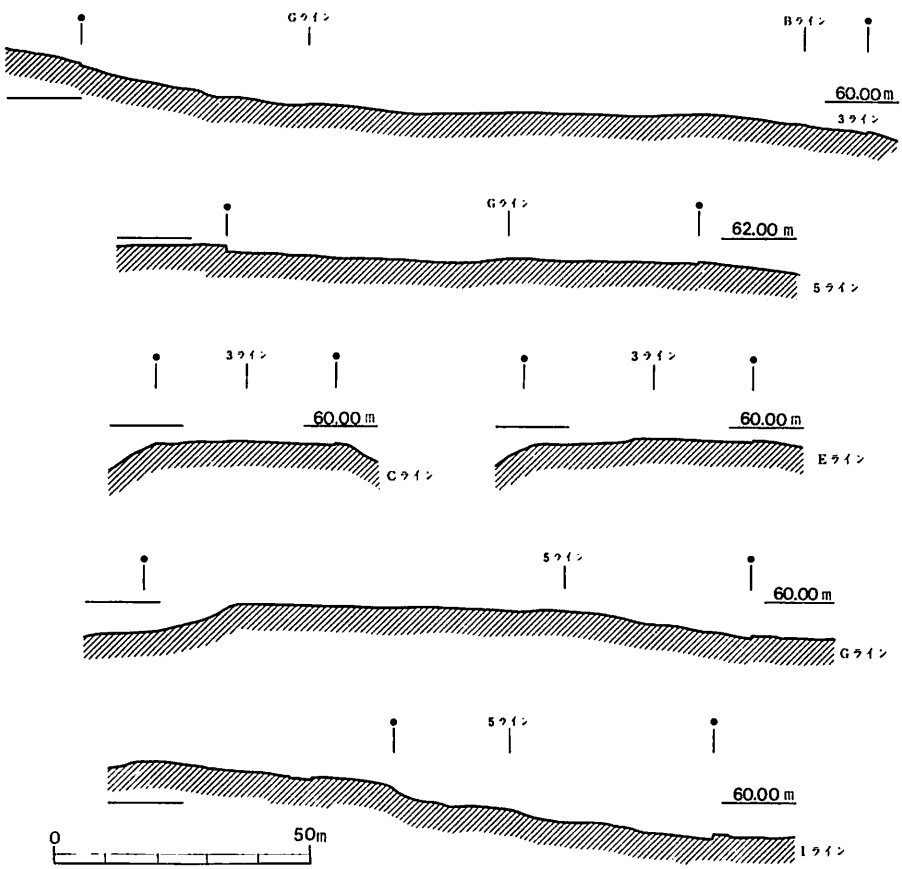


第34図　畑ノ前遺跡G区北側層位図(縮尺：1/100)

住居址は10棟検出されたが，総て甚だしく削平されていて，壁溝の一部と炉址を検出したのみである。また，性格不明の大きな土壙状遺構(不明遺構)も2ケ所で検出され，大小の土壙なども相当数検出された。弥生時代の遺構はこの台地全体にまんべんなく分布しているが，主に台地の舌状に張り出した所と，竪穴住居址をとりまく周囲に集中しているようであり，東側傾斜面にもこの時代の土壙が散発的に分布している。

古墳時代の遺構である古墳群は，奈良時代に入って削平されたようで，石室の石材が抜き取られたものがほとんどであった。東側傾斜面に7基の分布を認めた。当ニュータウン予定地内の古墳候補地が，試掘調査の結果，古墳ではなかったことを考え合わせてみると，予想だにしなかった所に分布していたことになる。

奈良時代の遺構としては，23棟にものぼる掘立柱建物群が検出され，一木刳り抜きの下部井戸側をもつ深さ7mにも及ぶ5H井戸1が検出されたことなどが，特筆すべきことである。掘立柱建物群は，台地のほぼ中央部に集中し，2時期にわたるものである。また，土馬を出土した3D溝1が北限を画すると考えられる。この時代の溝や土壙も相当数検出されているが，5F石組溝や古墳周濠を廃棄坑として利用したもの，瓦を四隅に立てた土壙などが特殊なものとし



第35図　畑ノ前遺跡地形断面図(縮尺：1/1,500)　●は発掘区域を示す

て挙げられよう。

以上の他に，側壁が焼けた土壙6基が検出され，また東側傾斜面の調査区域東端際近くで中世の溝状遺構などが検出された。新しいところでは，土管による排水施設を有する溜池状遺構などがみられる。

第２章　弥生時代の遺構と遺物

第１節　主要な遺構

弥生時代の遺構は，竪穴住居址(壁溝・炉址)・不明遺構・土壙などが検出された。以下，主なものについて個々にみていく(第36図)。

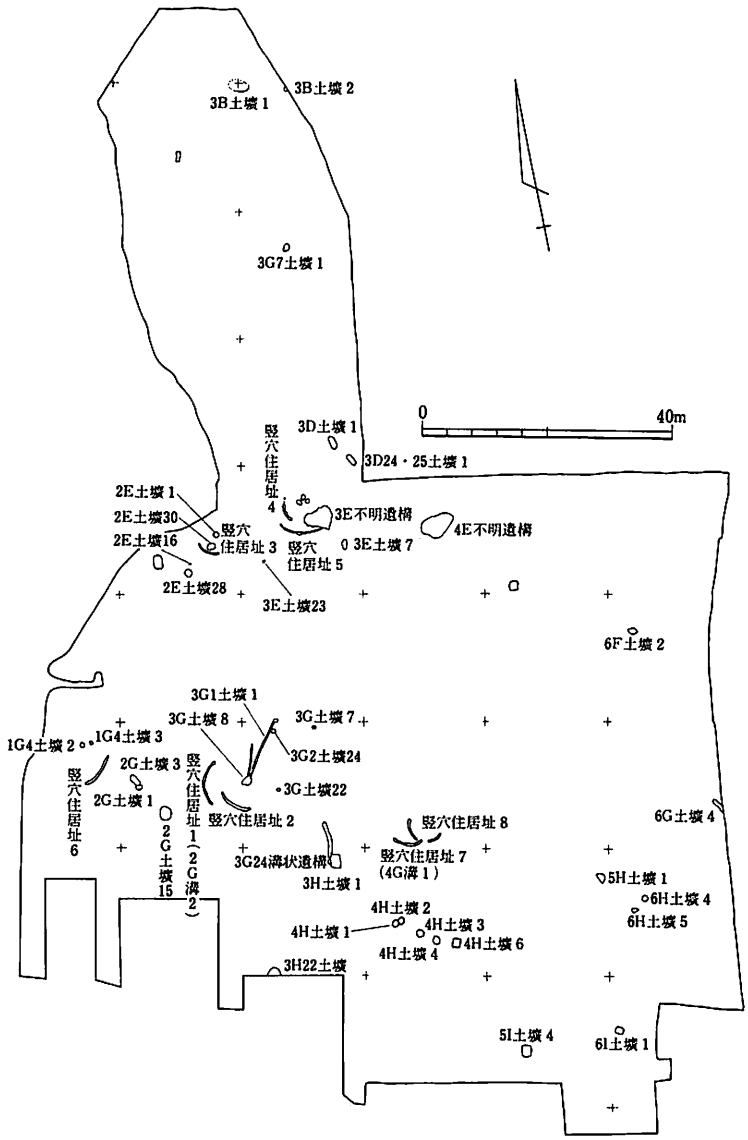
１．竪穴住居址

台地南辺(１～４Ｇ区)と台地北側張り出し部のやや南(２・３Ｅ区)で，壁溝を検出したもの８棟，炉址のみのもの２棟を確認した。しかし，Ｆ区や台地北側張り出し部では確認されなかった。このうち，壁溝と炉址を伴う竪穴住居址は４棟である。当遺跡に於ける竪穴住居址の総数は，竪穴住居址４で炉址２・炉址３を検出したことにより，計10棟と考えられる。

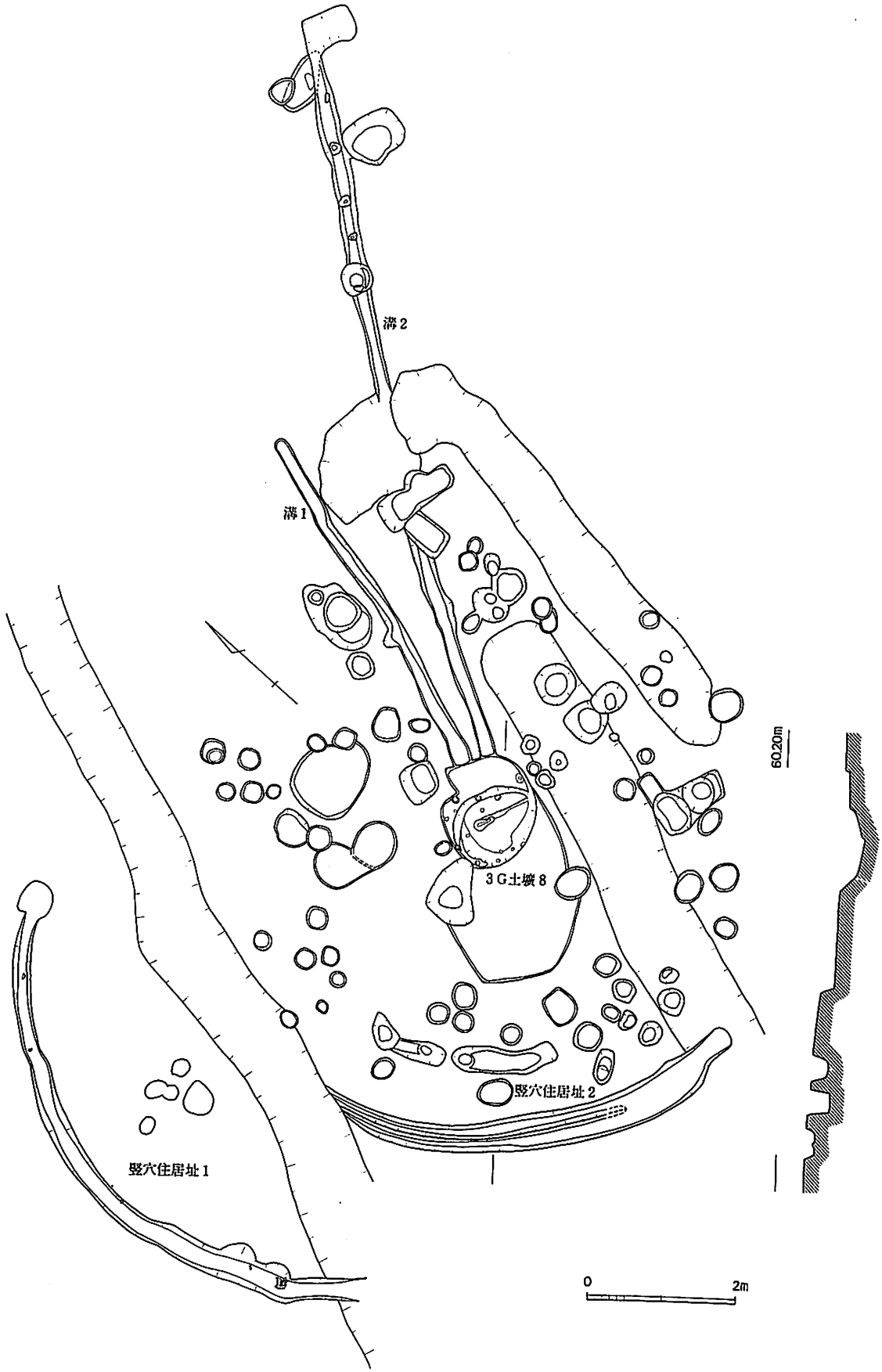
１)竪穴住居址１

(第37図，図版第11)

壁溝の一部(２Ｇ溝２)のみが検出された。規模は竪穴住居址２とほぼ同様であろう。壁溝からは弥生土器(第44図１～３)が検出された。



第36図　畑ノ前遺跡弥生時代主要遺構分布図(縮尺：1/1,200)



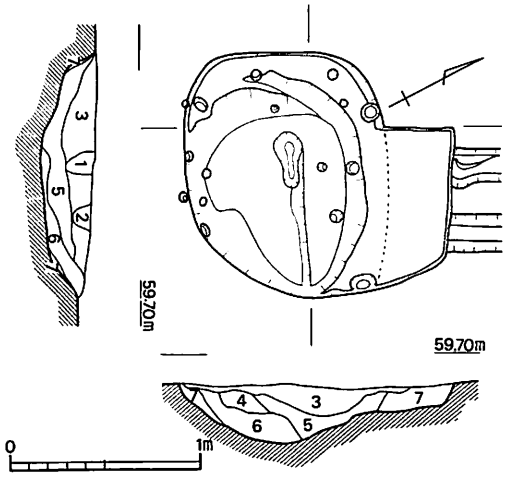
第37図　畑ノ前遺跡竪穴住居址1・2実測図(縮尺：1/80)

2）竪穴住居址2（第37・38図，図版第11）

壁溝は一部のみ検出された。後世の削平を受けている。直径は約8.8mを測り，平面プランは円形である。中央部には炉址を持つ。

炉址（3G土壙8，第38図）は，この竪穴住居址2に伴うものである。長径1.42m，短径1.32mを測る不整形の土壙である。内部からは弥生土器（第44図4）と石鏃（第56図9）が出土した。第3層からは炭化物・礫・細かい土器片が出土した。第4層も炭化物を多く含む。第3層には上部からの掘り込みが二つ検出された。土壙内の周縁部では小ピットが検出された。

また，炉址の北東端からは2本の浅い溝，溝1・溝2が延びる。溝1は約4.8m，溝2は約12mである。溝の機能は不明である。



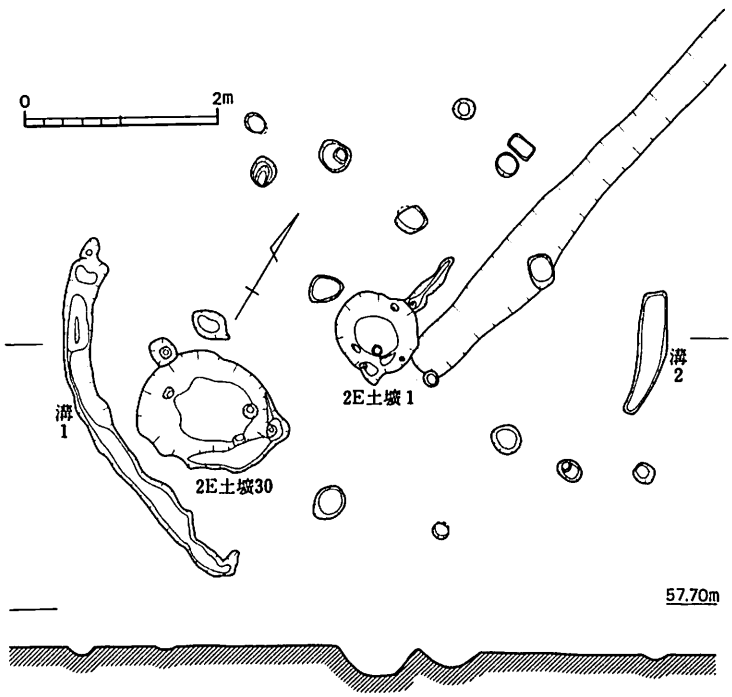
第38図　畑ノ前遺跡竪穴住居址2内炉址（3G土壙8）実測図（縮尺：1/40）
1：暗黄橙色土　2：灰茶色土　3：灰褐色土
4：暗黄色土　5：灰黒色土　6：灰茶色土
7：黄橙色土（地山）

3）竪穴住居址3（第39図，図版第12）

直径約6.36mを測る。平面プランは円形である。壁溝の一部である溝1・2が検出された。中央部に炉址を持つ。

炉址（2E土壙1）の最下層は，炭化物を多く含む灰黒色土である。炉址内では小ピットが検出された。炉址からは北方向に短い溝状遺構が延びる。

2E土壙30（第43図2）は，この竪穴住居址3に伴う。長径1.46m，短径1.26mを測り，やや楕円形に近く，埋土は1層である。内部からは弥生土器（第44図5～13）が一括して検出された。



第39図　畑ノ前遺跡竪穴住居址3実測図（縮尺1/80）

4）竪穴住居址 4（第40図，図版第13）

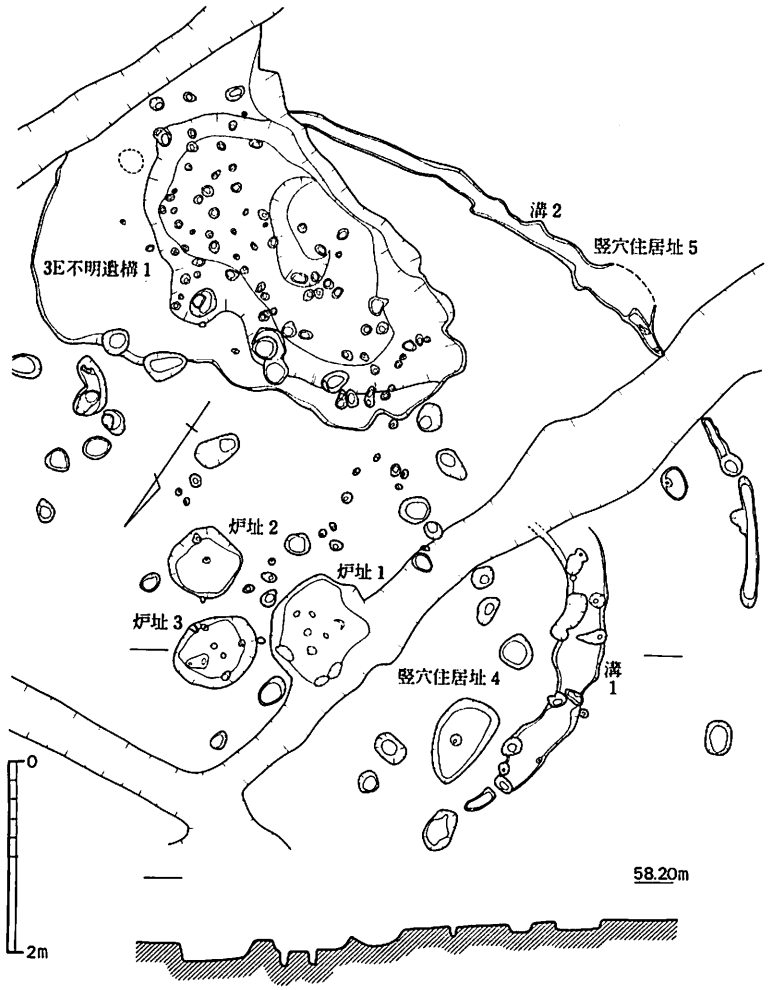
壁溝の一部である溝１のみが検出された。後世の削平を受けている。直径は約６ｍを測り，平面プランは円形である。壁溝内からは杭痕と思われる小ピットが検出された。中央部では炉址が３基検出された。平面プランから炉址１は溝１に伴うものと考えられる。炉址２・炉址３に伴う壁溝は検出できなかった。それぞれの炉址の埋土は１層で炭化物を多く含む灰黒色土であった。３基とも底から小ピットが検出された。炉址が３基あることから３回にわたって建て直しが行われたと思われる。

5）竪穴住居址 5（第40図）

壁溝のみが検出された。３Ｅ不明遺構１によって切られている。出土遺物はなかった。

6）竪穴住居址 6

壁溝の一部のみが検出された。直径は約8mを測る。



第40図　畑ノ前遺跡竪穴住居址４・５実測図（縮尺：1/80）

１Ｇ土壙３（図版第17上）はこの竪穴住居址６に伴うと思われる。平面プランは，一辺が約60cmを測る隅丸方形を呈す。深さは約25cmである。埋土は３層に分かれ，上層から壺形土器（第51図３）が出土した。

この壺形土器は第II様式に属するので，竪穴住居址６はその時期に比定される。

7）竪穴住居址 7

壁溝の一部（４Ｇ溝１）のみが検出された。直径は6m前後を測るものと思われる。壁溝内からは石鏃（第56図10）が出土した。

8）竪穴住居址 8

壁溝の一部のみが検出された。竪穴住居址

7と同規模と思われる。遺物は出土しなかった。竪穴住居址7により壁溝が切られている。切り合い関係から見て竪穴住居址8が先に営まれたのであろう。

2．不明遺構

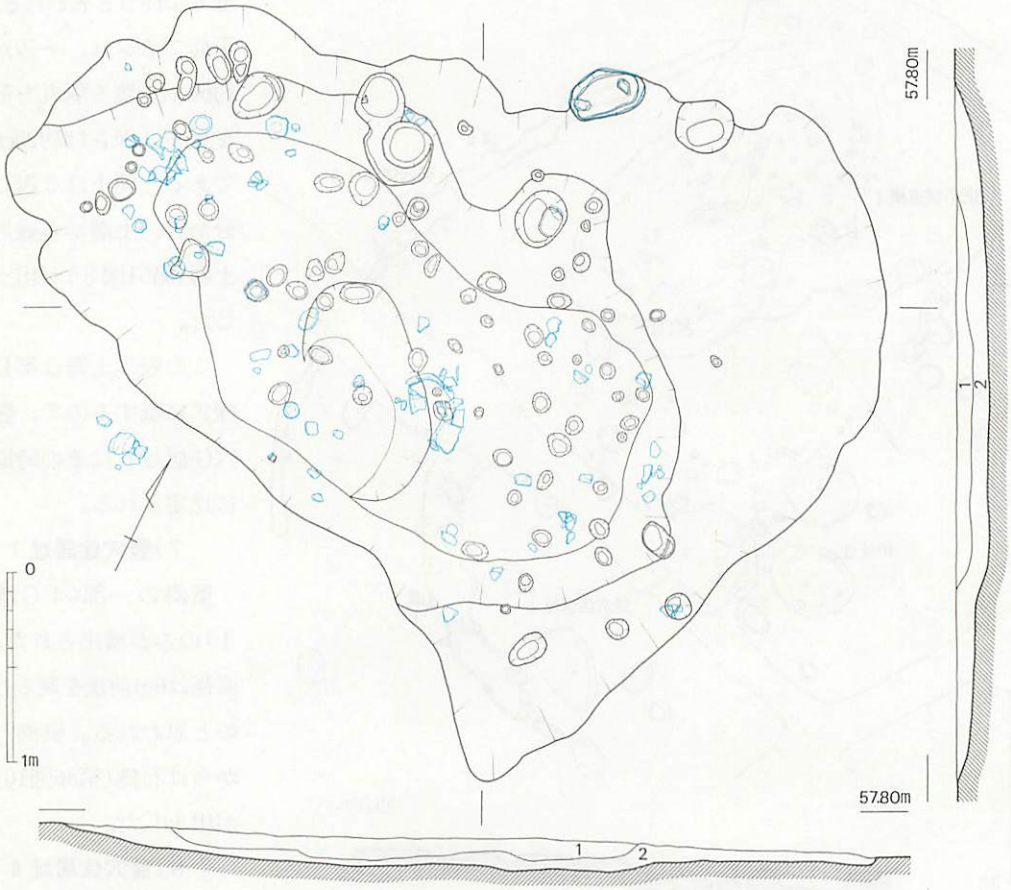
不明遺構は台地中央部の3E・4E区で計2基検出された。

1）3E不明遺構1（第41図，図版第15・16）

長径4.76m，短径2.40mを測る不整形の土壙である。深さは18cmを測る。埋土は2層に分かれ，各層から弥生土器（第45図1～10）・石鏃（第56図6）・スクレイパー未製品が出土した。未製品が出土したことにより，当遺構が石器製作に関っていた可能性がある。底からは多数の小ピットが検出された。また，この遺構の西隅から，長さ15cmの棒状粘板岩が直立した状況で出土した。この遺構の機能は不明である。

2）4E不明遺構1（第42図，図版第14下）

長径5.77m，短径3.56mを測る不整形な土壙である。深さは26cmを測る。埋土は2層に分かれる。各層からは弥生土器（第45図11～16）・石鏃（第56図12）が出土した。底からはピットが検出

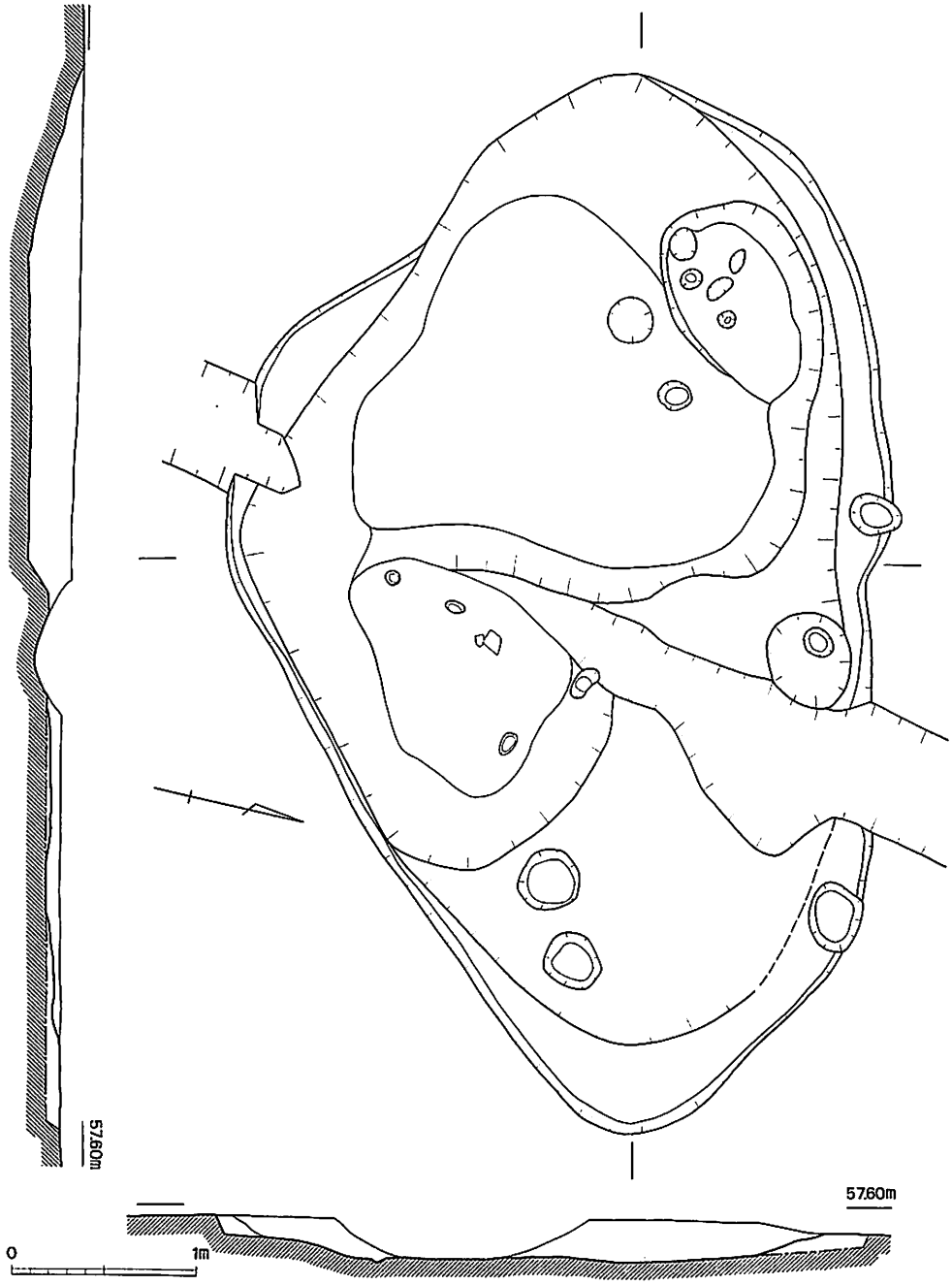


第41図　畑ノ前遺跡3E不明遺構1実測図（縮尺：1/80）　1：黒褐色土，2：暗褐色土

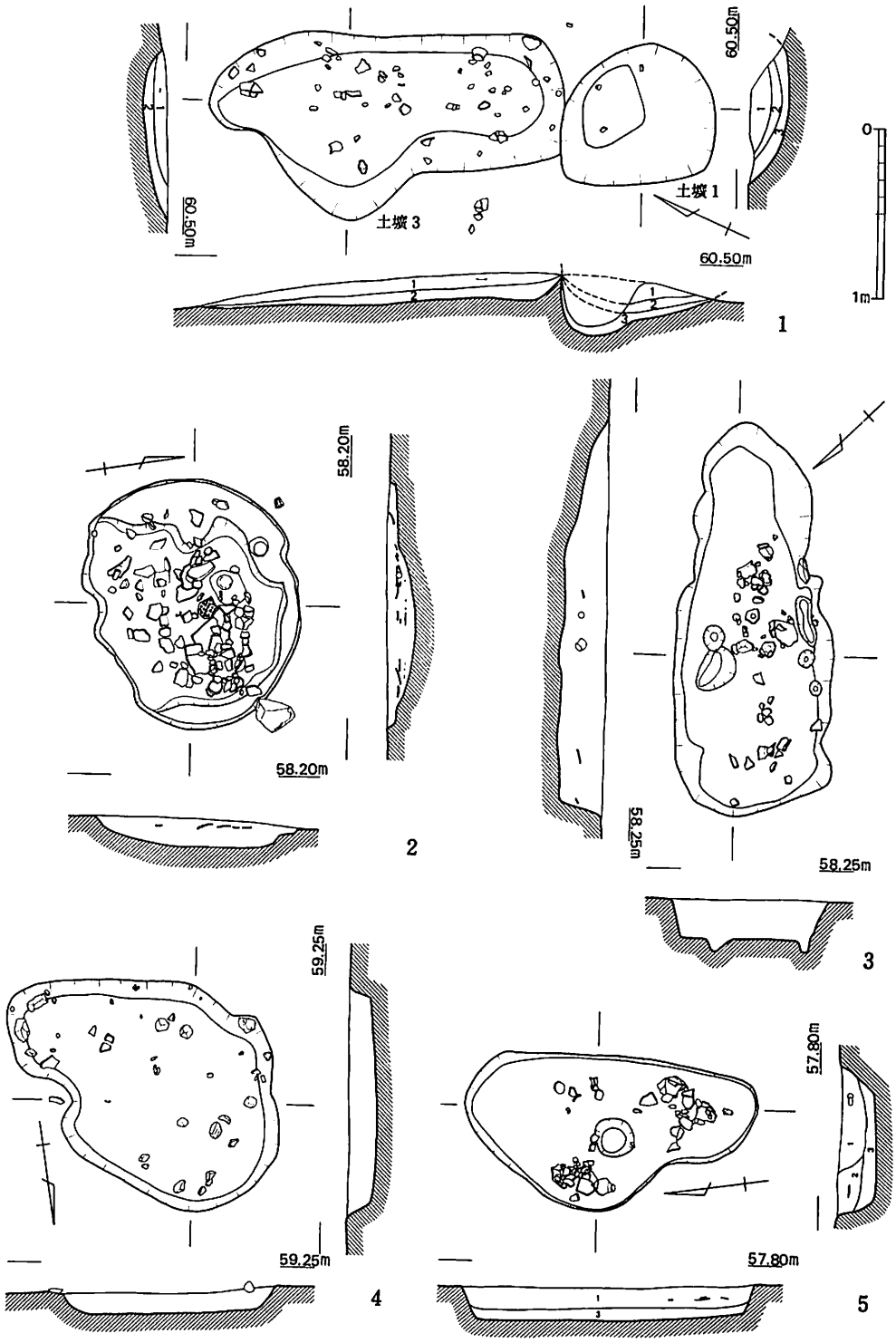
された。しかし，３Ｅ不明遺構１のように小規模なピットは検出されなかった。３Ｅ不明遺構１と同様にこの遺構の機能は不明である。

３．土壙

台地周辺部や東側斜面で数十基検出された。この内のいくつかについて説明しておく。



第42図　畑ノ前遺跡４Ｅ不明遺構１実測図(縮尺：1/80)



第43図　畑ノ前遺跡弥生時代土壙実測図(縮尺：1/40)

1：2G土壙1・3（<土壙1> 1：明黄褐色土，2：灰黒色土，3：明黄褐色土　<土壙3> 1：黄褐色土，2：明黄褐色土）　2：2E土壙30　3：3D24・25土壙1　4：4H土壙4　5：3E土壙7（1：明黄褐色粘質土，2：黄褐色粘質土，3：黄褐色土）

1）2 G土壙1・3（第43図1）

土壙1は長径1.00m，短形0.82mを測る隅丸方形の土壙である。後世の削平を受けているが，深さは35cmを測る。埋土は3層に分かれる。第2層は炭化物を含む焼土層である。第3層は地山のものと思われる礫を多く含んでいる。各層からは少量の弥生土器を出土したが，実測に堪えられるものはなかった。

土壙3は長径2.08m，短径0.80mを測る不整形な土壙である。土壙1と同様に後世の削平を受けているが，深さは16cmを測る。埋土は2層に分かれる。第1層からは弥生土器（第46図1～4）が出土した。第2層は礫を多く含み，弥生土器は少ない。

2）3 D24・25土壙1（第43図3，図版第17下）

長径2.29m，短径0.64mを測る楕円形の土壙である。深さは27cmを測る。底からは小ピットが検出された。埋土は黄褐色土の1層である。埋土中からは弥生土器（第46図11～15）が出土した。

3）3 E土壙7（第43図5，図版第18上）

長径1.71m，短径0.90mを測る不整形な土壙である。深さは22cmを測る。埋土は3層に分かれ，第3層は炭化物を含んでいる。各層からは弥生土器（第46図5～10）・スクレイパー（第61図7）が出土した。第3層出土土器の直下からは炭化物が検出された。

4）4 H土壙4（第43図4，図版第18下）

長径1.78m，短径1.15mを測る不整形な土壙である。後世に削平を受けていると思われ，深さは11cmを測る。埋土は礫を多く含む褐色土の1層である。埋土中からは弥生土器（第46図16）・太型蛤刃石斧（第70図2）が出土した。

第2節　遺　　物

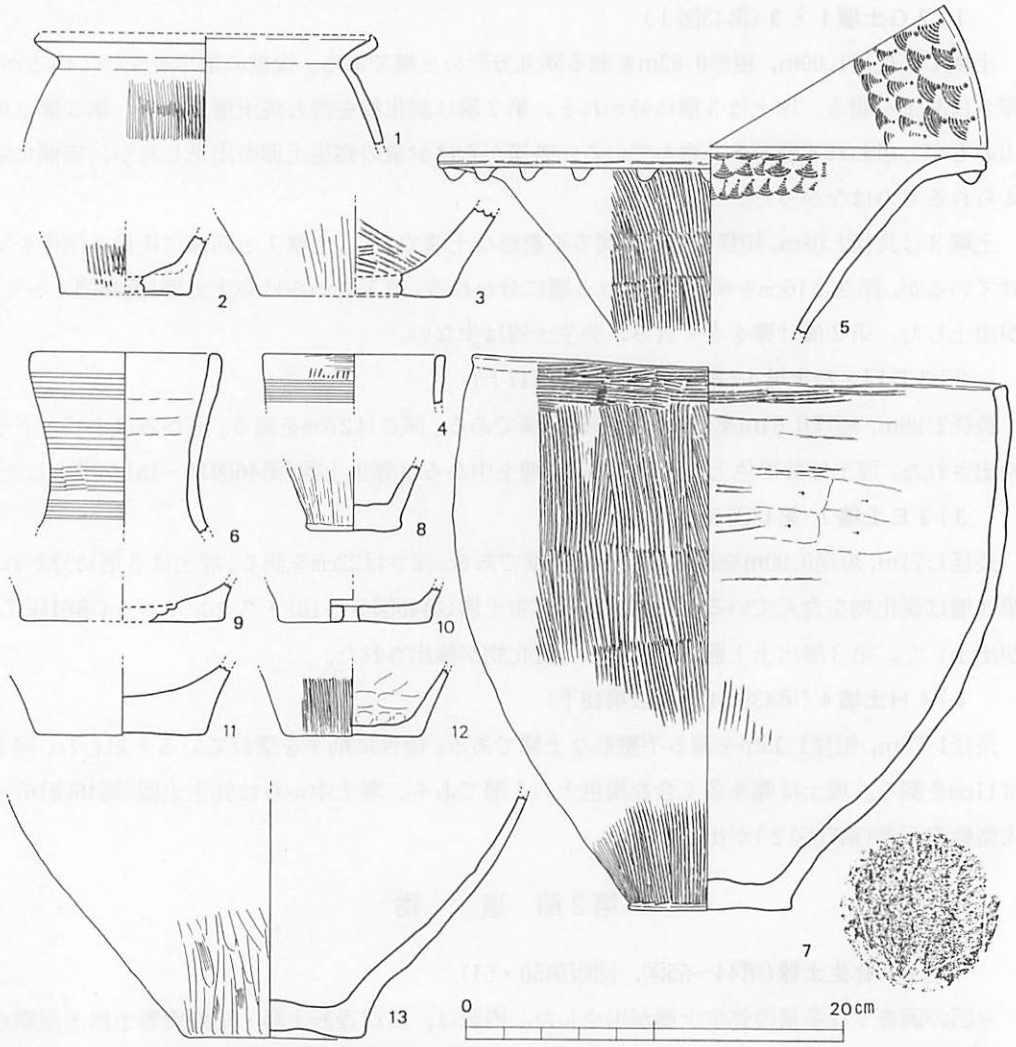
1．弥生土器（第44～55図，図版第50・51）

今回の調査では多量の弥生土器が出土した。内訳は，広口壺形土器・細頸壺形土器・無頸壺形土器・壺用蓋形土器・鉢形土器・高杯形土器・甕形土器・甕用蓋形土器などである。大半は在地産と思われる。しかし，近江系・東海系・摂津系・生駒西麓産などの他地域からの搬入品も存在する。特に，近江系が多いのが目立つ。台地上からの出土のため遺存状況はあまり良くないが，南山城の弥生土器の様相を知るうえで良好な資料となろう。以下，個々に述べていく。

1）竪穴住居址出土土器

竪穴住居址1壁溝（2 G溝2）出土土器（第44図1～3）　1は甕形土器（以下，"形土器"は省略）である。口縁端部を僅かにつまみあげる。頸部はヨコナデにより浅い凹みを呈する。形態・調整より第III様式古段階に属する。2・3は底部である。2は外面にハケを施す。3は外面にヘラミガキ，内面にハケを施す。竪穴住居址1の時期は，出土遺物は少ないが，1の甕より第III様式古段階と考えておきたい。

竪穴住居址2内炉址（3 G土壙8）出土土器（第44図4）　細頸壺である。外面にはハケを施した後，8条の櫛描直線文を巡らす。口縁端部はヨコナデを行う。

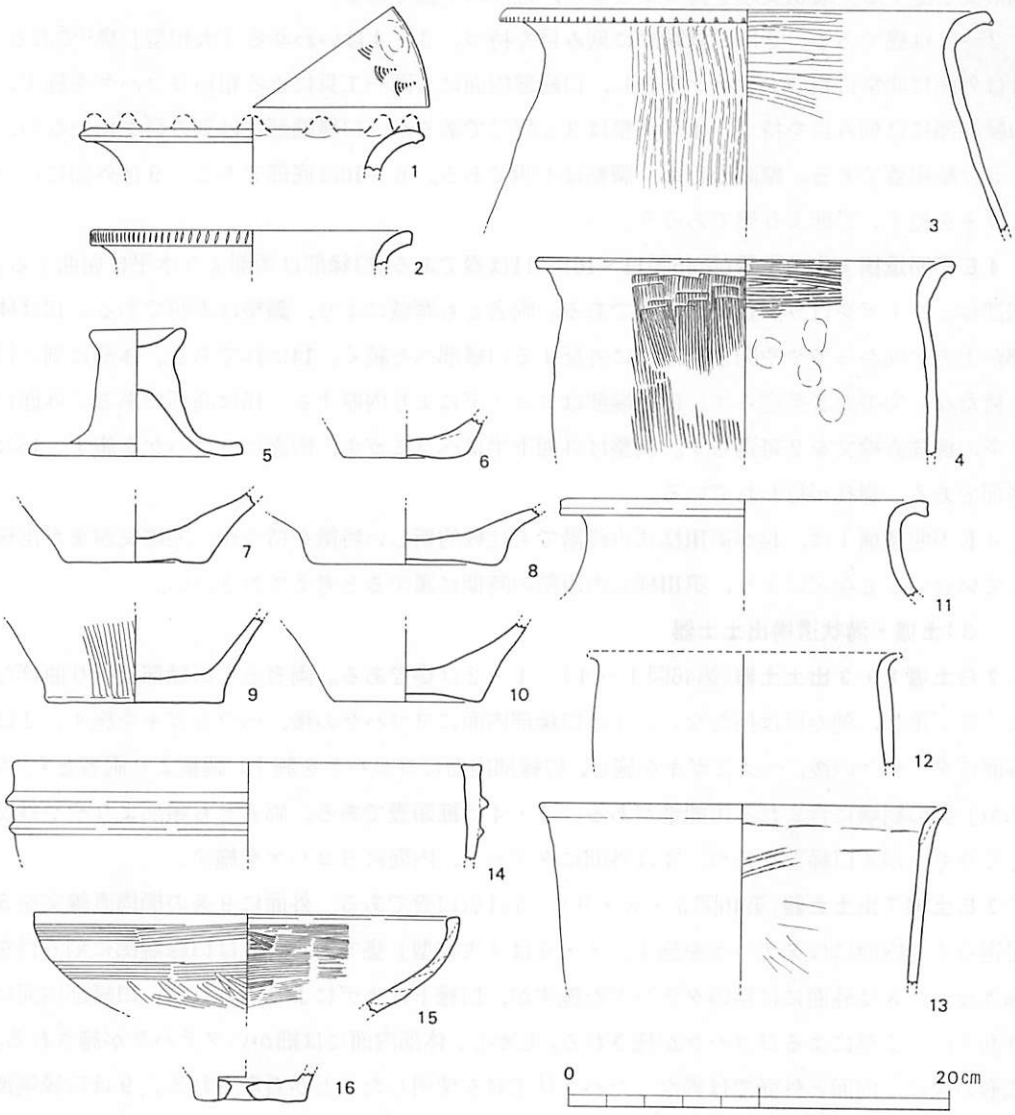


第44図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(1)（縮尺：1/4）

竪穴住居址3内土壙（2Ｅ土壙30）出土土器（第44図5～13，第55図1）　第44図5は広口壺である。外面には粗いハケを施す。口縁部内面には4列の扇形文を配する。口縁部直下に瘤状突起を有することから，近江系土器の影響を受けた可能性がある。形態・調整より第II様式に属する。6は細頸壺である。外面には6条の櫛描直線文が4帯巡る。

第44図7は直口椀状の大型鉢である。体部外面に非常に粗いタテハケを施した後，口縁部にはヨコハケを施す。内面は体部下半にタテハケ，上半にヨコハケを施すが，ヨコナデにより消される。中程には板ナデを行う。底面には木葉痕が看取される。

第44図8～13は底部である。8は外面に板ナデを行う。10には穿孔が見られる。12は外面にタテハケを施す。形態より甕と思われる。13は外面にハケを施した後，ヘラミガキを行う。形態・調整より壺であろう。また，第55図1は櫛描直線文を持つ壺の破片である。



第45図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(2)　(縮尺1/4)

竪穴住居址３の時期は，細頸壺や直口椀状の大型鉢が存在することから，第II様式新段階の時期に比定される。

竪穴住居址６内土壙(１Ｇ土壙３)出土土器(第51図３)　体部外面下半にヘラミガキを施した後，上半に10条の櫛描直線文を８帯巡らす壺である。口縁端部はヨコナデにより下に拡張する。内面下半にはヨコハケを施し，頸部付近はナデを行う。形態より第II様式に属する。

竪穴住居址６は，この壺より第II様式の時期に比定される。

２)不明遺構出土土器

３Ｅ不明遺構１出土土器(第45図１～10)　１は広口壺である。口縁部内面に瘤状突起を持ち，

扇形文を配する。瘤状突起を持つことより，近江系土器である。

2～4は甕である。2は口縁端部に刻み目を持つ。3・4はいわゆる「大和型」甕[1]である。3は外面に非常に粗いタテハケを施し，口縁部内面にも同一工具による粗いヨコハケを施す。口縁端部には刻み目を持つ。4も調整は3と同じであるが，口縁端部には刻み目を持たない。

5は甕用蓋である。摩滅のため，調整は不明である。6～10は底部である。9は外面にヘラミガキを施す。形態より甕であろう。

4 E不明遺構1出土土器(第45図11～16)　11は壺である。口縁部は頸部より水平に屈曲する。端部はヨコナデを行う。12・13は甕である。両者とも摩滅により，調整は不明である。13は体部が上方に向かってやや開き，僅かに外反する口縁部へと続く。14は鉢である。体部に刻み目を持たない突帯を2条巡らす。口縁端部はヨコナデにより内厚する。15は高杯である。外面に6条の櫛描直線文を2帯巡らす。調整は外面下半にヘラミガキ，内面にヨコハケを施す。16は底部である。穿孔が行われている。

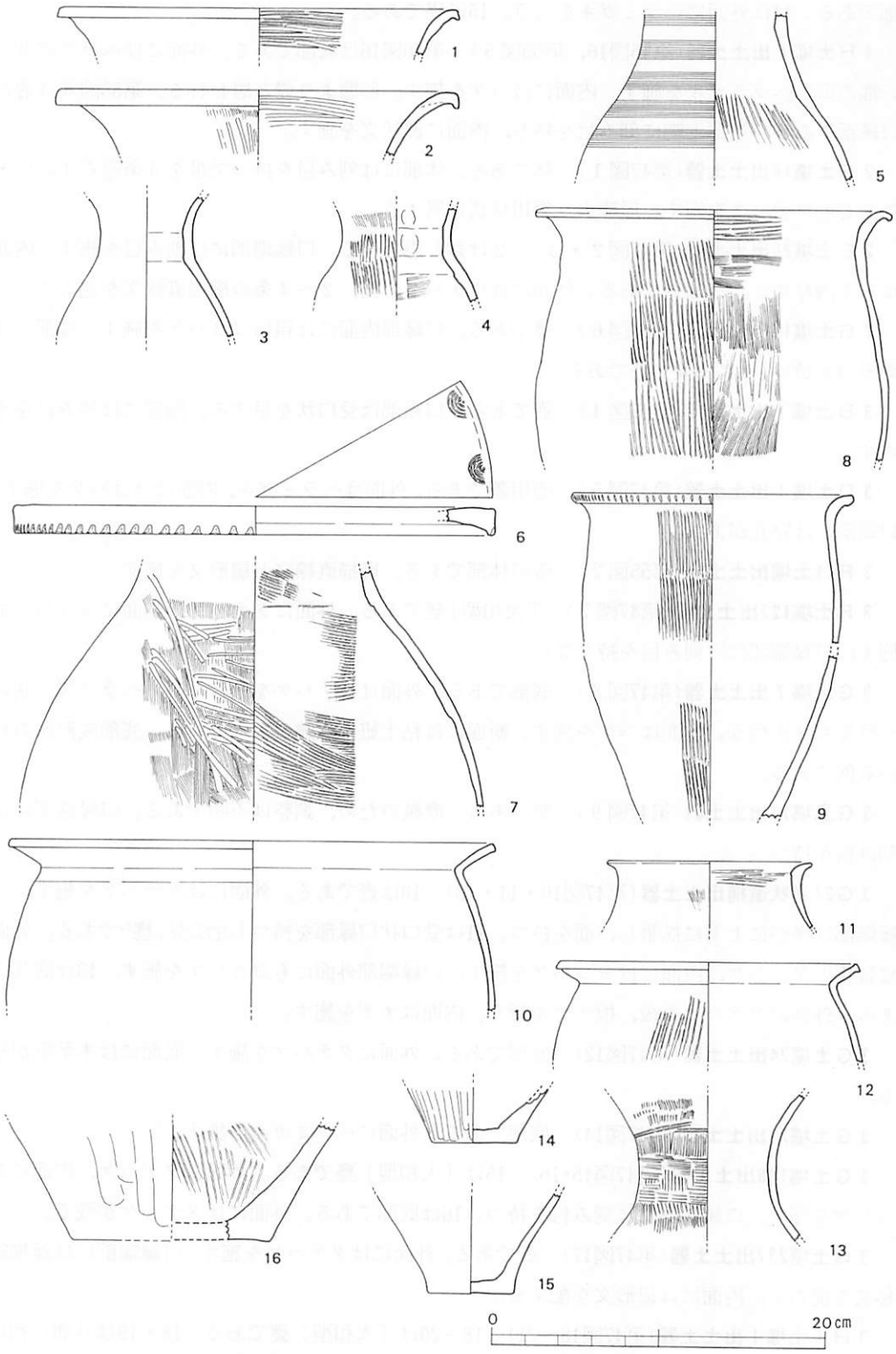
4 E不明遺構1は，14が第III様式古段階でも比較的新しい特徴を持つが，凹線文がまだ出現していないことなどにより，第III様式古段階の時期に属すると考えておきたい。

3)土壙・溝状遺構出土土器

2 G土壙1・3出土土器(第46図1～4)　1・2は甕である。両者とも口縁部は折り曲げたように下垂し，刻み目は持たない。1は口縁部内面にヨコハケの後，ヘラミガキを施す。2は外面にタテハケの後，ヘラミガキを施し，口縁部内面にヨコハケを施す。調整より両者とも「大和型」甕の範疇に含まれる可能性がある。3・4は細頸壺である。両者とも頸部よりやや外反して立ち上がる口縁部を持つ。4は外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。

3 E土壙7出土土器(第46図5・8・9)　5は広口壺である。外面に9条の櫛描直線文を5帯巡らす。内面にはタテハケを施す。8・9は「大和型」甕である。8は口縁端部に刻み目を施さない。8は外面には粗いタテハケを施すが，口縁下はナデにより消される。口縁部内面は外面と同一工具によるヨコハケが施される。しかし，体部内面には細かいタテハケが施される。成形の際に，内面と外面では異なったハケ状工具を使用したことが看取される。9は口縁端部に刻み目を持つ。外面にはタテハケを施す。内面にもヨコハケが施されていたと思われるが，ナデにより消されている。

3 D24・25土壙1出土土器(第46図6・7・10～15)　6は口縁部内面に扇形文を配し，端部には刻み目を持つ。7は外面にタテハケを施した後，ヘラミガキを行う。内面はやや粗いヨコハケを施す。10は口縁下に第44図1と同様にヨコナデによる浅い凹みが看取される。端部はまだ上下に拡張されていない。これらのことより第III様式古段階に属する。11・12は甕である。11は外面に僅かにタテハケが残り，内面にはヨコハケを施す。調整より「大和型」甕に含まれる可能性がある。12は外面にタテハケを施す。口縁端部には面を持つ。形態より第III様式古段階に属する。13は壺である。摩滅のため文様・調整は著しく不明確である。外面はタテハケの後，同一工具による短い直線文を巡らす。文様・調整より近江系土器と思われる。14・15は底



第46図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(3)（縮尺：1/4）

部である。14は外面にヘラミガキを行う。15は甕である。

4Ｈ土壙4出土土器(第46図16，第55図５)　第46図16は底部である。外面にはヘラケズリ状の幅の広いヘラミガキを施す。内面にはハケを施す。形態より壺と思われる。第55図５は壺の口縁部である。端部上端に刻み目を持ち，内面に波状文を施す。

2Ｅ土壙16出土土器(第47図１)　鉢である。体部には刻み目を持つ突帯を３条巡らす。内・外面ともタテハケを施す。形態より第III様式に属する。

2Ｅ土壙28出土土器(第47図２・３)　２は鉢と思われる。口縁端部には刻み目を施す。内面は若干内厚する。３は壺である。外面にはタテハケの後，２～４条の櫛描直線文を巡らす。

2Ｇ土壙15出土土器(第47図６)　甕である。口縁部内面には粗いヨコハケを施す。端部には刻み目を持つ。「大和型」甕であろう。

3Ｂ土壙1出土土器(第47図４)　壺である。口縁部は受口状を呈する。端部には刻み目を巡らす。

3Ｄ土壙1出土土器(第47図５)　壺用蓋である。外面はヘラミガキ，内面はヨコハケを施す。口縁部には穿孔がある。

3Ｆ11土壙出土土器(第55図２)　壺の体部である。櫛描直線文と扇形文を施す。

3Ｆ土壙122出土土器(第47図７)　「大和型」甕である。外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。口縁端部には刻み目を持たない。

3Ｇ土壙7出土土器(第47図８)　底部である。外面はタテハケを施した後，ヘラケズリ状のヘラミガキを行う。内面はハケを施す。断面には粘土紐の痕跡が残っている。底部成形法のわかる例である。

3Ｇ土壙17出土土器(第47図９)　甕である。摩滅のため，調整は不明である。口縁端部には刻み目を持つ。

3Ｇ24溝状遺構出土土器(第47図10・11・13)　10は壺である。外面にはタテハケを施す。口縁端部は僅かに上下に拡張し，面を持つ。11は受口状口縁部を持つ「近江型」甕[2)]である。外面には粗いタテハケ，内面にはヨコハケを施す。口縁端部外面にもヨコハケを施す。13は底部である。外面にタテハケの後，板ナデを行う。内面はナデを施す。

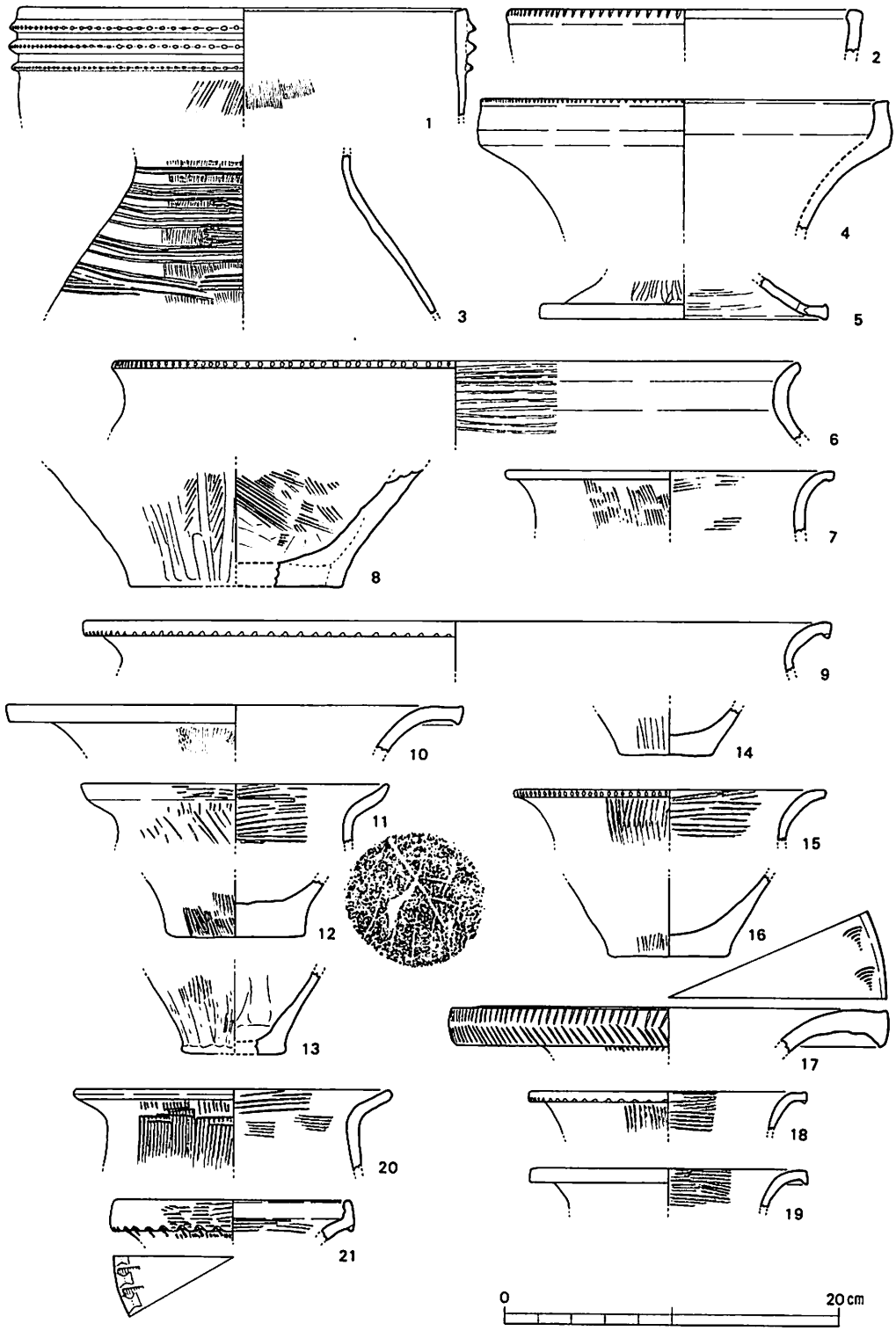
3Ｇ土壙24出土土器(第47図12)　底部である。外面にタテハケを施す。底面には木葉痕が残る。

3Ｇ土壙22出土土器(第47図14)　底部である。外面にヘラミガキを施す。

3Ｇ土壙148出土土器(第47図15・16)　15は「大和型」甕である。外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。口縁端部には刻み目を持つ。16は底部である。外面にはタテハケが残る。

3Ｇ土壙237出土土器(第47図17)　壺である。外面にはタテハケを施す。口縁端部には篦描綾杉文を巡らす。内面には扇形文を配する。

3Ｈ4土壙1出土土器(第47図18～21)　18～20は「大和型」甕である。18・19は外面に粗いタテハケを施し，18・19・20は内面にもヨコハケを施す。18は口縁端部に刻み目を持つ。21は



第47図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(4)（縮尺：1/4）

壺である。口縁部は受口状を呈し，下方にも粘土を貼り付けて拡張し，ハケ状工具による刻み目を施す。外面はタテハケ，内面はヨコハケを施す。口縁部外面にもヨコハケを施す。

3 H22土壙1 出土土器(第48図1～4，第55図3・4)　第48図1は鉢と思われる。外面にヘラミガキを施す。口縁端部は内外に若干突出する。類例は田能遺跡[3]にある。2は壺用蓋である。中央部につまみ状の突起が付く。第II様式に属する。3・4は底部である。4は内面にハケを施す。第55図3・4は壺の体部である。9条の櫛描直線文下に斜格子文を施す。両者は同一個体である。

4 G 5 土壙8 出土土器(第48図5・6)　5は壺である。長く伸びる頸部と，外反して水平に開く口縁部を持つ。調整は摩滅のため，不明である。形態より第II様式に属する。6は底部である。形態より甕と思われる。

4 H土壙3 出土土器(第48図7)　甕用蓋である。摩滅が激しい。

5 H土壙1 出土土器(第48図8～11)　8は広口壺である。摩滅のため，調整は不明である。9～11は甕である。9は外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。「大和型」甕である。10は摩滅している。11は外面に粗いハケを施す。近江系の土器であろう。

5 H土壙4 出土土器(第48図12，第55図6～9)　第48図12は底部である。形態より壺であろう。第55図6～9は壺の体部である。外面に斜格子文・直線文・波状文を施している。同一個体である。

6 F土壙2 出土土器(第48図13～15)　13は壺である。口縁端部にはヨコナデを施す。14・15は甕である。14は外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。「大和型」甕である。15は非常に器壁が厚く，胎土も粗い砂粒を多く含んでいる。外面には煤が付着している。内面は板ナデを行っている。

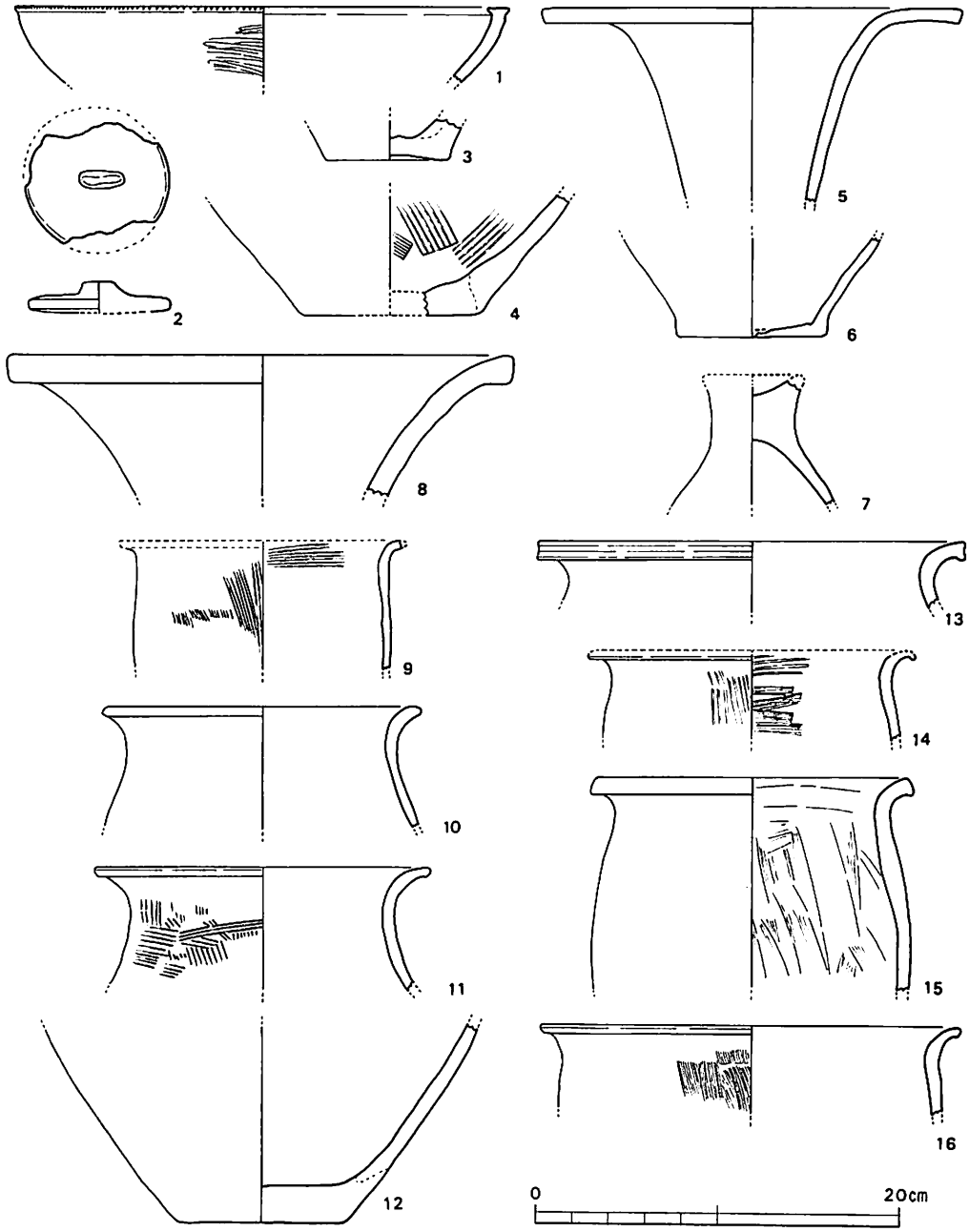
6 G土壙4 出土土器(第48図16)　「大和型」甕である。外面に粗いタテハケを施す。口縁端部には刻み目を持たない。

6 H土壙5 出土土器(第49図1～4，第55図10・11)　第49図1・2は壺である。外面には粗いタテハケを施す。1は口縁部内面にもヨコハケが看取される。2は底部に穿孔している。両者は同一個体である。第49図3・4は底部である。形態より壺であろう。第55図10・11は壺である。10は波状文と斜格子文，11は直線文と波状文を施す。

6 I 土壙1 出土土器(第49図5～9)　5は広く張った体部から口縁端部が短く外反する壺である。摩滅により，調整は不明である。6は近江系土器である。外面には粗いタテハケの後，6＋α条の櫛描直線文が巡る。内面にもヨコハケを施す。口縁部外面にも同一工具により斜めにハケを施す。端部には刻み目を持つ。7・8・9は底部である。8は内面にヨコハケを施す。

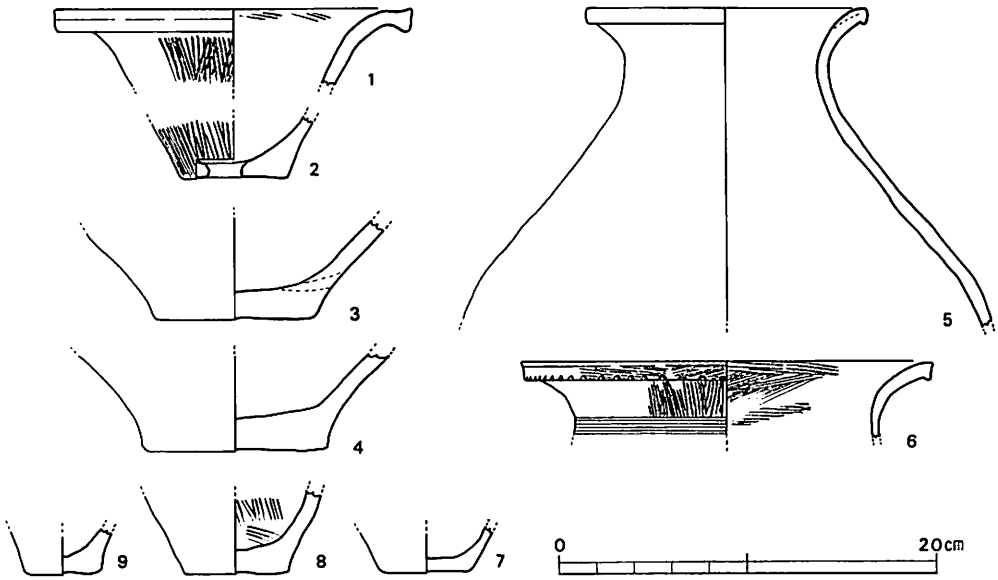
4)包含層出土土器

南拡張区斜面弥生包含層出土土器(第50図1～18)　2～9・16・17は壺である。2は外面にタテハケの後，6条の櫛描直線文を3帯巡らす。口縁端部は粘土を折り返して成形する。4は伊勢湾系土器[4]であろう。受口状の口縁部を持つ。外面は粗いタテハケの後，同一工具による短



第48図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(5)　(縮尺：1/4)

い直線文が施される。口縁部外面にも同一工具による右から左への刺突文が巡る。内面には粗いヨコハケを行う。5は口縁部にヘラ状工具による斜格子文が巡る。6は外面に6条の櫛描直線文を施す。7は頸部に8条の櫛描直線文が巡る。文様帯間にはヘラミガキが看取される。9は受口状口縁部を持つ。頸部および口縁部外面に10条の櫛描直線文が巡る。16は口縁部内面に



第49図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(6)（縮尺：1/4）

扇形文を配する。17は口縁端部が下に拡張し，そこに刻み目を持つ。10は無頸壺である。口縁端部はヨコナデにより若干内厚する。口縁部直下に一孔を穿つ。

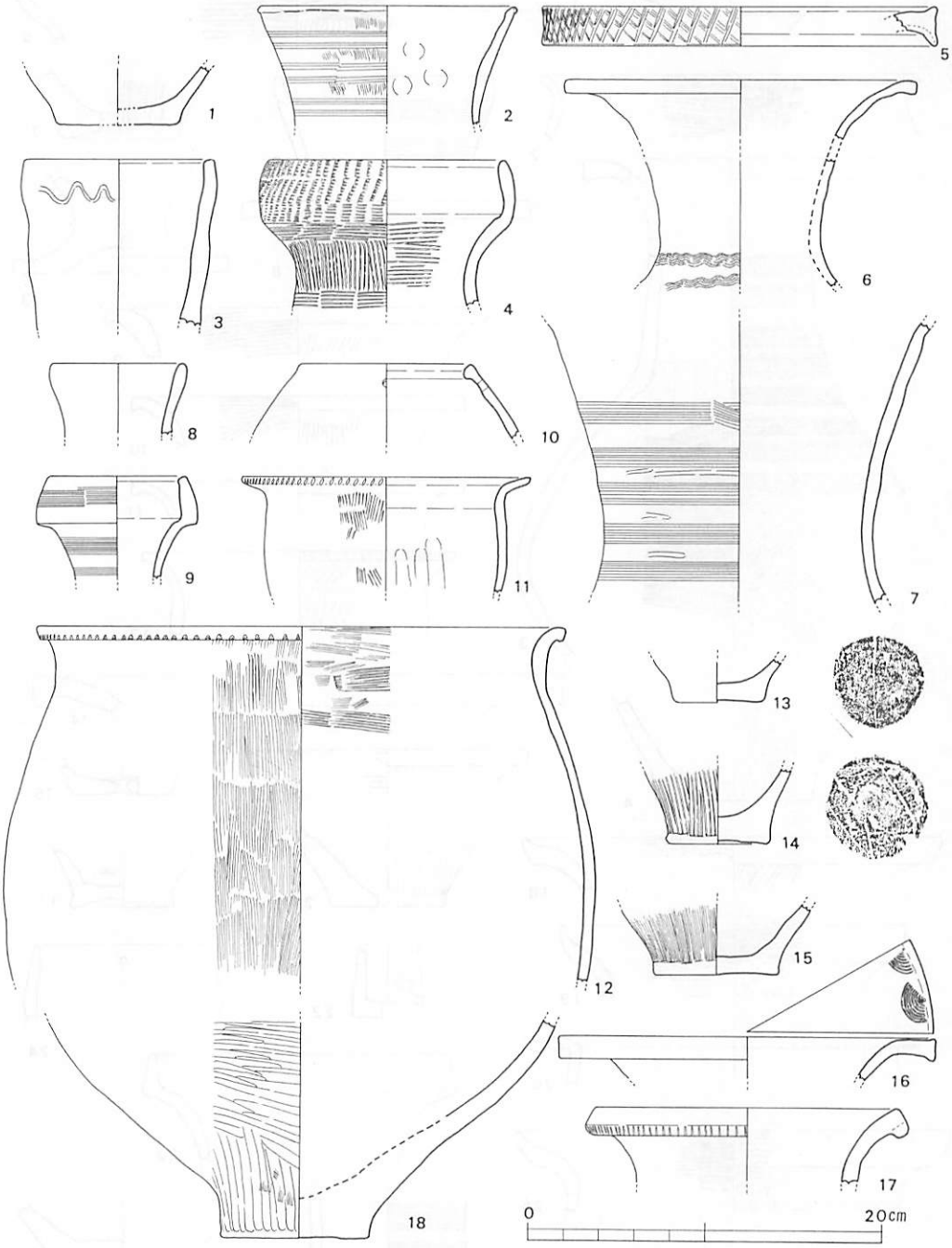
11・12は甕である。11は外面にタテハケを施す。口縁部は体部より屈曲して斜め上方に伸びる。端部には刻み目を持つ。12は「大和型」甕である。外面にタテハケ，内面にもヨコハケを施す。口縁端部には刻み目をもつ。

1・13～15・18は底部である。14・15は外面にヘラミガキを行う。形態より壺であろう。

黄灰色土層出土土器(第51図1・2・4～17，第55図17～19)　第51図1・6・8・14は壺である。1は受口状の口縁部を持ち，下端に粘土を貼り付けて拡張する。6は外面に7条の櫛描直線文を2帯巡らす。8は生駒西麓産の胎土を持つ。14は摩滅のため，調整は不明である。2・9・10は「大和型」甕である。外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。口縁端部には刻み目を持たない。5は「近江型」甕である。外面にタテハケ，内面にはハケ状工具による波状文を施す。口縁部外面にも同一工具によるハケを施す。11は摩滅のため，調整は不明である。12は外面にタテハケを施す。口縁端部には刻み目を持つ。15は外面に粗いタテハケ，内面にヨコハケを施す。口縁部がやや受口状を呈することより，「近江型」甕の可能性がある。13は脚部である。外面には僅かにヘラミガキが看取される。中実であることより，第II様式に属する。

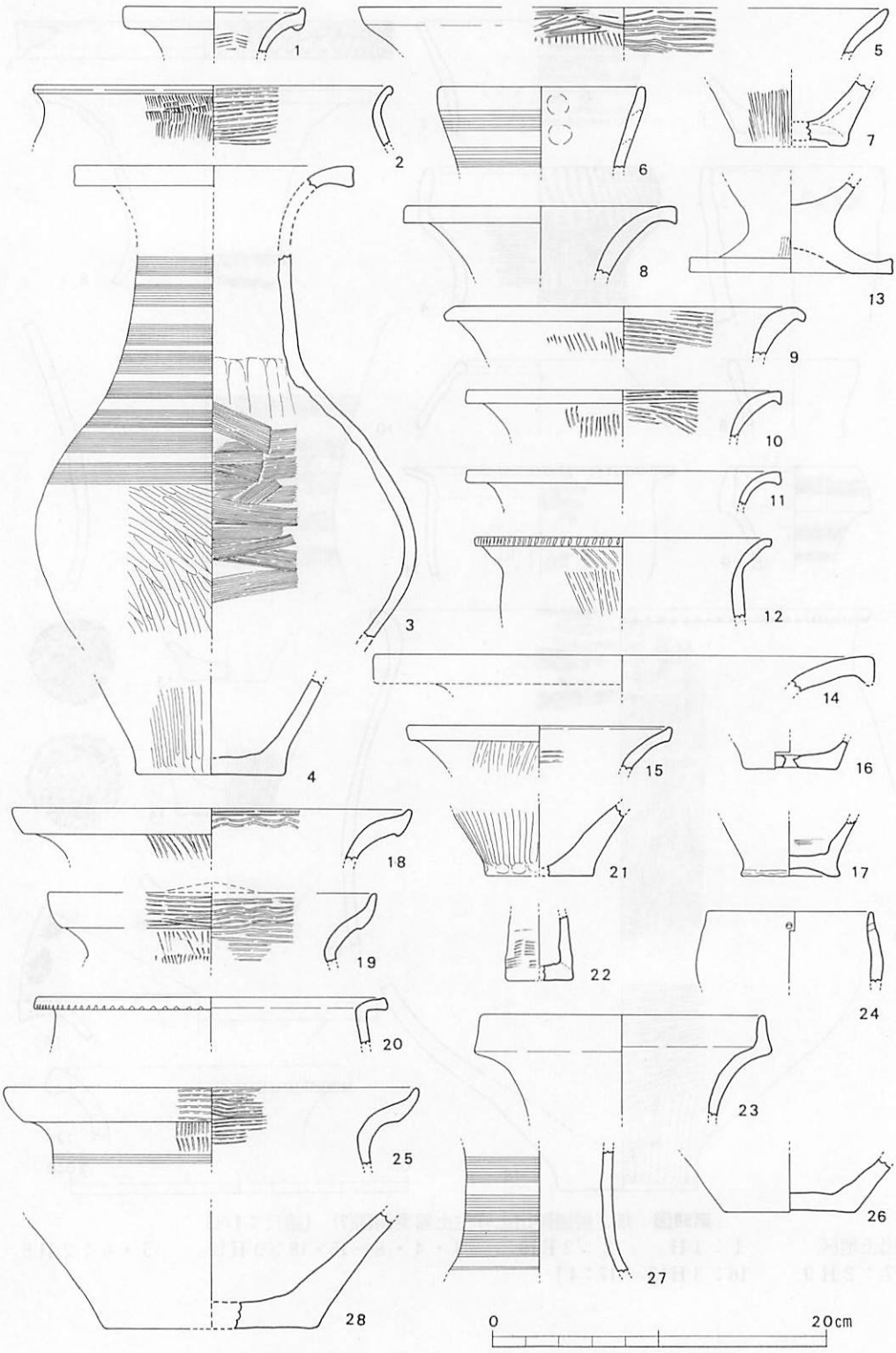
第51図4・7・16・17は底部である。4は外面にヘラミガキ，7はタテハケを施す。16は穿孔を行う。第55図17～19は壺の体部である。18は8条，19は5条，17は4条と，それぞれ櫛描直線文を施す。

黄白色土層出土土器(第51図18～22，第55図21・22)　第51図18・19は「近江型」甕である。両者とも外面に粗いタテハケ，内面にハケ状工具による波状文を施す。19は山形口縁を呈す。



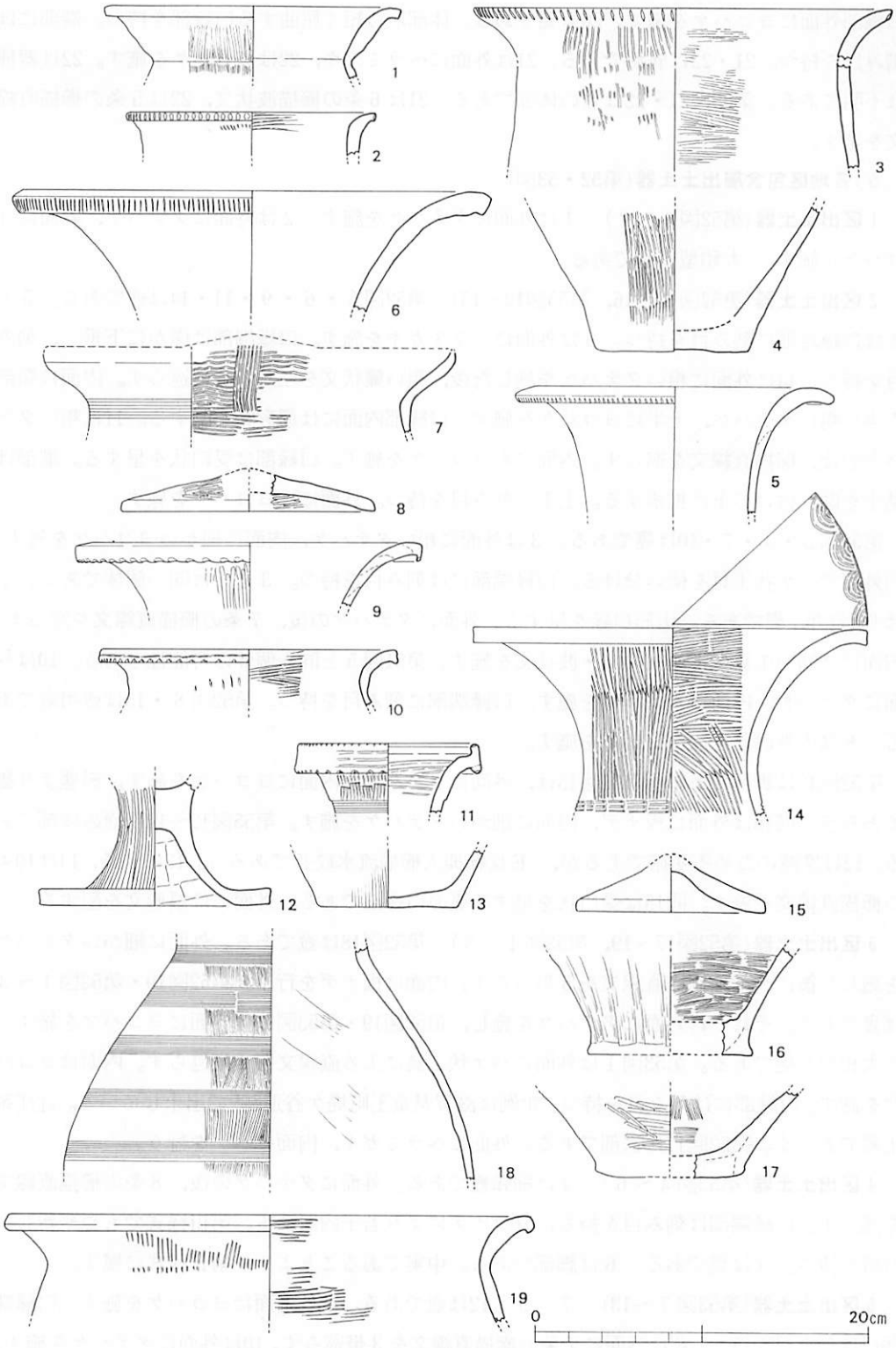
第50図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(7)　(縮尺：1/4)

出土地区　　1：1H　　2：2E19　　3・4・8～15・18：3H12　　5・6：2H8
7：2H9　　16：3H13　　17：4I



第51図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(8)　(縮尺：1/4)

出土地区・遺構　1・2：1F?4・25　3：1G土壙3　4：1G9　5：2E18
6：2E14　7：2F1　8：3B21　9：3D2　10：3D6　11：3E17
12・14：3G1・2　13：3E8　15：3G5　16：3G19　17：3H南拡張区
18：2G1　19・21：2G14　20：3F21　22：4H11　23：3G　24：2H
25：2G南拡張区　26：3B22　27：3E4　28：5H



第52図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(9)　(縮尺：1/4)

出土地区　1：1F　2：1G　3・4：2B10　5：2C19　6：2E17
7・8：2E17　9：2E18　10：2E・F　11：2G1～12　12・13：2G4
14：2H　15：2F23　16：2F25　17：3B　18：3B17　19：3C11

口縁部外面にヨコハケを施す。20も甕である。体部から短く屈曲する口縁部を持つ。端部には刻み目を持つ。21・22は底部である。21は外面にヘラミガキ，22はヨコハケを施す。22は器種は不明である。第55図21・22は壺の体部である。21は6条の櫛描波状文，22は5条の櫛描直線文を施す。

5）**各地区包含層出土土器**（第52・53図）

1区出土土器（第52図1・2）　1は外面にタテハケを施す。2は外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。「大和型」甕である。

2区出土土器（第52図3～16，第55図12～15）　第52図5・6・9・11・14は壺である。5・6は口縁端部に刻み目を持つ。9は外面にヘラミガキを施す。口縁端部は僅かに下垂し，刻み目を持つ。14は外面に粗いタテハケを施した後，粗い簾状文を左から右に巡らす。内面は頸部下半に粗いタテハケ，上半にヨコハケを施す。口縁部内面には扇形文を配する。11は粗いタテハケの後，櫛描直線文を巡らす。内面にもヨコハケを施す。口縁部は受口状を呈する。端部は粘土を貼り付けて下に拡張する。上下に刻み目を持つ。外面にはヨコハケを施す。

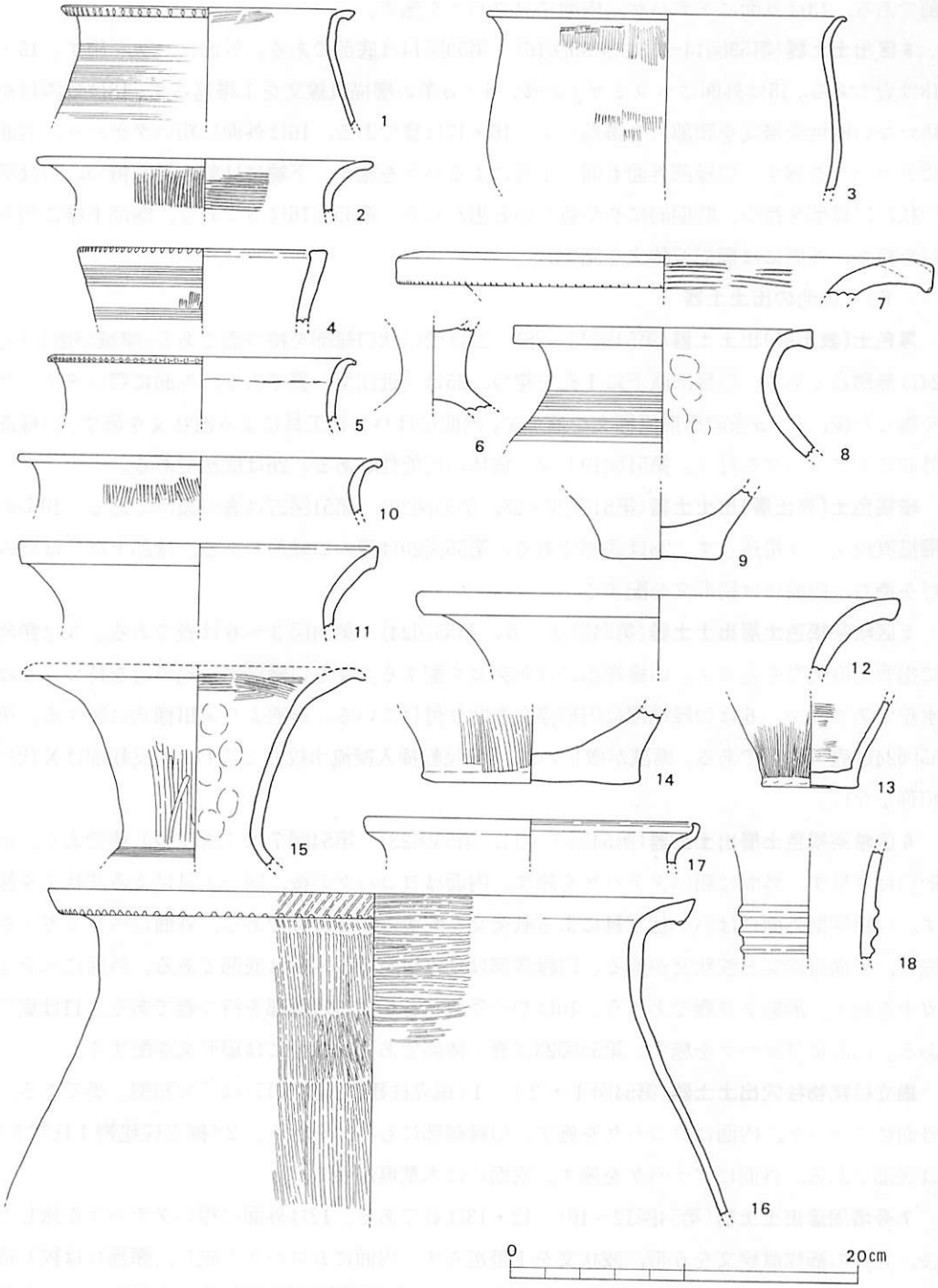
第52図3・4・7・10は甕である。3は外面に粗いタテハケ，内面に細かいヨコハケを施す。内外面でハケ状工具を使い分ける。口縁端部には刻み目を持つ。3と4は同一個体である。7は「近江型」甕である。山形口縁を呈する。外面にタテハケの後，7条の櫛描直線文を巡らす。内面には同一工具による縦線文・波状文を施す。第51図5と同一個体の可能性もある。10は外面にタテハケ，内面にヨケハケを施す。口縁端部に刻み目を持つ。第52図8・15は壺用蓋である。8は内外面ともヘラミガキを施す。

第52図12は脚部である。第52図13は，外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。形態より甕であろう。同16は外面に板ナデ，内面に細かいタテハケを施す。第55図12～14は壺の体部である。12は摩滅のため不明確であるが，「E反転挿入櫛描流水紋」[5]であろう。13は8条，14は10条の櫛描直線文を施す。同15は受口状を呈する壺の口縁部である。外面には扇形文を配する。

3区出土土器（第52図17～19，第53図1～3）　第52図18は壺である。外面に細かいタテハケを施した後，9条の櫛描直線文を5帯巡らす。内面は板ナデを行う。第52図19・第53図1～3は甕である。それぞれ外面にタテハケを施し，第52図19・第53図2は内面にヨコハケを施す。「大和型」甕である。第53図1は外面にハケ状工具による直線文を4帯巡らす。内面はヨコハケを施す。口縁部には刻み目を持つ。類例は滋賀県竜王町堤ケ谷遺跡[6]で出土している。近江系土器であろう。第52図17は底部である。外面にヘラミガキ，内面にハケを行う。

4区出土土器（第53図4～6）　4は細頸壺である。外面にタテハケの後，8条の櫛描直線文を巡らす。口縁端部は刻み目を持ち，ヨコナデにより若干内厚する。第III様式でもやや新しい特徴を持つ。5は甕である。6は脚部である。中実であることより，第II様式に属す。

5区出土土器（第53図7～13）　7～9・12は壺である。7は内面にヨコハケを施す。口縁端部には刻み目を持つ。8は外面に7条の櫛描直線文を3帯巡らす。10は外面にタテハケを施す。形態より「大和型」甕と思われる。11は摩滅が激しいが，「近江型」甕と思われる。9・13は底



第53図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(10)　(縮尺：1/4)

出土地区　1：3D2　2：3E19　3：3G24　4・5：4E
6：4I20　7～9：5E　10・11：5E1　12・13：5F　14：6区
15・16：6E12　17：6E21　18：6G1

部である。13は外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。

6区出土土器(第53図14～18，第55図16)　第53図14は底部である。外面にハケを施す。15・18は壺である。15は外面にヘラミガキの後，6＋α条の櫛描直線文を1帯巡らす。18は刻み目を持たない貼付突帯文を頸部に3帯巡らす。16・17は甕である。16は外面に粗いタテハケ，内面にヨコハケを施す。口縁部外面も同一工具によるハケを施す。下端には刻み目を持つ。17は受口状の口縁部を持つ。時期的にやや新しいと思われる。第55図16は壺である。端部下端に刻み目を持ち，外面には櫛描波状文を施す。

6)その他の出土土器

黒色土(表土層)出土土器(第51図23～26)　23は受口状口縁部を持つ壺である。摩滅が激しい。24は無頸壺である。口縁部直下に1孔を穿つ。25は「近江型」甕である。外面に粗いタテハケを施した後，4＋α条の櫛描直線文を巡らす。内面にはハケ状工具による波状文を施す。口縁部外面にもヨコハケを行う。第51図19と同一個体の可能性がある。26は底部である。

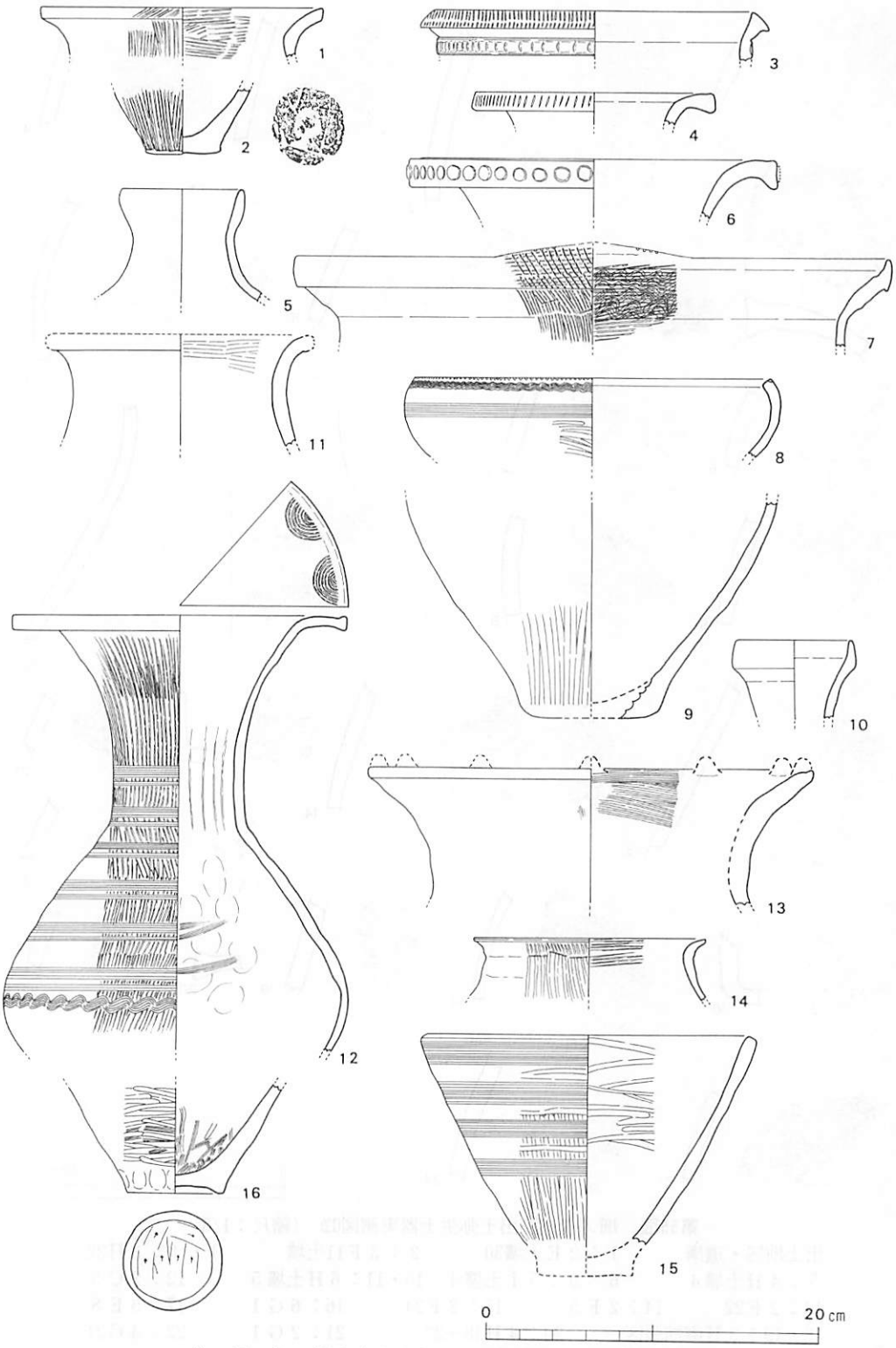
暗褐色土(表土層)出土土器(第51図27・28，第55図20)　第51図27は壺の頸部である。10条の櫛描直線文を4帯巡らす。28は底部である。第55図20は壺の口縁部である。端部下端には刻み目を持ち，内面には扇形文を配する。

5区暗茶褐色土層出土土器(第54図3～6，第55図24)　第54図3～6は壺である。3は頸部に指頭圧痕突帯を巡らす。口縁端部には刺突文を配する。4も口縁端部に刻み目を持つ。5は水差であろうか。6は口縁端部に円形浮文を貼り付けている。形態より第III様式に属する。第55図24は壺の体部である。摩滅が激しいが，「E反転挿入擬流水紋」[7]と思われ，反転部はX状に相称しない。

6区暗茶褐色土層出土土器(第54図7～11，第55図23)　第54図7は「近江型」甕である。山形口縁を呈す。外面に粗いタテハケを施す。内面はヨコハケの後，同一工具による波状文を施す。口縁端部外面にはハケ状工具による刺突文を配する。8は鉢である。外面にヘラミガキを施し，櫛描直線文と波状文が巡る。口縁端部は刻み目を持つ。9は底部である。外面にヘラミガキを施す。形態より壺であろう。10はやや受口状を呈する口縁部を持つ壺である。11は甕である。内面にヨコハケを施す。第55図23は壺の体部である。外面には扇形文を配する。

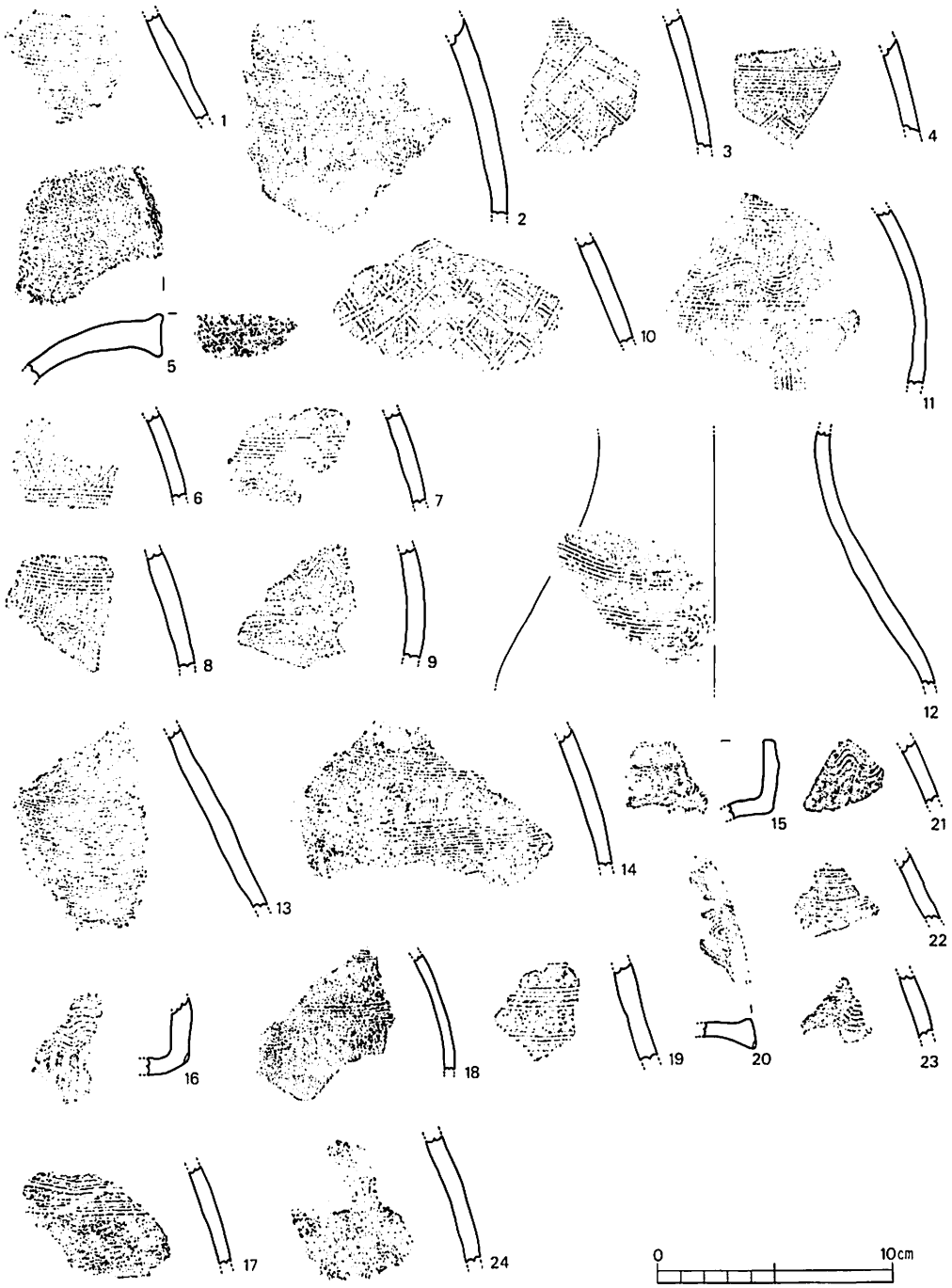
掘立柱建物柱穴出土土器(第54図1・2)　1(掘立柱建物16柱穴17)は「大和型」甕である。外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。口縁端部にもハケを行う。2(掘立柱建物4柱穴5)は底部である。外面にタテハケを施す。底面には木葉痕が残る。

7号墳周溝出土土器(第54図12～16)　12・13は壺である。12は外面に粗いタテハケを施した後，8条の櫛描直線文を6帯，波状文を1帯巡らす。内面にヨコハケを施し，頸部には絞り痕が看取される。口縁部内面には扇形文を配する。13は口縁部内面にヨコハケを施した後，瘤状突起を配する。形態より近江系土器であろう。14は「大和型」甕である。外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。15は鉢である。外面下半をヘラミガキの後，8条の櫛描直線文を4帯巡らす。文様帯間には横方向のヘラミガキが施される。16は底部である。内外面ともハケの後，



第54図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(11)　(縮尺：1/4)

出土地区・遺構　　1：掘立柱建物16　　2：掘立柱建物4　　3：5F溝2
4：5F20～25　　5：5G溝1　　6：5H溝1　　7～10：6G1
11：6H溝2　　12～16：7号墳周濠



第55図　畑ノ前遺跡出土弥生土器実測図(12)　(縮尺：1/3)

出土地区・遺構　1：2E土壙30　2：3F11土壙　3・4：3H22
5：4H土壙4　6～9：5I土壙4　10・11：6H土壙5　12：2C5
13：2E22　14：2F5　15：2F24　16：6G1　17：3E8
18・19：3H南拡張区　20：4H18～23　21：2G1　22：4G21
23：5号墳周濠(6F溝2)　24：5H

ヘラミガキを施す。底部には板ナデを行う。形態より壺であろう。

2．**石器**(第56～74図，図版第51～58，第6～8表)

1)石器の概要

今回の調査で出土した定型的な石器は，総計98点ある。その内訳は，石鏃22点，同未製品2点，尖頭器2点，打製石剣9点，石錐9点，石小刀1点，スクレイパー14点，同未製品1点，楔形石器2点，磨製石庖丁17点，同未製品4点，大型石庖丁1点，太型蛤刃石斧7点，扁平片刃石斧1点，抉入柱状片刃石斧1点，環状石斧1点，敲石3点，台石1点である。この他に，多数の剝片・破片が認められた。また，磨製石庖丁の原材と思われる粘板岩片も出土した。

次に，これらの器種をその用途別に分類してみるならば，植物質食料の調理加工具としては台石・敲石が，狩猟具・戦闘用具としては石鏃・尖頭器・打製石剣が，農具としては磨製石庖丁が，その他の木工などの加工具としては石錐・石小刃・スクレイパー・楔形石器と各種の磨製石斧が，それぞれ対応するものといえよう。全体の器種構成と石器組成上の問題点については，個々の検討の後に『後論』の第1章で述べることとしたい。

石材は，器種ごとに多様なものが用いられている。石鏃，尖頭器，スクレイパーなどの削器には，総てサヌカイトが使用されている。ただし，その大部分は二上山系のものと思われるが，約1割弱ほど他の産地(恐らく，金山・国分台など)のものが認められる。後者は石理に沿って風化の進行が著しい。

磨製石庖丁には，主に粘板岩と緑泥片岩の二者が用いられる。比率はほぼ半数ずつである。前者には近江の高島産と思われるものが用いられ，後者は紀ノ川流域からの搬入であると考えられる。石器原材供給の問題を考える上で興味深い。

石器の所属時期について，次に考えてみよう。今回の調査では，この点について良好な資料が得られていない。特に，包含層出土の遺物は，包含層自体が薄く，また古墳時代以降の遺構が著しく重複しており，その所属時期を明確に判定し難い。確実に弥生時代の遺構から出土した資料は，先に遺構の説明で述べたように，数例を挙げ得るに過ぎない。ここでは土器の型式から，大まかに第II様式から第III様式古段階の中期前半に伴う石器群としてとらえておきたい。概期の石器群としては，後世の攪乱を受けてはいるが，良好な内容を有した資料であると言える。

2)石器各説

石鏃(第56図1～11，第57図1～9)　全部で22点出土している。その形態は多様だが，凹基式(破片のため図示せず)・平基式(第56図1～5)・円基式(第56図6)・尖基式(第56図7～11，第57図1～5・7・8)・有茎式(第57図6・9)の五者に大別できる。

凹基式は1点出土した。破片のため形状は不明であるが，基部に浅い抉りが入り，短い脚部を持つと思われる。調整加工は両面に及ぶ。

平基式は6点出土した。そのうちの5点を図示する。縄文時代の同形態例に比して大型である。両面の全体に調整加工を施すもの(第56図1・2・4)と，調整加工が片面及び周縁のみに

第6表　畑ノ前遺跡出土石器一覧表(1)

挿図番号	器　種	形態分類	石　材	出土地点	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重さ	備　考
56－1	石鏃	平基式	サヌカイト	3Ｂ8黄灰色土	先端一部欠	2.2	(2.0)	0.4	(1.9)	
56－2	石鏃	平基式	サヌカイト	3Ｅ15黄灰色土	先端一部欠	(2.5)	(2.3)	0.5	(2.1)	
56－3	石鏃	平基式	サヌカイト	2Ｅ19黄灰色土	2分の1欠	(1.5)	(1.9)	0.3	(1.0)	
56－4	石鏃	平基式	サヌカイト	3Ｅ16土壙23	先端一部欠	3.3	(2.0)	0.3	(2.5)	
56－5	石鏃	平基式	サヌカイト	不明	先端一部欠	(3.2)	2.5	0.3	(2.7)	
56－6	石鏃	円基式	サヌカイト	3Ｅ不明遺構1	完形	3.4	2.5	0.6	4.5	
56－7	石鏃	尖基式	サヌカイト	3Ｇ1土壙1	先端一部欠	(4.4)	1.5	0.3	(2.0)	
56－8	石鏃	尖基式	サヌカイト	3Ｇ24	先端一部欠	(3.8)	1.8	0.4	(2.5)	
56－9	石鏃	尖基式	サヌカイト	3Ｇ土壙8	先端一部欠	(3.2)	1.6	0.4	(2.1)	
56－10	石鏃	尖基式	サヌカイト	4Ｇ溝1	先端一部欠	(3.5)	1.9	0.5	(3.0)	
56－11	石鏃	尖基式	サヌカイト	3Ｃ1黒色土	先端一部欠	(3.4)	1.7	0.5	(2.9)	
56－12	石鏃未製品	尖基式	サヌカイト	4Ｅ不明遺構2	先端一部欠	3.3	(2.2)	0.7	(4.5)	
57－1	石鏃	尖基式	サヌカイト	1Ｇ4土壙2	完形	2.9	1.6	0.2	(1.0)	
57－2	石鏃	尖基式	サヌカイト	2Ｇ10	先端一部欠	(5.3)	2.5	0.5	5.2	試掘時出土
57－3	石鏃	尖基式	サヌカイト	6Ｇ	先端一部欠	2.7	1.6	0.3	(1.5)	
57－4	石鏃	尖基式	サヌカイト	2Ｅ17	先端一部欠	(3.1)	1.4	0.4	(1.5)	
57－5	石鏃	尖基式	サヌカイト	4Ｆ土壙157	完形	4.4	2.8	0.4	5.8	
57－6	石鏃	有茎式	サヌカイト	4Ｅ土壙4	3分の1欠	(2.6)	2.5	0.5	(1.5)	
57－7	石鏃	尖基式	サヌカイト	5Ｇ溝1	先端一部欠	3.9	(2.0)	0.5	(2.9)	
57－8	石鏃	尖基式	サヌカイト	3Ｅ13－18土壙	2分の1欠	(3.5)	(1.9)	0.5	(3.5)	
57－9	石鏃	有茎式	サヌカイト	3Ｄ6黄灰色土	先端一部欠	(4.1)	2.3	0.5	(3.2)	
57－10	尖頭器		サヌカイト	4Ｈ16黄灰色土	先端一部欠	(5.0)	2.4	0.9	(11.1)	
58－1	打製石剣		サヌカイト	3Ｄ13黄灰色土	先端一部欠	(13.2)	2.5	1.0	(47.0)	
58－2	打製石剣		サヌカイト	2Ｇ15	先端のみ残存	(3.8)	(2.7)	(0.8)	(7.1)	試掘時出土
58－3	打製石剣		サヌカイト	3Ｄ11黄灰色土	先端のみ残存	(7.5)	(3.0)	(1.1)	(28.5)	
58－4	打製石剣		サヌカイト	2Ｃ12黒色土	先端のみ残存	(5.5)	(2.9)	(1.1)	(18.8)	
58－5	打製石剣		サヌカイト	7号墳周濠	基部のみ残存	(4.9)	(3.4)	(1.3)	(23.8)	
59－1	打製石剣		サヌカイト	6Ｇ土壙4	2分の1欠	(13.9)	4.7	1.4	(108.0)	
59－2	打製石剣		サヌカイト	6Ｈ表土	基部のみ残存	(6.2)	4.5	1.2	(40.5)	
60－1	打製石剣		サヌカイト	6Ｇ奈良包含層	先端・基部欠	(6.8)	4.6	1.4	(65.0)	
60－2	石錐		サヌカイト	1Ｇ黄灰色土	先端一部欠	(3.9)	1.4	1.6	(3.0)	
60－3	石錐		サヌカイト	4Ｅ	先端一部欠	(3.7)	1.8	0.6	(3.2)	

（括弧内の数値は残存値　単位はcm，g）

第７表　畑ノ前遺跡出土石器一覧表(2)

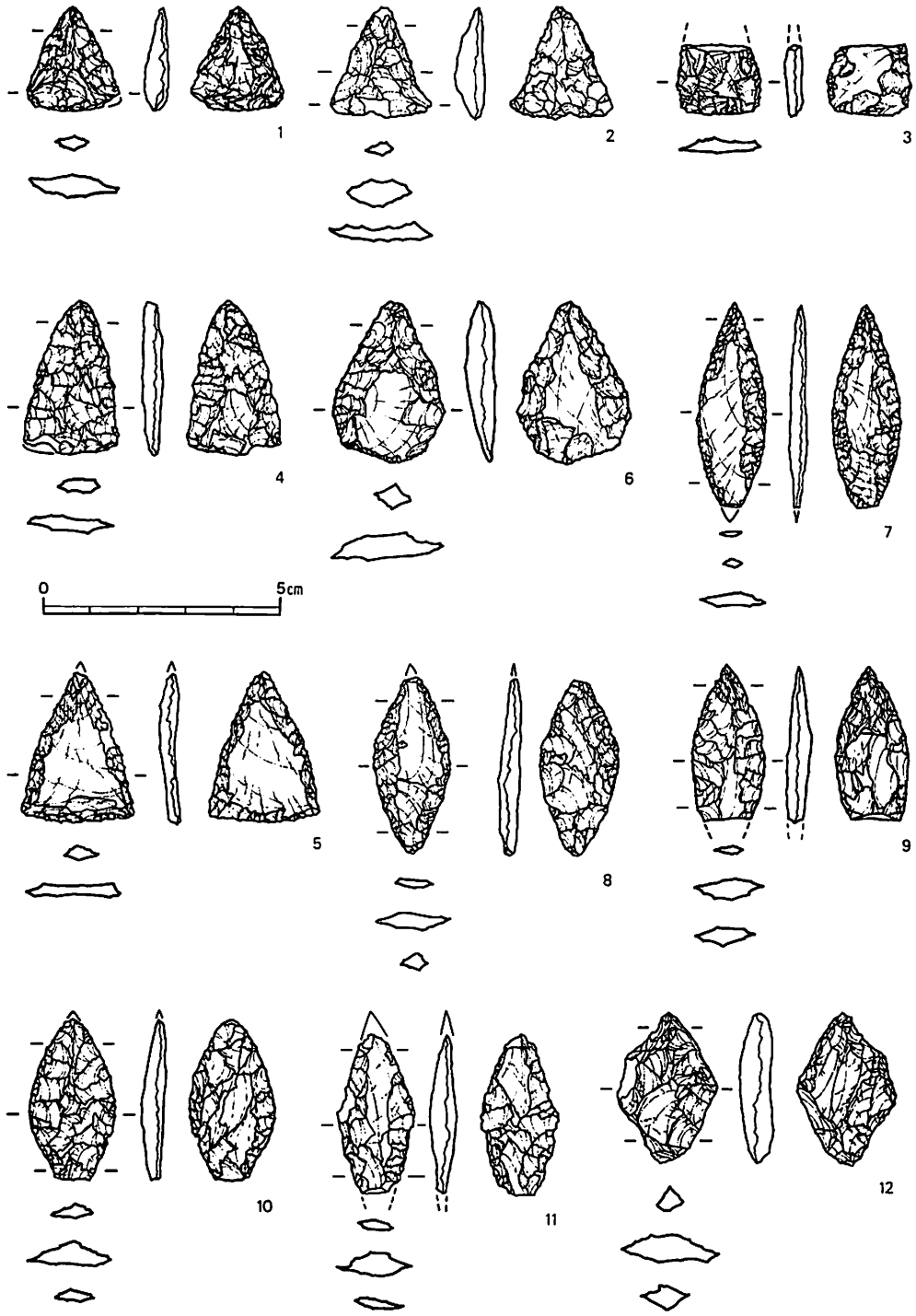
挿図番号	器　種	形態分類	石　材	出土地点	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重さ	備　　考
60―４	石錐		サヌカイト	２Ｄ２黄灰色土	先端一部欠	(3.0)	2.5	0.6	(3.5)	
60―５	石錐		サヌカイト	2E20・25, 3E16・21黄灰色土	先端一部欠	(2.8)	2.9	0.4	(3.0)	
60―６	石錐		サヌカイト	３Ｄ３・４溝内	完形	4.3	2.2	0.5	3.5	
60―７	石錐		サヌカイト	７号墳周濠	完形	3.0	1.7	0.4	2.0	
60―８	石錐		サヌカイト	３Ｄ24黒色土	完形	3.6	1.4	0.5	3.0	
60―９	石錐		サヌカイト	３Ｇ６黄灰色土	完形	5.5	1.2	0.6	4.4	
60―10	石錐		サヌカイト	３Ｄ６黄灰色土	完形	3.3	1.1	0.5	1.8	
60―11	石小刀		サヌカイト	３Ｇ土壙54	２分の１欠	(3.5)	1.3	0.5	(2.1)	
61―１	スクレイパー		サヌカイト	６Ｇ奈良包含層	先端一部欠	2.8	(7.0)	0.7	16.6	
61―２	スクレイパー		サヌカイト	３Ｄ17黄灰色土	完形	5.6	4.1	0.7	19.8	
61―３	スクレイパー		サヌカイト	３Ｅ１黄灰色土	先端一部欠	(4.5)	2.8	0.5	(4.8)	
61―４	スクレイパー		サヌカイト	２Ｅ22	先端一部欠	(4.7)	(3.3)	0.5	(8.8)	
61―５	スクレイパー未製品		サヌカイト	３Ｅ不明遺構１	完形	4.4	2.7	0.9	14.0	金山産か
61―６	スクレイパー		サヌカイト	３Ｇ24黄白色土	完形	4.3	5.9	1.0	25.2	
61―７	スクレイパー		サヌカイト	３Ｅ土壙７	完形	3.0	4.3	1.0	12.2	
62―１	スクレイパー		サヌカイト	２Ｆ23包含層	完形	7.6	5.8	1.7	57.2	
62―２	スクレイパー		サヌカイト	３Ｅ不明遺構１	完形	5.1	4.7	1.1	38.8	
63―１	スクレイパー		サヌカイト	５Ｇ溝１	完形	5.7	10.7	1.6	95.5	
63―２	スクレイパー		サヌカイト	３Ｇ土壙148	３分の１欠損	(7.3)	5.6	1.0	(60.8)	
64―１	石庖丁		緑泥片岩	５号墳周濠上層	２分の１欠	(7.3)	3.2	0.8	(26.1)	
64―２	石庖丁		粘板岩	３Ｈ20	３分の２欠	(6.6)	(3.1)	0.8	(29.7)	高島産(黒色)
64―３	石庖丁		粘板岩	５Ｇ土壙３	先端一部欠	(10.9)	3.2	0.5	(34.8)	高島産(黒色)
64―４	石庖丁		緑泥片岩	２Ｇ８黄灰色土	先端のみ残存	(3.9)	(2.7)	0.6	(7.5)	
64―５	石庖丁		緑泥片岩	2G土壙15, 3F16・21	完形	17.4	4.5	0.6	90.2	
65―１	石庖丁		緑泥片岩	３Ｇ24黄灰色土	２分の１欠	(7.6)	4.4	0.6	(29.4)	
65―２	石庖丁		粘板岩	３Ｃ７土壙	２分の１欠	(7.4)	3.4	0.8	(31.3)	高島産(黒色)
65―３	石庖丁		粘板岩	３Ｂ土壙２	３分の１欠	(9.1)	3.4	(0.6)	(26.5)	高島産(灰色)
66―１	石庖丁		緑泥片岩	中世溝状遺構	３分の２欠	(9.2)	(5.1)	0.9	(70.8)	
66―２	石庖丁		粘板岩	２Ｂ９黒色土	紐孔部のみ残存	(2.5)	(2.0)	0.3	(1.8)	高島産(灰色)
66―３	石庖丁		粘板岩	５Ｆ溝２	紐孔部のみ残存	(4.1)	(3.2)	(0.6)	(15.1)	ホルンフェルス質
66―４	石庖丁		緑泥片岩	４Ｈ４	４分の３欠	(8.1)	(4.0)	0.7	(35.2)	
66―５	石庖丁		粘板岩	６Ｇ奈良包含層	紐孔部のみ残存	(6.6)	(2.8)	(0.6)	(15.0)	高島産(灰色)

(括弧内の数値は残存値　単位はcm, g)

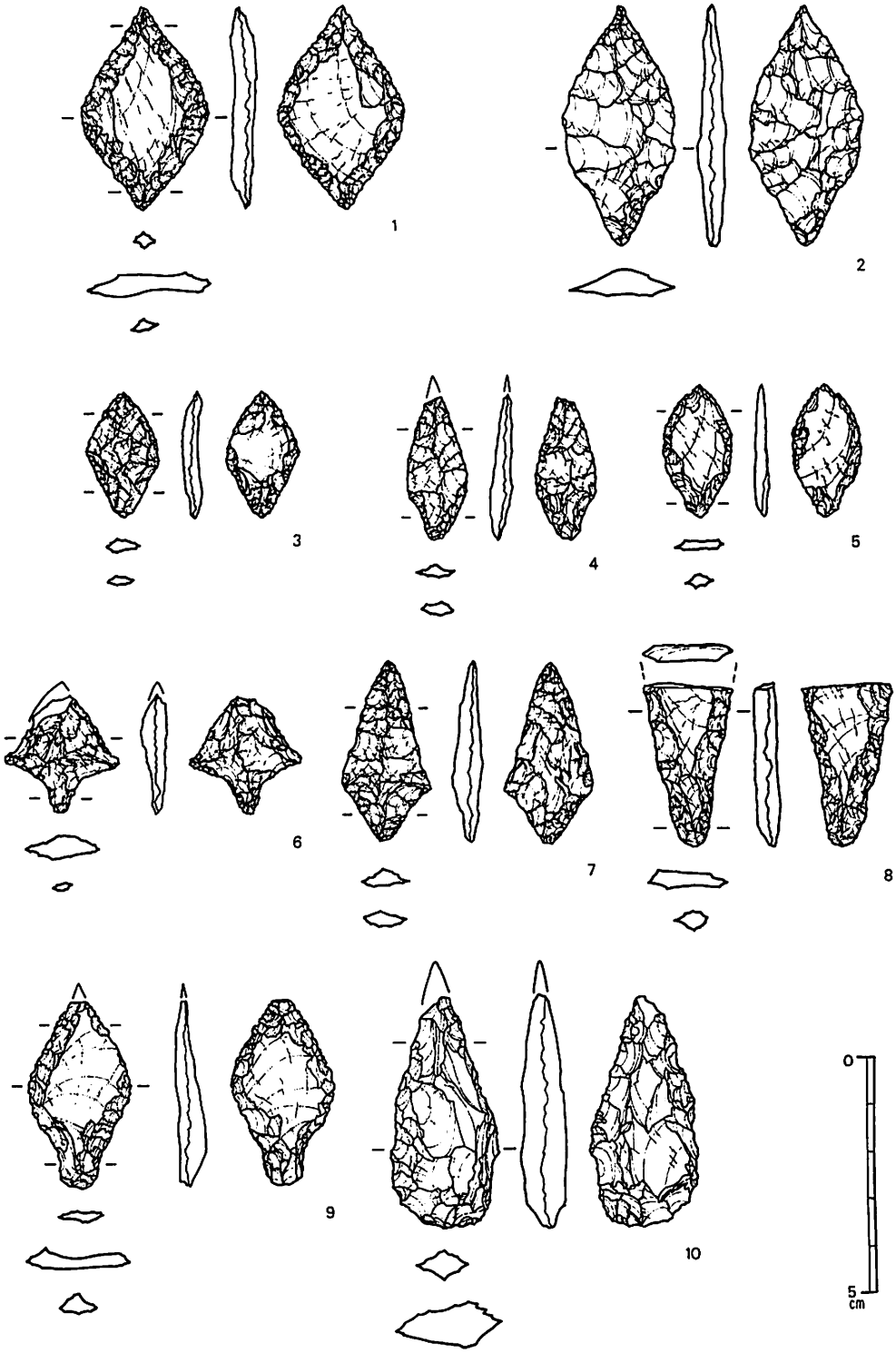
第8表　畑ノ前遺跡出土石器一覧表(3)

挿図番号	器　種	形態分類	石　材	出土地点	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重さ	備　考
67—1	大型石庖丁		粘板岩	2E17	2分の1欠	(8.1)	(6.1)	(0.6)	(38.6)	高島産(黒色)
68—1	石庖丁未製品		粘板岩	6H褐色土	完形	12.2	5.9	1.2	118.0	高島産(黒色)
68—2	石庖丁未製品		粘板岩	3E17黄灰色土	2分の1欠	9.3	5.7	1.8	96.0	頁岩質
69—1	太型蛤刃石斧		和泉砂岩	2E18	先端一部欠	(11.4)	6.2	4.6	(510)	
69—2	太型蛤刃石斧		流紋岩質凝灰岩	3C6黄灰色土	先端一部欠	(12.0)	(6.8)	(4.8)	(546)	
70—1	太型蛤刃石斧		和泉砂岩	2E15	基部欠	(14.3)	(6.7)	(4.9)	(711)	
70—2	太型蛤刃石斧		和泉砂岩	4H土壙4	3分の2欠	(6.4)	(6.4)	(4.5)	(238)	
71—1	太型蛤刃石斧		白雲母片岩	3C11黄灰色土	刃部欠	(10.4)	(6.2)	(4.4)	(430)	
71—2	太型蛤刃石斧		和泉砂岩	2E18	刃部欠	(8.2)	(6.5)	(4.9)	(394)	
72—1	太型蛤刃石斧		玄武岩	2F23	刃部欠	(15.6)	7.2	(3.8)	(725)	
73—1	扁平片刃石斧		粘板岩	4E11	先端一部欠	(8.0)	7.1	1.6	(160)	
73—2	柱状片刃石斧		泥灰岩	7号墳周濠	先端一部欠	(11.0)	3.2	(3.3)	(193)	摩滅
73—3	環状石斧		角閃安山岩	5E溝3	2分の1欠	9.8	／	1.6	(107)	
74—1	台石		花崗岩	5H土壙1	完形	19.3	9.7	6.1	1680	
未実測	石鏃	凹基式	サヌカイト	2E黄灰色土	3分の1欠損	(1.7)	(2.1)	0.3	(1.6)	
未実測	石鏃	平基式	サヌカイト	3C18黒色土	完形	4.1	2.2	0.5	5.2	
未実測	石鏃未製品	凹基式	サヌカイト	2E14黄灰色土	完形	4.2	2.3	0.8	8.2	
未実測	尖頭器		サヌカイト	2E13黄灰色土	完形	5.1	2.9	0.8	13.4	
未実測	打製石剣		サヌカイト	5I19暗灰褐色土	2分の1欠	(7.0)	3.3	1.2	(34.2)	試掘時出土
未実測	楔形石器		サヌカイト	2B14黄灰色土	先端一部欠	2.3	2.7	0.5	3.4	
未実測	楔形石器		サヌカイト	3D3黄灰色土	先端一部欠	2.1	(2.3)	0.7	(5.1)	
未実測	スクレイパー		サヌカイト	3F23・24黄灰色土	完形	2.9	3.8	0.7	10.1	
未実測	スクレイパー		サヌカイト	6G奈良包含層	完形	4.8	5.1	0.8	21.0	
未実測	スクレイパー		サヌカイト	3H黒色土	完形	3.3	5.5	1.1	23.3	
未実測	スクレイパー		サヌカイト	3G溝5	2分の1欠損	(2.9)	(3.9)	0.6	(8.5)	
未実測	石庖丁		粘板岩	3D24・19土壙2	刃部の一部のみ残存	(4.6)	(1.6)	(0.4)	(4.3)	高島産(黄緑色)
未実測	石庖丁		粘板岩	2C5	小破片	(3.2)	(3.0)	(0.3)	(4.4)	高島産(黒色)
未実測	石庖丁		粘板岩	掘立柱建物11柱穴3	小破片	(7.4)	(3.2)	(0.4)	(14.4)	高島産(黒色)
未実測	石庖丁		粘板岩	3B22黒色土	小破片	(4.1)	(3.4)	(0.6)	(11.0)	高島産(黒色)
未実測	敲石		花崗岩	2E土壙28	完形	12.4	10.0	7.4	1316	
未実測	敲石		花崗岩	3E23黒色土	一部欠	11.4	10.3	7.0	(976)	
未実測	敲石		花崗岩	2E20	完形	9.5	6.9	5.7	514	

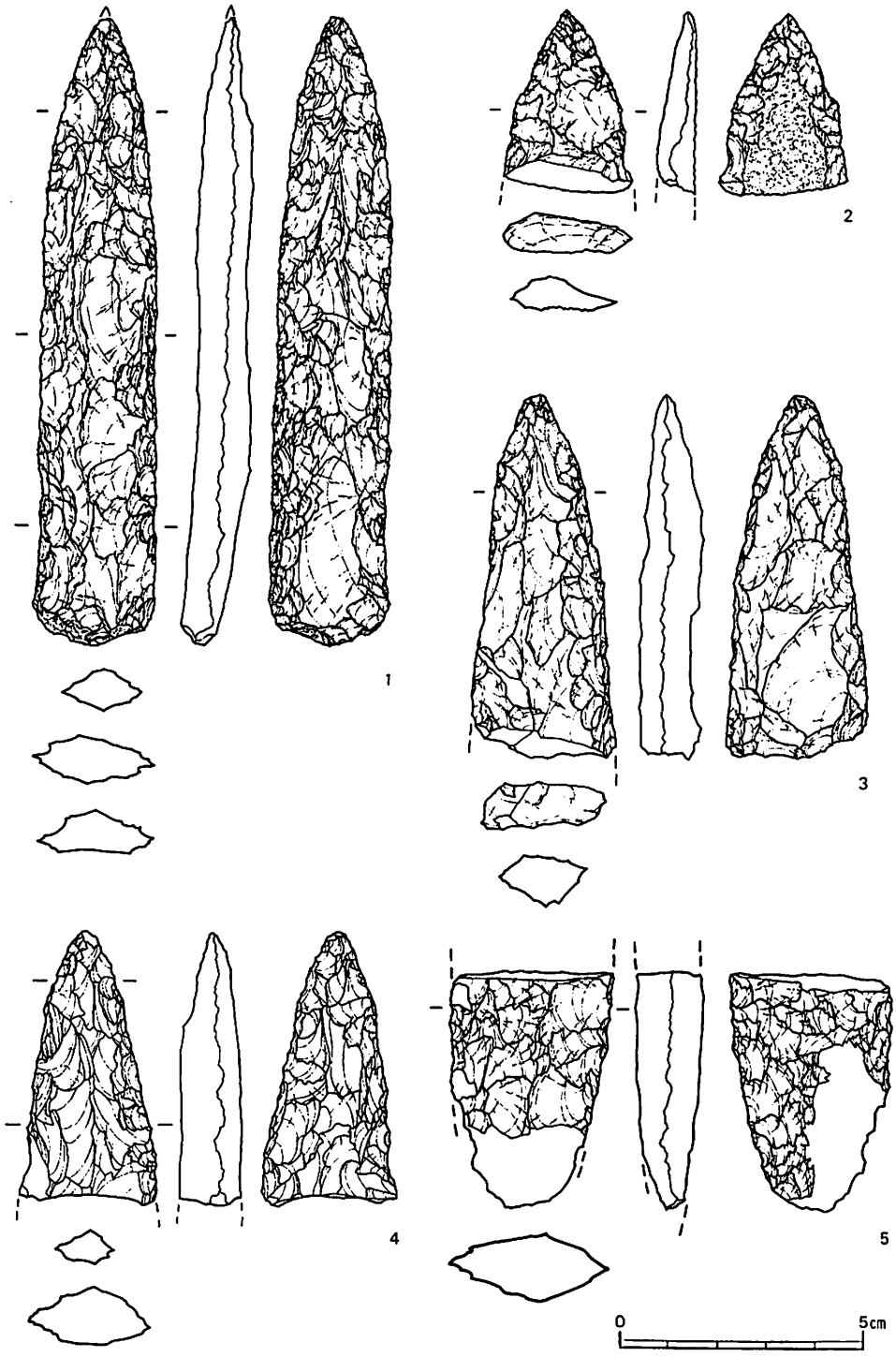
(括弧内の数値は残存値　単位はcm，g)



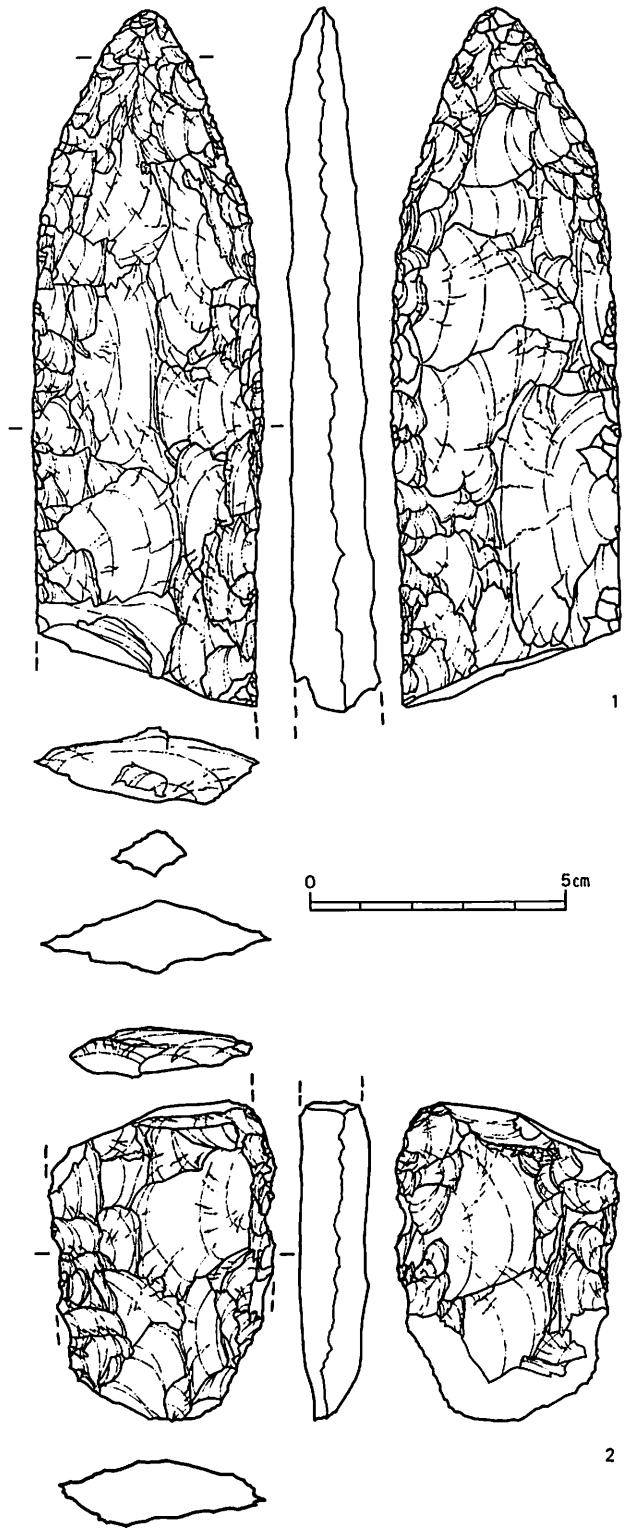
第56図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(1)　(縮尺：2/3)



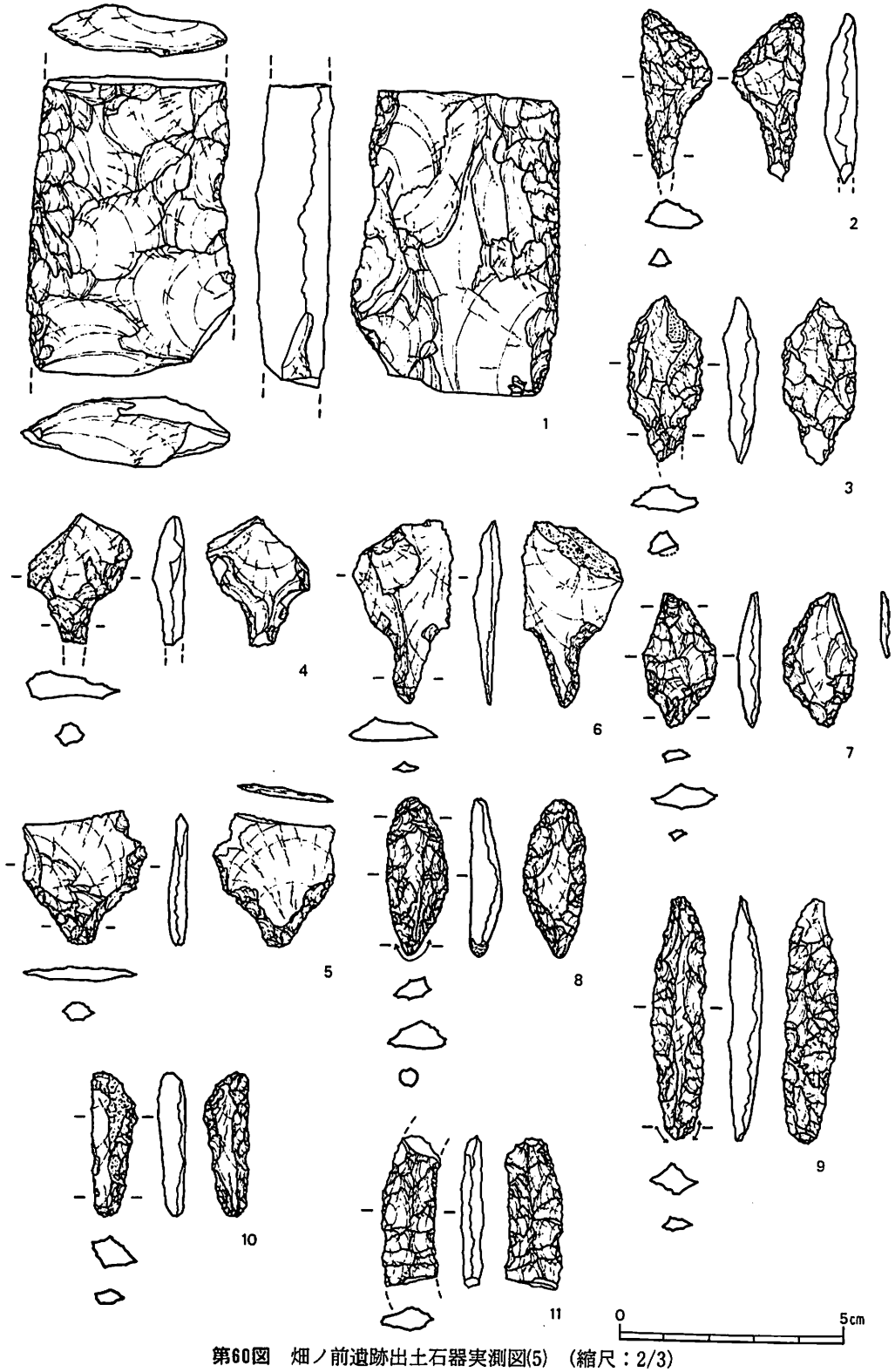
第57図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(2)　(縮尺：2/3)



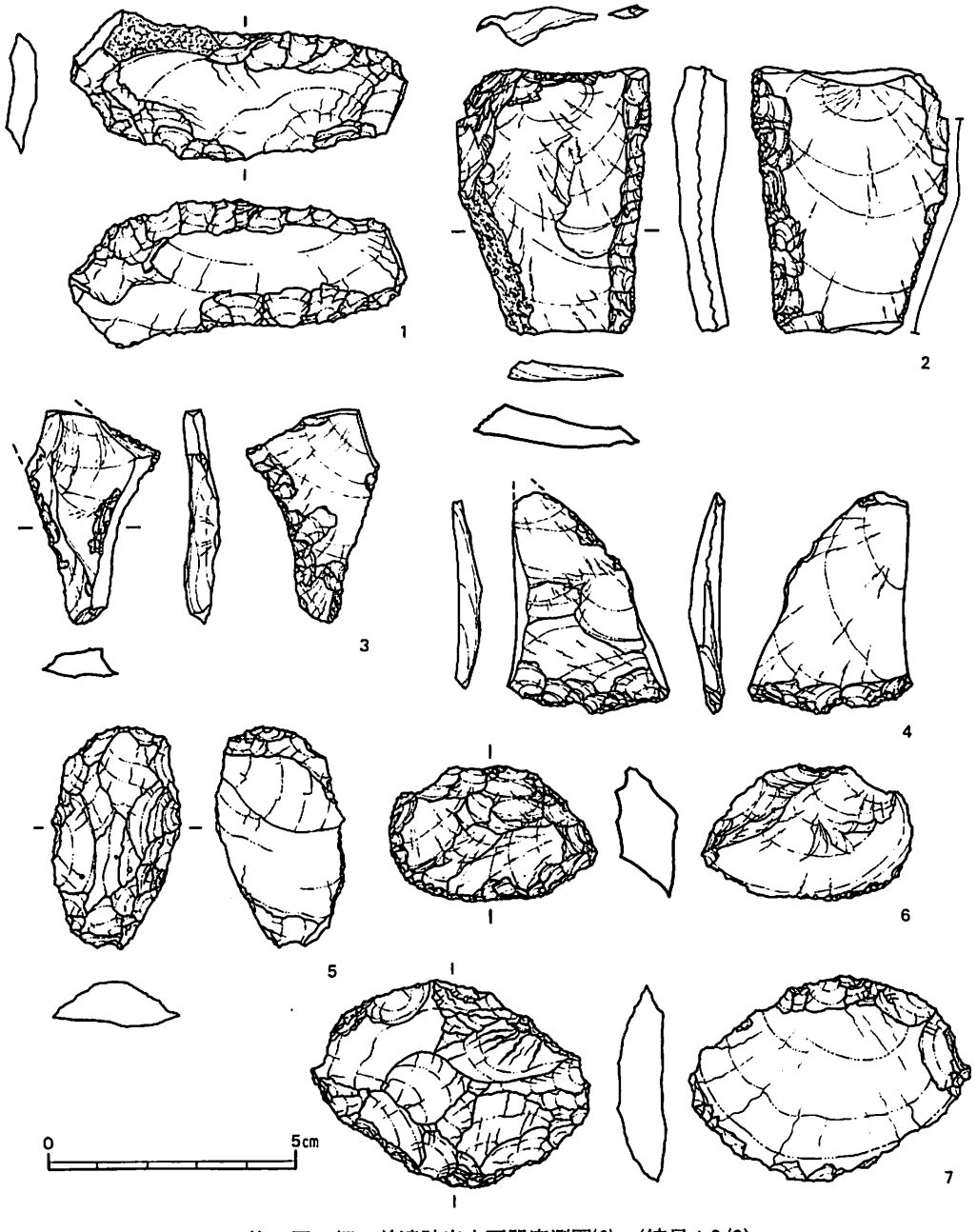
第58図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(3)　(縮尺：2/3)



第59図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(4)　(縮尺：2/3)



第60図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(5)　(縮尺：2/3)

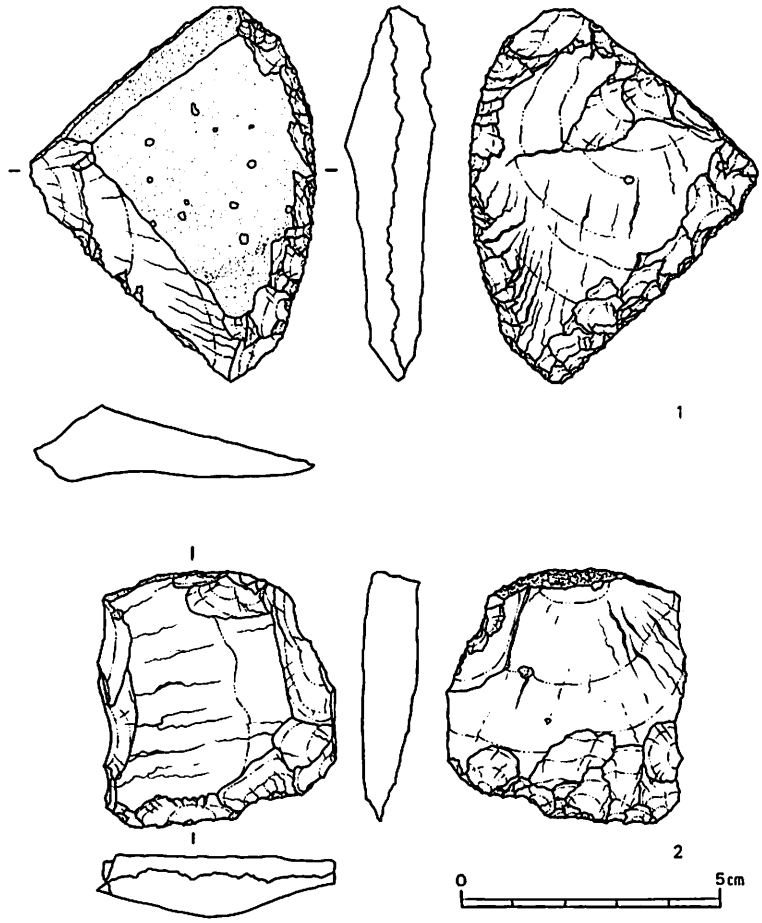


第61図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(6)　(縮尺：2/3)

留まるもの(第56図３・５)との二者が存在する。

円基式は１点のみ出土した。調整加工は主に先端部に施され，基部には僅かに小剝離が認められる。

尖基式は12点出土した。大きさ・平面形態ともに，個体差が大きい。幅約1.5cm程度のもの(第



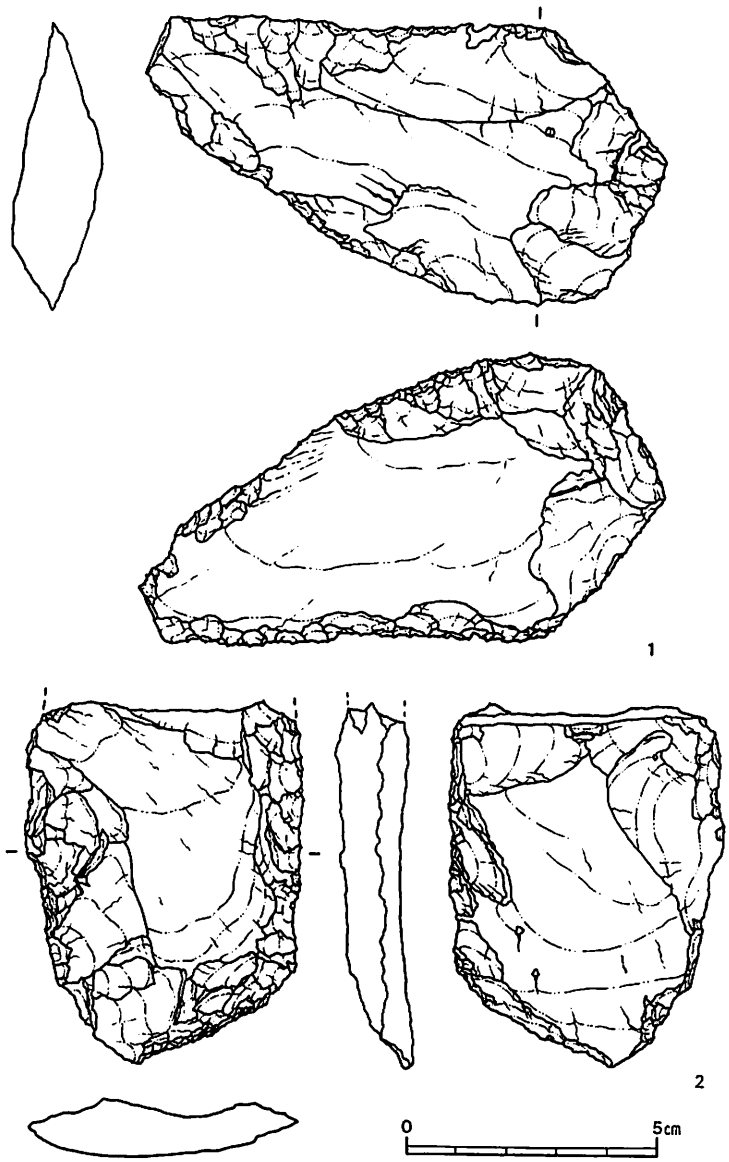
第62図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(7)　(縮尺：2/3)

56図７～11，第57図３～５・７・８)と，幅約2.5cm程度で木葉形を呈するもの(第57図１・２)とがある。前者には基部のところに抉りを施すもの(第57図７)や，長大なもの(第57図８)が存在する。調整加工が両面全体に施されるもの(第56図10，第57図２・４・７)は少なく，一次剥離面を残すもの(第56図７～11，第57図１・３・５・８)が多い。

有茎式は２点出土した。第57図６は調整加工が全面に及ぶ。第57図９は一次剥離面を残す。

石鏃未製品(第56図12)　２点出土した。そのうち１点を図示した。第56図12は完成品に比べ厚く，刃部を作り出す調整加工が両面とも一部にしか施されていない。形態より見て尖基式の未製品と考えられる。もう１点は調整加工は第56図12と同じである。形態は二等辺三角形を呈し，基部に僅かに抉りを施すことから凹基式の未製品と考えられる。

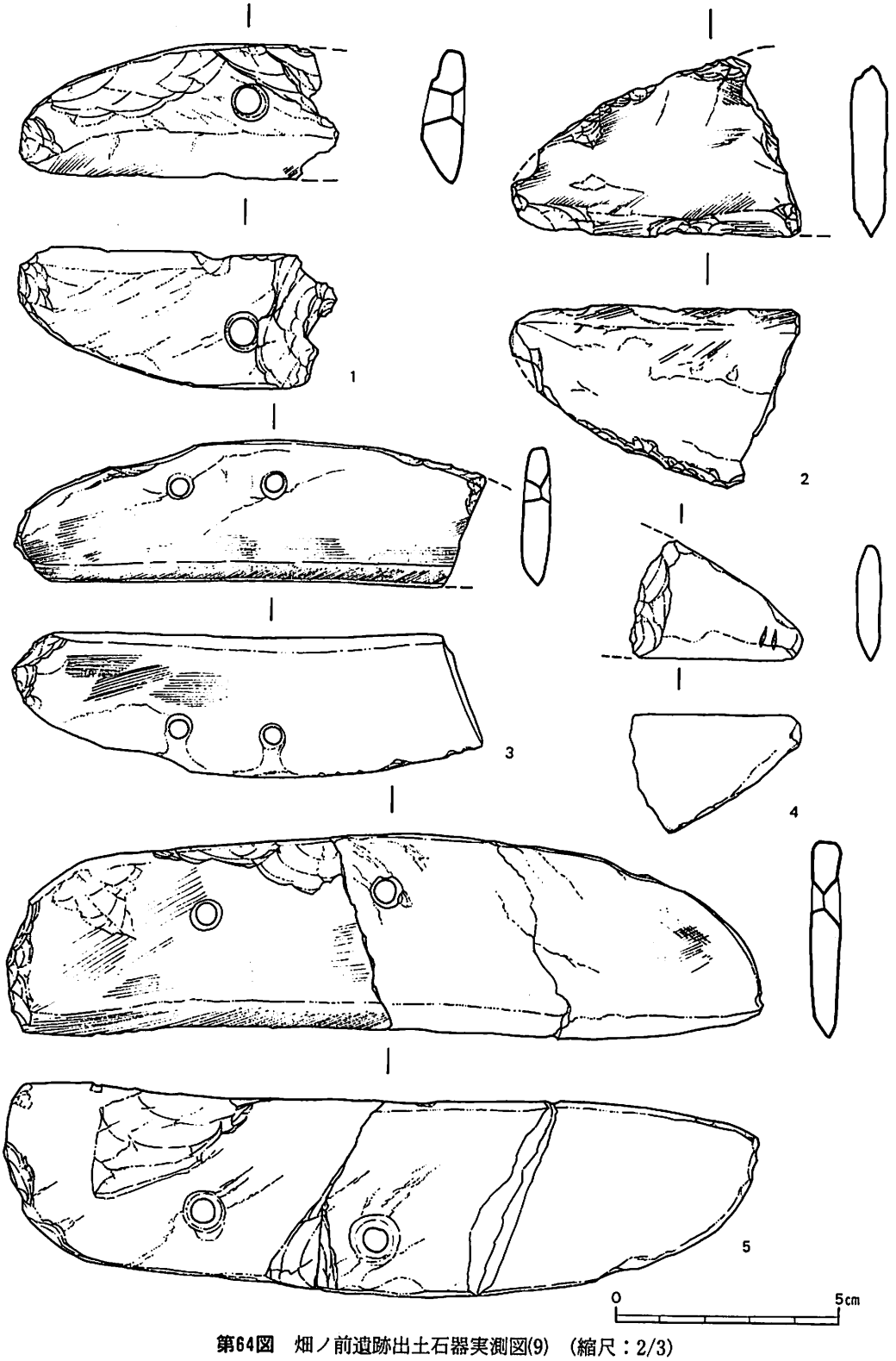
尖頭器(第57図10)　２点出土した。このうち１点のみ図示した。第57図10は石鏃に比べ形態も大きく重量も重い。調整加工は両面全体に施される。もう一つは，形態は第57図10に類似する。調整加工は比較的粗く，未製品の可能性もある。



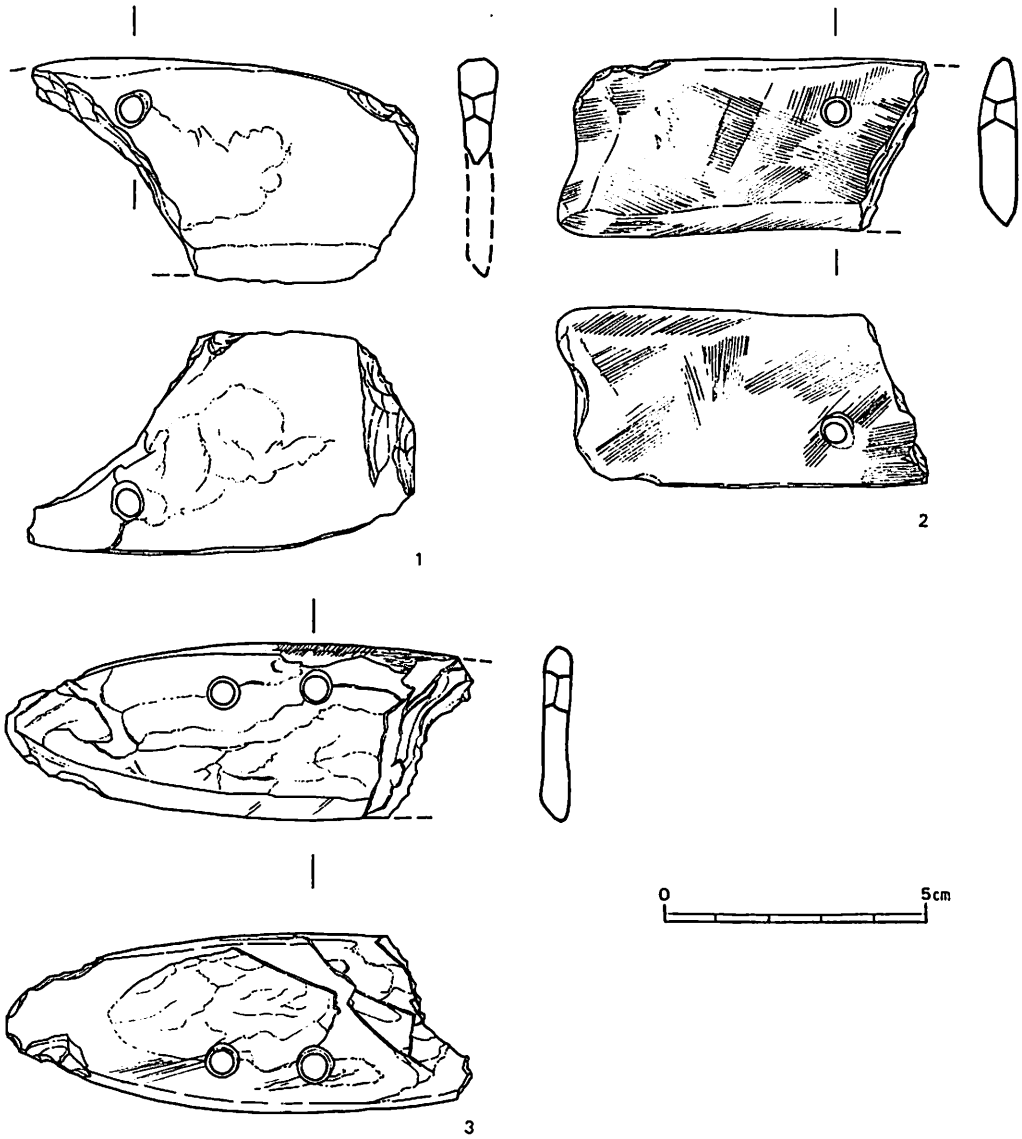
第63図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(8)　(縮尺：2/3)

打製石剣(第58図1～5，第59図1・2，第60図1)　9点出土した。このうち8点を図示した。幅2.5cm前後のもの(第58図1～5)と，幅5cm前後のもの(第59図1・2，第60図1)とが存在する。前者には側縁が平行するもの(第58図1)や，側縁の中央部に最大幅をもつもの(第58図3)がある。しかし，後者は総て側縁が平行する。これらに石戈としての機能を考える説もある[8]。調整加工を両面全体に施すものが大半だが，第58図2は片面に，第58図1は基部に自然面を残す。

石錐(第60図2～10)　9点出土した。頭部と錐部が明瞭に区別されるもの(第60図2～6)，



第64図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(9)　(縮尺：2/3)

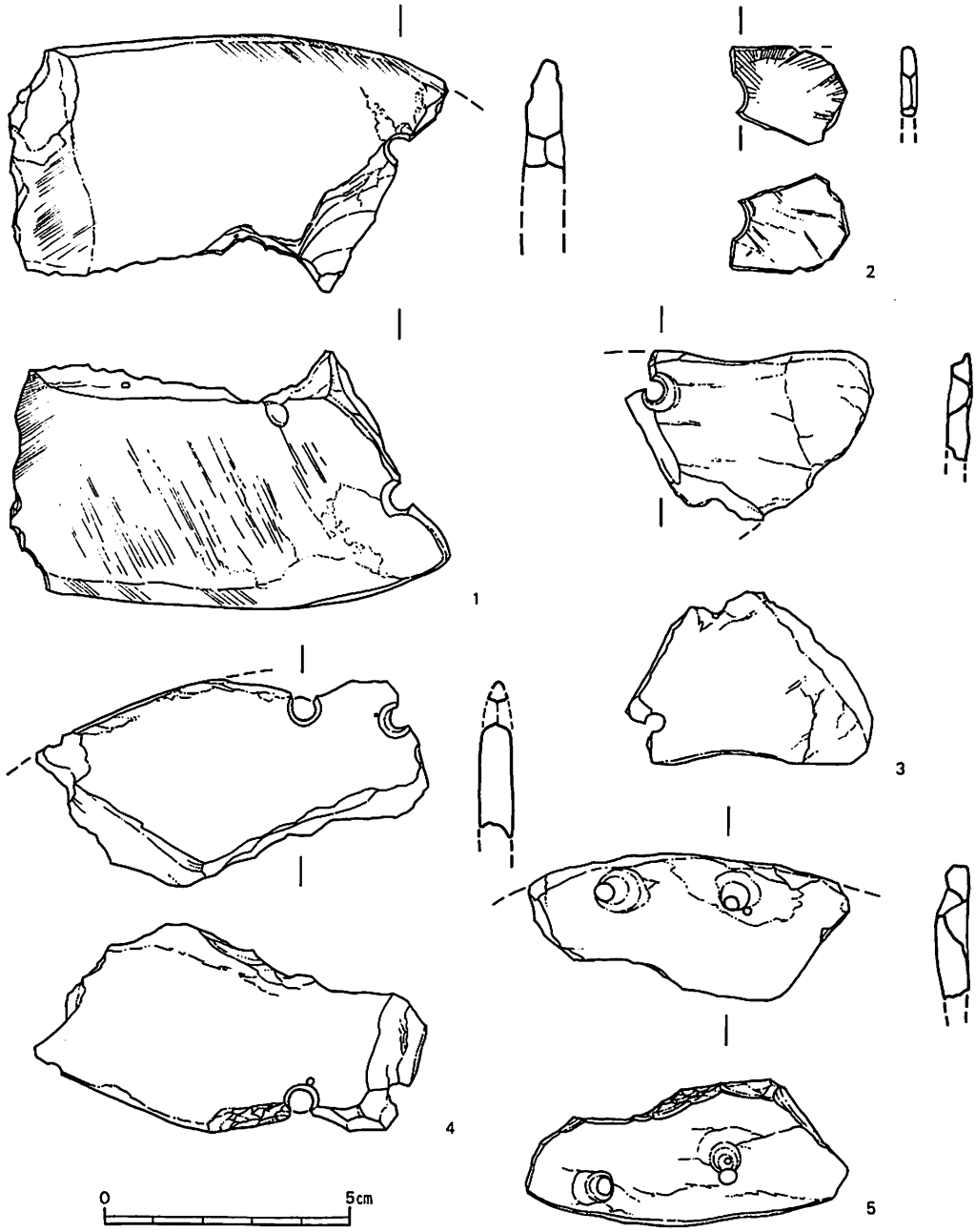


第65図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(10)　(縮尺：2/3)

頸部と錐部が不明瞭で多角形を呈するもの(第60図7・8)，棒状を呈するもの(第60図9・10)がある。第60図8・9には錐部に回転使用痕が認められる。調整加工が両面全体に施されるもの(第60図2)は少なく，一次剥離面を残すものが大半である。自然面を残すもの(第60図3・4・6・10)も多い。

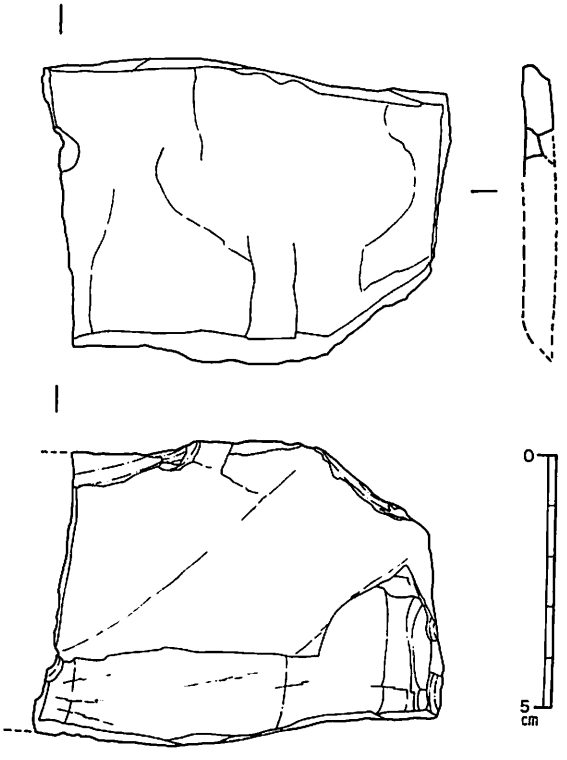
石小刀(第60図11)　1点のみ出土した。破片のため全体の形状は不明である。内彎する側縁には細かな調整加工が施され，刃部を作り出す。

スクレイパー(第61図1～7，第62図1・2，第63図1・2)　15点出土した。そのうち11点



第66図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(11)（縮尺：2/3）

のみ図示した。第61図１～４は薄い剝片の側縁に調整加工を施し刃部を成形するものである。それぞれ両側に一次剝離面を残す。自然面を留めるもの（第61図１・２）もある。第61図６・７は片面のみに調整加工を施し，その後，側縁に細かい剝離を行い刃部を成形するものである。裏面には一次剝離面を留める。第61図５も同様に片面のみに調整加工を施すが，刃部は成形さ



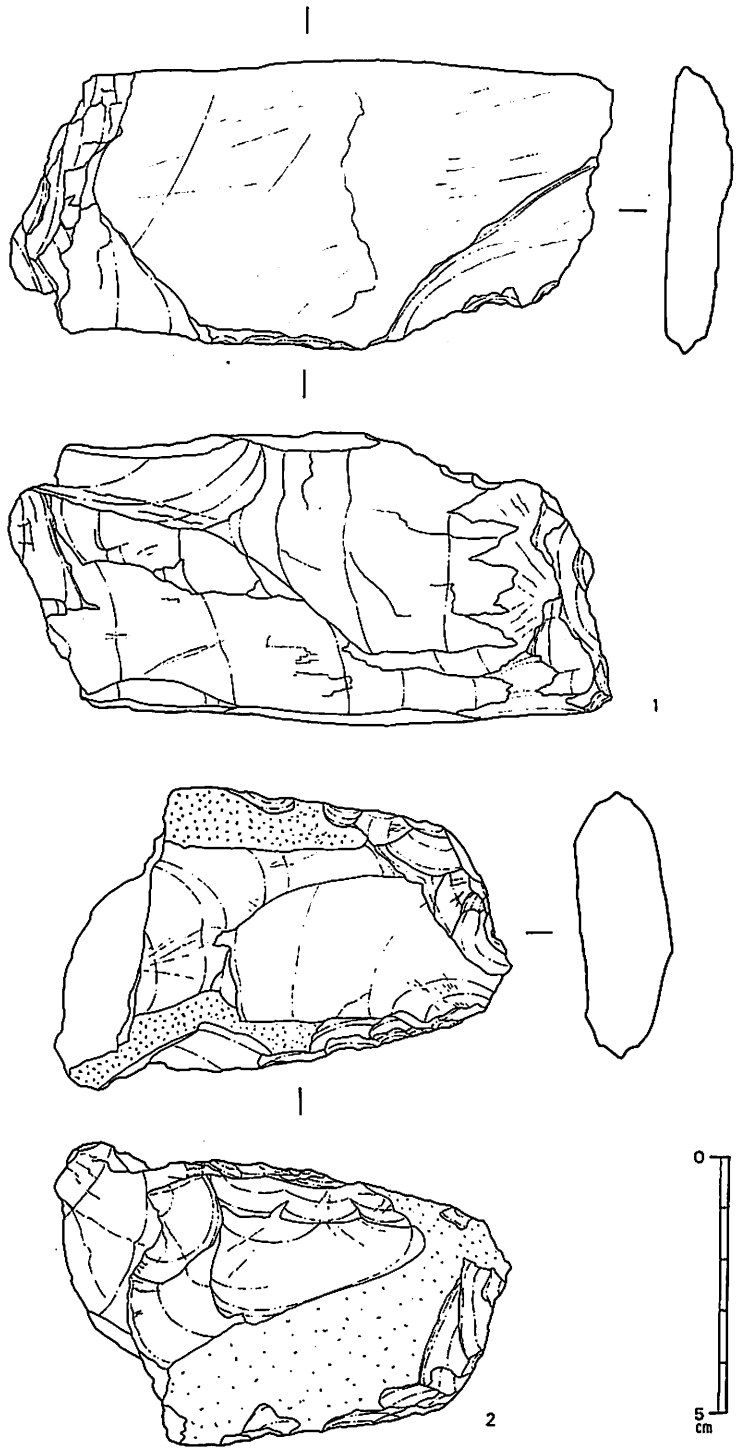
第67図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(12)　(縮尺：2/3)

れない。未製品であろうか。第62図1・2，第63図1・2は，厚い剝片の側縁に調整加工を施し刃部を成形する。両面ともに一次剝離面を残すものが大半である。自然面を残すもの(第62図1・2)もある。

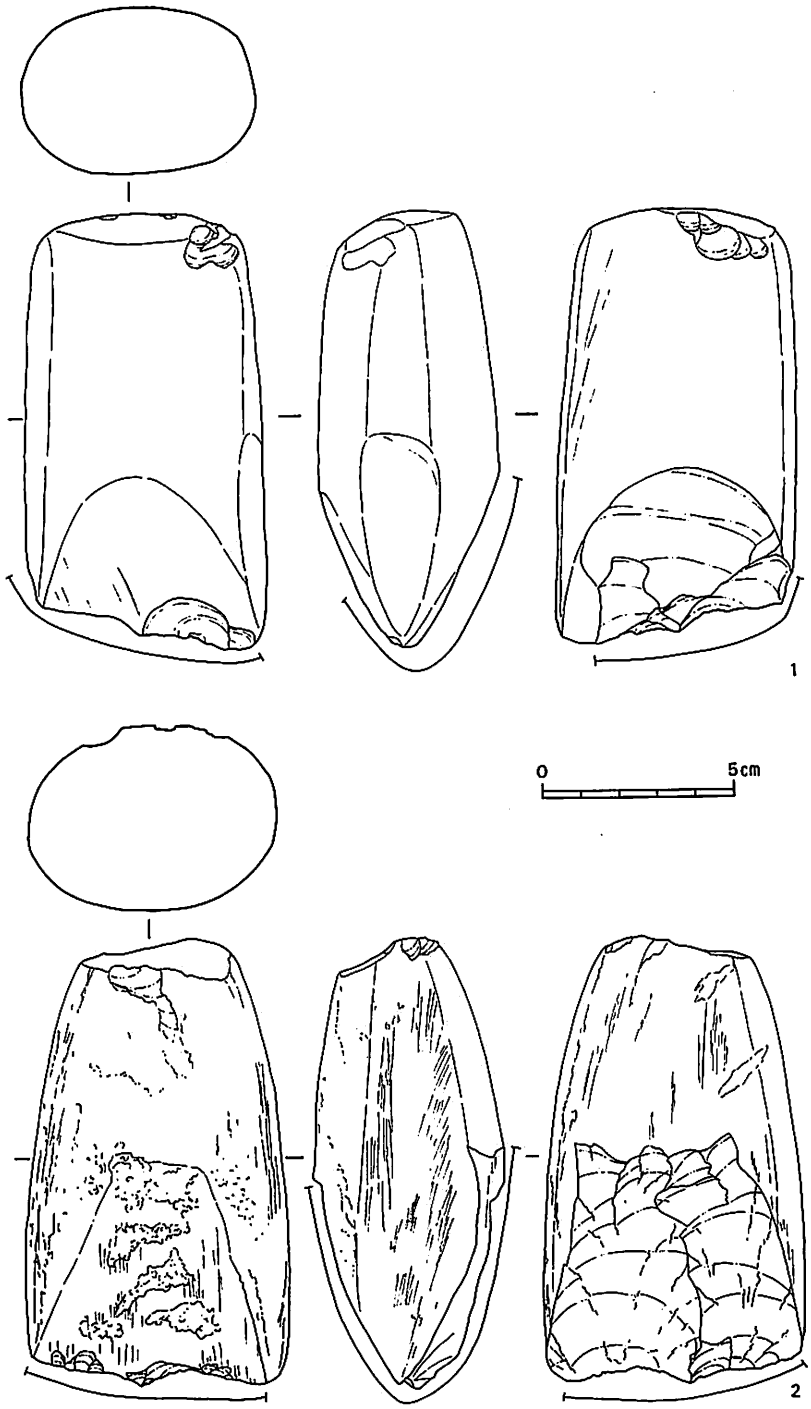
楔形石器　2点出土した。破片のため図示しなかった。形態的には比較的薄いものと厚いものとがある。

磨製石庖丁(第64～第66図)　17点出土した。うち13点を図示した。直刃のもの(第64図，第65図1・2)と外彎刃のもの(第65図3)，刃部欠損のため形態不明のもの(第66図1～5)がある。石材は粘板岩及び緑泥片岩である。第65図5のような長いものと，第65図3のような短かいものとが存在する。成形時と思われる擦痕が認められるもの(第65図1～3・5，第66図2・3，第66図1・2)が大半である。第65図3の刃部には斜め方向の光沢のある擦痕が認められる。使用痕であろうか。第64図3には「紐ズレ」が片面に残る。第66図5も「紐ズレ」により紐孔が変形している。第64図5は2G土壙15と3F16・21区から出土したもので，接合が可能であった。

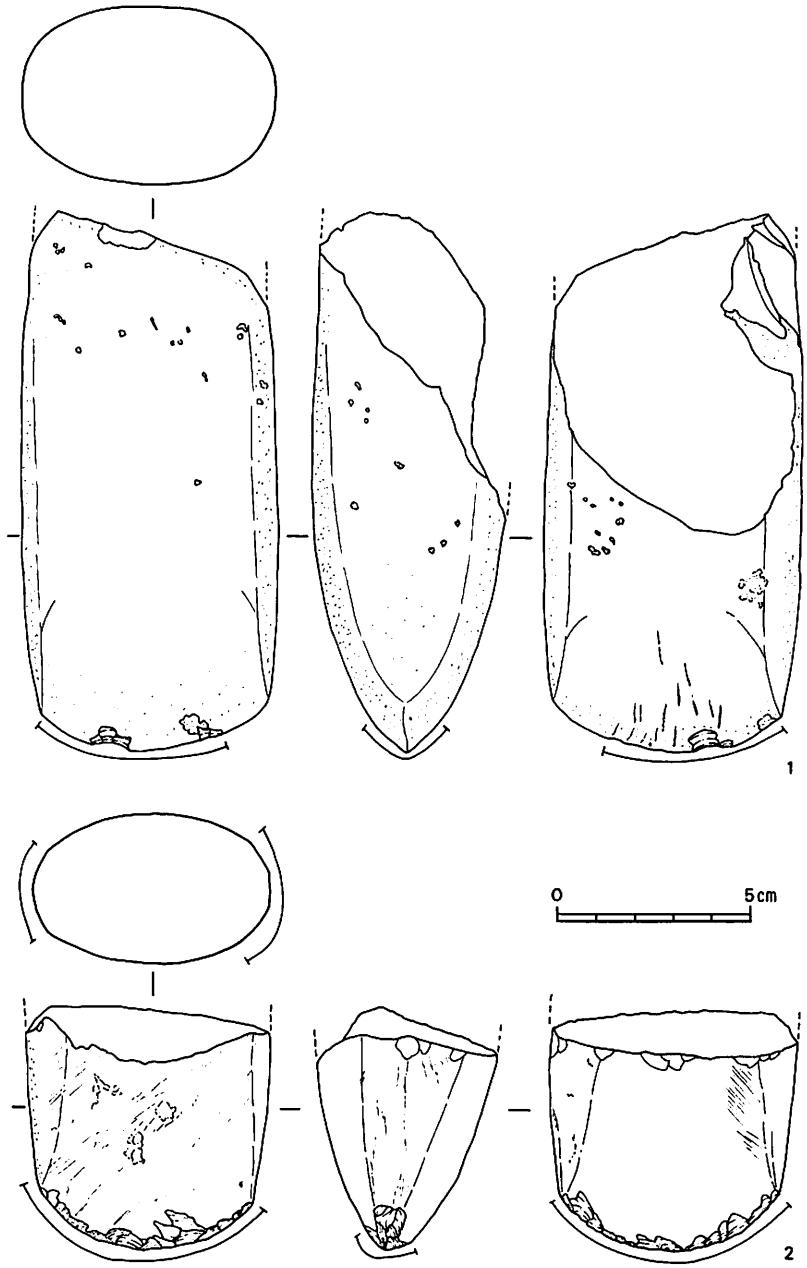
大型石庖丁(第67図)　1点出土した。全体に剝離が激しい。紐孔の一部が残る。下端には刃部を作り出す。



第68図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(13)　(縮尺：2/3)



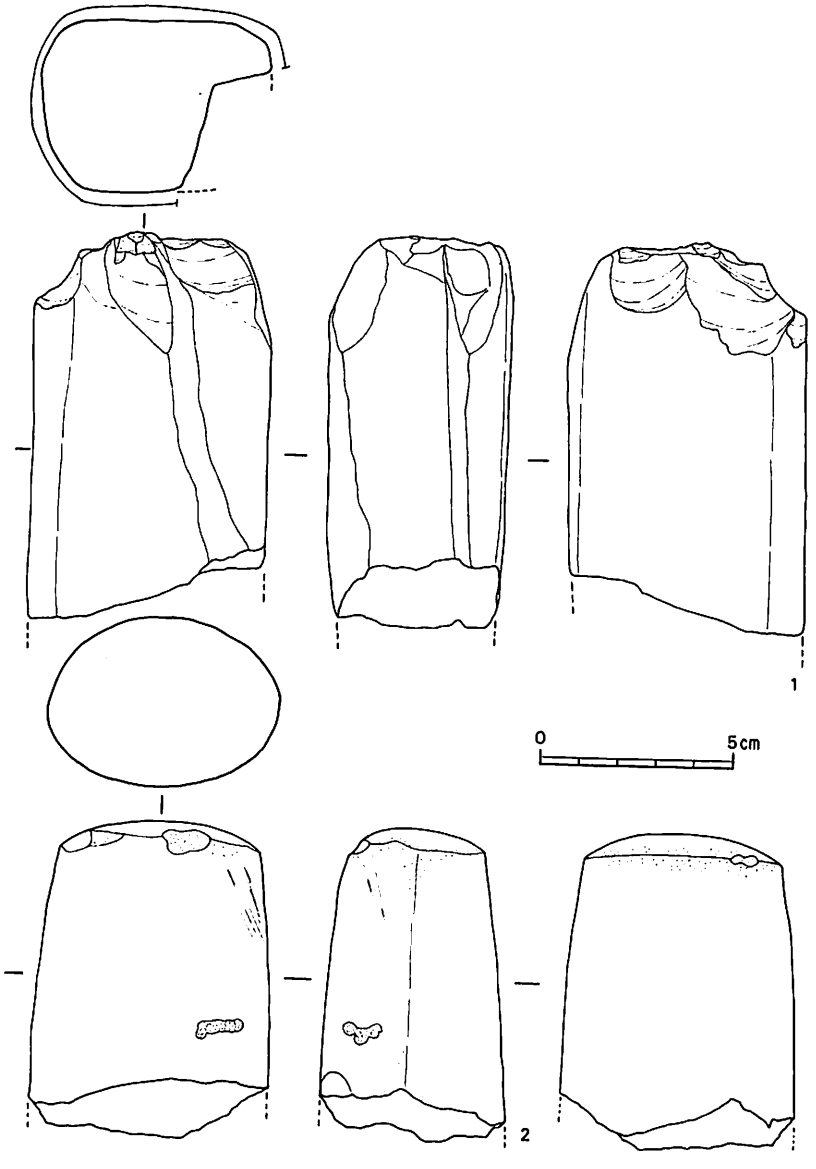
第69図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(14)　(縮尺：1/2)



第70図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(15)　(縮尺：1/2)

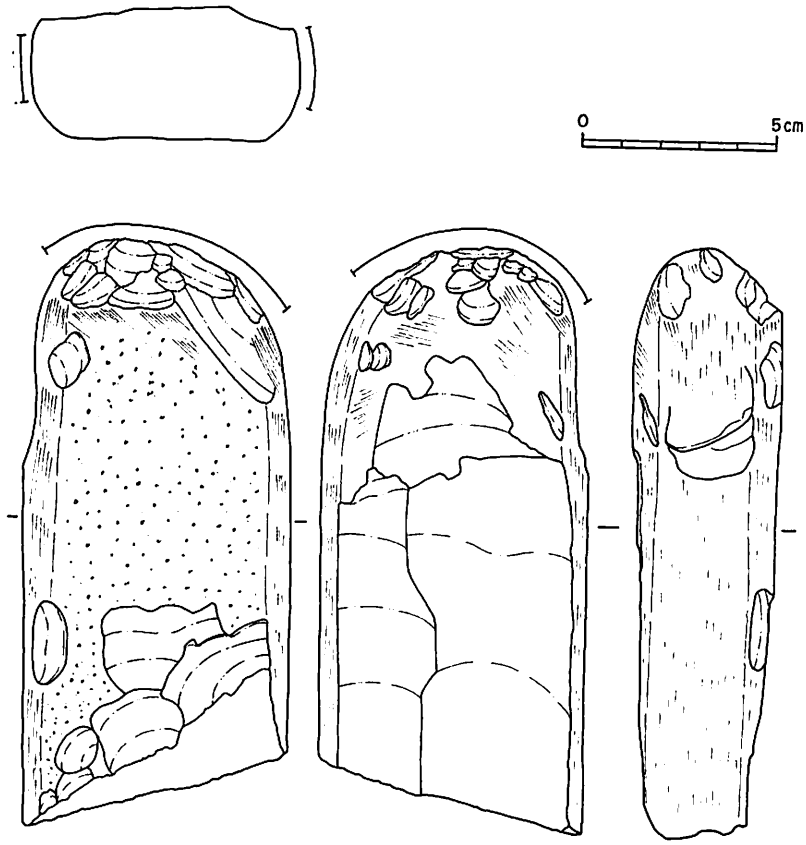
石庖丁未製品(第68図１・２)　４点出土した。うち２点を図示する。第68図１は片面に一次剝離面を残す。片面には研磨を行う。第68図２は比較的薄い母岩の両面に剝離が加えられる。成形の途中で中程を破損している。自然面を両面に留める。

太型蛤刃石斧(第69図１・２，第70図１・２，第71図１・２，第72図)　断面が楕円形を呈す



第71図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(16)　(縮尺：1/2)

もの(第69図1・2，第70図1・2，第71図2)と，隅丸方形を呈するもの(第71図1，第72図)とがある。第69図1は刃部に使用による大きな剝離痕が残る。第69図2も刃部が一度破損し，砥ぎ直しが行われ，再度使用により片面が破損したと思われる。基部には敲打痕が残る。第70図1はこの中では比較的大形である。刃部には使用による細かい剝離痕と擦痕が認められる。擦痕の方向から石斧の使用状況が推測できる。側面は成形の際，研磨が加えられ，面を作る。第71図1・2，第72図1も使用により刃部を欠損する。第72図1は基部に敲打痕がみられることより放棄された後，敲石に転用されたと思われる。



第72図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(17)　(縮尺：1/2)

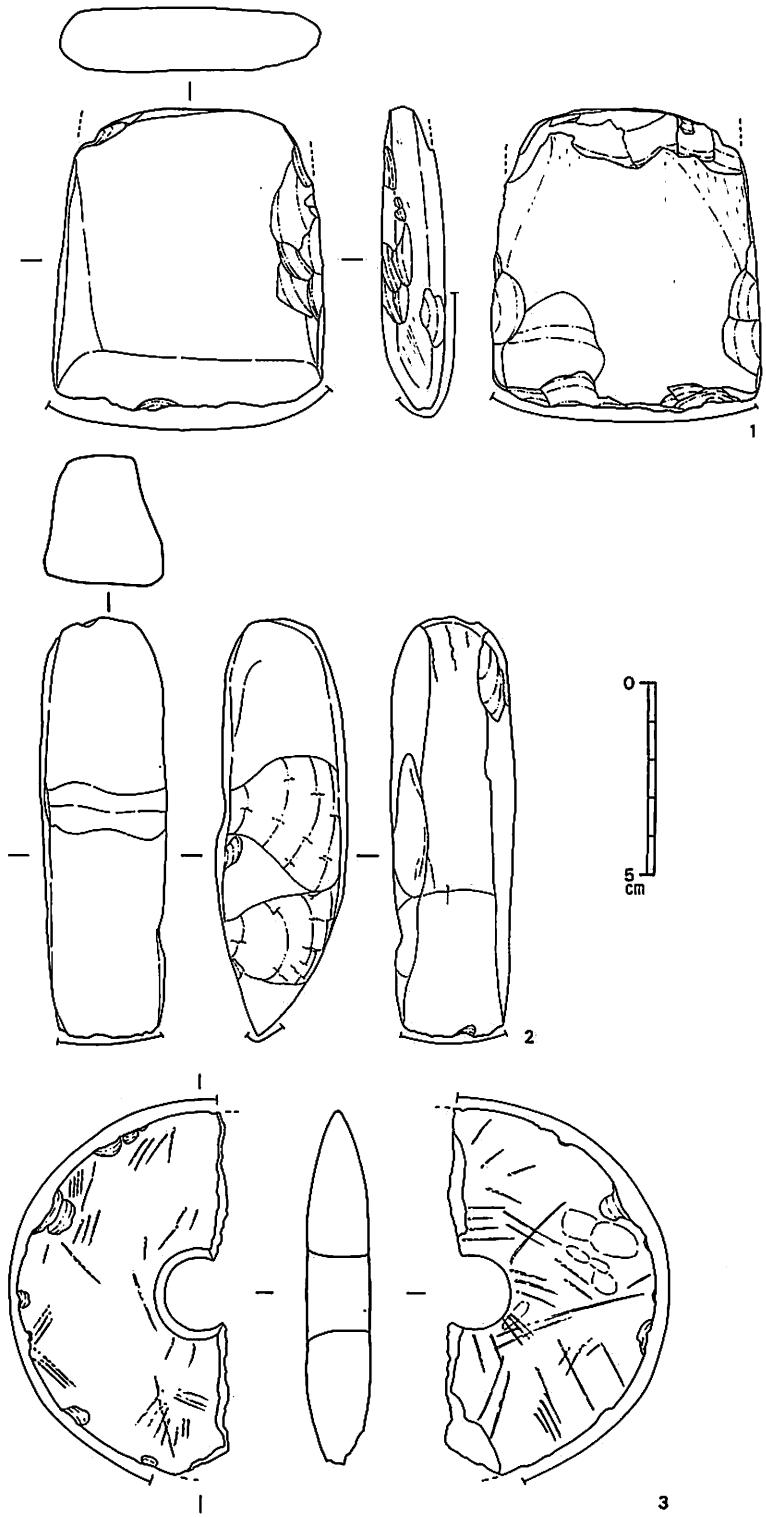
扁平片刃石斧(第73図１)　１点出土した。刃部には使用による剝離痕が認められる。一部に成作時の研磨痕が残る。基部は使用に際して破損したらしく，剝離痕を残すが，後に研磨が行われる。

抉入柱状片刃石斧(第73図２)　１点出土した。全体的に摩滅が激しい。抉りを持つ。側面には成作時の剝離痕を留める。刃部には使用痕が見られる。

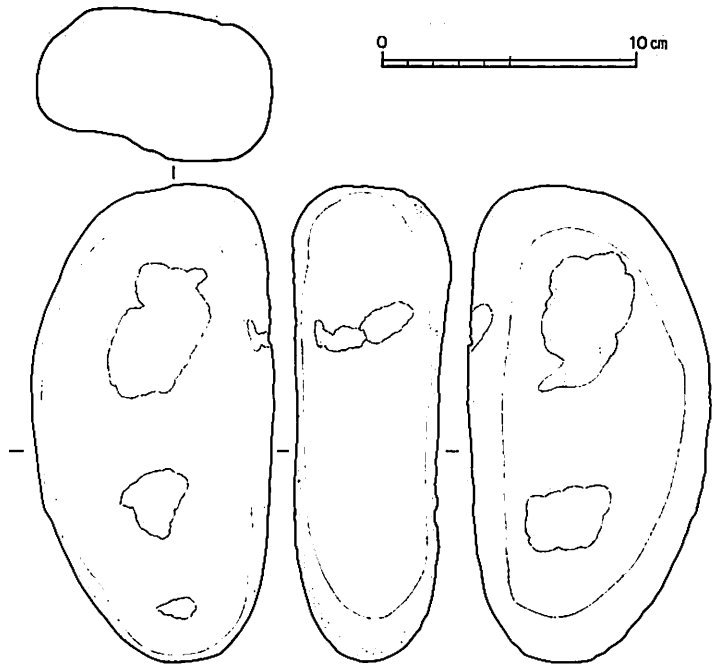
環状石斧(第73図３)　１点出土した。約２分の１を欠損する。片側穿孔である。刃部の断面は二等辺三角形を呈す。全面に使用痕と思われる粗い擦痕が残る。刃部に細かい剝離痕が認められることから，使用時に折損したものと考えられる.

敲石　３点出土した。総てに明瞭な使用痕は認められないため，図示しなかった。しかし，形態により敲石として使用された可能性がある。

台石(第74図)　１点出土した。使用による大きな凹みが両面に残る。側面には敲打痕，擦痕が認められる。石器製作に使用された可能性がある。



第73図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(18)　(縮尺：1/2)



第74図　畑ノ前遺跡出土石器実測図(19)　(縮尺：1/3)

第３章　古墳時代の遺構と遺物

第１節　主要な遺構

畑ノ前遺跡の古墳群は調査区域内の東端部に位置し，周濠の一部のみが検出された古墳も含めて，合計７基が確認された。古く奈良時代に破壊され，墳丘の大半は残存せず，遺物の出土も少ない。各古墳の名称は，北側より１～７号墳とした(第75図，図版第20上)。

１．１号墳(第76図)

大半が削平されており，周濠の西側約３分の１のみが検出された。周濠東側と主体部はすでに消失していた。

周濠は現存部で幅1.4～2.4m，深さ平均0.5mを測る。本古墳は，周濠の形態から円墳と考えられ，その復元推定値は，周濠の内側での径約９m，外側での径約12mを測る規模のものと考えられる。

２．２号墳(第76図)

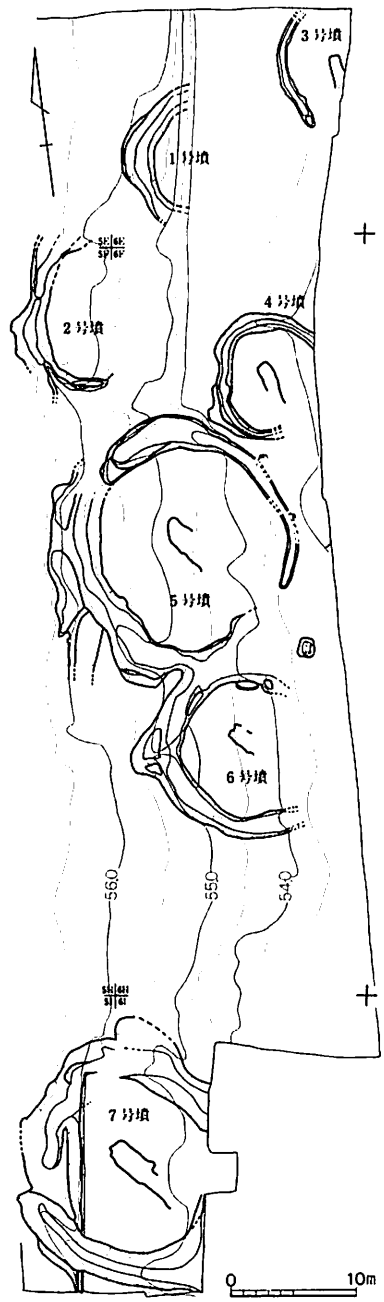
１号墳と同じく周濠のみが検出され，主体部はすでに消失していた。周濠は，南西部と北西部の一部が確認されているが，その北西端は，昭和59年度の試掘調査によるトレンチにかかっている。

周濠は，現存部で幅1.4～2.7m，深さ平均0.4mを測る。本古墳は東へ向かって落ちる傾斜地に立地しているため，周濠の西上端がやや直線的に巡ってはいるが，ほぼ円墳と考えられる。現存する約２分の１の周濠での復元推定値は，内側の径約10.5mを測る規模のものである。

３．３号墳(第76・77図，図版第20下)

本古墳は，調査区域の北東端部に位置するため，周濠の北端および主体部の東側が調査区域外となっている。また，本古墳を南北に横切る中世の溝状遺構のために，周濠の南端は削平され，調査区域内に残存する主体部も総ての腰石がすでに消失しており，腰石の抜き跡のみの検出となった。

周濠は，現存部で幅約0.7m，深さ平均約0.2mを測り，

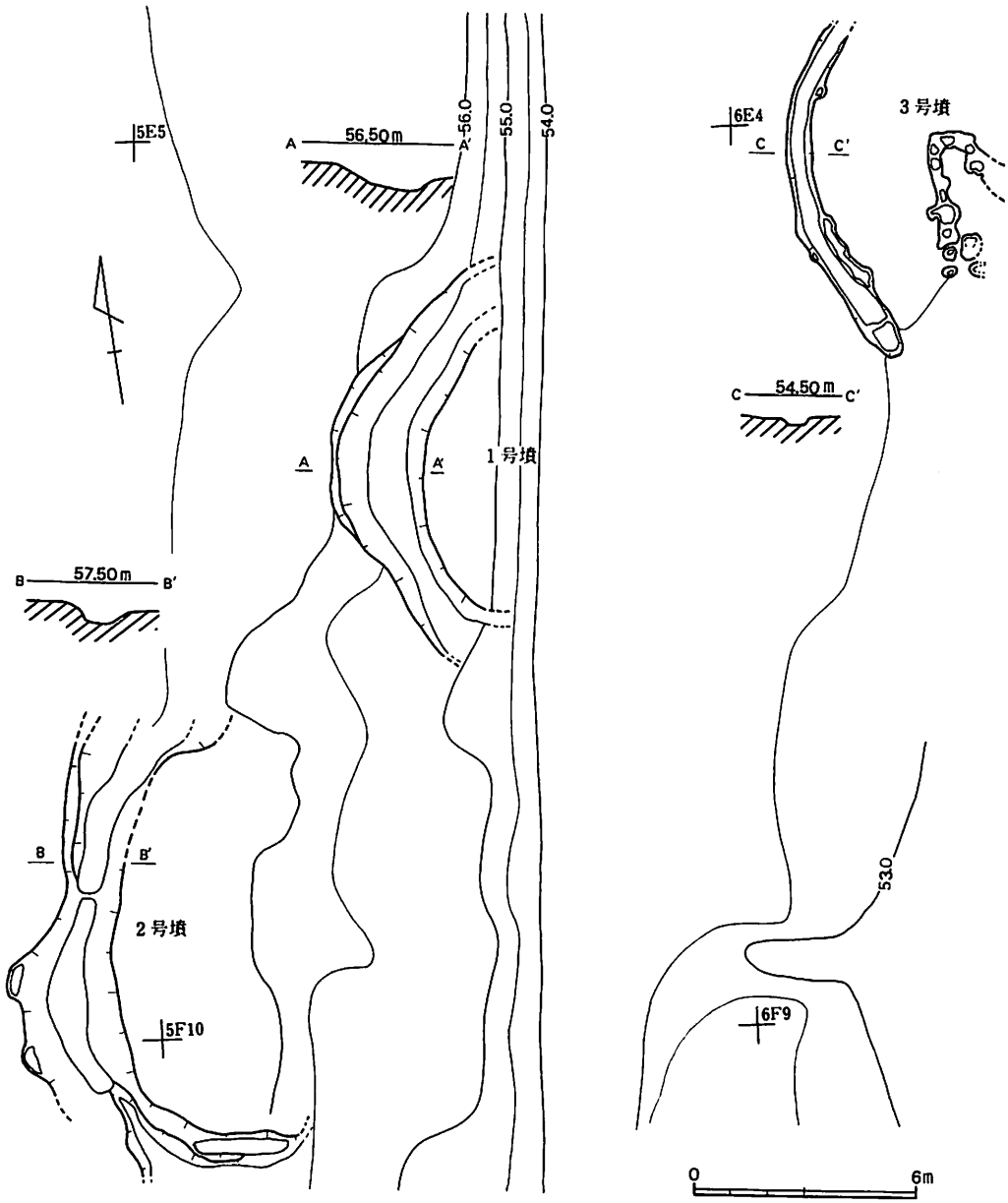


第75図　畑ノ前遺跡古墳群分布図(縮尺：1/600)

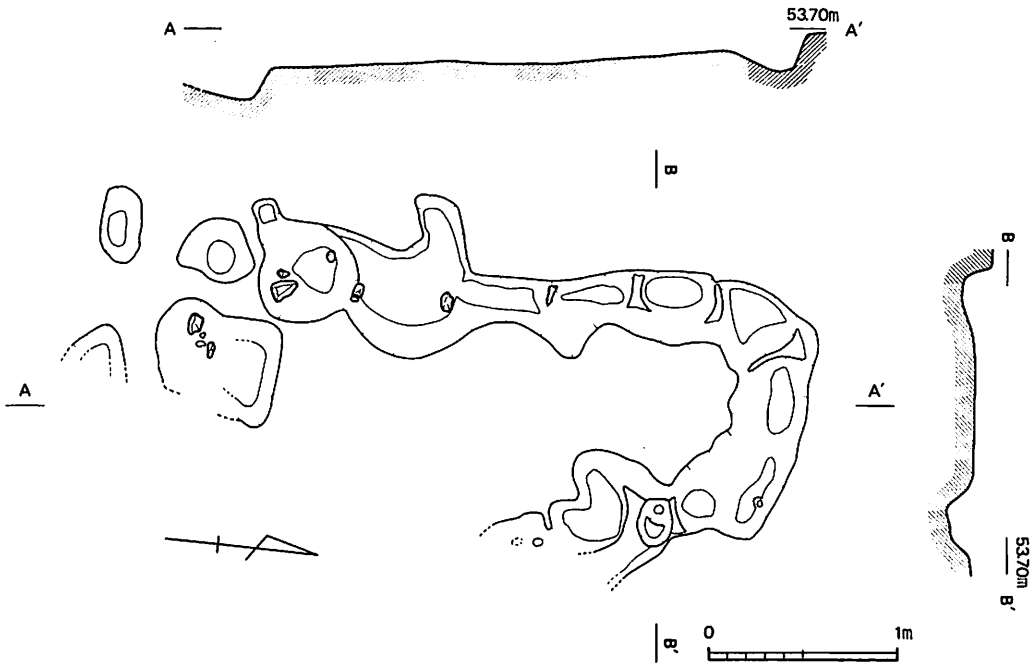
現存する約４分の１の周濠から復元した推定測値は，内径約7.8m，外径約9.0mの円墳と考えられる。

主体部は，中軸をN－６°－W方向にとり，南に開口する全長3.5m以上の横穴式石室である。袖の有無は確かではないが，腰石の抜き跡や奥壁からみて右袖を有する片袖式と考えられ，玄室長2.45m，幅0.68mを測る。

この古墳では，６Ｅ東壁面にかかるところから杯身１点，周濠内から壺１点が出土している。



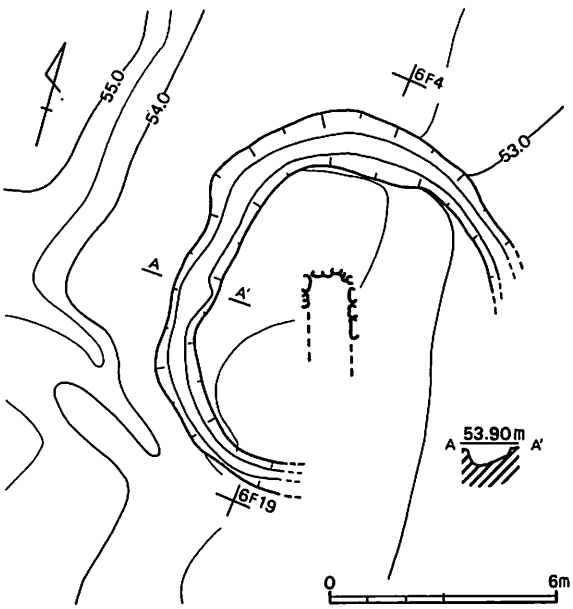
第76図　畑ノ前遺跡１・２・３号墳実測図(縮尺：1/200)



第77図　畑ノ前遺跡3号墳主体部実測図(縮尺：1/40)

4．4号墳(第78・79図，図版第21)

本古墳は，周濠の東端部が調査区域外であり，また，主体部の開口部を中世の溝状遺構によって切られているため，南東部が明らかではない。



第78図　畑ノ前遺跡4号墳実測図(縮尺：1/200)

周濠は，現存部で幅0.7～1.5m，深さ平均約0.5mを測る。本古墳は，周濠の形態から円墳と考えられ，その復元推定値は周濠内径8m，外径10mを測る。

石室内出土遺物として，奥壁西隅から小形壺1点，玄室中央部付近に鉄鏃1点，杯蓋1点，杯身1点，壺1点，平瓶1点，奥壁から1.85mを測る東壁近くに銀環1点が出土し，さらに，6F東壁断面から瑯1点が出土した。

5．5号墳(第80図，図版第22上)

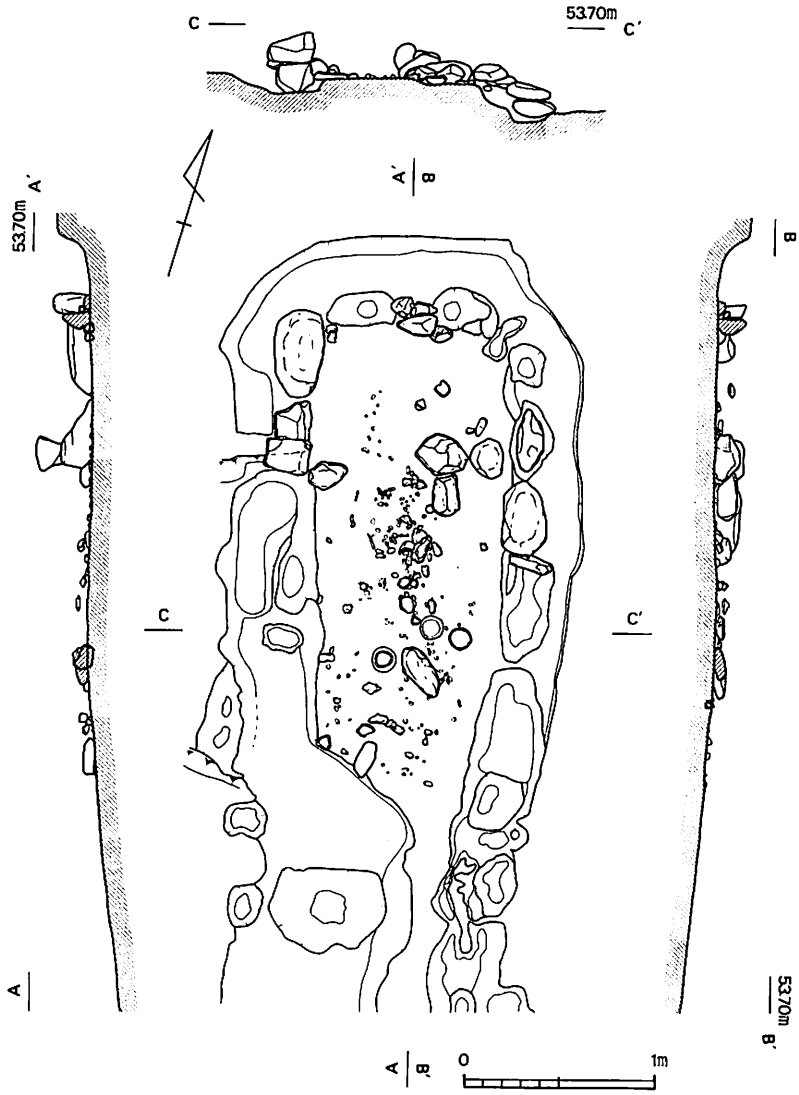
周濠はほぼ全周が残存しており，規模は，内径15.4m，外径19.8m，幅2.2m，深さ平均0.5mを測る。墳形は円墳である。周濠の北西部を奈良時代の5

F石組溝が切っており，また，北東部にも後世のピットが周濠の外周にかかっている。本古墳の周濠の南面は，続く6号墳の周濠と交差して明らかではない。

主体部については，中軸をN－42°－W方向にとり，南東方向に開口する横穴式石室であることが判明しているが，それ以外については腰石が総て抜き取られているため，全長が4.8m以上，幅約2m弱であること位しかわからない。

6．6号墳(第80・81図，図版第22下)

周濠の北辺は，先の5号墳の周濠と交差しており，東辺は中世の溝状遺構に削り取られているが，その他はよく原形をとどめている。周濠は，幅2.2m，深さ平均0.36mを測り，内径10.8m，外径15.2mの円墳である。

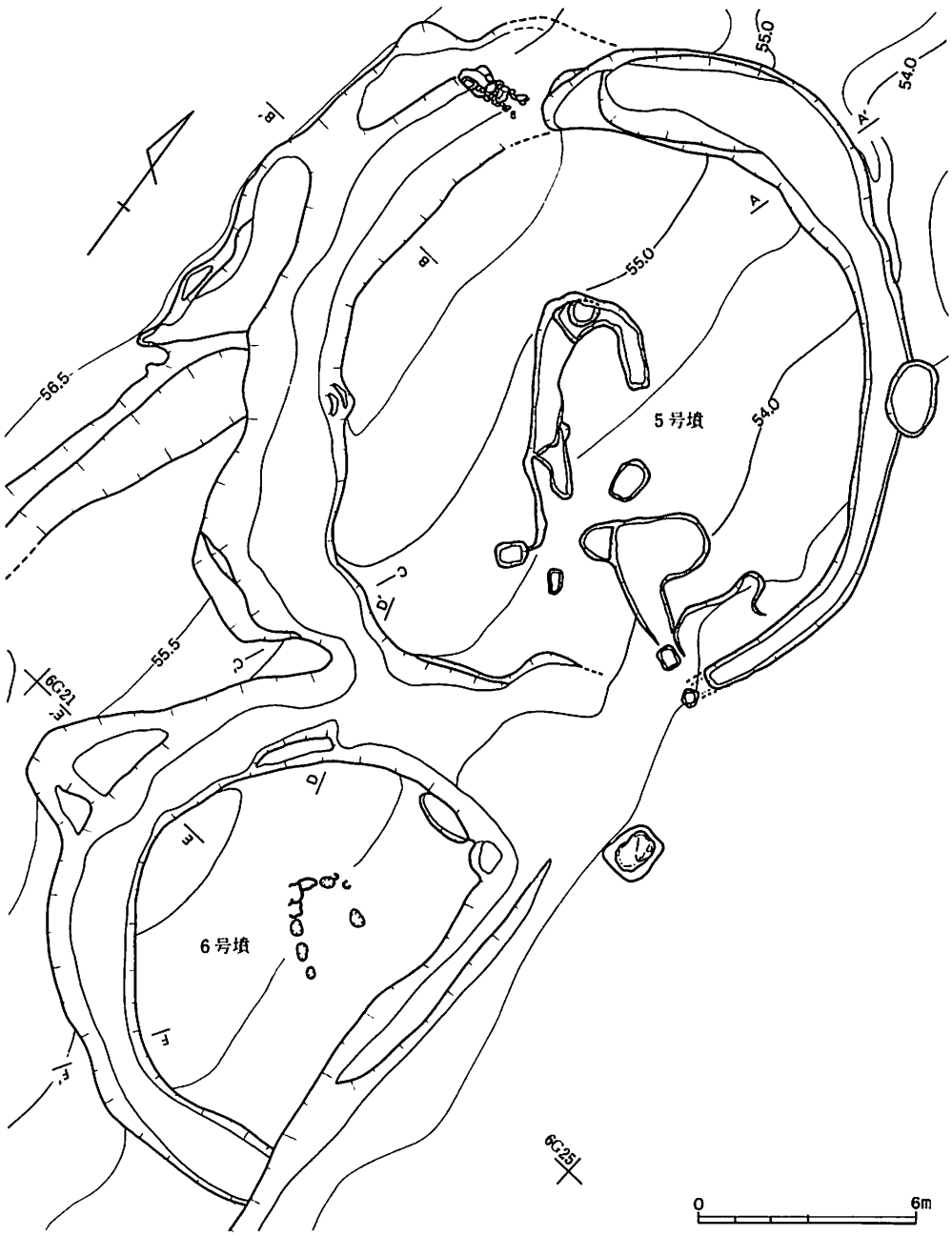


第79図　畑ノ前遺跡4号墳主体部実測図(縮尺：1/40)

主体部は，袖の有無は不明であるが，中軸をN—42°—Wの方向にとり，南東に開口する横穴式石室である。全長は2.5m以上，奥壁付近の幅1.17mを測る。

石室内に使用されている石材には，花崗岩と河原石の2種類が使用されている。

本古墳の出土遺物としては，6H4区の奈良時代包含層からではあるが，本古墳に付属する



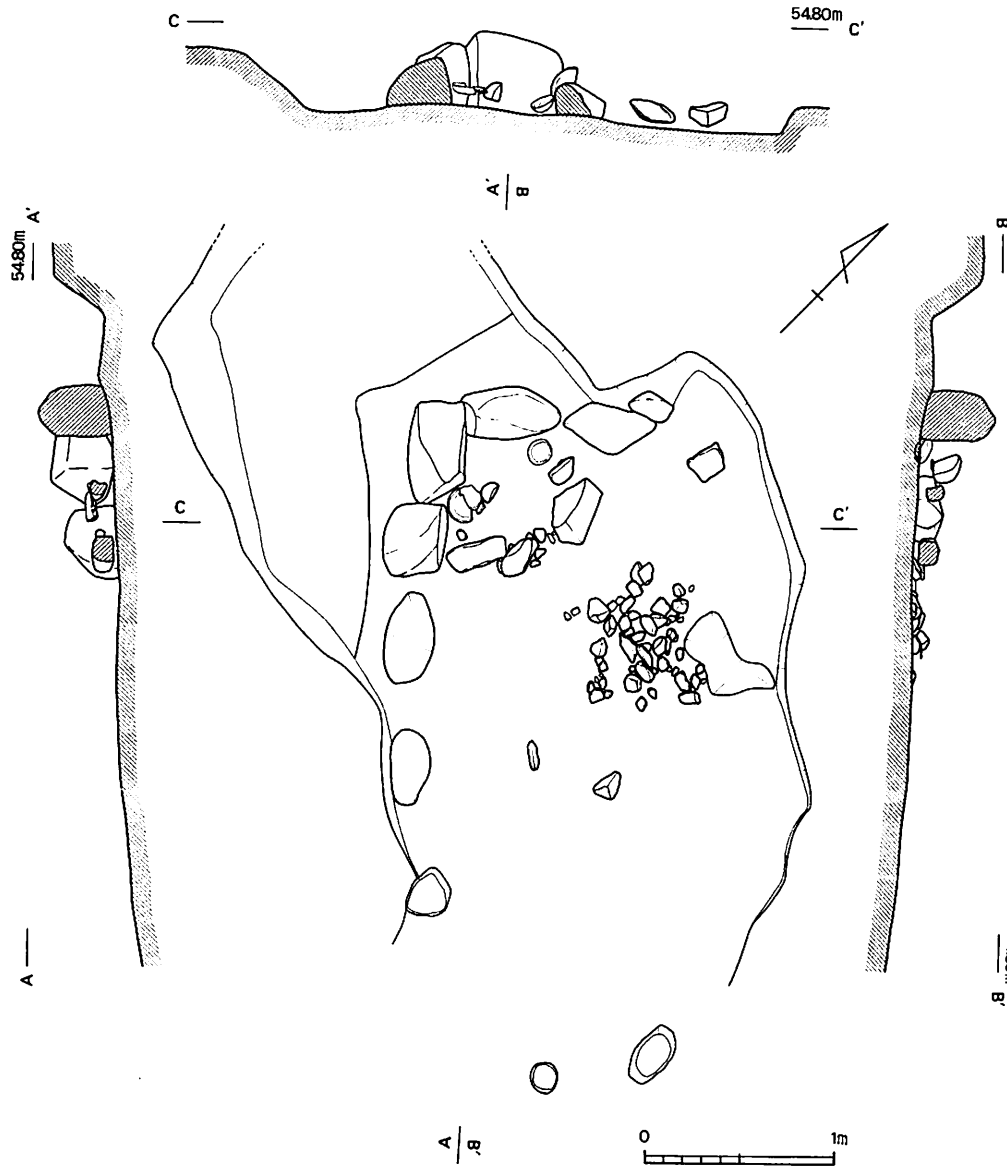
第80図　畑ノ前遺跡5・6号墳実測図(縮尺：1/200)

遺物と考えられる古墳時代の須恵器の杯身１点が出土している。また，石室内奥壁付近からは，奈良時代の土師器の椀１点，杯２点，皿１点が出土しており，石室の一部が利用されていたことが考えられる。

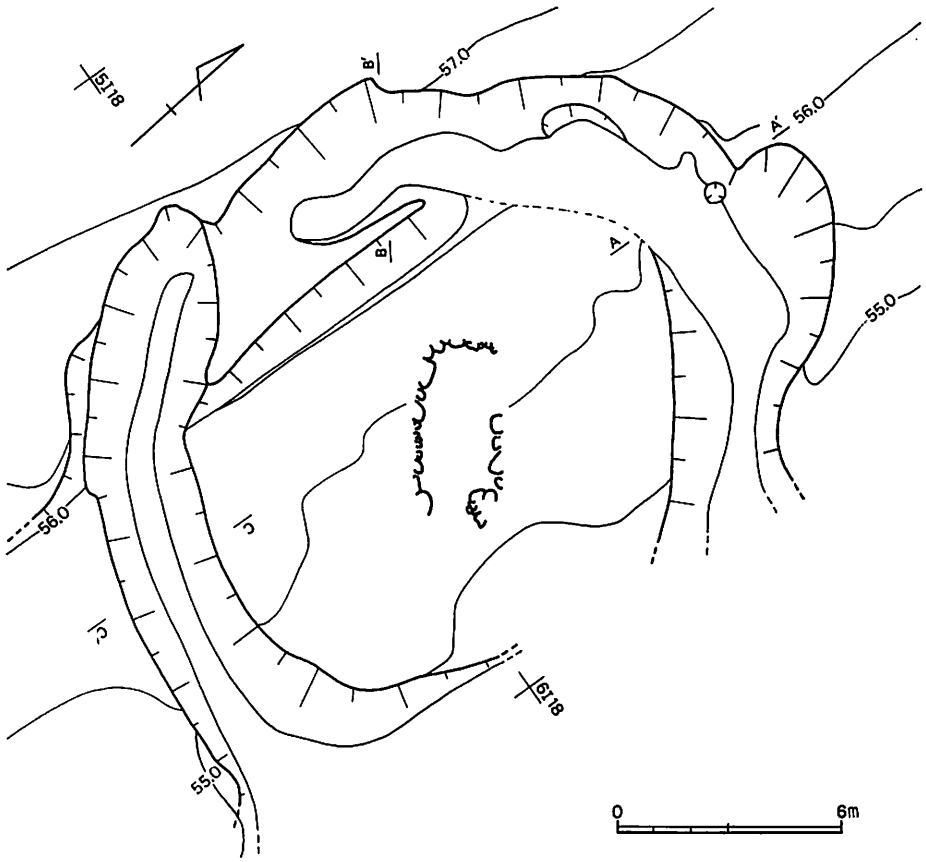
７．７号墳(第82・83図，図版第23)

本古墳は，調査区域内南東端に位置する。周濠の規模は幅2.6m，深さ0.6mを測り，内径13.4m，外径18.6mの円墳である。

主体部は開口部が削平されているが，中軸をN－43°－W方向にとり，南東に開口する横穴式



第81図　畑ノ前遺跡６号墳主体部実測図(縮尺：1/40)



第82図　畑ノ前遺跡7号墳実測図(縮尺：1/200)

石室である。石室全長は4.6m以上であり，腰石は総て抜き取られているが，奥壁からみて右袖にあたる石の抜き取り跡を袖とみなすならば，玄室長は3.8mとなり，中央最大幅は1.9m，袖幅0.3mの片袖式となる。

本古墳出土遺物には，石室中央部から，高杯1点，壺蓋1点，羨道部あたりから杯蓋3点，高杯1点，鼓1点，壺蓋2点，鉄鉾1点など，周濠南東部から杯身1点がある。

第2節　遺　　物

1．3号墳出土遺物(第84図)

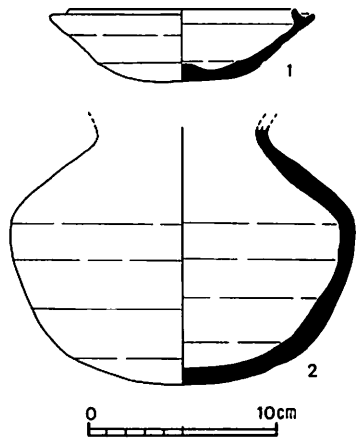
須恵器

杯身(第84図1)　口径11.8cm，受け部径14.0cm，高さ3.9cmを測り，全体としてやや扁平な感を与える。たちあがりは短く内傾し，端部は丸く貼り付け手法によって作られている。底部には時計回りのロクロを使用したケズリがみられ，その他の部分には回転ナデ調整がみられる。色調は灰白色を呈し，焼成は良好，胎土には長石とわずかに黒色砂粒を含んでややあらめである。

第83図　畑ノ前遺跡７号墳主体部実測図(縮尺：1/40)

壺(第84図2)　頸部が欠失している。体部の最大径は18.2cmを測り，肩はなだらかに丸く，丸底である。体部下半から底部にかけて時計回りのロクロを使用した回転ケズリ調整が見られ，その他の部分には回転ナデ調整が見られる。ただし，底部内面に不定方向のナデ調整がみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は良好，胎土はややあらく，長石を含んでいる。

この古墳の年代は，出土遺物より6世紀後半頃と考えられる。



第84図　畑ノ前遺跡3号墳出土遺物実測図(縮尺：1/4)

2．4号墳出土遺物(第85図，図版第59)

須恵器

杯蓋(第85図1)　完形に近いもので，口径9.8cm，高さ3.2cmを測る。天井部が平たく，不調整である。その他の部分には回転ナデ調整がみられる。色調は淡青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には約1.5mmの長石が含まれている。

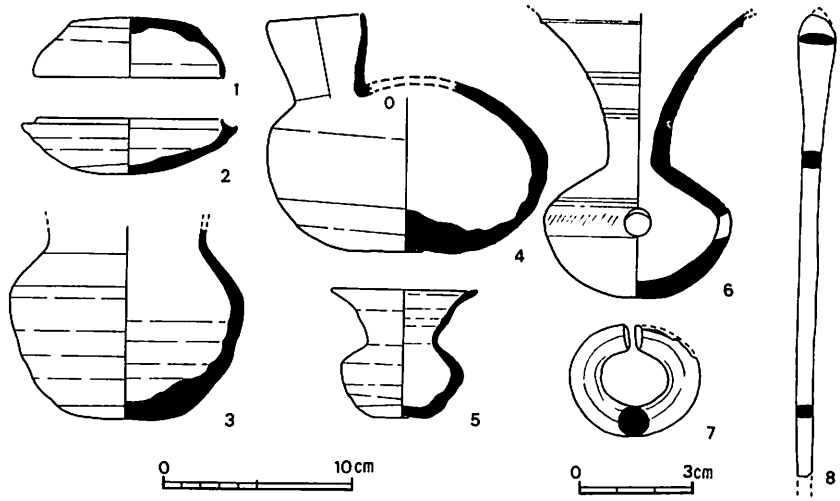
杯身(第85図2)　完形で口径9.6cm，受け部径11.2cm，高さ3.0cmを測る。たちあがりは短く内傾し，端部は薄くシャープである。底部はケズリ調整を施さず切りはなしたのみで，クシ状工具のようなものを使用した一定方向ナデ調整がみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は堅致，胎土には約1mmの長石を含むが精致である。

瓶(第85図6)　口縁部が欠失しているが，ほぼ完形に近い。体部最大幅は9.7cm，頸部最小幅からラッパ状に外反して，比較的長い。口縁部付近外面には，1条の突帯を巡らしている。頸部には，ナデによる凹線が2条巡らされているのが2段あり，その間をハケ目による上方から下方への平行文様が刻まれている。体部の最大幅を測る部位の上下に2条と1条の凹線が巡っており，その間を列点文による斜線文様が刻まれ，外から内への穿孔が一つある。体部約2分の1に，時計回りのロクロを使用した回転ケズリ調整がみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密で長石を含んでいる。

壺(第85図3)　頸部を欠失しているが，体部は完全な形をとどめている。体部最大径は12.2cm，わずかに残存する頸部は最小径8.2cmを測る。体部は丸く肩部がわずかに張り出す程度である。体底部はヘラキリ不調整で，他の部分には回転ナデ調整が施されている。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には約1～2mmの長石，石英および発泡した黒色砂粒が含まれている。

小型平底壺(第85図5)　口頸部のみ約3分の2欠損しているが，比較的良く全形をとどめている。口径7.7cm，頸部径3.7cm，体部最大径6.4cm，高さ6.8cmを測る小型の広口壺である。全体を回転ナデによって調整しているが，底部のみ不定方向のナデ調整が施されている。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には約1mmの長石を含んでいる。

平瓶(第85図4)　口頸部の大半と体部の一部が欠損する。体部最大径で15cmを測り，肩部にはボタン状の粘土粒を2個張り付けていたと思われるが，うち1個を欠失している。体底部に



第85図　畑ノ前遺跡４号墳出土遺物実測図(縮尺：1/4，鉄器・耳環は1/2)

は時計回りのロクロを使用した回転ケズリがみられ，かつ底部中央部には不定方向のナデ調整，体部中央から肩部にかけてカキ目調整，その他の部分は回転ナデ調整がみられる。色調は淡青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には約0.5～２㎜の長石，約１～２㎜の石英および発泡した黒色砂粒が含まれている。

金属器

鉄鏃(第85図８)　形態は長頸片丸造ノミ箭式で，鏃身の鋒部が丸味を帯び，関部が明瞭でないノミ箭式である。鋒先をやや欠損しているが，身部残存長は2.8cm，断面は片丸造で厚みは0.25cmである。頸部残存長は9.5cmで，断面は長方形を呈し，上方で0.5×0.4cm，下方で0.4×0.3cmとなっている。箆被部から茎部はすでに欠失していて不明である。重量は7.9gを測る。

銀環(第85図７)　銅芯銀張りである。表面欠損部は，内面の錆化が進み，緑白色を呈している。内径1.75～1.45cm，外径3.4～2.9cm，断面径0.82～0.78cmを測る。重量は25.3gである。

この古墳の年代は，出土遺物より６世紀末～７世紀初頭と考えられる。

３．６号墳出土遺物(第86図，図版第59)

須恵器

杯身(第86図１)　完形で出土し，口径9.8cm，受け部径11.9cm，高さ3.5cmを測る。たちあがり部は，貼り付け手法による。底部は時計回りのロクロを使用したケズリ調整の後にさらにナデ調整を施す。中央部には不調整の部分が残る。他の部分は回転ナデ調整である。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密で，長石を含んでいる。

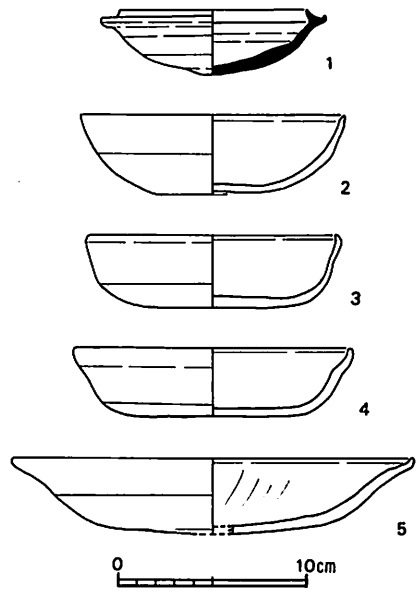
土師器

椀(第86図２)　口縁部がやや欠損するが，口径14.0cm，高さ4.2cmを測り，口縁端部の形態は，垂直につまみあげている。底部外面は，指オサエによる比較的明瞭な調整がみられ，指頭圧痕が残されており，炭化物の付着がみられる。その他の部分は，表面の摩滅が激しいが，ヨコナ

デ調整と考えられる。色調は橙褐色を呈し，焼成はやや軟質であり，胎土は精緻で，雲母・長石を含んでいる。

杯(第86図3・4)　3は，口径13cm，高さ3.9cmを測り，口縁部はやや内傾気味につまみあげている。底部外面の調整は指オサエの後ナデており，その他の部分にはヨコナデ調整がみられる。色調は橙褐色を呈し，焼成は良好，胎土は精緻にして石英・長石・黒色砂粒を含んでいる。

4は，口径14.6cm，高さ3.6cmを測り，口縁部はやや内傾気味に丸くつまみあげている。底部外面は，手持ちヘラケズリの後ナデており，底部外面約2分の1に炭化物が付着している。色調は橙褐色を呈し，焼成は良好，胎土は精緻にして長石・黒色砂粒を含んでいる。



第86図　畑ノ前遺跡6号墳出土遺物実測図(縮尺：1/4)

皿(第86図5)　口径19cm，高さ4cmを測り，口縁部は横に広がるようなS字状を呈し，端部は垂直につまみあげている。内面には斜放線文と螺旋文による暗文を施す。調整は4と同じく，底部外面が一定方向のナデ，下半が手持ちヘラケズリの後にナデ，その他の部分にはヨコナデ調整がみられる。また，底部外面のみに炭化物が付着している。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好，胎土は精緻にして長石を含んでいる。

この古墳の年代については，須恵器杯より7世紀初頭と考えられる。さらに，土師器は8世紀代のものである。

4．7号墳出土遺物(第87図，図版第60)

須恵器

杯蓋(第87図1・2・4)　1はほぼ完形をとどめ，口径10.6cm，高さ3.2cmを測る。天井部外面は4号墳出土の杯蓋と同じく，ヘラキリ不調整で平たい形状を呈している。その他の部分には回転ナデ調整がみられ，底部内面中央部には一定方向のナデ調整がみられる。色調は灰白色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密である。

2は口径11cm，高さ3.6cmを測り，口縁部は垂直に下垂し，端部は鋭角な作りとなっている。天井部はヘラキリ不調整で，その他の部分には回転ナデ調整がみられる。色調は淡青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密である。

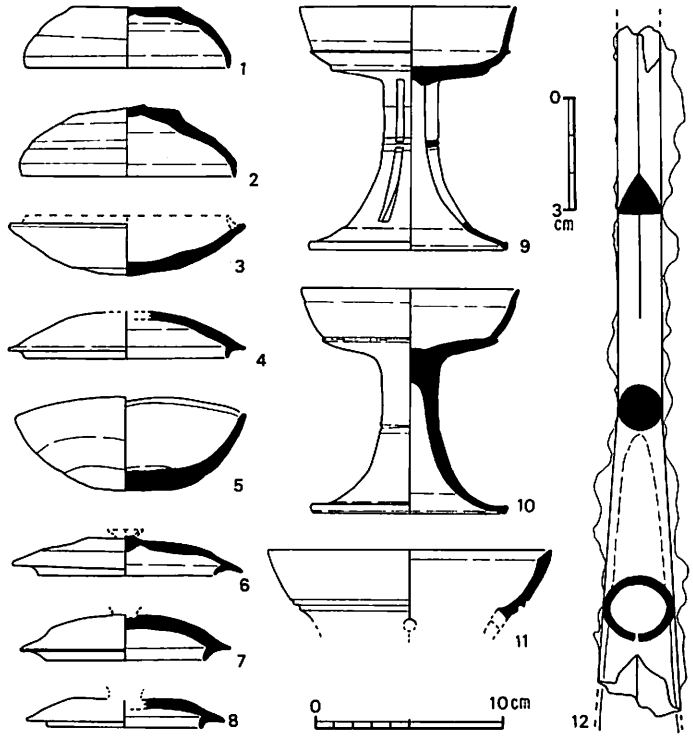
4はつまみの部分が欠失しているが，口径10.6cm，最大径12.4cm，高さ2.4cmを測る。受け部は，ほぼ水平に横広がりで，かえりとの幅がいわゆる壺蓋より狭いため，これを杯蓋とみなす。全面に回転ナデ調整がみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には約1～3㎜の長石・石英を含んでいる。

杯身(第87図３・５)　３はたちあがりが欠失しているが，受け部がわずかに残存している。受け部径6.4cm，受け部から底部までの高さ2.8cmを測る。受け部は端部に面をもち，小さく突出している。底部はヘラキリ不調整で，他の部分には回転ナデ調整がみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には長石・黒色砂粒を含み少しあらめである。

５は口縁部をやや欠損するが，完形である。焼け歪みが激しく，口径は最大径で12cm，最少径で９cm，高さ4.9cmを測る。内面全体と外面口縁部に褐色の自然釉がかかっている。底部はヘラキリ不調整，その他の部分には回転ナデ調整がみられる。底部の厚さは１cmにおよぶが，これは焼成の際に胎土中の気泡が膨張したためである。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密である。

壺蓋(第87図６～８)　６はつまみ端部を欠損するが，ほぼ完形に近い。中凹みのつまみをもつ。口径9.2cm，最大径11.1cm，高さはつまみ接合部まで２cmを測る。蓋の外面には自然釉がかかっていた痕跡がみられるが，摩滅が激しい。調整は，全面に回転ナデがみられる。色調は淡青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密である。

７もつまみが欠損している。口径8.3cm，最大径11.0cm，高さはつまみ接合部まで2.3cmを測る。蓋の外面には，褐色の自然釉がかかっていた痕跡がみられるが，摩滅が激しい。全面に，回転ナデ調整がみられる。色調は淡青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には約0.5mmの白色砂粒と発泡した黒色砂粒を含んでいる。



第87図　畑ノ前遺跡７号墳出土遺物実測図(縮尺：1/4，鉄器は1/2)

８はつまみの辺りが欠損している。口径8.1cm，最大径14cm，残存高1.5cmを測る。蓋の外面には，褐色の自然釉がかかっている。調整は，全面に回転ナデがみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密で長石を含んでいる。

無蓋高杯(第87図９・10)　９はほぼ完形に近い。身部はほぼ水平に広がった後，強く屈曲し，外面に１条の突帯をなし，わずかに外傾しつつたちあがる。脚部は２段の長方形透孔が３方向に開かれており，１条の削り出し突帯が巡る。口径

11.6cm，脚裾部径10.5cm，高さ12.7cmを測る。全面に，回転ナデ調整がみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密で白色砂粒を含んでいる。

10はほぼ全形をとどめ，身部は大きく外に張り出してから接合部の外面が段をなし，わずかに内彎しながらたちあがる。口縁端部はナデにより若干薄くなっている。口径11.4cm，脚裾部径10cm，高さ11.8cmを測る。透孔をみない。脚部中央には2条の凹線が巡り，内側上方約2分の1のしぼり目の上にナデ調整がみられる。他は全面に回転ナデ調整がみられる。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土には約0.2㎜の長石を含んでいる。

瓶(第87図11)　口縁部のみが残存している。口径は14.9cmを測り，口縁端部内側に一面を有す。2条の凹線が巡っており，さらにその下方に円形の透孔を一方向のみに，外から内に向かって穿孔している。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻，胎土は緻密にして長石・石英を含んでいる。

金属器

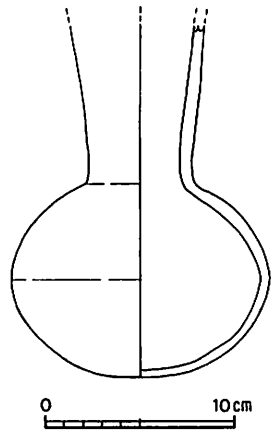
鉄鉾(第87図12)　残存長17.9cmを測る。身部の断面は三角形を呈し，幅1.2cm，厚さ1.15cmある。関部は，身部から直線的につながり，断面は径1.15cmの円形をなす。袋部は，厚さ0.15cmで，円錐形状に曲げて作り，残存長は約7cmである。重量は78.2gを量る。

金属器としては，この他に鉄鏃が数点出土している。

この古墳の年代は，出土遺物により，7世紀前半頃と考える。

5．6Ⅰ2区出土遺物(第88図，図版第60)

なお6Ⅰ2区から，口縁部は欠失しているが，ほぼ完形をとどめている土師器の長頸壺が出土している。体部の最大径は13.6cm，頸部最小径は5.45cm，体部の高さ10.1cmを測る。表面の摩滅が激しく，調整は不明である。色調は黄白色を呈し，焼成はやや軟質，胎土はややあらめで長石・石英および黒色砂粒を含んでいる。この付近は後世の攪乱により原状をとどめていなかったが，なお古墳1基が存在していたかもしれない。



第88図　畑ノ前遺跡6Ⅰ2区出土遺物実測図(縮尺：1/4)

第４章　奈良時代の遺構と遺物

第１節　主要な遺構

今回の調査では，奈良時代に属するとみられる建物柱穴が300近く検出された。これを組み合わせると建物としては23棟が把握でき，建物群としてのまとまりを知ることができた。しかし，試掘の際のトレンチには偶然にも，この建物にかかわる柱穴は１ケ所もかかってはいなかったため，これは予想外の成果を得る結果となった。また，建物群に伴うものと考えられる，巨木を刳り抜いた井戸側をもつ大規模な井戸や，溝・土壙なども多数検出された。なお，古墳の周濠からはいずれも奈良時代の土器類や瓦類が多量に出土しており，周濠が奈良時代に廃棄坑として利用されていたものと思われる。

１．掘立柱建物

掘立柱建物群は，発掘区中央部の，北下がりの丘陵上のほぼ平坦な場所に営まれている(図版第10)。建物群を区画する施設は，北方に土馬等の出土した東西方向の溝状遺構(３Ｄ溝１)が検出されており，これが何らかの北の境界になると思われた。しかし西方は谷になっており，東方は古墳群に接し，南方も山が迫っており，西・東・南方とも自然の地形のままで，特に溝や土塁等の区画の施設は検出されなかった。また，建物群の検出されたところはかなり削平されており，建物の前後関係を土層の層序でみることはできなかった。柱穴には柱痕跡の認められたものも多いが，柱根の遺存しているものはなく，柱穴掘方内からも遺物は乏しかった。

建物群は約70×70mほどの範囲に集中している。特にその中央部では建物がかなり重複しており，この部分を四角に囲むように，東西あるいは南北方向の建物が検出された(第89図，巻頭図版第３)。柱穴列は，ほぼ東西・南北方向を指すが，若干方位を異にする列がみいだされ，これと建物配置の規格性などを考慮して，建物群をＡ～Ｅの５類に分類した。なお掘立柱建物の番号は，建物としてのまとまりを確認した順に１～23とした。以下，Ａ～Ｅの類別に各建物遺構を記述していく。

１)Ａ　類

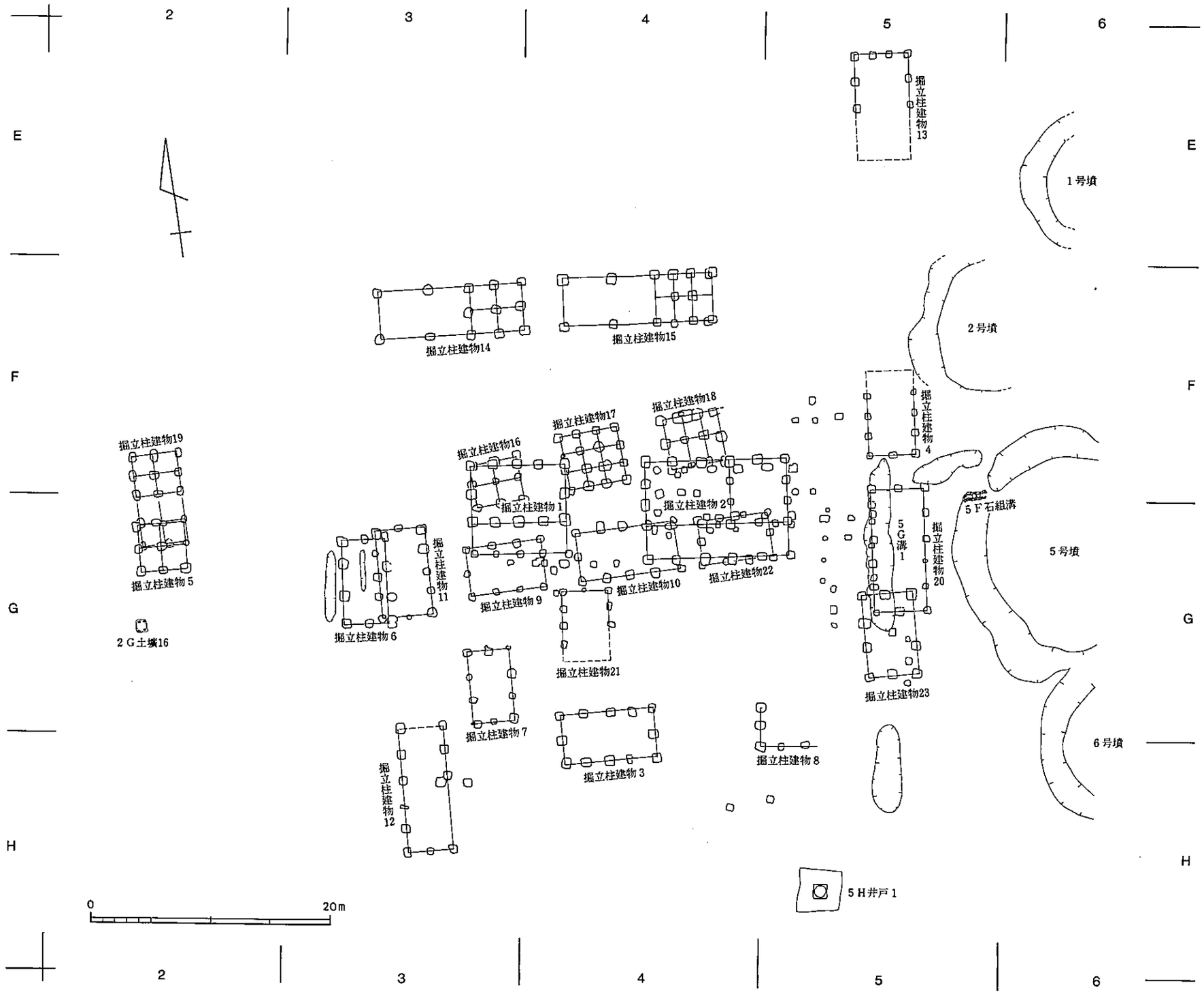
Ａ類とした一群の建物の柱穴は，いずれも他の建物柱穴を切っており，調査の初期から建物として確認できたものも多いことから，最終段階の建物群と思われる。Ａ類建物群は後に述べるようにかなり厳密に10尺方眼の地割りに従って配置されているようである。なお，Ａ類建物の平均的な北の方位は，Ｎ－６°30′－Ｅである。

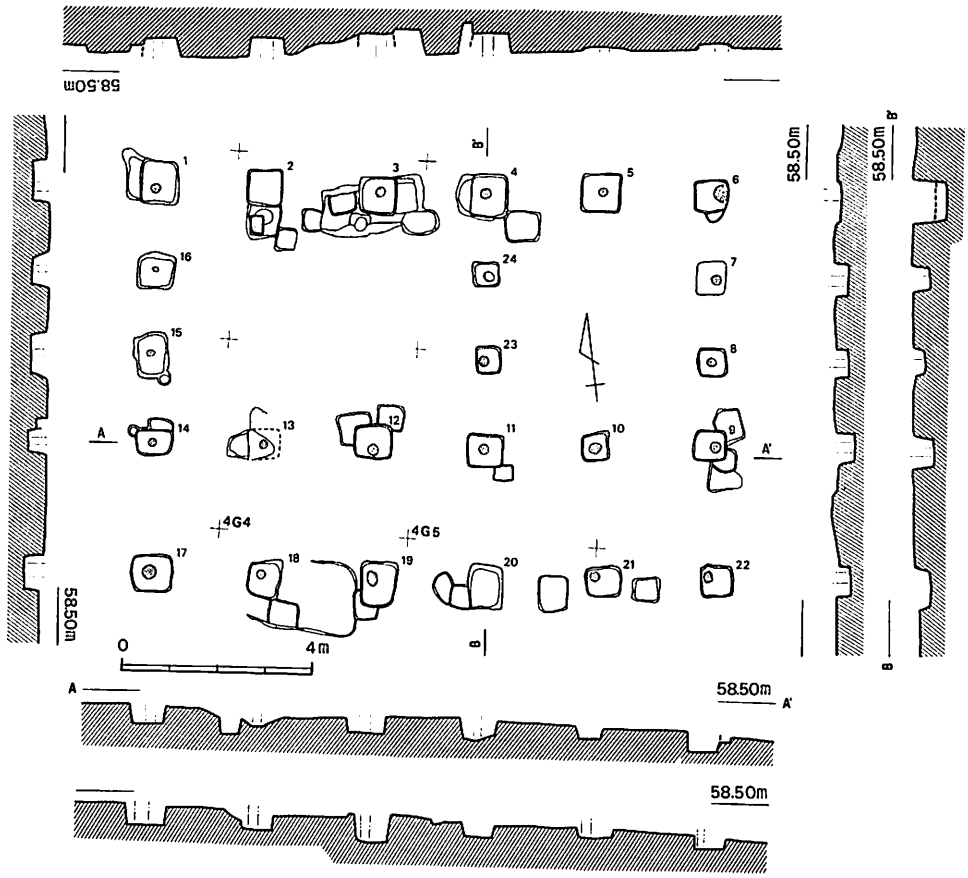
(１)掘立柱建物２（第90図，図版第24上）

今回検出した建物のなかでは最も規模の大きな建物である。東西棟の建物で，南側に１間の庇が取り付いている。母屋部分は，南北5.38mで18尺，３間で柱間は平均1.80mの６尺等間。東西は11.86mで40尺，柱間５間で平均2.37mの８尺等間になっている。庇部分は幅2.73mの９尺

第9表 畑ノ前遺跡掘立柱建物一覧表

建物番号	類	棟方向	建物方位 (N－E)	柱間 (梁行×桁行)	南北長 (m)	南北長 (尺)	柱間尺 (北より)	東西長 (m)	東西長 (尺)	柱間尺 (西より)	面積 (㎡)	平均尺 (cm)	備考
2	A	東西	6°30′	3＋1×5	8.11	27	6+庇9	11.86	40	8	96.20	29.83	南庇
1	A	東西	8°	2＋1×4	7.54	25	8+庇9	8.05	27	6.75	60.70	30.00	南庇
20	A	南北	8°30′	2×5	10.43	35	7	4.48	15	7.5	46.73	29.84	
4	A	南北	6°30′	2×(4)	5.1以上	23？	5.75？	3.91	13	6.5	27？	30.08	
13	A	南北	7°	3×(4)	4.6以上	30？	7.5？	4.65	16	5.33	40.5？	29.06	
6	A	南北	5°	2×3	6.96	23	7+9+7	3.81	13	6.5	26.52	29.79	
21	A？	南北	5°30′	2×(4)	4.5？	20？	5？	3.93	13	6.5	24？	30.23	
8	A？	東西？	9°	2×？	3.29？	11？	5？+6	3.8以上	？	6？	？	29.91	
3	B	東西	4°	2×4	4.2	14	7	7.88	27	6.75	33.10	29.60	
7	B	南北	3°	2×3	6.44	22	7+8+7	3.46	12	6	22.28	29.05	
12	B	南北	4°	2×5	10.26	35	7？	3.60	12	6	36.94	29.66	
11	B	南北	3°30′	2×4	7.36	25	6.5	4.23	14	7	31.13	29.83	
23	B	南北	4°30′	2×3	6.92	24	8	4.26	14	6+8	29.48	29.63	
5	B	南北	3°	2×2	4.05	14	7	3.52	12	6	14.26	29.13	総柱
9	C	東西	2°	2×3	3.98	13	6.5	6.35	22	7.33	25.27	29.74	
10	C	東西	1°	2×4	4.08	14	7	8.48	29	7+7+7+8	34.60	29.19	
22	C	東西	2°	2×3	3.76	13	6+7	5.92	20	6.6	22.26	29.26	
19	C？	南北	3°30′	2×4？	(7.84	26)	6+6(+8+6)	3.79	13	6+7？	29.71？	29.65	総柱
14	D	東西	4°30′	2×4	4.1	14	7	12.1	41	14+12+7.5+7.5	49.61	29.40	東2間総柱
15	D	東西	5°30′	2×5	3.94	13	6.5	12.87	43	14+13+5+5+6	50.71	30.12	東3間総柱
16	E	東西	－1°30′	2×2	3.83	13	6.5	4.05	14	7	15.51	29.20	総柱
17	E	東西	－3°	3×4	4.63	16	5.3	4.77	16	5.3	22.09	29.38	総柱
18	E	東西	－1°30′	2×3	4.36	15	7	4.62	16？	5.3？	20.14	28.98？	総柱


2
3
4
5
6
E
F
G
H
掘立柱建物13
1号墳
2号墳
掘立柱建物14
掘立柱建物15
掘立柱建物19
掘立柱建物16
掘立柱建物17
掘立柱建物18
掘立柱建物4
掘立柱建物1
掘立柱建物2
5F石組溝
5号墳
掘立柱建物5
掘立柱建物11
5G溝1
掘立柱建物20
2G土壙16
掘立柱建物6
掘立柱建物9
掘立柱建物10
掘立柱建物22
掘立柱建物21
掘立柱建物23
掘立柱建物7
掘立柱建物3
掘立柱建物8
6号墳
掘立柱建物12
5H井戸1
0
20m



第90図　畑ノ前遺跡掘立柱建物２実測図(縮尺：1/80)

である。母屋には東から２間，16尺のところにも南北に妻側と同じ３間の柱穴列があり，この部分に間仕切りがなされていたと思われる。

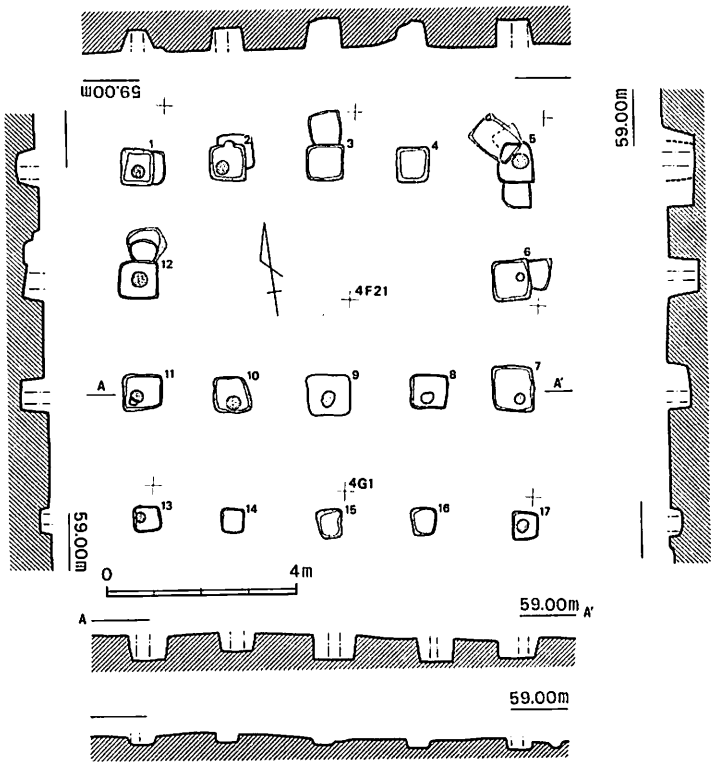
他の建物は，厳密にみると必ずしも東西軸と南北軸が直交していないものが多いが，この建物はかなり正確に角度・寸法をとっているようで，この点からもこの建物がＡ類のなかでは最も中心になる，主殿というべき建物になろう。

柱穴の平面形は，ほぼ一辺80cmほどの方形であるが，東端部の柱穴は，地山がかなり堅く締まった砂利層になっているためか，他の部分の柱穴より一回り小さい。また，庇部分の柱穴の規模は，母屋部分と同様あるいは一回り大きなものがある。

この建物の母屋北辺柱穴列は，掘立柱建物18の柱穴を切っており，母屋南辺柱穴列および庇の柱穴列は掘立柱建物10・22の柱穴を切って設けられている。

（２）**掘立柱建物１**（第91図，図版第24下）

東西棟の建物で，掘立柱建物２に次いで規模の大きな建物である。そしてこの建物の北辺柱穴列は掘立柱建物２の北辺柱穴列に揃えられており，この建物も南側に庇が取り付いている。母屋部分は，南北4.9mで16尺，２間で平均柱間2.47m，東西は8.05mで27尺とみられるが，西



第91図　畑ノ前遺跡掘立柱建物1実測図(縮尺：1/80)

1間がやや狭く，他の3間は平均2.05mで7尺となる。庇の幅は約2.6mで，掘立柱建物2と同じく9尺である。

柱穴の平面形は，母屋部分がほぼ一辺80cmの方形であるが，庇の柱穴はいずれも母屋より一回り小さく，一辺50cmほどになっている。

この建物の母屋部分の柱穴は，掘立柱建物16・17の柱穴を切っており，庇の部分は掘立柱建物9と重複している。なお，北東隅の柱穴5は4F土壙1によって切られている。

(3)掘立柱建物20(第92図，図版第26下)

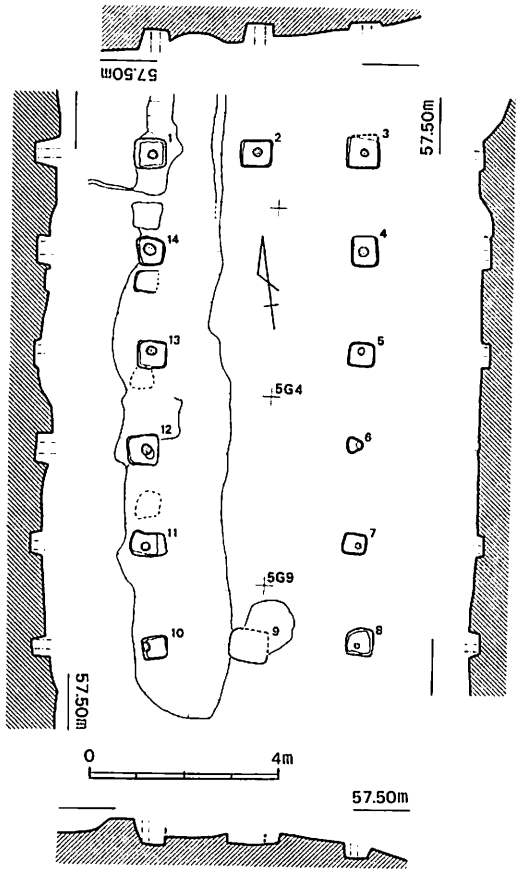
建物群の最も東に検出された南北棟の建物の一つで，掘立柱建物2の東に位置している。南北10.43mで35尺，5間で平均柱間2.09mの7尺等間。東西は4.48mで15尺，2間で平均柱間2.24mである。西辺の柱穴列は南北方向の5G溝1の埋土を切って設けられている。柱穴は一辺60～70cmの方形であるが，東辺柱穴列は斜面にかかってかなり削土されていて不明瞭であった。

なお，建物西辺の柱穴列にほぼ重なって，やはり5G溝1埋土を掘り込んだ別の柱穴列が検出されており，また建物南端部は掘立柱建物23と重複している。

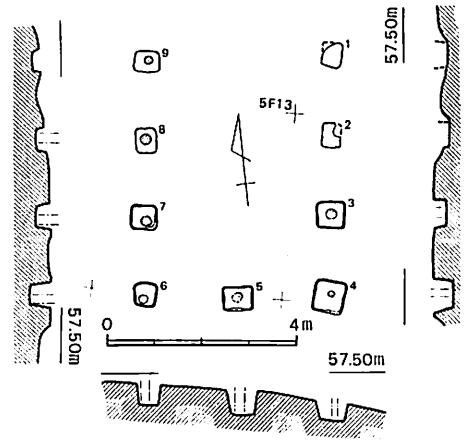
(4)掘立柱建物4(第93図，図版第26下)

これも建物群の東端で検出された南北棟の建物で，掘立柱建物20の北に位置している。この建物の西辺柱穴列は掘立柱建物20の西辺柱穴列の軸線に一致しており，掘立柱建物20との間隔も10尺に計画されているようである。また，南辺の柱穴列も，掘立柱建物1・2の北辺柱穴列の軸線上にのっている。さらに，この建物の南北中軸線は，掘立柱建物2の東辺から東に30尺の間隔をおいている。

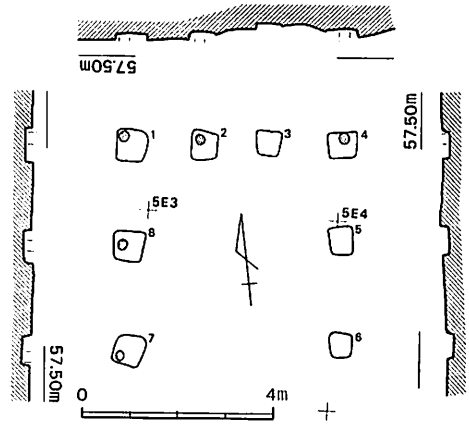
この建物の南北の規模については，北端部が後世の削平を受けて消滅しているため不明であるが，南3間の柱間は平均1.70mで，ほぼ5.75尺とみられる。他の建物が，それぞれ建物の外郭を尺の完数で計画していると考えられることからみて，この建物も南北が4間または8間であ



第92図　畑ノ前遺跡掘立柱建物20実測図(縮尺：1/80)



第93図　畑ノ前遺跡掘立柱建物４実測図(縮尺：1/80)



第94図　畑ノ前遺跡掘立柱建物13実測図(縮尺：1/80)

れば，尺の完数が得られることになるが，ここでは一応，４間で23尺と推定した。東西は２間で3.91m，13尺である。

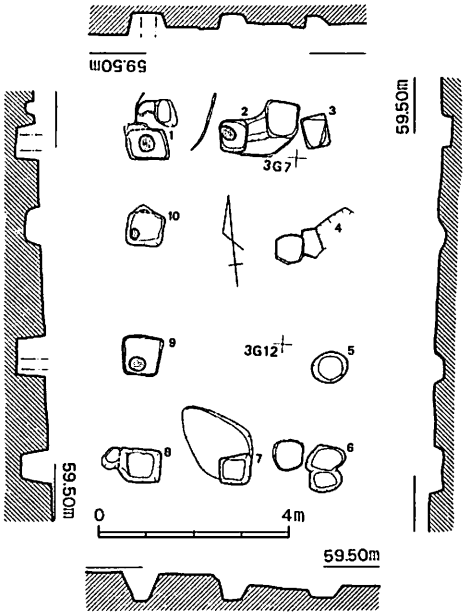
柱穴は一辺50cmほどの方形であるが，地山が砂利層の場所はやや小さくなっている。

（５）**掘立柱建物13**（第94図，図版第26上）

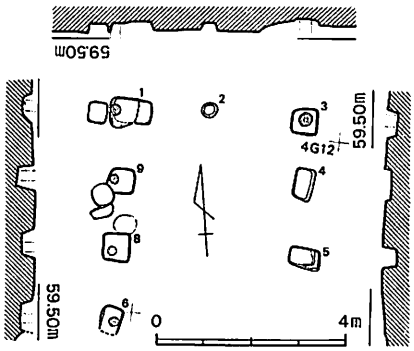
建物群の最も北東部で検出された南北棟の建物で，南北方向の中軸線は，掘立柱建物４の南北中軸線に一致しているとみられる。この建物のあるところは後世の溝などによってかなり削られており，南半部は消滅していた。南北の規模は，北端２間の平均柱間が2.26mで7.5または7.75尺であるため，掘立柱建物４と同様に考えるならば，４間であれば尺の完数が得られる。ここでは１間が7.5尺，４間で南北長30尺と推定した。東西は4.65mで16尺，これを３間に等分している。柱穴は一辺約60cmの方形である。

（６）**掘立柱建物６**（第95図，図版第27上）

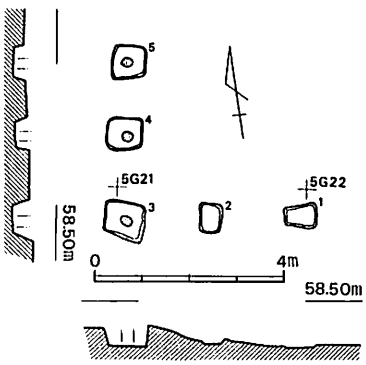
掘立柱建物１の西で検出された南北棟の建物である。この建物は，掘立柱建物１の西辺から西へ30尺の位置に南北中軸線を合わせ，また掘立柱建物１・２の北辺柱穴列の延長線から南に



第95図　畑ノ前遺跡掘立柱建物6実測図(縮尺：1/80)



第96図　畑ノ前遺跡掘立柱建物21実測図(縮尺：1/80)



第97図　畑ノ前遺跡掘立柱建物8実測図(縮尺：1/80)

20尺の位置に北辺を合わせて建てられていると思われる。

南北の規模は6.96mで23尺とみられる。柱間は，3間であるが中央間が少し広く，7尺＋9尺＋7尺となっている。東西は3.81mで13尺，これを2等分しており，妻の柱はやや外側に張り出しているようである。柱穴の平面形は一辺約70cmの方形であるが，東側の柱穴は不明瞭であった。

なお，この建物の西側約1mのところに，柱穴列に平行して幅50cm，深さ10cmほどの溝が検出されたが，これは位置からみてこの建物に関係する可能性がある。また，この建物の東端は掘立柱建物11の西端と重複している。

(7)掘立柱建物21(第96図)

掘立柱建物1の東南で検出した南北棟の建物であるが，後世の溝や土壙の切り合いのため，やや不確実なもので建物とするには疑問も残る。南北の規模はわからないが，柱間は平均1.48mで5尺とみられることから，一応，南北4間で20尺と推定した。東西幅は3.93mで13尺である。

柱穴は一辺約60cmの方形のものと，約40×70cmの長方形のものがある。なお，柱穴5の掘方内から，平城宮6721C型式？の軒平瓦が出土している。

(8)掘立柱建物8(第97図)

掘立柱建物2の南で検出された建物の南西隅部であるが，東西・南北とも2間分のみの検出で全体の規模は不明である。東方は斜面にかかり大きく削られているためわからないが，西の柱穴列の北の延長線上には柱穴が認められないことから，東西方向の建物と推定した。この建物の柱穴1は，掘立柱建物2の東辺柱穴列から西に10尺，北辺柱穴列から南に70尺の位置にある。柱穴は一辺70cm前後の方形であるが，南側の柱穴は痕跡的な検出であった。

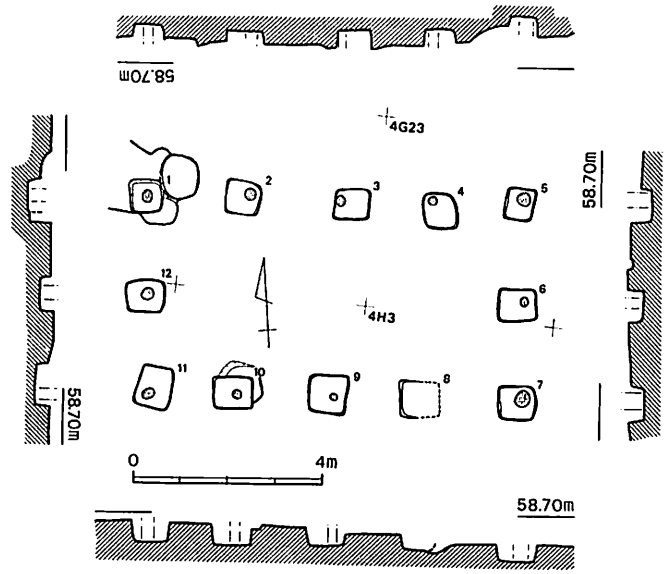
2）B　類

B類の建物は主に建物群の南半部にある。後述のようにC類の建物柱穴を切っている部分があるが，他の類との柱穴の切り合い関係はない。ただし一部，A類建物との重複がある。B類建物の平均的な北の方位はN－4°－Eで，A類とやや異なる10尺方眼の地割りによって建物が配置されているようである。

（1）**掘立柱建物3**（第98図，図版第25下）

建物群の南端部にある東西棟の建物である。南北は，4.18mで14尺，2間。東西は7.88mで27尺，これを4間に等分している。柱穴は一辺70～90cmで，やや長方形を呈するものが多い。

A類とは方位をやや異にしているものの，この建物と掘立柱建物2との関係をみるとある程度の規格性が認められる。すなわち，掘立柱建物2の西辺延長線上にこの建物の東辺があっており，掘立柱建物2の北辺から南へ70尺のところにこの建物の北辺が合っている。さらにこの建物と掘立柱建物8の間隔が30尺になる，などである。



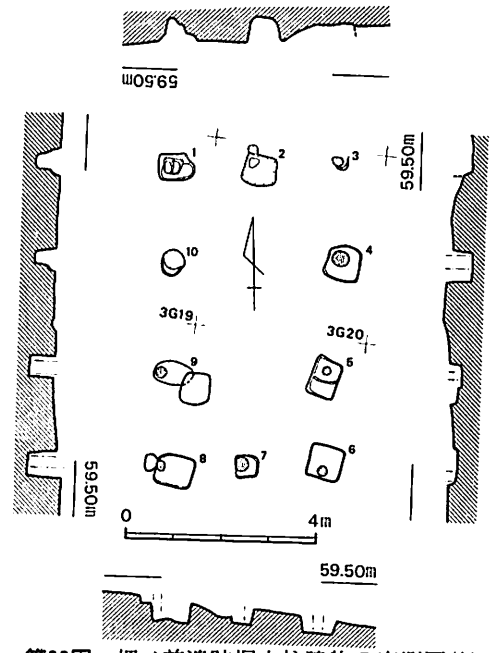
第98図　畑ノ前遺跡掘立柱建物3実測図（縮尺：1/80）

（2）**掘立柱建物7**（第99図，図版第28上）

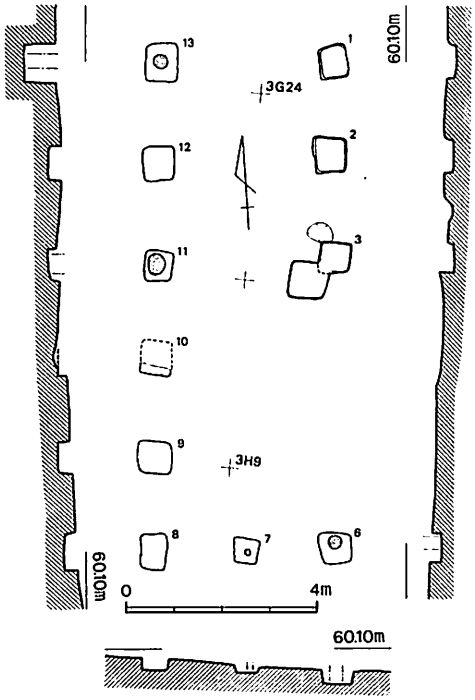
掘立柱建物3の北西にある南北棟の建物で，掘立柱建物3の北辺柱穴列の延長線上に，この建物の南辺がほぼ合わせられている。また，この建物の東辺は掘立柱建物3の東辺から西へ40尺の位置にあたっている。

規模は，南北が6.44mで22尺になり，柱間は3間で中央間が少し広く，7尺＋8尺＋7尺となっている。東西は3.48mで12尺，柱間は2間である。

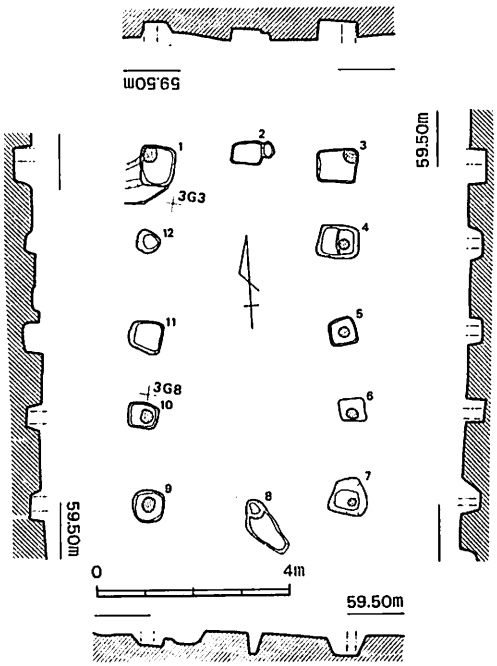
柱穴の平面形は，一辺50～80cmの方形や長方形を呈するなど不揃いである。また，柱穴自体の方位が建物の方位より東に振っているものが目立つ。



第99図　畑ノ前遺跡掘立柱建物7実測図（縮尺：1/80）



第100図　畑ノ前遺跡掘立柱建物12実測図(縮尺：1/80)



第101図　畑ノ前遺跡掘立柱建物11実測図(縮尺：1/80)

(3)**掘立柱建物12**(第100図，図版第28下)

建物群の最も南端で検出された南北棟の建物である。この建物の東辺は，掘立柱建物3の東辺から西へ60尺の位置にあり，北辺は掘立柱建物3の北辺に合っている。規模は，南北が10.26mで35尺，柱間は5間で平均2.05mの7尺等間になると思われる。東西は3.58mで12尺になる。

柱穴の平面形は，一辺70cm前後の方形を呈している。なお，この建物のある場所は，建物群南側の山にかかる緩斜面で，かなり削られているため検出できなかった柱穴もあるが，見いだした柱穴の検出面からの深さは，高所でも低所でもあまり変わらなかった。このため，この建物は当初から斜面に建てられていたことが考えられる。

(4)**掘立柱建物11**(第101図，図版第27上)

掘立柱建物12の北で検出された南北棟の建物である。掘立柱建物12の東辺延長線より約1尺西寄りにこの建物の東辺があり，掘立柱建物12の北辺から北へ約31尺のところが，この建物の南辺にあたっている。規模は，南北が7.36mで25尺になろう。柱間は4間で，南から2間目がやや狭く，この部分が5.5尺，他は6.5尺である。東西は4.23mで14尺，等間の2間で，妻柱がやや外側に張り出している。

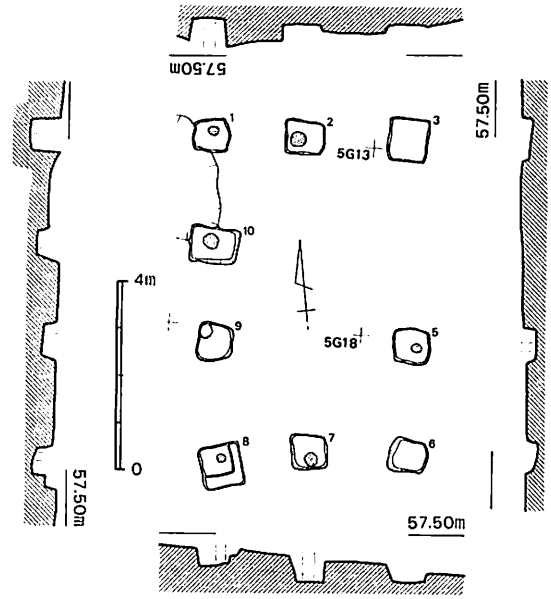
柱穴の平面形は，70×80cmほどの長方形を呈するものが多いが，南半部は地山が砂利層のためか形が乱れており，また妻の柱穴は一回り小さなものである。

この建物の西端は，掘立柱建物6の東端と重複している。また，この建物の西側に幅20cmほどの浅い溝が検出されており，掘立柱建物6の場合と同様に，この溝は建物と関係するものと思われる。

（5）**掘立柱建物23**（第102図）

掘立柱建物群の南東部で検出された，南北棟の建物である。掘立柱建物3の東辺から東へ約70尺のところがこの建物の南北中軸になっており，この建物の南辺は，掘立柱建物3の北辺延長線から約3尺北に寄ったところにある。規模は，南北6.92mで24尺，柱間は3間で多少乱れはあるが，8尺の等間と思われる。東西は4.25mで14尺である。柱穴は，一辺90cmの方形のものから，一辺70cmのものまである。

なお，この建物の北東隅は，掘立柱建物20の南西隅と重複している。

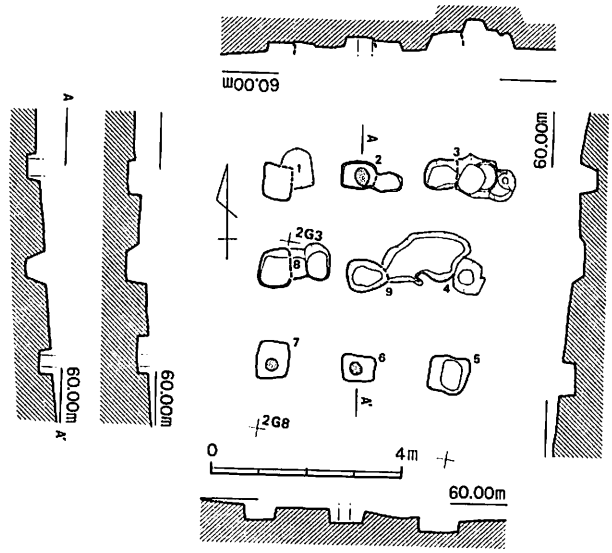


第102図　畑ノ前遺跡掘立柱建物23実測図（縮尺：1/80）

（6）**掘立柱建物5**（第103図，図版第27下）

掘立柱建物群の最も西寄りで検出された，2×2間の総柱の建物である。南北方向がやや長いため南北棟の建物と考えられる。掘立柱建物3の北辺延長線から北へ50尺のところに，この建物の南辺があり，掘立柱建物3の東辺から西へ135尺のところが，この建物の南北中軸線になっているようである。規模は柱痕跡があまり明瞭でないため確実ではないが，南北が約4.1mで14尺，東西が約3.5mで12尺になると思われる。

柱穴の平面形は，60×80cm程度の長方形を呈しているが，東西の側柱列は南北に長く，南北の中央柱列は東西に長いものになっている。

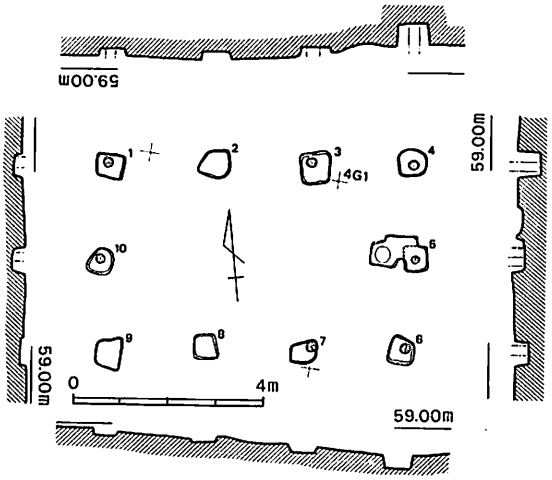


第103図　畑ノ前遺跡掘立柱建物5実測図（縮尺：1/80）

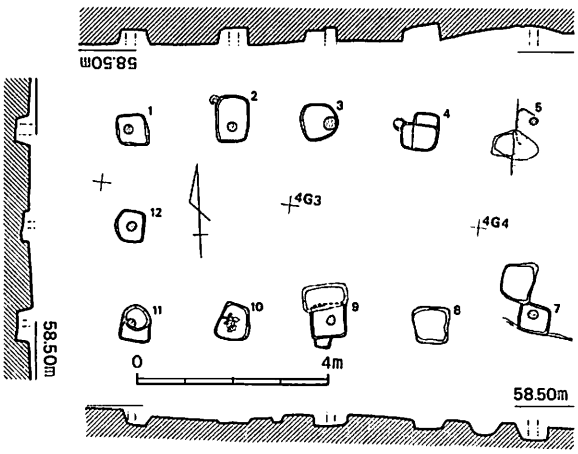
この建物の北半は，次のC類に属するとみられる掘立柱建物19の南端に重複しており，掘立柱建物19の南寄り2列の柱穴とほぼ同じ位置にそれを切って柱穴を掘っている。

3）C　類

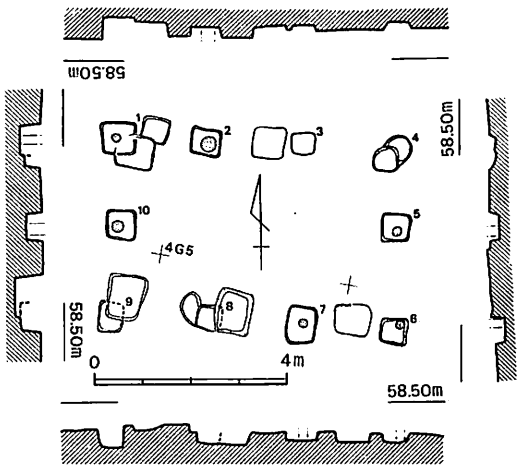
C類に属するとみられる建物は，主に建物群中央部で検出されたものである。柱穴の切り合い関係からA・B類に先行するものであるが，D・E類とは重複していない。C類建物の平均



第104図　畑ノ前遺跡掘立柱建物9実測図(縮尺：1/80)



第105図　畑ノ前遺跡掘立柱建物10実測図(縮尺：1/80)



第106図　畑ノ前遺跡掘立柱建物22実測図(縮尺：1/80)

的な北の方位はN－1°30′－Eである。

(1)掘立柱建物9(第104図)

中央部の建物が集中している部分から検出された3棟の内の，西側の建物である。2×3間の東西棟の建物で，規模は南北が3.98mで13尺，東西は6.35mで22尺とみられる。柱間は等間である。柱穴の平面形は，一辺60cm前後のほぼ方形を呈している。また，妻の柱は少し外側に張り出している。この建物は，掘立柱建物1の庇部分に重複しているが，柱穴の切り合い関係はない。

(2)掘立柱建物10(第105図)

掘立柱建物9の東に検出された，2×4間の東西棟の建物である。この建物の南辺は掘立柱建物9の南辺と同一線上にあり，建物の間隔は10尺になっている。規模は，南北が4.08mで14尺，東西は8.48mで29尺とみられる。柱間は梁行，桁行とも7尺になっていると思われるが，東端の1間だけはやや広くなっているようである。

柱穴の平面形は，一辺約60cmの方形を呈している。なお，南辺の柱穴10は，掘方底部の柱位置とみられる部分に拳大の礫が10個あまり据えられていた。

この建物の東北隅は，掘立柱建物2の庇部分に重複しており，柱穴4が掘立柱建物2の柱穴14によって切られている。

(3)掘立柱建物22(第106図)

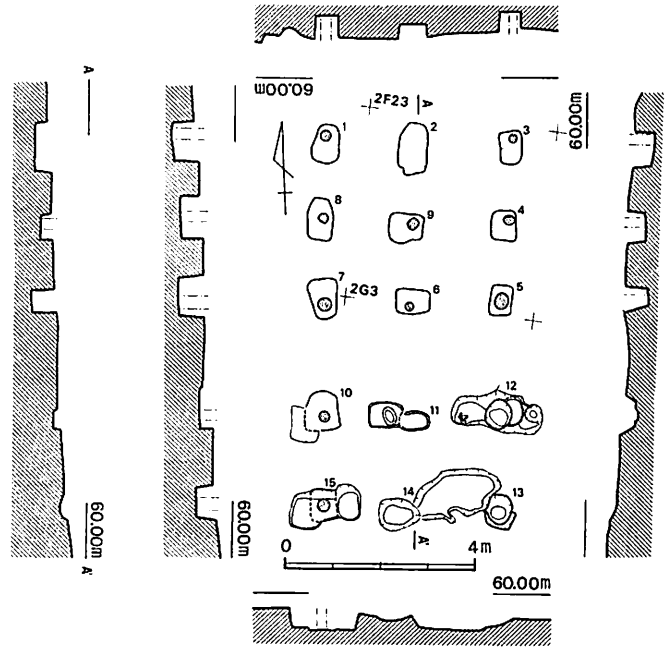
掘立柱建物9・10の東に並ぶ，2×3間の東西棟の建物である。南辺柱穴列は上記2棟の南辺に揃っており，掘立柱建物10との間隔は約6尺である。規模は，南北が3.8mで13尺，東西は5.9mで20尺で

ある。柱穴の平面形は，一辺60cm前後の方形である。

この建物は，掘立柱建物２の庇部分にほぼ重なっており，柱穴１・８・９が掘立柱建物２の柱穴によって切られている。

（４）**掘立柱建物19**（第107図）

建物群の最も西端で検出された総柱建物である。南北は7.8mで26尺，柱間は４間で，南から２間目が広く８尺間とみられるが，他は６尺になっている。東西は3.9mで13尺になる。ただし南の２間分の柱穴10～15は，掘立柱建物５の柱穴に切られて不明確であり，北２間分の柱穴に比べて浅いものであるため，本来この部分まで一連のものであったかどうかは疑問でもある。あるいは，若干方位を異にする掘立柱建物５と同じ規模の２×２間の建物の可能性もある。



第107図　畑ノ前遺跡掘立柱建物19実測図（縮尺：1/80）

柱穴の平面形は，約70×50cmの長方形を呈しており，東西の側柱と妻柱の柱穴は南北に長く，中の束柱の柱穴は東西に長いものである。これも掘立柱建物５の柱穴の状況に似ている。

４）D　類

D類とした建物は，建物が集中している部分の北側で検出された，東西方向の２棟の建物である。この２棟は，柱穴検出時点ではひと続きの建物かとも考えたが，その後，西半と東半で柱穴列の方位が若干異なっていることなどから，同じような平面をもった２棟の建物と考えた。また，この２棟は他の建物とは違う，特異な柱配置をもっているため，類を独立させた。なお，D類は他の類の建物との重複関係はない。

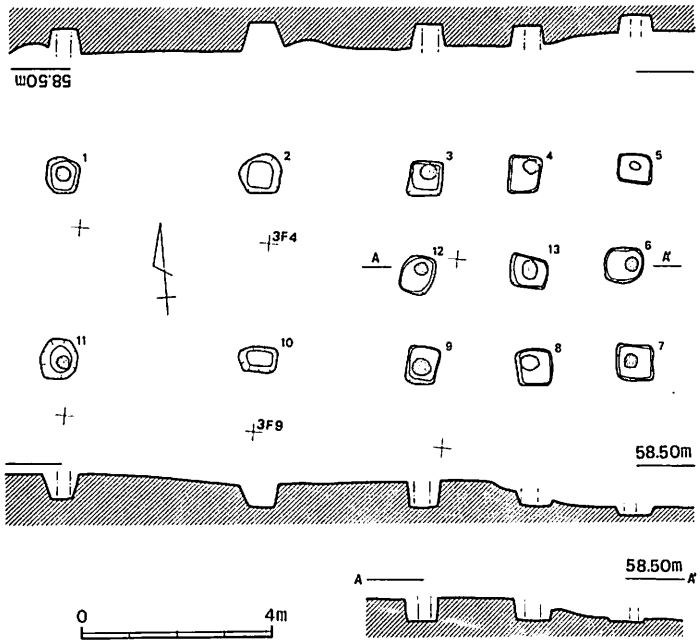
（１）**掘立柱建物14**（第108図，図版第29上）

２棟のうち，西側の建物である。東西は４間であるが西の２間は柱の間隔が広く，東の２間分は総柱になっている。規模は，南北が約4.1mで西端幅が若干狭いがほぼ14尺，東西は約12.1mで41尺とみられる。柱の間隔は西から4.1＋3.4＋2.3＋2.3mとなって，それぞれ14＋12＋7.5＋7.5尺になる。

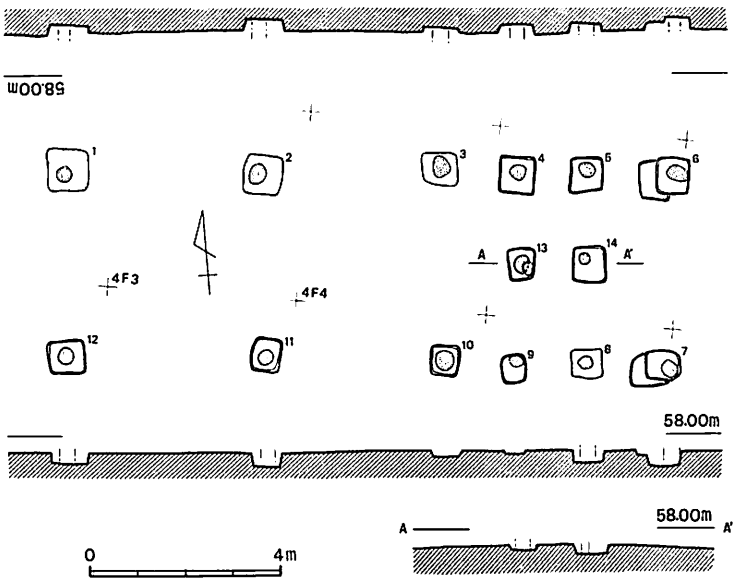
柱穴の平面形は，一辺約80cmの方形であるが，西半のものはやや丸みを帯びている。

（２）**掘立柱建物15**（第109図，図版第29下）

掘立柱建物14の東に，約3.5m隔てて並ぶ建物である。この建物のあるところは耕作のための



第108図　畑ノ前遺跡掘立柱建物14実測図(縮尺：1/80)



第109図　畑ノ前遺跡掘立柱建物15実測図(縮尺：1/80)

削平が著しく，検出した柱穴も底部がかろうじて残る程度であった。柱の配置は掘立柱建物14と同じく，西半の柱間が広く，東半が総柱になっているが，総柱の部分が3間になっている。規模は，南北が約3.9mで14と同様，西端の幅がやや狭いがほぼ13尺，東西は約12.9mで43尺である。柱の間隔は西から4.2＋3.8＋1.5＋1.5＋1.9mで，それぞれ14＋13＋5＋5＋6尺になる。ただし最も東端の柱穴6・7は穴が重複しており，先行する柱穴を取ると東端の1間は5尺になる。

柱穴の平面形は，一辺70cm程度の方形を呈している。なお，柱穴13は柱痕跡の傍らに径20cmほどの石が据えられていた。

(3)土層断面の剝ぎ取り(第110図)

掘立柱建物14・15の柱穴について，エポキシ系樹脂を用いて土層の断面剝ぎ取り標本を作成した。作業は昭和60年12月17日から20日にかけて，京都府立山城郷土資料館の布村忠雄氏・高橋美久二氏・橋本清一氏および中国から研修にきていた范培松氏によって実施された。標本は，掘立柱建物15の柱穴1の柱痕跡の残る平面(第110図1～3)と，掘立柱建物14の柱穴9の東西方向断面(第110図4～6)である。低温や降雪などのため，作業の条件はあまり良くなかったが，比較的明瞭な標本を得ることができた。

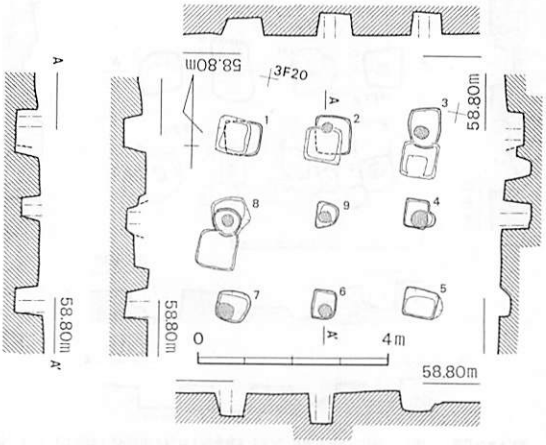
第110図　畑ノ前遺跡掘立柱建物柱穴土層剝ぎ取り標本作成作業状況写真

5）E　　類

掘立柱建物群の中央部から検出された，3棟の総柱建物である。A類の掘立柱建物1・2に重複し，これに先行するものであるが，他の類との重複関係はない。E類の平均的な方位は，N－2°30′－Wである。

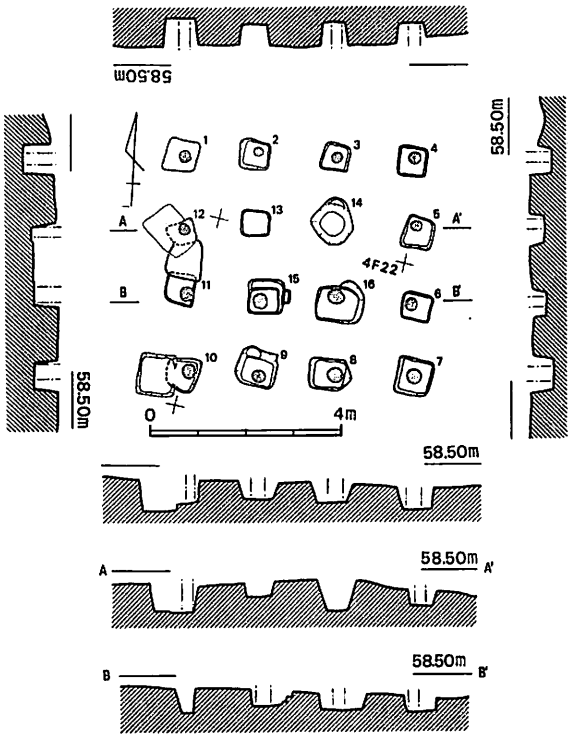
（1）**掘立柱建物16**（第111図）

3棟のうちの，西側の建物である。梁行・桁行とも柱間は2間で，東西方向がやや長いため東西棟の建物と思われる。規模は，南北が約3.8mで13尺，東西は約4.1mで14尺とみられる。

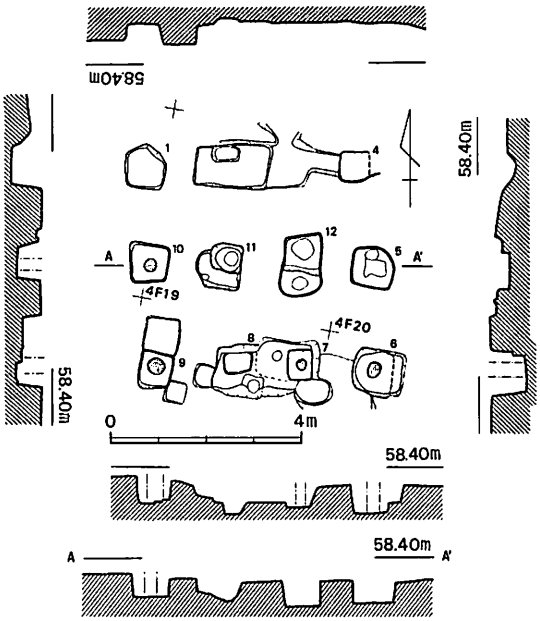


第111図　畑ノ前遺跡掘立柱建物16実測図（縮尺：1/80）

柱穴は，他の類の建物柱穴に比べて深く掘られており，ほぼ方形の平面であるが形はあまり整ってはいない。また，柱穴の柱痕跡部分の埋土には，炭化物や焼土の混じっているものがあった。



第112図　畑ノ前遺跡掘立柱建物17実測図(縮尺：1/80)



第113図　畑ノ前遺跡掘立柱建物18実測図(縮尺：1/80)

(2)掘立柱建物17(第112図)

掘立柱建物16の東で3棟の中央に位置しており，この建物の南辺は掘立柱建物16の南辺に揃っている。建物の間隔は約3.5mである。梁行・桁行とも柱間が3間で，建物平面は方形を呈するが，東西方向がわずかに長いため東西棟の建物と考えられる。規模は，南北が4.65m，東西が4.75mで方16尺になっているとみられる。

柱穴の平面形は，一辺70cmほどの方形を呈しているが，建物の軸線方位に比べて柱穴自体の軸がやや東に偏するものが目立つ。この建物でも柱痕跡部分の埋土に，炭化物や焼土の混じるものがある。

(3)掘立柱建物18(第113図)

3棟のうちの，東側の建物である。北側が一段低く削平されていることや，柱穴の切り合いと後世の溝などによる掘り込みのため全体があまり明確でないが，柱間は2間×3間で，東西棟の建物と思われる。この建物の南辺も，掘立柱建物16・17の南辺に揃えられており，掘立柱建物17との間隔は約3.5mであった。規模は，南北が4.35m，東西が4.6mで，15尺×16尺になろう。

柱穴の平面形は，一辺70cmほどの方形であるが，北側の柱穴列は不明瞭であった。この建物の東寄りの柱穴でも，柱痕跡部分の埋土に炭化物・焼土が混じっていた。

6)掘立柱建物群の規格性(第114図)

以上，記述してきたように，A～Eの

5類に分類した建物群は各類別に，計画的に建物が配置されていることがわかる。ただし，各類の重複関係をみると，これがかならずしも時期的な変遷を表すとは限らず，重複関係のない類については同時存在の可能性も充分に考えうる。類別の重複関係を再度整理すると次のようになる。

まずA類とC・E類では，建物が重複し柱穴の切り合いから，A類はC・E類廃絶後の建築であることがわかる。A類とB類との関係は，一部の建物が重複しているが，柱穴の切り合いがないため前後関係はわからない。

B類は，A類と一部の建物が重複しており，やや疑問の点もあるがC類の一部とも重複し，柱穴の切り合いからはC類がB類に先行することがわかる。B類はE類との重複関係はない。なお，D類は他の類との重複はなく，C類とE類との間も重複はない。

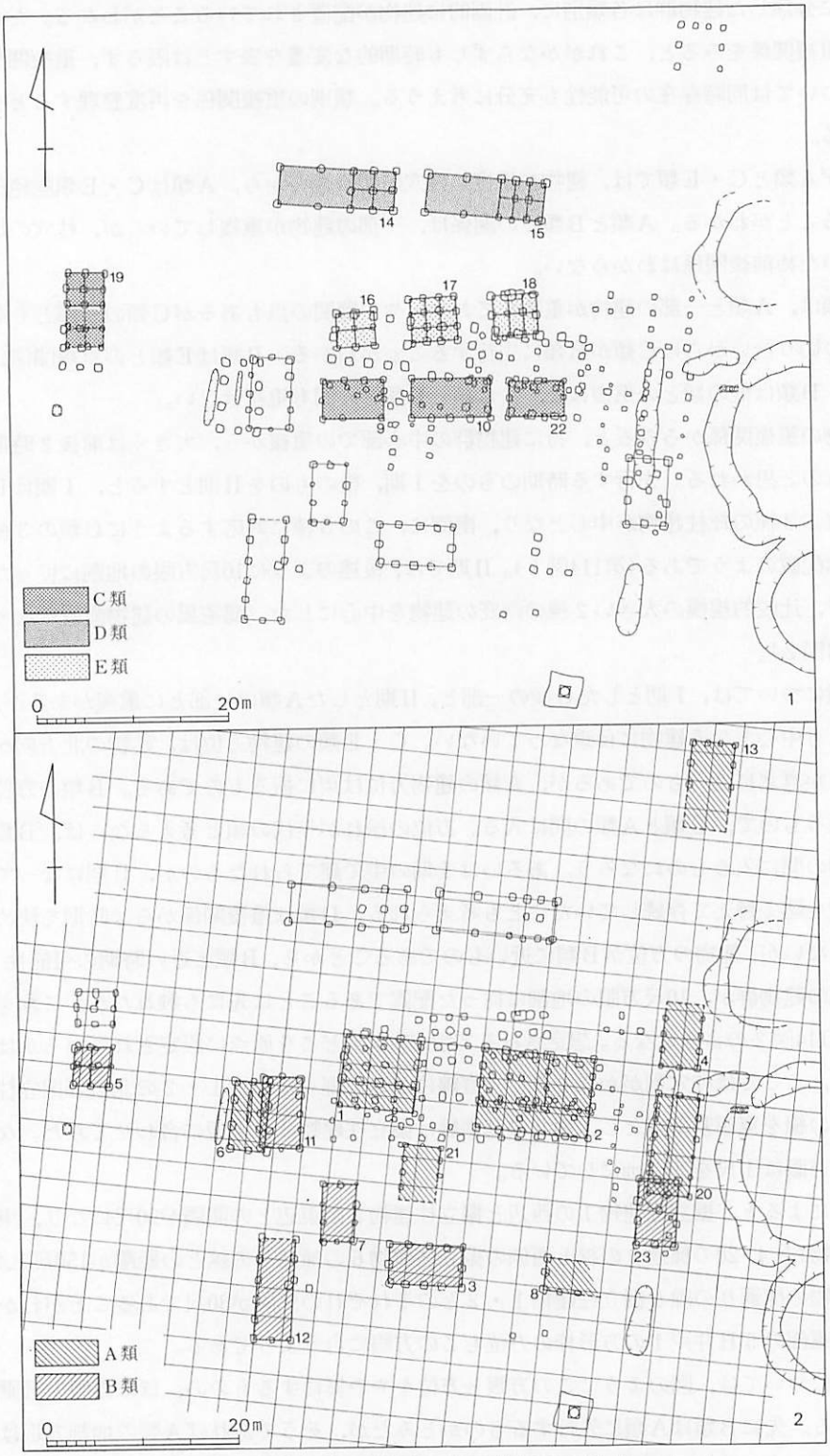
建物の重複関係からみると，特に建物群の中心部での重複から，大きくは前後2時期に分かれるものと思われる。先行する時期のものをI期，後のものをII期とすると，I期はE類の東西に並ぶ3棟の総柱建物が中心となり，南側に，この3棟に対応するようにC類の3棟の建物が並ぶ配置のようである(第114図1)。II期では，後述のように10尺方眼の地割に従ったA類の建物で，比較的規模の大きい2棟の南庇の建物を中心にした，邸宅風の建物配置になっている(第114図2)。

B類については，I期としたC類の一部と，II期としたA類の一部とに重複があるが，I期・II期とも中心となる建物には重なっていない。C・E類の建物方位は，建物の北方向がやや西に振るか真北に近いものであるが，A類の建物方位は東に振るものである。B類の方位はやや東に振るもので，C類とA類の間に入る。方位の振れが年代の順と考えるならば，B類はI期とII期の間に入るものになろう。あるいはI期の中で建てられたものが，II期になっても一部の建物を建て替えて存続していたことも考えられる。D類は重複関係からは時期を決めることはできないが，建物の方位がB類に近いものであることから，B類と近い時期の可能性もある。

A類の建物群が，10尺方眼の地割に従った配置であることは先にも触れたが，これを図に表すと第114図2のようになる。想定される方眼が，本来どこを原点に設定されているかはわからないが，ここでは柱穴列がかなり長く一直線に並ぶ，掘立柱建物1・2の北辺と掘立柱建物4の南辺の線を東西基準線とし，南北の基準線は掘立柱建物2の東辺に合わせてみた。なお，この図の方眼は1尺を29.7cmにしている。

これによると，掘立柱建物1の西辺と掘立柱建物2の東辺との間隔が90尺になり，東側の掘立柱建物13・4・20の棟通りの線と西側の掘立柱建物6の棟通りの線との距離が150尺となって，東西建物の棟通りの線と掘立柱建物1・2とのそれぞれの間隔が30尺であることがわかる。また，南東部の5H井戸1の方形枠の方位もこの方眼に合うようである。

B類については，図のようにこの方眼と方位をやや異にするものの，ほぼ方眼の区画には合っている。先にB類はA類に先行するものかとみたが，そうであればA類の地割方眼はB類建物の配置をある程度，踏襲したものであるとも考えられ，I期とII期とはその建物配置の趣を



第114図　畑ノ前遺跡掘立柱建物類別遺構配置図(縮尺：1/750)

大きく異にするが，まったく断絶したものではなく，建物群としては性格を換えながらも，ほぼ引き続き営まれていたものと思われる。

2．5H井戸1（第115・116図，巻頭図版第4，図版第31～34）

発掘区の東南部，5H11・5H12・5H16・5H17各区にまたがる。

当初，ほぼ東西方向を向く溝（5H溝2）と考えていたが，この溝の西側が約7m四方の方形状に広がり，かつそこに小礫群（図版第31上参照）が検出された。この小礫群中から須恵器硯片などが出土している。これが井戸になることを確認したのは，小礫群を取り払った時点である。

掘方は，検出面ではほぼ正方形で，深さ1.2mの付近からやや丸みをおびて下底にいたる。掘方の規模は一辺3.5m，検出面よりの深さ7.0mをそれぞれ測る。井戸は，発掘当時にも盛んな湧水をみた。

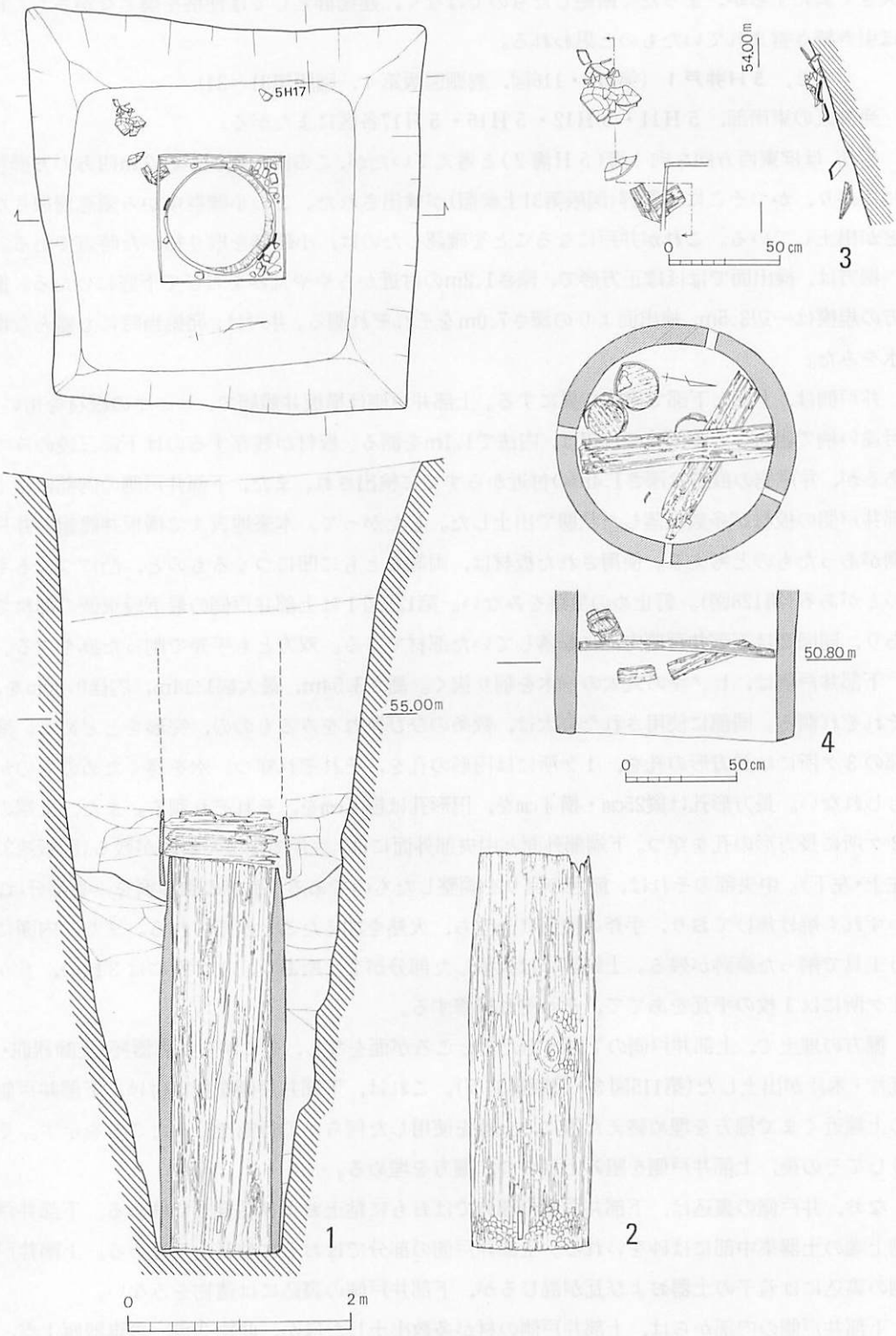
井戸側は，上部と下部で構造を異にする。上部井戸側は横板井籠組で，ヒノキの板材を用い，目違い枘で組む。この部分の一辺は，内法で1.1mを測る。板材が残存するのは下部三段のみであるが，井戸側の痕跡は深さ1.4mの付近からすでに検出され，また，下部井戸側の内部には上部井戸側の板材が多数転落した状態で出土した。したがって，本来地表まで横板井籠組の井戸側があったものと考える。使用された板材は，両端をともに凹につくるものと，凸につくるものとがある（第128図）。釘止めの痕跡をみない。第128図1は上部井戸側の最下段東側の部材であり，同図2は下部井戸側内部に転落していた部材である。双方とも手斧で削った痕をみる。

下部井戸側は，ヒノキの丸太の一木を刳り抜く。高さ3.54m，最大幅1.14m，内径0.90mを，それぞれ測る。同部に使用された丸太は，数条のひび割れをみるものの，完形をとどめる。底部の3ケ所には長方形の孔を，1ケ所には円形の孔を，それぞれ穿つ。水を導くためのものかもしれない。長方形孔は縦25cm・横4cmを，円形孔は径6cmを，それぞれ測る。また，上端の2ケ所に長方形の孔を穿つ。下端部外面と中央部外面には，手斧で削った痕跡が残る（図版第33左上・左下）。中央部のそれは，節目の回りを調整したものである。手斧の調整痕をみる部分は，いずれも焼け焦げており，手斧の使用に先立ち，火熱を加えたことが知られる。また，内面にも工具で削った痕跡が残る。上端部には欠損した部分が2ケ所あり，1ケ所には3枚の，もう1ケ所には1枚の平瓦をあてて，それぞれ補修する。

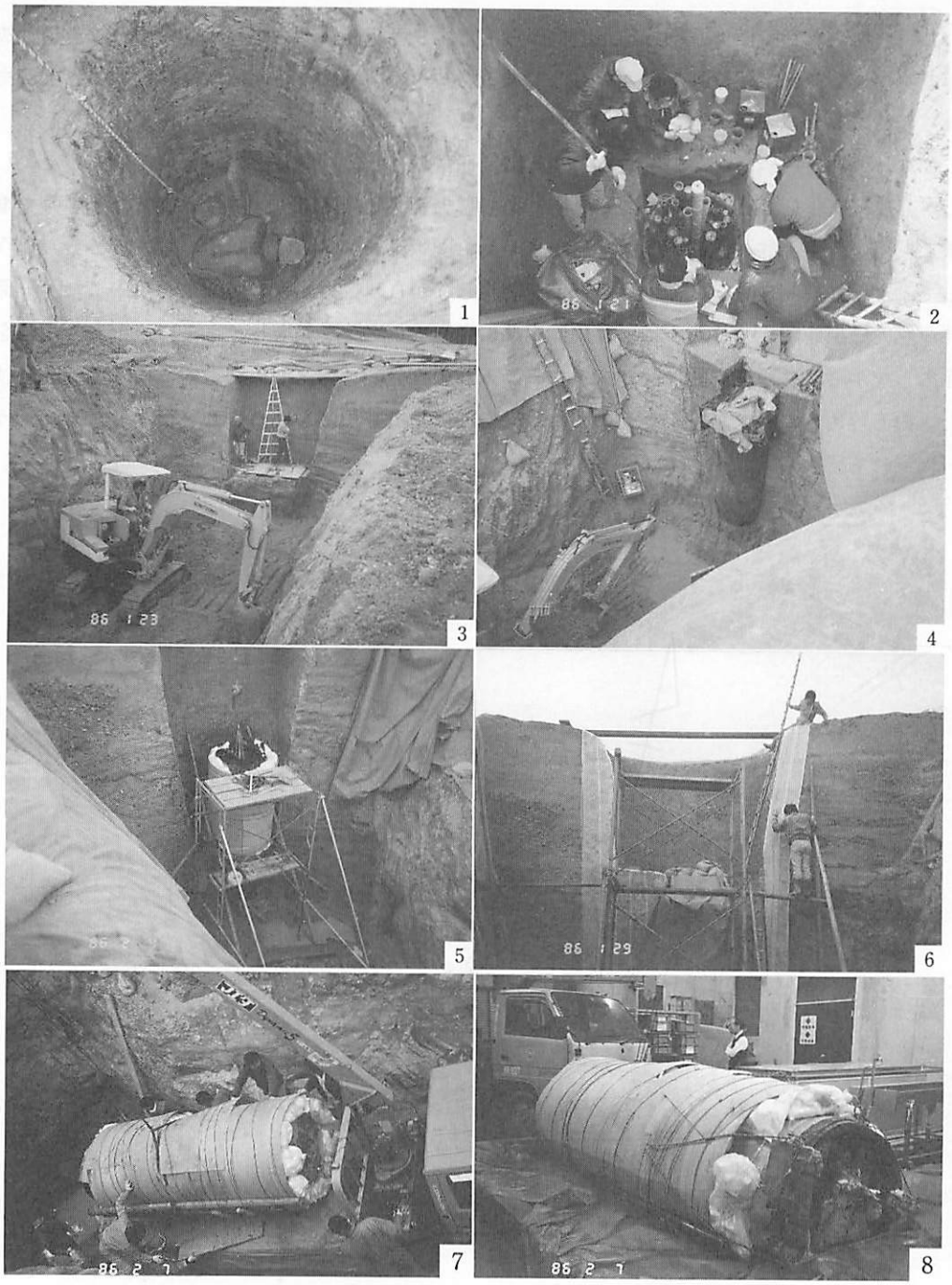
掘方の埋土で，上部井戸側の下端にあたるところが面をなし，そこから須恵器杯・土師器皿・瓦片・木片が出土した（第115図3・図版第34下）。これは，下部井戸側を据え付け，下部井戸側の上端近くまで掘方を埋め終えた際に，土器を使用した何らかの行為を行ったことを示す。そうしてその後，上部井戸側を組み上げつつ，掘方を埋める。

なお，井戸側の裏込は，下部井戸側の部分ではおもに粘土および粘質土で埋める。下部井戸側上端の土器集中部には砂をいれる。上部井戸側の部分ではおもに粘質土で埋める。上部井戸側の裏込には若干の土器および瓦が混じるが，下部井戸側の裏込には遺物をみない。

下部井戸側の内部からは，上部井戸側の材が多数出土したほか，曲物2点，須恵器瓶1点，斎串4点，櫛1点などが出土した（第115図4，図版第34上）。



第115図　畑ノ前遺跡5H井戸1実測図(縮尺：1・2は1/60，3・4は1/30)



第116図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１下部井戸側取り上げ状況写真

１：井戸側内の掘り下げ　２：井戸側内に樹脂を注入　３・４：井戸断ち割り掘削
５：井戸側外面の保護　６：断面の剝ぎ取り　７：井戸側の取り上げ
８：井戸側の仮保管

井戸の掘られた時期は，掘方出土遺物からみて，8世紀前葉にあたる。丸太の一木を刳り抜いた井戸としては，知られる最大のものである。井戸の埋没した時期は，井戸側内の出土遺物からみて，8世紀末葉にあたる。

なお，下部井戸側は，その巨大さのゆえに，通常の方法では取り上げが不可能であった。したがって，やむを得ず次の方法により井戸側を取り上げた(第116図)。まず，掘方の東半分を重機で掘削し，下部井戸側の東側面を露出させた。図版第32は，この段階での写真である。そうして，下部井戸側をロープで吊って転倒を防止しながら，掘方西半分の埋土を除去した。下部井戸側の破損を防止するために，井戸側内部に発泡ウレタンを充填し，さらに，掘方の埋土を除去しながら，井戸側周囲に発泡スチロール入りの土嚢袋をベニヤ板と番線によって巻きつけた。掘方埋め土の除去が完了したのち，重機を使用して井戸側をゆっくりと寝かせ，ダンプカーに乗せて搬出した。

第117図　畑ノ前遺跡3D溝1実測図(縮尺：1/20)
1：浅黄色砂質土(Hue5Y7/3，土馬出土層)　2：浅黄色砂質土(Hue2.5Y7/4)
3：地山ブロック混入土(Hue7.5YR6/8，炭混入，粘性)

3．溝

1）3 D溝 1（第117図，図版第35）

掘立柱建物群・竪穴住居址群などの各種遺構が検出された丘陵の平坦部から北に向かって舌状にのびる尾根の基部を切るように，溝が東西方向に走る。

この溝は幅1～2mの不整形な形状を呈し，東西約13mにわたってのびているが，両端は尾根の両縁に達しないままに消えている。最も深い東端で溝底まで15cmにすぎず，かなりの削平を受けているものと推定される。

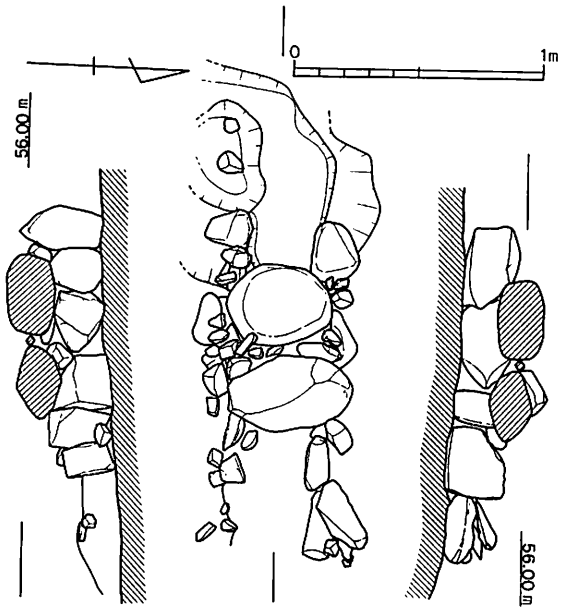
溝中からはサヌカイトの剝片，20×15cm大の扁平な花崗岩の石材，土師器・須恵器・瓦・土馬が出土した。サヌカイトの剝片は弥生時代のものだが，板状の石材は加工痕が認められず，用途・時期ともに不明である。

遺物の分布状態をみると，土器片は溝全体に，剝片は溝の東半に散布している。これに対して，土馬の破片は溝の東端から約1mの範囲に集中しており，摩滅していない。したがって，土馬は一括して放棄されたものと考えられる。

2）5 F石組溝（第118図，図版第36）

5号墳周濠上（5 F25区）に築かれた石組の遺構で，ほぼ東西方向を向く。残存している石組部は長さ約1.3mである。側壁は石を1段に積むが，石の置き方は縦位置と横位置がある。溝の幅は約25cmを測る。その上に，蓋石と思われる側壁よりもやや大振りの石が2個被せられていて，その隙間には小石が詰められていた。溝の深さは側壁上端からは20cmほどであるが，蓋石をすると15cmほどとなる。

この石組溝の石材は，花崗岩と河原石の両者がみられるが，花崗岩の方が圧倒的に多い。この花崗岩は，古墳の石室に使用されていたものを利用したと考えられる。

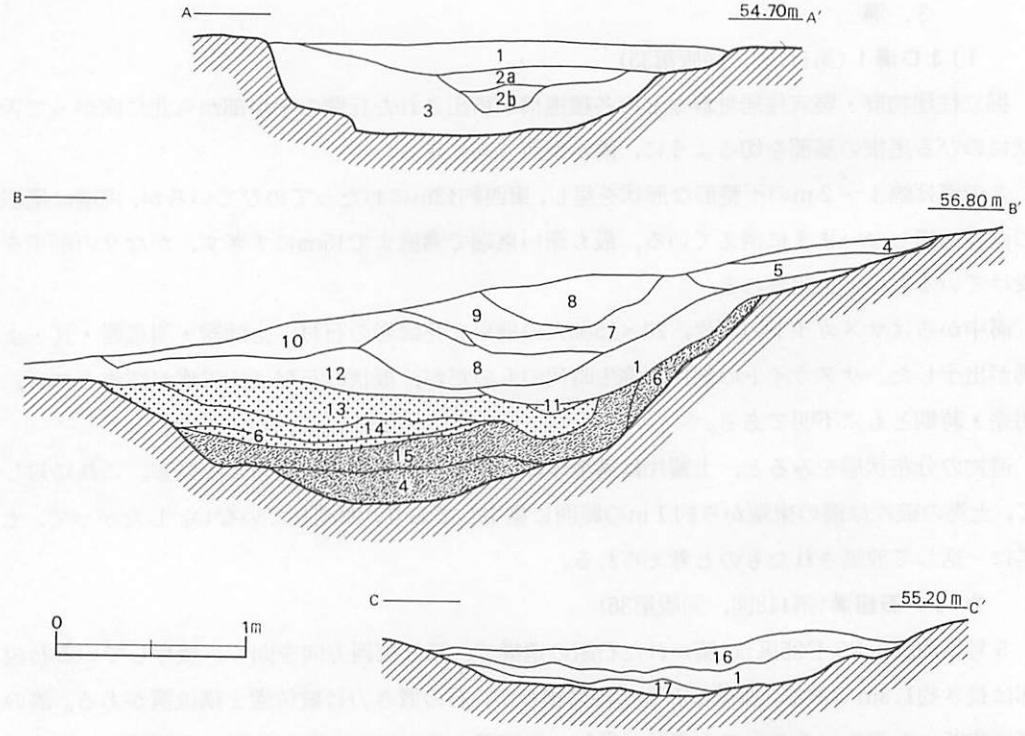


第118図　畑ノ前遺跡5 F石組溝実測図（縮尺：1/30）

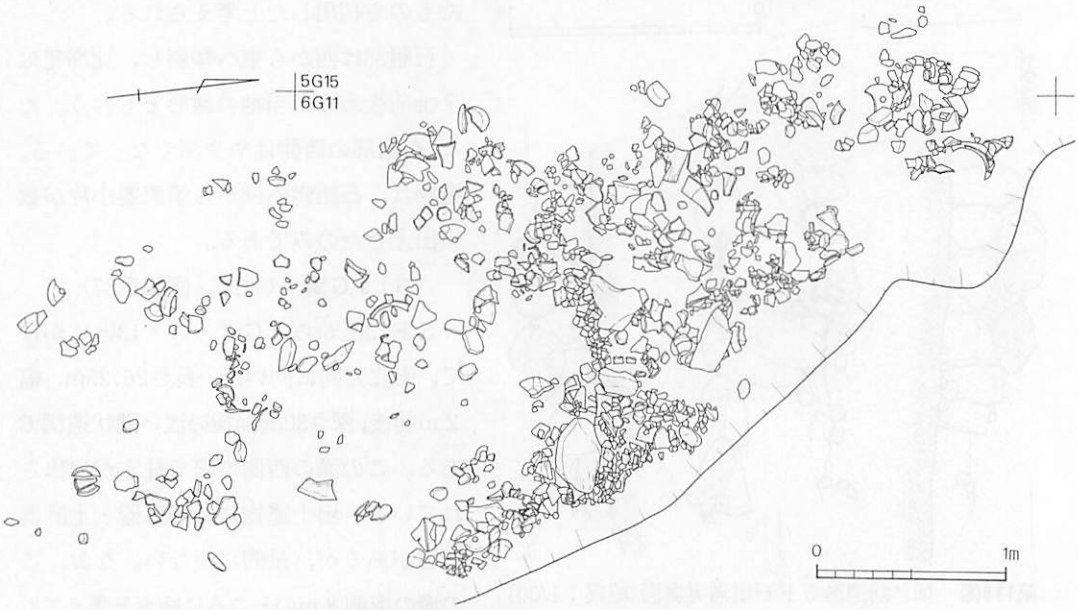
石組部は西から東へ傾斜し，比高差は7cm前後あり，当地の地形とも合う。ただ，石組部の西側はやや深くなっている。遺物は，石組溝内部から須恵器小片が数点出土したのみである。

3）5 G溝 1（付図，図版第37）

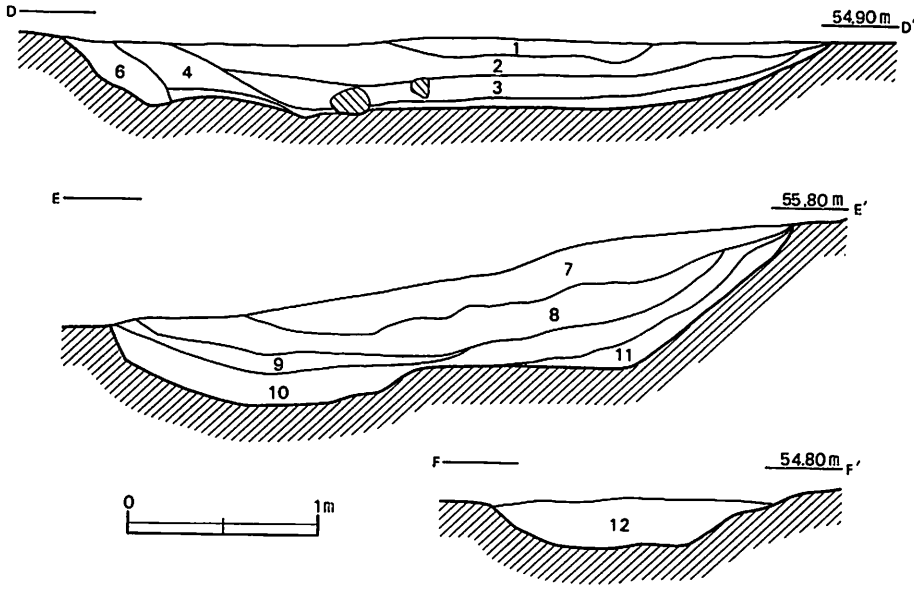
5 F23区から5 G 3・8・13区にかけて，南北方向に向いた，長さ26.25m，幅2m前後，深さ30cm前後の浅い溝状遺構である。この溝の西側の際で柱穴が検出されている。出土遺物には須恵器・土師器などがあるが，量的に少ない。なお，この溝の南側8mのところに続きと考えても



第119図　畑ノ前遺跡5号墳周濠断面実測図(縮尺：1/40)　各断面の位置は第80図参照。
1：褐色土(Hue10YR4/4)　2a：暗褐色土(Hue10YR3/4,炭多し)　2b：暗褐色土(Hue10YR3/4,炭少なし)
3：黒褐色土(Hue10YR3/2)　4：灰白色土(Hue10YR8/2)　5：にぶい黄橙色土(Hue10YR7/4)
6：明黄褐色土(Hue10YR6/8)　7：黄褐色土(Hue10YR5/6)　8：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)
9：にぶい黄橙色土(Hue10YR6/4)　10：黄橙色土(Hue10YR8/8)　11：にぶい黄橙色土(Hue10YR6/3)
12：明黄褐色土(Hue10YR6/6)　13：黄橙色土(Hue10YR7/8)　14：にぶい黄橙色土(Hue10YR7/2)
15：灰黄褐色土(Hue10YR6/2)　16：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/3)　17：黄褐色土(Hue2.5YR5/4)



第120図　畑ノ前遺跡5号墳周濠遺物出土状況平面実測図(縮尺：1/40)



第121図　畑ノ前遺跡6号墳周濠断面実測図(縮尺：1/40)　各断面の位置は第80図参照
1：にぶい黄橙色土(Hue10YR6/4)　2：にぶい橙色土(Hue7.5YR6/4)　3：暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)
4：浅黄色土(Hue2.5Y7/3)　5：明黄褐色土(Hue10YR7/6)　6：灰黄色土(Hue2.5Y6/2)
7：褐色土(Hue10YR4/4)　8：黒褐色土(Hue10YR2/2)　9：暗褐色土(Hue10YR5/4)
10：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)　11：暗褐色土(Hue10YR3/3)　12：褐色土(Hue7.5YR4/4)

第122図　畑ノ前遺跡6号墳周濠遺物出土状況平面実測図(縮尺：1/40)

良い同規模の5H溝1が存在する。

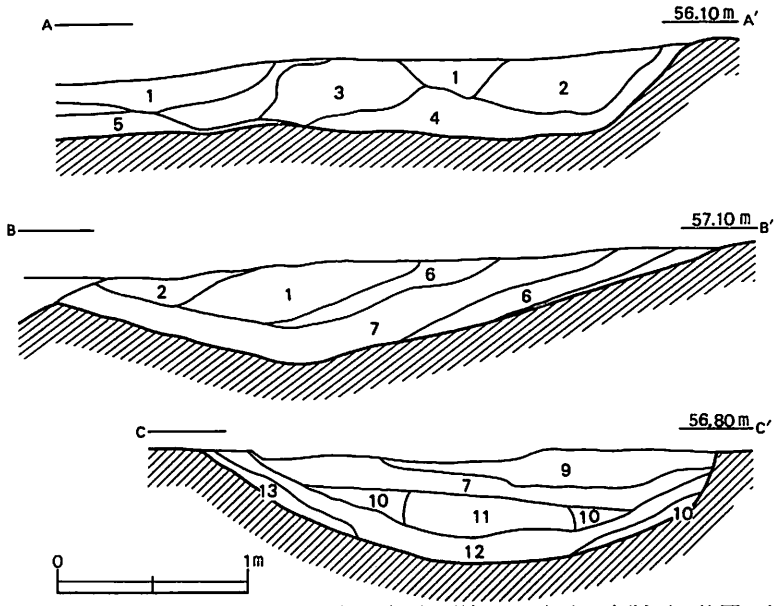
4）古墳周濠

5～7号墳の周濠に，その周濠底部にまで奈良時代の須恵器・土師器・瓦が大量に入っていたため，当時まで周濠が現存していて，それを廃棄坑として利用したものと思われる。各墳の周濠の規模などに関しては，第3章を参照していただきたい。遺物に関しては，各墳周濠の掘立柱建物群寄りの所から多く出土する傾向がある。

（1）5号墳周濠（第119・120図，図版第38・39）

調査時には各大グリッドごとに分けて，5G溝2・6G溝2・6F溝2と呼称していた。まず，溝の層位であるが，西側の一部において大きく3層に分けることができた（第119図B－B′）。上層は奈良時代遺物包含層である暗茶褐色土層とほとんど区別がつかず，本来は包含層であるのかもしれない。下層および最下層は，暗黄褐色土層（最下層は灰色味が強く粘性がある）をなす。

土器は，上層からと下層からまんべんなく出土したが，最下層からの出土量は少ない。ここで，分層して取りあげた分に関しては，遺物も次項で分けて取り扱っている。また，所によっては多寡がみられ，主に周濠の西側部（5G溝2，6G溝2）に大量にあり，北側から東側（6F溝2）にかけては出土量が少ない。出土土器の傾向としては，須恵器は，7号墳周濠に比べて甕類の出土が少なく，蓋杯類が多かった。なお，6G区で6号墳周濠と一部それを共有するが，



第123図　畑ノ前遺跡7号墳周濠断面実測図（縮尺：1/40）　各断面の位置は第82図参照

1：暗褐色土（Hue10YR3/4）　2：にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）
3：褐色土（Hue10YR4/4）　4：黄褐色土（Hue10YR5/6）
5：黄色土（Hue2.5YR8/6）　6：灰黄褐色土（Hue10YR6/2）
7：明黄褐色土（Hue10YR6/8）　8：にぶい黄橙色土（Hue10YR7/2）
9：黄橙色土（Hue10YR7/8）　10：明黄褐色土（Hue10YR6/6）
11：褐灰色土（Hue10YR6/1）　12：褐灰色土（Hue10YR5/1）

断面(第121図D－D′)でみる限り，切り合い関係はなく，この共有部での遺物の出土量も少なかった。

（2）**6号墳周濠**(第121・122図，図版第40)

調査時には，各グリッドごとに分けて，6G溝1(ただし，5号墳周濠との共有部に関しては6G溝1・2とした)・6H溝1と呼称していた。層位は，色調によって何層かに分離できるが，5号墳周濠の一部のように大きく分層することはできなかった。遺物に関しては，5号墳周濠と同様に西側より多量に出土している。

（3）**7号墳周濠**(第123図，図版第41)

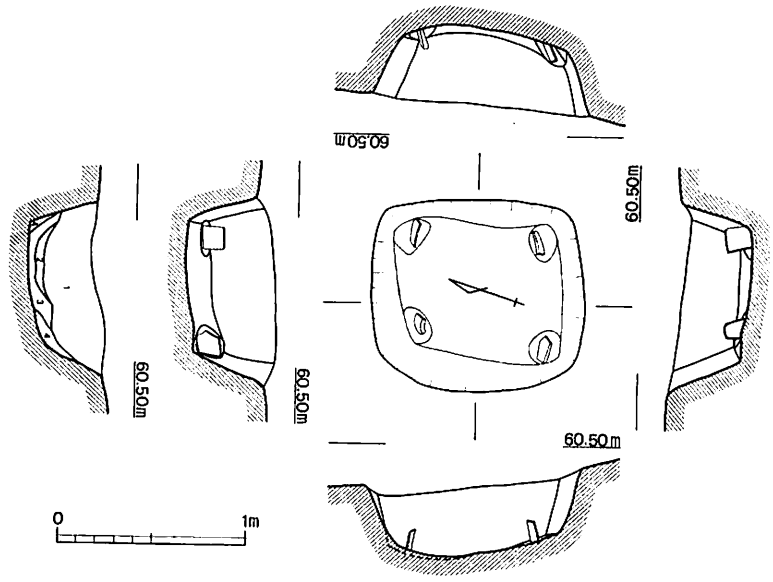
調査時には，各大グリッドごとに分けて，5I溝1・6I溝1(一部5・6J区にもかかる)と呼称していた。層位は，6号墳周濠と同様，大きく分層することはできなかった。遺物は西側から北側にかけて多く出土し，南側は出土量が少なかった。ここでは，主に須恵器甕類が多く出土している。

4．土壙

1）**2G土壙16**(第124図，図版第42)

平面形が1×1.12mを呈するやや長方形気味の土壙で，長辺が南北方向よりやや西へふれる。深さ40cm弱である。四隅に，直径ほぼ15cmの円形の穴を掘り，西北隅には赤褐色軟質の丸瓦を立て，その他には黒色軟質の平瓦を立てて，埋めている。これらの瓦は，西南隅の瓦が外側に傾いている他，総て内側に傾いていた。

この土壙内堆積土は4層に分かれ，第124図土層図の2層と4層は炭を多量に含む層であり，この間には小礫を含む間層である3層が認められた。ただ，後述するような側壁が焼けた土壙のように，壁が焼けた痕跡は認められず，底面も焼けたような痕跡はなかった。



第124図　畑ノ前遺跡2G土壙16実測図(縮尺：1/40)
1：黄橙色砂質土(Hue7.5YR7/8)　2：暗褐色粘質土(Hue7.5YR5/8)
3：明褐色粘質土(Hue7.5YR5/6)　4：暗褐色粘質土(Hue7.5YR5/6)

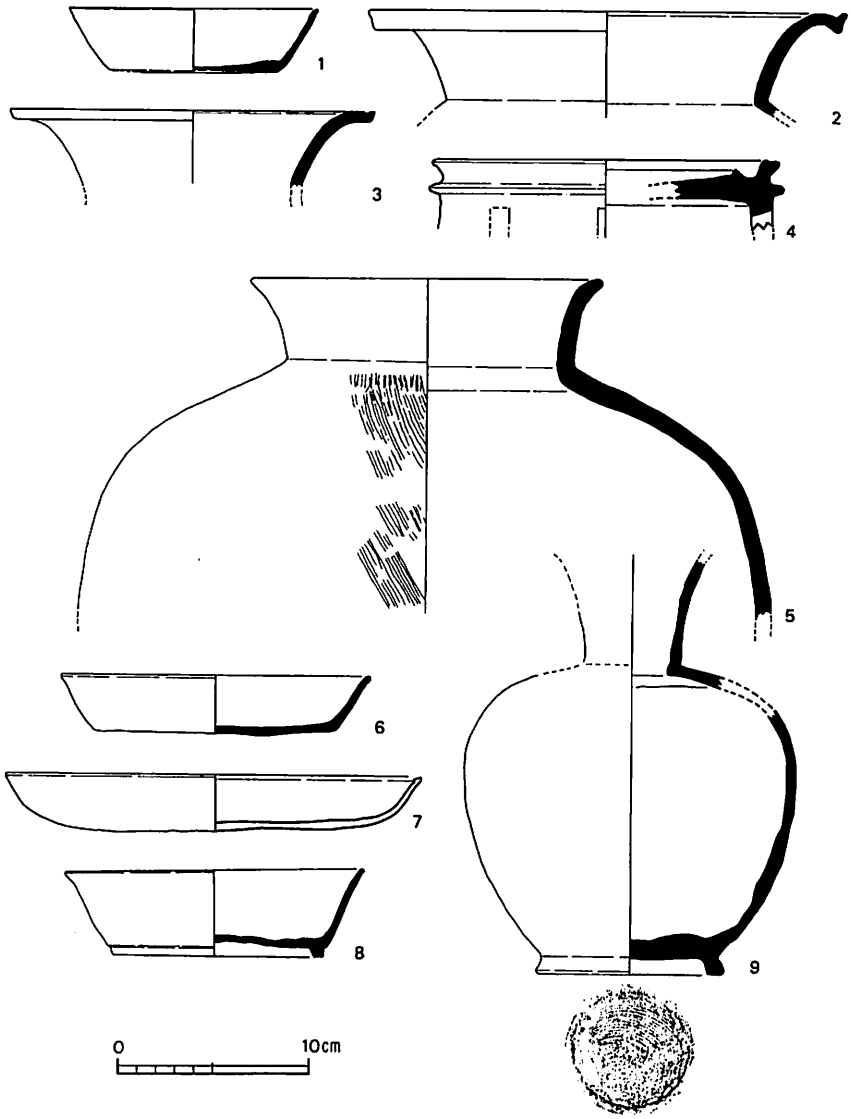
2）5Ｆ溝2南・ほりこみ(付図，図版第43)

検出時点では，５Ｇ溝２（５号墳周濠)が，直線的にほぼ北へ延び，５Ｆ溝２と連結するものと考えていたが，その溝が連結せず，一つの完結した大きな土壙になることが判明した。

規模は2.0×6.0mで，長軸はほぼ東西方向を向く。この土壙の東側は地形が斜面をなすため，肩がなく，そのまま斜面へとつながる。深さは中央部で65cm前後ある。遺物は，須恵器・土師器などが出土している。

3）3Ｈ13土壙１

３Ｈ13区でほぼ完形に近い土師皿５個を検出したが，埋土と周辺の土が明確に判別できず，



第125図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土遺物実測図(1)　(縮尺：1/4)

確実に土壙としては掘り出せなかった。しかし，土師皿の出土状況からみると，小さなピット状の遺構であったと考えられる。その土師皿を第149図に示しておく。

4）**6 H土壙 3**（付図）

6 H20・25区にかけて検出した遺構である。発掘区域の東壁にかかっていて，その東側は未発掘であるが，現状では平面プランが南北5 m，東西3.6mの三角形状を呈する。すり鉢状になり，深さは40cm前後である。この土壙からはかなりの量の瓦が出土した。

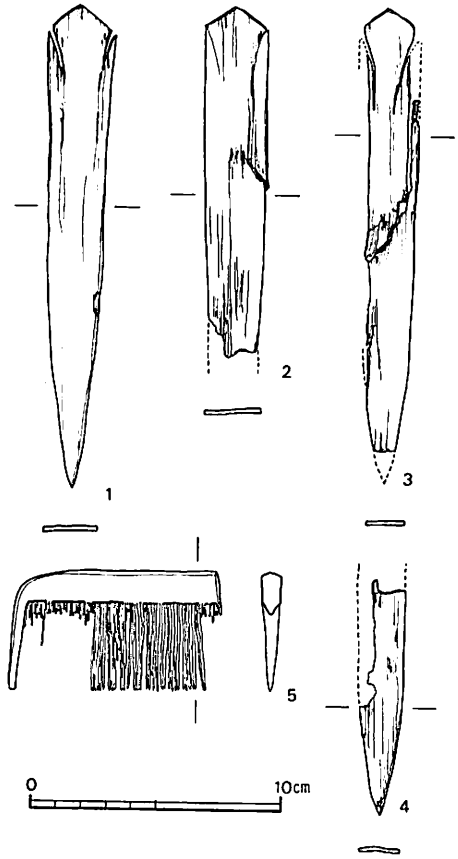
第2節　遺　　物

1．5 H井戸 1 出土遺物（第125～127図，図版第61）

井戸側内部出土遺物

須恵器瓶（第125図 9）　井戸側内部で，下端に近いところから出土した。卵形の体部と，わずかに開く口頸部からなり，底部に高台を付す。肩部はなだらかに張る。体部下半を回転ケズリ調整する。肩部には緑色の自然釉がかかる。底部には回転糸切り痕が残る。8世紀末葉のものである。

須恵器有台杯（第125図 8）　底部と体部との境界付近に高台を付す。



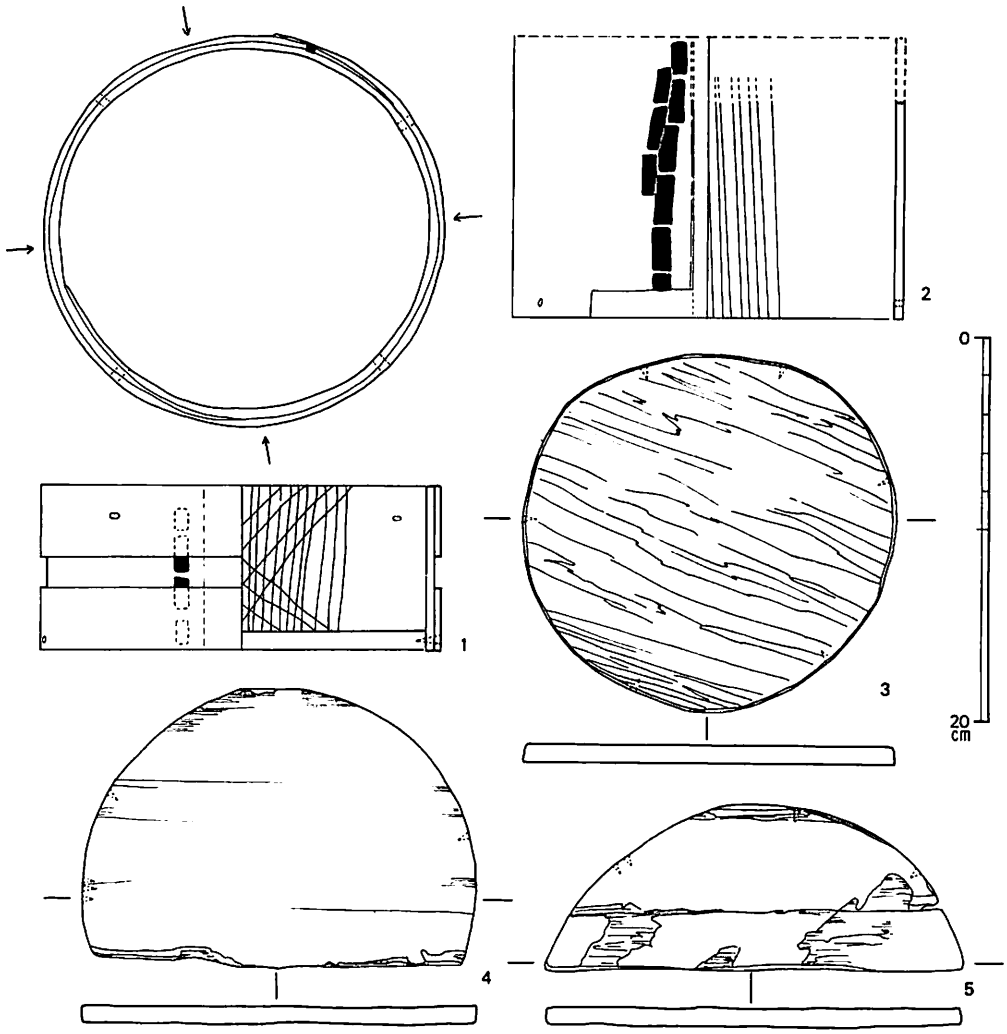
第126図　畑ノ前遺跡 5 H井戸 1 出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）

斎串（第126図 1～4）　4点出土した。上端部側面に一対の切り込みをいれる。1は完形で，長さ19.2cm，幅2.7cm，厚さ0.2cmを測る。ほかの3点も同形同大である。

櫛（第126図 5）　一方の端が欠損する。縦長4.8cm，基部での厚さ0.8cmを，それぞれ測る。

曲物（第127図 1～5）　1は内径19.2cm，高さ8.7cmを測る。厚さ約0.4cmの側板を一重で重ね，幅0.8cmの桜皮でぬいとめる。さらに補強のために厚さ0.4cm，幅3.8cmと3.3cmの「まわしの側板」を上端と下端にまきつけている。側板との接合は，上段が太さ約0.4cm四方の木くぎで4ケ所，下段は4ケ所，直径0.2～0.3cmの木くぎによって厚さ約1cmの底板と同時にとめている。また，側板の内面には側板を曲げやすくするために，0.5～1cm間隔で縦・斜方向にきざみ目を施している。

2は内径19.5cm，上部を欠き残存高11.5cmである。厚さ0.5cmの側板を一重で重ね，幅約1cmの桜皮でぬいとめる。この桜皮の残存状態から，



第127図　畑ノ前遺跡5H井戸1出土遺物実測図(3)（縮尺：1/4）

この曲物の高さは15cm前後であったと推定できる。1と同様に側板の内面には0.5～1cm間隔で縦方向のきざみ目が施されている。なお，3はこれの底板で，厚さ1～1.2cmである。外周6ケ所に木くぎの跡が残る。側板にも木くぎによる小孔が残るが，その位置からみるとややあげ底気味になっていたようである。

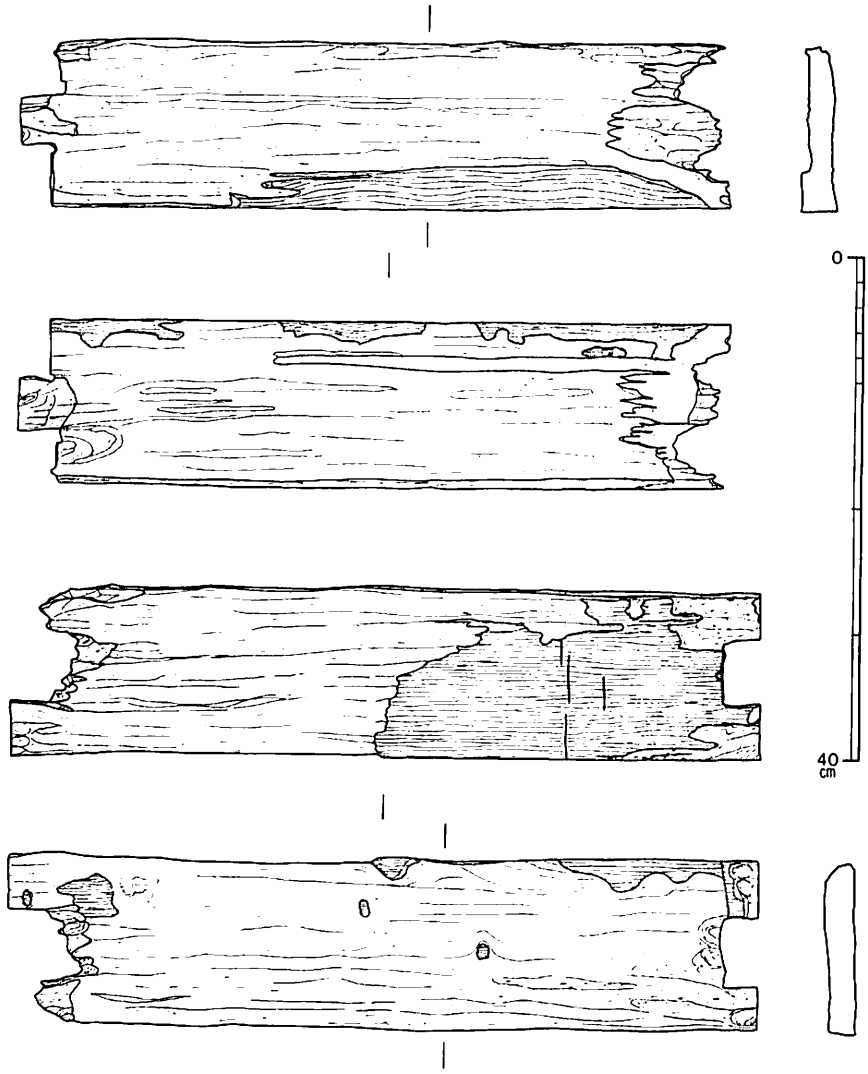
4は曲物の底板であろう。直径20.6cm，厚さ0.9cm，6ケ所に木くぎ跡を残す。

井戸掘方埋土出土遺物

掘方埋土中で，下部井戸側の上端付近の遺物集中部分から出土したものである。

須恵器無台杯(第125図6)　底部は平坦で，口縁部はわずかに外反する。底部には回転ナデ調整を施す。内外両面に火襷をみる。

土師器無台皿(第125図7)　掘方の埋土中で，上部井戸側の下端から出土した。底部は平坦で，



第128図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土上部井戸側実測図(縮尺：1/6)

口縁部は短く外上方にのびる。口縁部は，下半がわずかに内彎し，上半がわずかに外彎する。口縁端部内面は丸く肥厚する。内面に暗文をみない。底部は不定方向のケズリ調整を施す。

掘方出土土器は，平城宮跡出土土器編年の平城宮IIに併行する。実年代では８世紀前葉にあたる。

木製品(第127図５)　曲物の底板であろう。全体の３分の２を欠く。推定直径は22.2cm，厚さ0.9cm。４ケ所に木くぎ跡がある。

掘方上層出土遺物

須恵器甕(第125図５)　口頸部はわずかに外反する。

井戸上層小礫群(５Ｈ溝２)出土遺物

須恵器(第125図1～4)　1は無台杯，2・3は甕である。4は円面硯である。脚端部を欠く。外堤部は低い。内堤部は断面三角形に突出する。陸部は使用により摩滅が著しい。

2．溝出土遺物

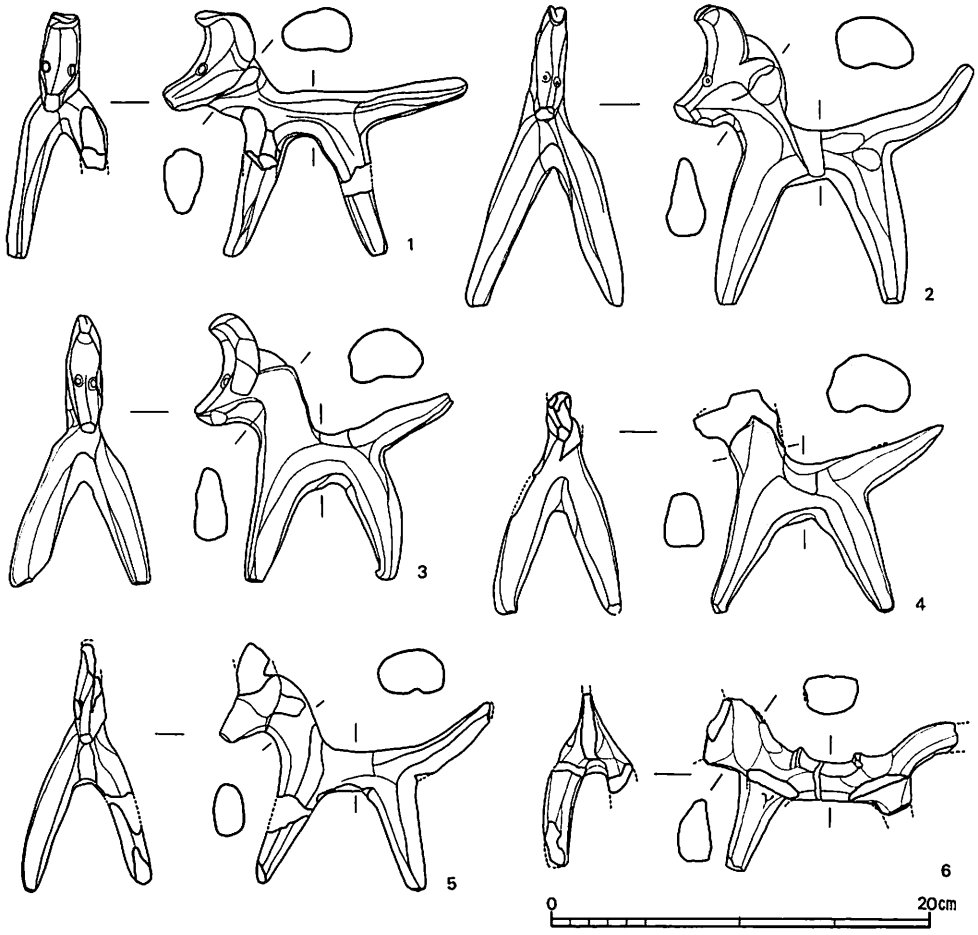
1）3D溝1出土遺物(第129図，図版第62)

溝の時期については，土師器・須恵器・瓦のいずれも細片であるため，時期を確定するに至らない。そこで土馬の型式から推定することにしたい。

土馬5個体のうち，3個体(第129図2・3・5)はほぼ完全に復元され，残る2個体のうち，1体(第129図1)は左前脚部を，他の1体(第129図4)は頭部をそれぞれ欠損している。

5体とも，粘土紐貼り付けによる馬具着装が認められない点では裸馬であるが，背と頸との境あたりを押さえるように強く撫でつけており，それによって鞍を表現した可能性がある(第129図2～4)。

耳は，竹管で突いた目と同じくらいの高さから頸すじ上方にむかって水平に取り付く。耳を



第129図　畑ノ前遺跡3D溝1出土土馬実測図(縮尺：1/4)

つけた後で，顔面部がつけられるが，この後，耳と顔面との間をナデている。

前面からみると，両脚は約50度で逆V字型に開く。

各土馬の大きさは以下の通りである。

	体長(cm)	体高(cm)
第129図 1	16.0	12.8
〃　2	15.9	15.6
〃　3	13.7	14.0
〃　4	13.2(残存長)	11.5(残存高)
〃　5	14.3(　〃　)	12.9

体長は約14～16cm，体高は約13～16cmの間にある。この大きさは，小笠原好彦氏の分類に従うとE型式に相当する。しかし，E型式の典型例とされている奈良市前川遺跡出土の土馬と比較すると，顔面の屈曲が強い，胸の位置が高い，両脚が逆U字形でなく逆V字形である，などの点で，若干，後出の感がある。小笠原編年では，E型式の土馬は740～760年代に比定されているので，これより少し時期が降りるとしても奈良中期から後期にかけての時代幅のなかにおさまるものと考える。

土馬は溝内から出土したものの他に，溝の東南方で破片がみつかっている。いずれも，表土層である灰色土中に含まれていたが，溝内か，あるいはその近傍に廃棄されたものの一部である可能性が大きい。

復元できたのは1体(第129図6)のみで，残りは脚部5，胴部1，頸部1，頭部1に判別される。

第129図6は頭部，左前脚及び後脚，尻尾端部を欠損し，残存長は13.4cm，残存高は9.0cmを測る。この個体が，溝内から出土した土馬と大きく異なるのは，粘土紐を貼り付けて鞍を表現している点である。したがって，明確に飾馬の範疇に含まれる。加えて，尻尾が垂れる，前脚後部と胴部下端とはゆるやかに彎曲した線を描くのではなく，鈍いが角をもっている，両脚の前面観は逆U字形である，などの点で溝内出土の土馬とは異なる。これらの特徴は，小笠原編年でいえばC型式に相当するものであり，710年代を前後する時期に比定されている。

すなわち，当遺跡における土馬祭祀は8世紀前葉に遡ると考えられる。

8世紀以降，土馬が水の道から発見される例は多い。本例もその一つで，居住区の北限を画すると考えられる溝，およびその近傍から出土した。この溝以外には溝らしき遺構が検出されていないので断定はできないものの，土馬を用いた祭祀が溝の近くで行われたというだけでなく，その溝が災禍をもたらすと信じられていた北の方向にあたっていることにも重要な意味があったのではないか，と推察される。

2)古墳周濠出土遺物

(1)5号墳周濠出土遺物(第130～134図，図版第63～65)

須恵器

杯蓋(第130図1～12)　天井部に擬宝珠形の鈕を付す。口径13.6cm～19.6cmを測る。12は口径24.4cmを測る大型品で,有台皿の蓋であろう。口縁部が下方に短く屈曲する形態のもの(1～9・11・12)がほとんどであり，口縁部と天井部の境界が段をなすもの(10)は少数である。天井部の形態は，まるく笠形を呈するもの(1～5)と，ほぼ平坦なもの(6～12)とがある。天井部には，回転ケズリ調整を行ったのち，回転ナデ調整を施すものと，ケズリを行わず，回転ナデ調整を施すものとがある。

有台杯(第130図13～33)　口径9.8cm～21.0cmを測る。高台は底部と体部の境界付近につくけれども，同境界線からわずかに離してつくものが多数をしめ，同境界線上に高台をつけるもの(29)はすくない。底部は回転ケズリ調整を施すもの(13・16・18・19・27・32)，回転ナデ調整を施すもの(15・17・20・22・31・33)，回転ケズリ調整ののち回転ナデ調整を施すもの(21)，不調整かもしくは軽い不定方向のナデ調整を施すもの(23・25・28～30)とがある。27は器高が低く，口縁端部に平坦な面をもつ点で，他の杯身と違った特徴をもつ。通常の杯身の口縁端部を切断したようにみえる。

有台皿(第130図34・35)　34は口径29.6cm，35は口径33.6cmを，それぞれ測る。形態の特徴は有台杯と変わらない。34は底部に回転ナデ調整を施す。35は底部に回転ケズリ調整を行ったのち，回転ナデ調整を施す。

短頸壺蓋(第130図36～38)　平らな天井部と，垂直におりる口縁部とをもつ。口縁端部は面をなす。鈕を欠くが，宝珠形のものであったろう。

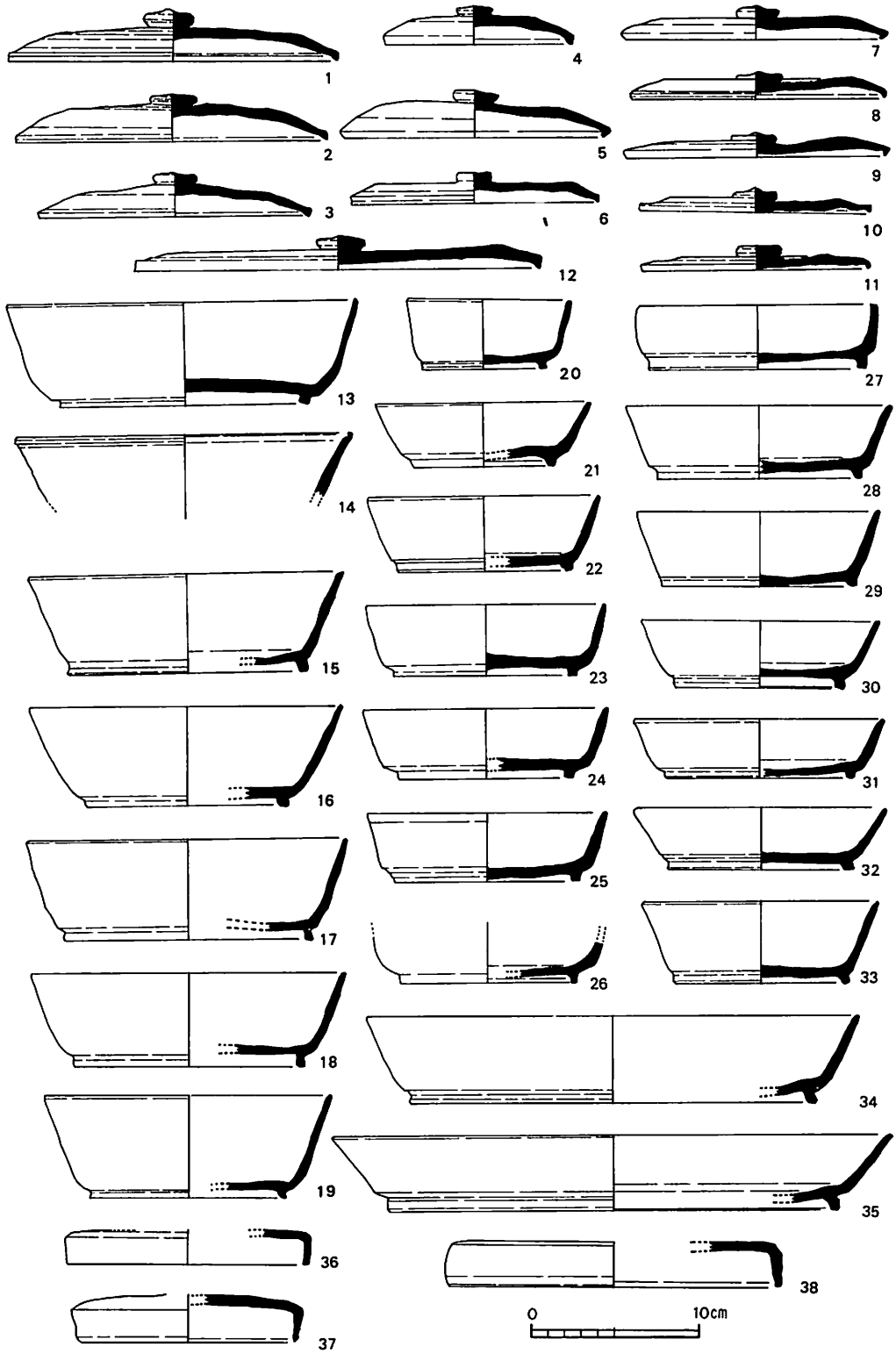
無台杯(第131図1～22)　体部から口縁部にかけて直線的に外反する。底部は，ほぼ平らなもの(1～9・11・12・14・19・21・22)と，丸みをおびるもの(10・13・15～18・20)とがある。調整は，体部の内外面に回転ナデ調整を施し，底部内面に不定方向のナデ調整を施す。底部外面は，回転ケズリ調整を施すもの(11・12・18)，不定方向のケズリ調整を施すもの(14)，回転ナデ調整を施すもの(1・17・19)，不定方向のナデ調整を施すもの(3・4・8・15・20)，不調整のもの(6・10)がある。底部を丸く仕上げるばあいには，ケズリ調整を施さない。一方，底部を平坦に仕上げるには，ケズリ調整を施すばあいと，施さないばあいの双方がある。ただし，18は口縁部が平坦な面をもち，体部下半から底部にかけて丁寧な回転ケズリ調整を施し，底部を丸く仕上げている点で，他と相違する。9は外面に火襷をみる。

無台皿(第131図23～25)　平坦な底部と，斜め上方にのびる口縁部をもつ。23は，底部に回転ケズリ調整を，底部内面に一定方向のナデ調整を施す。24は摩滅が激しく，調整はわからない。25は小型品である。口縁部が外反する。底部に回転ケズリ調整を施す。

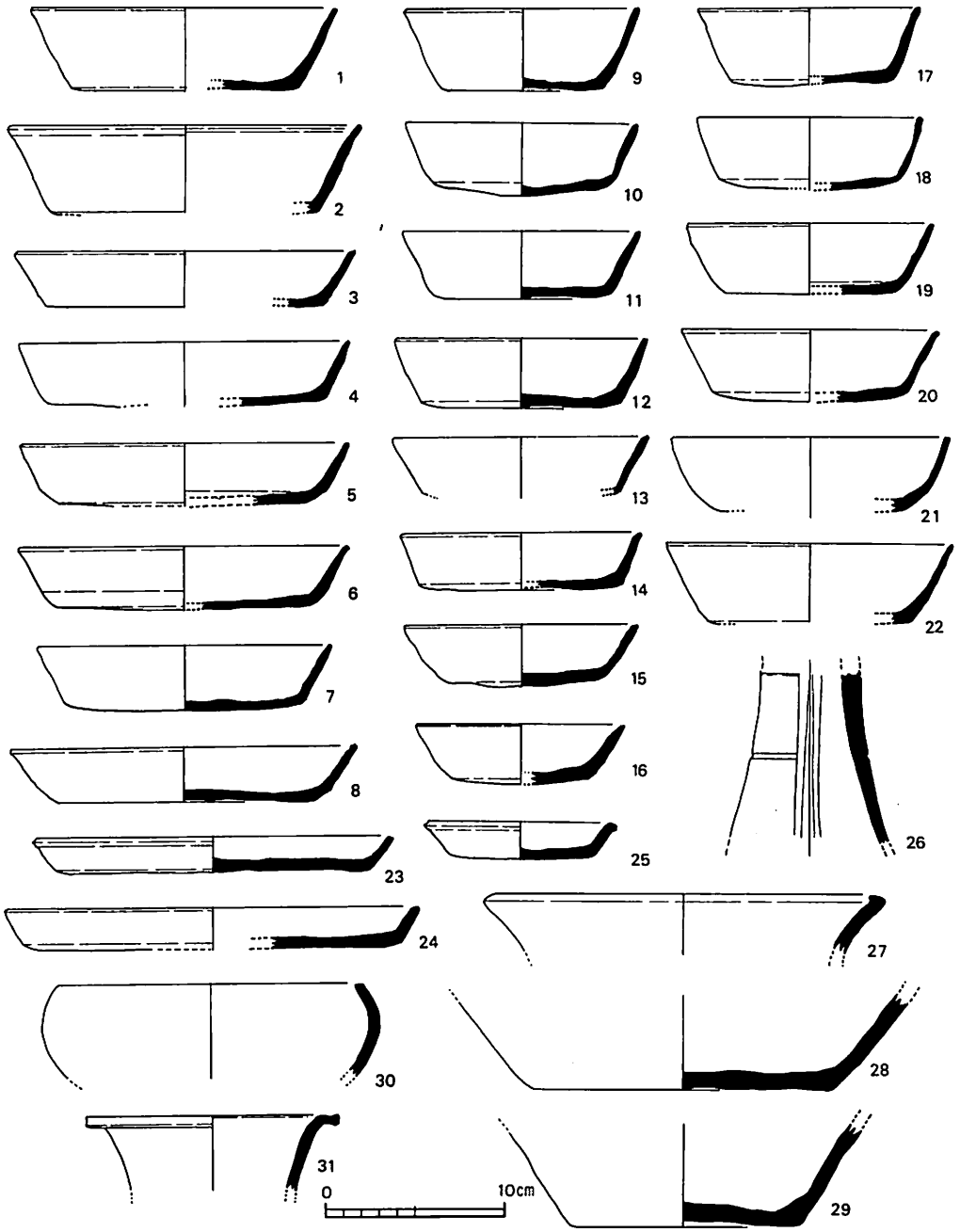
高杯(第131図26)　脚部の破片である。4方向に透孔を開ける。

壺(第131図27～29)　27は口縁部の，28・29は底部の，それぞれ破片である。27は口縁部が内側に屈曲する。28・29は底部に不定方向のケズリ調整を施したのち，不定方向のナデ調整を行う。29は外面に火襷をみる。

鉄鉢形土器(第131図30)　口縁端部は平坦な面をなす。体部下半に横方向のミガキ調整を施す。



第130図　畑ノ前遺跡５号墳周濠出土遺物実測図(1)　(縮尺：1/4)

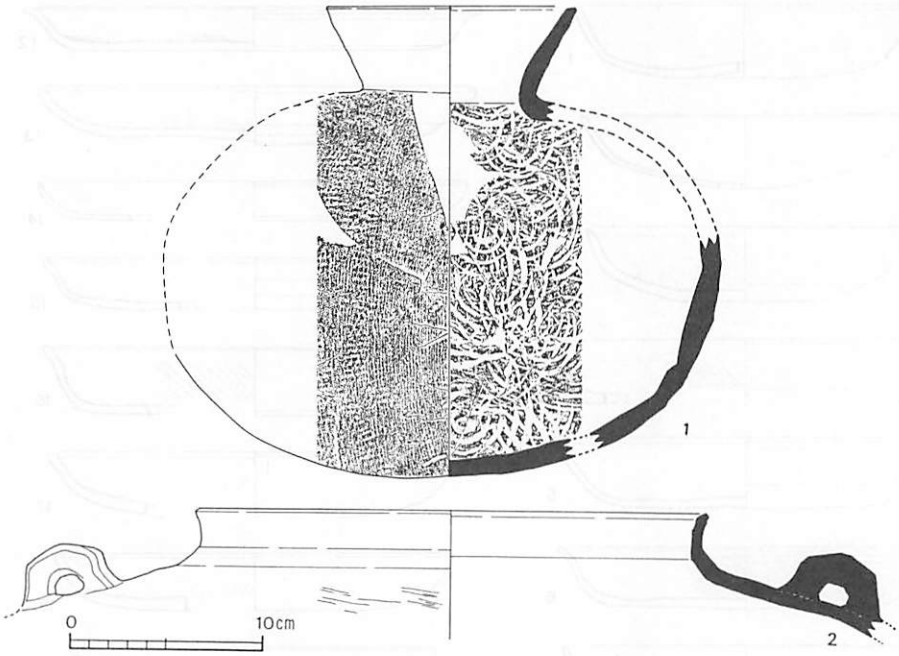


第131図　畑ノ前遺跡5号墳周濠出土遺物実測図(2)　(縮尺：1/4)

瓶(第131図31)　口縁部が水平方向に屈曲する。

横瓶(第132図1)　俵形の体部と，大きく開く口頸部からなる。体部はタタキ成形したのち，外面をカキメ調整して仕上げる。

甕(第132図2)　短頸の甕である。肩部に断面方形の把手を付す。



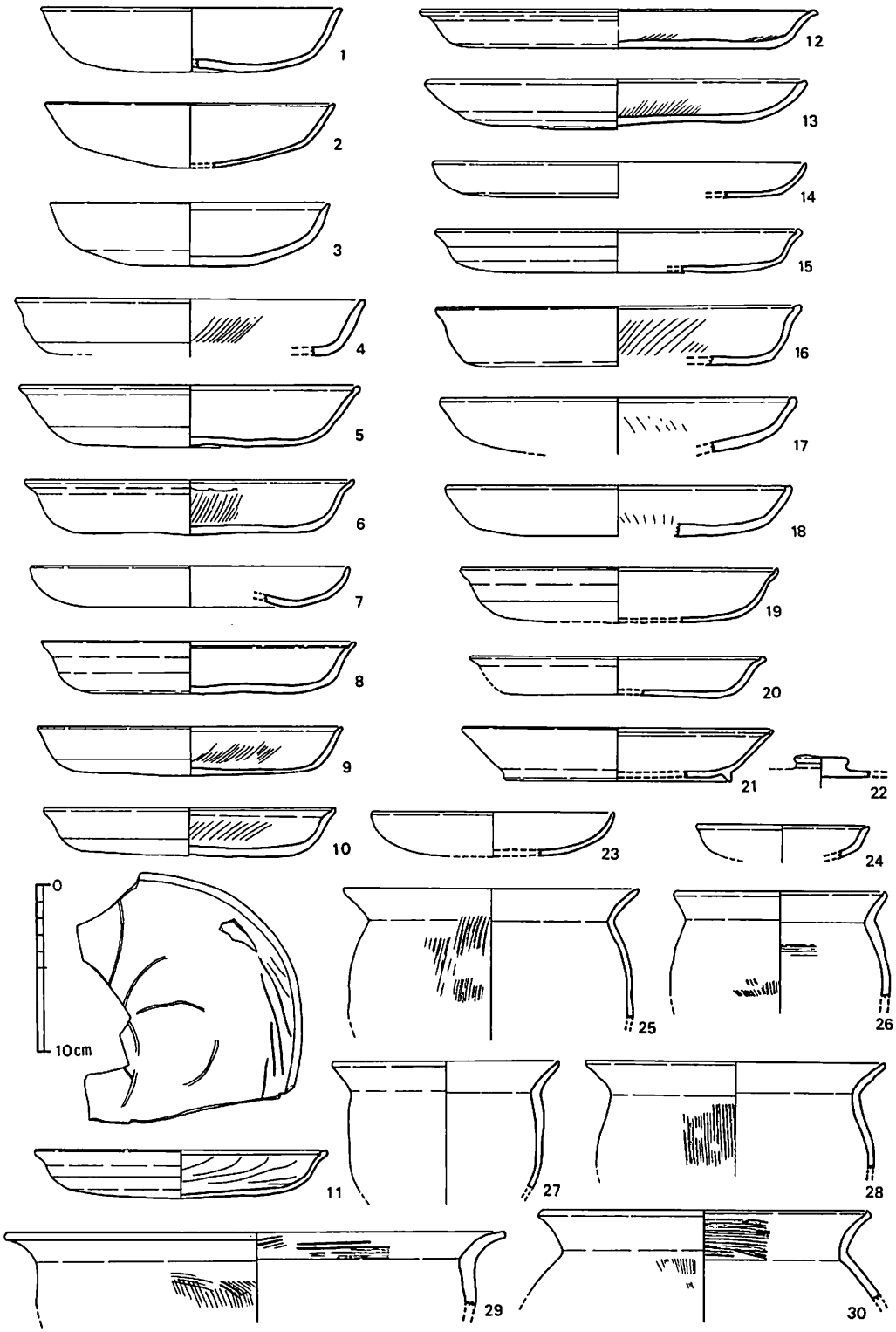
第132図　畑ノ前遺跡５号墳周濠出土遺物実測図(3)　(縮尺1/4)

土師器

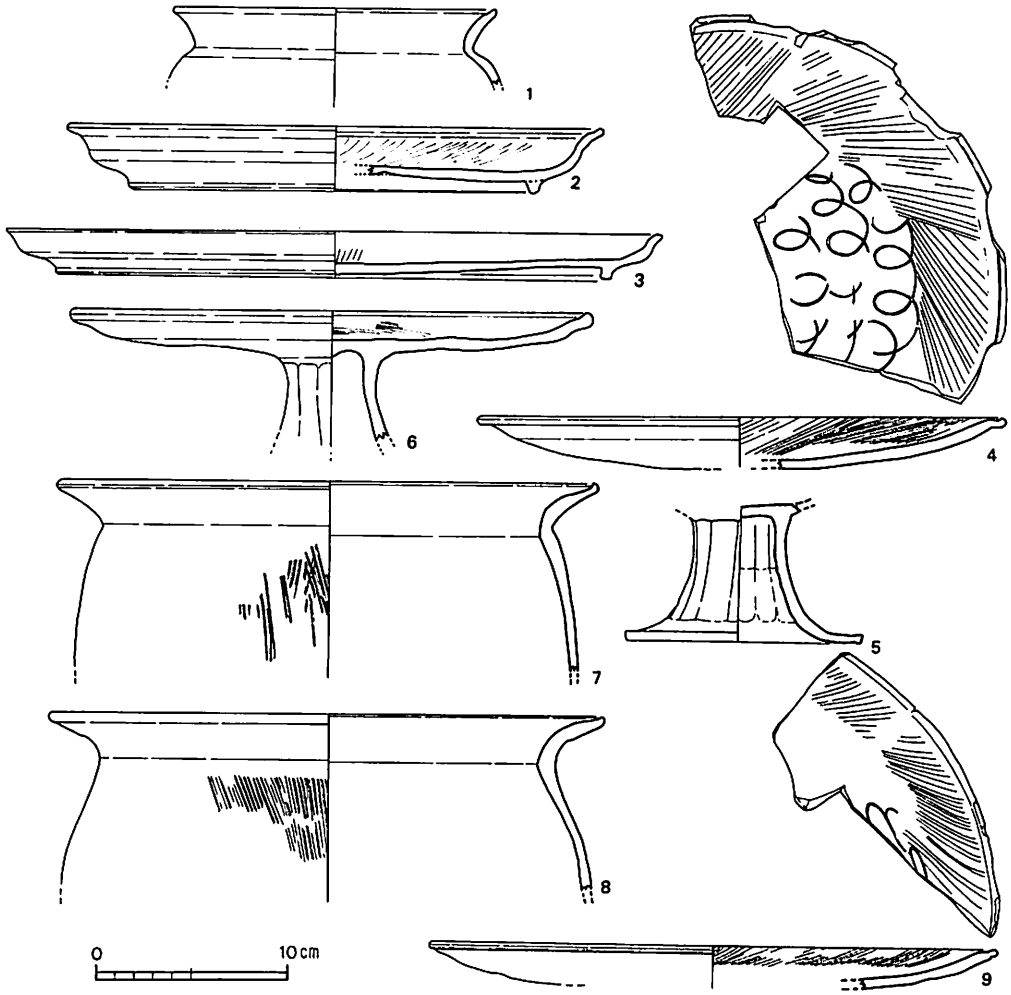
無台杯(第133図１～６・８～11・16～19・23・24)　形態的に２種ある。その一は，広い平らな底部と，斜め上方に開く口縁部をもつもの(４～６・８～11・16～19)である。内面に，斜放射文と螺旋文からなる暗文を施す。内面に連弧文を施すもの(６)もある。底部は，オサエ調整するもの(４・８・11)と，不定方向のケズリ調整を施すもの(５・６・10・18・19)とがある。口縁部の形態で，さらに２種に分けられる。一つは口縁部下半が内彎し，上半がわずかに外彎する弧をえがくもので，口縁端部が内側に丸く肥厚する(６・８・10・11・16・17・19)。もう一つは口縁部がゆるやかに外上方にのびるもので，口縁端部は丸くおさめるか，わずかに内側に肥厚する(４・９・18)。その二の型式は，小さな平底ないしは丸底の杯である(１～３・23・24)。口縁部はやや内彎気味に外上方にのびる。口縁端部は，内傾する面をもつもの(２・３・24)と，丸くおさめるのみのもの(１・23)とがある。２は底部にオサエ調整を，23は底部に不定方向のケズリ調整を，それぞれ施す。

有台杯(第133図21)　底部に断面三角形の小さな高台をつけ，大きく開く口縁部をもつ。

無台皿(第133図７・12～15・20)　広く平らな底部と，短く外上方にのびる口縁部からなる。内面に斜放射文と螺旋文からなる暗文をみる。無台杯と同様，口縁部の形態に２種ある。一つは口縁部下半が内彎，上半がわずかに外彎する弧をえがくもの(12・15・20)であり，もう一つはゆるやかに内彎するもの(７・13・14)である。前者の口縁端部は内側に肥厚し，後者の口縁部は丸くおさめるか，わずかな内傾する面をもつ。底部は，不定方向のケズリ調整を施すもの



第133図　畑ノ前遺跡5号墳周濠出土遺物実測図(4)　(縮尺：1/4)



第134図　畑ノ前遺跡5号墳周濠出土遺物実測図(5)　(縮尺：1/4)

(12・20)と，オサエ調整を施すもの(13)とがある。

蓋(第133図22)　有台杯または有台皿の蓋である。天井部にボタン形の鈕をもつ。

甕(第133図25～30，第134図1・7・8)　広口の甕である。2種ある。一つは，口径が胴部最大径よりも大きなもの(第133図25～27・29，第134図1・7・8)である。もう一つは，口径が胴部最大径よりも小さなもの(第133図28・30)である。双方とも外面をタテ方向のハケで，内面をヨコ方向のハケで，それぞれ調整する。

高杯(第134図4～6・9)　4・9は脚部を，5は杯部を，それぞれ欠く。杯部は，やや内彎しながら斜め上方にゆるやかにのびる。口縁端部はわずかに屈曲する。内面に斜放射文と螺旋文からなる暗文をみる。脚部は大きくラッパ形に開く。脚部外面をタテ方向のケズリによって面取りする。

有台皿(第134図2・3)　口縁部は，下半が内彎，上半が外彎する弧をえがく。内面に斜放射

文と螺旋文からなる暗文をみる。底部は不定方向のケズリ調整を施す。

5号墳周溝出土遺物は，平城宮跡出土土器編年の平城宮IIに併行する。実年代では8世紀前葉にあたる。

（2）**5号墳周濠上層出土遺物**（第135・136図，図版第65）

須恵器

杯蓋（第135図1）　笠形の天井部と，短く内側に屈曲する口縁部をもつ。鈕を欠損する。天井部は回転ケズリ調整を施し，そののち回転ナデ調整を施す。

有台杯（第135図2～7・11～15・22～25）　外上方に直線的にのびる体部をもち，平坦な底部に高台を付す。高台は，体部と底部の境界線の部分につくものが多い（2～6・11～13・15・22～24）が，それぞれやや内側につくもの（7・14・25）もある。底部は，回転ナデ調整を施すもの（2・3・5・11），不定方向の粗いナデ調整を施すもの（4・6・25），回転ケズリ調整を施すもの（15・23・24），回転ケズリ調整ののち回転ナデ調整を施すもの（7），調整を施さないもの（13）がある。4・13・24には，底部に爪形状圧痕をみる。

無台杯（第135図8～10・16～18・21・26～29）　体部は外上方に直線的にのびる。底部は，丸く仕上げるもの（8・18・26～29）と，平坦なもの（9・10・16・17・21）とがある。底部が平坦なものには，底部に不定方向のナデ調整を施すもの（16・17・21）と，回転ケズリ調整を施すもの（10）とがある。底部が丸いものには，不定方向のナデ調整を施すもの（18），調整を施さないもの（26），回転ナデ調整を施すもの（29）とがある。29の回転ナデ調整は，底部外周のみに施すものであり，底部中央には不調整の部分が残る。

無台皿（第135図19・20）　平坦な底部と，短く外上方にのびる体部からなる。19は口縁部外面に凹線がめぐる。

短頸壺蓋（第135図30）　平坦な天井部と，垂直におりる口縁部からなる。口縁端部は平坦面をもつ。鈕は欠損する。

壺（第135図31）　底部に不定方向のケズリ調整を施し，そののち底部に不定方向のナデ調整を行う。

甕（第135図32）　口頸部が外反する。

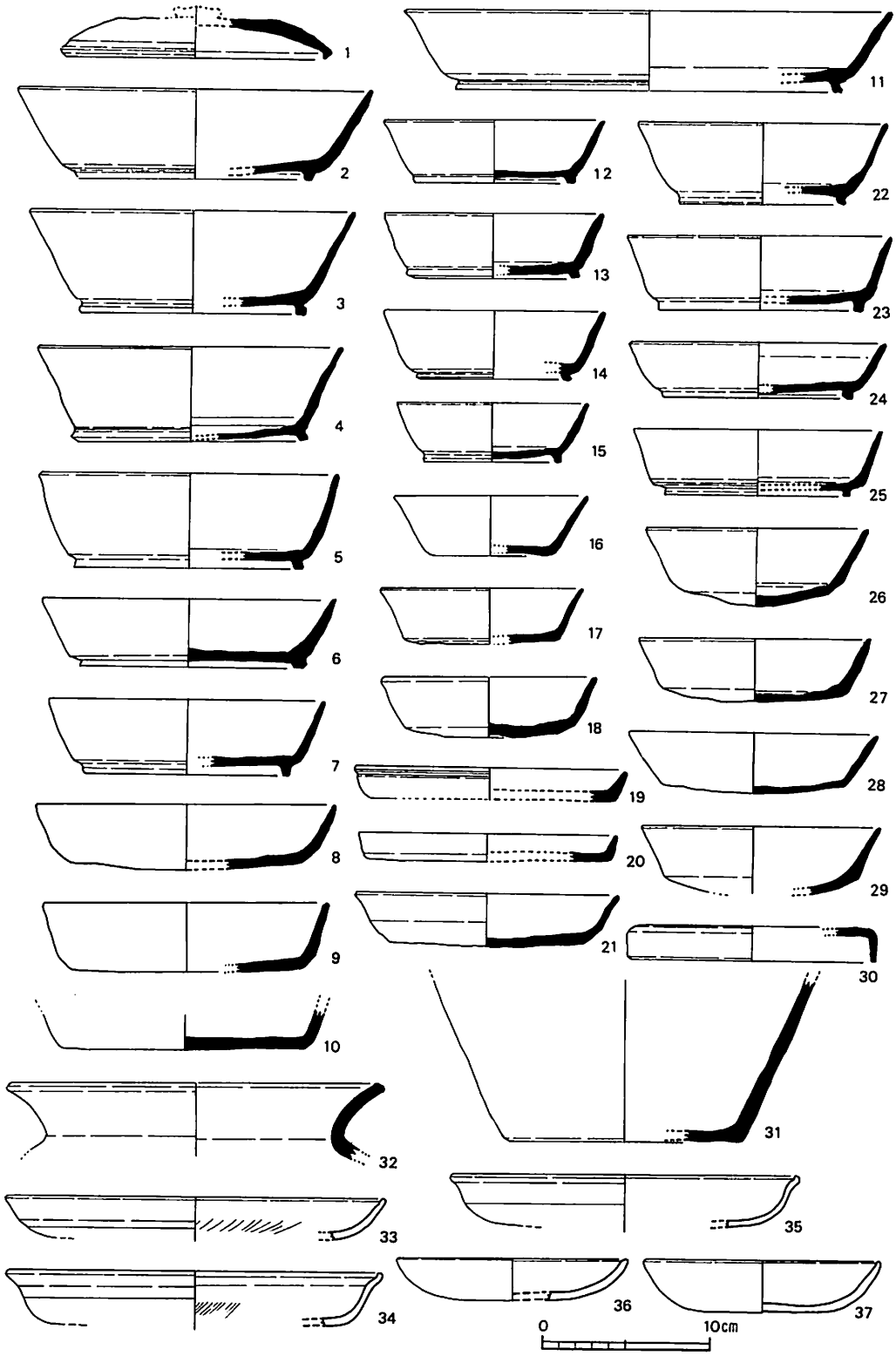
土師器

無台杯（第135図34～37，第136図1・2）　口縁部が内彎しつつ上方にのびるもの（第135図36・37，第136図2）と，口縁部下半が内彎し上半が外彎するもの（第135図34・35，第136図1）とがある。

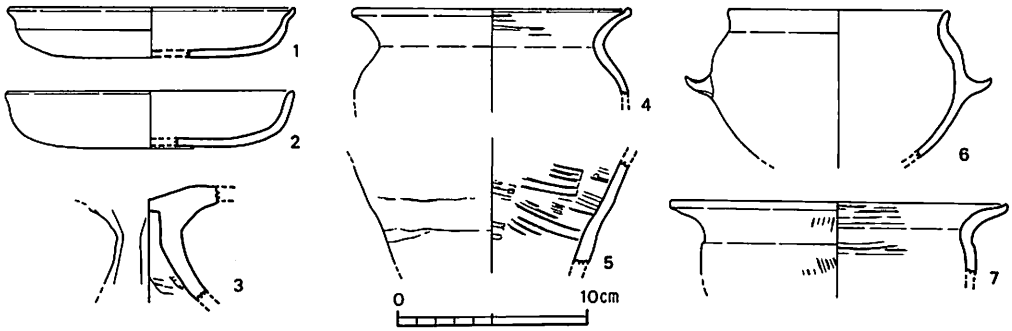
無台皿（第135図33）　平らな底部と，やや内彎しつつ外上方にのびる口縁部からなる。口縁端部は丸くおさめる。内面に暗文をみる。底部にはオサエ調整を施す。

高杯（第136図3・第139図14）　第136図3は脚部片で，外面にタテケズリによって面取りを行う。脚裾部内面にハケ調整を施す。第139図14は杯部片で，内面に暗文を施す。

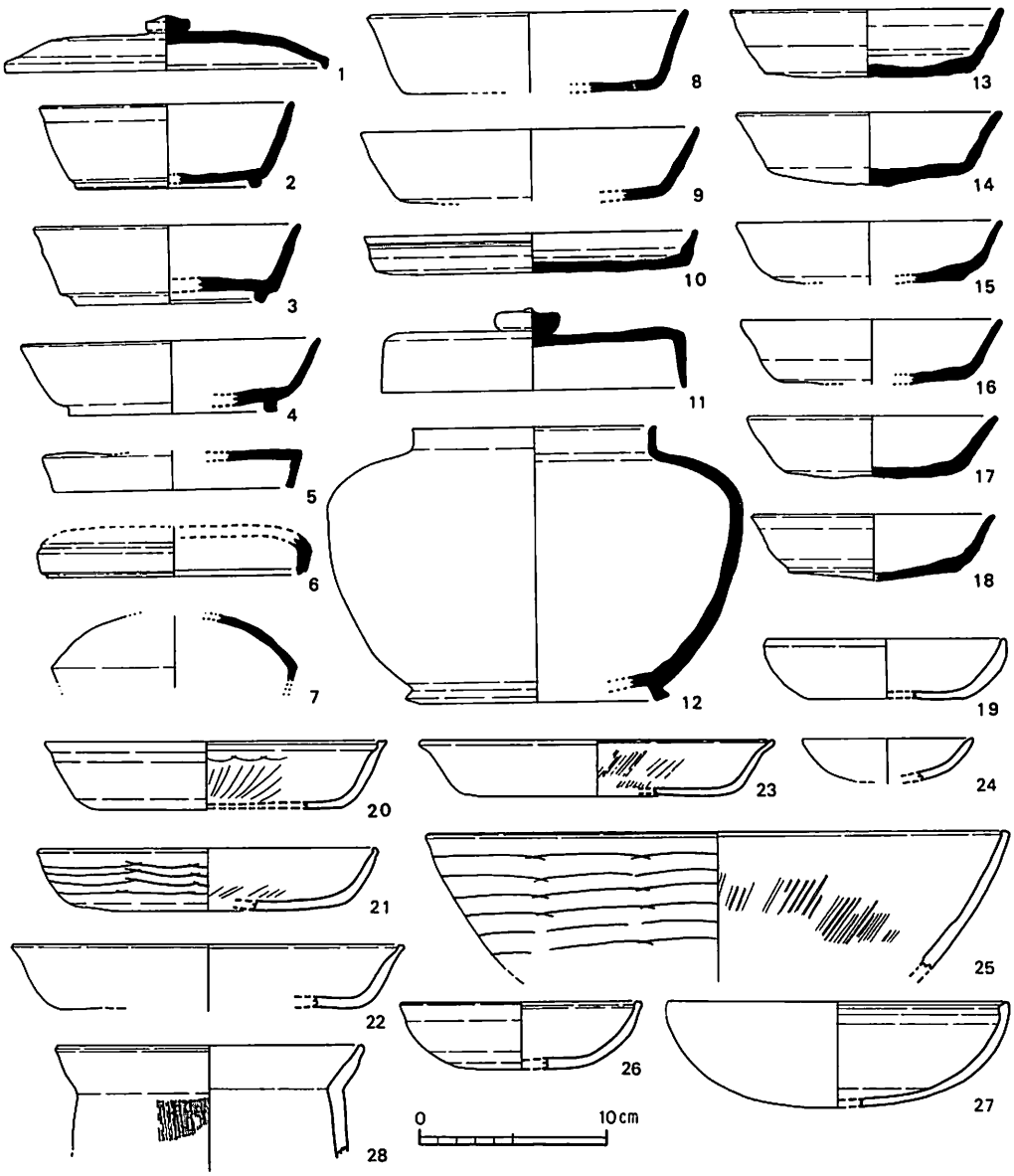
甕（第136図4・7）　4は口径が胴部最大径とほぼ等しい。頸部内面をヨコハケ調整する。7



第135図　畑ノ前遺跡５号墳周濠上層出土遺物実測図(1)　(縮尺：1/4)



第136図　畑ノ前遺跡5号墳周濠上層出土遺物実測図(2)（縮尺：1/4）



第137図　畑ノ前遺跡5号墳周濠下層出土遺物実測図(縮尺：1/4)

は，口径が胴部最大径を上回る。外面をタテハケ，内面をヨコハケ調整する。

器種不明土器(第136図５)　内面をハケ調整する。外面には粘土紐積み上げの痕跡が残る。製塩土器のようにも見えるが，二次焼成を受けた形跡はない。

把手付壺(第136図６)　球形の体部に，短く直立する口縁部をつける。肩部に一対の把手を付す。

（３）**５号墳周濠下層出土遺物**(第137図，図版第65)

須恵器

杯蓋(第137図１)　笠形の天井部と，短く下方に屈曲する口縁部からなる。天井部には，やや高い擬宝珠形の鈕をもつ。天井部に回転ケズリ調整を行い，そののち回転ナデ調整を施す。

有台杯(第137図２～４)　高台は体部と底部との境界からやや内側に入った部分につく。４は他に比べて，胎土に砂粒を多く含む。肉眼で見る限り，この胎土は，近辺の須恵器窯址の出土品のうち，京都府綴喜郡田辺町多々羅マムシ谷・同新宗谷両窯址の出土品に類似する。

無台杯(第137図８・９・13～18)　底部が平らなもの(８・９)と，やや丸みをおびるもの(13～18)とがある。底部には，不定方向のナデ調整を施す。

無台皿(第137図10)　底部は回転ケズリ調整によって平坦に仕上げる。口縁部は外上方に短く立ち，底部内面には不定方向のナデ調整を施す。底部に火襷をみる。

短頸壺蓋(第137図５・６・11)　肩部が稜をなすもの(５・11)と，丸みをおびるもの(６)とがある。11は全形を知ることができるもので，天井部に部厚い擬宝珠形の鈕を付す。口縁部は丸くおさめる。５は口縁部が平坦面をもつ。６は口縁部外面に外傾する面をもつ。

短頸壺(第137図12)　いわゆる「薬壺」形の壺である。口縁部は短く直立する。底部には，短くやや外方にふんばる高台がつく。内外面を回転ナデ調整する。

瓶(第137図７)　小片であるが，瓶類の肩部と思われる。

土師器

無台杯(第137図19～24・26)　３種ある。その一は，平らな底部に，斜め上方に開く口縁部をもつもので，口縁部下半が内彎，口縁部上半が外彎する(20・22・23)。内面に暗文を施す。20は底部を不定方向のケズリ調整する。その二は，平らな底部に，斜め上方に開く口縁部をもつところは前者と変わらないが，口縁部がやや内彎しつつ端部にいたるもの(21)である。外面をミガキ調整する。口縁端部は内側に肥厚する。その三は，丸底ないし丸底に近い平底に，内彎しつつのびる口縁部をもつもの(19・24・26)で，器高のわりに口径が小さい。24は小型品で，皿にふくめるべきかもしれない。

椀(第137図27)　丸底に，内彎しつつ上方にのびる口縁部をもつ。底部から口縁部への移行が漸進的であるため，全体の形状が半球形を呈する。口縁端部内面は丸く肥厚する。

鉢(第137図25)　わずかに内彎しつつ外上方にのびる口縁部をもつ。口縁端部内面はわずかに肥厚する。内面に暗文をみる。外面全面に，ヨコ方向のミガキを施す。

（４）**６号墳周濠出土遺物**(第138～140図，図版第66・67)

須恵器

杯蓋(第138図1～3)　内面にかえりをもつもの(1・2)と，もたないもの(3)とがある。いずれも，天井部に回転ケズリ調整を行ったのち，回転ナデ調整を施す。擬宝珠形の鈕をつける。1・2の内面のかえりは断面三角形を呈する。

有台杯(第138図4・5・10)　体部から口縁部にかけて，外上方に大きく外反する。高台は底部と体部との境界から，やや内側に入ったところにつく。高台は短く，外方にふんばる。高台端部は，5が外傾する面を，10が内傾する面を，それぞれ有する。底部には，回転ケズリ調整を施すもの(4)と，回転ナデ調整を施すもの(5・10)とがある。

無台杯(第138図6～9・11～16)　底部が平坦なもの(8・9・11・12・16)と，やや丸みをおびるもの(6・7・13～15)とがある。底部には，不定方向のナデ調整を施すもの(7～9・13)，不定方向のケズリ調整を施すもの(12)，切り離したまま調整を施さないもの(6)がある。

壺(第138図17～19)　17は，球形の体部に，短く外反する口頸部をつける。底部に不定方向のケズリ調整を，体部にカキメ調整を施す。19はほぼ垂直にたつ口頸部をもつ。肩部にはボタン形の粘土粒を貼り付ける。口縁端部は内傾する面をなす。

土師器

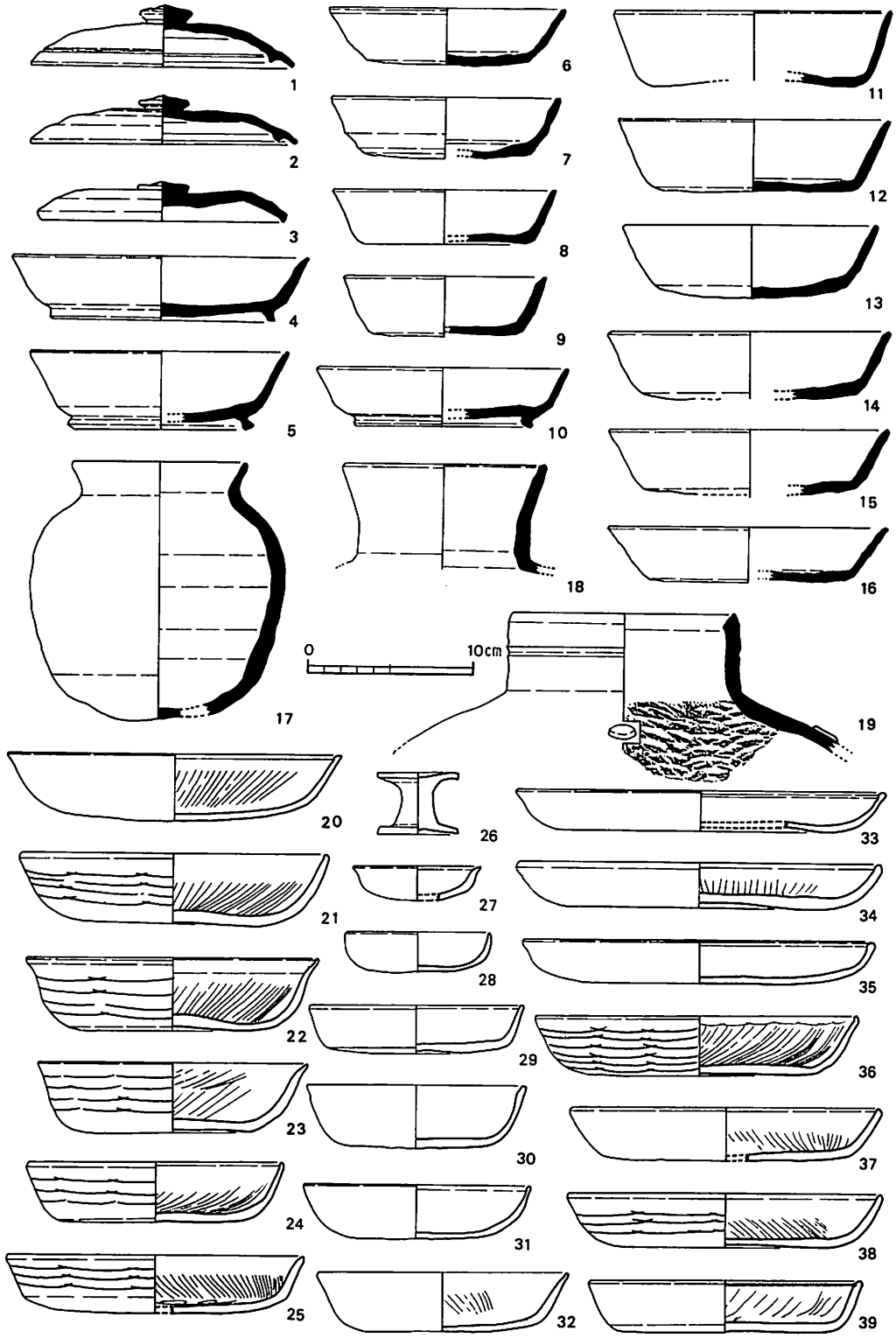
無台杯(第138図20～25・27～32・36～39，第139図1～5，第146図1・3)　広く平坦な底部に，斜め上方にのびる口縁部をもつ。口縁部の形態から3種にわけられる。その一は，口縁部下半が内彎し，上半がわずかに外彎するもの(第138図22・23・27，第139図2・5，第146図3)である。第138図22・23は内面に暗文を施す。第138図22・23・第146図3は外面にミガキを施す。第138図27は小型品で，底部をオサエ調整する。第139図2は底部にケズリ調整を，5はオサエ調整を，それぞれ施す。その二は，口縁部がまっすぐのびるもの(第138図20・21・24・29～32・36～39，第139図1・4)である。口縁部内面がわずかに内上方に屈曲する。底部は不定方向のケズリ調整を施すもの(第138図20・24・25・32・37，第139図1・4)，オサエ調整を施すもの(第138図30・31)があり，また，外面をミガキ調整するもの(第138図21・36・38・39)がある。その三は，口縁部がわずかに内彎しつつ外上方にのびるものである(第138図28，第139図3，第146図1)。第138図28は小型品で，底部をオサエ調整する。第139図3は内面に斜放射文からなる暗文，底部に不定方向のケズリ，外面にミガキを，それぞれ施す。第146図1は内面に暗文を，外面にミガキを施す。

無台皿(第138図33～35，第139図6)　平坦で広い底部と，外上方にやや内彎しつつのびる口縁部とからなる。第138図33・35は底部にケズリ調整を施す。34は内面に暗文を，外面全面にケズリ調整を，それぞれ施す。第139図6は外面全面にミガキを施す。

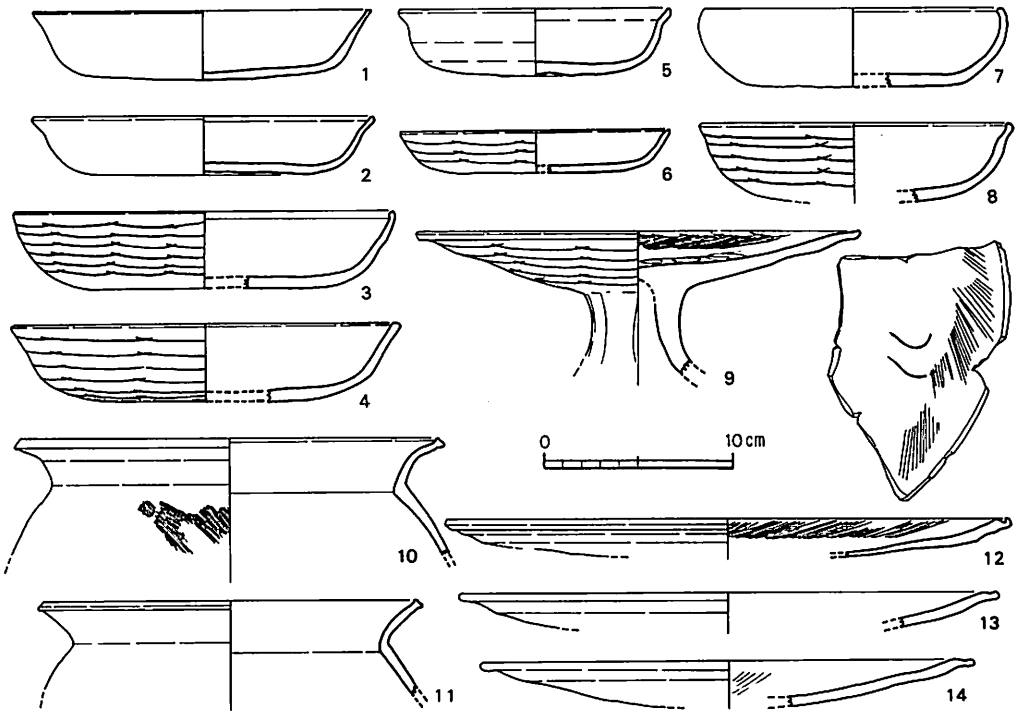
器種不明土製品(第138図26)　器台形の小型品である。胴部にタテ方向のミガキを施す。

椀(第139図7・8，第146図7)　第139図7は平らな底部と，内彎する口縁部をもつ。8は口縁部が断面S字状に屈曲する。外面にミガキを施す。第146図7は，小型で平底の椀である。

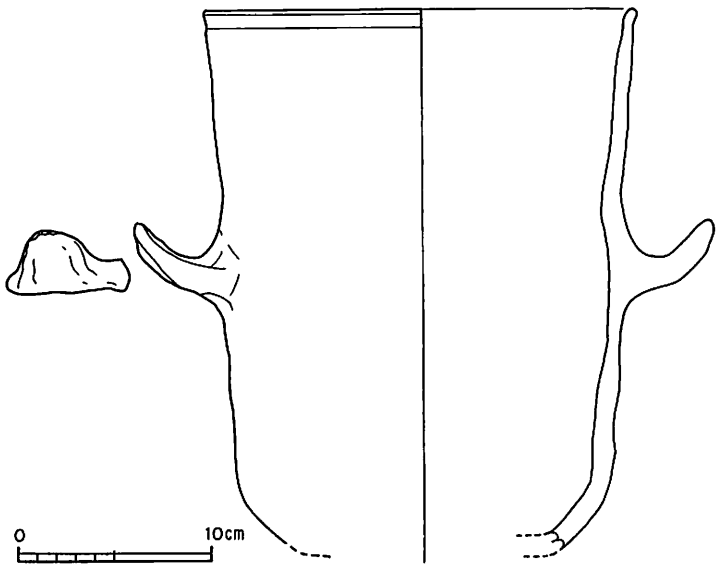
高杯(第139図9・12・13)　口縁部が屈曲する。内面に暗文をみる。9は杯部外面にミガキを



第138図　畑ノ前遺跡６号墳周濠出土遺跡実測図(1)　(縮尺：1/4)



第139図　畑ノ前遺跡6号墳周濠出土遺物実測図(2)（縮尺：1/4）　ただし，14は5号墳周濠上層出土。



第140図　畑ノ前遺跡6号墳周濠出土遺物実測図(3)（縮尺：1/4）

施し，脚部にタテ方向のケズリを施す。

甕(第139図10・11)　体部上半から口頸部にかけて，断面「く」の字形に屈曲する。口縁端部外面に面をもつ。

甑(第140図)　底部を欠く。体部中央に，上方に向く把手を付す。

6号墳周濠出土遺物は，平城宮跡出土土器編年の平城宮Ⅰ・Ⅱに併行し，ややさかのぼるものをも含む。実年代では7世紀末葉から8世紀前葉に位置づけられる。

（5）**7号墳周濠出土遺物**（第141～146図，図版第68・69）

須恵器

杯蓋（第141図1・2・10～13・20・21）　口縁部は短く下方に屈曲する。天井部は笠形を呈するもの（1・2）と，ほぼ平坦なもの（10～13・20・21）とがある。いずれも天井部に擬宝珠形で扁平な鈕をもつ。天井部には，回転ケズリ調整を行ったのち，回転ナデ調整を施す。1・11・21は，天井部内面に不定方向のナデ調整を施す。

有台杯（第141図3～6・14・22～25）　高台は，体部と底部との境界につく。底部は，回転ナデ調整を施すもの（3・4・6・23），回転ケズリ調整を施すもの（5），回転ケズリ調整を施しそののち回転ナデ調整を施すもの（24），不定方向のナデ調整を施すもの（14）がある。14の高台は他に比べてきわめて矮小である。4の底部には爪形状圧痕をみる。

無台杯（第141図7・8・17～19・26）　底部が平坦なもの（7・8・18・19・26）と，丸いもの（17）がある。8・26の底部には不定方向のナデ調整を施す。19の底部には，調整を施さない。

無台皿（第141図9）　平坦な底部と，ほぼ直立する口縁部とからなる。口縁部外面に凹線をめぐらす。

壺（第141図15・16）　15は，全形をうかがうにいたらない。円筒状の製品である。円形の粘土板に円筒を貼り付けて成形する。底部は回転ケズリ調整によって平坦に仕上げる。

短頸壺（第141図29～31）　いわゆる「薬壺」形の壺である。口縁端部は丸くおさめる。

短頸壺蓋（第141図27・28）　平坦な天井部に宝珠形の鈕をつけ，ほぼ垂直におりる口縁部をもつ。口縁端部は内傾する面をもつ。

平瓶（第141図32）　肩部は稜をなし，凹線をめぐらす。断面方形の提梁をもつ。

鉄鉢形土器（第141図33）　口縁部は内彎して立つ。底部はやや丸みをおびた尖底をなす。口縁端部は平坦な面をもつ。

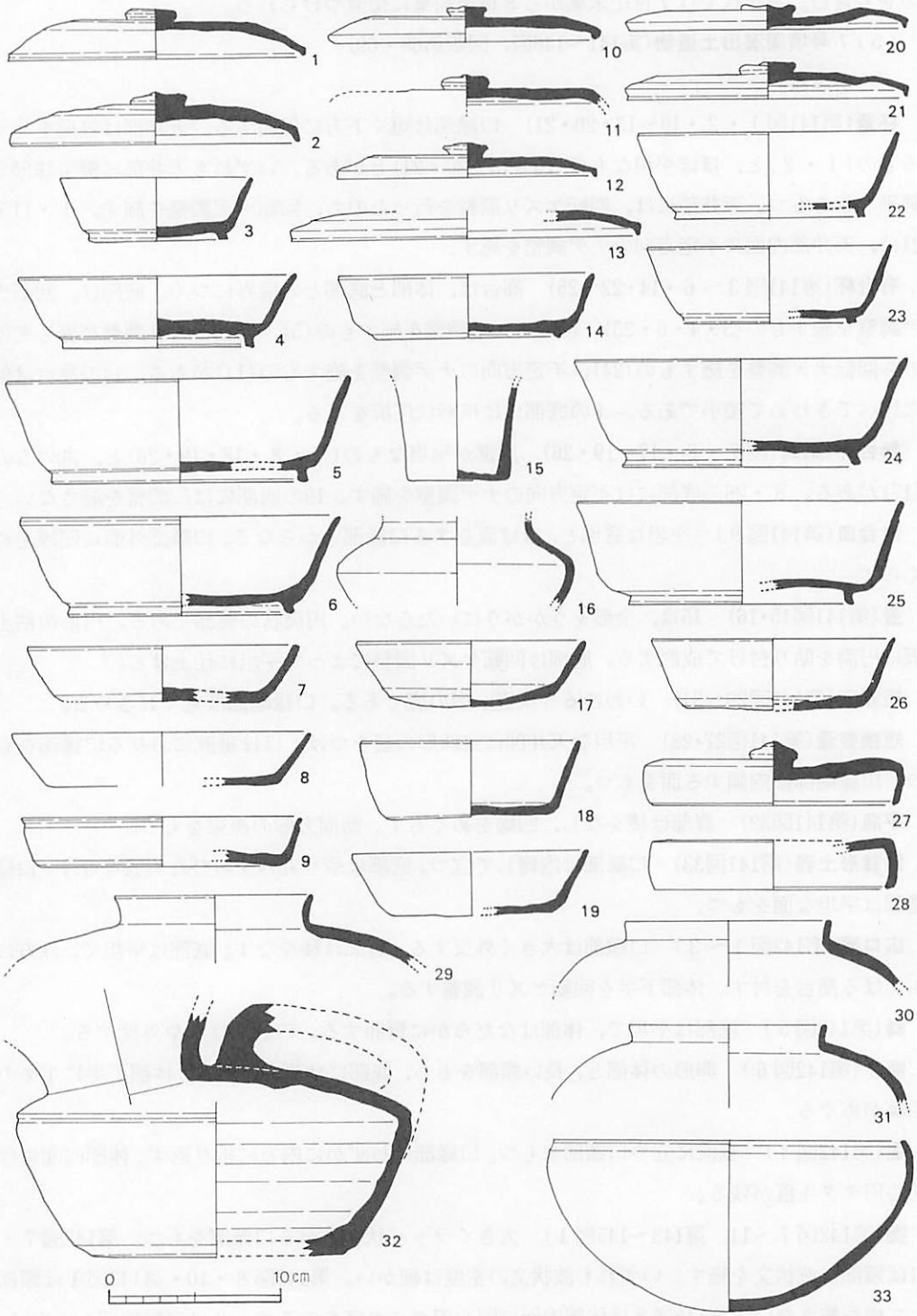
広口壺（第142図1～3）　口頸部は大きく外反する。肩部は稜をなす。底部は平坦で，外方にふんばる高台を付す。体部下半を回転ケズリ調整する。

鉢（第142図5）　底部は平坦で，体部はなだらかに彎曲する。口縁部はやや外反する。

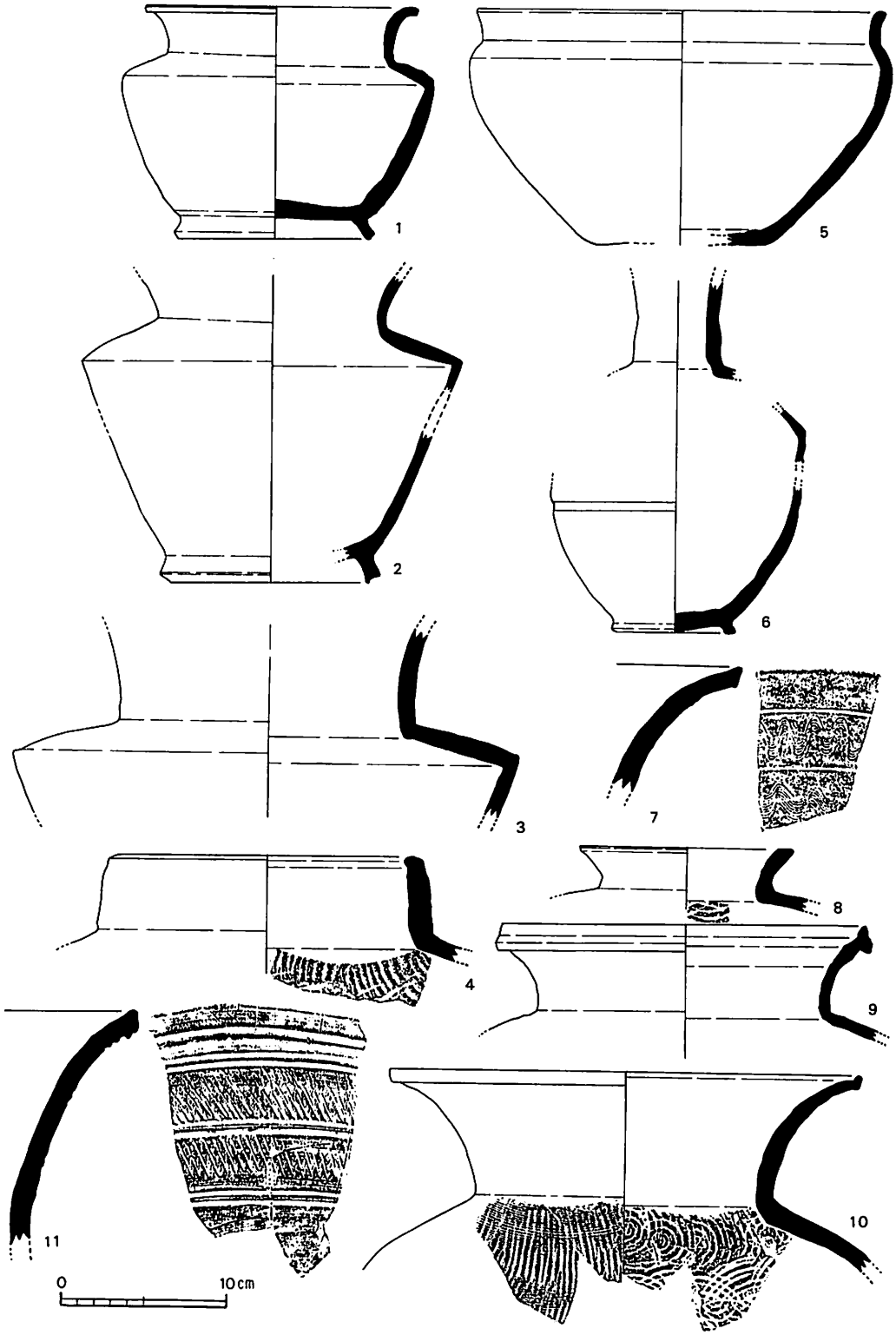
瓶子（第142図6）　卵形の体部と，長い頸部をもち，底部には高台を付す。体部下半に1条の凹線がめぐる。

壺（第142図4）　垂直に立つ口頸部をもつ。口縁部はわずかに内方に折り返す。体部内面には同心円タタキ痕が残る。

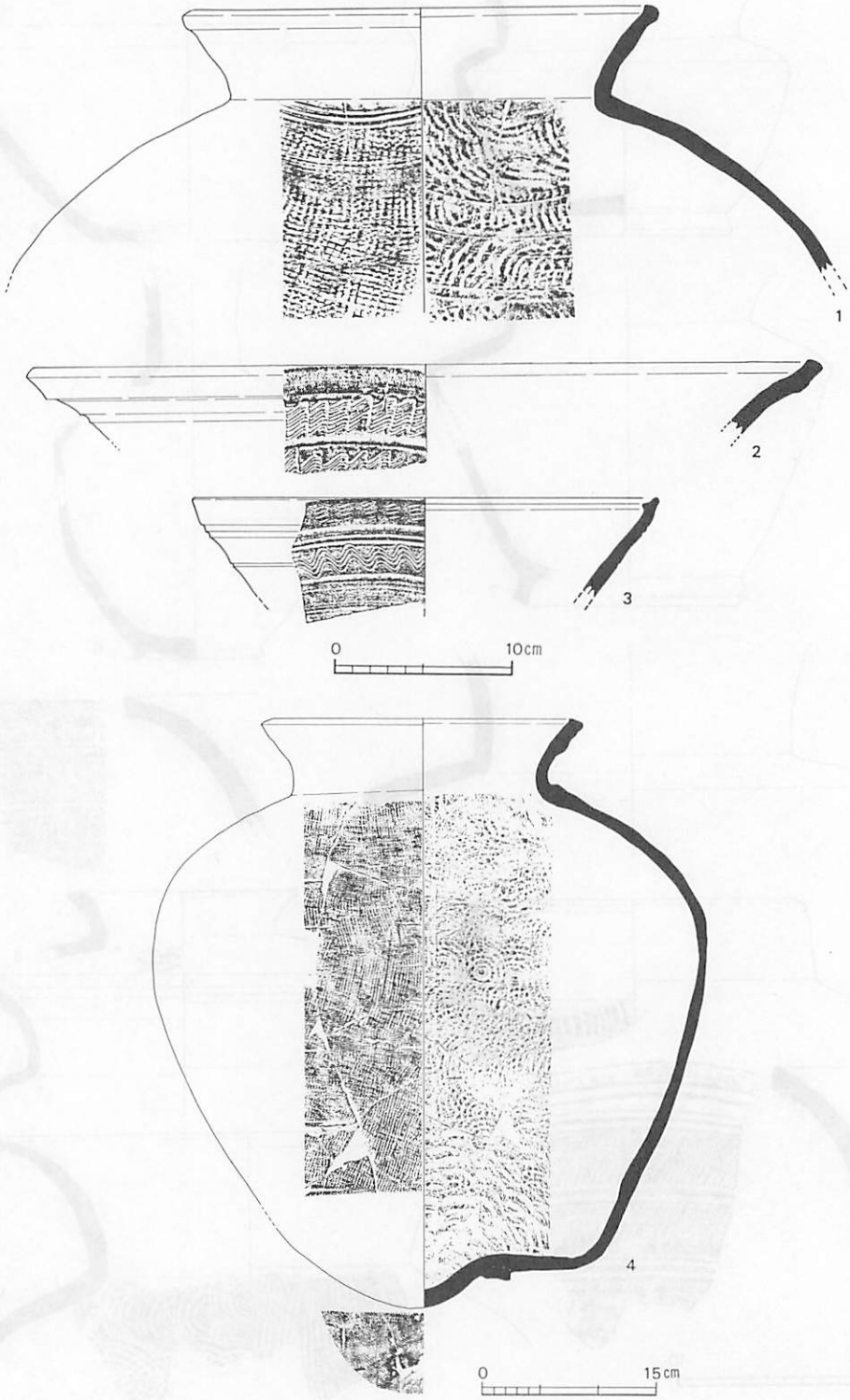
甕（第142図7～11，第143～145図1）　大きくラッパ状に広がる口頸部をもつ。第142図7・11は頸部に波状文を施す。いずれも波状文の密度は細かい。第142図8・10・第143図1は頸部に文様を施さない。第142図8は体部内面に同心円タタキ痕をのこす。9は口縁端部を下方に，10は口縁端部を上方に，それぞれ折り返す。10は体部内面を同心円タタキで，外面を平行タタ



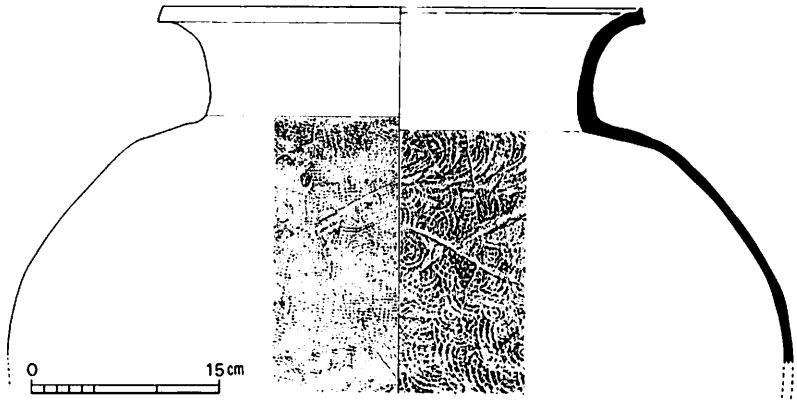
第141図　畑ノ前遺跡7号墳周濠出土遺物実測図(1)（縮尺：1/4）



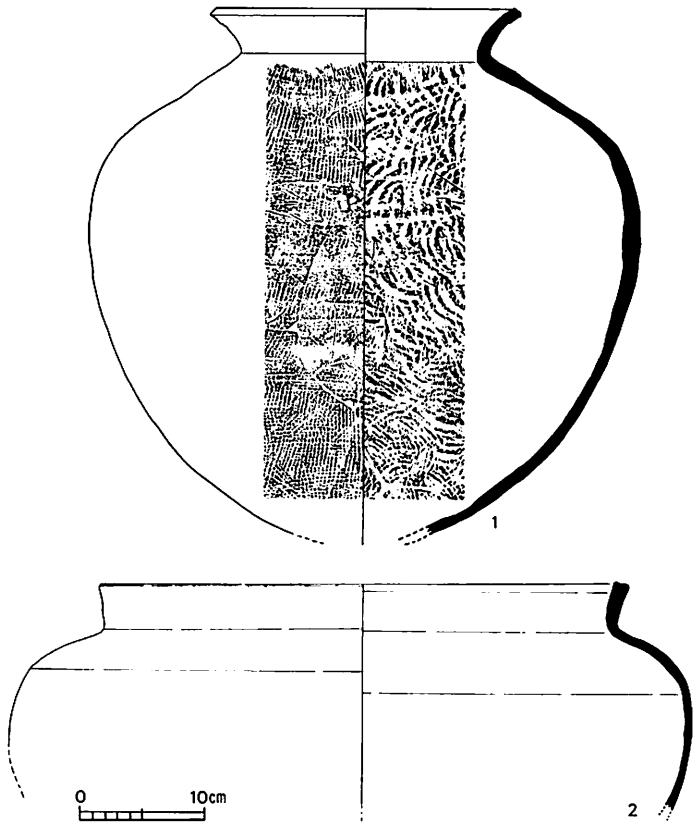
第142図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(2)　(縮尺：1/4)



第143図　畑ノ前遺跡7号墳周濠出土遺物実測図(3)（縮尺：1/4，4は1/6）

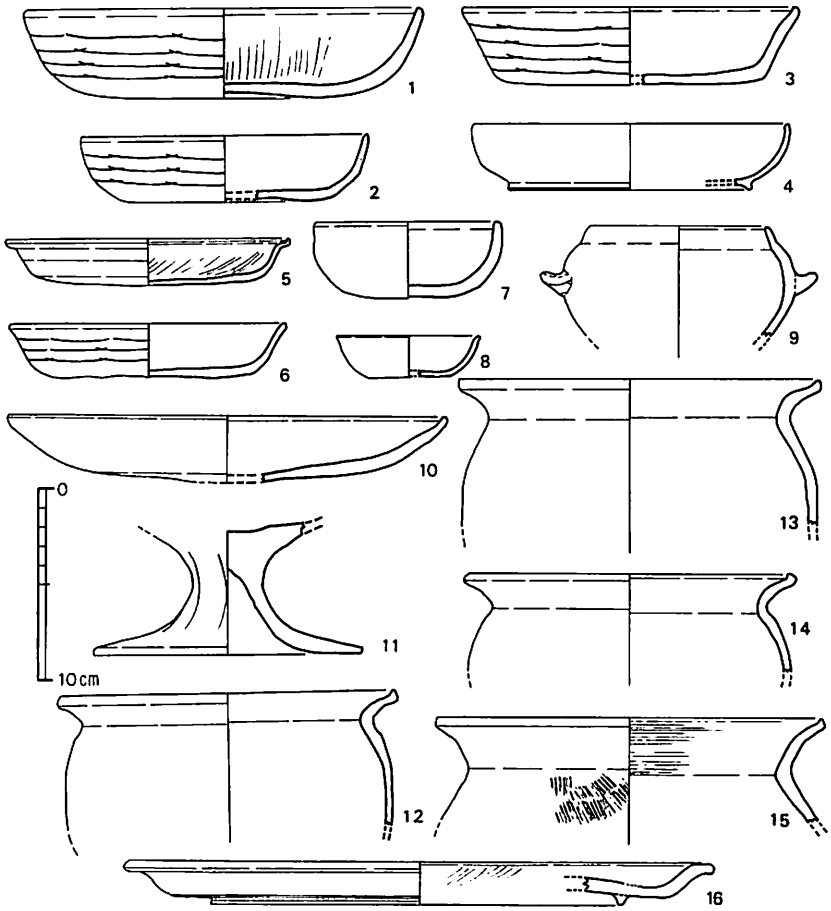


第144図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(4)　(縮尺：1/6)



第145図　畑ノ前遺跡７号墳周濠出土遺物実測図(5)　(縮尺：1/6)

キで成形したのち，外面をカキメ調整する。第143図２・３はいずれも粗い波状文を施す。３は口縁端部内面に突出する稜をもち，口縁部外面の端部近くに断続的な平行線文を施す。こういった特徴は岡山県邑久郡牛窓町寒風窯址群の製品をおもわせる特色であるが，本例を胎土分析した結果では，同窯址群の製品という見解には否定的な結論がでている。４は，底部に焼き台と思われる須恵器片が溶着する。



第146図　畑ノ前遺跡7号墳周濠出土遺物実測図(6)（縮尺：1/4）
ただし，1・3・7は6号墳周濠出土。

甕(第145図2)　口頸部は短く，ほぼ直立する。口縁端部はやや凹む面をなす。体部外面に平行タタキ痕が，内面に同心円タタキ痕が，それぞれ残る。内面にはタタキ成形ののち，ヨコナデ調整を施す。

土師器

無台杯(第146図2・6・8)　平坦な底部と外上方にのびる口縁部からなる。外面全面にミガキを施す。2は底部をヨコケズリする。6は底部をオサエ調整する。

有台杯(第146図4)　体部から口縁部にかけて内彎する。底部に小さな高台をもつ。

無台皿(第146図5)　口縁部下半が内彎し，上半が外彎する。同端部は上方に屈曲する。内面に暗文をみ，底部にケズリ調整を施す。

有台皿(第146図16)　底部に小さい高台をつける。底部は平らで，斜め上方にのびる口縁部に続き，同端部付近で屈曲し，水平に伸びる。内面に斜放射文の暗文をみる。

壺(第146図9)　半球形の体部と，短く内上方にのびる口縁部をもつ。体部に一対の把手をもつ。

高杯(第146図10・11)　10は外面全面にミガキを施す。11は外面をタテケズリによって面取りする。

甕(第146図12～15)　口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。

7号墳周濠出土遺物は，平城宮跡出土土器編年の平城宮Ⅰ・Ⅱに併行する。実年代では8世紀前葉に位置づけられる。

3）5G溝1出土遺物(第147図)

須恵器

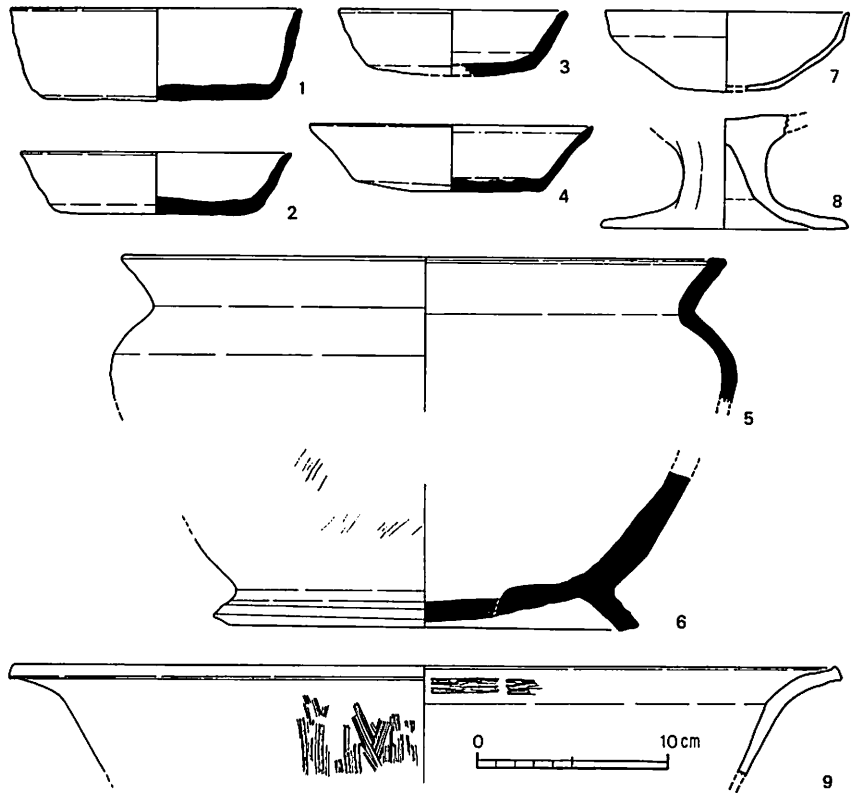
無台杯(第147図1～4)　1・2・4は底部が平坦である。3は底部が丸みをおびる。いずれも底部に調整を施さない。

甕(第147図5)　広口の甕である。口縁端部に水平な面をもつ。

甕もしくは壺(第147図6)　底部のみ残存する。外下方につよくふんばる高台を持つ。底部中央に，円形孔に粘土円板を貼り付けてふさいだ痕を残す。

土師器

椀(第147図7)　小さな平底から屈曲しながら外反し，口縁部上半でさらに垂直に立ち上がる。底部をオサエ調整する。



第147図　畑ノ前遺跡5G溝1出土遺物実測図(縮尺：1/4)

高杯(第147図8)　脚部が大きくラッパ状に開く。脚部外面にタテケズリで面取りを施す。

甕(第147図9)　内面を横方向のハケで，外面を縦方向のハケで，それぞれ調整する。

3．土壙出土遺物

1）5F溝2南・ほりこみ出土遺物(第148図，図版第70)

須恵器

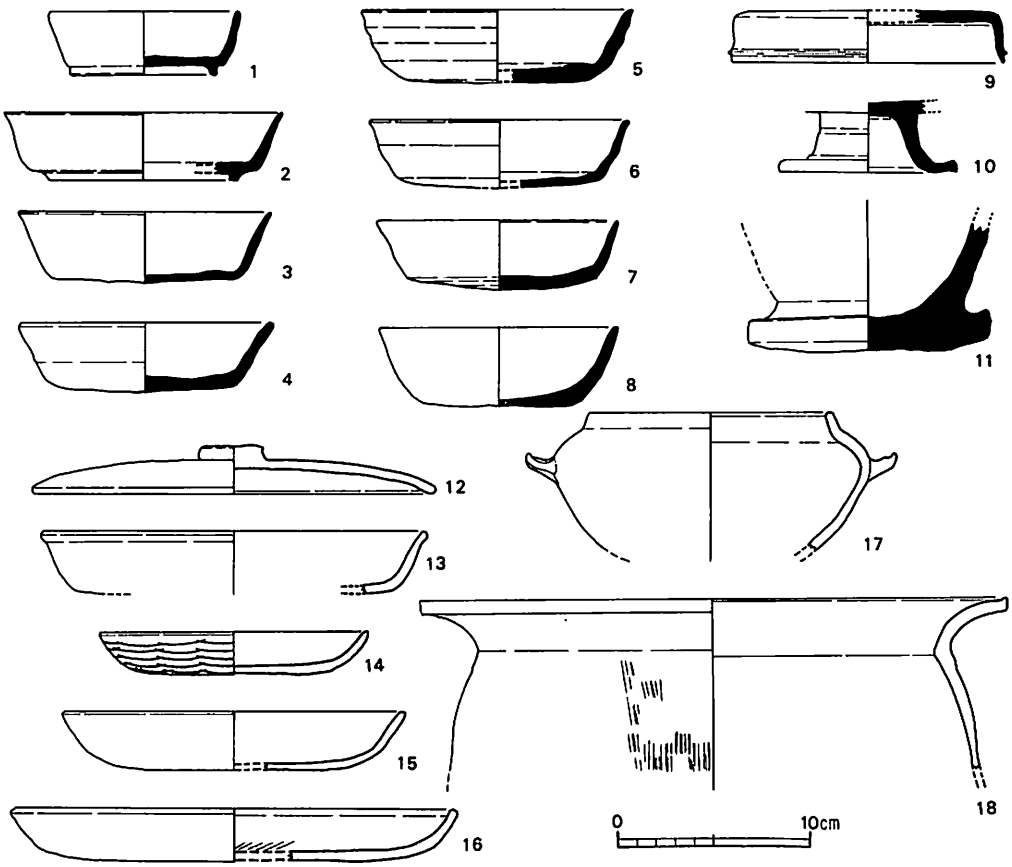
有台杯(第148図1・2)　底体部の境界線からやや内側に入ったところに，短い高台を付す。

無台杯(第148図3～8)　底部が平坦なもの(3・5・8)と，やや丸みをおびるもの(4・6・7)とがある。底部には，不定方向のナデ調整を施す。

短頸壺蓋(第148図9)　平坦な天井部と，垂直におりる口縁部をもつ。口縁部外面には鋭い稜をつくりだす。

高杯(第148図10)　杯部を欠損する。短脚高杯である。脚裾部は水平方向に外反する。透孔をもたない。

捏鉢(第148図11)　底部はやや丸みをおびる。同部には回転ケズリ調整を施す。焼成が良くない。



第148図　畑ノ前遺跡5F溝2南・ほりこみ出土遺物実測図(縮尺：1/4)

土師器

杯蓋(第148図12)　天井部から口縁部にかけてわずかに内彎しつつ，なだらかにのびる。口縁端部は丸くおさめる。ボタン形の，扁平な鈕をもつ。

無台杯(第148図13)　平らな底部と，斜め上方にのびる口縁部からなる。口縁部は下半が内彎，上半がわずかに外彎する。内面に斜放射文からなる暗文を施す。底部にナデ調整を施す。

無台皿(第148図14～16)　平らな底部と，わずかに内彎する口縁部からなる。口縁端部は丸くおさめる。14は底部にオサエ調整を施し，外面にミガキを施す。16は底部に不定方向のケズリ調整を施す。

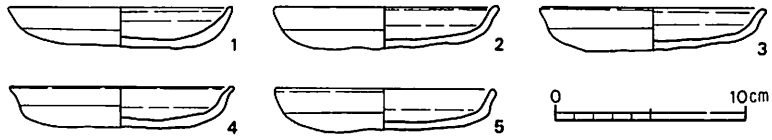
壺(第148図17)　短い口縁部と，イチジク形の体部からなる。口縁部は内傾する。体部に一対の把手を付す。外面全面にミガキ調整を施す。

甕(第148図18)　口頸部が外上方につよく外反する。同端部を内面にわずかにつまみ出す。外面をタテハケ調整する。

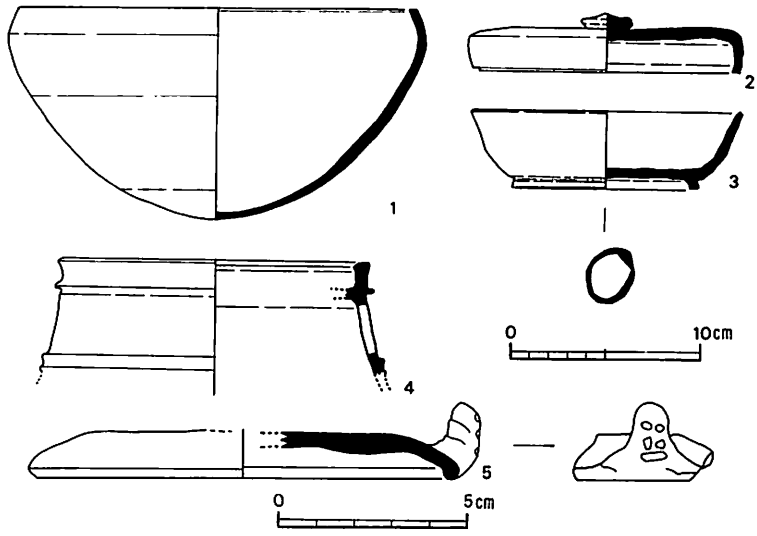
5 F溝2南・ほりこみ出土遺物は，平城宮跡出土土器編年の平城宮Ⅰに併行し，実年代では8世紀前葉に位置づけられる。

2）3 H13土壙1出土遺物(第149図)

土師器皿(第149図)　平らな底部と，斜め上方にのびる口縁部からなる。口縁部外面をヨコナ



第149図　畑ノ前遺跡3 H13土壙1出土遺物実測図(縮尺：1/4)



第150図　畑ノ前遺跡6 H土壙3・奈良時代包含層出土遺物実測図
(縮尺：1/4，5は1/2)

デ調整する。底部はオサエ調整する。

3）**6Ｈ土壙3出土遺物**(第150図１，図版第70)

鉄鉢形土器(第150図１)　底部はわずかに尖る。体部下半から底部にかけて，回転ケズリ調整を行ったのち，丁寧な回転ナデ調整を施す。内面は，全面に不定方向のナデ調整を施す。

4．**包含層出土遺物**(第150図２～５，図版第70)

短頸壺蓋(第150図２)　５Ｇ10区の包含層より出土した。擬宝珠形の鈕をもつ。天井部に暗緑色の自然釉がかかる。

有台杯(第150図３)　５Ｆ・６Ｆ両区の包含層より出土した。底部外面にＯ字状の墨書をみる。

円面硯(第150図４)　５Ｇ３区の包含層より出土した。有脚式の透脚硯である。透孔の形は長方形である。脚端部および陸部を欠く。外堤部は高い。ほかに，硯としては，杯蓋を転用したものが出土している。

人面装飾付杯蓋(第150図５)　６Ｇ11・16・20各区の包含層より出土した。杯蓋に人面装飾を付した特異な須恵器である。平坦な天井部と，わずかに下方に屈曲する口縁端部からなる。鈕を欠損する。装飾は口縁端部に付す。指頭大の粘土を手づくねで成形し，目鼻は管状工具で刺突し，また，口はおそらく同じ工具で横方向に描く。後頭部には２条のキザミをみる。内面が摩耗する。時期は８世紀前半であろう。

なお，６Ｆ６区の包含層より，鉄刀と思われるものが出土している(図版第44下)が，腐蝕がはなはだしい。図版第70に示しておく。

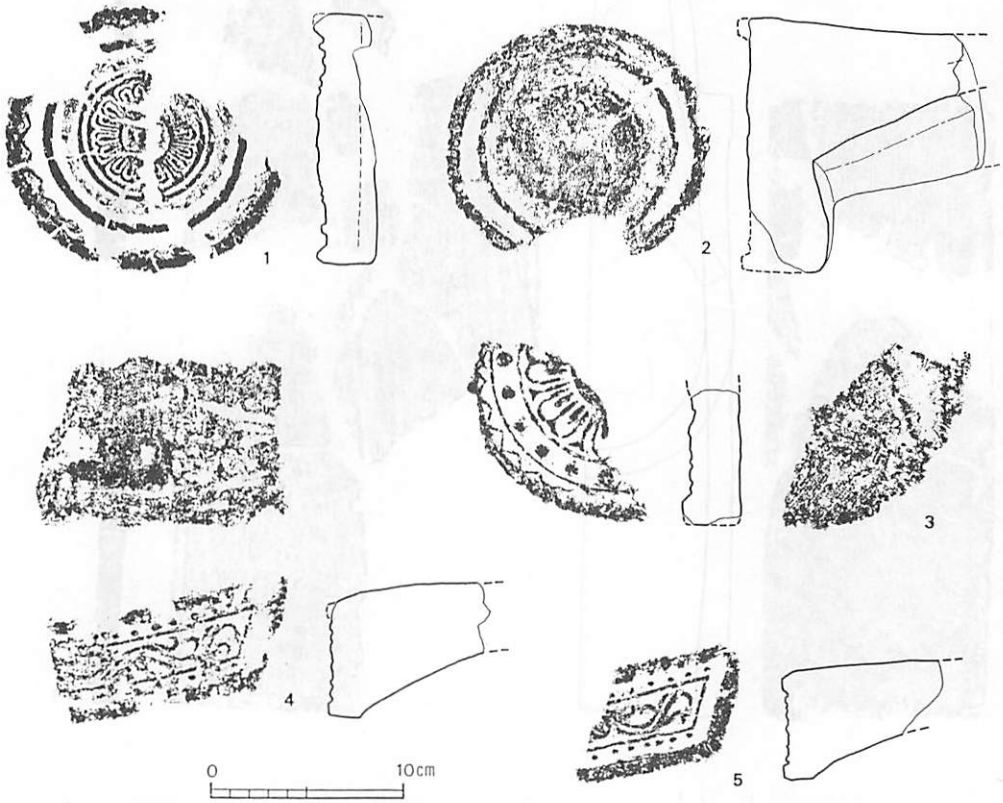
5．**発掘区出土瓦**

今回出土した奈良時代に属する瓦類は，遺物整理箱で約30箱分ある。その大半は平瓦で，軒瓦と丸瓦はかなり少ない。瓦類は，主に調査地の南部(グリッドＦ列以南)の各所で出土しているが，特に古墳の周濠内から土器類とともに多く出土していることもあって，掘立柱建物群との直接の関係はとらえられなかった。なお，軒瓦はいずれも平城宮型式のもので，京都府南部の奈良時代の諸遺跡にも多い，平城宮IIに編年される6282・6721型式の組み合わせがここでも認められる。

1）**軒丸瓦**(第151図１～３，図版第71)

軒丸瓦で，瓦当文様部分を残すものは３点のみであった。第151図１は，平城宮6282Da型式である。瓦当の径が13.2cmの小型の軒丸瓦で，文様は，珠文帯の外側の圏線がかなり太くつくられていることが特徴になる。軟質の焼成で，裏面は剝離しており摩滅も著しいため，調整は不明である。割れ口の断面を観察すると，瓦当部分の胎土が２層になっていることが顕著に認められる(断面図の破線部分)。瓦当面側は，ほとんど砂粒を含まない土であるが，裏面側は砂粒を多く含む土が用いられており，色調も瓦当面側が灰白色，裏面側は灰色を呈している。出土地点は７号墳周濠内の西北部である。

第151図２は，軟質の焼成のため摩滅が著しく，瓦当文様もほとんどみえないが，太い圏線と全体に小型であることなどから１と同笵の軒丸瓦と判断される。瓦当がかなり厚く，丸瓦との



第151図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(1)　(縮尺：1/4)

接合部分にも粘土を厚く加え，瓦当裏面の丸瓦との接合線は台形を呈している。胎土には細かい砂粒を含むが多くはなく，全体に灰白色を呈している。５Ｆ溝３から出土した。

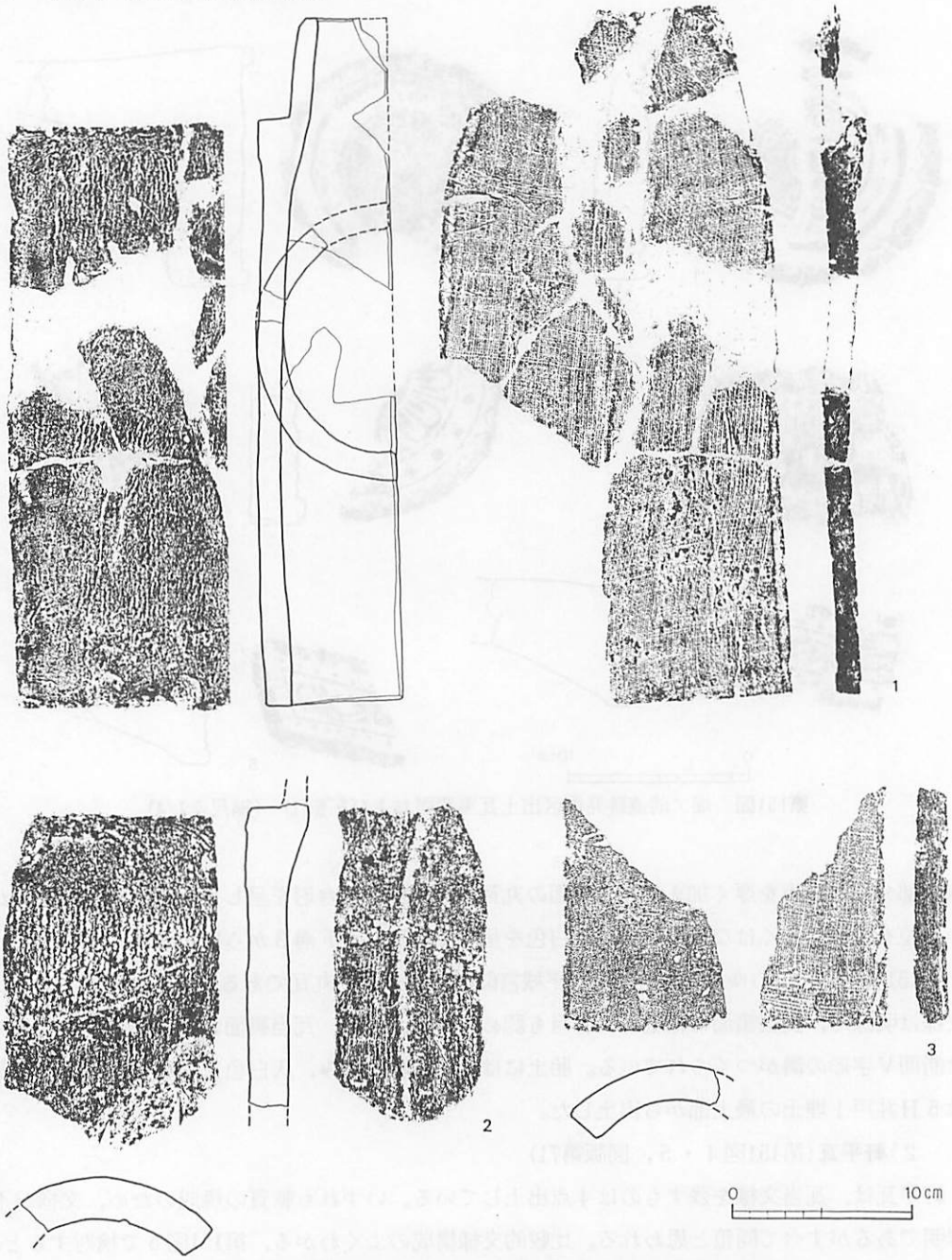
第151図３は，いわゆる興福寺式の，平城宮6301Ａ型式の軒丸瓦である。軟質の焼成であるが文様は明瞭で，瓦当裏面には細かい布目も認められる。また，瓦当裏面の丸瓦との接合部分には断面Ｖ字形の溝がつくられている。胎土には粗い砂粒を含み，灰白色を呈している。この瓦は５Ｈ井戸１埋土の最上部から出土した。

２）**軒平瓦**(第151図４・５，図版第71)

軒平瓦は，瓦当文様を残すものは４点出土している。いずれも軟質の焼成のため，文様が不鮮明であるがすべて同笵と思われる。比較的文様構成のよくわかる，第151図５で検討すると，唐草文と珠文の関係から平城宮6721Ｃ型式と判断される。４・５とも胎土には粗い砂粒を含み，灰白色を呈しているが，４は瓦当面を除く表面が灰黒色を呈している。この２点とも７号墳周濠内から出土した。

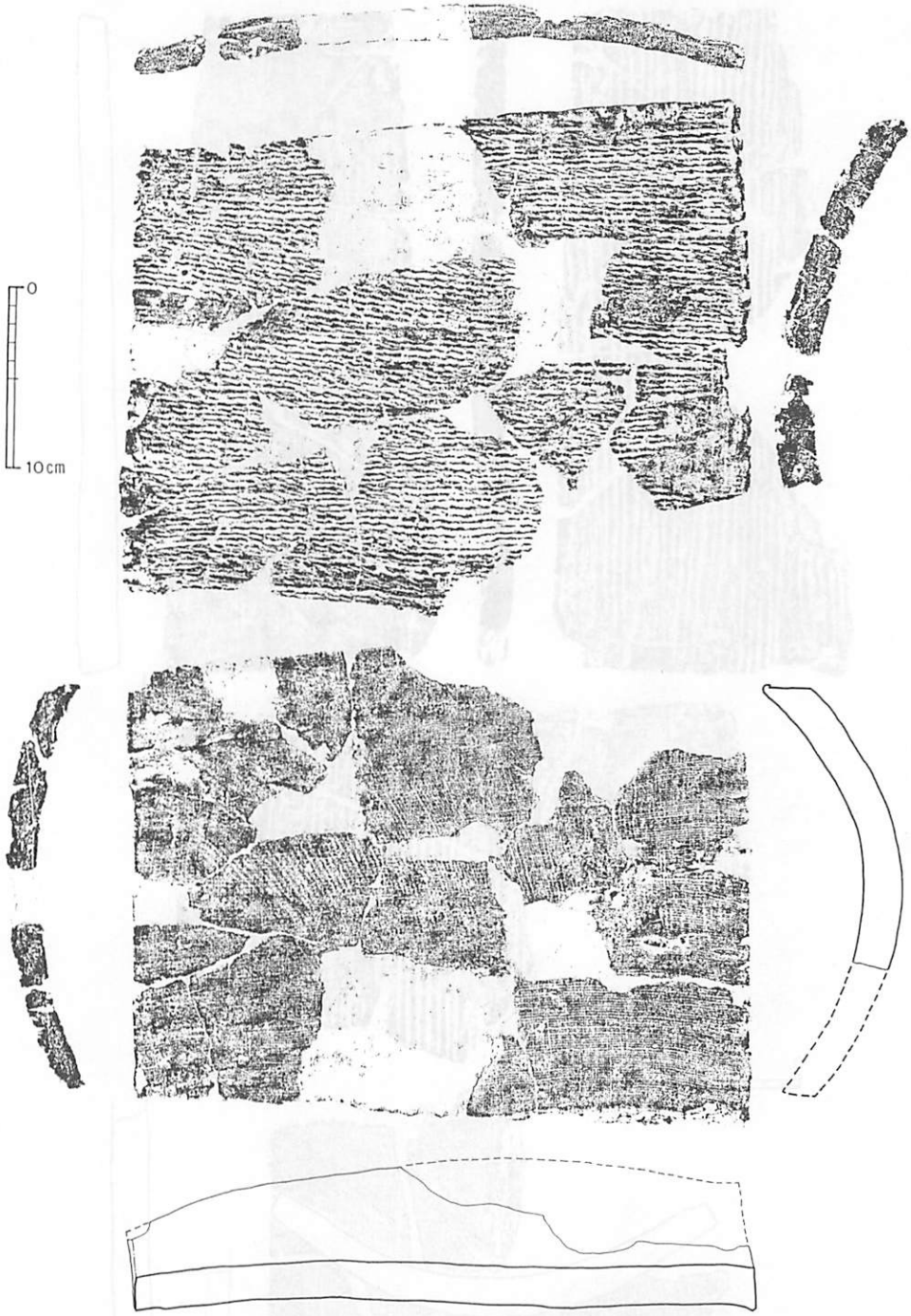
３）**丸　　瓦**(第152図，図版第71)

丸瓦は量的にも少なく，接合を試みたが全体のわかる例は，発掘区東南部の６Ｈ土壙３から出土した第152図１だけであった。丸瓦は，いずれも胎土には，あまり多くはないが砂粒を含み，

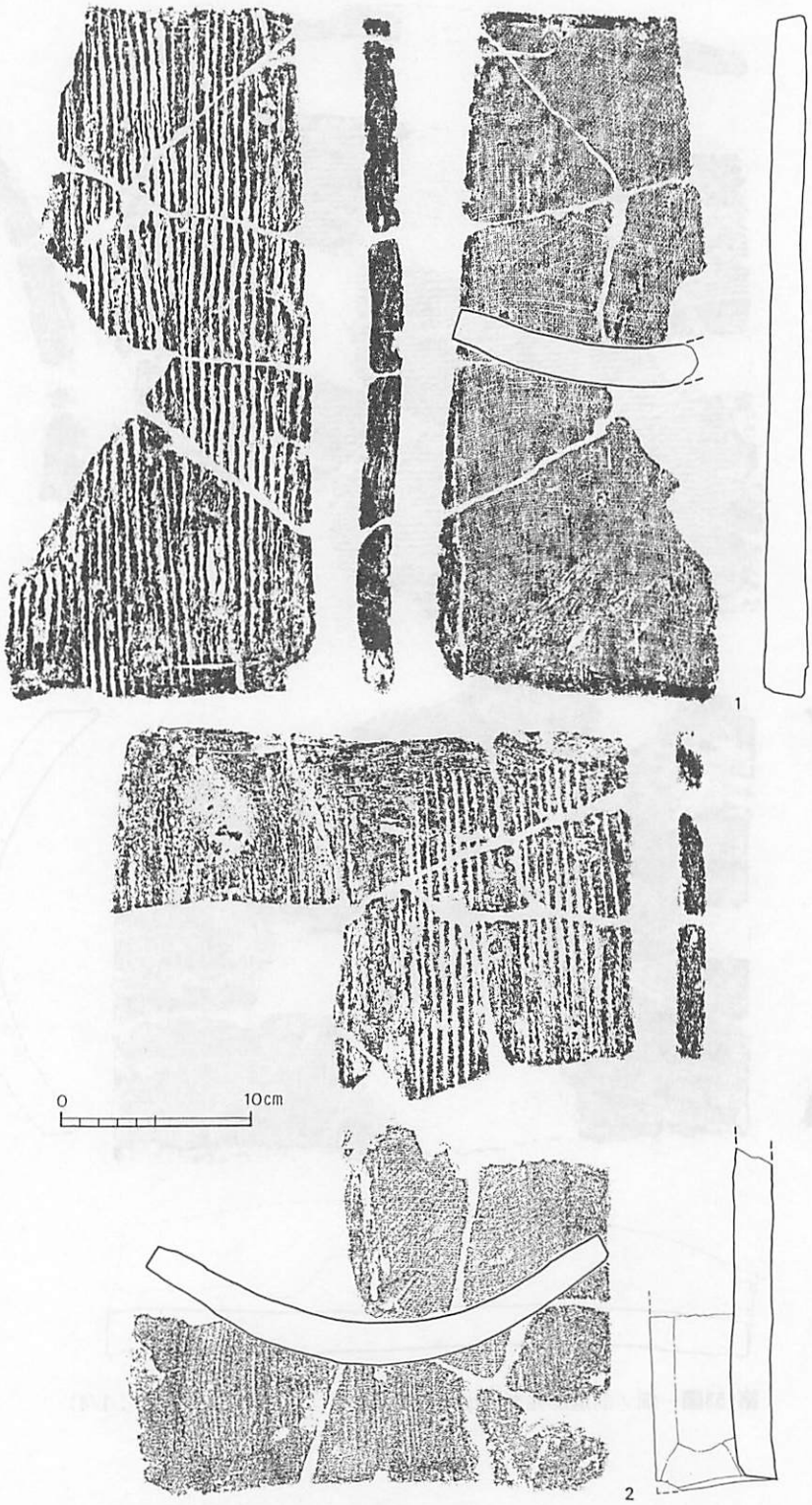


第152図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(2)（縮尺：1/4）

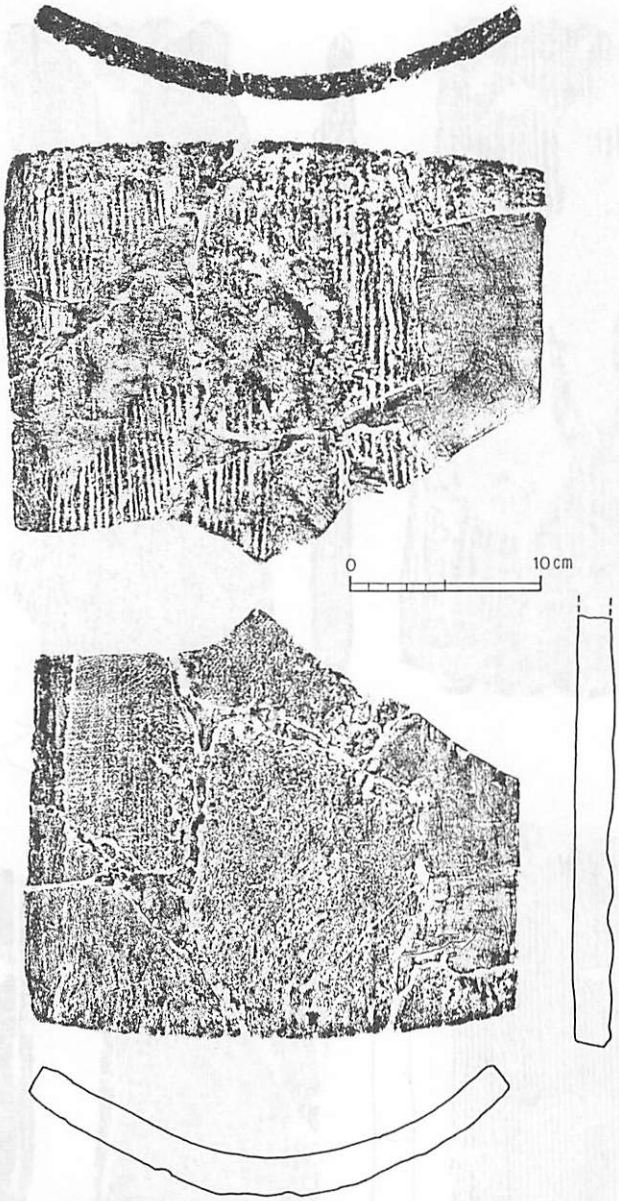
軟質の焼成のものである。凸面は縄目タタキの後，主として横方向のナデ調整がなされている。なお，第152図2は2G土壙16内の四隅に支柱のように立てられていた瓦の1点で，凹面に布の綴じ合わせ痕が認められるものである。第152図3は7号墳周濠内から出土しており，これには側面に，凹面側からヘラを入れた分割痕をとどめている。色調は1が灰褐色，2は内部が淡褐色で表面が灰色，3は灰色を呈している。



第153図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(3)　(縮尺：1/4)



第154図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(4)　(縮尺：1/4)

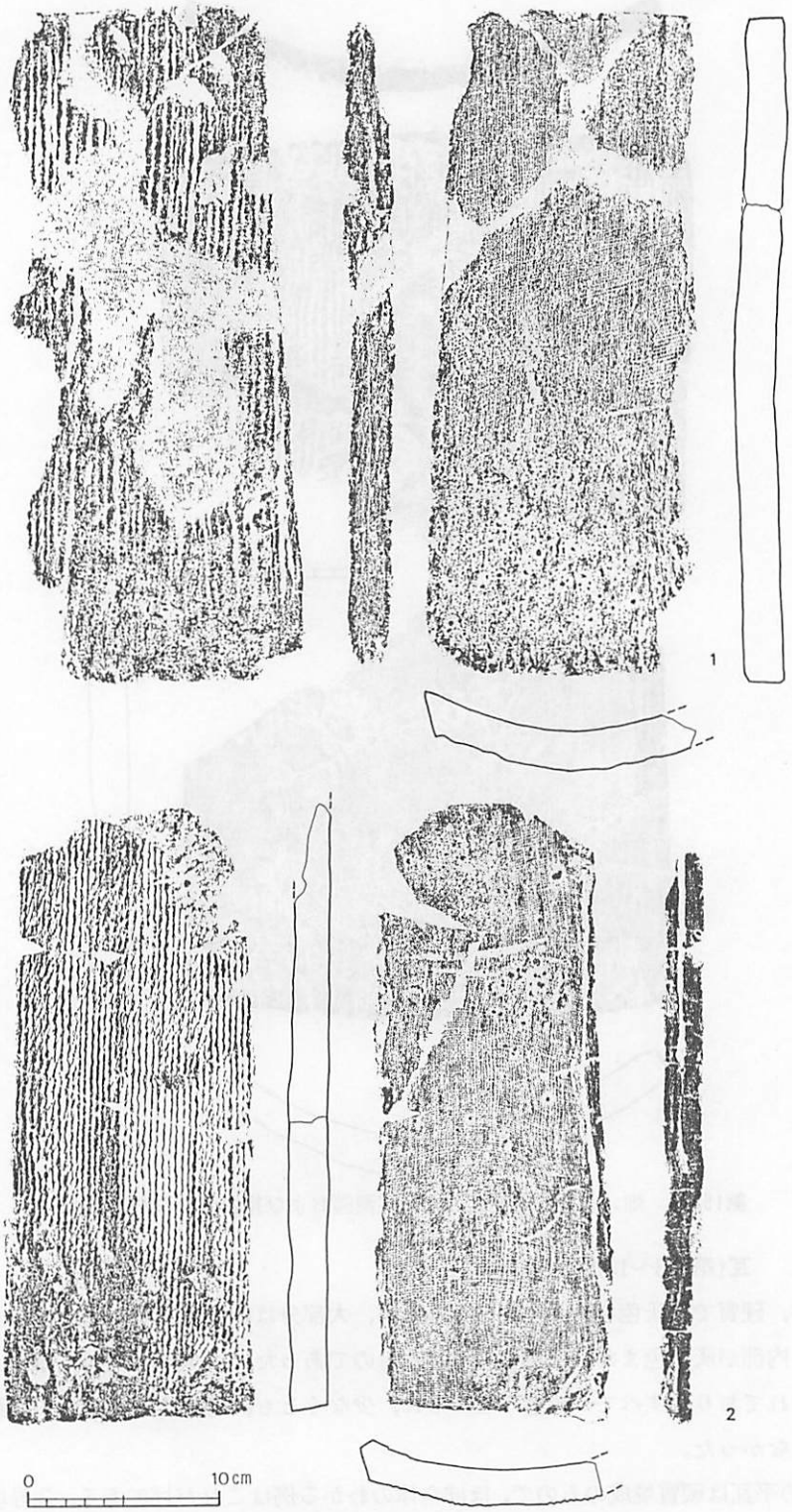


第155図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(5)　(縮尺：1/4)

4)**平　　瓦**(第153～157図，図版第71・72)

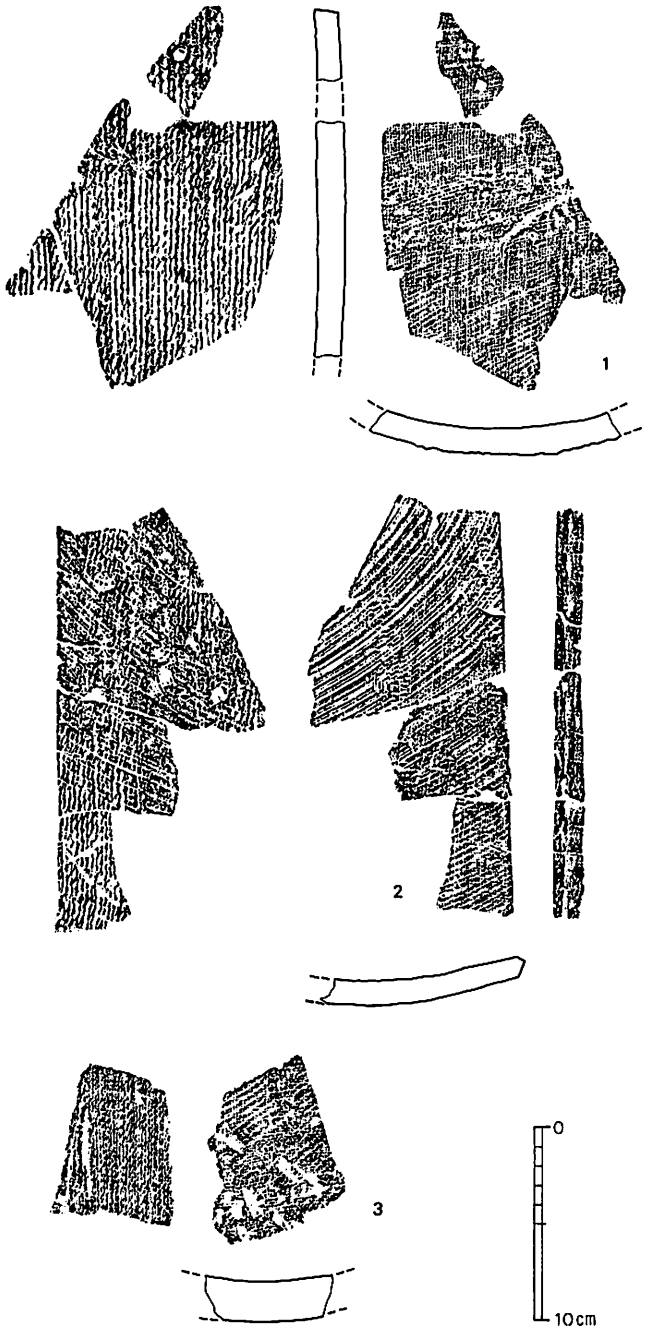
平瓦には，硬質で青灰色を呈するものもあるが，大部分は軟質焼成のもので，色調は表面が灰黒色で，内部が灰白色または灰褐色を呈するものであった。いずれも凸面は縦方向の縄目タタキがなされており，すべて一枚造りとみられ，少なくとも決定的な桶巻造りの痕跡の認められるものはなかった。

第153図の平瓦は硬質焼成のもので，ほぼ全体のわかる例はこれだけである。7号墳周濠内から出土している。第154・155図は，6H土壙3から出土した平瓦で，いずれも凸面の縄目が粗



第156図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(6)　(縮尺：1/4)

く，側面は瓦の円弧の垂線方向をとるように成形されている。第156図の２点は５Ｈ井戸１下部の，円筒側の縁が欠けている部分に当てがわれていた平瓦で，第156図２は硬質焼成のものである。なお，平瓦の接合を行うと，第156図例のように縦に半截されたものが他にも認められた。分割線はないが，これらは熨斗瓦の可能性もある。第157図１・２は薄手に造られた平瓦である。２点ともやや硬質の焼成で灰色を呈している。１は７号墳周濠内，２は６号墳周濠内から出土したが，この種の平瓦はこの２点のみである。第157図３は凸面にかなり細かい縄目のタタキが施された平瓦で，７号墳周濠内から出土した。この種のタタキ目をもつものは，この小片の他には認められなかった。



第157図　畑ノ前遺跡発掘区出土瓦実測図および拓影(7)（縮尺：1/4）

第５章　その他の遺構と遺物

第１節　主要な遺構

これまで各時代別に説明してきた遺構のほかに，側壁が焼けた土壙（この内のいくつかは奈良時代に属すると思われる），時代が下って，中世の溝状遺構，近代と思われる溜池状遺構や井戸なども検出した。

１．側壁が焼けた土壙（第158図，図版第45～48）

平面プランが長方形に近く，側壁の一部ないしは全面が焼けた土壙を６基検出した。これらは，側壁は焼けているが，底面には焼けた痕跡がみられず，一様に最下層が灰層となっている。長軸の方向は個々まちまちである。遺物の出土はほとんど無い。このうちの５基は発掘区域の南西部に分布し，掘立柱建物群のほぼ西側にあたる。残りの１基，４Ｆ土壙１のみがこれよりかなり離れたところに位置し，掘立柱建物１の柱穴５を切っている。掘立柱建物１は，掘立柱建物群のII期に属するので，４Ｆ土壙１は平安時代に入る可能性もあり，他の５基ともどもこの章で扱うことにした。ただし，４Ｆ土壙１を除いて，他は掘立柱建物群の西側に位置することから，中には奈良時代に属するものもあると思われる。

４Ｆ土壙１（第158図１，図版第47）　平面プランが69×108cmで，深さ20cm前後である。長軸は南東一北西方向を向く。側壁の上半部において一部が１cmほどの厚さで焼けている。堆積土は５層に分けられ，最下層は厚さ２～３cmの灰層である。

１Ｇ土壙１（第158図２，図版第48上）　当初一つの土壙と思われたが，断面図からみると掘り間違いであり，この土壙が掘られる前に二つの土壙があったものと思われる。第４層としているものが恐らくその土壙であり，これは竪穴住居址６の中の一連の土壙であったろう。灰層が東西方向で70cm残存しているので，平面プランは（70＋α）×80cmの規模となろう。深さは10～15cmほどである。側壁の一部が，厚さ１cmほど焼けている。灰層は第158図２の第３層で，厚さ５cmほどである。

１Ｇ土壙２（第158図３，図版第45）　平面プランが80cm×103cmを測り，深さ29cmほどである。長軸はほぼ南北方向を向く。側壁の焼けた部分は一部見られないところもあるが，ほぼ全周に巡っていて，厚いところでは３cm前後ある。この土壙には，中央よりやや西寄りに直径20cmほど，深さ７cmほどの掘り込みが検出された。最下層は厚さ８～10cmの灰層である。

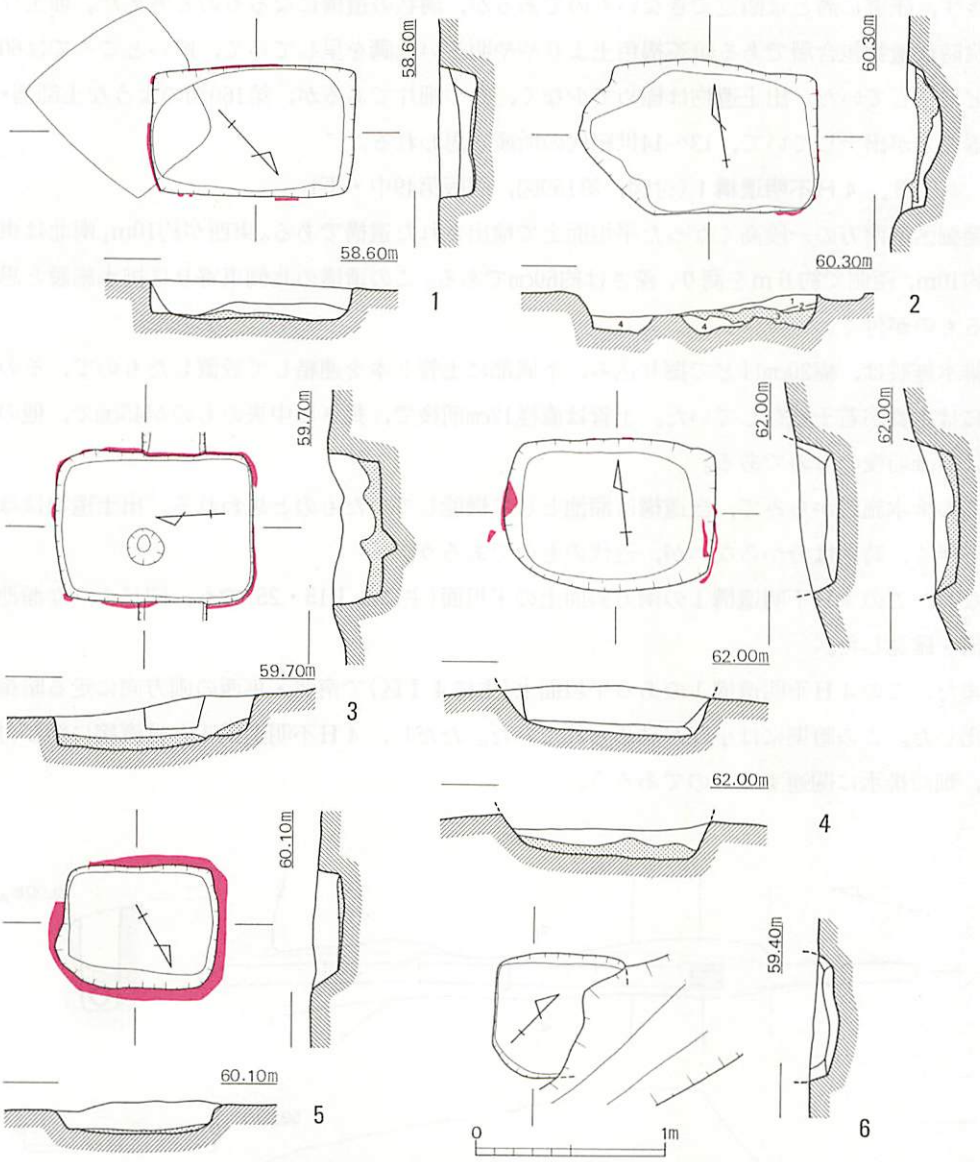
２Ｈ土壙１（第158図４，図版第48下）　平面プランが80×111cmを測り，深さ20cmほどである。長軸はほぼ東西方向を向く。側壁の焼けた部分はまばらに見られるだけで，厚さ１cmほどで焼けている。最下層は厚さ６cm前後の灰層である。

２Ｇ６土壙３（第158図５，図版第46）　平面プランが77×93cmで，深さ17cm前後である。長軸は南西一北東方向を向く。側壁の焼けた部分は全周を巡り，厚さは５～７cmに及ぶ。最下層は

厚さ２cmほどの灰層である。

２Ｆ土壙１（第158図６）　現代の溝によって東側の一部が切られている。平面プランは66×約70cmで，正方形に近い。深さ13cm前後である。長軸は南西―北東方向を向く。側壁には焼けた部分が部分的に残存し，厚さ１cmほどである。最下層は厚さ５cm前後の灰層である。

この側壁が焼けた土壙の類例としては，管見によれば，平城宮右京内裏北外郭東区のＳＸ801



第158図　畑ノ前遺跡側壁が焼けた土壙実測図（縮尺：1/40）
１：４Ｆ土壙１　２：１Ｇ土壙１〔１：オリーブ灰色土（Hue7.5YR6/3），２：暗オリーブ灰色土（Hue2.5GY4/1），３：黒色土（Hue10YR1.7/1），４：褐色土（Hue10YR4/6）〕　３：１Ｇ土壙２　４：２Ｈ土壙１　５：２Ｇ６土壙３　６：２Ｆ土壙１

北・南の2基[9]，平城京右京一条北辺四坊六坪のＳＫ1065[10]が挙げられ，規模や状況から，当遺跡のこれらの土壙と同一の性格のものと考えられる。内裏北外郭東区のＳＸ801は，炉と考えられていて，当遺跡のこれらの土壙も炉と考えておきたい。

2．中世溝状遺構(付図，図版第49上)

発掘区域東端の6Ｅ～6Ｈ東側で，南北に走る浅い落ち込みを検出した。これは，昭和59年度の試掘調査でも確認されていたものである。道路によって，東側への続きを確認することができず，確実に溝とは断定できないものであるが，溝状の遺構になるものと考えた。埋土は，奈良時代遺物包含層である暗茶褐色土よりやや明るい色調を呈していて，厚いところでは60cmほど堆積していた。出土遺物は極めて少なく，かつ細片であるが，第160図のような土師器・須恵器などが出土していて，13～14世紀代の所産と思われる。

3．4Ｈ不明遺構1(付図，第159図，図版第49中・下)

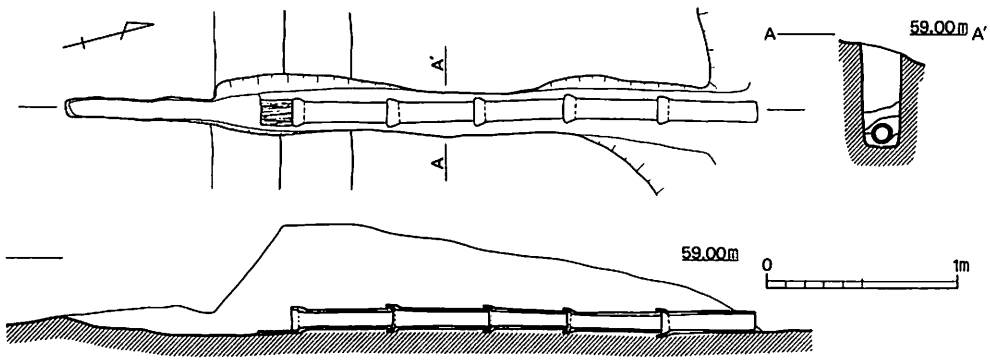
発掘区域南方の一段高くなった平坦面上で検出された遺構である。東西が約10m，南北は東側で約10m，西側で約6mを測り，深さは約60cmである。この遺構の北側東寄りに排水施設と思われるものが付く。

排水施設は，幅20cmほどで掘り込み，下底部に土管5本を連結して設置したもので，その南側には木質が若干残存していた。土管は直径12cm前後で，長さは中央のものが45cmで，他の4本は54cm前後のものである。

この排水施設からみて，当遺構は溜池として機能していたものと思われる。出土遺物はほとんど無く，時期は分からないが，近代のものであろう。

なお，この4Ｈ不明遺構1の南方斜面上の平坦面(主に3Ｉ15・25)でも，同じような溜池状遺構を確認した。

また，この4Ｈ不明遺構1のある平坦面上(主に4Ｉ区)で南北・東西の両方向に走る暗渠も検出した。この暗渠には小礫が詰められていた。ただし，4Ｈ不明遺構1とは直接に結び付かず，畑の排水に関連するものであろう。



第159図　畑ノ前遺跡4Ｈ不明遺構1排水施設実測図(縮尺：1/40)

4．6F井戸1（付図）

6F12区で検出されたもので，コンクリートの蓋がされていた。井戸側は下部に井戸瓦を使用し，上部ではその上に漆喰ないしはコンクリートをかぶせていたようである。時期的には近代のものと思われる。危険防止のために，若干埋めて調査はしなかった。

第2節　遺　　物

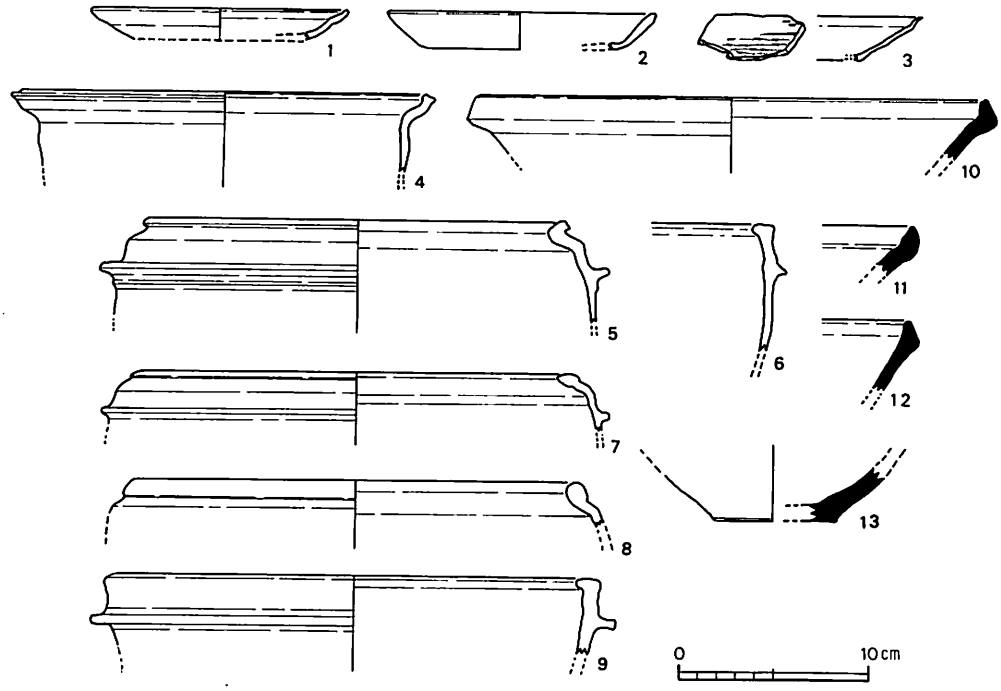
中世溝状遺構出土遺物（第160図）

出土遺物が少なく，かつ細片が多いが，6G24区で多少まとまって出土しているので，図示できるものを第160図に示した。，

土師器　第160図1は復元口径13.4cmの土師皿で，口縁端部が若干つまみあげ状になる。内外面ヨコナデで，外面のヨコナデが強いため，体部が段状をなす。2は復元口径14.2cmで，内外面ヨコナデである。これらは，平安京三条西殿跡B5土壙1出土の土師皿[11]に近いので，13世紀中頃〜後半のものと思われる。

4は鍋で，復元口径22.3cm。5・7・8は口縁端部の形態に各々相違はあるが，口縁部が内傾する羽釜である。6・9は口縁部が直立し，内側に端部がはりだす羽釜である。これらの鍋・羽釜類は，平安京跡の出土例から13世紀後半〜14世紀代のものと思われる。

瓦器　3は瓦器椀で，口縁部が若干段になる。内面の底部近くに粗い暗文がみられ，外面は不調整。低い高台を貼り付けている。白石太一郎氏編年のIII－8[12]に相当すると思われ，13世紀



第160図　畑ノ前遺跡中世溝状遺構出土遺物実測図（縮尺：1/4）

中葉～後半に位置づけられよう。

須恵器　10は復元口径26.0cmの東播系摺鉢で，口縁部の肥厚からみて，14世紀代に入るものと思われる。11・12は10よりも口縁部の張り出しが少ないので，13世紀代と思われる。13は底部。

第6章　畑ノ前遺跡試料花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試　　料

試料は，奈良時代遺構(2・5号墳周濠)内堆積土から3点，8世紀前半(奈良時代前半)の5H井戸1内土壌から1点，合計4点である。各試料の番号・採取地点・土質について第10表にまとめた。

第10表　畑ノ前遺跡5・2号墳周濠および5H井戸1内花粉分析試料表

No.	採取地点	土　質	時　代
1	5号墳周濠(5G10)	黄褐色粘土質砂	奈良時代
2	5号墳周濠(5G10)	にぶい黄褐色粘土質砂	〃
3	2号墳周濠(5F9)	にぶい黄褐色砂質粘土	〃
4	5H井戸1内土壌	緑灰およびにぶい黄褐色粘土質砂	〃

2．分析方法

花粉分析の方法は下記の手順で行った。

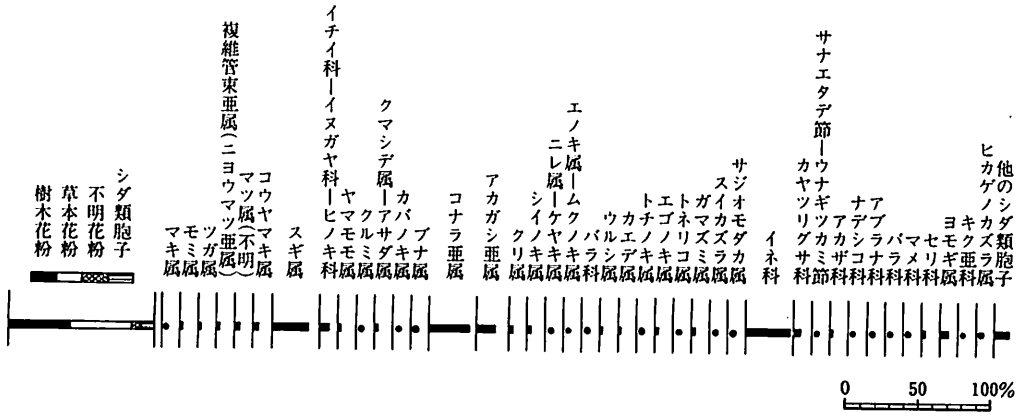
○試料調製・秤量(15g)

○濃HF液にて鉱物を溶解・遠心分離による水洗

○重液($ZnBr_2$/HCl溶液・sp.gr.：2.2)による鉱物との分離

○アセトシリス処理(濃硫酸：無水酢酸＝1：9)処理

○10%KOH処理



第161図　畑ノ前遺跡における花粉化石群(・は1%未満の出現率を示す)

○封入(樹木花粉が200個体前後になるように調製し，グリセリンゼリーにて封入した。ただし，化石の少ない試料はできるだけ多く化石が入るように封入した。)

○同定(プレパラートの全域を走査した。)

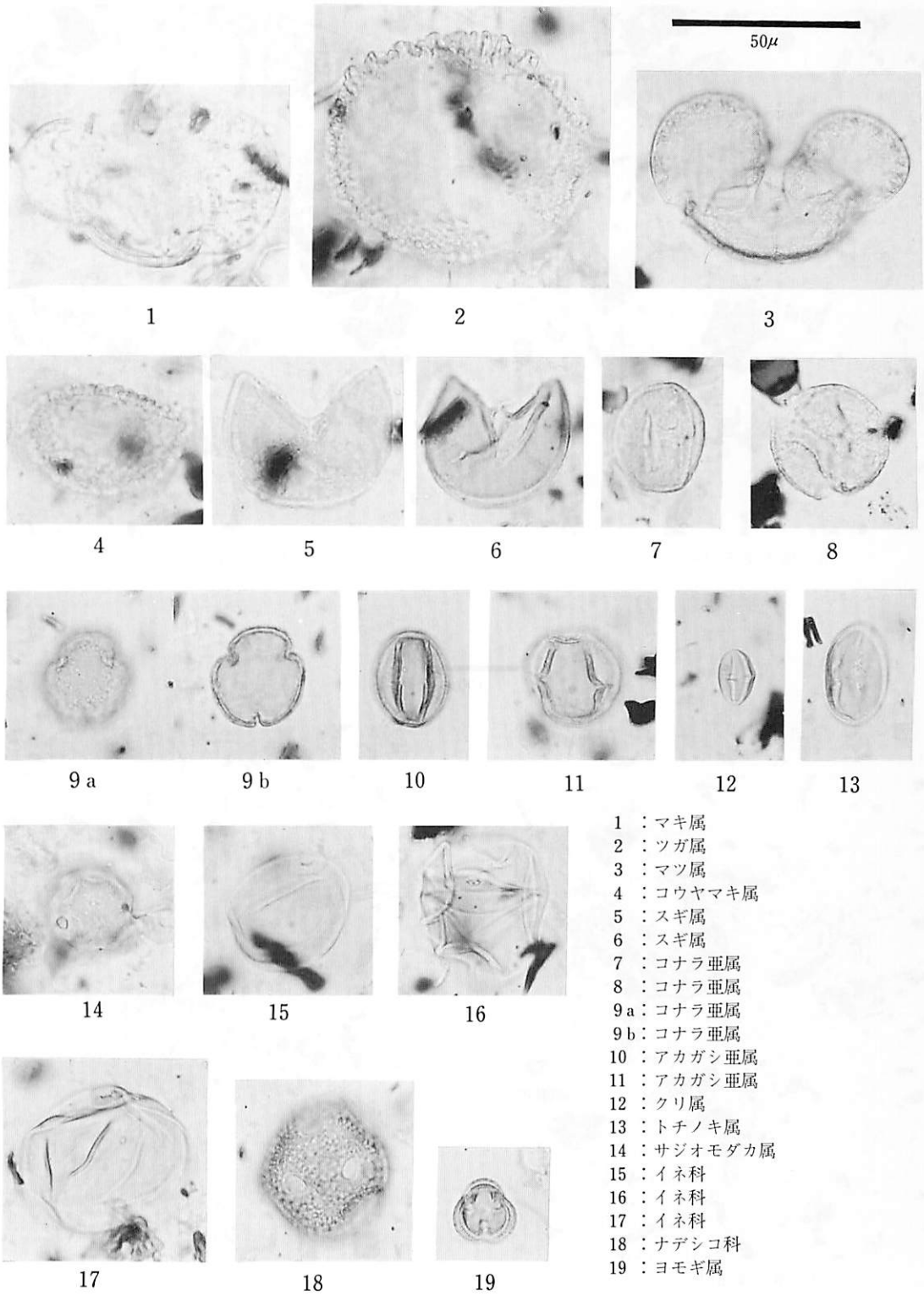
3．結果および考察

花粉分析の結果は，同定した分類群の個体数で表示し，第11表にまとめた。第11表の中で樹木花粉の合計が100個体以上の№4（5H井戸1内土壌）については，第161図として花粉ダイアグラムを作成した。第161図における各樹木花粉は樹木花粉の合計を基数とし，各草本花粉とシダ類胞子は不明花粉を除く花粉・胞子の合計を基数とした百分率である。なお，図表中で複数の分類群をハイフォン(—)で結んだものは，両者間の区別が明確でないものである。また，主な花粉化石と顕微鏡下の写真は第162・163図に載せた。

№1・2・3の3試料は，いずれも花粉化石の産出が非常に少なく，アカガシ亜属・スギ属・イネ科・コウヤマキ属などが散見されるにすぎなかった。このような結果から，少なくとも出現花粉の母植物が近辺に生育していたと言えるが，古植生を復元することは困難である。

第11表　畑ノ前遺跡試料花粉分析結果表

試料番号	1	2	3	4
マキ属	—	—	—	1
モミ属	—	—	—	2
ツガ属	—	—	—	2
複維管束亜属(ニヨウマツ亜属)	—	—	3	3
マツ属(不明)	—	—	—	5
コウヤマキ属	—	5	4	5
スギ属	—	4	3	45
イチノ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	—	—	—	10
ヤマモモ属	—	—	—	2
クルミ属	—	—	—	1
クマシデ属—アサダ属	—	—	—	3
カバノキ属	—	—	—	1
ハンノキ属	—	—	1	—
ブナ属	—	—	—	1
コナラ亜属	1	3	—	51
アカガシ亜属	—	—	—	23
クリ属	—	—	—	4
シイノキ属	—	—	—	3
ニレ属—ケヤキ属	—	—	—	1
エノキ属—ムクノキ属	—	—	—	1
バラ科	—	—	—	1
ウルシ属	—	—	—	2
カエデ属	—	—	—	2
トチノキ属	—	—	—	1
エゴノキ属	—	—	—	3
トネリコ属	—	—	—	1
ガマズミ属	—	—	—	4
スイカズラ属	—	—	—	1
サジオモダカ属	—	—	—	1
イネ科	1	2	17	121
カヤツリグサ科	—	—	—	16
サナエタデ節—ウナギツカミ節	—	—	—	2
アカザ科	—	—	—	6
ナデシコ科	—	—	1	2
アブラナ科	—	—	2	1
バラ科	—	—	—	1
マメ科	—	—	—	1
セリ科	—	—	—	7
ヨモギ属	—	—	—	22
キク亜科	—	—	9	3
不明花粉	1	2	3	25
ヒカゲノカズラ属	—	1	—	2
ゼンマイ属	—	1	—	—
他のシダ類胞子	2	9	14	41
シュウドシイザエ	3	—	—	—
樹木花粉	1	12	11	179
草本花粉	1	2	29	183
不明花粉	1	2	3	25
シダ類胞子	2	11	14	43
総花粉・胞子	5	27	57	430



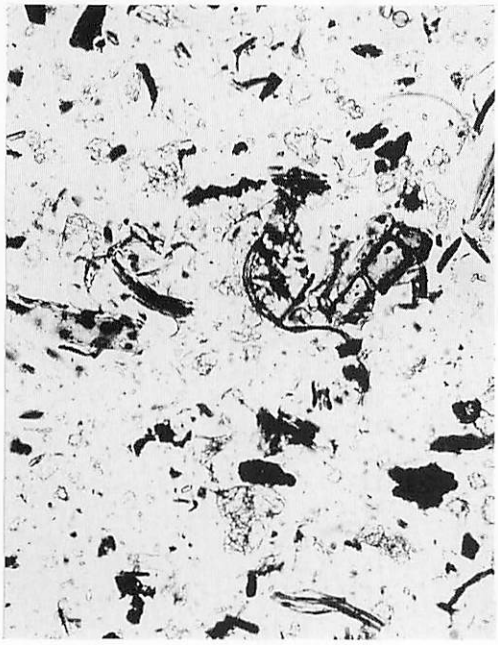
1 ：マキ属
2 ：ツガ属
3 ：マツ属
4 ：コウヤマキ属
5 ：スギ属
6 ：スギ属
7 ：コナラ亜属
8 ：コナラ亜属
9a：コナラ亜属
9b：コナラ亜属
10 ：アカガシ亜属
11 ：アカガシ亜属
12 ：クリ属
13 ：トチノキ属
14 ：サジオモダカ属
15 ：イネ科
16 ：イネ科
17 ：イネ科
18 ：ナデシコ科
19 ：ヨモギ属

第162図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１内土壌の花粉化石顕微鏡写真

5号墳周濠(5G10セクション)

5号墳周濠(5G10セクション)

100μ



2号墳周濠(5F9セクション)

5H井戸1内

第163図　畑ノ前遺跡各採集試料の顕微鏡下状況写真

No.4（5H井戸1内土壌）試料の樹木花粉の組成は，スギ属・コナラ亜属・アカガシ亜属が高率に出現し，マツ属（複雑管束亜属を含む）・コウヤマキ属・クマシデ属―アサダ属・クリ属・シイノキ属などを低率で伴う。草本花粉はイネ科が顕著に多く，カヤツリグサ科・ヨモギ属・セリ科などを伴う。

古植生は，スギ・ナラ類，カシ類などの樹木からなる林地が後背地に存在していたものと推定される。そして，草本花粉はイネ科・ヨモギ属・セリ科などが5H井戸1の周辺に生育していたものと考えられる。

第７章　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１およびその周辺から発掘された木質遺物の樹種

林　昭三・島地　謙

１．はじめに

畑ノ前遺跡(京都府相楽郡精華町大字植田，奈良時代)から発掘された木製の５Ｈ井戸１について，樹種の同定を行った。この遺跡は，(仮称)精華ニュータウン開発予定地の東端の丘陵地にあって，正倉院文書に登場する地方豪族の稲蜂間氏の住居跡と考えられている。

井戸の上半分は方形で，長さ1.2m，幅20～30cm，厚さ約５cmの板を数段組み合わせて上部井戸側を形成しており，下半分は１本の丸太を刳り抜いた下部井戸側で，外部直径約1.1m，内部直径約1m，厚さ５～10cm，長さ3.5mの大きい円筒である。その下部には，水を取り入れる穴が４個開けられている。なお，下部井戸側の表面には，部分的に手斧で削られた痕が鮮明に残っている。上半分の上部井戸側のうち，健全な状態で遺存していた東３段目，西１・２段目，南３段目，北３段目の枠板から，および下半分の下部井戸側の上端部から，樹種同定のための試料を採取した。また裏込(井戸製作時に掘られた大きい穴に下部井戸側や上部井戸側をセットし，それらを埋め込むのに粘土を使用した部分)の中から出土した木片４検体，掘方底から掘り出された６×13×30(cm)の角材２検体，掘方井戸上面から10×10×20(cm)の組みブロック状の１検体，下部井戸側内からの加工残材および自然木の破片と思われるもの36検体のそれぞれからも試料を採取した。

２．同定方法

採取した49個の試料すべてから，そのまま安全カミソリの刃を用いて，木口面・柾目面・板目面の検鏡用切片を採り，アルコールシリーズで脱水，キシレンで透化したのち，ビオライトで封入して永久プレパラートとし，普通光顕微鏡と蛍光顕微鏡を併用して樹種の同定を行った。

３．樹種同定結果

採取された試料49点の構成樹種は12種類であった。それらの試料番号，同定された樹種名，および各試料を採取した母材の出土位置・性格などを第12表に，また出土した各樹種別の件数を第13表に示した。試料切片の顕微鏡写真は，紙数の関係で代表的なもののみを第164～167図に示した。挿図各写真説明中，最初の括弧内数字は第12表の試料番号を，後の括弧内数字は拡大倍率を示す。

樹種同定に際して，根拠となった各樹種の特徴および当該樹種の試料番号・挿図番号は以下のとおりである。

第12表　畑ノ前遺跡5H井戸1出土樹種表

試料番号	樹　種	備　　考	試料番号	樹　種	備　　考
1	ヒノキ	下部井戸側	26＊	コナラ亜属	下部井戸側内の破片
2	ヒノキ	上部井戸側(東3段目)	27＊	ヤマツツジ	〃
3	ヒノキ	〃　(西1段目)	28＊	ヤナギ属	〃
4	ヒノキ	〃　(西2段目)	29＊	ツブラジイ	〃
5	ヒノキ	〃　(南3段目)	30＊	シイノキ属	〃
6	ヒノキ	〃　(北3段目)	31＊	シイノキ属	〃
7	スギ	裏込内木片	32＊	シキミ	〃
8	スギ	〃	33＊	シキミ	〃
9	スギ	〃	34＊	コナラ亜属	〃
10	スギ	〃	35＊	エゴノキ属	〃
11	ヒノキ	掘方底の角材	36＊	コナラ亜属	〃
12	ヒノキ	〃	37＊	エゴノキ属	〃
13	スギ	掘方上面のブロック	38＊	コナラ亜属	〃
14	スギ	下部井戸側内の破片	39＊	ヤマツツジ	〃
15	ヒノキ	〃	40＊	ヤマツツジ	〃
16＊	サカキ	〃	41＊	ヤマツツジ	〃
17＊	ヒサカキ	〃	42＊	ヤマツツジ	〃
18＊	ヒサカキ	〃	43＊	ヤマツツジ	〃
19	ヒノキ	〃	44＊	ヤマツツジ	〃
20＊	ヤマツツジ	〃	45＊	ヤマツツジ	〃
21＊	コナラ亜属	〃	46＊	エゴノキ属	〃
22＊	エゴノキ属	〃	47＊	ヤマツツジ	〃
23＊	コナラ亜属	〃	48＊	ヤマツツジ	〃
24	ツガ	〃	49＊	ヤマツツジ	〃
25＊	コナラ亜属	〃			

＊は直径1～2cm以下の小径木あるいは小枝

第13表　畑ノ前遺跡5H井戸1出土樹種別件数表

針　葉　樹	件数	広　葉　樹	件数
ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endl.)	10	ヤナギ属 (*Salix* sp.)	1
スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)	6	ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* Shottky)	1
ツガ (*Tsuga sieboldii* Carr.)	1	シイノキ属 (*Castanopsis* sp.)	2
		コナラ亜属 (*Quercus* sp. : Lepidobalanus)	7
		シキミ (*Illicium religiosum* S. et Z.)	2
		サカキ (*Cleyera japonica* Thunb.)	1
		ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunb.)	2
		ヤマツツジ (*Rhododendron kaempferi* Planch.)	12
		エコノギ属 (*Styrax* sp.)	4
小　計	17	小　計	32

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科(試料番号1・2・3・4・5・6・11・12・15・19)(第164図1・2・3)

垂直ならびに水平樹脂道はない。放射仮道管はない。軸方向柔細胞(樹脂細胞)は早・晩材の移行部付近から外側に，接線方向に点々と並ぶ傾向がある。蛍光顕微鏡で観察すると，放射柔細胞の分野壁孔は典型的なヒノキ型で，一分野に1～3個(通常2個)見られる。

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don スギ科(試料番号7・8・9・10・13・14)(第164図4・5・6)

垂直ならびに水平樹脂道はない。放射仮道管はない。軸方向柔細胞(樹脂細胞)は早・晩材の移行部から外側に，接線方向に点々と並ぶ傾向がある。蛍光顕微鏡で観察すると，放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で，一分野に1～3個(通常2個)見られる。

ツガ　*Tsuga sieboldii* Carr. マツ科(試料番号24)(第164図7・8・9)

垂直ならびに水平樹脂道はない。放射組織の上下の縁辺に放射仮道管がある。放射柔細胞はじゅず状末端壁をもつ。軸方向柔細胞(樹脂細胞)は少ない。

ヤナギ属　*Salix* sp. ヤナギ科(試料番号28)(第165図10・11・12)

散孔材。ほぼ等径の道管が平等に分布するが，年輪の外境に近いものはやや小径となる。道管は単独のものもあるが，多くは放射方向に2～4個複合する。せん孔は単せん孔。側壁の壁孔は交互壁孔で，放射柔細胞との間に大型でふるい状の壁孔をもつ。軸方向柔細胞は，ターミナル状。放射組織は単列異性。なお，ヤナギ属では道管の側壁にかすかに螺旋状の線条が見えるはずであるが，本試料は劣化のためにそのような線条は観察できなかった。種までの同定は困難である。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Shottky ブナ科(試料番号29)(第165図13・14・15)

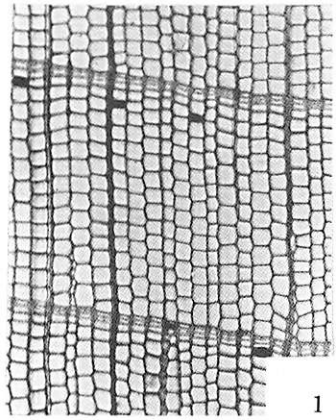
環孔性の放射孔材。孔圏部の道管は単独でかつ大きく，接線方向に連続せず，孔圏外に移るに従って大きさを減ずる。孔圏外の道管は小型で角張っており，集団をなして，しばしば火炎状に配列する。放射組織は単列同性で，集合放射組織をもつ。

シイノキ属　*Castanopsis* sp. ブナ科(試料番号30・31)(第165図16・17・18)

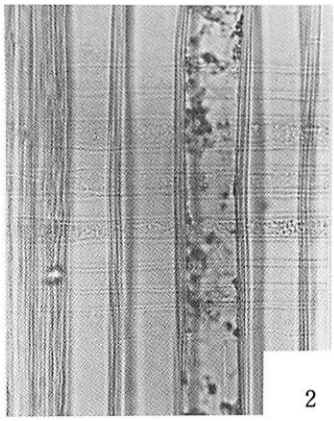
上記ツブラジイと全く同じ特徴を示しているが，ただ一点の違いは集合放射組織が観察されないことである。わが国のシイノキ属は典型的にはスダジイ(*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* Nakai)とツブラジイに分けられ，典型的なツブラジイは集合放射組織を常に有するのに対して，典型的なスダジイはそれを持たないことから，両者が区別できる。しかしながら，今回の試料のように極めて小さな破片の中で集合放射組織が見られなかったからといって，スダジイと断定することは危険である。したがって，これら両試料については同定を属の段階で止めることとした。

コナラ亜属　*Quercus* sp. Subgen. Lepidobalanus ブナ科(試料番号21・23・25・26・34・36・38)(第166図19・20・21)

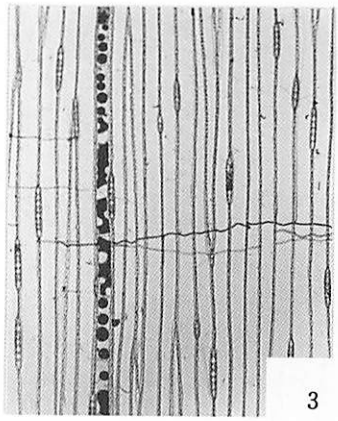
環孔材。年輪界に沿って大きい道管が1～3列並んで孔圏部を形成し，孔圏外の小道管は薄



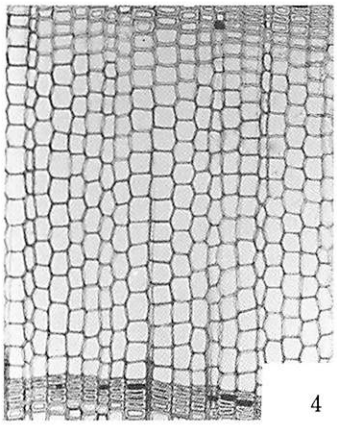
ヒノキ(4)木口(×70)



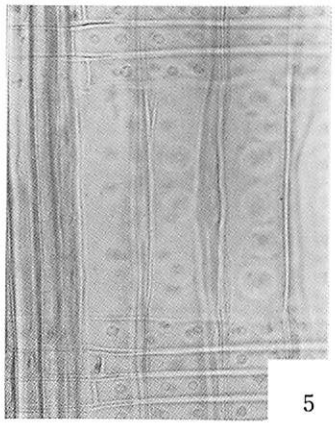
ヒノキ(2)柾目(×280)



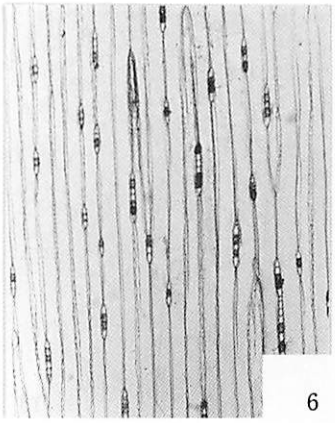
ヒノキ(3)板目(×70)



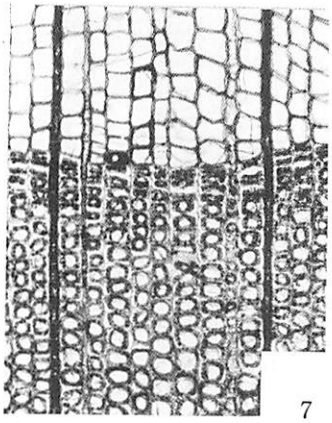
スギ(8)木口(×70)



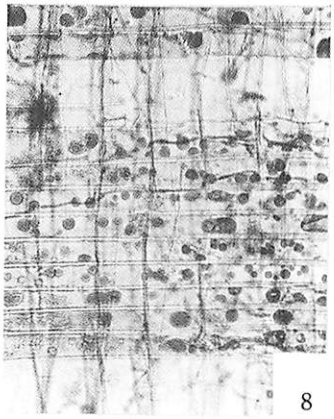
スギ(9)柾目(×280)



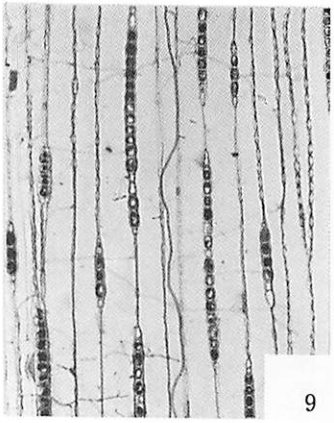
スギ(7)板目(×70)



ツガ(24)木口(×100)



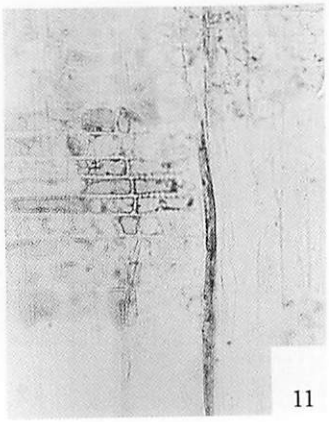
ツガ(24)柾目(×200)



ツガ(24)板目(×100)

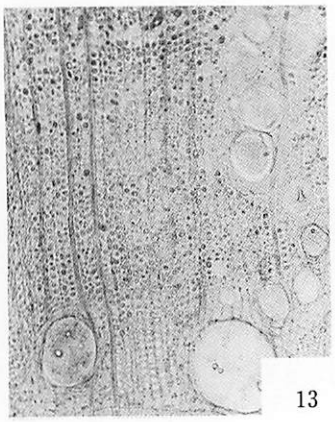
第164図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土木質遺物細胞組織顕微鏡写真(1)

ヤナギ属(28)木口(×100)



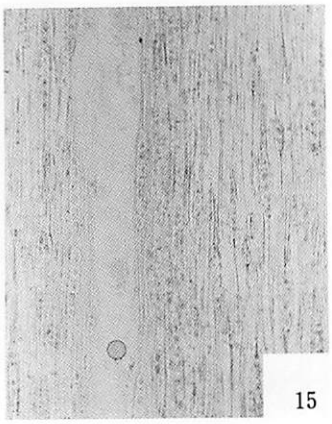
ヤナギ属(28)柾目(×200)

ヤナギ属(28)板目(×100)

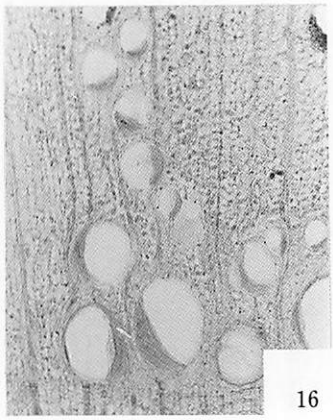


ツブラジイ(29)木口(×100)

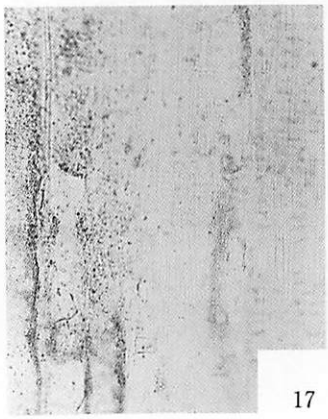
ツブラジイ(29)柾目(×200)



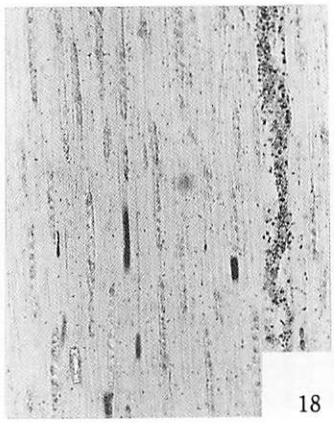
ツブラジイ(29)板目(×100)



シイノキ属(30)木口(×100)

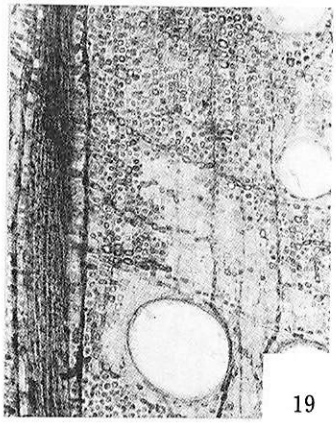


シイノキ属(30)柾目(×100)

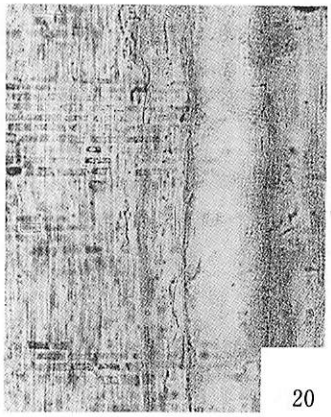


シイノキ属(30)板目(×100)

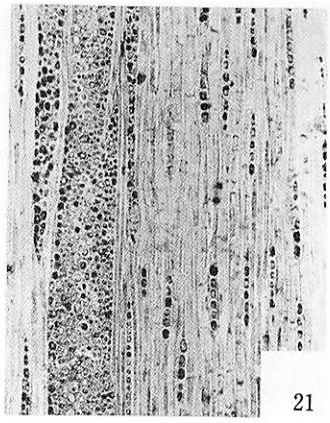
第165図　畑ノ前遺跡5H井戸1出土木質遺物細胞組織顕微鏡写真(2)



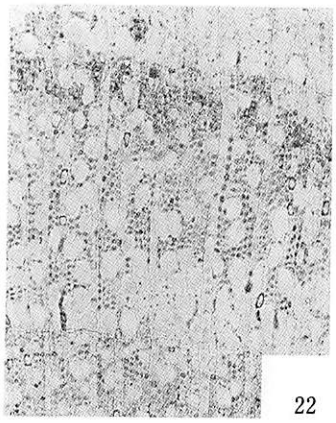
コナラ亜属(21)木口(×100)



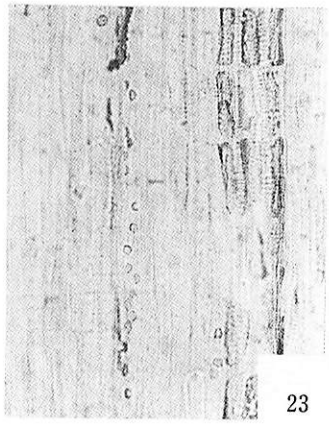
コナラ亜属(23)柾目(×100)



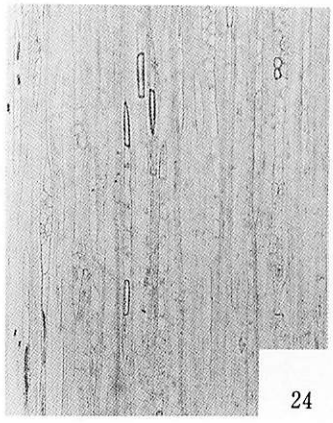
コナラ亜属(21)板目(×100)



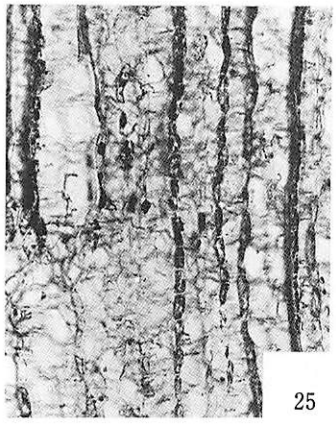
シキミ(33)木口(×100)



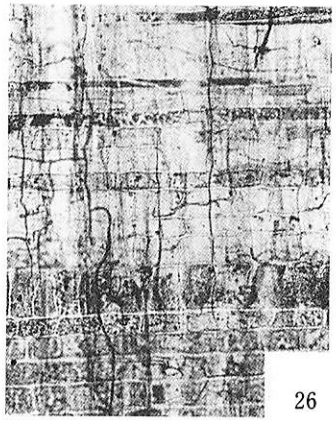
シキミ(33)柾目(×200)



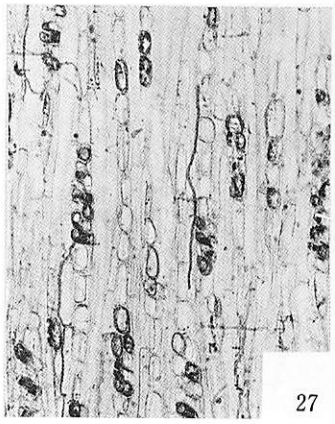
シキミ(33)板目(×100)



サカキ(16)木口(×100)

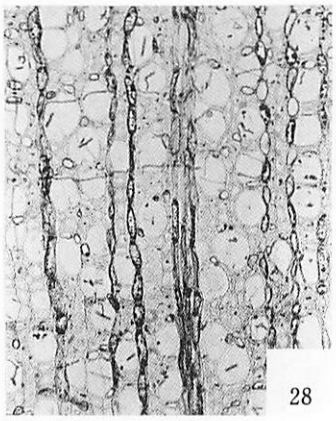


サカキ(16)柾目(×100)

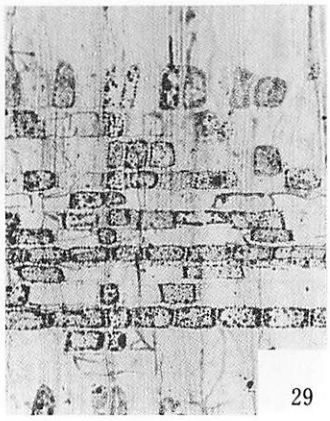


サカキ(16)板目(×100)

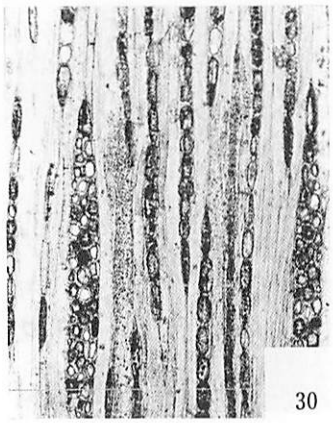
第166図　畑ノ前遺跡５Ｈ井戸１出土木質遺物細胞組織顕微鏡写真(3)



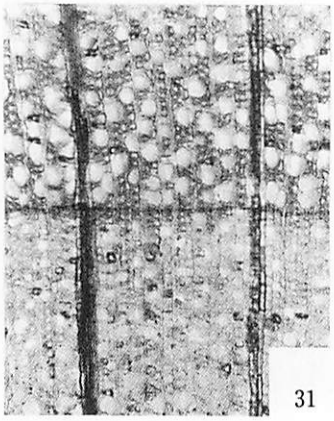
ヒサカキ⑱木口(×100)



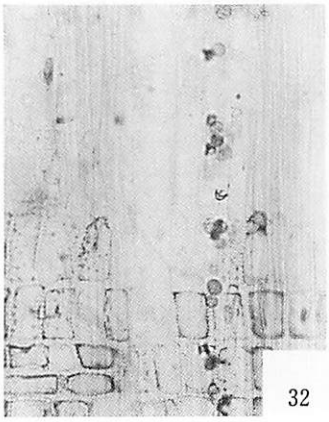
ヒサカキ⑱柾目(×100)



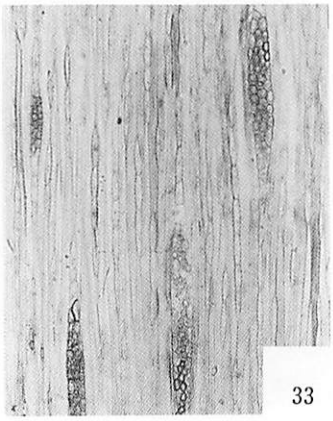
ヒサカキ⑰板目(×100)



ヤマツツジ⑳木口(×100)

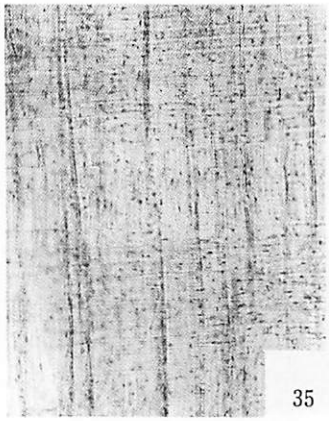


ヤマツツジ㊻柾目(×200)

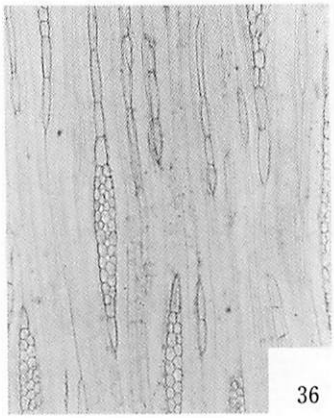


ヤマツツジ⑳板目(×100)

エゴノキ㊻木口(×100)



エゴノキ㉟柾目(×100)



エゴノキ㉒板目(×100)

第167図　畑ノ前遺跡5H井戸1出土木質遺物細胞組織顕微鏡写真(4)

壁で角張っており，多数集まって火炎状に配列している。放射組織は多数の単列放射組織と複合型の広放射組織の2種類がある。クヌギ・アベマキとは孔圏外の小道管の形や集まり方で区別できるが，コナラ・ミズナラ・カシワなどの区別は困難である。しかしながら，これらの試料が現場付近に生えていた自然木のものとすれば，コナラの可能性が大きい。

シキミ　*Illicium religiosum* S. et Z. モクレン科(試料番号32・33)(第166図22・23・24)

散孔材。小径の道管が多数平等に分布する。道管は階段せん孔で，らせん肥厚をもつ。道管と放射組織との間の壁孔は，しばしば階段状を示す。軸方向柔細胞は不顕著。放射組織は異性で1～3(4)細胞列。単列放射組織は直立細胞のみからなり，多列放射組織は上下の縁辺に直立細胞のみからなる単列翼部をもつ。

サカキ　*Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科(試料番号16)(第166図25・26・27)

散孔材。小径の道管が多数平等に分布する。道管は階段せん孔で，らせん肥厚をもつ。道管と放射組織との間の壁孔は，しばしば階段状を示す。軸方向柔細胞は不顕著。放射組織は単列異性で，ときに部分的に2列になることがある。単列放射組織は直立細胞のみからなり，部分的に2列になった場合には2列の部分だけ平伏細胞となる。

ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb. ツバキ科(試料番号17・18)(第167図28・29・30)

散孔材。小径の道管が多数平等に分布する。道管は階段せん孔で，らせん肥厚をもつ。道管と放射組織との間の壁孔は，しばしば階段状を示す。軸方向柔細胞は散在状であるが，柾目切片でかなり目立つ。放射組織は異性で1～3(4)列。単列放射組織はほとんど直立細胞のみからなるが，ときに平伏細胞を含む。多列放射組織の多列部は平伏細胞からなり，上下の縁辺に長い単列翼部をもつ。

ヤマツツジ　*Rhododendron kaempferi* Planch. (試料番号20・27・39・40・41・42・43・44・45・47・48・49)(第167図31・32・33)

散孔材。小径の道管が多数平等に分布する。道管は階段せん孔で，道管と放射組織の直立細胞との間の壁孔はしばしば階段状を示す。軸方向柔細胞は不顕著。放射組織は異性で，単列のものと3～5列のものがある。単列放射組織は直立細胞のみからなり，板目切片でみたとき個々の細胞が特徴のあるレンズ状を呈する。多列放射組織の多列部は平伏細胞からなり，上下の縁辺に直立細胞あるいは方形細胞からなる短い単列翼部をもつ。

エゴノキ属　*Styrax* sp. エゴノキ科(試料番号22・35・37・46)(第167図34・35・36)

散孔材。ほぼ等径の道管が，単独あるいは放射方向・斜方向・小塊状に複合して平等に分布する。個々の道管は薄壁で，階段せん孔をもつ。軸方向柔細胞は晩材部で，長く連続した1～2層の接線状配列を示す。放射組織は異性で1～4(5)細胞列。単列放射組織は直立細胞のみからなり，多列放射組織は上下の縁辺に直立細胞からなる単列翼部をもつ。放射組織の広さから考えてエゴノキの可能性が強い。

4．む す び

井戸本体ならびにその周辺から採取した49点の木材試料は，第13表に示したように針葉樹3種，広葉樹9種であった。第12表から判るように井戸の本体，すなわち下部井戸側(試料番号1)および上部井戸側(試料番号2～6)はいずれもヒノキであった。下部井戸側は前記のように外径1mを超える大木の幹を刳り抜いたものであり，上部井戸側もそれに劣らない大木からでないと採れない板を用いているが，このようなヒノキの大木がこの付近に生えていたかどうかは不明である。もし他所から運んだとすれば，当時このような大木をどうやって運んだのか興味のあるところである。また，長さ3.5m，直径1mもあるこのような大材を深い井戸穴の中にどうやって立てたのであろうか。何れにしても，井戸本体にはすべてヒノキが使われていたということは，ヒノキ材が水湿に強い性質から考えれば極めて合理的である。

掘方底の角材2点(試料番号11・12)はヒノキ，掘方井戸上面の組みブロック状木材1点(試料番号13)はスギであった。これら3点は明らかに加工されたものであるが，井戸そのもののために使用されたもの(あるいはその加工残材)なのか，他の使用目的に加工されたものの残材が埋め込まれたものかは不明である。

裏込土内木片4点(試料番号7～10)はすべてスギであったが，これらはいずれも加工残材で，埋土と共に埋め込まれたものと思われる。

下部井戸側内から出土した木材破片36点のうちの4点は針葉樹で，スギ1点(試料番号14)，ヒノキ2点(試料番号15・19)，ツガ1点(試料番号24)であった。これら針葉樹材の破片はいずれも加工残材が廃棄されたものと思われる。残りの32点はすべて広葉樹材であったが，これらはいずれも直径1～2cm以下の小径木あるいは小枝の破片であって，井戸の製作に当たって何らかの目的に使用されたものとは考えられない。おそらく付近の自然木の落枝などが井戸内に落ちて溜ったものか，あるいは，もしこの井戸が使用されなくなり，埋め立てられたことがあったとすれば，埋土の中に混じっていた自然木の落枝と思われる。何れにしても，これらの広葉樹はこの地域に生えていた自然木であることは間違いないと思われ，これらの樹種は当時のこの地域の植生の一部を反映しているものと考えられる。ただし，各樹種の出土件数は，同じ小枝の破片を多数重複して採取している可能性があるので，必ずしも当時の植生における樹種個体数の多寡を反映するものではない。

なお，これらの樹種同定結果は花粉分析の結果とかなり良く一致することを認めた。

第８章　畑ノ前遺跡の^{14}Ｃ年代測定

山　田　　治

１．畑ノ前遺跡の^{14}Ｃ年代測定結果

京都府相楽郡精華町畑ノ前遺跡内の住居跡などから出土した木炭について，放射性炭素年代測定を行った。その結果を第14表に示す。

ここで，ＫＳＵは測定機関・京都産業大学の記号で，それに続く数字は試料番号である。

^{14}Ｃ年代測定には次のような国際的約束があるので，本測定もそれに従った。

(1)^{14}Ｃの半減期を5568年とすること。

(2)^{14}Ｃ濃度の基準は，アメリカ国立標準局から販売されている^{14}Ｃ標準物質であるところのＮＢＳ　Oxalic　Acidを用いること。

(3)測定誤差は１標準偏差（１シグマ）とすること。

第14表　畑ノ前遺跡^{14}Ｃ年代測定値表

測定番号	試料の状況・測定炭素量		^{14}Ｃ年代（Ｂ．Ｐ．）
ＫＳＵ－1271	５Ｆ溝２南・ほりこみ（土壙）	4.08ｇ	1290±30
ＫＳＵ－1272	２号墳周濠（５Ｆ14）	2.09ｇ	1240±50
ＫＳＵ－1273	竪穴住居址３内炉址（２Ｅ土壙１）	7.50ｇ	1850±20
ＫＳＵ－1274	側壁が焼けた土壙（１Ｇ土壙１）	7.11ｇ	1440±25
ＫＳＵ－1275	側壁が焼けた土壙（１Ｇ土壙２）	0.833ｇ	910±110
ＫＳＵ－1276	互を四隅に立てた土壙（２Ｇ土壙16）	13.99ｇ	1260±15
ＫＳＵ－1277	同上	8.25ｇ	1250±20

２．結果の考察と年輪年代

^{14}Ｃ年代測定値の精度は炭素試料の量に比例し，また測定時間にも比例する。精度がよいとは誤差が小さいということである。上記の結果では，奈良時代と推定された試料はほとんど1240－1290（Ｂ．Ｐ．）の中にはいり，１点が1440±25（Ｂ．Ｐ．），１点が910±110（Ｂ．Ｐ．）となっている。この２点の結果にはそれぞれ理由があるのであろうから一応別にして，良く揃った年代の４点について年輪年代と比較して見る。

Ｅ．Ｋ．Ralphら（MASCA　News　Letter　1973）によって作られた年輪年代と^{14}Ｃ年代の対照表から，第15表の数値が読み取られる。ただし，年輪年代の説明についてはここでは省略する。詳しい説明は，原論文または東村武信『考古学と物理化学』（学生社，昭和55年）を参照して頂きたい。

第15表　^{14}C年代から年輪年代への読み替え表

測定番号	^{14}C年代	年輪年代の中央値(括弧内は誤差範囲)
KSU−1271	1290±30	A.D.670(650−690)
KSU−1276	1260±15	A.D.690(680−720)
KSU−1277	1250±20	A.D.710(690−730)
KSU−1272	1240±50	A.D.720(670−790)

この4点の結果から，およそ1シグマの範囲にある値は，A.D.650−790となり，その中心はA.D.720である。奈良時代はA.D.710−793とされているから，これだけの結果ではほぼ奈良時代初期が最も確からしい時代ということになる。

これに加えてもう一つ考慮すべき点がある。それは木炭の年輪数がどれくらいあるかという点である。木の内外を平均して，年輪数の半分の年数だけ現代へ近付いたものがその木が切られた正しい年代を示すので，もし木炭が仮に40年の年輪を持つならば，この木炭の生じた年代はA.D.740年頃がより妥当な年代ということになろう。細い枝木のようなものの炭であればA.D.720年をそのまま採用するほうが正しい値に近いであろう。実際には木炭の年輪まで読むことができなかったのでそこまでの議論はできないが，木材が出土した場合は年輪まで読みうることが多いので，読みうるものなら年輪数も読んで置くというように留意しておいて頂きたい。

第9章　小　結

遺跡の営まれた畑ノ前の台地は，東と北によく眺望が開け，北流する木津川や，対岸を占める山城町域，さらに北方にたどれば，井手の台地や飯岡の丘岡を遠く見はるかすことができる。こうして大和から山城盆地に至る要路がのぞまれるいっぽう，背後には生駒の山系が支脈を複雑に派出し，その谷筋をつたって河内北部に抜け，南に転じて大和北西部方面にも容易に出られる。通交にもめぐまれた高燥の地であってみれば，ここに人間が居住の痕跡を残したのは，当然であったように思われる。

遺跡がはじめて営まれたのは，弥生時代にさかのぼる。弥生時代中期初頭から中葉にかけて，すなわち弥生時代中期前半において居住地になっていたことが，今回の発掘調査で確認された。住居の形態は円形の竪穴住居であり，さらに，生活滓のつまったピット遺構も知られた。竪穴住居址の検出は，台地の基部に近い南に集中し，総数10棟を数えた。土砂の自然流失や後世の土地利用による破壊を被った点を考慮すれば，当時に営まれた住居の総数は10棟にとどまらないであろうが，いっぽう，住居には建てかえがあったことも判明しているので，同時に併存した住居数は割り引いて考えなければなるまい。いずれにせよ，出土遺物が僅少であるところからみて，集落の規模は小さく，12,000m²に及ぶ台地全域を占めるほどの大集落の存在は想定できない。

台地の下を流れる木津川が現代に至るまで水害を与えてやまなかった暴れ川であることは，よく知られているところである。わけても，東から北へ転ずる流路の外縁に位置する精華町域は，その災厄が著しかったと思われる。したがって，弥生時代にこの台地に居を占めた人々が，農耕生産の基盤を木津川の冲積地においていたとすれば，そこからは安定した収獲を期待できなかったにちがいない。また，これを谷水田の開墾によって補っていたとしても，生産基盤の脆弱さはおおえない。対岸にのぞまれる相楽郡山城町平尾涌出宮遺跡が扇状地にあって弥生時代中期全般に及ぶことと比較して，畑ノ前の台地における弥生時代の営みが短期にとどまり，集落の規模が大きくないことについて，このような要因が想像される。

弥生時代に属する遺物には，土器と石器とがある。土器は第II様式から第III様式にあたり，壺・甕を主体とする。器形や文様の点に近江の影響がみとめられることは，派生する問題を考えさせる。すなわち，山城のばあい中期の開始とともに近江の土器の影響を強く受け，その影響がさらに淀川ぞいに摂津にも及ぶことは，すでに指摘されているところであるが，近江にその影響を起動させた要因がそこで問題になってくるわけである。

最近の知見によれば，滋賀県守山市下物町烏丸崎遺跡など近江の湖東地域で中期の玉作遺跡の発見があいついでおり，また淀川南岸にあたる大阪府守口市八雲北遺跡でも中期にあたる大量の玉作関係の遺物が出土したという。弥生時代の玉作遺物の出土は兵庫県尼崎市田能遺跡や滋賀県蒲生郡安土町大中の湖南遺跡などで報じられており，これらで行われた玉生産は，出土

量の寡少さからみて，各集落での需要を大きく越えない程度の規模の小さいものであったと考えられ，注目をうけることが少なかった。ところが，近江の湖東地域での玉生産は，出土遺物量の多さからみて，半専業に近い大規模なものであったようである。土器が影響を与える契機は一様ではなかろうが，玉生産に伴なう製品や技術の移動がはたして契機になりえたのかどうか，検討を要する問題ではある。

石器として，石庖丁・石斧・石鏃・石剣・石小刀などが確認できる。石庖丁は粘板岩製であり，肉眼では，近江の湖西，高島郡に産出するいわゆる高島石であるようにみえる。岩石学上の精細な分析がまたれるところである。主要な分布地として山城が含まれる磨製石剣の素材が，西口陽一氏の予報[13]のように高島石であるとすると，これもまた土器の影響の問題と関連させて考えてみなければなるまい。石鏃・石剣・石小刀はサヌカイト製である。この産出地として二上山と甲山とがひとまず想定されるが，いずれであるかこの点にも岩石学的な検討を要する。なお，石小刀は畿内中心部を代表する打製石器であり，これが山城に位置する本遺跡から出土したことは，畿内中心部との通交上の利便さを考えれば肯ける。また，石斧には和泉砂岩製と緑泥片岩製とがある。これもまた畿内中心部と共通するところとして注目される。

さて，この地にふたたび人間の活動の痕跡が残るのは，古墳時代終末すなわち6世紀後葉ないし7世紀前葉のことである。弥生時代中期以来の永い閑却を経たのち，この時期に至って東の緩斜面に造墓の鍬が入り，横穴式石室の円墳があいついで営まれた。発掘区域のなかで確認できたのは7基であるが，墓域はさらに東方の区域外にも拡がっているにちがいない。横穴式石室を内蔵する群集墳の存在は，隣接する各町域では知られていたが，精華町域で確かめられたのははじめてである。

本町域に所在する古墳のなかで，北方の平谷古墳群に前期末ないし中期初頭の古墳があり，隣接する鞍岡山古墳群に中期前半にあたる古墳のあることが，採集の円筒埴輪によって明らかになってきた。また，全長100mを越す山城南部では最大級の前方後円墳とみなす説があって，真偽に問題を残してきた丸山古墳は，自然丘陵であることが精華町当局の発掘調査によって立証された。そうして，このたび横穴式石室の群集墳が検出されたことによって，判明するところの乏しかった精華町域の古墳の様態に，新たな知見を加えたことになる。

『はじめに』で述べたように，中期には木津町域でさかんに古墳が営造され，後期にはいってまもなくそれが退潮をみせ，かわって，山城町域で横穴式石室の群集墳のさかんな形成がはじまる。そうして飛鳥・奈良時代には，高麗寺などの寺院が創建されて国庁がおかれ，また，近傍の加茂町域に恭仁京が造営される。山城町域がこうして政治の舞台に登場するようになるわけであるが，その動きの端初は古墳時代後期後半の群集墳の形成にさかのぼるようである。精華町域においても，白鳳時代にさかのぼるという下狛廃寺の存在や，今回の発掘で確認した掘立柱建物群のことを考えれば，山城町域と呼応した動きが看取されよう。

古墳の出土品として，銀環・鉄鏃・鉄矛・須恵器がある。このうち鉄矛は畿内における後期後半の群集墳からの出土例としては数少ない遺品である。形態のうえからいえば，身の断面が

三角形を呈するのはこの時期の特徴であり，正倉院に残る鉄矛とはこの点で相違するいっぽう，身と柄とのあいだに関を欠く細形品であり，当代の遺品として多くはないものである。

古墳の築造が絶えて数十年を経て，台地上には掘立柱建物群が造営されたようである。柱穴から時期を判定しうる資料がほとんど出土していないので，建物群の年代を直接に推定するのはむつかしいが，しかし，古墳の周濠から奈良時代の土器や瓦が大量に出土している点，遺跡での出土品には奈良時代のものが圧倒的に多い点，さらに，地割りのうえで建物群と密接に関連づけられる南端の５Ｈ井戸１が，出土品によって，奈良時代前期に掘鑿され同時代末には放棄されたことが知られる点，これらの点からみて，掘立柱建物群が奈良時代に帰属することは動かないであろう。

建物群の造営は，２時期に大別される。古墳の周濠や井戸の掘方から出土した土器から推定して，建物群の最初の創建は奈良時代前期にあたり，中期に大規模な建てかえが行われたとみられる。総柱の建物を倉庫とすると，創建時には，倉庫と居館とからなる比較的規模の小さい建物群であり，古墳もなお周濠の痕をとどめていたようである。ところが，奈良時代中期の建てかえ時には，古墳群を削平し，周濠も埋めて地均を行い，台地のうえに，規模の大きな建物を広域にわたって配置した。その配置は，主屋を中心とし，地割りにそったものである。また，建てかえにあたって倉庫よりも居館の数が多くなっている点が注目される。これまで郡衙として認定されている遺跡の建物群がきわめて整然と統一をとって配列されている状況と比較するならば，その統一を欠く本遺跡の建物群のばあいは，官衙的性格よりも私宅的性格を想定するのがふさわしいように思われる。

こうしてみると，年代の点でもまた配置の点でも，今回検出された掘立柱建物群が，仲村女の出自豪族として文献に残る稲蜂間氏の関係の居館であった可能性は，大いに考えられてよい。

註

1）佐原真・井藤徹『７．遺物』（『池上・四ツ池1970』所収，大阪，昭和45年）。
2）佐原真『第三節　弥生時代』（『彦根市史』上冊所収，彦根，昭和35年）。
3）福井英治『第１節　土器　（１）弥生土器』（『田能遺跡発掘調査報告書』所収，尼崎，昭和58年）。
4）三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ『上箕田』（鈴鹿，昭和36年）。
5）佐原真『流水文』（『日本の文様　水』所収，京都，昭和47年）。
6）岩崎直也『湖東における高地性集落の調査』（『滋賀県文化財だより』№68掲載，大津，昭和57年）。
7）註５，佐原，前掲論文。
8）蜂屋晴美『終末期石器の性格とその社会』（『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』所収，大阪，昭和58年）。
9）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ（奈良，昭和51年），48頁。
10）奈良国立文化財研究所『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』（奈良，昭和59年），13頁。
11）古代学協会『三條西殿跡』（『平安京跡研究調査報告』第７輯，京都，昭和58年），91～94頁。
12）白石太一郎『いわゆる瓦器に関する二・三の問題』（『古代学研究』第54号掲載，大阪，昭和44年）。
13）西口陽一『人・硯・石剣』（『考古学研究』第32巻第４号掲載，岡山，昭和61年）。

後　　論

第１章　弥生時代の畑ノ前遺跡

千喜良　淳

第１節　山城の弥生時代遺跡と畑ノ前遺跡

畑ノ前遺跡は，標高56～58m，木津川との比高差26～28mを測り，北方向に舌状に伸びる鮮新・洪積層台地上に立地する。時期は，出土した土器などから，第II様式～第III様式古段階を中心としており，比較的短期間に営まれた集落と言える。

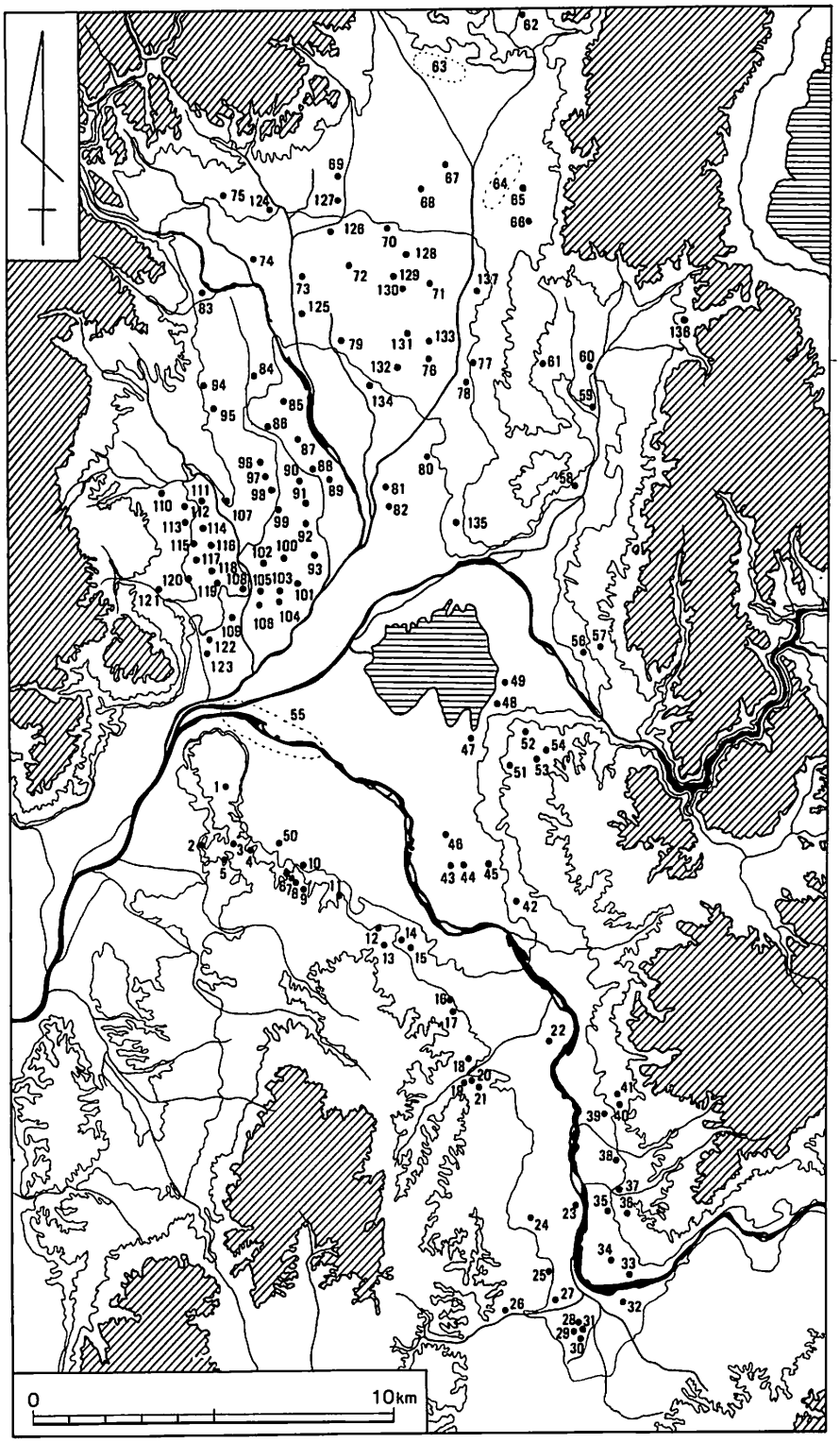
周辺の遺跡（第168図，第16表）に目を転ずると，木津川の対岸には山城町涌出宮遺跡[1]が存在する。第II様式～第IV様式の土器が出土しており，畑ノ前遺跡と同様に第II様式から遺跡がはじまる。しかし，中期後半まで遺跡は存続し，中期前半で廃絶する畑ノ前遺跡に比べ長い期間営まれている。現在のところ，南山城では第II様式からはじまる遺跡は非常に少ない。

山城での弥生前期の遺跡は，向日市・長岡京市で８遺跡[2]，京都市で５遺跡[3]，木津町で１遺跡[4]，精華町で１遺跡[5]確認されている。旧乙訓郡域に多いのが特徴的である。南山城の弥生文化は，交通路として淀川～木津川ルートが用いられたと思われ，乙訓との結びつきが考えられる。しかし一方，木津町燈籠寺遺跡[6]に於いて，一片ながら前期の生駒西麓産の甕形土器の破片が採集されている。精華町百久保地先遺跡[7]でも前期の土器があるという。これらの前期の土器は，地理的なことを考えれば，大和・河内からもたらされた可能性もある。現状では前期の土器の出土例が少ないことから，今後の調査が期待される。

南山城の弥生遺跡は大半が第III様式～第Ｖ様式にかけてのものであり，特に第Ｖ様式の遺跡が多い。その中には，八幡市幣原遺跡[8]，田辺町天神山遺跡[9]・飯岡遺跡[10]，山城町椿井遺跡[11]・城山遺跡[12]などの高地性集落が存在する。木津川流域の弥生遺跡は洪積台地や洪積段丘に立地するものが多く[13]，高地性集落かどうか判断に迷うものもある。これらの遺跡は，都出比呂志氏の「Ｂタイプ」[14]，寺沢薫氏の「第②類型」[15]，石野博信氏の「丘陵性」[16]に相当する。畑ノ前遺跡もこれらの分類に含まれる。しかし，これらの集落については寺沢氏は「中期以降卓越してくる分村」として軍事性を否定し，石野氏との見解の相違がある。これについて石野氏は「個々の遺跡について」は「遺構・遺物の組成を検討」する必要性を説く。高地性集落の定義が論者によって一定でない現在，このような集落をどのように位置付けるかが問題となろう。

第２節　畑ノ前遺跡の遺構

当遺跡の遺構を概観してみると，約12,000m²の台地上に竪穴住居址，大小の土壙などが検出された。竪穴住居址は全部で10棟確認され，Ｅ区とＧ区に集中する。このうち竪穴住居址５は炉が三つ存在することから，少なくとも２回の建て直しが行われたと考えられる。住居址には



第168図　山城の弥生時代遺跡分布図(縮尺：1/200,000)　遺跡名は第16表参照

直径8m前後のもの(竪穴住居址1・2)と6m前後のもの(竪穴住居址3・5)とが存在する。竪穴住居址の中で土器が出土したものは，竪穴住居址1(第III様式古段階)・竪穴住居址2・竪穴住居址3(第II様式新段階)・竪穴住居址6(第II様式)の4例のみである。遺物による竪穴住居

第16表　山城の弥生時代遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	備考	番号	遺跡名	時期	備考
1	式部谷		突線紐III式銅鐸1	36	ムナガイ		
2	南楠葉東方			37	城山	V	
3	中ノ山	IV，V		38	湧出宮	II～IV	
4	南山	V		39	渋川東		
5	幣原	～V		40	鳥休	III，V	
6	金右衛門垣内	II～IV		41	南開	V	
7	井の元南	III	(美濃山)金右衛門垣内と同一の可能性あり	42	森山	IV，V	
8	本郷	V		43	塚本	V	
9	美濃山廃寺下層	V		44	塚本東	V	塚本と同一の可能性あり
10	新田	V		45	芝ケ原	V	
11	向山	～V		46	里ノ西		
12	城山			47	伊勢田神社		
13	虚谷蔵谷			48	神楽田	V	
14	狼谷	III～V	(小谷)	49	巨椋神社東方	III～	
15	薪	III，IV		50	狐谷	～V	
16	田辺	V	方形台状墓	51	一里山		
17	興戸	IV，V		52	石塚		
18	天神山	IV，V		53	神明		
19	口駒ケ谷			54	野神		
20	南山	V		55	木津川河床	V	
21	西羅			56	西隼上り		
22	飯岡	V		57	羽戸山	V	
23	百久保地先	I		58	小栗栖	V	
24	祝園			59	中臣	II，～V	
25	畑の前	II～III		60	佐義町		
26	乾谷			61	旭山古墳群	III～	
27	曽根山	V		62	岩倉忠在地		
28	土師山	III，IV	方形台状墓	63	植物園北		
29	大畠	III，IV		64	京大構内遺跡群	I，II，IV	
30	相楽山		扁平紐式銅鐸1	65	吉田山		
31	音如ケ谷瓦窯跡群	III		66	岡崎	II，IV，V	尊勝寺遺跡を含む
32	燈籠寺	I，V		67	常盤井殿町		
33	上狛東			68	内膳町	I	
34	野田芝			69	北野		
35	椿井	V		70	二条城北		

番号	遺　跡　名	時期	備　　考	番号	遺　跡　名	時期	備　　考
71	烏丸綾小路	II～V	長刀鉾町遺跡を含む	105	古市森本	III，IV	
72	壬生			106	太田	V	
73	山ノ内			107	北山	II～V	
74	西野町			108	神足	II～V	
75	梅ケ畑		外縁付紐式銅鐸4（I式2，II式2）	109	南栗ケ塚	II，V	
76	烏丸町			110	石見	V	
77	南日吉町	V		111	上里	I	
78	月輪			112	西ノ口	IV	
79	衣田			113	井ノ内		
80	深草	II，III		114	今里	III～V	
81	烏羽	III，IV		115	藤ノ木		
82	下鳥羽	I～III		116	陶器町		
83	松室			117	東代	V	
84	下津林	V		118	開田城ノ内	V	
85	上久世	III～V		119	開田	I	
86	修理式	V		120	天神山		
87	中久世	I～V		121	下海印寺	III，V	
88	東土川西	V		122	硲	II～V	
89	東土川	IV		123	宮脇	V	
90	石田	IV		124	常盤東ノ町	III～V	
91	鶏冠井	I～III	銅鐸鋳型（菱環鈕式？）	125	西院双月町	II～V	
92	鶏冠井清水	II		126	西ノ京	V	
93	羽束師	V		127	大将軍小学校内	V	
94	樫原	V		128	上巴町	III	
95	中海道	V		129	壬生車庫跡	IV	
96	殿長	V		130	松原中学校内		
97	岸ノ下	V		131	大工町		
98	森本	I～V	人面土器，銅鏃	132	東寺町	V	
99	沢ノ西	II～V		133	東塩小路町		
100	鴨田	V		134	唐橋	II，III	
101	雲宮	I	管玉	135	長岡越中		
102	馬場	II		136	芝町		
103	麦世	I～V		137	轆轤町	V	
104	下ハノ坪	V					

址の変遷は追えない。しかし，遺跡全体での出土土器により，当遺跡は第II様式～第III様式古段階の比較的短期間に営まれたことが判明している。竪穴住居址の切り合い関係や出土土器から考えると，一時期に営まれた住居数は第II様式で最大限5棟，第III様式で最大限3棟と考えられる。この竪穴住居址のまとまりは，近藤義郎氏の言う「単位集団」[17]に相当する。また，高倉洋彰氏は，5棟前後で構成される集団を「家族集団」と呼び，「日常生活を共同」し「家族的機能を果た」すものとして捉える。西日本では5棟前後の集落が数例存在し一般的であるのに対し，東日本は7棟前後が多いと言う。ここに高倉氏は家族集団の機能に応じた構成人口による限定

性を認める[18]。当遺跡は血縁的紐帯による家族的な集団と言えようか。

その他の遺構としては，E区に2基の大きな不明遺構が存在する。竪穴住居址と考えるには小さく不整形である。内部には小さなピットが多数検出された。機能は不明である。遺跡の周辺部や丘陵東側斜面には，竪穴住居址群を取り囲むように土壙が存在する。丘陵北部では弥生時代と思われる小さな土壙が多数確認されている。

当遺跡で特徴的なことは，集落を区画するための濠が検出されていないことである。低地の集落は環濠を巡らすことが一般的であるのに対し，台地上の集落には台地を横切る濠を掘削し平坦部を区画するものがある。当遺跡では丘陵南部にこのような濠の存在が予想されたが，精査を行った結果，検出には至らなかった。したがって，当遺跡は濠を持たない集落である。濠の消長は立地の違いや時期によって異なると考えられ，今後，立地や時期による濠の変遷を明らかにする必要がある。

第3節　畑ノ前遺跡出土の弥生土器

出土した弥生土器の時期は，大型鉢形土器，中実の脚台などが出土し，一部に古い様相を残すものがあることより上限は第II様式に，下限は凹線文を持つ土器が一片も出土していないことより第III様式古段階に比定される。

弥生土器で特徴的なことを挙げると，壺形土器で口縁部外面下端に瘤状突起を持つもの(第44図5)がある。類例は守山市服部遺跡で数例[19]，長岡京市古市森本遺跡で1例[20]，八尾市亀井遺跡で1例[21]出土している。瘤状突起を内面にもつものは近江・山城・東摂津に分布し，近江系と考えられる。本例も近江系土器の影響を受けたものであろう。壺形土器は表面に粗いハケを残すもの(第44図5，第47図3，第49図1・2，第52図14，第54図12)が多い。第II様式～第III様式にかけてヘラミガキを行わずハケを残す例は，やはり近江・山城・東摂津に見られる。しかし，東摂津では比較的細かいハケを施し，近

第17表　壺形土器の口縁部に於ける櫛描文施文頻度表(総数28個体)

口縁部内面 / 口縁端部外面	扇形文	波状文	刻目文	列点文	綾杉文	円形浮文	瘤状突起	無文	個体数	%
扇形文										
波状文										
刻目文	3	1						6	10	35.7
列点文										
綾杉文								1	1	3.8
円形浮文								1	1	3.8
瘤状突起										
無文	※5						※3	10	18	64.3
個体数	8	1					3	18		
%	28.6	3.8					10.7	64.3		

個体数の合計は表では30となるが，口縁部内面に2種類の文様をもつものが2個体あるため，総数は28個体である。※は数値が重なるもの。

江・山城では粗いハケを施すという違いがある。当遺跡出土土器は近江・山城的な土器と言える。

壺形土器の胴部及び頸部に於ける櫛描文施文頻度を見てみると，胴部及び頸部では直線文が65.4%と高く，波状文は17.3%と低い(第18表)。他の文様はそれぞれ3%前後に留まる。他の遺跡と比較してみると，第II様式を中心とし第III・IV様式が混入する森本遺跡では直線文が86.5%，波状文が38.5%となっている。第II様式の唐古遺跡では直線文は97.7%，波状文は9.9%と波状文の占める割合は低い[22]。また，第II様式～第III様式古段階を中心とする鶏冠井遺跡では直線文は97.5%，波状文は13.5%と唐古遺跡と同様の傾向を示す[23]。畑ノ前遺跡では直線文の占める割合はやや低い。しかし，これら直線文が多用される傾向は畑ノ前遺跡についても指摘でき，この時期山城と大和では土器に於いて共通性がみられる。吉岡博之氏は第II様式に於いて山城と大和には隔りがなかったとする[24]。しかし，森本遺跡に比べ鶏冠井遺跡は波状文の施文率が低く大和的であり，山城でも遺跡によって土器様相が若干異なる。この点について，國下多美樹氏は「この遺跡間の隔差は山城地方が大和とのつながりを恒常的にもちながら小地域性をもっていたことの反映」[25]として捉えている。畑ノ前遺跡に於いても波状文の施文頻度は低い。この背景として地理的に大和に隣接することや，後に述べるが緑泥片岩製石庖丁の出土などから見て大和との交流による影響も考えられる。

広口壺形土器の口縁端部及び内面に施される文様の施文頻度を見ると(第17表)，端部・内面とも無文のものがそれぞれ64.3%と多い。端部では刻目文が35.7%，斜格子文・円形浮文が3.8%を占める。内面では扇形文が28.6%，瘤状突起が10.7%，波状文が3.8%を占め，扇形文が多く施される。第III様式～第IV様式(第II様式が混じる)にかけての今里遺跡[26]でも口縁部内面の扇形文の施文率は18.3%と一番高く，畑ノ前遺跡と同様の傾向を示している。第II様式～第III様式の勝部遺跡[27]では口縁部内面には櫛描列点文が18%，波状文が10%，扇形文が4%を占め，先の2遺跡とは様相を異にする。第II様式の唐古遺跡では波状文が4%，扇形文が3%と低い値を示す。口縁部内面の扇形文の施文頻度の高さは山城に於ける特徴と言えよう。

甕形土器ではいわゆる「大和型」[28]甕の出土が目立つ。近年，「大和型」甕の伝統を残す甕が第III様式以降まで存在することが言われている[29]。しかし，第II様式の「大和型」甕は「縦長の倒鐘形」を呈し，口縁端部は「下方に巻き込む」ものが多いのに対し，第III様式以降のものは「体部の形態が球形化」し，口縁端部は「丸

第18表　壺形土器の頸部・胴部に於ける櫛描文施文頻度表

遺跡名	畑ノ前遺跡		森本遺跡		唐古遺跡		鶏冠井遺跡	
時期	II～III(古)		II(III，IV混)		II		II～III(古)	
種類	個数	%	個数	%	個数	%	個数	%
直線文	53	65.4	135	86.5	168	97.7	195	97.5
波状文	14	17.3	60	38.5	17	9.9	27	13.5
簾状文	1	1.2	4	2.6	0	0	0	0
斜格子文	3	3.7	0	0	0	0	0	0
櫛目文	1	1.2	4	2.6	0	0	0	0
扇形文	3	3.7	3	1.9	7	4.1	0	0
流水文	2	2.4	2	1.3	8	4.7	5	2.5
対象土器片	81(個体)		156		172		200	

く収め」たり「面取りを行」うものが多いという[30]，すなわち，第III様式以降のものが形態変化を遂げていることが分かる。鶏冠井遺跡でも第III様式に伴うものは同様の傾向を示す[31]。当遺跡に於いて第III様式に併行する可能性のあるものは第45図３，第50図12である。これらは先に述べた特徴をもつ。その他の「大和型」甕は第II様式に伴うと考えられる。

出土した土器の中には突帯をもつもの(第45図14，第47図１，第53図18)がある。これらは摂津の影響を受けた土器と考えられる。摂津からの搬入品としては第55図３・４・10・11がある。摂津との交流を示すものと思われる。

底部では木葉痕を残すものがある。底部全体の中で占める割合は33.8％(摩滅したものは含まない)である。鶏冠井遺跡では27％を占めるという[32]。布目痕は確認できなかった。

当遺跡出土土器の胎土は色調，含まれる砂粒によって数種類に区分される。その中で大半を占めるのは黄灰～橙色を呈し，黒雲母・石英・チャートを含むものである。これが在地の土器の胎土と思われる。その他には近江から搬入されたと考えられるものや生駒西麓産の土器も存在する。確実に生駒西麓産と断定できる土器は壺形土器(第51図８)１点，甕形土器(未実測)１点がある。他に判断に迷うものが数点ある。山城の他の遺跡では鶏冠井遺跡(第II様式古段階)で鉢形土器が１点，京都市中久世遺跡(第III様式古段階)で壺形土器が１点，長岡京市神足遺跡(第III様式古段階)で細頸壺形土器が１点出土している。その占める割合は非常に低い。当遺跡でも同様の傾向を示す。山城では生駒西麓産の土器は，前期には雲宮遺跡・古市森本遺跡に於いて壺形土器などの貯蔵形態と甕形土器などの煮沸形態の双方が搬入されているのに対し，中期になると貯蔵形態のみになると言う[33]。当遺跡では若干様相を異にしている。

第４節　畑ノ前遺跡出土の近江系土器

当遺跡出土土器の中で特に目立つのが近江系土器である。内訳は壺形土器７点，甕形土器29点で，全体で約１～２％を占める。他の器種は出土していない。

出土した近江系甕形土器は口縁部の形態により八つに分類される(第168図)。

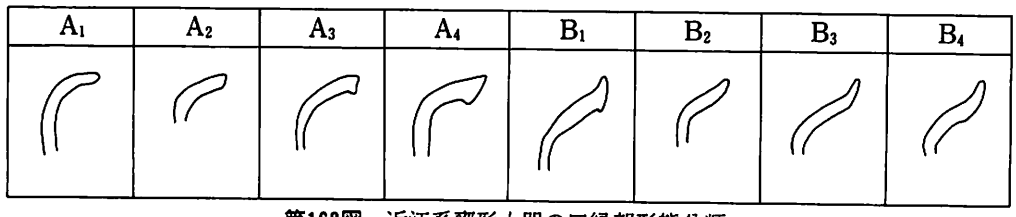
A類……いわゆる「大和型」に近い形態をとるもの。

A_1類…端部を丸くおさめるもの(第48図11)。

A_2類…端部に面を持つもの(第54図１)。

A_3類…端部が若干下方に拡張するもの(第49図６)。

A_4類…端部に斜めの面を持ち，下方に拡張するもの(第53図16)。



第169図　近江系甕形土器の口縁部形態分類

B類…いわゆる「近江型」[34]の形態をとるもの。

B_1類…厚い口縁部が屈曲して外反し，端部は上下に拡張して受口状を呈するもの(第54図7)。

B_2類…口縁部は頸部よりなだらかに続き，明瞭な受口状は呈さないもの(第52図7)。

B_3類…口縁部はゆるやかに外反し，端部は短かく屈曲して受口状を呈するもの(第51図18)。

B_4類…口縁部はゆるやかに外反し，端部は内傾して上方に立ち上がり受口状を呈するもの(第51図19)。

B類には山形口縁と受口状口縁を呈するものが含まれるため，前者をBⅠ類，後者をBⅡ類とする。

各類ごとに口縁端部と内面に施される文様をみてみる。内面には総てヨコハケを施す。A類では内面に波状文を施すものがなく，B類では多い。鶏冠井遺跡ではA類で波状文を施すものが多く，様相を異にする。波状文を施す場合は，総て一旦ヨコハケを施してから同一原体により施文される。中には第54図7のようにヨコハケを施した後，細かい波状文を施すものがある。A類では，口縁端部に施される押圧文は破片のためか，一片も確認できなかった。

壺形土器も口縁部の形態により三つに分類される。

A類…広口壺で口縁部内面・外面に瘤状突起を持つもの(第44図5，第45図1，第54図13)。

B類…袋状口縁を呈するもの(第50図4，第46図13)。

C類…受口状口縁を呈するもの(第47図21，第51図1，第52図11)。

各類ごとに施される文様をみると，A類では内面に扇形文を施すものがある。B類には第50図4のように伊勢湾的な文様[35]を施す例もある。C類は内外面とも粗いハケを残すものが多い。C類は滋賀県竜王町堤ケ谷遺跡[36]でも出土している。

出土した近江系土器の胎土は3種類に分けられる。

Ⅰ類……表面は黄灰～橙色，断面は灰色を呈す。黒雲母・石英・チャート等を若干多く含むもの。

Ⅱ類……表面は乳灰色，断面は灰～灰黒色を呈す。黒雲母・石英・チャート等を含むもの。

Ⅲ類……表面は灰色，断面は灰～灰黒色を呈す。黒雲母・石英・チャート等を含むもの。

近江産と思われる土器の胎土は「乳灰色～茶灰色を呈」[37]することから，Ⅱ・Ⅲ類は近江からの搬入品である可能性が高い。しかし，Ⅰ類については色調や胎土中に含まれる鉱物などに於いても在地産との区別が難しく，近江産とするには躊躇される。このため，本論では近江産と近江系を区別することなく，一括して近江系として扱う。

出土した近江系土器は第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階に併行するものである。包含層からの出土が多いために，各器種の細かな時期は明らかにしえない。そこで他の遺跡に於ける近江系土器の動向を見てみる。近江系土器については國下多美樹氏の論考に詳しい[38]。それによると各器種とも乙訓を中心に出土していることが分かる。乙訓については國下氏の論考にゆずり，ここでは主に他地域について，各器種ごとに見てゆくことにする。甕A類は京都市長刀鉾町遺跡[39]・深草遺跡[40]，高槻市安満遺跡[41]，山城町涌出宮遺跡でも出土している。甕A_4類と思われるものが

田原本町唐古遺跡[42]からも出土している。その分布は近江～山城・東摂津・大和に広がる。しかし，鶏冠井遺跡・長刀鉾町遺跡・深草遺跡からの出土例は口縁部内面に波状文を施すものが大半であるのに対し，畑ノ前遺跡では波状文が施されていない。米原町入江西遺跡では波状文を施すものが多いという[43]。現状では資料数が限られることより断定はできないが，甕A類に於ける口縁部内面の波状文は近江～北山城にかけて多用される傾向が窮える。甕BⅠ類は乙訓をはじめ涌出宮遺跡・畑ノ前遺跡で出土しているが，現在のところ東摂津では出土例がない。近江では守山市寺中遺跡・服部遺跡・小津浜遺跡[44]，竜王町堤ケ谷遺跡，米原町入江西遺跡，大津市南滋賀遺跡[45]に出土例がある。甕BⅠ類は近江～山城にかけて分布する。甕BⅡ類は長刀鉾町遺跡・深草遺跡・涌出宮遺跡・畑ノ前遺跡・尼崎市田能遺跡[46]で出土例がある。近江・山城～西摂津に分布する。それぞれの時期は國下氏によると甕A類は第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階に，甕BⅠ類はほぼ第Ⅱ様式に，甕BⅡ類は第Ⅲ様式に出現し第Ⅴ様式まで続くとされている。しかし，甕BⅠ類は長刀鉾町遺跡・中臣遺跡・深草遺跡で第Ⅱ様式に共伴するものの，堤ケ谷遺跡では第Ⅲ様式に，津市納所遺跡[47]では第Ⅲ様式～第Ⅳ様式まで残るという。甕BⅠ類は山城と近江～東海ではその消長に時期差が存在する可能性がある。近江に於ける中期の土器の土器編年が定かでないこともあって，今後，山城・近江・東海の土器併行関係に注意しながら各地域での甕BⅠ類の消長を見てゆく必要がある。甕BⅡ類については従来は第Ⅱ様式に伴うものとされてきたが，近年，福岡澄男氏によって第Ⅲ～Ⅳ様式に伴うことが言われ[48]，井藤暁子氏は第Ⅲ様式に出現するとされた[49]。國下氏はその出現は第Ⅲ様式としながらも今後検討の余地が充分あるとしている。そこで各遺跡に於ける共伴関係をみると，田能遺跡1－2土器溜りで第Ⅱ様式新段階の土器と共に出土し，深草遺跡でも第Ⅱ様式の土器に伴っている。したがって，ここでは甕BⅡ類は第Ⅱ様式新段階まで遡り得る可能性を考えておきたい。

近江系甕の祖型と思われるものが八尾市美園遺跡[50]で出土している。それによると口縁端部と胴部に篦描沈線文が巡り，前期に比定される。現在のところ近江系甕の祖型は近江でも出土例がなく注意すべき資料であろう。

山形口縁甕の祖型については，縄文晩期滋賀里Ⅲ式の波状口縁に求める意見[51]がある。しかし，滋賀里Ⅲ式と山形口縁が成立すると思われる第Ⅱ様式との間には時期差がありすぎ，この説には同意できない。そこで縄文晩期の中での波状口縁の消長をみてみると，一般的に突帯文期になると波状口縁は顕著ではなくなると言われてきた。しかし，近年，彦根市福満遺跡[52]や白浜町瀬戸遺跡[53]に於いて突帯文期の波状口縁をもつ土器が出土し，姫路市丁・柳ケ瀬遺跡[54]では弥生前期の削り出し突帯を持つ波状口縁土器が出土している。畿内とその周辺部に於いて突帯文期から弥生前期にかけて波状口縁の伝統が残る可能性がある。

また，畿内以外の地域を見てみると，波状口縁を持つ土器は北陸地方の柴山出村式[55]（第Ⅰ様式併行），東海地方の大地式[56]（第Ⅱ様式併行）の壺形土器，条痕文土器の甕形土器の中に存在する。特に条痕文土器では水神平Ⅱ式に波状口縁を持ち，内面に波状文を施す甕形土器があるという。水神平Ⅱ式は西志賀式に併行するとされており，第Ⅰ様式新段階併行と考えてよい[57]。水

神平II式には壺形土器の頸部に貝殻条痕による波状文を施すものがあり，口縁部内面に波状文を施す甕形土器もあるという[58]。これらの土器は前期に比定されるために櫛描文の成立にもかかわる問題となってくる[59]。条痕文土器のその他の器種を見ると，受口状口縁や袋状口縁の壺形土器が存在することより，近江や東海の受口状口縁・袋状口縁の壺形土器の成立に影響を与えた可能性がある[60]。納所遺跡では山形口縁甕に外面に粗いハケを残す受口状口縁壺（C類）が伴い，堤ケ谷遺跡でも山形口縁甕にこの種の壺形土器が共伴している。当遺跡に於いても第47図21・52図11などは甕BI類に伴うことも考えられる。山形口縁ばかりでなく，他の器種についても条痕文土器との関係を検討する必要があろう。

山形口縁甕の祖型については現状では定かではないが，ここでは近江に於ける突帯文土器の伝統と条痕文土器など東からの影響も考えておきたい。

第5節　畑ノ前遺跡出土の石器

畑ノ前遺跡からは弥生時代の石器が出土した。ここでは個々の遺物についての分析を行い，総括的なことを述べる。

石鏃はその器種ごとに割合をみると，凹基式4.5%，平基式27.3%，円基式4.5%，尖基式54.6%，有茎式9.1%であり，凸基無茎式（円基式，尖基式）が大半を占める（第19表）。石鏃は従来，中期になると凸基式が増加し大形化すると言われてきた[61]。そこで他の遺跡をみると，田能遺跡[62]でも第III様式古段階では凸基無茎式（円基式，尖基式）は64.0%と大半を占め，畑ノ前遺跡と同様の傾向を示す。しかし，田能遺跡では第III様式新段階になると，凸基有茎式が33.3%と増加する。さらに，三田市奈カリ与遺跡[63]では第III様式新段階～第IV様式にかけて凸基有茎式が62.9%と主体的地位を占める。これらのことは畿内に於いては中期前半と後半とでは，石鏃の主体が凸基無茎式から凸基有茎式に変化したことを示している。

尖頭器は2点と出土数は少ないが，この傾向は奈カリ与遺跡に於いてもみられ，武器・狩猟具の中で主体的な利器ではなかったと考えられている。

石錐については，蜂屋晴美氏の石庖丁に対する割合の研究がある[64]。畑ノ前遺跡の状況を見ると，石庖丁（大型石庖丁を含み，未製品は含まず）1個に対する石錐の割合は0.50と畿内の遺跡の中で標準的な値を示している。

石庖丁については，粘板岩製と緑泥片岩製が出土し，その割合は

第19表　石鏃組成表

遺跡名	畑ノ前遺跡		田能遺跡		田能遺跡		奈カリ与遺跡	
時期	II～III（古）		II～III古		III（新）		III（新）～IV	
種類	個数	%	個数	%	個数	%	個数	%
凹基式	1	4.5	2	8.0	5	27.8	10	16.1
平基式	6	27.3	3	12.0	1	5.6	8	12.9
円基式	1	4.5	9	36.0	3	16.7	2	3.2
尖基式	12	54.6	7	28.0	3	16.7	2	3.2
有茎式	2	9.1	4	16.0	6	33.3	39	62.9

奈カリ与遺跡は不明が1個あるので100%にはならない。

第20表　石庖丁用石材の割合表

石　材	個数	%
粘板岩（在地産）	1	5.9
粘板岩（高島産）	9	52.9
緑泥片岩	7	41.2

未製品を含まない

前者が58.8%，後者が41.2%を占める(第20表)。製品のみでなく未製品・剝片9点が出土し，当遺跡に於いて石庖丁を製作していたことが分かる。しかし，これは粘板岩製に限られ，緑泥片岩製の未製品・剝片は出土していない。周辺の遺跡をみると，木津川の対岸の涌出宮遺跡では出土した石庖丁のうち総てが粘板岩製であるという[65]。大和に於いては平等防・岩室遺跡では総て緑泥片岩製である[66]。当遺跡が粘板岩製石庖丁と緑泥片岩製石庖丁の分布の境に位置すると考えられる。

当遺跡で出土した粘板岩には4種類ある(第6～8表参照)。

①黄緑色を呈するもの。

②黒色及び灰色を呈するもの。

③頁岩質で灰色を呈するもの。

④ホルンフェルス質で灰色を呈するもの。

①②はその色調・材質より近江の高島産と考えられる。④については当遺跡内に於いて同質の石材が出土していることより，木津川流域で普遍的に採集できると考えられる。③は産地は確定できない。高島産の粘板岩については近年，安満遺跡に於いても石庖丁の大半がそうであることが確認された[67]。これまで粘板岩は畿内各地の丹波層群中から採集できるものを使用したと考えられてきたが，粘板岩製石庖丁に高島産粘板岩が多く用いられている可能性も考えられる。畑ノ前遺跡に於いても高島産と思われる粘板岩は石庖丁の全製品の中で52.9%と半分以上を占める。粘板岩製石庖丁は淀川・木津川水系を中心に分布する[68]ことより，今後，各遺跡での石材鑑定による産地同定が急務である。当遺跡に於いては石庖丁には木津川流域で採集できる粘板岩と近江の高島産の粘板岩，および紀ノ川流域の緑泥片岩の3種類の石材が用いられたと考えられる。

石斧では太型蛤刃石斧の7点のうち4点までが和泉砂岩を素材としている。他には流紋岩質凝灰岩・白雲母片岩・泥岩などの石材を用いる。素材によって形態に若干の違いがみられる。和泉砂岩製のものは断面が楕円形を呈し，他のものに比べ調整加工も丁寧で規格性が高いといえる。他のものは断面も方形に近く，和泉砂岩製に比べやや扁平で，調整も粗いものが多い。全体の形状も和泉砂岩製は最大径が全体の中央部にあるのに対し，泥岩・白雲母片岩製は長方形，流紋岩質凝灰岩製はやや乳棒状を呈する。和泉砂岩製以外のものは重量・大きさでは和泉砂岩製のものと大差はないが，形態的に見てこれらは縄文的な要素を多分に残すものと考えられる[69]。白雲母片岩の原石が3B1区から出土していることから，この石材が周辺で採集可能であったことを窮わせる。当遺跡内では和泉砂岩製の石斧を使用すると共に，それを補完する形で縄文的な伝統をもった石斧も製作したことが考えられる。この場合，和泉砂岩製石斧の製作地も問題となろう。石斧については今後，他の遺跡の状況についても検討してゆく必要がある。

出土した石器の組成をみると，狩猟・戦闘用具である石鏃・尖頭器・打製石剣などが約3割を占める。農耕用具である石庖丁は約2割を占める。加工用具である磨製石斧も数点出土している。器種構成からみると石庖丁未製品が出土しているが，砥石が検出されていない。また，

山城に普遍的に見られる磨製石鏃や磨製石剣が出土していないのが特徴的である。

次に第II様式～第III様式古段階に於ける田能遺跡[70]と石器組成を比較してみる(第21表)。田能遺跡でも石鏃・尖頭器・打製石剣は約三割を占めるが，石鏃は畑ノ前遺跡より若干少ない。磨製石庖丁は畑ノ前遺跡では18.7%を占めるが，田能遺跡では24.7%と高い。敲石は畑ノ前遺跡では3.1%を占めるものの，田能遺跡では0.7%と低い。同様に，乙訓を見ると洪積台地に立地する神足遺跡では石庖丁が17.3%を占め，冲積平野に立地する鶏冠井遺跡では石庖丁が30.6%を占める[71]。石庖丁は冲積平野に営まれる集落に多い傾向が窮える。太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧は畑ノ前遺跡では7.1：1.0：1.0，田能遺跡では8.2：1.4：0.7と同様の傾向を示す。

同時期の畑ノ前遺跡と田能遺跡の石器組成を比較すると，全体的に目立った違いは見られないが，個々の遺物には若干の差違が認められた。今後は，弥生中期に於ける畿内の各遺跡の石器組成を，地域や立地に注意しながら比較検討してゆくことが必要である。

第21表　石器組成表

遺跡名	畑ノ前遺跡		田能遺跡	
時　期	II～III(古)		II～III(古)	
種　類	個　数	%	個　数	%
打製石鏃	22	24.2	25	17.1
磨製石鏃	0	0	0	0
尖頭器	2	2.2	3	2.1
打製石剣	9	9.9	11	7.5
磨製石剣	0	0	2	1.4
石錐	9	9.9	7	4.8
石小刀	1	1.1	0	0
スクレイパー	14	15.4	27	18.4
楔形石器	2	2.2	0	0
磨製石庖丁	17	18.7	36	24.7
大型石庖丁	1	1.1	3	2.1
太型蛤刃石斧	7	7.7	12	8.2
柱状片刃石斧	1	1.1	2	1.4
乳棒状石斧	0	0	1	0.7
扁平片刃石斧	1	1.1	2	1.4
環状石斧	1	1.1	0	0
敲石	3	3.3	1	0.7
台石	1	1.1	0	0
砥石	0	0	13	8.9
石錘	0	0	1	0.7
合計	91	100.1	146	100.1

第6節　畑ノ前遺跡の性格

畑ノ前遺跡は今回の調査によって，一応集落の全体像が明らかになったと言える。ここで今回の調査の成果をまとめてみる。

1．当遺跡は標高56～58m，比高差26～28mの鮮新・洪積層台地上に立地し，広義の高地性集落に含まれる。

2．出土した土器から集落の存続期間は第II様式～第III様式古段階である。

3．住居址は全部で10棟検出され，一時期に営まれたのは最大限5棟～3棟と考えられる。

4．集落を区画する濠は検出できなかった。

5．出土した土器の文様施文頻度は山城・大和と同様の傾向を示す。

6．他地域から搬入された土器として近江系・伊勢湾系・摂津系・生駒西麓産がある。特に近江系が目立つのが特徴的である。

7．石庖丁の大半は高島産の粘板岩を素材としていた。緑泥片岩製も見られた。

8．太型蛤刃石斧では石材によって形態の違いが見られた。

9．出土した石器の組成は同時期の田能遺跡などと同様の傾向を示す。

以上の点により，畑ノ前遺跡の性格について述べてみたい。畑ノ前遺跡の存続期間は第II様式〜第III様式古段階と短いが，出土した土器などから摂津・河内などの畿内ばかりでなく近江や伊勢湾などとの交流が考えられる。特に近江とは近江系の土器が多量に出土していることや，石庖丁に高島産の粘板岩が使われていることより，その結びつきは恒常的であったと考えられる。また，緑泥片岩製の石庖丁，和泉砂岩製の太型蛤刃石斧が出土していることから河内・大和との結びつきも強かったのであろう。畑ノ前遺跡は各地域との交流の上に成り立っていたのである。

近江系土器の畿内での分布状況は先に見てきたが，その移動の原因として何が考えられるであろうか。興味深いのは，この近江系土器の分布と畿内に於ける粘板岩製石庖丁の分布が似通っていることである。それによると，両者は淀川・木津川水系を中心に分布していることがわかる。畿内に於ける粘板岩製石庖丁に近江の高島産粘板岩を用いるものがあることより，近江系土器の搬入の背景の一つとして，高島産の粘板岩との関係も考えてはどうであろうか。この問題については今後，各遺跡ごとに検討してゆく必要があろう。

畑ノ前遺跡は広義の高地性集落に含まれる。しかし，環濠もなく，石器組成も同時期の平野部の集落と同様の傾向を示し，戦闘用具もそれほど割合は高くないことからあまり防禦的であるとは言えない。このような集落をはたして高地性集落に含めてよいものかは疑問である。畑ノ前遺跡は軍事的な色彩のある高地性集落ではなく，中期に於ける生産力の増加に伴う分村的な集落と考えておきたい。

畑ノ前遺跡の人々は洪積台地上に5棟〜3棟の竪穴住居に住み，それは家族的な集団であったと思われる。生業は木津川がつくる氾濫原や台地下の谷水田などで水稲耕作を行っていたのであろう。畑ノ前遺跡の廃絶の原因は定かではない。しかし，中期後半になると土器には凹線文が施されその様相を変化させ，石鏃でも有茎式が増加し，高地性集落も多く出現しはじめ，弥生社会の変革が見られる。畑ノ前遺跡はこのような変革に対応しきれず消滅したのであろう。

周辺の遺跡の中で第III・IV様式まで存続するものは涌出宮遺跡・木津町大畠遺跡[72]のみで，この地域に於ける遺跡の変遷は定かではない。南山城の弥生文化はまだまだ不明確なことが多く，今後の調査が期待される。今回の畑ノ前遺跡の調査成果が南山城の弥生文化解明の一助となれば幸いである。

最後に小論を纒めるにあたっては，奈良国立文化財研究所佐原真氏，愛媛大学下條信行氏，大阪府教育委員会西口陽一氏，四條畷市教育委員会野島稔氏，高槻市教育委員会森田克行氏・大船考弘氏・宮崎康雄氏，長岡京市理蔵文化財センター岩崎誠氏，寝屋川市教育委員会塩山則之氏，向日市教育委員会秋山浩三氏・國下多美樹氏，守山市教育委員会山崎秀二氏，京都府立山城郷土資料館高橋美久二氏・橋本清一氏，精華町教育委員会村川俊明氏，平安博物館上田建

夫氏，関西大学大学院大下明氏などの諸先生・諸先輩方より，多大なる御配慮，御助言を頂いた。記して感謝の意を表します。

〔追記〕

本報告では畑ノ前遺跡出土の粘板岩を，高島産と在地産に分類した。しかし，分類する過程でどちらに含めてよいか判断に迷うものも存在した。今回は，実際に高島で採集した粘板岩と出土したものを比較し，類似するものを高島産とした。また，木津川流域で礫として採集できるホルンフェルス質のものを在地産とした。しかし，畿内各地の丹波層群中からも高島産に類似する粘板岩が出土すると言われる。今後は，高島産と畿内各地で産する粘板岩について，肉眼観察ばかりでなく，科学的分析なども行い，その違いを明らかにしてゆく必要があろう。

近江系土器については，従来，拠点的集落を中心に搬入されていると考えられてきた[73]。しかし，今回，畑ノ前遺跡のような分村的集落から多量に出土したことは，近江系土器の搬入状況を考えるうえで問題となろう。今後の各地での調査が期待される。

註

1)高橋美久二・林和広『7．涌出宮遺跡発掘調査概要』(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1969所収，京都，昭和44年)。
2)岩崎誠『桂川右岸の弥生遺跡』(『長岡京』第29号掲載，向日，昭和58年)。
3)京都市文化観光局『京都市遺跡地図台帳』(京都，昭和61年)。
4)木津町史編纂委員会『木津町史』史料篇Ⅰ(京都府木津町，昭和59年)。
5)精華町教育委員会村川俊明氏より御教示を得た。
6)註4，前掲書。
7)註5に同じ。
8)高橋美久二『5．幣原遺跡』(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1969所収，京都，昭和44年)。
9)森浩一編『田辺天神山弥生遺跡』(『同志社大学文学部考古学記録』第5号，京都，昭和51年)。
10)龍谷大学文学部考古学資料室『南山城の前方後円墳』(京都，昭和47年)。
11)都出比呂志『7．墳丘築造以前の土器』(山城町教育委員会『京都府山城町椿井大塚山古墳』所収，京都府山城町，昭和61年)。
12)註10，前掲書。
13)註11，都出，前掲報告。
14)都出比呂志『古墳出現前夜の集団関係』(『考古学研究』第20巻第4号掲載，岡山，昭和48年)。
15)寺沢薫『大和の高地性集落』(橿原考古学研究所『宵陵』第36号掲載，橿原，昭和53年)。
16)石野博信『大和，弥生社会の動態』(『古代学研究』第91号掲載，堺，昭和54年)。
17)近藤義郎『共同体と単位集団』(『考古学研究』第6巻第1号掲載，岡山，昭和34年)。
18)高倉洋彰『弥生時代の集団組成』(『九州考古学の諸問題』所収，東京，昭和50年)。
19)守山市教育委員会山崎秀二氏の御教示による。
20)長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第5冊(長岡京，昭和55年)。
21)大阪文化財センター『亀井(その2)』(大阪，昭和61年)。
22)吉岡博之『乙訓地方中期弥生土器の様相』(『長岡京古文化論叢』所収，京都，昭和61年)。
23)山中章・國下多美樹他『8．長岡京跡第100次(7ANEHD地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第3次～発掘調査概要』(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集所収，向日，昭和59年)。
24)註22，吉岡，前掲論文。
25)註23，山中・國下他，前掲報告。
26)註22，吉岡，前掲論文。
27)荻田昭次『Ⅳ．弥生式土器小論』(『勝部遺跡』

所収，豊中，昭和47年)。
28)佐原真・井藤徹『7．遺物』(第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池1970』所収，大阪，昭和45年)。
29)寺沢薫『畿内弥生土器様式発展史素描』(『考古学と古代史』所収，京都，昭和55年)。
30)辻本宗久『第1節　弥生土器をめぐる諸問題』(天理市教育委員会『岩室池古墳，平等防・岩室遺跡』所収，天理，昭和60年)。
31)註23，山中・國下他，前掲報告。
32)同上。
33)秋山浩三『河内からもち運ばれた土器』(『長岡京古文化論叢』所収，京都，昭和61年)。
34)佐原真『第三節　弥生式時代』(『彦根市史』上冊所収，彦根，昭和35年)。
35)三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ『上箕田』(鈴鹿，昭和36年)。
36)岩崎直也『湖東における高地性集落の調査』(滋賀県文化財保護協会『滋賀県文化財だより』第68号掲載，大津，昭和57年)。
37)國下多美樹『近江型甕についての一試論』(『長岡京古文化論叢』所収，京都，昭和61年)。
38)註3，前掲書。
39)古代学協会『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』(京都，昭和59年)。
40)宇佐晋一・小川敏夫・星野猷二『深草遺跡』(『古代学研究』第39号掲載，大阪府狭山町，昭和39年)。
41)原口正三他『高槻市史』(高槻，昭和48年)。
42)末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古彌生式遺跡の研究』(『京都帝国大学考古学研究報告』第16冊，京都，昭和18年)。
43)註34，佐原，前掲論文。
44)守山市教育委員会『守山市文化財調査報告書』20冊(守山，昭和61年)。
45)註34，佐原，前掲論文。
46)福井英治『第1節　土器(1)　弥生式土器』(尼崎市教育委員会『田能遺跡発掘調査報告書』所収，尼崎，昭和58年)。
47)三重県教育委員会『納所遺跡一遺構と遺物一』(津，昭和55年)。
48)福岡澄男『中期甕形土器の一類型』(湖西線関係遺跡発掘調査団『湖西線関係遺跡調査報告書』所収，京都，昭和48年)。
49)井藤暁子『弥生土器一近畿2一』(『考古学ジャーナル』第202号掲載，東京，昭和57年)。
50)井藤暁子『第3節　美園遺跡出土の弥生時代前期後半～中期初頭の土器について』(『美園』所収，大阪，昭和60年)。
51)若松良一『第3章　弥生時代の遺物・遺構第3節　考察』(『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』所収，京都，昭和59年)。
52)彦根市教育委員会『福満遺跡一発掘調査概要報告書一』(彦根，昭和57年)。
53)泉拓良・花谷浩『第5章　和歌山県瀬戸遺跡4・5次発掘調査』(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度所収，京都，昭和59年)。
54)兵庫県文化協会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』(神戸，昭和60年)。
55)橋本澄夫『弥生土器一中部北陸2一』(『考古学ジャーナル』第107号掲載，東京，昭和50年)。
56)大参義一『愛知県大地遺跡』(『古代学研究』第11号掲載，京都，昭和30年)。
57)増子康真『愛知県を中心とする縄文晩期後半土器型式と関連する土器群の研究』(春日井，昭和60年)。
58)石黒立人『<条痕文系土器>研究をめぐる若干の問題』(考古学談話会『マージナル』第5号掲載，名古屋，昭和60年)。
59)田中稔『愛知県西春日井郡清州町松ノ木遺跡』(『古代学研究』第14号掲載，京都，昭和31年)。
60)註58，石黒，前掲論文。
61)佐原真『かつて戦争があった』(『古代学研究』第78号掲載，堺，昭和50年)。
62)福井英治『第2節　遺物　(2)石器』(尼崎市教育委員会『田能遺跡発掘調査報告書』所収，尼崎，昭和58年)。
63)佐藤良二『第4章　奈カリ与遺跡の出土遺物第2節　石器』(『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』II所収，神戸，昭和58年)。
64)蜂屋晴美『終末期石器の性格とその社会』(『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』所収，大阪，昭和58年)。
65)酒井龍一『石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル』(『考古学研究』第21巻第2号掲載，岡山，昭和49年)。
66)天理市教育委員会『岩室池古墳，平等防・岩室遺跡』(天理，昭和60年)。
67)西口陽一『人・硯・石剣』(『考古学研究』第32巻第4号掲載，岡山，昭和61年)。
68)註65，酒井，前掲論文。

69)下條信行『日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開』(『九州大学文学部九州文化史研究所紀要』第31号掲載，福岡，昭和61年)。
70)註62，福井，前掲報告。
71)註23，山中・國下他，前掲報告。
72)註4，前掲書。
73)註37，國下，前掲論文。

参考文献

第168図・第16表を作成するにあたっては，以下の文献を参考にした。

京都市文化観光局『京都市遺跡地図台帳』(京都，昭和61年)。
『史料京都の歴史』第2巻考古(東京，昭和58年)。
岩崎誠『桂川右岸の弥生遺跡』(『長岡京』第29号掲載，向日，昭和58年)。
森浩一編『田辺天神山弥生遺跡』(『同志社大学文学部考古学記録』第5号，京都，昭和51年)。
京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第5分冊〔第2版〕(京都，昭和60年)。

第2章　畑ノ前遺跡の掘立柱遺構について

杉　山　信　三

I

遺構を発見した地点は，南部に標高約74mの高地がある。それは南側から東側にかけてかなりきびしい急角度の斜面をもつが，北側の斜面はゆるやかで，北方より東と西とに谷がいりこみ西の谷は長く南方にのび，東は短い。このようにして台地を形成して，東方へ裾をひろげて東面に開いている。その標高約60mの台地面を切り開いて南北幅約80m東西幅約100mの，西南から東北へゆるやかな斜面に大小無数の掘立穴を作り，柱をたて，家屋を造ったかと思われる跡をのこしていた。

これら痕跡を組み合わせると20棟あまりは確実に建物として成立した。それを，各自が持つ方向をもって分類すると5類ある。ただしその内，重なりあいは不明，したがって年代順もきめることができない建物は，考えてとりあげるのに意味を持たないものとした。

5類はとくに各棟が持つ方向により，区別できたものである。

E類　北がやや西に振るもの

掘立柱建物16　掘立柱建物17　掘立柱建物18

C類　北が真北に近いもの

中部　掘立柱建物19　掘立柱建物9　掘立柱建物10　掘立柱建物22

A・B・D類　北が東へ振るもの

北部　掘立柱建物13　掘立柱建物14　掘立柱建物15

中部　掘立柱建物5　掘立柱建物1　掘立柱建物2　掘立柱建物4

掘立柱建物20　掘立柱建物11　掘立柱建物21　掘立柱建物23

南部　掘立柱建物6　掘立柱建物7　掘立柱建物3　掘立柱建物8

掘立柱建物12

となる。このE類とC・D類とは重なる箇所はないが，E類とA類とは重なり，切りあう箇所からすれば，A類がE類を切って，後代につくられたものになる。また，C・D類とA類とも同様でA類が後世のものになる。したがって，A類がC～E類より後になるが，E類とC・D類とは重なる所がないので，前後する順序はきめられない。後述のようにE類の建物群は規模に於いて若干の差はあっても，総柱の正方形に近い建物であるから，C・D類に附属して立てられ，その方向をたまたま違えて同時に立てたかも知れない。

II

E類　建物16　　東西2間(4.1m)
　　南北2間(3.8m)

総柱というが，側のみが，桁まで通す柱であるが，中央柱は，柱とならないで，掘立の束であるかも知れない。束とすれば高床の建築と考えてよい。用途は倉庫と見る。屋根は宝形か四注。

E類　建物17　　東西3間(4.8m)
　　南北3間(4.6m)

各間別に於いて，東西方向の方が南北方向より広いので，東西方向に桁を架けた東西棟の建物になり，屋根は四注となっていたであろう。中の四本の掘立は束となり，床を張り上げた建物で倉庫として使われたと思われる。

E類　建物18　　東西3間(4.6m)
　　南北2間(4.4m)

上に示した間数の通り柱掘方を揃えて見たがかなり無理な点があり，特に北東の掘方は東北方への自然勾配で，削土されたのかも知れない。これも総柱である。なお，この建物の南辺はA類の建物1・2と重なりあい既に示したように，それより古いものになる。またE類の3棟の南辺は，一直線上にある。そのように揃えたということは，この3棟が同時に作られたと見る可能性は強い。加えて3棟共に，C・D類と重なることは，既記のようにない。

D類　建物14　　東西4間(西の2間7.5m，東の2間4.5m)
　　南北2間(4.1m)
　　建物15　　東西5間(西の2間7.9m，東の3間5.0m)
　　南北2間(3.9m)

この14・15の建物は発掘調査の段階では連なり10間以上の建物と理解したが，西方4間と東方5間とを別のものに分けて考えた。分けたのは，同種の平面を持つからである。2棟共東方部に床を持ち，西方部は土間のものとすることができる。床をもつものは中央に床束を持つからである。西方部はその束を持たないと理解する。この2棟は床と土間で成り立つととれば，住居の用に充てられたものと解釈する。

中部中央に，建物9・建物10・建物22の3棟が東西棟で並び建つ。

C類　建物9　　東西3間(6.4m)
　　南北2間(4.0m)
　　建物10　　東西4間(8.5m)
　　南北2間(4.1m)
　　建物22　　東西3間(5.9m)
　　南北2間(3.8m)

3棟を並べ，中央の建物10が桁行に1間多いことが正殿であることを示し，その東西は脇殿という見方もなりたつ。もっともこれは殿と呼ばれるほどの質の高いものではないが，何か儀式めいた行事の行われる場にもなる。この南方は広い庭を形成しその西には南北棟の建物が3棟，建物11・建物12と建物7が建ち，また東には南北棟建物23があって，その庭の東西を区切るような位置を占めている。

B類	建物7	南北2間(6.4m)
		東西3間(3.5m)
	建物11	南北2間(7.4m)
		東西3間(4.2m)
	建物12	南北2間(10.3m)
		東西5間(3.6m)
	建物23	南北2間(6.9m)
		東西3間(4.3m)

III

以上見てきた建物の在り方は，北方と西方とに住家となるような間取りを持つ建物を置き，その南方に，東西棟の建物3棟を中央部に位置して建て並べ，その西に，南北棟の建物3棟を南北に前後して建て，また東に南北棟1棟を置いて既述のように中庭を囲うように建てている。いわば寝殿造の正殿と対屋に似た関係の位置に置かれているが，もし建物10に正殿風な性格があるものなら，この辺りの主領たる人の屋敷と考えられるかも知れない。しかし建物10には平面で考えるかぎり，そのように見る要素はない。

ところですでに見たように，C類と次のA類とは重なりあうのであるから同時併存していたものではない。また，E類のような倉庫に似た建物が，孤立したような状態に建てられていることはあり得ないから，それはC類に附属していたものであろう。D類はE類の建物その物と，そこにおさめた，器物を保管するような役目を持つ人の住居と考えることができる。保管する物がいかなるものであったかは，今回の調査では明らかにするようなものは得られていない。

次のE類建物があったあたり，この地の最も高燥な所であるからE類に重ねてA類の建物が建てられたことは当然といえよう。E類・C類の建物群が廃せられた後にA類が造営されたのである。別に分類されているB類も含めて西方から挙げると，

A類	建物1	東西4間(8.1m)
		南北母屋2間庇1間(7.5m)
	建物2	東西5間(11.9m)
		南北母屋3間庇1間(8.1m)
B類	建物3	東西4間(7.9m)
		南北2間(4.2m)

A類	建物20	南北5間(10.4m)
		東西2間(4.5m)
	建物4	南北3間以上(5.1m以上)
		東西2間(3.9m)

A類はそれが占める中央部に南にのみ庇を持つ建物が2棟も東西に併立していて，西に建物6が1棟，東に建物20と建物4とがある。それぞれが離れて建つ間隔は約9mをもって，計画的に建立されたものと思われる。庇をもつ2棟の建物の南方にやや離れて建物3を建てる。加えて，その東方に桁行2間以上の建物(建物8)があって南方を劃し，東方には建物20，建物4で区劃が与えられる。主殿になるのは建物2であろう。母屋桁行5間を西から3間・2間と分ける間仕切をしつらえ，南面に庇をもつ形跡がその風格を示しているからである。次いで建物2が東西桁行4間で，中央に柱がたつ平面であるが前者と同様に南面に庇を構えるので住居にはなるであろう。するとそれを西，南，東ととりまく，この住居に附属する建物になり，これが占める地形から考えても，東面に入口をもつ構えになる。この東の建物はまず2棟が区劃を限るような役目をするが，その2棟が並ぶ南北方向の上で，さらに離れて北方に桁行2間以上で梁行3間の建物(建物13)の北妻が見付けられているからそこまでつながると考えて良いのであろう。

なお付け加えていうなら，別記の井戸はこのA類の邸宅風のものに附属する施設になるのだろう。

A類の建物は，C・E類のものとは性格を異にした住居(豪族の邸宅)として，C・E類が廃滅した所に重ねて造営されたのであって，このA類に比較してC・E類は物(穀類か)を保管・経営する建物群であることも逆に理解できよう。

第3章　山城の須恵器生産

山　田　邦　和

第1節　はじめに

かつて筆者は，山城をも含めた京都府における須恵器窯址・瓦窯址について，地名表のかたちで概観したことがある[1]。しかし，前稿では窯址の分布を叙述することに力点をおいたため，生産の展開にかかわる記述は簡略にとどめざるを得なかった。そこで，本稿では山城における須恵器生産の展開を通覧し，それにかかわるいくつかの問題を検討したい。ただし，各窯址群についての概略および参考文献に関しては前稿に譲り，本稿では必要な部分のみを再述することにする。

なお，言うまでもなく，「山城」とは平安京遷都以後の名称であり，それ以前の呼び名は「山背」もしくは「山代」でなければならない。ただ，本稿のばあい，両者を厳密に区別することは煩雑にすぎるため，便宜上これを「山城」に統一して論を進めたい。

第2節　山城における窯址の分布

第170図は，山城における須恵器窯址・瓦窯址・緑釉陶器窯址の分布を示した地図である。なお，「窯址群」という名称には，狭い範囲における窯址の密集に限定して用いる狭義の用法と，広い範囲に窯址が散在するばあいを指す広義の用法とがある。前者はたとえて言うならひとつの工房ないし工房群，後者は窯業生産地帯といった意味あいがつよい。本稿では，窯址群の語を広義の用法で使う。すなわち，このばあい狭義の「窯址群」は，広義のそれの支群であったり，ひとつの単位であったりすることになる。

南山城には，宇治窯址群(宇治市)・宇治田原窯址群(綴喜郡宇治田原町)・田辺窯址群(綴喜郡田辺町)・松井窯址(同町)・交野ケ原窯址(同町)・加茂窯址群(相楽郡加茂町)・煤谷川窯址(相楽郡精華町)といった須恵器窯址が存在する。ただし，このうち宇治窯址群は，瓦窯や瓦陶兼業窯を含む。瓦陶兼業窯としては，京都府八幡市橋本と大阪府枚方市北楠葉にまたがる平野山瓦窯址(楠葉東窯址)もある。瓦窯としては，奈良山瓦窯址群(相楽郡木津町・同郡精華町・奈良県奈良市)があり，さらに単独立地の瓦窯がいくつか点在する。なお，奈良山瓦窯址群はその一部に須恵器窯址をも含んでいる。

北山城には，大原野窯址群(京都市西京区)・西賀茂窯址群(同市北区)・岩倉窯址群(同市左京区)・山科窯址群(同市山科区)・奥海印寺窯址群(長岡京市)・深草向ケ原町窯址(京都市伏見区)といった須恵器窯が存在する。このうち山科窯址群は須恵器のみを焼成する。大原野窯址群には緑釉陶器窯が，西賀茂窯址群には瓦窯・須恵器窯が，岩倉窯址群には瓦窯・須恵器窯・緑釉

第170図　山城の窯址分布図

陶器窯が，それぞれ分布する。奥海印寺窯址群は須恵器窯と瓦窯からなる。このほか，単独立地の瓦窯が点在する。

第3節　古墳時代の須恵器生産

山城では，古墳時代後期後半より前の時期の須恵器窯址は，確認されていない。しかし，古墳出土品には，同地における須恵器生産の開始を，さらにさかのぼらせて考えることのできる資料が存在する。そのひとつは，南山城の，綴喜郡田辺町薪堀切7号墳の出土品である[2]。同墳は古墳時代後期前半に属する円墳であり，直径約15m程度に復元される。墳丘がすでに削平をうけたため，内部構造はわからないけれども，周溝より円筒埴輪・人物埴輪・形象埴輪・須恵器器台を出土した。須恵器は，須恵器編年のＴＫ10型式併行期にあたる。人物埴輪は須恵質の焼成を示すものであり，顔にいれずみ状の文様を刻むことによって著名である。ここで注目したいのは，同墳出土の円筒・人物両埴輪に須恵質のものがあり，かつ，それらが二次調整にＣ種ヨコハケを使用することである。周知のように，Ｃ種ヨコハケとは，ヨコハケを施す場合に『ロクロ』回転を利用した，須恵器のカキメ調整と同じ技法であり，本来の埴輪製作の技法ではない。そうして，同ヨコハケを使用する埴輪は，和泉西南部・尾張・加賀・遠江などにおいて，須恵器工人が埴輪を製作したばあいの所産であることが知られている。堀切7号墳出土の須恵質円筒埴輪は，口縁端部および底端部にヨコナデ調整を加える点にも，須恵器製作技術の応用をみることができる。また，同墳出土の須恵質円筒埴輪のひとつは，焼け歪みがはなはだしく，普通ならば不良品として廃棄されるようなものである。これは，同墳からあまり遠くない場所において，埴輪製作がおこなわれた可能性を示唆する。

以上のことから，堀切7号墳出土埴輪は，同墳の近辺にＴＫ10型式併行期の須恵器窯が存在し，その工人が同時に埴輪製作にもたずさわったことをものがたっていると考える。したがって，南山城における須恵器生産の開始は，少なくともこの時期までにはさかのぼると想定されるのである。また，田辺町美濃山狐谷横穴群出土円筒埴輪には，平行タタキ痕をみるものがあると報告されている[3]。これもまた，須恵器工人が製作したものであろう。

さて，ここで想定される須恵器の生産は，須恵器工人が埴輪製作にもたずさわるという，いわば須恵器・埴輪両生産が分離していない状況である点に，特色がある。須恵器生産と埴輪生産が密接に関連するありかたのひとつが，須恵器工人が埴輪の製作にたずさわり，須恵器の技法をとりいれた埴輪を残すばあいである。このほかに須恵器生産と埴輪生産がかかわるありかたには，須恵器工人と埴輪工人とが，技法的にはたがいに独立しながら，ひとつの窯を共用したばあいや，埴輪工人が須恵器の製作にもたずさわり，異例の特徴をもつ須恵器を製作したばあいもある[4]。ただ，畿内では，須恵器工人と埴輪工人がひとつの窯を共用することはあるが，そのばあいでも，両者は技法の面ではたがいに独立していることが通例である。したがって，須恵器工人が埴輪をも製作するという堀切7号墳出土埴輪の生産体制は，畿内としては特異な例に属する。

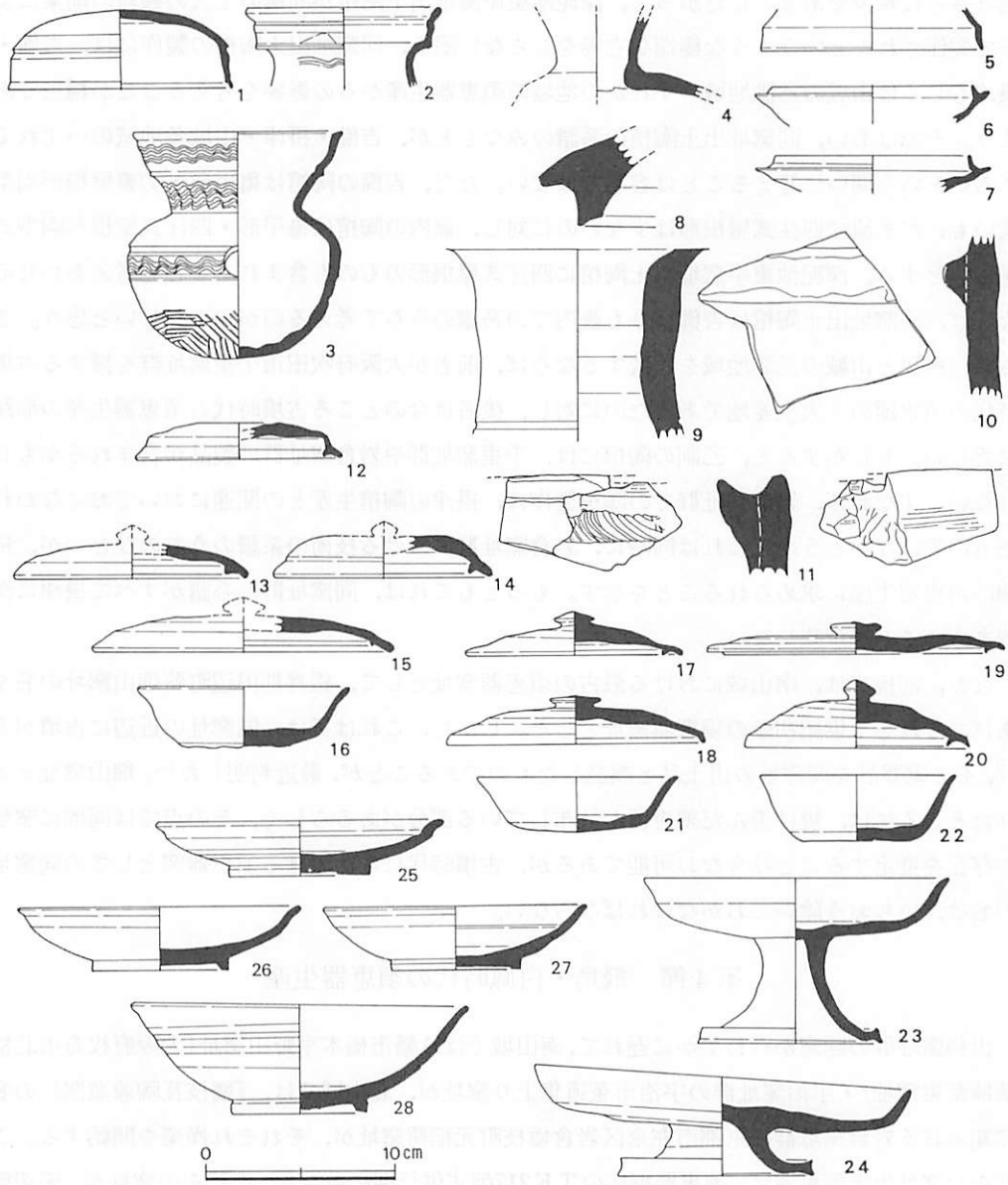
北山城においては，須恵器生産が古墳時代後期後半よりも前におこなわれたという積極的な証拠は乏しい。ただし，京都市左京区吉田二本松町京都大学教養部構内遺跡ＡＰ22区４号墳[5]出土の須恵器壺は，やや特異な形態をしめすようである(第171図２)。すなわち，この壺は，口縁部がいわゆる二重口縁を呈し，また頸部に粗い波状文を施す。口縁部のみの破片であるため，体部の形態はわからない。時期は，伴出した須恵器杯蓋からみて，ＴＫ23型式併行期にあたる。いわゆる二重口縁とは，須恵器の本来的なものではなく，土師器に特有の形態である。したがって，この須恵器壺は土師器から影響をうけたものと考える。土師器の形態をもつ須恵器は，初期須恵器の段階であるならば，中央窯たる大阪府南部窯址群(陶邑窯址群)にあっても，また地方窯にあっても，決して珍しいものではない。しかし，ＴＫ23型式併行期というような，須恵器の定形化が達成されたのちの時期までも，土師器から影響を受けた須恵器が存在するのは，地方窯に特有の現象と考えてよい。すなわち，もしこの須恵器壺が地方窯での製作にかかるものであるならば，北山城にも５世紀後葉にさかのぼる時期の須恵器窯が存在する可能性を指摘できるのである。

また，京都市西京区山田葉室町穀塚古墳出土の須恵器瓿は，口縁部・頸部・体部にそれぞれ波状文をめぐらす(第171図３)。田辺昭三によれば，この各部のすべてに波状文をめぐらす瓿は，大阪府南部窯址群ではまれな反面，地方窯では主流をなすものであり，したがって同墳出土瓿は地方窯の製品であるという[6]。同墳出土瓿を地方窯の製品とすることには中村浩の異論[7]もあるが，かりに田辺説にしたがうとするならば，この瓿も北山城における５世紀の須恵器窯の存在を示唆することになる。

北・南両山城において，須恵器生産が本格的におこなわれるのは，古墳時代後期後半にはいってのことである。現在知られる最古の須恵器窯址は，北山城の山科窯址群で確認されている６世紀末葉ないし７世紀初頭のものである。京都市山科区北花山大峰町大峰窯址がそれである。同窯址出土の須恵器は，須恵器編年のＴＫ209型式併行期にあたる。わずかに遅れて，北山城では岩倉窯址群が，南山城では田辺窯址群が，それぞれ操業を開始する。前者には京都市左京区松ケ崎大谷町深泥池東岸窯址(第171図４～11)があり，後者には綴喜郡田辺町興戸宮ノ前窯址がある。両窯址の出土須恵器は，須恵器編年のＴＫ217型式の古い段階に併行する。これらの須恵器窯で製作された須恵器は古墳時代の型式をそのまま引きついだものであり，近辺の古墳出土の須恵器のなかにこれらの窯の製品が含まれていることは，想像にかたくない。

ここで注目したいのは，深泥池東岸窯址において，通常の製品のほかに，須恵質陶棺を焼成していることである[8](第171図８～11)。同窯址出土の陶棺は，いずれも小片であるが，棺身の口縁部内側に粘土帯をはりつけて溝状の蓋うけをつくるものや，タガ状の凸帯を付したものなどがある。前者は四注式屋根形陶棺である。しかし，後者のばあい，すくなくとも畿内で通有の四注式屋根形陶棺では，凸帯を付すことはない。陶棺で凸帯を付すものは，亀甲形陶棺であるか，もしくは四注式屋根形陶棺で亀甲形陶棺の影響を残す特例であるか，いずれかとみてよい。吉備で盛行する小型陶棺のうちにも凸帯を付すものがあるが，これは陶棺というよりむし

ろ骨蔵器であり，また年代も降る。小破片から型式を云々することはいささかためらいもあるけれども，深泥池東岸窯址の陶棺片のうちタガ状の凸帯を付すものは，畿内で通有の四注式屋根形陶棺と考えるよりも，亀甲形陶棺とみるか，さもなくば亀甲形の影響を残す特異な四注式屋根形陶棺とみた方がよいと思う。もしそう考えて誤りないものとするならば，亀甲形陶棺は



第171図　山城出土須恵器実測図(縮尺：1/4)
1・2：京都大学教養部構内遺跡ＡＰ22区４号墳，３：穀塚古墳，４～11：深泥池東岸窯址(岩倉窯址群)，12：牛尾窯址(山科窯址群)，13～16：木野墓窯址(岩倉窯址群)，17～24：船山窯址(西賀茂窯址群)，25～28：本山窯址(岩倉窯址群，27は緑釉陶器)　(１・２は註５文献，３は註７文献，８～11は註８文献よりそれぞれ転載。12～28は同志社大学考古学研究室保管資料)

土師質であることがほとんどであり，須恵質のものは少ない事実にあらためて注意したい。すなわち，亀甲形陶棺で土師質のものは全国に百数十個の出土が知られるのに対し，同形陶棺で須恵質のものは，備中および摂津にそれぞれ数例，備後および山城の旧乙訓郡域に各1例の出土が知られるにすぎないのである[9]。須恵質四注式屋根形陶棺で亀甲形の影響を残すものの出土例はさらに希少である。したがって，深泥池東岸窯址出土陶棺が同窯の工人の独自の創案によって製作されたというような極端な立場をとらない限り，同窯址出土陶棺の製作には，吉備・摂津もしくは山城の乙訓地域いずれかの地域の須恵器生産からの影響を考えることが穏当であろう。そのばあい，同窯址出土陶棺の系譜のみなもとが，吉備・摂津・山城各地域のいずれであるかという問いに答えることは容易ではない。ただ，吉備の陶棺は亀甲形・切妻屋根形両型式のものが主流で四注式屋根形は少ないのに対し，畿内の陶棺は亀甲形・四注式屋根形両型式を主体とする。深泥池東岸窯址出土陶棺に四注式屋根形のものも含まれることを考えあわせるならば，同窯址出土陶棺は吉備よりも畿内での系譜のうちで考えるのがふさわしいと思う。さらに，摂津と山城の乙訓地域を比較するならば，前者が大阪府吹田市千里窯址群を擁する古墳時代の須恵器の一大生産地であったのに対し，後者は今のところ古墳時代の須恵器生産の形跡に乏しい。もしかすると，乙訓の陶棺には，千里窯址群や岩倉窯址群の製品が含まれるかもしれない。すなわち，岩倉窯址群での陶棺製作は，摂津の陶棺生産との関連においておこなわれたものではなかろうか。これは同時に，岩倉窯址群における技術の系譜のうちのひとつが，摂津の須恵器生産に求められることを示す。もっともこれは，同窯址群の系譜がすべて摂津に源流をもつことを意味しない。

なお，前稿では，南山城における最古の須恵器窯址として，綴喜郡田辺町薪畑山窯址の名をあげ，これを7世紀初頭の須恵器窯址とした。しかし，これは実は，同窯址の近辺に古墳があり，その副葬品を同窯址の出土品と誤認したものであることが，最近判明した[10]。畑山窯址とされたところには，焼け歪んだ須恵器が散布している部分があるらしく，その点では同地に窯址の存在を推定することは今なお可能であるが，古墳時代にさかのぼる須恵器窯としての同窯址の名は，いちおう除いておかなければならない。

第4節　飛鳥・白鳳時代の須恵器生産

山科窯址群の開窯からわずかに遅れて，南山城では八幡市橋本平野山窯址（大阪府枚方市北楠葉楠葉東窯址）・宇治窯址群の宇治市菟道隼上り窯址が，北山城では，『幡枝瓦陶兼業窯』の名で知られる岩倉窯址群の京都市左京区岩倉幡枝町元稲荷窯址が，それぞれ操業を開始する。これらの窯址出土須恵器は，須恵器編年のＴＫ217型式併行期にあたる。これらの窯址が，田辺町宮ノ前窯址・京都市深泥池東岸窯址・同市大峰窯址と相違する点は，瓦と須恵器を同一の窯で焼成する，いわゆる瓦陶兼業窯の体制をとっていることである。隼上り窯址は奈良県高市郡明日香村豊浦寺の創建時の瓦を，平野山窯址は大阪府大阪市天王寺区四天王寺の創建時の瓦を，元稲荷窯址は京都市北区北野廃寺の創建時の瓦を，それぞれ焼成したことが知られる。

ただ，これらの窯で生産された須恵器は，宝珠鈕付の杯蓋などの新出の製品をも少数含むものの，その多くは従来の古墳時代的な製品によってしめられる。これは，古墳葬祭用の須恵器から日常品としての須恵器に移行しつつあった，この時期の須恵器のもつ二面性をあらわす。

なお，山科窯址群は7世紀代を通じて生産を継続した(第171図12)のち，同世紀後葉でほぼ操業を停止する。これは，天智天皇陵の造営にともない，窯址群の範囲が同天皇陵の兆域にとりこまれたからであったようである。

7世紀中葉から後葉にはいると，南山城では，山城と大和の境界にあたる奈良市歌姫町音如ケ谷窯址が操業する。同窯址は，のち平城京の官窯として発達する奈良山瓦窯址群の嚆矢をなすものであった。ほかに，同時期の須恵器窯としては，田辺窯址群に京都府綴喜郡田辺町多々羅新宗谷窯址，宇治窯址群に宇治市菟道滋賀谷窯址などがある。

同じ頃，北山城では西賀茂窯址群が京都市北区西賀茂大深町大深町窯址・同市同区西賀茂船山町船山窯址(第171図17～24)において操業を開始する。また，岩倉窯址群においても京都市左京区岩倉幡枝町木野墓窯址(第171図13～16)・同町妙満寺前窯址・同町栗栖野5号窯址が生産をおこなう。木野墓窯址は京都市左京区北白川廃寺創建時の瓦と須恵器を併焼し，また栗栖野5号窯址も瓦と須恵器を併焼する。これらの窯址出土須恵器は，須恵器編年のＴＫ48型式併行期にあたる。

この頃，須恵器窯の近辺には，それと時期を同じくして，瓦のみを焼く窯が存在することもある。西賀茂窯址群の京都市北区西賀茂蟹ケ坂町蟹ケ坂瓦窯址・同市左京区岩倉幡枝町栗栖野6号瓦窯址などがそれである。また，瓦専業窯は，須恵器窯と離れて単独に立地することもある。京都市伏見区小栗栖丸山小栗栖瓦窯址・同市北区北野下白梅町北野廃寺瓦窯址はその例である。これらの瓦専業窯の存在は，はじめは瓦陶兼業窯においておこなわれた瓦生産が，須恵器生産と分離し始めたことを示す。

なお，小栗栖瓦窯址の製品は，同窯址に隣接する京都市伏見区小栗栖北谷町法琳寺や，西方約600mに位置する同区醍醐西大路町醍醐御霊廃寺に供給され[11]，また，北野廃寺瓦窯址の製品は北野廃寺に供給されている。寺院の造営にともなって，その境内や至近の地点に瓦窯を築いたわけである。また，蟹ケ坂瓦窯址の製品が同市上京区上御霊竪町出雲寺に供給されているように，瓦窯と寺院との間にやや距離を置くばあいもある。

第5節　奈良時代の須恵器生産

南山城では，8世紀前半の須恵器窯址として，綴喜郡田辺町多々羅マムシ谷窯址・相楽郡精華町南稲八妻煤谷川窯址・同郡木津町木津天神山窯址などがある。マムシ谷窯址出土須恵器は，ほとんどが杯および杯蓋で，ほかに鉢・短頸壺・長頸壺・平瓶・横瓶・甕・異形皿などがある。器種構成に，皿の通常品を欠く。胎土は砂粒を多く含み，いかにも粗っぽい感を受ける。硯・鉄鉢形土器などの特殊品をみないこととあわせて，生産の目的が在地への供給にあったことを示しているのかもしれない。8世紀前半には山を隔てた地に平城京が造営されたけれども，南

山城の須恵器生産にその影響をみるには，同世紀の後半をまたねばならないようである。

一方，8世紀前半から後半にかけて，大和北部から山城南部の丘陵地帯に数多くの瓦窯が築かれる。これらの瓦窯を総称して奈良山瓦窯址群の名で呼んでいる。そうして，同瓦窯址群の製品は，平城京およびその周辺の寺院に供給されたことが知られている。すなわち，奈良山瓦窯址群は，平城京への瓦の供給を目的に経営された，官営の瓦工房であったと推定される。この意味で，南山城の瓦生産は，8世紀全般を通じて平城京建設の大きな影響を受けたことになる。

なお，須恵器生産について付記すると，マムシ谷窯址出土の有台杯身のなかに，焼け歪んだわけでもないのに，底部中央部が高台の接地面よりも下方に突出するものがかなり含まれることは，注意しておいてよい。林日佐子が指摘するように，この特徴を持つ杯身は，静岡県に分布の中心を置いており，畿内の窯の製品としては異例の部類に属する[12]。これは，同窯での須恵器生産にあたって，畿内以外の地域からも技術の導入がはかられたことを示しているのかもしれない。

8世紀後半にはいると，南山城では，相楽郡加茂町加茂窯址群・綴喜郡田辺町松井松井窯址・同町松井交野ケ原窯址などの窯が操業する。なかでも加茂窯址群はこの時期に集中して須恵器生産をおこなったことが知られる。同窯址群が平城京に近く，またその隣接地に恭仁宮が営まれたことが，同地における須恵器生産の開始を規定したと考える。加茂窯址群の加茂町里西門窯址出土品には，通常品のほか，円面硯・鉄鉢形土器・耳付瓶などがみられ，都向けの土器作りにふさわしい種類の多様さを示している。

北山城では，岩倉窯址群が窯場を主に北方の丘陵地帯(京都市左京区岩倉木野町)に移動し，須恵器生産をもっぱらにおこなう。同窯址群の須恵器生産は，8世紀後葉には下火になるようである。西賀茂窯址群も8世紀前葉に須恵器生産を停止する。

第6節　平安時代の須恵器生産

南山城では，9世紀中葉を降る須恵器窯址を確認していない。ただし，これは南山城に限ったことではなく，9世紀中葉をまたずして，近畿地方全体にわたって，小規模な須恵器生産地が衰退する。その一方で，京都府亀岡市篠窯址群・兵庫県加古川市志方窯址群(札馬窯址群)などの大規模な生産地のみが操業を拡大する。すなわち，これ以降の須恵器は，少数の大規模生産地での集約的な生産へと，生産体制の転換がおこなわれたのである。

一方，北山城の窯業生産は，これとはやや違った展開を示す。すなわち，同地に長岡京，次いで平安京が営まれ，それにともない窯業生産が再編成されたのである。両京の造営に使われる莫大な量の瓦を生産するために，官営の瓦工房が営まれる[13]。長岡京で使われた瓦は，大阪府高槻市萩之庄萩之庄瓦窯址・京都府長岡京市奥海印寺谷田瓦窯址などで製作されたものである。

平安京で使われる瓦は，最初，大阪府吹田市岸部瓦窯址・同府枚方市牧野瓦窯址において生産された。わずかに遅れて，西賀茂窯址群がこれに加わる。同窯址群は8世紀前葉で須恵器生

産を中絶していたから，およそ半世紀をへて窯業生産を再開したことになる。同窯址群は9世紀前半を通じて，平安京所用瓦の主要な生産地となる。瓦生産は，西賀茂窯址群にわずかに遅れて，岩倉窯址群にも拡大する。しかし，同期における岩倉窯址群の瓦生産は，西賀茂窯址群に比べて規模が小さかったようである。

岩倉窯址群では9世紀のうちに須恵器生産が復興し，同時に緑釉陶器の生産がはじまる。平安京出土の9世紀前葉の緑釉陶器は，豊富な器種構成と精緻なつくりによって特色づけられる。同期の緑釉陶器を生産した窯址は，いまだ確実なものは発見されていない。しかし，岩倉窯址群の京都市北区上賀茂本山本山窯址の出土品のなかには，古い型式の製品が含まれているようであり，同窯址群の域内に9世紀前葉にさかのぼる緑釉陶器窯が存在すると考えてよい。9世紀後半にはいると，平安京出土の緑釉陶器は器種がほとんど椀および皿に限られるようになり，同時につくりもやや簡略になる。岩倉窯址群の緑釉陶器生産は引き続き盛んになり，本山窯址(第171図25～28)・京都市左京区岩倉幡枝町妙満寺窯址・同区同町栗栖野3号窯址などにおいて生産がおこなわれたことが知られている。

緑釉陶器生産は，9世紀後半のうちにまず京都市西京区大原野窯址群に，10世紀にはいって丹波の亀岡市篠窯址群に，それぞれ拡大する。これらの生産は，10世紀には岩倉窯址群にかわって，京周辺の緑釉陶器生産の主体をなす。大原野窯址群では，同市西京区大原野石作町石作窯址・同市同区大原野小塩町小塩窯址など，約10基におよぶ緑釉陶器窯が知られている。9世紀後半から10世紀前半にかけての緑釉陶器生産の展開は，平安京における同陶器の需要が高まるにともない，一方では製品のつくりを簡略化し，他方では生産地を拡大することにより，量産化をはかったことを示している。10世紀以降には，これら京周辺の製品のほか，東海地方の緑釉陶器窯の製品も平安京にさかんに持ちこまれたことが知られている。

一方，岩倉窯址群では灰釉陶器の生産もおこなわれたことが，最近確認された。京都市左京区岩倉木野町京都精華大学構内2区1号窯址(仮称)[14]が発掘され，灰原から灰釉陶器および少数の緑釉陶器が出土したのである。すなわち，灰釉陶器は，東海地方に限らず平安京近辺においても生産されていたことが判明したわけである。

岩倉窯址群の須恵器生産は，9世紀代を通じて存続したようである。京都市左京区岩倉幡枝町妙満寺前窯址・同区同町史跡栗栖野瓦窯跡などにおいて，この時期の製品が確認されている。ただ，9世紀以降，丹波の篠窯址群の須恵器生産が拡大し，10世紀にはいっては，平安京への須恵器の供給をほとんど一手にひきうける感がある。そうして，山城で最後まで命脈をたもった岩倉窯址群の須恵器生産は，10世紀を待たずして衰退する。10世紀には，平安京の須恵器の器種も，従来の杯・皿・壺などを主体とする構成から，甕・こね鉢を主体とするものに変化する[15]。また，平安京出土の土器のうち須恵器のしめる割合も，相対的に少なくなる。これは，須恵器のもっていた社会的な意義が変化したことを示す。

緑釉陶器の生産においても，平安京出土の同陶器は，10世紀の後半から11世紀にかけて，しだいに近江の製品が多くをしめるようになる。それにともなって，10世紀の終わりには山城・

第22表　山城の主要窯址群変遷略表

	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11・12世紀
北山城	(京都大学構内遺跡) (穀塚古墳)		山科窯址群 岩倉窯址群 [岩倉窯址群] 西賀茂窯址群	岩倉窯址群	岩倉窯址群 [岩倉窯址群] [西賀茂窯址群]	大原野窯址群 [岩倉窯址群]	[岩倉窯址群]
南山城		(堀切7号墳)	田辺窯址群 平野山窯址 [平野山窯址] 宇治窯址群 [宇治窯址群]	松井・交野ヶ原窯址 煤谷川窯址 加茂窯址群 宇治田原窯址群 [奈良山瓦窯址群]			

世紀ごとに，主要窯址群の盛期を単純化して示した。[　]は瓦窯，(　)は窯址以外の参考資料，それ以外は須恵器窯である。なお，大原野窯址群は緑釉陶器窯址群であり，岩倉窯址群には緑釉陶器窯を含む。

丹波の緑釉陶器生産も終焉をむかえたらしい。

9世紀後半以降には，京周辺の瓦生産にも変化がみられる。瓦生産は，9世紀前半にあっては西賀茂窯址群を最大の生産地としたけれども，9世紀後半をすぎると京周辺の各所に生産地が分散するようである。西賀茂窯址群では，同群の南端に位置する京都市北区大宮中ノ社町河上瓦窯址が操業する。一方，岩倉窯址群の幡枝支群でも盛んに生産をおこなう。同支群の中心部である京都市左京区岩倉幡枝町史跡栗栖野瓦窯跡のある丘陵には，数十基の窯体が眠っているらしい。そのうちの少なからぬ部分が平安時代中・後期の瓦窯址であることは，同窯址群の製品とみなされる同期の瓦が平安京において数多く出土することからも，想像できる。また，岩倉窯址群の花園支群にも京都市左京区上高野小野町小野瓦窯址が築かれ，瓦生産をおこなう。『延喜式』木工寮にみえる小野瓦屋と栗栖野瓦屋は，それぞれ同窯址群の花園支群と幡枝支群に比定される。その他，京都市右京区太秦森ケ東町森ケ東瓦窯址や，修理職瓦屋に比定される同市東山区今熊野池田町池田瓦窯址など，京周辺の瓦窯が瓦生産をおこなう。

11世紀後半から12世紀にかけて，それまで平安京に多くの須恵器を供給した篠窯址群の須恵器生産も衰退する。そうして，平安京出土の須恵器は，多くが播磨産のこね鉢および甕によって占められるようになる。京周辺で須恵器生産をおこなうことはもはやない。平安京への瓦の供給は，岩倉窯址群の幡枝支群(栗栖野瓦屋)・篠窯址群などから引き続きおこなわれるけれども，ここでも播磨産瓦や讃岐産瓦などの進出はいちじるしい。

註

1)山田邦和『京都府下の須恵器窯』(『マムシ谷窯址発掘調査報告書』所収，京都，昭和58年)。他に，山城の窯址の分布と窯業生産の展開を概観したものに，田辺昭三『京都の古代・中世窯』(『日本やきもの集成』5所収，東京，昭和56年)，田中勝弘『山城盆地における窯跡とその分布』(『西賀茂瓦窯跡』所収，京都，昭和53年)がある。なお，本稿の窯址分布図(第170図)では，新発見の窯址を加えたほか，前稿の田辺・枚方両窯址群を細分しており，この点で前稿と相違している。

2)林　正『堀切古墳群』(『田辺町遺跡分布調査概報』所収，京都府田辺町，昭和57年)。同墳出土埴輪については，川西宏幸の教示を得た。

3）久保田健士『狐谷横穴群』（『京都府遺跡調査概報』第8冊所収，京都，昭和58年）。

4）埴輪工人が須恵器の製作にもたずさわり，異例の特徴をもつ須恵器を製作した例は，奈良県奈良市法華寺町ウワナベ古墳出土須恵器，兵庫県姫路市四郷町坂元宮山古墳出土須恵器などであったと考える。関川尚功『奈良県下出土の初期須恵器』（『考古学論攷』第10冊掲載，橿原，昭和59年），山田邦和『播磨の須恵器生産』（『鴨谷池遺跡』所収，明石・京都，昭和61年）参照。

5）五十川伸矢・飛野博文『京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査』（『京都大学遺跡調査研究年報』昭和57年度所収，京都，昭和59年）。

6）田辺昭三『須恵器大成』（東京，昭和56年），64頁。

7）中村　浩『山城・穀塚古墳出土須恵器について』（『ＭＵＳＥＵＭ』第431号掲載，東京，昭和62年）。

8）京都大学考古学研究会『岩倉調査中間報告』（『第36とれんち』掲載，京都，昭和59年）。同『岩倉踏査報告VI』（『Trench』35掲載，京都，昭和58年）。なお，筆者採集資料のなかにも，タガ状の凸帯を付し，外面にハケメ，内面に同心円タタキ痕を残す陶棺破片がある。

9）村上幸雄『糠山遺跡群』II（岡山県久米町，昭和55年），吉岡博之・木村泰彦『山城地方出土陶棺集成』（『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集所収，向日，昭和54年）。なお，長岡京市北平尾所在古墳出土陶棺（東京国立博物館蔵）は須恵質亀甲形であるらしい。陶棺については木村泰彦の教示を得た。

10）吉村正親『畑山1号墳出土の遺物』（『京都考古』第36号掲載，京都府田辺町，昭和60年）。

11）植山　茂編『小栗栖瓦窯跡発掘調査報告』（京都，昭和60年）。

12）森　浩一・大井邦明・林日佐子『マムシ谷窯址発掘調査報告書』（京都，昭和58年），26・27頁。

13）近藤喬一編『平安京古瓦図録』（東京，昭和52年）。瓦生産については植山茂の教示を得た。

14）昭和62年，京都市埋蔵文化財研究所調査。

15）宇野隆夫『後半期の須恵器』（『史林』第67巻第6号掲載，京都，昭和59年）。

第4章　土馬をめぐる祭祀

辻　村　純　代

第1節　はじめに

土馬に関する研究は古く，昭和12年に大場磐雄氏により出土地別の分類と形態分類が行われて以降[1]，とくに昭和40年代に至って論議が盛んになった。しかし，それらの研究は，基本的に大場氏の研究を踏襲したものである。

これまでの研究の結果，明らかになったことは，土馬の出土地が古墳・井戸・山頂・池・河川・溝など多岐にわたるなかで，水に関係する場所が多い点である。

また，形態分類について言うならば，大場氏が最初に飾り馬と裸馬とに分類したのを発展させて，前田豊邦氏は4型式，すなわちA類：馬具が着装されるもの，B類：鞍のみが貼付手法により着装され，他の馬具は線描き手法で表現されているもの，C類：鞍のみが表現されているもの，D類：馬具が表現されない裸馬，に分類しているが，時代の推定については明確な表現を避けている[2]。その後，泉森皎氏と小笠原好彦氏により，ほぼ同時期にそれぞれ形態分類と編年が行われた。泉森氏は飾馬を2型式，裸馬を4型式に[3]，そして小笠原氏は飾り馬を3型式，裸馬を7型式に[4]細分されたのであるが，両者に共通しているのは形態の違いの他に，土馬の大きさに注目していること，さらに飾り馬から裸馬へ変化する時点を8世紀初頭に求めていることである。裸馬は，それ以降，小型化がすすむとともに馬としての形態が崩れ，10世紀前半でほぼ消滅する，という土馬の大まかな変遷過程については今日でもほぼ承認されているところであろう。

土馬の性格に関しては，出土地から水との関連が当初より指摘されていた点については前述したが，その他に前田氏は，死者のミタマ送りという呪術的儀礼行為の依代としての一面があったことをあげて，土馬の発生が一元的なものではなかったと推察している。同様に，九州の土馬を中心に検討を行った小田富士雄氏も，福岡県・竹原古墳の壁画を龍媒伝説とみる金関丈夫氏の解釈を引用して馬と水霊との結びつきを指摘する一方で，『肥前国風土記』佐嘉郡の条に記された説話に注目し，神の好み給う乗物を奉献することによって神を慰め，神助を賜らんとする願望を込めた物であったとして，土馬の性格が一様でなかったと考えられている[5]。

このように，土馬の性格を水神・水霊との関係以外にも求める説もないわけではないが，石田英一郎氏が明らかにされたように[6]，馬を水神に献じる祭祀はユーラシア全体に及び，日本においても雨乞いのために農耕儀礼として牛馬を殺すことが行われており，牛ケ淵・牛沼など地名にも残っていることから，土馬と水神祭祀とは密接な関係にあるという説が有力である。

水神を祭る大きな理由として，祈雨・止雨があげられる。そこで，祈雨を中心に水に関連し

た種々の祭祀を取り上げ，それぞれの祭祀の内容に沿って土馬の性格を検討するとともに，これまで主として土馬の発生に注意が向けられてきたけれども，逆に土馬が放棄されるに至る事情を明らかにすることも，また，土馬の性格を知る上で重要であろうと思われる。

第2節　漢神祭祀と土馬

皇極紀元年7月条には次のような記事が見える。

戊寅，群臣相語之日，随村々祝部所教，或殺牛馬。祭諸社神。或頻移市。或禱河伯。

ここには，旱りに対処するため，村々の祝部が行った祈雨の方法が述べられている。農民にとって大切な牛馬を殺すこと，諸社の神を祭ること，市を移すこと，そして河の神である河伯に祈ることである。

市を移すことについては，梅原隆章氏が，市を飲料水が湧くところとすると，それを移すことにより，水神を喜こばせたり，逆に怒らせることになったという解釈をしている[7]。一方，市は陰であるから，陰を移すことにより，旱魃を和らげ，雨を招こうとする陰陽思想で解釈する説もある[8]。

河伯というのは，文字どおり河の神で馮夷とも記され，『楚辞』，『山海経』によれば，四つの顔をもち，2匹あるいは3匹の龍に引かせた乗物に乗っている[9]。

殺牛馬に関しては，『続日本紀』の延暦10年9月甲戌条に，

断伊勢。尾張。近江。美濃。若狭。越前。紀伊等国百姓，殺牛用祭漢神。

とあり，また『日本霊異記』には次のような説話が記されている。8世紀の中葉，摂津国のある富農の当主が，漢神の祟りを免がれるために，牛を殺して漢神を祀った，というのである。いずれも殺牛馬が漢神祭祀であることを明確に記しているが，祈雨が目的であったとは言えない。

したがって，皇極期の記事と漢人祭祀を結びつけることに対して，そうではなく農耕儀礼に基づくとする佐伯有清氏の説[10]も出てくるのであるが，下出積世氏の反論[11]にみられるように皇極期になって突然に殺牛馬に関連する記述が現れること，「移市」・「禱河伯」と併記されることなどから考えて，やはり7～8世紀に拡がった民間道教として捉える方が妥当であろう。注意したいのは，漢神祭祀としての殺牛馬は祟る神を応和するためであって，旱魃は祟りの具体的な表われの一つにすぎないことである。

殺牛馬に対しては天武4年・天平13年，さらに延暦10年に禁止令が出され，それを犯した者には徒一年から二年半という重罰が科せられている。

殺牛馬の風習が知られる考古学的資料としては大阪府茨木市郡遺跡・八尾市中田遺跡・高槻市郡家今城遺跡で，いずれも一頭分の馬をおさめるには小さすぎる土壙から馬歯・馬骨が出土した例をあげることができる。土壙には馬歯・馬骨と共に焼土・灰・炭が混入している点に注目した水野正好氏は，これを共食と，その後の焚焼が行われた結果とみている[12]。

労働力として貴重であった馬を殺すかわりに土馬を用いるようになったと考えた場合，まず

飾り馬である必要はない。そして馬体をおさめた土壙の中に他の祭祀遺物が含まれなかったように，土馬もまた土壙に単独でおさめられているという共通した祭法が採られるはずである。そこで，あらためて土馬の出土地と出土状況に着目すると，確かに水に関連する遺構から多く出土しているけれども，土壙・柱穴・包含層から出土する例も稀ではなく，その場合には他の祭祀遺物を伴出しないで土馬が単独で発見される。このことは水に関連した遺構から出土する土馬が各種の祭祀遺物を共伴するのと大きく異なっている。加えて，北陸地方では炭化物や焼土とともに発見された土馬3例が知られている[13]。

以上，漢神祭祀としての殺牛馬と，土壙など水と関連しない遺構から出土する土馬とは祭式の上から幾つかの類似点が指摘できるのである。漢神祭祀が直接に祈雨とは結びつかないとすれば，この場合の土馬も祈雨を目的とした祭祀に用いられたと考えることはできない。

第3節　生馬奉献と土馬

天平3年12月乙未条に「神馬者河之精也。」とあるように馬を神聖化する観念は，龍媒伝説を描いたとされる竹原古墳の壁画からもわかるように，水と深くかかわっている。そして天平11年3月癸丑条，神護景雲2年9月辛己条では，いずれも神馬は青毛白髪尾であり，沢に出現すると記されている。この青毛白髪尾の馬は，『皇太神宮儀式帳』に

> 荒祭宮正殿遷奉時神財八種，青毛土馬一疋，高一尺，鞍立髪金餝，月読社遷奉神財十六種，青毛土馬一疋，高一尺。鞍立髪金餝，在東一殿，滝原宮遷奉時神財十一種，青毛土馬一疋，高一尺，鞍立髪金餝。

とあるなかの青毛土馬に通ずる。

神性をおびた馬であると同時に神の乗り物として，神馬は美しく飾られた土馬に造形されたのであった。『肥前国風土記』佐嘉郡の条でも神の乗物として土馬が作られているが，こうした土馬は決して高価な生馬のかわりとして作られたものだと言えないことは，小田富士雄氏も指摘しているとおりである[14]。

これに対し，生馬の奉献は文武2年4月戊午の条に芳野水分峰神に対して行われたのを初見として，祈雨・止雨を目的に仁和期まで37件に及ぶ[15]。祀る対象としては，特に丹生川上神と貴布禰神が選ばれ，祈雨の際には黒毛馬が，祈止雨の際には白毛馬が，それぞれ用いられた。これらの馬も四手を付け，馬具をつけ飾られていた点では神の乗り物としての土馬と共通しているが，毛色が異なる。

祈雨・止雨祭祀の場合，毛色は重要な要素であり，井上正一氏は，土馬自体の焼成時における色調の差が黒馬・白馬を用いて祈雨と祈止雨にわけられた可能性を述べているが[16]，その識別は困難であり，彩色の痕跡も認められない。

生馬奉献の記事にも土馬が生馬のかわりに献ぜられた例はみない。

第4節　大祓と土馬

大祓の初見は天武5年の「四方為大解除」であるが，6月と12月行うことが恒例化するのは大宝2年からである。大祓に関する史料として『神祇令』諸国条には，

凡諸国須大祓者。毎郡。出刀一口。皮一張。鍬一口。及雑物等。戸別。麻一条。其国造出馬一疋。

とあり，また『大祓祝詞』には，

高天原爾耳振立聞物止馬牽立氏今年六月晦日夕日之降乃大祓爾

とあるように，馬が重要な役割を果していたことがわかる。

一方，『貞観儀式二季晦日彼贖儀』には，

鉄偶人36枚，木偶人24枚，御輿形4具，幣帛24枚，金粧横刀2口，五色薄絁各1丈1尺，坩杯各2口。

と料物の内容が記してあるが，そのなかに土馬は含まれていない。

しかし，平城京の南端，羅城門からさらに南へ下ったところにある稗田遺跡の旧河川からは人形30点・竈形100点・人面墨書土器70点とともに土馬180点が出土している。また，平城京左京八条三坊にある堀川からは土馬123点，左京九条三坊の同じく堀川から土馬58点，右京八条一坊の側溝からは土馬141点，長岡京では，京の西端にある小泉川と菩提寺川の合流する付近(西山田遺跡)から土馬93点など多量の土馬が他の祭祀遺物である人面墨書土器・ミニチュア竈・人形・斎串などと共に出土しており，数量的にも，出土状況からみても，これまでの土馬とはかなり異なった様相を示す。

特に，土馬を含む多量の祭祀遺物が水の道から出土することは，川の近くで実修された禊祓儀礼の一つである大祓に結びつけ易い。

禊祓儀礼の基本型[17]は，本主が麻に一撫一吻した麻を祝師が持ち振って祝詞を読む，その間に本主は贖物に一撫一吻し解綿を解く，そして散米を散き，麻・人形などを川に流す，というもので，料物の内容によって解除・禊，大祓・科祓，御麻，御贖に分けられる。その場合，大祓には人形がないとされるので，土馬と共に人形が用いられている祭祀を大祓とは言えないので，禊祓儀礼と呼ぶことにする。

禊祓儀礼の次第で明らかなように，その目的とするところは穢・罪穢を事前・事後に除くことにある。

水野正好氏は，土馬について役疫神の騎乗する馬としての性格を与えたが，8世紀以降は宮廷官人，百官の罪穢を担い行くものへと，その性格が変ってくる，と述べておられる[18]。土馬だけでなく，共伴する人形もミニチュア竈も，人面墨書土器も総て罪穢を川に流しやろうとする祓除にかかわる機能をもつとされる。

確かに8世紀になると，土馬は出土状況だけでなく，形態も神の乗り物として馬具を着装していたもの，つまり飾り馬から，裸馬に変化する。その形態的な変化を簡略化とみるのではな

く，神の乗り物から罪穢を担うものへという性格の変化として捉えられないこともない。

ところが，その後の論文では，水野氏は禊祓儀礼に用いられる土馬も前代の土馬同様に役疫神の乗騎であるとされ，前説を取り下げている[19]。その根拠となったのは，水の道から出土する土馬の多くが破損していることであり，損壊するという行為は役疫神の乗る馬を足留しようとしたからに他ならない，と推定されるからである。因みに長岡京出土の土馬に関して，木村泰彦氏によれば頭部四肢の胴後部に対する残存率は，それぞれ20%前後である，という[20]。

土馬を禊祓儀礼の文脈のなかで捉えるべきか，そうでないかを推断する場合に注目されるのが文部呪術である。

文部呪術は，漢神に人形と刀と漢音呪言とによって禍災を除き帝祚を延べんことを請うもので，大祓と併修されるが，異質性は厳然と意識されていた，という[19]。呪術には，身を固める方向に働く持禁と，外敵を除く方向に働く解忤とがあるが，役疫神が乗騎した土馬に対する破壊行為はまさに呪禁呪術に照応するものといえる。

そうであるとすると，水野氏が漢神ではなく，邦土の祟り神として素盞嗚尊をクローズアップした意味も再検討する必要がある。すなわち，土馬が生馬のかわりに用いられた可能性があるのは殺牛馬を行う漢神祭祀においてのみであり，それは土壙におさめるという共通した祭法を取ることは前述したとおりであるが，水の道で発見される土馬もまた，文部呪術を通して漢神とつながる可能性がでてきたわけである。

後者にみられる土馬の破壊行為は，長岡京・西山田遺跡の旧河道を見下す丘陵裾部から検出された土壙出土の土馬が同様に人為的破壊を受けていることからも明らかなように，出土地の違いにかかわりなく行われている。

また，飾り馬から裸馬への変化については，小笠原氏の分類では粘土紐による鞍の表現がないため裸馬とされていた型式のもののなかにも，強いナデによって背中をくぼませることによって，鞍を表現するものがある。この他に墨書により馬具を表現するもの，手綱を線刻，鞍を粘土貼り付けによって表現するものなど，木村氏によれば長岡京期，水の道から出土する土馬も基本的には飾り馬を意識したものであったと言い[21]，さらに言えば，それは神の乗り物として土馬の性格は一貫して変らなかった，ということになる。

第5節　土馬の消滅

平城京・長岡京を通じて多量の祭祀遺物が京内・京外の各所から出土している。金子裕之氏は，この要因として複数の場所で同時に祭祀が行われたことをあげ，平安時代に知られる七瀬祓の原型がすでに平城京にあったとみる[22]。木村氏は大量の祭祀遺物が出土した場所に限って祓所とすると，長岡京の場合には京の縁辺に限られ，かつ自然河川において行われている点から，七瀬祓の原型は長岡京期に求めている[23]。

七瀬祓に関する初見は『貞信公記』延喜10年正月27日条にある「三元解除」で，『応和三年御記』には，

蔵人式部藤原雅材供御祓物，令下天文博士保憲赴難波湖及七瀬三元河臨祓，

と記されている。

大祓などの禊祓儀礼も七瀬祓(河臨祓)も水の呪力に対する信仰という点では変らないのであるが，河臨祓の場合は天神としての玄宮北極・諸星辰，地神としての泰山府山と並ぶところの水神を祀る。

儀式次第をみると，禊祓儀礼では一撫した衣を祓終って流すのに対して，河臨祓では祓を行ったのち，持ち帰ってこれを着る。すなわち，文部呪術が御贖の成立に影響を与えたのは主として解忤の方向であったとすると，道呪が河臨祓の成立に与えたのは持禁の方向だと言える[24]。

水にかかわる祭祀である禊祓儀礼として七瀬祓について，その内容にふれたのは，七瀬祓の創出が単に祭場の多少や位置の問題ではないことを示したかったからに他ならない。換言すれば，土馬の消滅は七瀬祓(河臨祓)の成立に深く関係していると考えたい。

河臨祓も含めて撫物系祭祀というのは個人的祭祀であるけれども，『応和三年御記』に記されている如く，祈雨のためにも行われている。特定の祭祀がある目的のためだけに行われることはむしろ稀であり，漢神祭祀にも祈雨を目的とした例のあることはよく知られている。

馬をめぐる祭祀のなかで，もっぱら祈雨・止雨を目的としたのは生馬の奉納だけであるが，仁和期以降は祈雨の奉幣は散見しても，必ずしも馬を奉納していない[26]。これに替って盛んになるのが，神泉苑や室生龍穴での請雨経法である。

神泉苑で請雨祈禱が最初に行われたのは天長元年，空海による例をもって初見とするが，この記事については疑問が持たれている[26]。この後，斉衡元年まで行われたという記録がないこと，また天長年間には神泉苑はまだ祈雨霊場としてではなく，遊宴場としての性格が強かったからである。延長年間以降は祈雨霊場の性格のみになる。

『三代実録』貞観17年条には，古老の言葉として神泉苑の池中に神龍がおり，旱魃の時に「決水乾池，発錘鼓声」とすると，「必然之験也」と伝えている。こうした素朴な龍信仰が，9世紀中葉以前からあったことが知られるのだが，そうした信仰は密教の影響によって10世紀前半には龍神信仰へと発展していく。そして，延長2年には，請雨祈禱とともに，陰陽道の祈雨行事である五龍祭が併修されるようになるのである。

土馬が祭祀の場から消えていった10世紀前半という時代は，河臨祓や請雨祈禱・五龍祭などといった新たな思想的背景をもった祭祀が成立してくる時代であったといえよう。

註

1)大場磐雄『上代馬形遺物に就いて』(『考古学雑誌』第27巻第4号掲載，東京，昭和12年)。
2)前田豊邦『土製馬に関する試論』(『古代学研究』53号掲載，大阪，昭和45年)。
3)泉森皎『大和の土馬』(『橿原考古学研究所論集創立三十五周年記念』所収，橿原，昭和50年)。
4)小笠原好彦『土馬考』(『物質文化』25掲載，東京，昭和50年)。
5)小田富士雄『古代形代馬考』(『史淵』第105・106合輯掲載，福岡，昭和46年)。
6)石田英一郎『新版河童駒引考』(東京，昭和41年)。

7)梅原隆章『日本古代における雨乞』(『日本歴史』74号掲載，東京，昭和29年)。
8)小笠原好彦『土馬考』の注に，朝鮮総督府『釈奠・祈雨・安宅』(1928年)から紹介している。
9)林巳奈夫『漢代鬼神の世界』(『東洋学報』第46冊掲載，京都，昭和49年)。
10)佐伯有清『日本古代の政治と社会』(東京，昭和45年)。
11)下出積與『日本古代の神祇と道教』(東京，昭和47年)。
12)水野正好『馬・馬・馬一その語りの考古学』(『文化財學報』第2集掲載，奈良，昭和58年)。
13)村上吉郎『土馬祭祀と漢神祭祀』(『石川考古学研究会々誌』第25号掲載，金沢，昭和57年)。
14)註5，小田，前掲論文。
15)佐藤虎雄『神馬の研究』(『古代文化論攷』所収，東京，昭和44年)。
16)井上正一『上代水神信仰の一形態』(『史元』6号掲載，東京，昭和43年)。
17)小坂真二『禊祓儀礼と陰陽道』(『早稲田大学大学院文学研究紀要』別冊3掲載，東京，昭和51年)。
18)註12，水野，前掲論文。
19)水野正好『招福・除災一その考古学』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集掲載，佐倉，昭和60年)。
20)木村泰彦『乙訓出土の土馬集成』(『長岡京古文化論叢』所収，京都，昭和61年)。
21)同上。
22)金子裕之『平城京と祭場』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集掲載，佐倉，昭和60年)。
23)註20，木村，前掲論文。
24)註17，小坂，前掲論文。
25)註15，佐藤，前掲論文。
26)佐々木令信『空海神泉苑請雨祈禱説について』(『佛教史學研究』第17巻第2号掲載，東京，昭和50年)。

第5章　煤谷川窯址・畑ノ前遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

三　辻　利　一

第1節　須恵器の産地推定の考え方

考古遺物の産地を推定する基本的な考え方は，供給先の古墳・遺跡から出土した遺物と原産地または生産地の遺物を材質の面からみて比較し，類似しているかどうかを探る点にある。考古学者ははじめ肉眼観察による比較で産地の推定を行ったのであるが，主観的な判断におちいる恐れがあるので，最近では種々の自然科学的手法を導入し，客観的な判断をする研究が進められている。

須恵器については好都合なことに，生産地である窯址が全国各地に残っているので，まず，ここから出土する多数の須恵器片を分析し，各地の須恵器の化学特性を整理しておくと，須恵器産地推定への道が開かれてくる。窯址の残っていない土師器・弥生土器・縄文土器などの産地推定はより難しい。

須恵器の素材は粘土である。粘土を高温焼成(～1350°C)して須恵器をつくっても，その化学特性に変動が起らないことは筆者らの粘土の焼成実験によって確かめられた。このことは，須恵器生産の現場である窯址から出土する須恵器についても確認できる。すなわち，窯址には十分焼成した硬い破片から未焼成に近い軟らかい破片にいたるまで，種々様々の焼成度の須恵器片がある。これらを分析した結果，化学特性に有意な差は認められず，一窯址出土須恵器としてはばらつきはあるものの，一定の化学特性をもつことがわかった。この結果に基づいて，各地の窯址出土須恵器の化学特性の地域差に関する研究が進められた。筆者は十数年間にわたって全国各地の窯址出土須恵器を分析してきた結果，窯址出土須恵器の化学特性には地質構造に関連して地域差があることが示された。窯址出土須恵器の分析データは，これからも集積していく必要がある。本稿では，京都府相楽郡の煤谷川窯出土須恵器の分析結果について述べる。

次に，実際に遺跡出土須恵器の産地推定をする段階でもう一つの難しい問題が出てくる。窯址数が多いために，分析データのみで産地である窯址を決定することが難しいのである。何らかの形で窯址を整理する必要がある。年代別に整理するのがもっとも常識的であろう。須恵器の考古学研究の結果，その器形・形態からおおよその年代が知られるからである。考古学研究によると，須恵器生産は5世紀頃に始まると言われる。この時期の須恵器窯址は，大阪陶邑以外に若干の地方窯が発見されているにすぎない。対象となる窯数が少ないという点で，5～6世紀代の須恵器の流通はもっとも取扱い易い問題である。しかし，この時期と言えども，無方針で研究を進めてはいけない。筆者は，古代社会では運搬力は非力であり，したがって，地方窯周辺の古墳には必ず地元産の須恵器があるはずであると考えた。このような見通しにたって，

地方窯周辺の古墳出土須恵器の分析から始めた。これまでのところ，予想どおり各地の地方窯周辺の古墳には地元産の須恵器が検出された。胎土分析の結果は，さらに考古学者による肉眼観察でも確認されている。ところが，胎土分析からみて地元産に一致しない須恵器も相当数検出されている。これらのほとんどは大阪陶邑産須恵器と同質の胎土をもっていた。この結果から，5～6世紀代の全国の古墳(岩手県から鹿児島県にいたるまで)に大阪陶邑産須恵器が供給されていたのではないかという推察が出てくる。なにゆえ，大阪陶邑産須恵器が全国各地の古墳に出土するのかは古代史研究上，きわめて重要な問題であろう。

8世紀以後の律令体制下では須恵器生産は地方にまで拡大するため，窯址数が多くなる。そのため，須恵器の流通を追う研究はより複雑になる。しかし，この問題も窯址出土の須恵器の分析データを整理しておき，地方窯周辺の遺跡出土の須恵器から分析することで解決への道が開かれてくる。ただ，より複雑になるため，考古学者による肉眼観察のデータも必要となり，考古学者と分析化学者の共同研究として進めるべきものと，筆者は考えている。

ここでは京都府相楽郡精華町の畑ノ前遺跡出土須恵器の分析結果を，まず，地元の煤谷川窯出土須恵器に，つづいて大阪陶邑産須恵器と対比した結果から産地について考えてみた。

第2節　分析方法

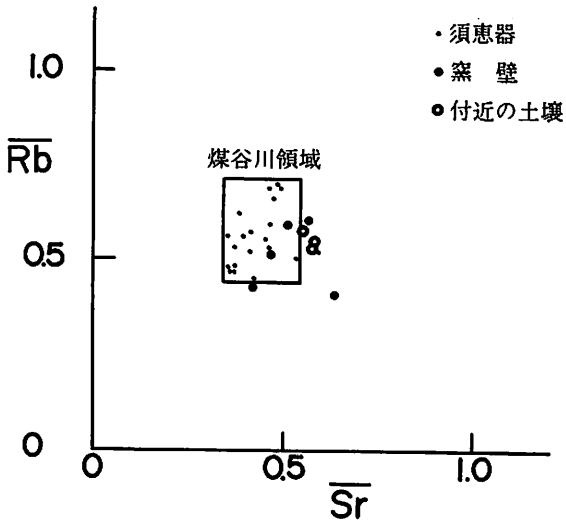
須恵器資料は表面を研磨して，灰釉等の付着物を削りおとしたのち，タングステンカーバイド製乳鉢(硬度9.5)の中で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は塩化ビニール製リング枠の内に入れ，約15トンの圧力を加えて，直径20㎜，厚さ3㎜の錠剤に成形し，蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置でTiを2次ターゲットにして真空中でK・Caを，また，Moを2次ターゲットにして空気中でFe・Rb・Srを測定した。定量分析には岩石標準試料JG－1を標準試料として使用した。分析値はJG－1による標準化値で表示された。

第3節　分析結果

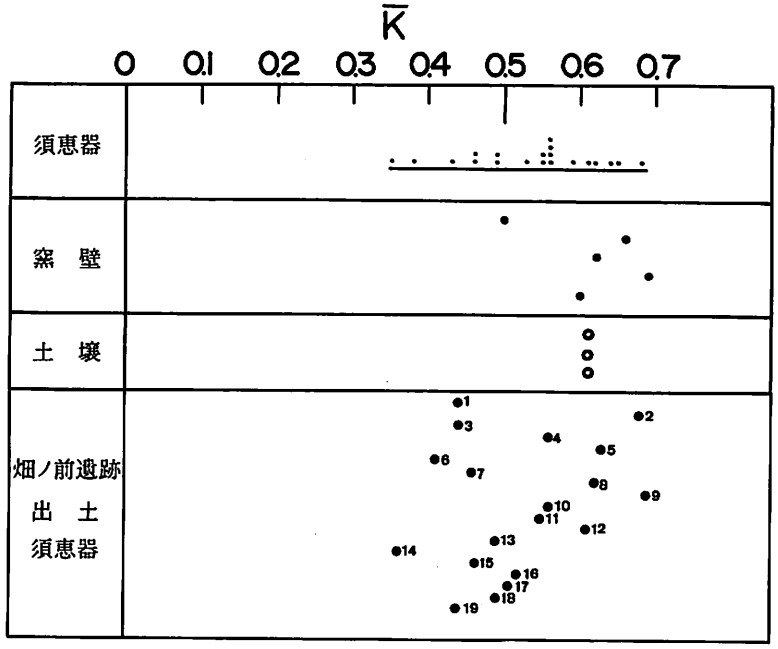
1．煤谷川窯址出土須恵器

第172図には煤谷川窯出土須恵器のRb—Sr分布図を示す。この分布図を最初に描くのは，各地の窯址出土須恵器を分析した結果，地域差をもっともよく表示する分布図であることがわかったからである。第172図をみると，一窯址出土須恵器としてまとまっていることがわかる。一窯址についてはこの程度のばらつきがあるのは普通である。これらをほとんど包含するようにして，煤谷川領域をとってある。この領域は特に定量的な意味をもつものではなく，煤谷川窯の須恵器はこの領域に分布するという定性的な意味をもつ。したがって，遺跡出土須恵器の産地推定をする場合にも，この分布図を使って目安をたてるという上に，この分布図は役立つ。定量的に産地推定を行うには，まず，生産地と推定される母集団を選択し，その上で，いくつかの因子を使って，母集団の重心からのマハラノビスの汎距離を計算して行う。

第172図にはまた，煤谷川窯の窯壁と窯周辺の土壌の分析結果もプロットしてある。両者とも



第172図　煤谷川窯址出土須恵器のRb—Sr分布図

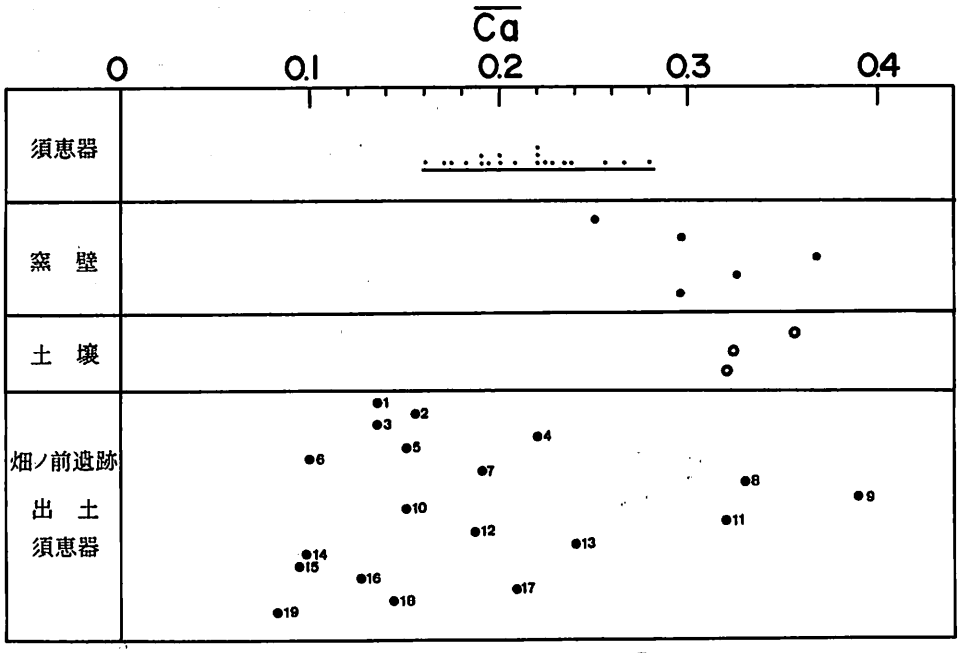


第173図　煤谷川窯址出土須恵器のK量

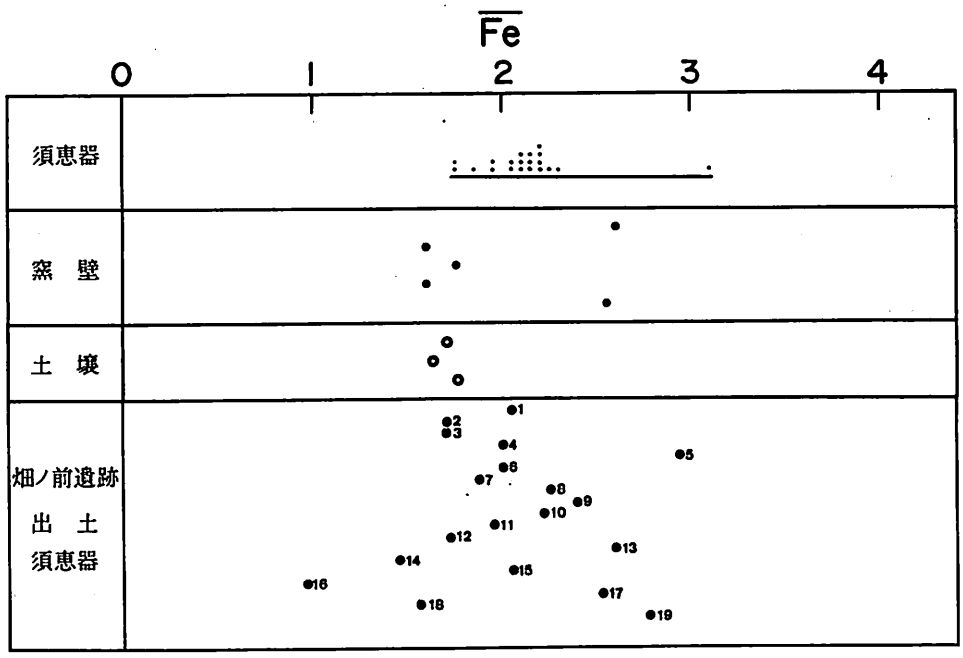
須恵器にぴったりとは一致しないが，よく類似していることはわかる。

このように，Rb—Sr分布図で煤谷川窯出土須恵器と窯壁・土壌に類似性が認められたため，他の因子についても比較してみることにした。第173図にはK因子を対比してある。K因子では須恵器・窯壁・土壌は全く対応するとみてよい。第174図にはCa因子を対比してある。須恵器に比べて，窯壁・土壌にはCa量が多く，両者は対応しないが，窯壁と土壌はよく対応している。第175図にはFe因子を対比してある。須恵器に比べて窯壁・土壌にはFe量がやや少なく，両者は対応しないが，Ca因子と同様，窯壁と土壌とはよく対応していることがわかる。

以上の結果，窯壁と窯周辺の土壌の化学特性は同じであるが，窯址出土の須恵器の化学特性は類似しているものの，窯壁・土壌とは少し異なることがわかった。このことは窯壁は周辺の土壌そのものであることを意味する。そして，須恵器粘土は窯周辺の土壌とともに同じ岩石に由来するものであろうが，土壌との間に風化による若干の差があることを意味すると考えられる。このデータもまた，須恵器の素材となる粘土は地元産であることを支持する。このようなことは，各地の窯址出土須恵器，窯壁，周辺の土壌の間にしばしばみられる。



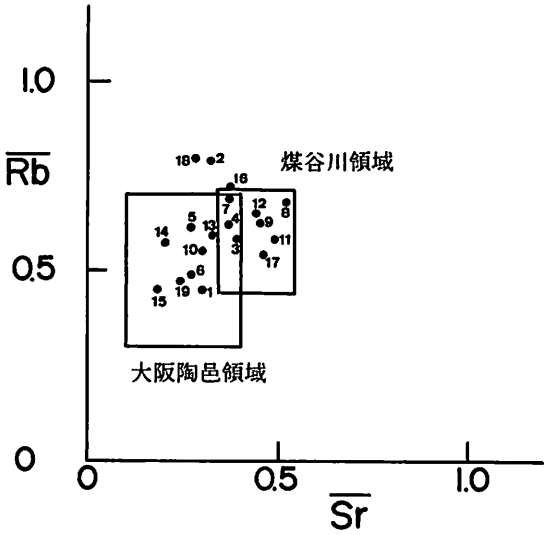
第174図　煤谷川窯址出土須恵器のCa量



第175図　煤谷川窯址出土須恵器のFe量

2．畑ノ前遺跡出土須恵器

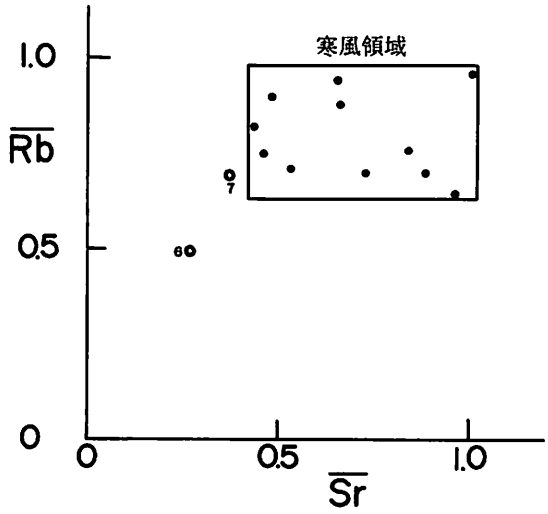
今回は図面上で，大阪陶邑産および煤谷川窯産の須恵器に対応した。第176図には畑ノ前遺跡出土須恵器のRb—Sr分布図を示してある。この図にはまた，大阪陶邑領域と第172図による煤谷川窯領域を示してある。もちろん，この領域は定性的な意味しかもたないが，一応目安として，



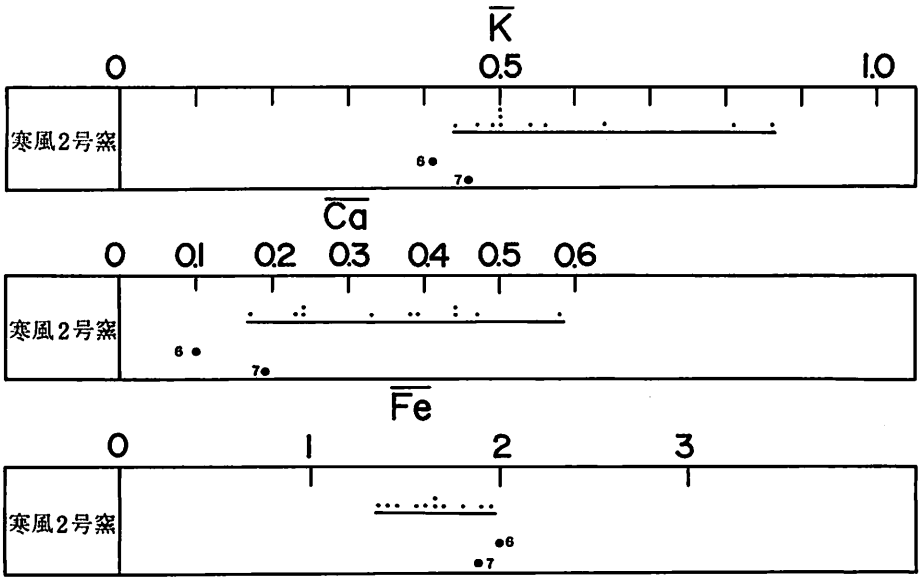
第176図　畑ノ前遺跡出土須恵器のRb—Sr分布図

煤谷川領域に入るものはNo.3・4・7・8・9・11・12・17の8点，大阪陶邑領域に入るものはNo.1・3・4・5・6・7・10・13・14・15・19の11点で，No.2・16・18の3点は両領域には入らない。この結果を他の因子についても調べてみた。第173図にはK因子を対応させてある。煤谷川領域は大阪陶邑領域と完全に重複する。そうすると，畑ノ前遺跡の19点の須恵器はすべて，この重複領域内に分布した。また，第174図にはCa因子を対応させてある。Ca因子でも煤谷川領域と大阪陶邑領域は重複するが，大阪陶邑産須恵器にはCa量が少なく，Caの値が0.05程度のものまでが含まれる。第174図をみると，Ca量が少なく，煤谷川領域に対応しないものはNo.1・2・3・5・6・10・14・15・16・18・19の11点である。このうちのNo.1・3・5・6・10・14・15・19の8点はRb—Sr分布図でも大阪陶邑領域に入った。また，第174図で煤谷川領域に入ったものはNo.4・7・12・13・17の5点であり，このうち，No.4・7・12・17の4点はRb—Sr分布図でも煤谷川領域に入った。No.8・9・11の3点はRb—Sr分布図で煤谷川領域に入ったが，Ca量が多く，第174図のCa因子では煤谷川領域をずれる。第175図にはFe因子を対応させてあるが，畑ノ前遺跡出土須恵器の大部分のものは煤谷川領域に対応する。しかし，No.14・16・18の3点はFe量が少なく，煤谷川領域をずれる。

以上の結果，全因子で煤谷川領域に入ったのは4・7・12・17の4点であり，これらは胎土からみて煤谷川窯産須恵器である可能性をもつ。一方，全因子で大阪陶邑領域に対応したのはNo.1・3・5・6・10・14・15・19の8点であり，これらも大阪陶邑産須恵器である可能性をもつ。No.2・18はRb—Sr分布図で両領域をずれ，No.8・9・10の3点はCa量が多くて両領域に対応しない。これら5点は産地未定としておく。また，No.13・16はその分布位置からみて，大阪陶邑産である可能性を十分にもつものである。



第177図　寒風2号窯址出土須恵器のRb—Sr分布図



第178図　寒風2号窯址出土須恵器のK，Ca，Fe量

なお，器形からみて，No.6・7は岡山県邑久町の寒風窯址群産の可能性をもつのではという推定があったので，第177・178図に寒風2号窯の須恵器と対比させてみた。いずれの因子でも対応せず，寒風窯産の可能性は少ないとみられる。

本稿では畑ノ前遺跡出土須恵器を胎土からみて，煤谷川窯および大阪陶邑産須恵器に対応させたが，同時期にある他の窯址出土須恵器との対応をすべきであるのは当然である。同時期の窯址が十分しぼり切れなかったので，ここでは定量的産地推定は行わず，図面上における定性的な産地推定にとどめたことをことわっておく。

第6章　畑ノ前遺跡の文献学的考察

藤　本　孝　一

第1節　はじめに

発掘調査地点の京都府相楽郡精華町大字植田は，古代において稲八妻の領域であった。発掘調査により，弥生時代と古墳時代から奈良時代にかけての遺構が検出された。奈良時代の遺構は2時期にわたっており，以降は何も建てられていない。奈良時代におけるこの地に蟠踞していた氏族は，稲八妻氏である。後述するが，石清水神宮領稲八妻庄の庄域から推定するに，隣接する祝園郷の氏族について井上満郎氏は論稿『平安京域設定の歴史的研究』[1]の中で，阿刀連人万呂・綾部淨磨を指定，他に疑問符を付けて稲蜂間連仲村女と稲蜂間首醜麻呂を掲げておられるが，稲八妻と祝園とは峻別すべきであろう。

第2節　稲蜂間宿祢仲村女

稲蜂間宿祢仲村女の宮廷における活躍を詳述し，そこから同地の氏族を窺い，本貫地と推定しうる掘立柱建物群の検出により，発掘地点を稲蜂間氏関係者の邸宅と推定したい。また，仲村女については奥田裕之氏が『稲蜂間宿祢仲村女について』(京都教育大学史学会『桃山歴史・地理』第16・17合併号掲載，京都，昭和55年)と題して，仲村女の一生を詳述している。本稿も氏の論稿にあずかっている。

稲蜂間宿祢仲村女の生没年は未詳であるが，天平19年(747)から天平宝字9年(765)の間に文献に現れ，孝謙女帝のもとで活躍した女性の一人であった。まず，年次を遂って事蹟を述べる。

最初に史料に現れるのは，天平19年11月19日に因幡中村の宣で造東大寺司へ唯識論疏を奉写すること[2]が下った。この年の9月には東大寺の大仏の鋳造が始まっていた。朝廷での仏寺造営の中で，孝謙女帝も仲村女を通じて，経典書写を命じたわけである。完成は3年後で，天平勝宝2年12月23日付『造東大寺司解案』[3]に「申請経師等布施事」として，奉写「論并疏三百二巻」中に，この論疏もみえている。

『間写経疏目録』[4]によると，

成唯識論疏一部十六巻円測師撰八巻以天平二十一年二月二十五日奉請
内裏使玄蕃頭王　八巻未請

依天平十九年十一月十九日因幡中村宣所奉写

とあり，天平21年に16巻中8巻が納められた。写経製作帳である『写経料紙納受帳』[5]に，

又自政所納黄紙四百張

右依十九年十一月十九日真(因)深(幡)女(中)宣(村)奉写唯識論疏二部料受大部曽屋万呂

知他水田

伊福部男依

使金人珎努伊加保

と，料紙の数量が記載されている。唯識論疏二部料として黄紙400張を納めたとある。先の『目録』に「一部十六巻」としているが，8巻2部計16巻で，その内の一部8巻が天平21年に納められたと解したい。『仏書解説大辞典』によると，唐の円測(613～696)の著述として「20巻或10巻」とみえ，8巻の編成したものがみえない。この疏は伝存しない佚逸書である。この8巻本の記述の存在も唯識論疏を研究する場合，大いに参考になろう。

また，稲蜂間宿祢仲村女の名前であるが，史料上に種々の書き方がなされている。古文書に現れるのは，「因八麻」9例，「因幡」・「因八万」各4例，「印八麻」2例，「因八幡」1例であり，正史の『続日本紀』は4例記載するが，全部「稲峰間」に表記が統一されている。

天平勝宝元年(749)に聖武天皇が退位し，皇太子阿倍内親王が即位(孝謙天皇)した。同4年(752)，東大寺大仏開眼供養が行われ，さかんに仏事がもりあがっていた。同6年(754)9月8日[6]に『七仏神呪経』・『無垢称経』・『地蔵経』を，12月3日[7]に『最勝王経』・『七仏所説神呪経』を，内侍の役として書写事業を宣している。内侍は令の規定によると，

内侍司[8]

尚侍二人，掌供奉常侍，奏請，宣伝，検校女孺，兼知内外命婦朝参，及禁内礼式之事，典侍四人，掌同尚侍，唯不得奏請宣伝，若无尚侍者，得奏請宣伝，掌侍四人，掌同典侍，唯不得奏請宣伝，女孺一百人，

とある。勅旨伝宣の権は，尚侍・典侍に限られている。仲村女は，『続日本紀』天平宝字5年(760)正月2日条に「従七位上稲蜂間連仲村女，並外従五下」とあり，宣をしたときは従七位上以下で，尚侍であった。規定では宣を行う権限はないが，土田直鎮氏[9]の研究によると，奈良時代の内侍宣は「女孺別広虫七日宣」との例もあるように，女孺の奉勅の宣まであった。尚侍仲村女も写経の内侍宣をとりあつかった。

天平勝宝7年(755)8月28日[10]の仲村女の宣によって，大般若経70巻書写を下している。天平宝字2年(758)，孝謙天皇は位を淳仁天皇に譲って退位した。同4年(760)，仲村女は法華経など[11]の書写を宣している。淳仁天皇は8月に飛鳥の小治田宮へ行幸し，翌年正月2日に同宮で官人の授位を行ったとき，仲村女も外従五位下を授けられた[12]。ついで，同年4月21日[13]には

外従五位下稲蜂間連仲村売親族稲蜂間首醜麻呂等八人，賜姓稲蜂間連，

と，仲村女の親族8名が連を賜った。仲村女を中心とする稲蜂間氏一族の宮廷奉仕の努力の結果であった。さらに翌6年3月24日[14]には，孝謙上皇の勅を奉じて，石山寺に寄進する一尺鏡4面の鋳造を宣している。この鏡は現存しないが，背面に四神図をあしらった下絵が，『正倉院文書』中[15]に遺っている。8月13日[16]には『梵網経』『四分僧戒本』『四分尼戒本』の書写を宣し，12月12日には，正倉院に所蔵されている欧陽詢真跡屏風一具十二扇を道鏡へ借充える宣[17]を行っている(翌々年7月27日に返還された)。この欧陽詢の屏風は，おしいことに現在の正倉院には伝存していない。

同7年(763)正月9日[18]に外従五位下から従五位下を授けられた。さらに，同年の『続日本紀』

に，

冬十月癸酉，幸山背国，授介外従五位下坂上忌寸老人外従五位上，従五位下稲蜂間仲村女従五位上，

とあり，従五位上へと昇進がめざましい。これは朝廷内部にあって，淳仁天皇・藤原仲麻呂派と孝謙上皇・道鏡派との対立が激化した状況下で，上皇に仕えている仲村女の授位もこの訌争の表れの一つと思われる。翌8年(764) 9月，藤原仲麻呂(恵美押勝)はついに叛乱を起こしたが、失敗して逃走，最後に近江国高島郡三尾崎の勝野鬼江でもって戦死した。乱の直後，賞罰が行われた一連の『続日本紀』の記述中の9月23日条に，

従五位上稲蜂間連仲村女，従八位下醜麻呂等二人賜姓宿祢，

と，仲村女・醜麻呂が宿祢を賜り，仲村女は同日付で，

従五位下吉備朝臣由利，従五位上稲蜂間宿祢仲村女並授正五位上，

と，正五位上を授けられた。孝謙上皇に仕えていた結果であった。仲麻呂が逃亡する際，木津川側に北上するとき，出自地である稲蜂間さらに南山城に勢力をもっていた稲八間醜麻呂などの一族が官軍として，仲麻呂の遁走を大いに妨げた功績によるものであろう。

淳仁天皇も廃位され，淡路国に遷された。孝謙上皇は自ら重祚(称徳天皇)し，道鏡を大臣禅師につけ，政治を支配した。仲村女は天平神護元年(765)正月7日[19]に勲四等を授けられたのを最後にして，文献上から姿が消えた。

宝亀元年(770)，称徳天皇の崩御と共に，道鏡を下野国薬師寺に移して女帝の時代が終焉した。仲村女も山背国相楽郡の稲蜂間氏から氏女として朝廷に出仕し，後宮で働き，女帝の信任をえて，正五位上・宿祢を賜り，勲四等まで授けられた女性であった。

女帝の時代において，仲村女と同様な女性壬生直小家主女[20]がいる。小家主女は，常陸国筑波郡の出身で同郡の采女として宮中に出仕し，従五位下をもらい，称徳天皇のもとで掌膳として仕えたのち，筑波郡へ帰って筑波国造になった。小家主女の五位昇進も，仲村女と同様に，仲麻呂の叛乱直後に行われたものである。後宮に仕えていた仲村女も，その一族稲蜂間氏も，称徳女帝の生涯と共に運命を終えたと思われる。

今回発掘調査された遺跡も，奈良時代までの遺物などの検出を考えたとき，仲村女の盛衰と同じくするものと推量したい。また井戸側に巨木を用いていることに驚かされる。これは平城宮・恭仁宮などの造営のため，高島杣や信楽杣などから材木が泉津に集荷されてきたうちの一本を賜ったことも考えられ，南山城における在地の有力豪族の屋敷地の一つとして，発掘地点を考えたい。

本遺跡が平安時代以降の遺物の検出をほとんどみないのは，稲蜂間氏の衰退と共に，石清水八幡宮領や摂関家領の稲八間荘の荘園となり，荘園の庄家に管理機構が移されたことによると思われる。

第3節　稲八間荘

この地の荘園は，石清水神宮領稲八間荘（「稲間荘」とも記す）がある。その初見は，延久4年（1072）9月5日付『太政官牒』[21]（『石清水田中家文書』）である。この官牒は，後三条天皇が発布した延久荘園整理令によって諸荘園領主が記録所に提出した書類にもとづき，同所によって審査した所領の決裁書である。官牒に記載されている稲八間荘について，下記に掲載すると，

太政官牒　石清水八幡宮護国寺

宮寺所所庄園参捨肆箇處事

一応如旧領掌庄弐拾壹箇處事

山城国肆箇處

（略）

壹處　字稲間庄　相楽郡

水田弐拾玖町（ママ）弐段伍拾歩

四至 限東祝薗稲間堺畷　限南荒陵里参拾壹参拾弐参拾参之南畔
限西畠　限北下狛稲八間堺畷

額田村参条稲捌間里壹坪壹町　弐坪壹町　参坪壹町　肆坪壹町　伍坪玖段　陸坪玖段　漆坪漆段　捌坪壹町　玖坪伍段　拾坪伍段弐佰歩　拾壹坪捌段　拾弐坪玖段　拾参坪伍段佰伍拾歩　拾肆坪伍段　拾伍坪漆段肆拾歩　拾陸坪壹町　拾漆坪壹町　拾捌坪壹町　拾玖坪壹町　弐拾坪壹町　弐拾壹坪壹町　弐拾弐坪陸段　弐拾参坪伍段　弐拾陸坪壹段弐佰歩　弐拾漆坪壹町　弐拾捌坪壹町　弐拾玖坪伍段　参拾坪壹町　参拾壹坪伍段　参拾弐坪参段　参拾参坪弐段佰捌拾歩

下村荒陵里拾玖坪壹町　弐拾坪壹町　参拾坪壹町　参拾壹坪壹町　参拾弐坪壹町　参拾参坪壹町

右，同符偈，同前勘奏偈，国司解状云，田拾参町伍段，畠捌町伍段佰弐拾歩者，本寺注文云，件御庄御放生大会勅供代御庄也，所進天暦四年三月十日国符云，奉免八幡宮御領額田村稲八間里田畠臨時雑役者，其後久無免判，然而又康平六年二月依宮寺解状，国司免除，治暦元年又以免除者，為起請以前之處，勅供代者，可被裁許者，同宣，奉　勅，件庄宜仰彼国，如旧令免除者，

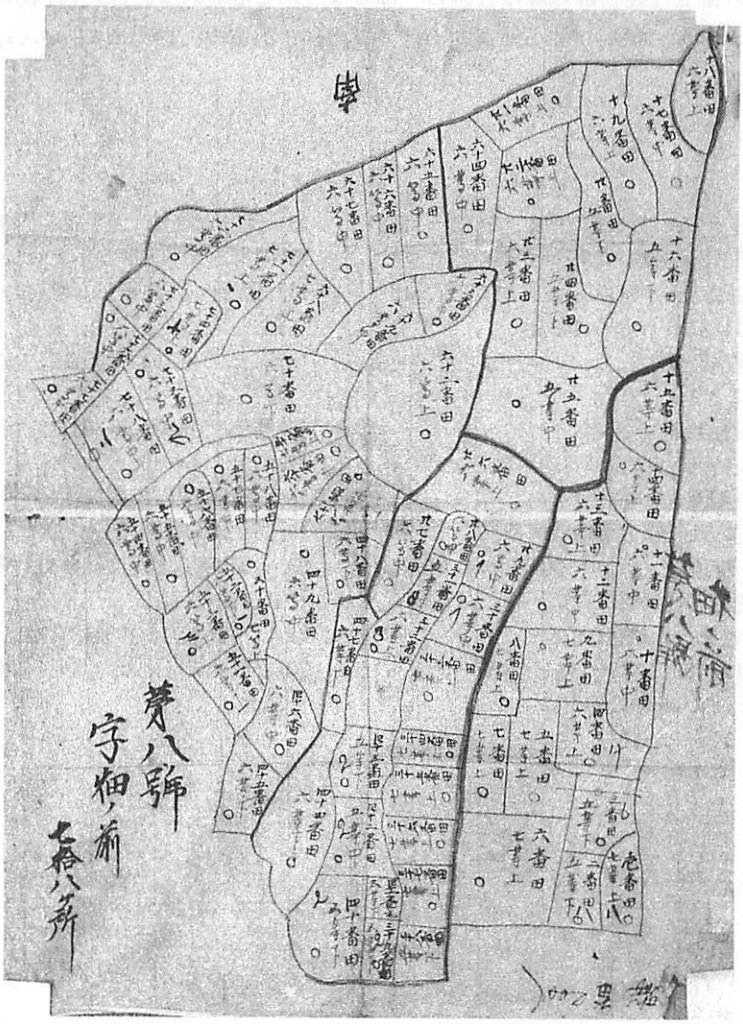
（下略）

とあり，天暦4年3月10日付国符，康平6年2月の宮寺解状による国司免除，治暦元年の免除などにより，記録所では稲八間庄の免除を裁許するようにと奏し，太政官は山城国に命じて，従来のように収公を免除した，とある。事書の部分では水田29町2段50歩であるが，事実書の合計は29町8段50歩と6段の差がある。稲八間庄の内訳は，額田村三条稲捌間里23町8段50歩と下村荒陵里6町とである。

稲八間庄の領域は，東は祝薗との堺，西は山峯，南は荒陵里の31～33坪の南畔，北は下狛と

の堺を画している。南下の荒陵里を現在の地域指定するのは不確実であるが，谷岡武雄氏は『南山城における条里景観と地形の変遷』[22]図を作成され，条里を復元したのと比較すると，発掘地点は条里内に入っていず，荒陵里と思われる南の外側に位置すると思われる。検出の遺構が奈良時代，稲八間氏の一族の建物と想定したとき，大和と山城を結ぶ要路であるため，耕地である条里外の南端に位置するこの場所は，同族にとって最適地であったろう。平安時代に入って，ほとんど平安期の遺物の検出を見ないのも，荘園の一部となり，邸地は廃屋となったと思われる。

この庄で注目される平安時代の事項は，保元の乱で敗れた藤原頼長の息子４人を遠流にする折，この庄から各国に配流したことである。『兵範記』保元元年８月３日条に，



第179図　臼井明家文書第204号(太線より右側が畑ノ前遺跡の東側緩傾斜面にあたると思われる。なお，掲載にあたっては臼井明氏の許可を得た。)

謀叛罪被行流罪，

兼長卿出羽師長卿土佐隆長朝臣伊豆僧範長安芸

已上自山城国稲八間庄被追之，領送使右衛門尉平維繁，府生資良，

とある。『保元物語』ではこの情景を記して，

同(七月)廿八日，此君達終に南都禅定院を出させ給て，山城国稲八妻と云所に移て，同晦日配所へ趣給ふ。追立の官使は検非違使政重・資能也。御馬にめさるべくは，丁の下部承て取寄むとて，取よせたりければ，鞍具足以下あさましげなるにめされて，各色の御姿にて，東西南北へ趣せ給ける御有様，めもあてられず哀也。右大将兼長出羽(ママ)国，中納言中将師長土佐国，左中将高長伊豆国，範長禅師安芸(ママ)国，次第にかうぞ定ける。

とある。4名の君達を奈良の禅定院から，稲八妻に移し，配流の準備を行っている。ある時期から摂関家領の一部として，また稲八妻の地は交通の要衝であったことが分かる。

奈良時代の掘立柱建物群以降は荘園の一部となったと思われる。江戸時代以降の庄屋文書である臼井明家文書の明治初期の地籍図中に，発掘地点の東南の畑の地割がみいだされる(第179図)。

註

1)井上満郎『平安京域設定の歴史的研究』(『日本歴史』第308号掲載，東京，昭和49年)。
2)『大日本古文書』8巻371頁，9巻452頁，10巻442頁，11巻171・439・448頁。
3)同上，11巻439頁。
4)同上，8巻371頁。
5)同上，9巻452頁。
6)同上，3巻606・607頁，11巻11頁。
7)同上，3巻608頁。
8)『令義解』，後宮職員令内侍司条。
9)土田直鎮『内侍宣について』(『日本学士院紀要』第17巻第3号掲載，東京，昭和34年)。
10)『大日本古文書』13巻196頁。
11)同上，14巻328・330・331・369～371・377～379・387・389・394頁。
12)『続日本紀』，天平宝字5年正月21日条。
13)同上，天平宝字5年4月21日条。
14)『大日本古文書』5巻160・161頁，15巻177頁。
15)同上，5巻204と205頁の中に下絵図が挿入されている。
16)同上，16巻359～362頁。
17)同上，4巻192・193頁。
18)『続日本紀』，同日条。
19)同上，同日条。
20)鬼頭清明『木簡の社会史』(東京，昭和59年)，第二章六節。
21)『平安遺文』1083号文書。
22)谷岡武雄『平野の開発』(東京，昭和39年)，32頁。

第7章　中世における精華町の景観

四　倉　俊　昭

第1節　はじめに

京都府相楽郡精華町周辺の地域は，飛鳥・奈良時代以来，中央から地方への交通の経路・一拠点として位置付けられていた。このことは，この地域が宮都から山陽道・山陰道に至る経路であり，すぐ北には山本駅という拠点が存在したことから分る。そして，平安時代以降も，平安京と旧都平城京を結ぶ「與度道」の経路として，重要な要所であることには変りはなかった。しかし，淀川に架橋されなかったことが，次第に交通の中心的地位を，古北陸道の後身にあたる木津川右岸の宇治道(奈良街道)や，木津川の水路に奪われることになった[1]。だが，このことはこの地域の歴史的重要性を落しめる結果とはならず，かえって住民の生活のレベルにおいては，後述のように，本格的に息づき始めるのであった。

第2節　概　　観

平安後期以降，平安京と南都——特に摂関家の宗教的拠点であった興福寺・春日大社——への主要な道程は，史料から次の二つの経路で確認できる。

① 平安京一白川一法性寺一稲荷一藤森一木幡一広野一奈島(現城陽市)一多賀一井手一北河原一椿井一上狛一木津川を渡河し泉木津一奈良，という陸路のコース。

② 淀津・伏見津・木幡津のうち，いずれかの港から巨椋池系由で木津川に入り，泉木津から奈良へという水路のコース[2]。

精華町はこの二つの主要コースからずれることになる[3]。しかし，源平合戦以来しばしば，この地域は歴史の舞台に登場していた。このことは，この地域が政治的・経済的に無視しえないことを示している。元弘元年(1331) 8月，後醍醐天皇の討幕計画が謀臣吉田定房の密告により失敗した元弘の変の後，後醍醐天皇が笠置山寺を行宮として，南山城・大和から兵を募った。その中に山田村の朝日三郎兵衛宗勝，祝園村の小坂三郎兵衛長綱・清水帯刀光秀，下狛村の下狛下野守助利，菅井村の菅井源左衛門泰長，菱田村の菱田監物秋重・大北五郎兵衛光綱などの存在を確認することができる[4]。ここから，この時期「南山郷士」と呼ばれた右のような地侍——名主から成長した層[5]——が，中央のより有力な層と結びつき，歴史の舞台に登場しようとしていることが分る。

さて，中世における精華町の歴史的役割を考えるとき，次の点について留意すべきである。

(1) この地域には，興福寺・東大寺・石清水八幡宮などの荘園が混在しており，各荘園領主同士や荘民同士の争いが絶えなかった。

(2)　この地域が，平安京と南都との間にはさまれているという地理的条件を考えるべきである。中央政府の膝元にありながら，南都に臨接しているため，中央政府や山城国府と東大寺や後に大和国守護となる興福寺との対立，そして延暦寺・石清水八幡宮と興福寺との対立を確認できる。

(3)　木津川の水運の恩恵が，この地域の経済的レベルの向上に寄与したと考えられる。具体的には，『山城国相楽郡村誌』に記載されている「祝園津」の存在である。この史料は比較的新しいものであるが，狛野荘が木津川をはさんで両岸に範囲を有していたことから，このあたりの両岸の交流が想定でき，充分に中世に存在していたと考えられる[6]。

(4)　前述の如く，交通の重点が木津川右岸に置かれたものの，住民レベルにおいては経済上重要な経路である。これについては，奥田裕之氏が考察されている[7]。ここでは「菱田宿」について次節で若干述べたい。

上記の(1)〜(4)に留意しながら，次に中世における精華町の復元を試みたい。

第3節　精華町の荘園

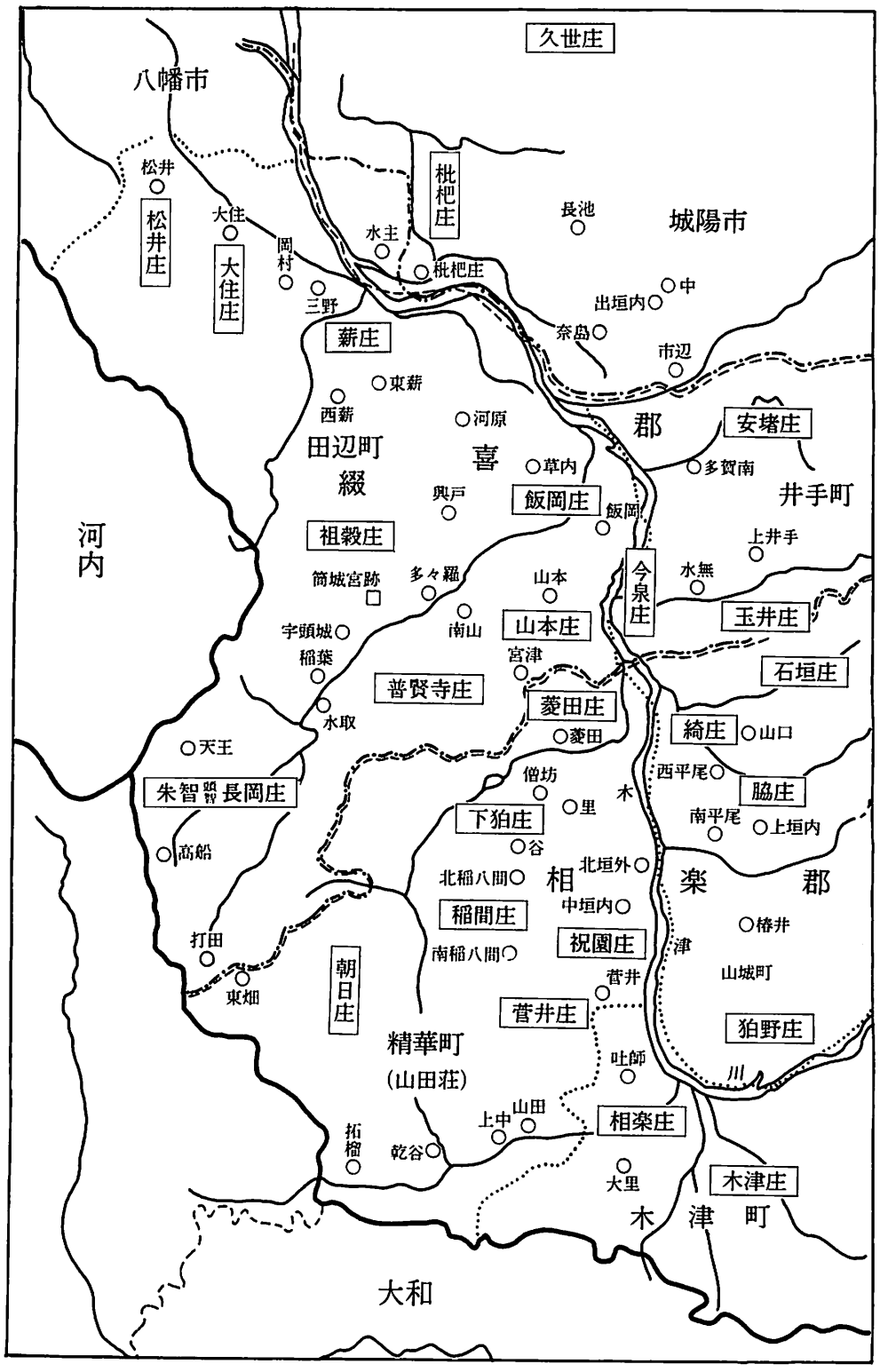
精華町には，興福寺領の菅井荘，摂関家領から春日社領となる稲八間荘，石清水八幡宮領の稲八間荘(この二つの稲八間荘は，領域が重なるとも考えられるが，ここでは別々の荘園とする)と菱田荘，興福寺領の朝日(山田)荘，東大寺領の下狛荘，西大寺・東大寺・北野神社・春日大社が権益を共有した祝園荘などがあった。次に，各々の荘園について若干説明を加える。

石清水八幡宮領稲八間荘は，延久の荘園整理令で領掌が認められた21ケ所の一つとして確認できる[8]。この荘園は四至が明確に示されている。

四至　限東祝薗稲間堺畷　限西山峯
　　限南荒陵里参拾壱参拾弐参拾参之南畔　限北下狛稲八間堺畷

そして，石清水放生会の勅供代御荘として，水田29町2段50歩などを有していた。上記の四至からこの荘の範囲が，大字南稲八妻・北稲八間と植田に広がっていることが分る。つまり，この荘園は精華町内の平野の中心を占ることとなる。また，「畑ノ前遺跡」との関連で言えば，「限南荒陵里」から，この荘園が遺跡のあった地域を含んでいた可能性がある[9]。この石清水八幡宮領は寛喜3年(1231)[10]以降史料上では消えるが，代って春日社領の稲八間荘が登場する。この春日社領は，元来摂関家領であったのが，平治元年(1159)に春日大社に上分料を殿下御祈として寄進されたことに始まる[11]。文永10年(1273)に倉戸の御榊を石清水八幡宮の僧林勝が行友をして抜き棄てさせた記事があり，前述の石清水八幡宮領稲八間荘との間の相論を想定できる[12]。この後も稲八妻に春日社領があったことは，『大乗院寺社雑事記』明応2年(1493)の記事で分る[13]。

祝園荘については相対的に多くの史料がある。例えば，正応2年(1289)9月の『西大寺田畠目録』[14]では，「山城国相楽郡祝園庄十五坪内一段字タウハサマ(稲八間)」などを沙弥成仏が光明真言料として西大寺に寄進しており，永仁2年(1294)3月日の『東大寺大仏殿燈油料田畠注文』[15]に，半段の田が「相楽郡祝園庄内中四里卅九坪」にあることが記載されている。また，平等院領(摂籙渡



第180図　精華町周辺の荘園(竹内理三『荘園分布図』より作成)

領)[16]や，東寺の末寺である金剛院が荘内にあったことから，東寺領が散在したと考えられる[17]。このように，この荘園が東大寺・西大寺など[18]の散在田畠によって構成されていることが分る。しかし，時代の進展につれて春日大社(興福寺)が荘務権を掌握したと考えられる。このことは，春日大社による公文職・預所職の掌握[19]や，荘民の精神的中心体である祝園神社が興福寺の末派寺社であったこと[20]から想定できる。この荘園の位置に関しては，前の史料から，稲八間荘の東で，精華町の平野部の東部にあたり，大字南稲八妻・北稲八間にも掛っていたことが分る。この南には「山城国一揆」の節で触れる興福寺領菅井荘があった。

精華町北部の下狛荘・菱田荘，西部の山間部にあたる山田荘に関しては，史料の制約上ここでは保留したい。以上，精華町に分布する荘園について若干考察をした。次にこの地域の荘園の特徴を見る。

全体的に興福寺(春日大社)の勢力が次第に拡大していた。そのため，他の荘園とさまざまな軋轢を生じている。前の春日社領稲八間荘を抜き取られた事件は，その一例である。精華町から若干ずれるが，綴喜郡で13世紀前半に起った，春日社領大隅(大炭・大住)荘と石清水八幡宮領薪荘との相論は比較的よく知られた例である。両荘の堺相論に端を発したこの対立は，両荘の神人・荘民に多くの死傷者を出し，揚句の果てには，春日社側が興福寺の衆徒を使って，神木(御榊)を泉木津から宇治へと遷座させて，中央政府に動揺を与えた[21]。精華町の住民は，当時神木が木津川やその対岸の街道で京都に運び込まれるのを，どのように見ていたであろうか。おそらく，前に指摘したように，精華町の地域には祝園神社・山田神社・蔵満神社などの春日大社(興福寺)系の末社が存在していることから，この地域の住民は神木の移動に何らかの役割を果していただろう。

また，興福寺と他の寺社勢力との争いとしては，「菱田宿」をめぐる奈良坂と清水坂との非人の争いがある。これについては，寛元2年(1244)の一連の『奈良坂非人陳状案』で内容を知ることができる[22]。また，近年網野善彦氏による新史料紹介[23]により，中世部落史において再び議論されている事件でもある[24]。詳細はそれらの論に譲り，ここでは簡単に説明する。奈良坂(宿)と清水坂(宿)は，各々興福寺・清水寺が統轄する非人組織である。清水寺は元来興福寺の末寺であったが，山門(延暦寺)の工作により，建保元年(1213)10月の清水寺の法師20名による清水寺山門寄進計画以降，山門色を濃くした。そして，寛元2年に清水坂先長吏が奈良坂と結んで山門派と対抗したため，清水寺内で内紛が起った。その過程で，「大和七宿」とともに「菱田宿」をはじめとする南山城の宿の帰属問題が表面化した[25]。この結末については史料がないので即断できないが，興福寺が大和国守護となることで奈良坂の勢力が強まると考える。また，この史料は，菱田が交通の一要所として重要な役割を果していたことを示してくれる。

以上，精華町の荘園の分布を見てきたが，次に節を変えて荘園の住民について考察する。

第4節　中世精華町の住民

この地域の住民の構成はどのようであったか。前節の祝園荘を例にとって考察すると，次の

ようになる。

(1)「預所・公文」　荘園領主から派遣された上級荘官である。前述のように，祝園荘では，この役職は少なくとも13世紀には春日大社が掌握していた[26]。しかし，それは決して安定したものではなく，しばしば守護や国人と争っている。

(2)「郷士」　元弘の変後，後醍醐天皇と呼応した「南山郷士」がそれである。前掲の祝園村の小坂三郎兵衛長綱の子孫あるいはその一族と考えられる小坂彦三郎義勝が，永禄元年(1588)の史料に見えること[27]から，中世を通じてこの階層がこの地に根をはったことが想定できる。

(3)「名主・沙汰人」　前掲の『西大寺田畠目録』で，「一町」・「一段」の各々の田畠の記載の下に「僧延明」・「沙弥戒阿」が明記されている。彼らは各神社の寄人として勢力を維持していたと同時に，地域ごとに「名主沙汰人中」として結集していた[28]。

(4)「作人」　一般「平民」[29]層である。前掲の『東大寺大仏殿燈油料田畠注文』に，「作　良仙」，「作　良実」の記載がある。ここから直接耕作者と考えるべきである[30]。

次に，(1)〜(4)の相互関係について若干説明を加える。(3)は(2)に上昇転化する場合があったが，それ以外は(4)とともに，14〜15世紀，惣的結合を形成していた[31]。そして彼らは，正長元年(1428)泉木津周辺の馬借・車借と呼応して土一揆に参加していた。この土一揆は京都だけではなく，春日大社(興福寺)の膝元である奈良へも攻め込んでいる。(2)は，菱田村の大北氏が下狛荘を根拠としているように，しばしば他の郷士や(1)(4)と抗争していた。また，彼らは一つには(3)(4)の階層の惣的結合を牛耳るために，一つには他の「郷士」の対抗のために，しばしば城を築いた。その典型的なものとして，精華町と木津川を境にして対岸にあたる狛野荘(現在の山城町大字椿井・上狛)を指摘できる[32]。

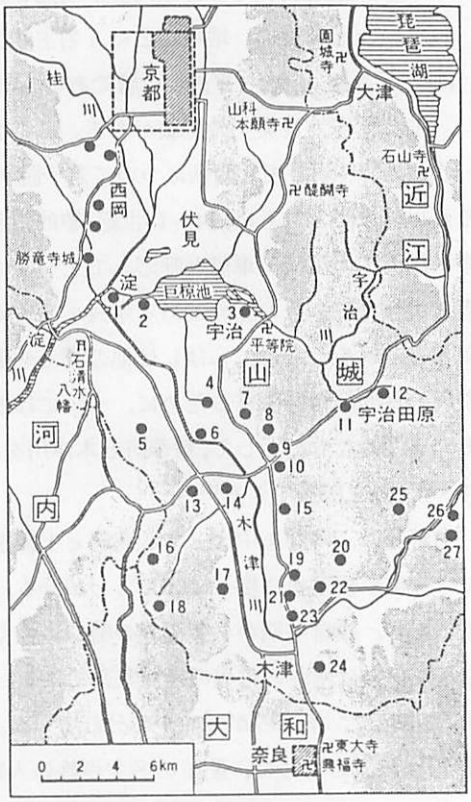
狛野荘は，椿井を中心とする北荘と上狛を中心とする南荘とに分けられていた。初期の史料には一部が祝園里に掛っていたことが分る。その当時は祝園荘と同様に諸大寺の領地が混在していたが，鎌倉中期から興福寺の勢力が強くなり，室町期において一円直務化する。ここで注目したいのは南荘の大里の環濠集落である。周囲を堀で巡らしたこの集落は，東西約330m，南北約360mで，集落内が幾つかに分れていた。これは，室町期に狛氏(狛下司・上津狛下司・狛山城[33])が防禦のために，配下の名主百姓の人家を集めて形成した「平城」である。ただ，防禦のためとはいえ，あくまでも狛氏の平時の居館であり，荘民の生活の場でもあった。そして，一旦戦闘状態となった場合は，「山城」の高ノ林城(山城町大字上狛大谷)に立て籠った。この「山城」と「平城(居館集落)」(あるいは「根小屋式城郭」とも言われる[34])との二つの城の形成の理由は，次のようになる。後者の「平城」は荘民を平時に領主的に支配をするために必要であったのに対し，「山城」は北荘の椿井氏のように他の国人との戦闘の拠点として形成されたと考える[35]。上記のような城を築いた「国人(郷士)」は，自らの地域における勢力を維持するために，室町幕府の有力守護と被官関係を結ぶようになった。

精華町の地域にも狛氏と同じ理由で城が築かれている。菅井城・祝園城・稲屋妻城・下狛大北城・下狛大南城・菱田城がそれである[36]。その中で比較的史料があり，論じられているのが下

狛大北城と稲屋妻城である。

下狛大北城は，下狛大北氏(前の「南山郷士」では菱田村の大北氏)の城であった。この城は応仁・文明の乱で東軍に味方したため，しばしば西軍の大内正弘軍に攻められ，文明4年(1472)，一時大内氏の代官杉十郎に乗っ取られてしまった[37]。乱後，大北氏は再び大北城にもどり，「山城国一揆」に参加する。この城の位置については異論があるが，高橋美久二氏の指摘のように，一辺120mの堀を持つ「下狛廃寺」という想定が正しいとすれば[38]，前の「居館集落」にあたると考えられる。となると，これに対する「山城」はどこになるのか。断言はできないが，前述の文明3年の大内軍との戦闘の時に，大北氏は他の4人の「国人」とともに椿井に新たに城を築き(椿井新城)，立て籠ったという記事[39]があることから，大北氏は単独では「山城」を持ち得ない弱小領主であったとも考えられる。

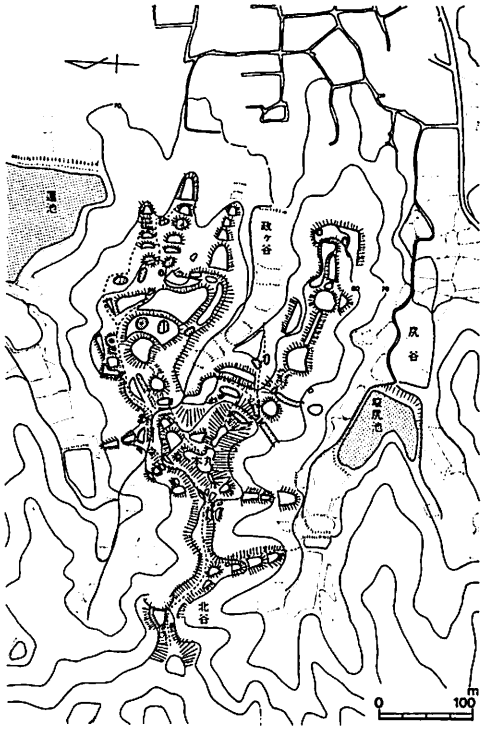
稲屋妻城は，精華町大字南稲八妻集落西方の小字「政ケ谷」「北谷」「尻谷」「蓮池」「皿池」の丘陵上に位置する，東西600m，南北360mに及ぶ南山城地方の最大級の「山城」である[40]。この城主は稲八妻氏と言い，前述の「南山郷士」であるとともに稲八間荘の荘官でもあった。この稲八妻氏は，文安4年(1447)，大和国守護の興福寺が，「春日社造替料大和国一国平均役」を南山城にも課そうとした時，それに反対する東大寺派の一員として稲八妻八郎を確認できること[41]から，興福寺の荘官とは考えにくい[42]。前述の如く，興福寺の勢力が強いこの地域で東大寺と密接な関係を有していた稲八妻氏は，他の「国人」とは違った道を歩むことになった。具体的に言えば，応仁・文明の乱でこの地域の多くの「国人」が東軍についたのに対し，稲八妻氏は西軍についたこと[43]や「山城国一揆」の「惣国」の一員でありながら最後の稲屋妻城の攻防の時には古市澄胤についたこと[44]が，その一例である。そして，「国一揆」崩壊後も「惣国」の経営に携わっていた。天文年間(1532～55)には一時奥田甚介が居城していたが，永禄2年(1559)，奥田氏は三好長慶の被官松永久秀により滅され，城を奪われた。そして，永禄11年9月30日の史料に



第181図　南山城の城館

1：淀　城　10：多賀城　19：今　城
2：西一口城　11：山口城　20：鳶　城
3：槙嶋城　12：岩本城　21：椿井城
4：寺田城　13：田辺城　22：高之林城
5：内山城　14：草内城　23：狛　城
6：水主城　15：井出城　24：木津城
7：外野城　16：天王畑城　25：森田城
8：中　城　17：稲屋妻城　26：米山城
9：市辺城　18：内山田山城　27：杣田城

(『宇治市史』第2巻，523頁より転載)



第182図　稲屋妻城跡平面図(土橋誠『府下遺跡紹介26.稲八間城跡』〔『京都府埋蔵文化財情報』第15号掲載，京都，昭和60年〕より転載)

「稲八妻昨夜退城了」とあり[45]，永禄年間(1558～73)に再び稲八妻氏が居城したと考えられる[46]。

稲屋妻城の位置については，奥田裕之氏が現地調査によって設定された前述の南稲八妻説の他に，従来から北稲八間説・植田説が設定されていた。ただし，前節で述べた二つの稲八間荘の存在や，この「山城」に対する「居館集落」の存在の未確定などから，城の位置を一つに限定する必要はないと考える[47]。

奥田氏は，この南稲八妻の城郭跡の規模から，この城が「守護所」としての役割をしたものと想定されている。ここで若干「守護所」について触れて置く。これについては，近年今谷明氏の研究がある[48]。「守護所とは，守護が任国に設置した役所のことで，旧来の国衙の所在地あるいは国内の交通・商業の要地に置かれたものであ」[49]り，「守護の下級部門として守護代・小守護代・郡奉行等の遵行機関が創設されるに従って」，一国において複数の「守護所」が存在した[50]。山城国の「守護所」は当初，淀・勝竜寺であったが，「正長元年(1428)以来，宇治川を境界として一国領域が二分され，二カ所の守護所が分立するに至る」[51]。つまり，一つは愛宕・葛野・紀伊・宇治・乙訓の「下五郡」に，一つは相楽・綴喜・久世の「上三郡」に，各々「守護所」が設置されたのである。精華町がある相楽郡などの「上三郡」には槙嶋城が設置された。だが，「山城国一揆」当時は一時的にその機能を失い，明応2年に「御料所」が置かれた稲八妻に設置された。当時，山城国守護であった伊勢貞陸の守護代蜷川親光や，その又代官がここで相楽郡を統治していた。そして南稲八妻の大規模な城跡はこの「山城国一揆」の時期のものである。奥田氏は以上のように想定された。

以上，精華町の住民，特に荘民と「郷士」について検討した。この両者が相互に矛盾をはらみながら統一行動を起した「山城国一揆」について，次節で検討したい。

第5節　「山城国一揆」と精華町

応仁元年(1467)に始まった応仁・文明の乱は，全国を兵火に巻きこんだ後，両軍の大将山名持豊(西軍)・細川勝元(東軍)の死と両軍の厭戦気分が強まる中で，文明9年(1477)終束に向った。この間，畠山義就は，応仁2年から乱終結まで，「山城守護」と称して南山城を支配していた。そして，この畠山義就と同政長との畠山家惣領をめぐる争いは，乱後も続けられた。元来

両者の抗争は，細川勝元が政治の実権を握るため，政長を擁立して同じ三管領の畠山家を分断させようとしたのに始まる。乱そのものは東軍が優勢であったが，西軍の義就が優れた軍事能力を持っていたのに加えて，古市氏や越智氏などの大和・河内の有力国人を従えていたため，河内・大和を拠点に一大勢力を築いた。そして義就は再び南山城に進撃して，細川氏（当時は若年の政元）と畠山政長の勢力を追い落そうとしていた。このような中で，南山城では不利な状況に追い込まれていた東軍方（後述の「東方奉公山城国十六人衆」）は，文明17年（1485）7月，義就の山城郡代である斎藤彦次郎の寝返りで盛り返し，両軍は久世・綴喜の郡界を挟んで対峙し，膠着状態が続いた[52]。当時の両軍の各々の勢力範囲は，『大乗院日記目録』同年11月16日条で，政長方は「富野・寺田・琵琶庄・宇治以北」で，義就方は「御厨子（水主）・北菜嶋・南菜嶋・新野池之サキ山」や，「イナ屋ツマ・相楽・木津・大住・管井・天王畑・薪・下コマ」に，各々陣があったことが分る。ただし，義就が陣を置いた地域については元来東軍側の「国人」の根拠地であった場合があり，この「国人」は「山城国一揆」に再びその地に返り咲くこととなる。具体的にその地域を指摘すると，『大乗院寺社雑事記』同年10月14日条の「狛下司之跡之城・椿井城（本人）・高之林城（本人）・御厨子之跡之城・稲屋ツマ之城・外野城（伊賀国人）・寺田城（伊賀国人）・天王畑城」[53]の記載のうち，「本人」と書かれていないのが東軍の地域であったと考えられる。

両軍はしばしば軍糧徴発・掠奪を行ったため，南山城の住民にとって膠着状態が続けば続くほど苦しみは募るばかりであった。これにより，同年12月10日頃に「山城国人」が中心となって，両畠山氏に対して退陣を要求した[54]。また，翌月11日には「国人」・「土民」が各々会合を開き，今後の対応の仕方を取り決めた[55]。そして，その対応は「於不致承引方者，為国衆可相賈之由治定之間」[56]とあるように強硬なものであった。両畠山は他国の国人と共に，相楽・綴喜・久世・宇治川以南の宇治の四郡から撤退した[57]。ここに「山城国一揆」が成立し，明応2年（1493）秋に至るまで継続したのである。

さて，この「山城国一揆」については，三浦周行[58]以来多くの論稿が寄せられてきている。これらは大きく二つの方向に分類することができる。一つは国人・土豪・中小農民と室町幕府（細川氏）や守護勢力（両畠山氏）との闘争の面から追究していく方向である。この観点からは，「国一揆」を農民の惣的結合を基盤とし，「反守護闘争」[59]・「守護代行論」[60]・「惣国一揆」[61]と評価している。これに対して，国人・土豪と上級権力との被官関係から追究しているのがもう一つの方向である。ここでは「国一揆」が上から政治的に組織されたものであると評価している場合が多い。つまり，細川政元はこの国衆の自治を認めることによって，両畠山氏の影響を排除し，国衆の被官化を進めようとしたとされる[62]。そして，この二つの面が各々大きな要因となって，この「国一揆」が成立したと考えるべきである。しかし，より本質に迫るならば，この「国一揆」を指導した「国中三十六人衆」を明確にすべきである。ここでの「三十六人衆」・「三十八人衆」と呼ばれた階層に関しては，従来国人説と土豪説の二通りに評価された。また，国人と評価した場合でも，地頭クラスの領主か荘官＝強剛名主層が領主化したものであるかに分類することができる[63]。

さて，「国衆三十六人衆」についてだが，各々の名称は史料では直接明らかにはできない。しかし，『大乗院諸領納帳』のうち『狛野庄加地子方納帳』文明17年12月26日条に彼らが「大略細川九郎殿奉公之躰」であったことから，『経覚私要鈔』康正3年(1457)9月27日条で義就と戦った「山城衆十六人」や，『大乗院寺社雑事記』応仁2年(1468)閏10月15日条と同文明2年(1470)7月23日条に記載されている「東方奉公山城国十六人衆」に系譜を引くものと考えられる[64]。ここから，木津・田辺・井手別所・狛などをその成員として指摘できる。また，槙嶋と宇治大路[65]や下狛の大北・大南[66]も加えることができる。併せて興味深い記事として，『親元日記』寛正6年(1465)11月28日条がある。これは稲八妻公文進藤を誅殺することを，政長方の国人筒井順永や相楽・菱田・下狛・上狛・祝園などの13の「名主・沙汰人中」に命じたものである。ここから名主・沙汰人層が「国衆」として参加したと考えられる。

それでは，上で列挙した「国衆」はどういう階層であったであろうか。以上見てきた史料から次のことが分る。

(1)「国衆」の多くが，細川勝元・細川政元と被官関係を結んでいた。

(2)前述の「南山郷士」の子孫・一族と思われる者を含んでいる[67]。

(3)前掲の『親元日記』から名主・沙汰人も含まれると考えられる。また，『大乗院寺社雑事記』応仁2年11月8日条に次のような記事があることは参考になる。

当門跡領菅井庄事[68]，下狛之大北大南同違乱之間，昨日披露伏遣学侶了，一昨日悪行衆徒等名主寺社ニ籠之畢(折カ)了，今度事ハ東北院申狛野庄事故也

この前後の史料で狛野荘が「山城国人」により押領されていること[69]から，ここでの「悪行衆徒等名主」が「国衆」であることが分る。

(4)『大乗院寺社雑事記』応仁2年12月1日条に，狛大南氏が在京している記事があり，槙嶋・宇治大路の両氏が幕府公衆であったこと[70]と併せて，室町幕府とのつながりが強かったと考えられる。

(5)だが，畠山義就や政長に従ってこの地域に居城した「伊賀国人」・「河内国人」や大和国人古市澄胤・筒井順永など[71]とは違い，多くの「国衆」が自分の根拠地を守るのに精一杯で，活動範囲が限定されていたことにも注意するべきである[72]。

(6)前節の「山城」「居館集落」の存在。

以上(1)〜(6)で，「国衆」は細川氏・畠山氏と被官関係を結んだ国人領主であることが分る。ただし，(3)(5)から多くの山城国人が強剛名主層に領主化したものであり，他国の国人の進出により惣村に基盤を置かなければ，自分の地位が危くなってくるという限界を持っていたのであった。具体的には，大和国人古市胤栄に攻められ[73]，ついには大内政弘の被官杉十郎によって没落させられた[74]下狛大北氏を例として挙げることができる。そして，「山城国一揆」の三大施政方針[75]のうち，「於自今以後者，両畠山方者不可入国中，本所領共各可為如本……」[76]や，「殊更大和以下之他国輩，為代官不可入立云々」[77]は，前述の山城国人の性格を念頭に置いて理解すべきである。

「山城国一揆」が，山城国人の危機感と同時に，土豪・中小農民による惣的結合の圧力で成立したことも忘れてはならないことである。このことは，文明17年12月11日に「同一国中土民等群集」していることから分る[78]。また，このことを裏付ける事実として，従来国人達が設置した関所を『国掟法』の中で「於成物者荘民等不可致無沙汰云々」[79]を条件に，「新関等一切不可立之云々」[80]と決められていることを挙げることができる。関所撤廃は「土民」達の以前からの要求であり，応仁・文明の乱後，このことでしばしば土一揆を起している[81]。

次に，「山城国一揆」における国人と農民の組織について考察する。これに関しては，『大乗院寺社雑事記』の文明18年5月9日条に記載されている，興福寺大乗院領菅井荘に関する記事が参考となる。ここでは，「国一揆」の最高機関である「惣国・月行事」が「スカイ惣庄」に半済を課していることが書かれている。つまり，農民組織の「惣庄(惣村)」を国人の結集体である「惣国・月行事」が統轄しているのである。ただし，「惣国」が「惣庄」を一方的に支配するのではなく，両者が極めて緊張した関係であったことも留意しなければならない。このように国人・土豪・農民が相互に矛盾をはらみつつ，上級権力と対立・妥協しながら自治を獲得した一揆を，南北朝の「国人一揆」と区別して，「惣国一揆」という概念でとらえられている[82]。この場合の自治とは，「惣国」による上三郡と宇治川以南の宇治郡における検断権の確立を示す[83]。

しかし，この結束は，内包する矛盾から長続きはしなかった。延徳元年から翌年にかけて(1489～90)，山城国進出の巻き返しを計った古市澄胤は，代官新九郎や井上九郎と相語って，「惣国」の運営に不満を持っていた下狛荘・木津荘の土一揆を扇動しようとした[84]。また，明応元年(1492)10月には，「山城国人百人分同心申合立」てた新関に対して狛野荘民が興福寺に訴え出ていた[85]。そして，同年10月18日には，山城国人は今まで拒否し続けていた伊勢貞陸の山城守護就任を認め[86]，再び古市澄胤など他国の国人が入部することとなり，ここに「山城国一揆」は解体したのであった。

最後に，「国一揆」最後の攻防と言われる，明応2年の稲屋妻城での「国衆共数百人閉籠」し，古市軍によって没落させられた事件[87]について述べたい。これに関しては，最近，石田晴彦氏が論ぜられている[88]。それによると，この抗争は，細川家の内衆であった上原氏の背信行為に端を発しており，そしてこの上原氏が守護伊勢貞陸やその守護代である大和国人古市澄胤と結んで，山城国上三郡と宇治郡内の細川派の国人を排除しようとしたものであるとされた。加えて，前述の延徳年間の土一揆以来，国人と「土民」との分裂は進み，少なくとも明応2年のこの段階ではこの分裂は決定的なものとなった。おそらく，土一揆派はこの稲屋妻城の攻防には参加していないと考える。その後，細川政元が明応2年のクーデターで盛り返し「京兆専制」を確立することで，一時没落した細川方の山城国人はこの地に復帰する。しかし，それは「惣国一揆」の復活ではなく，細川氏による上三郡の分郡支配の始まりであった[89]。

第6節　まとめにかえて

以上，中世の精華町の景観の復元と，この地域の最大の事件である「山城国一揆」について

考察した。中世の精華町は，前述のように交通の中心的地位を木津川の水運とその右岸の大和街道に奪われたものの，経済的重要性はかえって増したと考える。それ故，興福寺(春日大社)や大和などの国人が積極的にこの地域に進出してきたのである。この地域の荘官・強剛名主層から発展した南山城の国人は，同国内の国人ばかりでなく他国の国人と対抗するために，細川氏や畠山氏と被官関係を結ぶようになった。一方，「土民」と呼ばれた土豪・農民も土一揆を起して，自らの生活の安定を得ようとしていた。この両者は矛盾を相互に内包しながらも，文明17年12月「山城国一揆」を形成した。これは細川政元の山城国領国化に利用されたものの，その本質は住民の不断の闘争の成果であると評価したい[90]。

註

1)『宇治市史』第1巻(宇治，昭和48年)，333～336頁。森田梧郎『京の古道と街道』(森谷尅久編『京都千年』5「町と道」―洛中・京の辻―所収，京都，昭和59年)。
2)『宇治市史』第2巻(宇治，昭和49年)，167～183頁。
3)ただし，精華町を経路とする記事がないわけではない。『大乗院寺社雑事記』文明4年10月25日条に，一条兼良夫人が奈良から美濃に行くのに際し、「自秋篠至下狛者秋篠ニ仰付之，自下狛至京都者下狛古市陣可奉送之由仰付之了」という記事がある。
4)『城陽町史』第1巻(城陽，昭和44年)，105～110頁。『元弘元年9月塑日　吐師川原并笠置仏河原着到状』(『(飯田晴穂家所蔵)椿井文書』)。
5)『井手町の歴史』4古代・中世・近世(京都府井手町，昭和49年)，191頁。
6)『安和2年7月8日法勝院目録』(『仁安寺文書』)。
7)奥田裕之『山城国稲八妻城と守護所について――京都府相楽郡精華町南稲八妻の山城跡の検討――』(『桃山歴史・地理』第8号掲載，京都，昭和56年)。
8)『延久4年9月5日太政官牒』(『石清水文書』)。
9)千田稔『条里制とその復元』(『週刊朝日百科・日本歴史』2掲載，昭和62年)，122～123頁。
10)『寛喜3年4月22日石清水八幡宮寺供米支配状』(『榊葉集』)。
11)『平治元年12月5日藤原太子解』(陽明文庫版所蔵『兵範記』仁安2年裏文書)。
12)『文永10年12月日大和春日社司注進状』(『中臣祐賢記』)。
13)『大乗院寺社雑事記』明応2年9月15日条。
14)『西大寺文書』所収。
15)『東大寺文書』所収。
16)『嘉元3年4月摂籙渡庄目録』(『九条家文書』)。
17)正平7年1月13日『東寺観智院金剛蔵聖教目録』(『大日本史料』7―3)。
18)『文明5年2月北野社領諸国所所目録』(『北野神社文書』)にも祝園荘に関する記事がある。
19)『建内記』嘉吉4年正月24日条。ただし，この時期，武家方との相論で安定していない。
20)『興福寺官務牒疏』嘉吉元年4月10日条。ここで山田郷朝日荘内の山田寺や，下狛荘・稲八間荘の祭神である蔵満神社も確認できる。
21)『木津町史』史料篇Ⅰ(京都府木津町，昭和59年)，394～411頁。
22)部落問題研究所編『部落史に関する総合的研究』第4巻(東京，昭和40年)。
23)網野善彦『非人に関する一史料』(『名古屋大学・年報中世史研究』第1号掲載，名古屋，昭和51年)。
24)大山喬平『奈良坂清水坂両宿非人抗争雑考』(『日本中世農村史の研究』所収，東京，昭和54年)，428～439頁。
25)『年月未詳奈良坂非人陳状案』(註22，前掲論文所収)。
26)『建内記』文安3年12月26日幕府御教書。
27)永禄年中山城諸士着到条(『椿井文書』)。
28)『親元日記』寛元6年11月26日条。
29)網野善彦『日本中世の民衆像』(東京，昭和55年)。
30)他に「作松太郎」・「作土佐北山宿」の記載がある。
31)『大乗院寺社雑事記』文明18年5月9日条の「スカイ惣庄」の存在から確認できる。

32)中井均『南山城地方の中世城郭跡』(『城』第113号掲載，大阪，昭和57年)。同『南山城の荘園と城郭』(大阪歴史学会『南山城の歴史と文化財』所収，大阪，昭和57年)。
33)松本新八郎『狛山城守秀』(『中世の社会と思想』所収，東京，昭和60年)。
34)村田修三『山城とは何か』(『週刊朝日百科・日本の歴史』5掲載，東京，昭和61年)，292～305頁。
35)椿井氏に関しては，「山城」は山城町大字椿井小字中垣内の天城山頂の「椿井城」であり，「居館」は同小字城ノ内・梁ノ上の集落跡がそれにあたる。註32，中井，前掲論文。
36)註32，中井，前掲論文。
37)『大乗院寺社雑事記』文明4年10月16日条。
38)高橋美久二『山城国一揆と城郭』(『山城郷土資料館報』第4号掲載，京都府山城町，昭和61年)。
39)『経覚私要鈔』文明3年6月12日条。
40)註7，奥田，前掲論文。ここで奥田氏は現地調査から稲八妻城の全貌を明らかにされた(第182図参照)。
41)『経覚私要鈔』文安4年9月14日条。
42)この時期一方の稲八妻荘が東大寺と密接な関係を結んでいたと考えられる。
43)『大乗院寺社雑事記』文明17年10月14日条。
44)『蔭涼軒日録』明応2年9月18日条。
45)『多聞院日記』永禄11年9月30日条。
46)以上，註7，奥田，前掲論文によった。
47)土橋誠『府下遺跡紹介26　稲八間城跡』(『京都府理蔵文化財情報』第15号掲載，京都，昭和60年)。また，奥田氏は註7前掲論文で，小字「猫ヶ谷」に前述の「根小屋式城郭」を想定されている。そして「畑ノ前遺跡」との関連で言えば，中世城郭がよく古墳跡に築かれる場合が多々あるので，遺跡のある植田に築いた説も充分考慮に価すると考える。
48)今谷明『畿内近国における守護所の分立』(『守護領国支配機構の研究』所収，東京，昭和61年)。
49)註7，奥田，前掲論文，43頁。
50)註48，今谷，前掲論文，405～406頁。
51)註48，今谷，前掲論文，421～422頁。
52)鈴木良一『応仁の乱』(東京，昭和48年)。今谷明『応仁の乱』(『週刊朝日百科・日本の歴史』中世II—⑦掲載，東京，昭和61年)。
53)東軍であった「狛下司」(狛氏)の「山城」である「高之林城」は，当時狛野荘国人高林氏に陣取られていた。ちなみに「狛下司之跡之城」は大里の環濠集落のことである。
54)『実隆公記』文明17年12月10日条から想定。
55)『大乗院寺社雑事記』文明17年12月11日条。
56)『後法興院記』文明17年12月20日条。
「両畠山軍のうち撤退を拒んだ方へ東軍西軍関係なく山城国衆が一致団結して断固戦うことを決めた」というのがこの内容である。ただし，この撤退要求が義就(西軍)方に不利であったことや，細川氏や仲介者の越智の若党岸田に礼銭を送るなど裏工作の存在が指摘されている。
57)『宇治市史』第2巻(宇治，昭和49年)，357～358頁。ここで黒川直則氏は，「国一揆」の範囲を綴喜・相楽・久世・宇治の4郡にまたがるという指摘をされた(同書362～365頁)。
58)三浦周行『戦国時代の国民会議』(『日本史の研究』所収，東京，大正12年)。
59)黒川直則『土一揆　国一揆』(『講座日本史』第3巻所収，東京，昭和45年)，同『土一揆の時代』(稲垣泰彦・戸田芳実編『日本民衆の歴史』2土一揆と内乱所収，東京，昭和49年)。これ以前，稲垣泰彦氏は「国一揆」は国人領主層による反守護闘争であると規定された。『応仁文明の乱』(初出は昭和38年，後『日本中世社会史論』〔東京，昭和56年〕に所収)。
60)川崎(柳)千鶴『室町幕府崩壊過程における山城国一揆』(『中世の権力と民衆』所収，東京，昭和45年)。
61)永原慶二『国一揆の史的性格』(『中世内乱期の社会と民衆』所収，東京，昭和52年)。
62)今谷明『後期室町幕府の権力構造』(『室町幕府解体過程の研究』所収，東京，昭和60年)，石田晴彦『山城国一揆の解体』(『信大史学』6掲載，松本，昭和57年)，森田恭二『「山城国一揆」再考』(有光友学編『戦国時代権力と地域社会』所収，東京，昭和61年)。
63)永原慶二『守護領国制の展開』(『日本封建制成立過程の研究』所収，東京，昭和36年)。ただし，黒川直則氏は後者の国人を「土豪」と規定されている(『中世後期の領主制について』[『日本史研究』所収，京都，昭和38年])。
64)『宇治市史』第2巻，357～358頁。
65)同上書，357～358頁・362～365頁。

66)『大乗院寺社雑事記』応仁2年11月8日条の下狛大北氏・同大南氏による菅井荘の「違乱」が，同史料応仁2年閏10月15日条の「東方奉公山城国十六人衆」による狛野荘押領の延長線上にあることから想定できる。

67)前掲史料(4)の中に，下狛・菅井・大北などの記載がある。

68)『大乗院寺社雑事記』文明16年9月17日条に，「古河庄号菅井庄大乗院領」という記載がある。

69)註66，前掲書，参照。

70)註65，前掲書，参照。今谷明『「東山殿時代大名外様附」について』(『室町幕府解体過程の研究』所収，東京，昭和60年)で「国一揆」の間，またその後においても奉公衆としての地位を失っていないことを指摘されている。

71)熱田公『筒井順永とその時代』(『中世社会の基本構造』所収，東京，昭和23年)，同『古市澄胤の登場』(『中世日本の歴史像』所収，東京，昭和53年)。

72)前掲註70から槙嶋・宇治大路氏に関して保留。

73)『大乗院寺社雑事記』文明2年12月5日条。

74)『大乗院寺社雑事記』文明4年10月16日条。

75)これは従来『掟法』とされていたが，川崎千鶴氏の註60，前掲論文で施政方針と規定された。

76)『大乗院寺社雑事記』文明17年12月17日条。

77)『大乗院諸領納帳』『狛野庄加地子方納帳』文明17年12月26日条。

78)註55，前掲史料。

79)註77，前掲史料。

80)註76，前掲史料。

81)『大乗院寺社雑事記』文明10年12月7～9日条。

82)註61，永原，前掲論文。

83)具体的には，多賀で人を殺し雑物を奪った油売を検断した『大乗院寺社雑事記』文明19年2月2日条の例を指摘できる。

84)『大乗院寺社雑事記』延徳2年10月9日条。

85)『大乗院寺社雑事記』明応元年10月20日条。

86)『大乗院寺社雑事記』明応2年8月18日条。

87)『大乗院寺社雑事記』明応2年9月11日条。注目すべきはここで古市澄胤に相楽郡・綴喜郡の知行を認めていることである。しかし，古市氏はこれは後述する細川政元のクーデターにより同年12月(同史料)に引退させられている。

88)註62，石田，前掲論文。

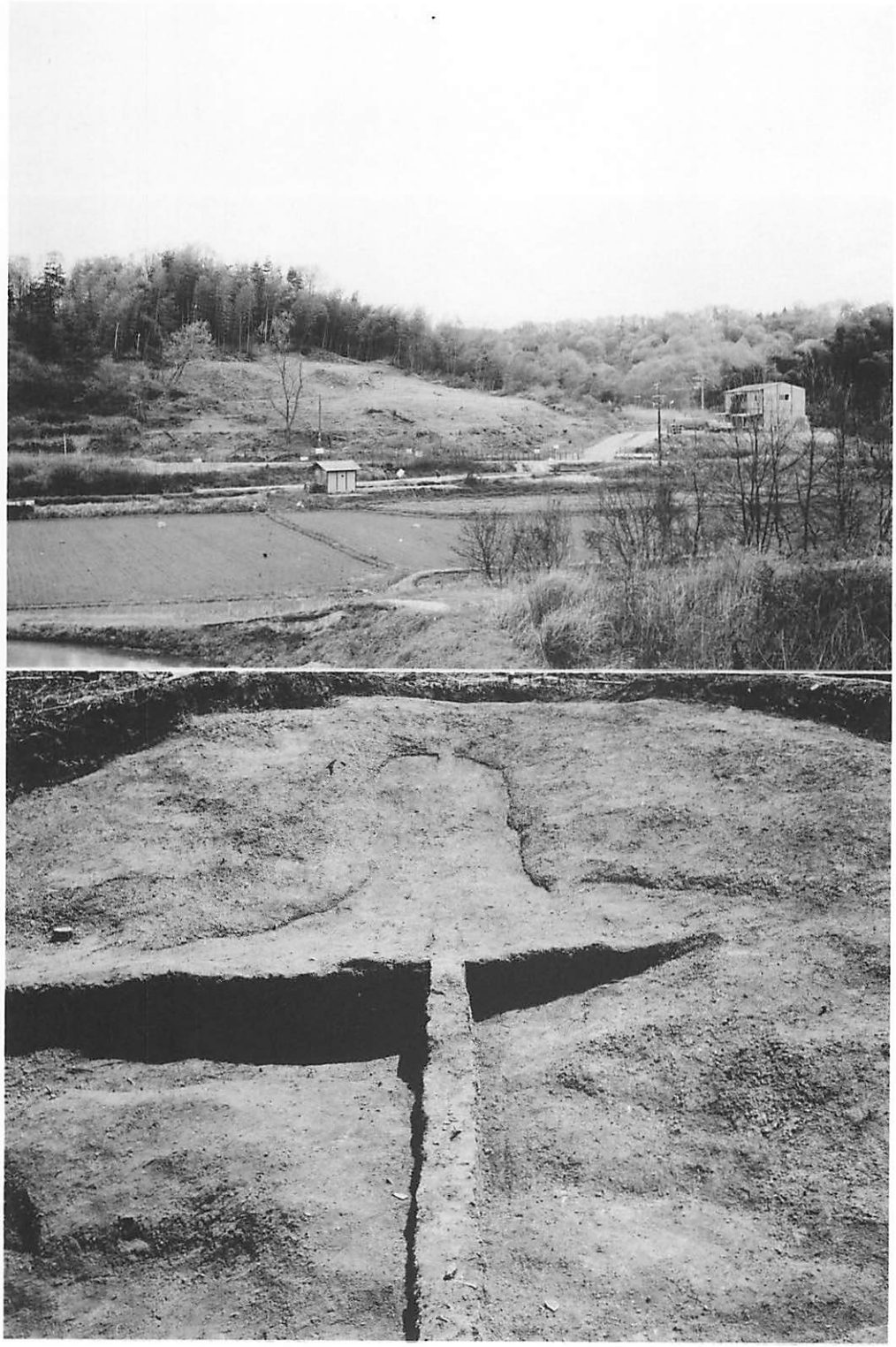
89)註62，今谷，前掲論文。

90)小論は『木津町史』史料篇Ⅰ(前掲)，京都府立山城郷土資料館編『山城国一揆とその時代』(京都府山城町，昭和60年)，日本史研究会・歴史学研究会編『山城国一揆—自治と平和を求めて』(東京，昭和61年)なども多く参考にしている。

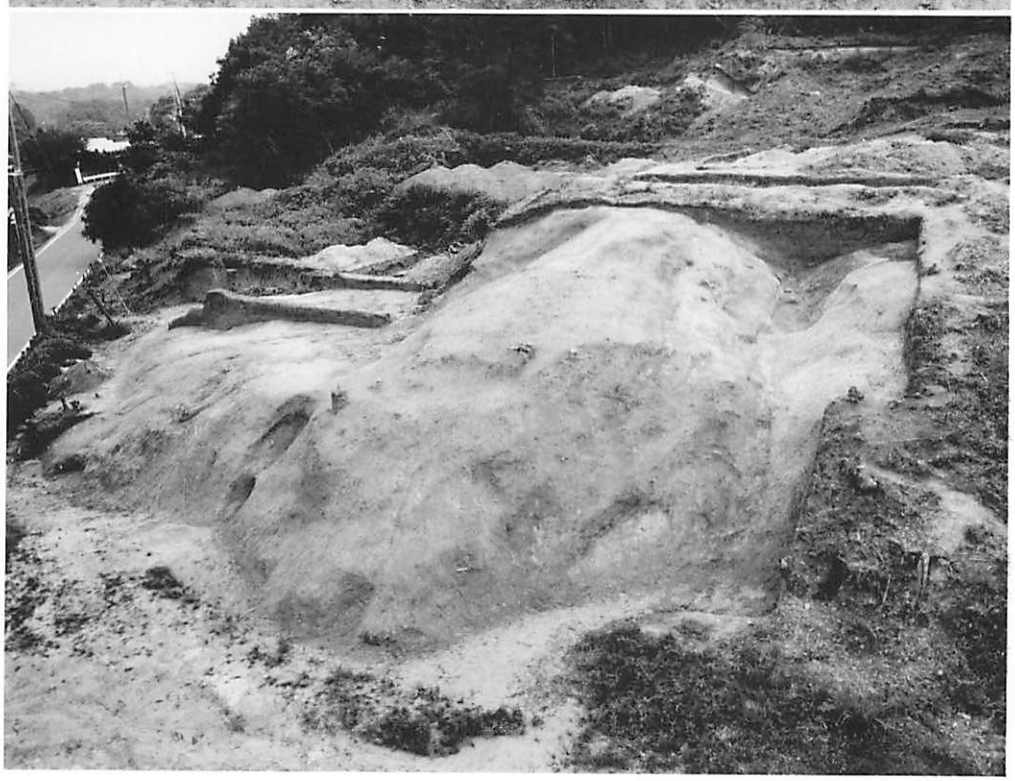
図　版

精華ニュータウン予定地全景
東方より（上の矢印直下が煤谷川窯址，下の矢印が畑ノ前遺跡）

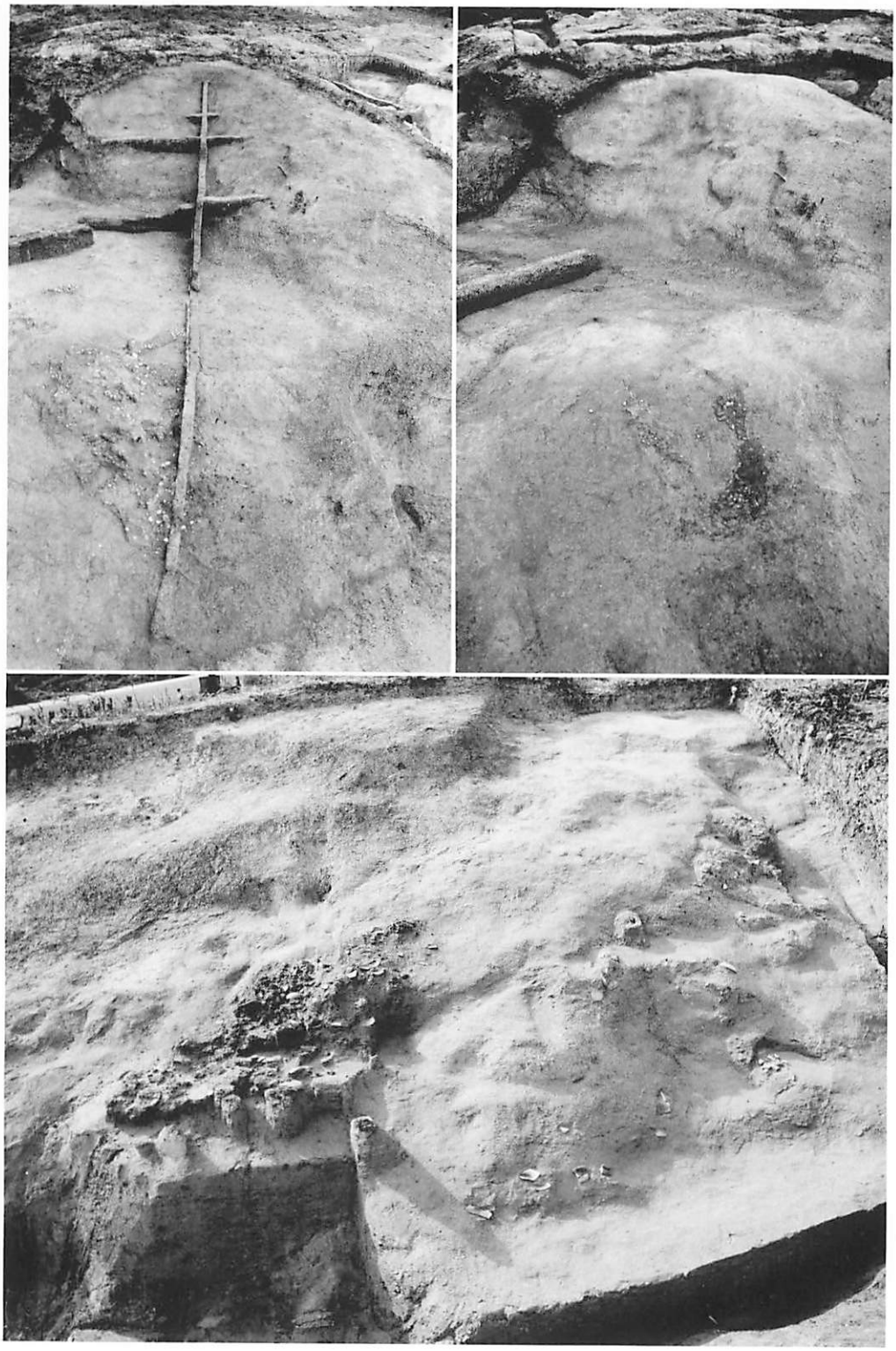
図版第1



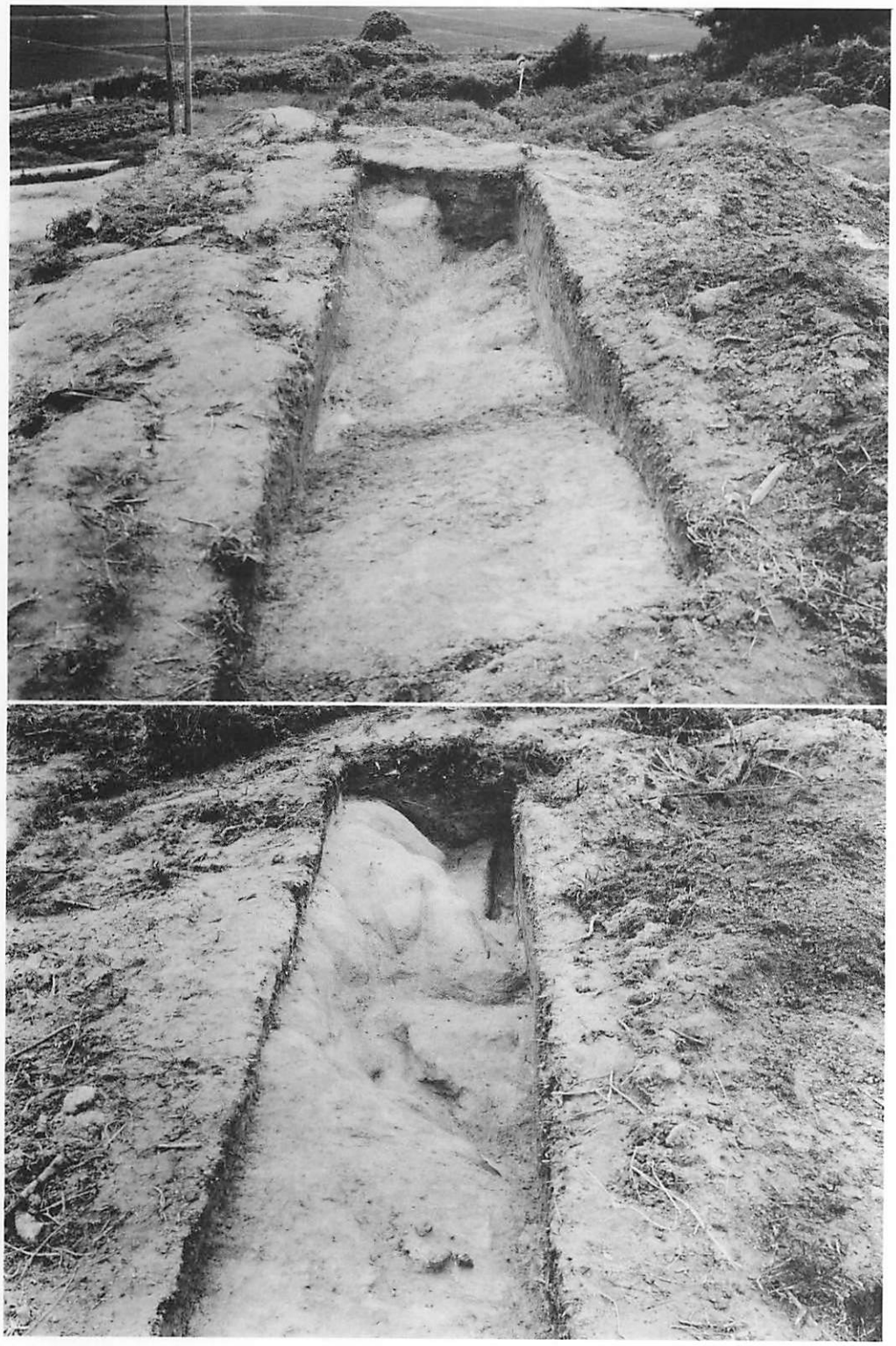
煤谷川窯址・遺構(1)
上：調査前全景(西より)，下：窯体痕跡検出状況(西より)



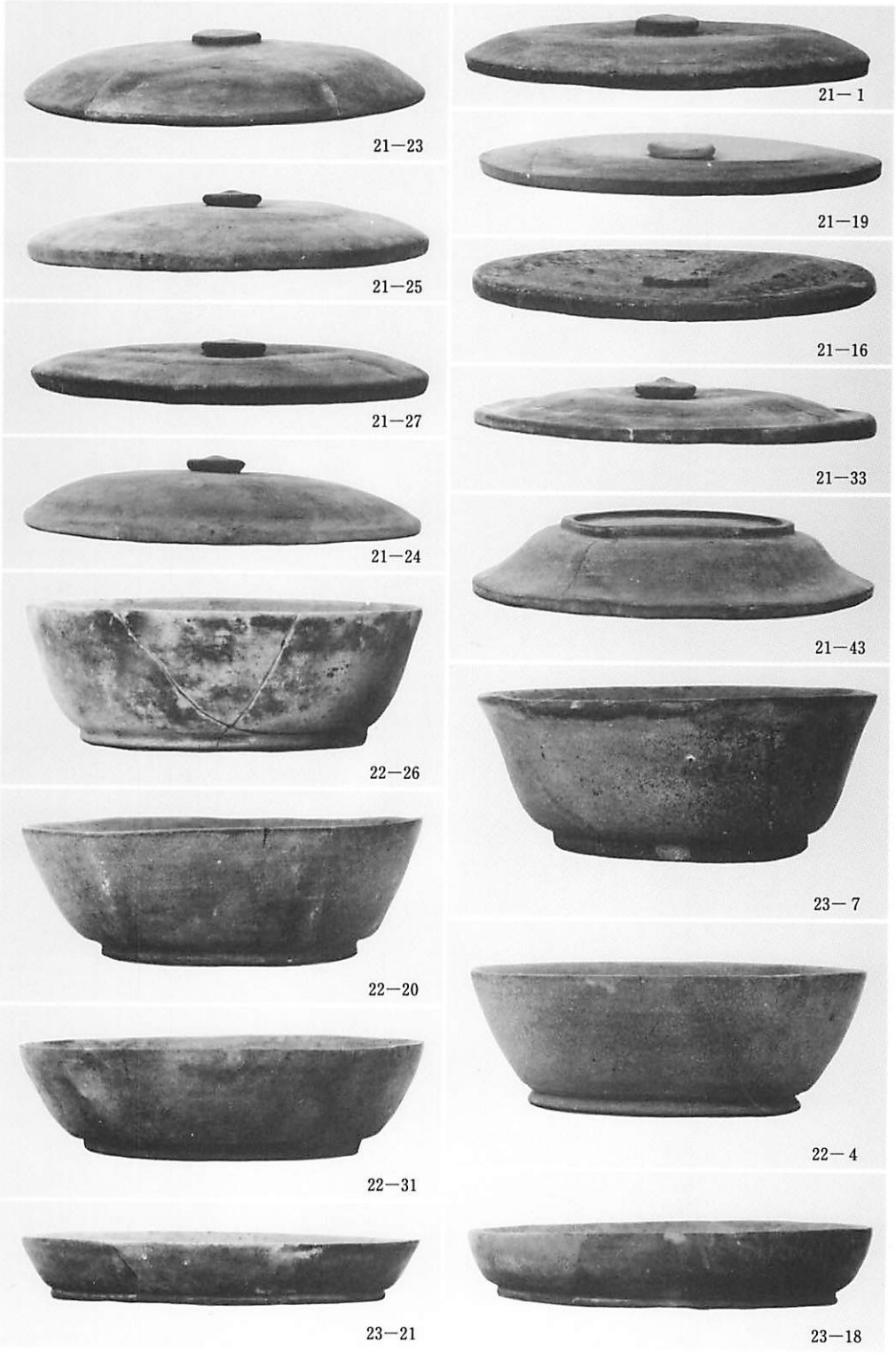
煤谷川窯址・遺構(2)
上：灰原全景(北より)，下：調査後全景(南より)



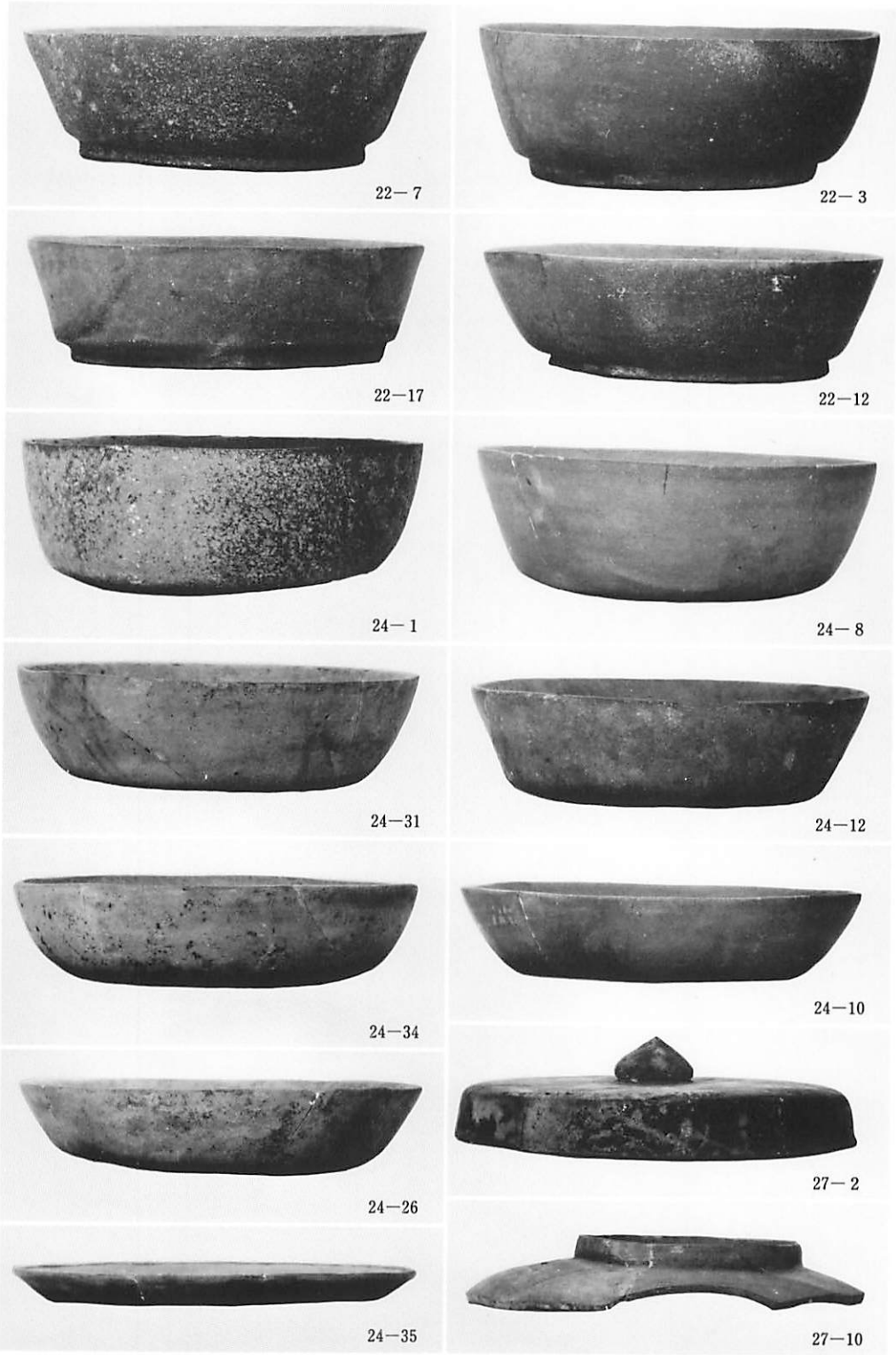
煤谷川窯址・遺構(3)
上左：窯体痕跡および灰原(西より)，上右：同(西より)，下：東区溝遺物出土状況(南より)



煤谷川窯址・遺構(4)
上：第 4 トレンチ全景(南東より)，下：第 9 トレンチ全景(西より)



煤谷川窯址・出土須恵器(1)

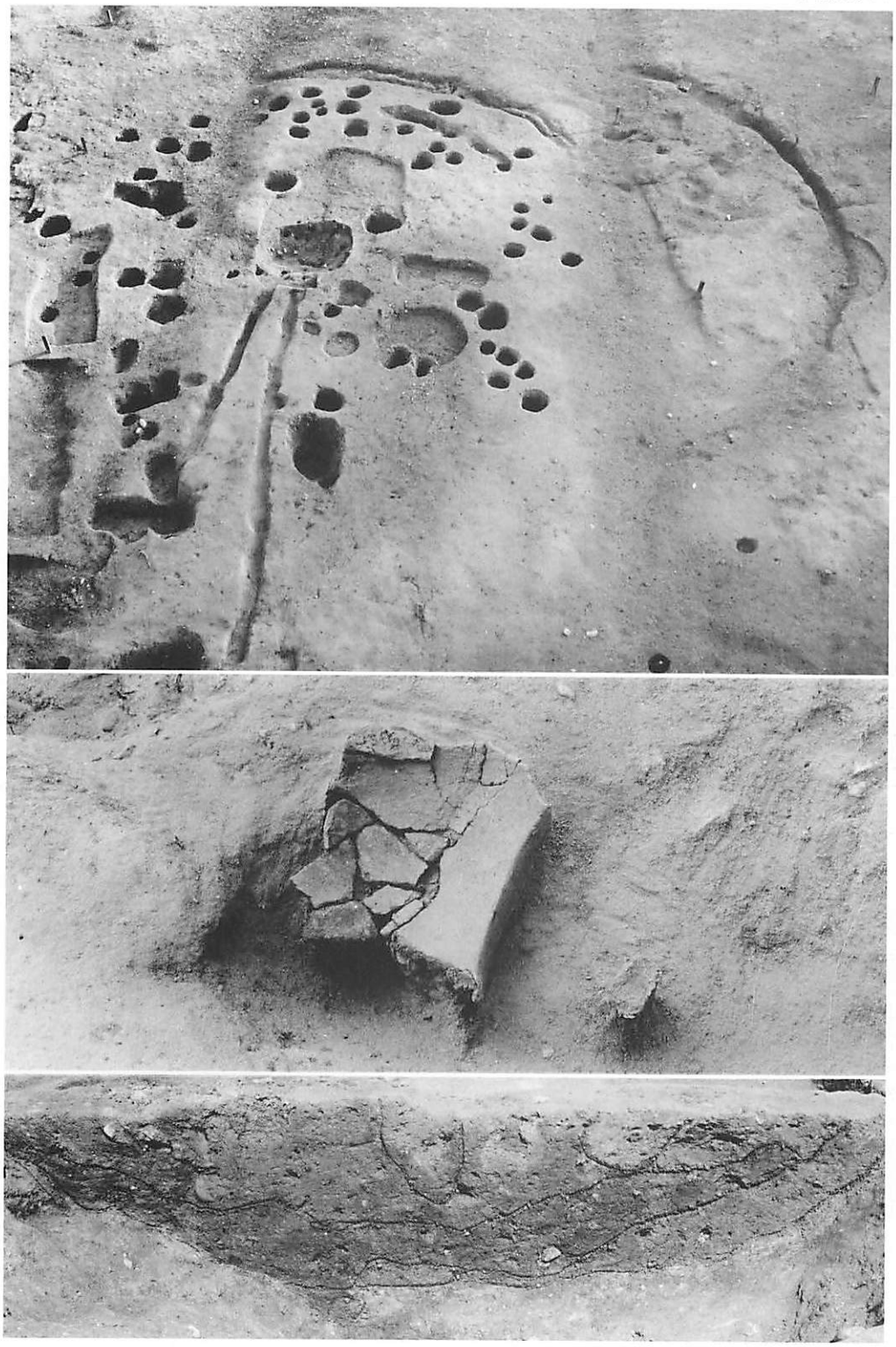


煤谷川窯址・出土須恵器(2)

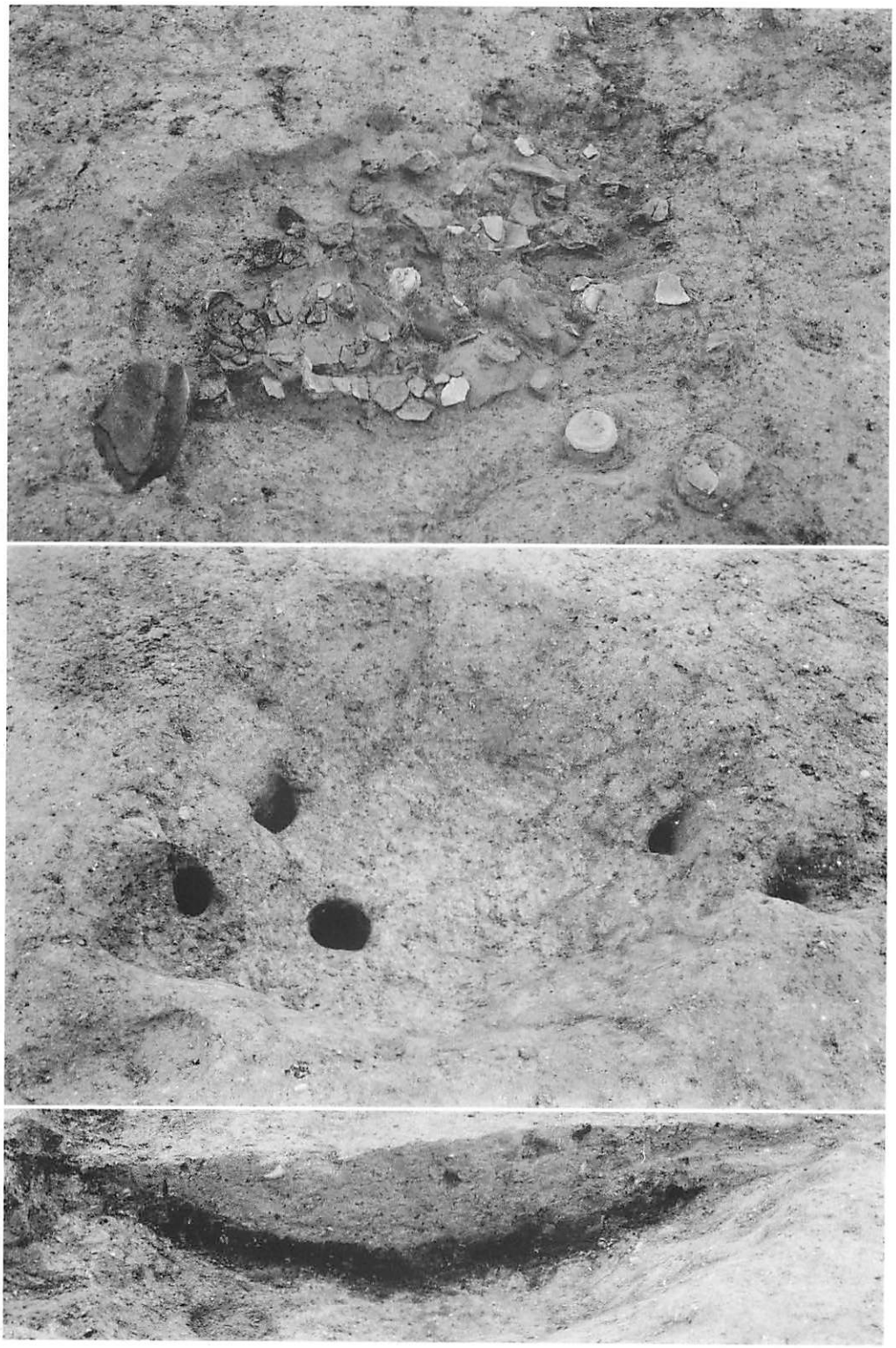
畑ノ前遺跡・調査前全景　　上：東より，下：北より

畑ノ前遺跡・調査後全景(1)　上：北西より，下：南より

畑ノ前遺跡・調査後全景(2)　　上が北

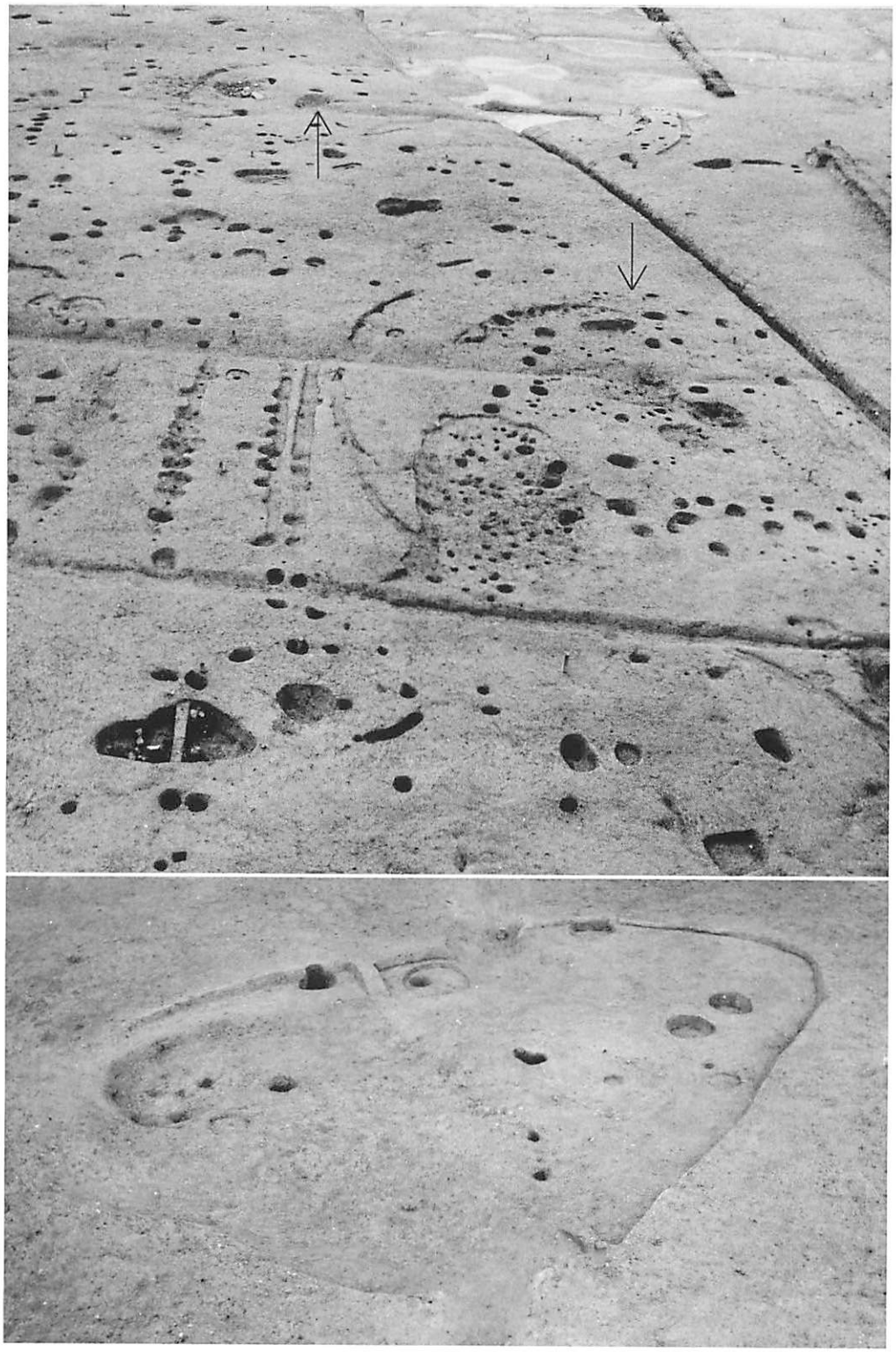


畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(1)
上：竪穴住居址1・2(北より)，中：竪穴住居址1壁溝(2G溝2)内遺物出土状況(北より)，
下：竪穴住居址2内炉址(3G土壙8)断面(南より)

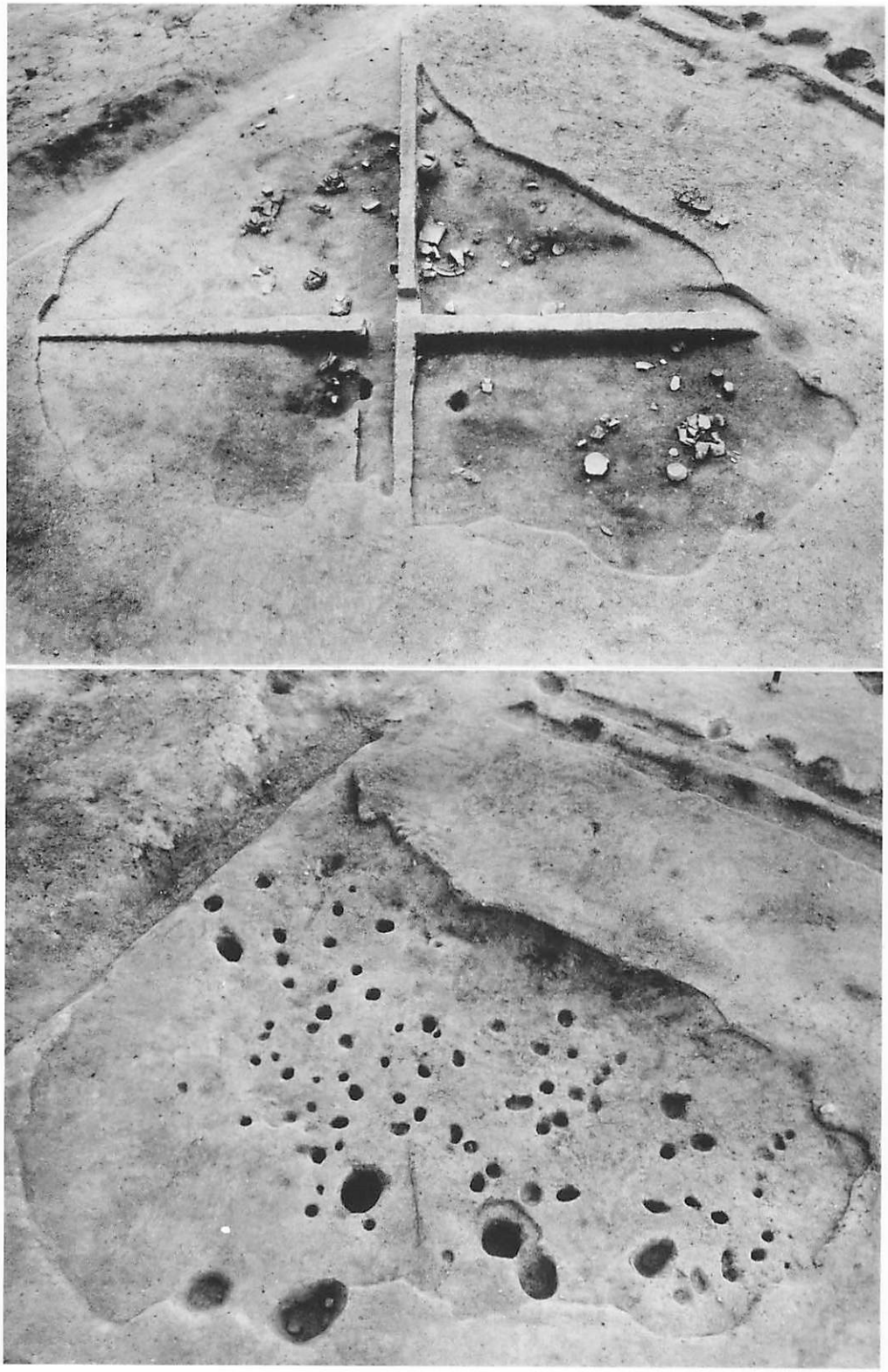


畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(2)
上：竪穴住居址３内土壙（２Ｅ土壙30）遺物出土状況（北より），中：竪穴住居址３内炉址（２Ｅ土壙１）完掘状況（東より），下：同断面（東より）

畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(3)
上：竪穴住居址4（北東より），下：同内炉址断面（北東より）



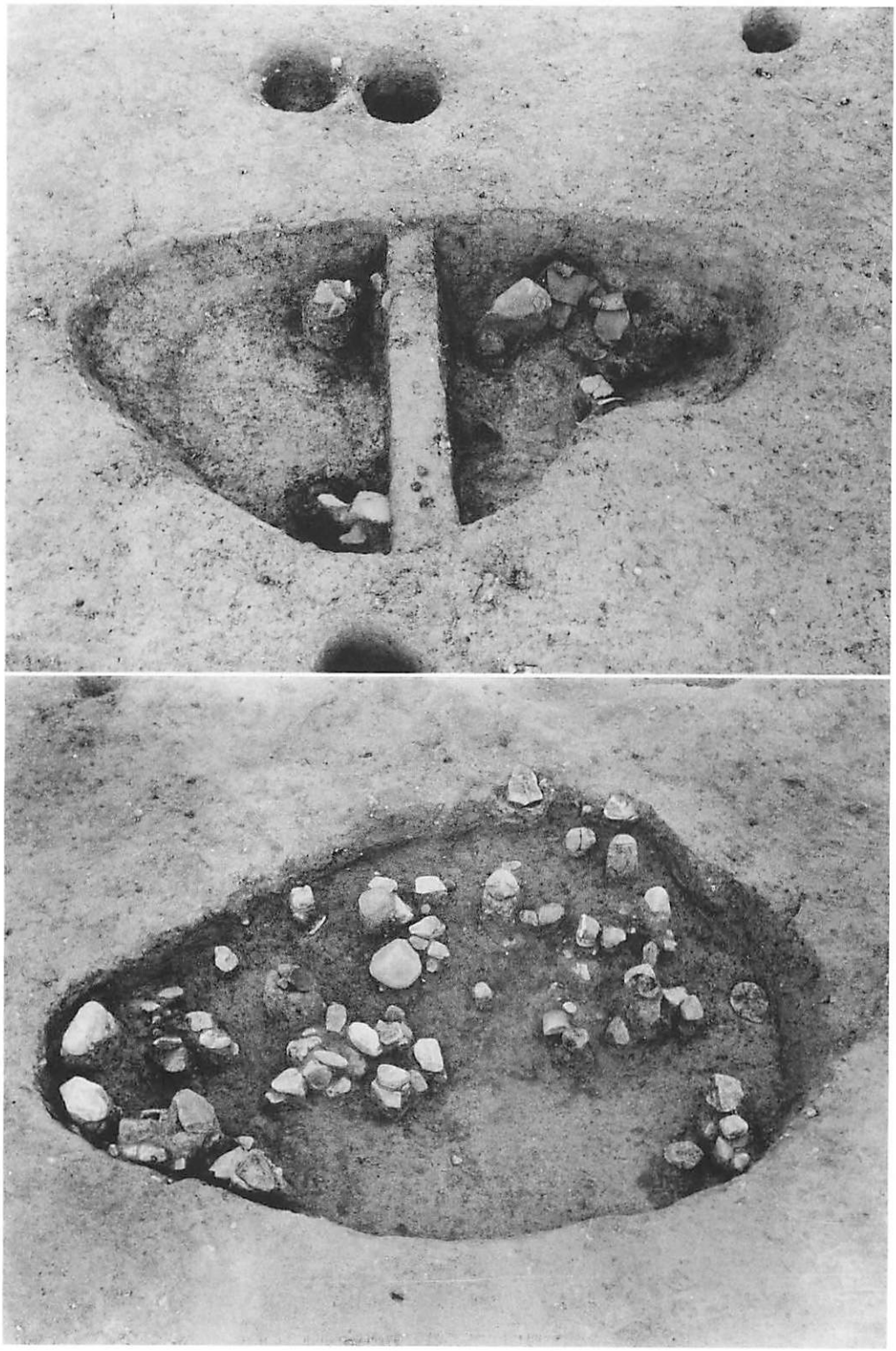
畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(4)
上：竪穴住居址3(上の矢印)・竪穴住居址4・5(下の矢印)遠景(東より)，下：4E 不明遺構1(南より)



畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(5)
上：３Ｅ不明遺構１遺物出土状況(北西より)，下：同完掘状況(北西より)

畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(6)
上左：3E不明遺構1遺物出土状況細部(北東より)，上右：同(北西より)，下左：同(西より)，下右：同西隅の棒状粘板岩が直立している状況(北より)

畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(7)
上：竪穴住居址６内土壙（１Ｇ土壙３，南より），下：３Ｄ24・25土壙１（北東より）

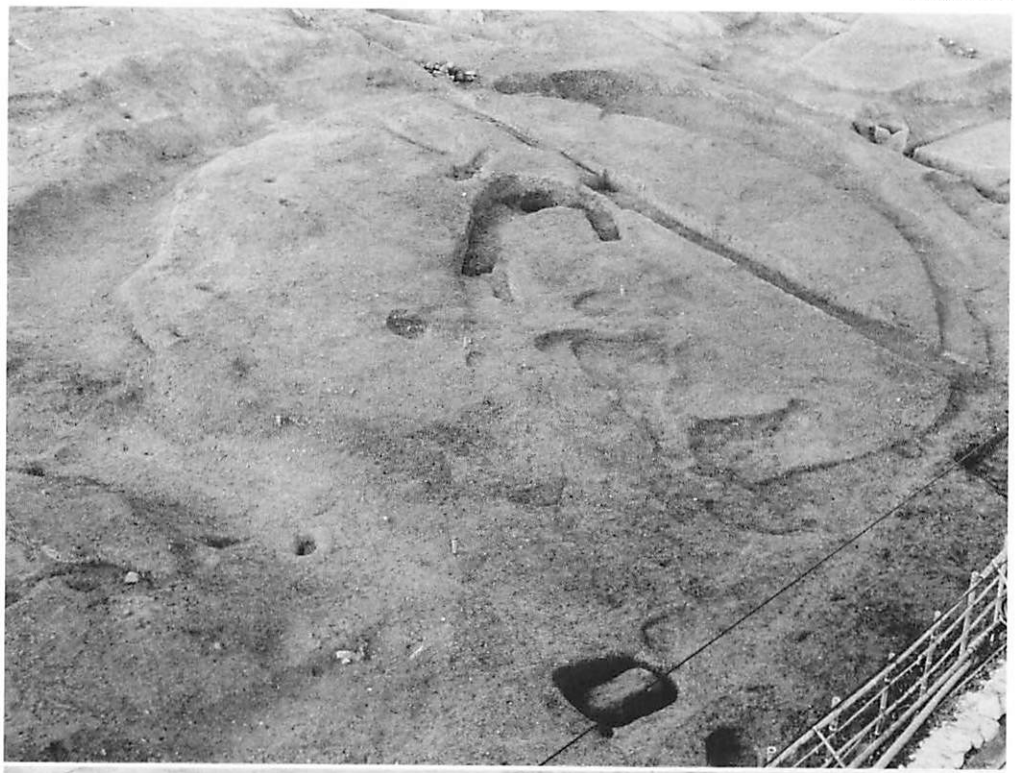


畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(8)
上：３Ｅ土壙７（西より），下：４Ｈ土壙４（北より）

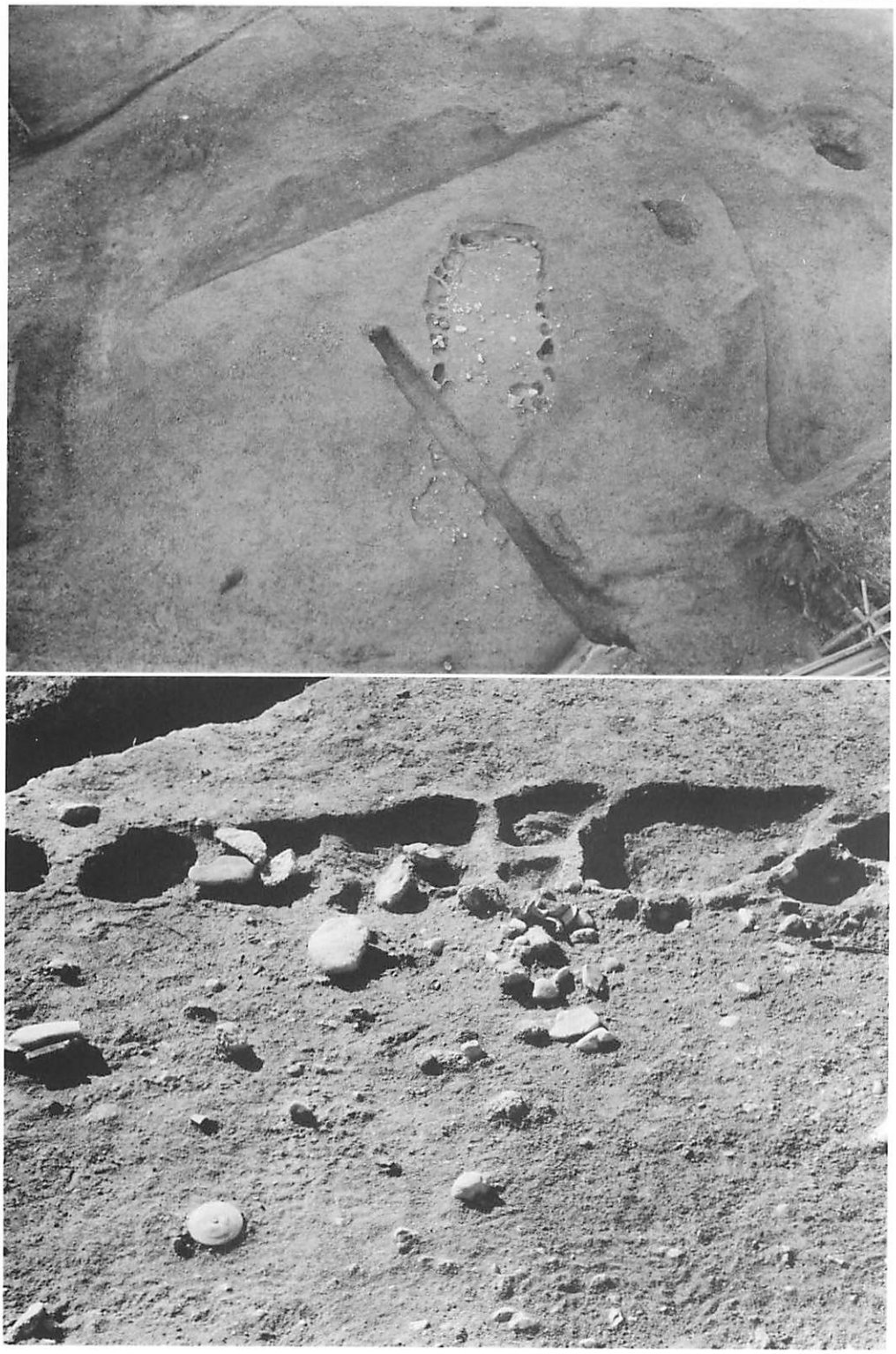
畑ノ前遺跡・弥生時代の遺構(9)
上：６Ｅ区包含層遺物出土状況(東より)，下：３Ｈ22土壙１遺物出土状況(北東より)

畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(1)
上：畑ノ前古墳群全景(北より)，下：3号墳(南より)

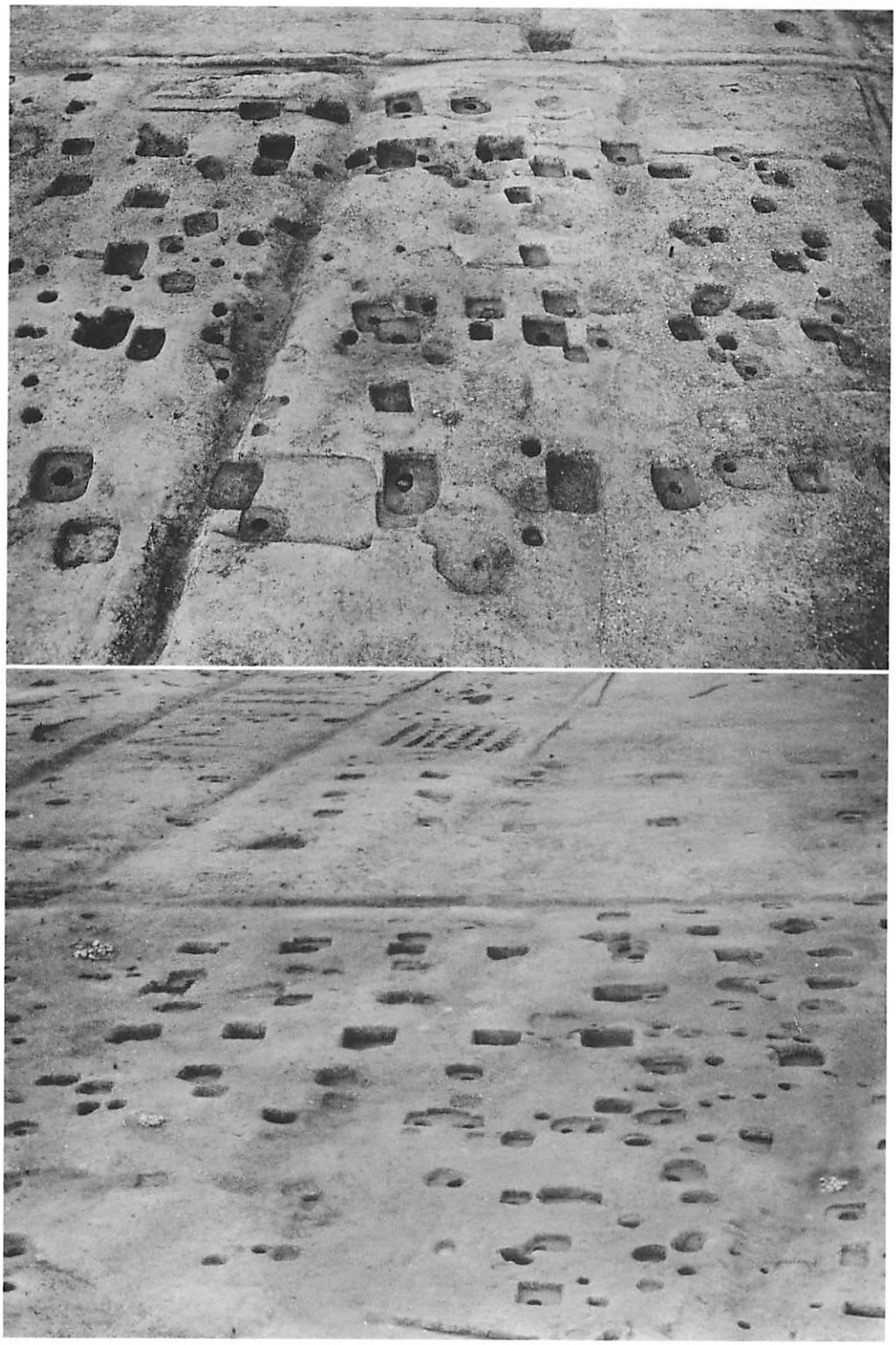
畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(2)
上：4号墳(南より)，下：同遺物出土状況(東より)



畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(3)
上：5号墳(南東より)，下：6号墳(南東より)

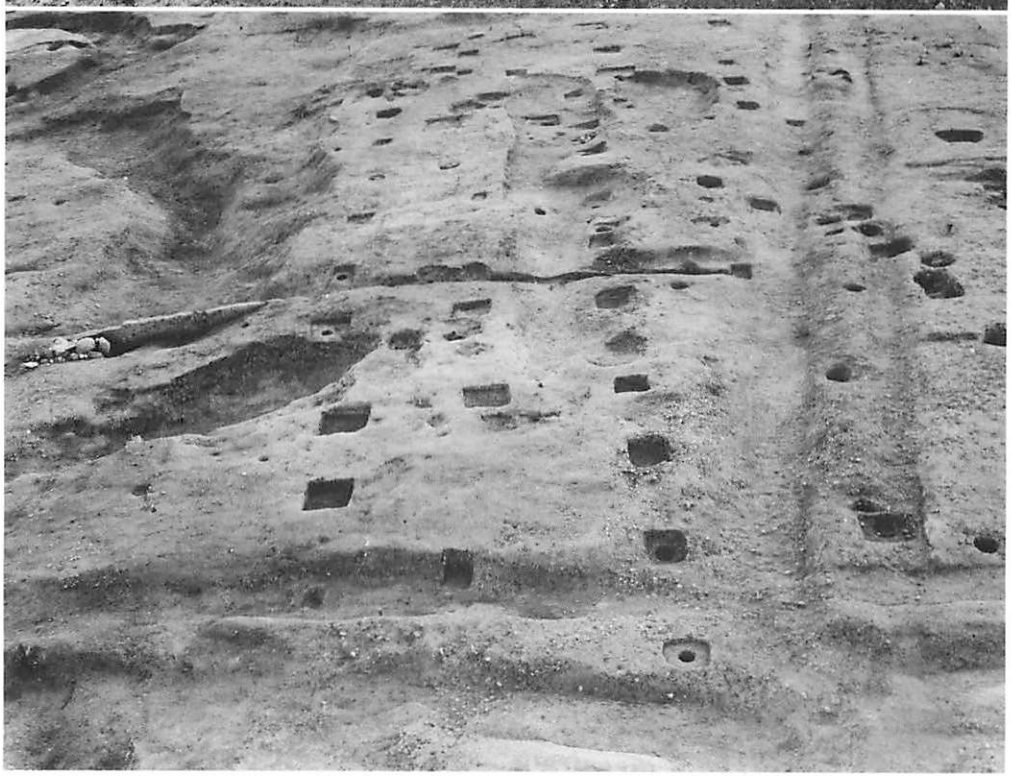


畑ノ前遺跡・古墳時代の遺構(4)
上：7号墳(南東より)，下：同遺物出土状況(北東より)

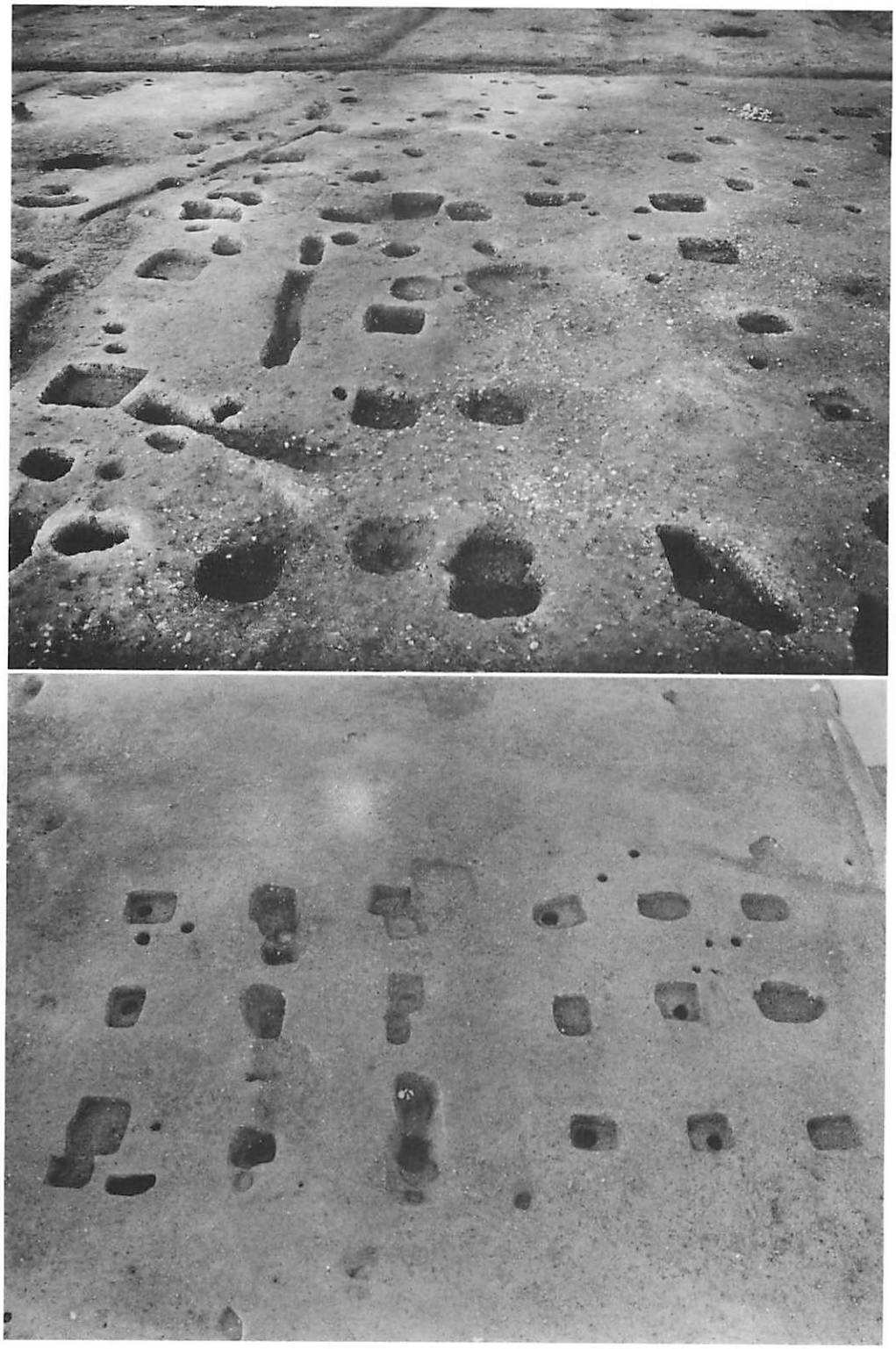


畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構1)　　掘立柱建物1)
上：掘立柱建物2（南より），下：掘立柱建物1（南より）

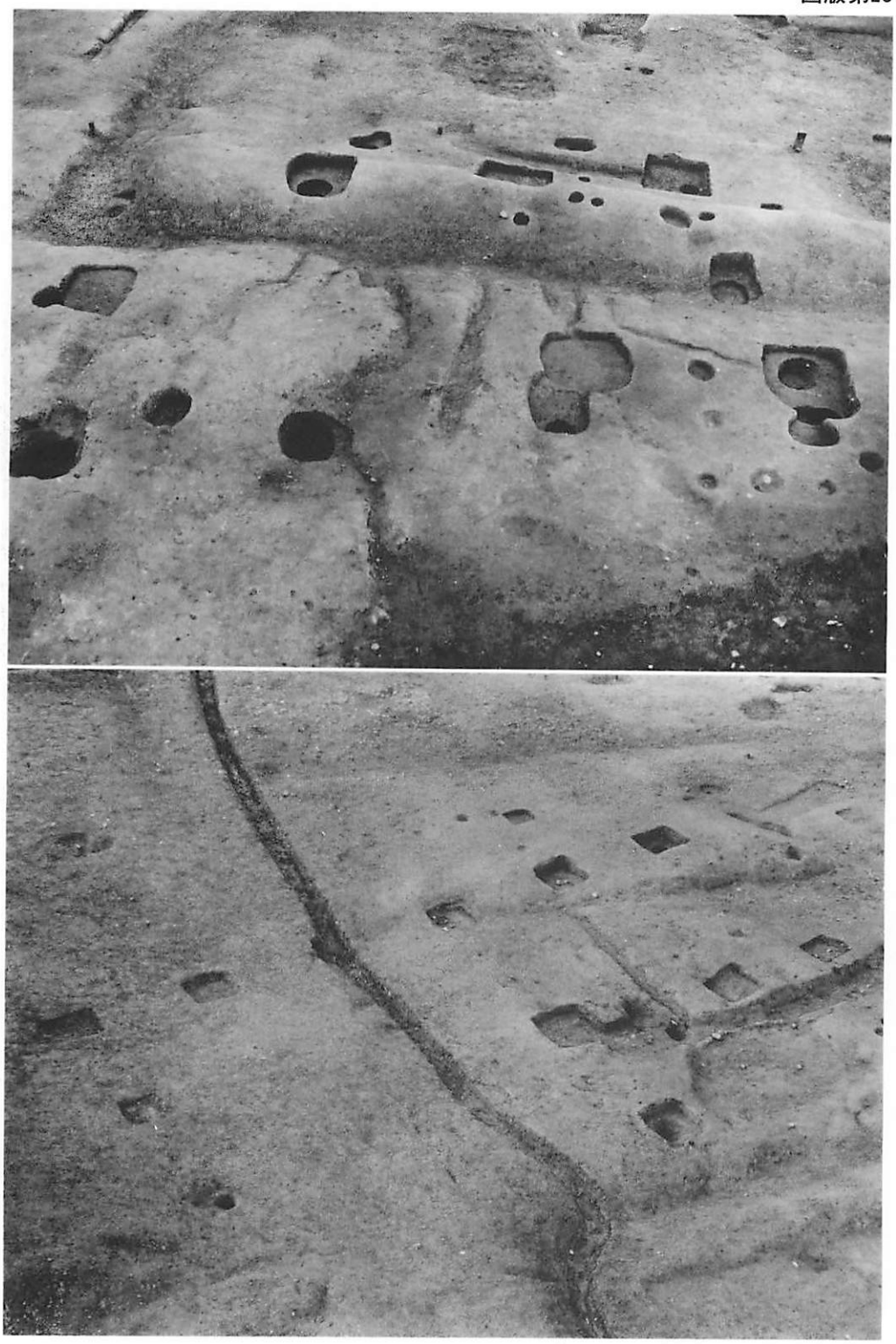
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(2)　　掘立柱建物(2)
上：掘立柱建物１・２(南より)，下：掘立柱建物３(南より)



畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(3)　　掘立柱建物(3)
上：掘立柱建物13(東より)，下：掘立柱建物４・20(北より)

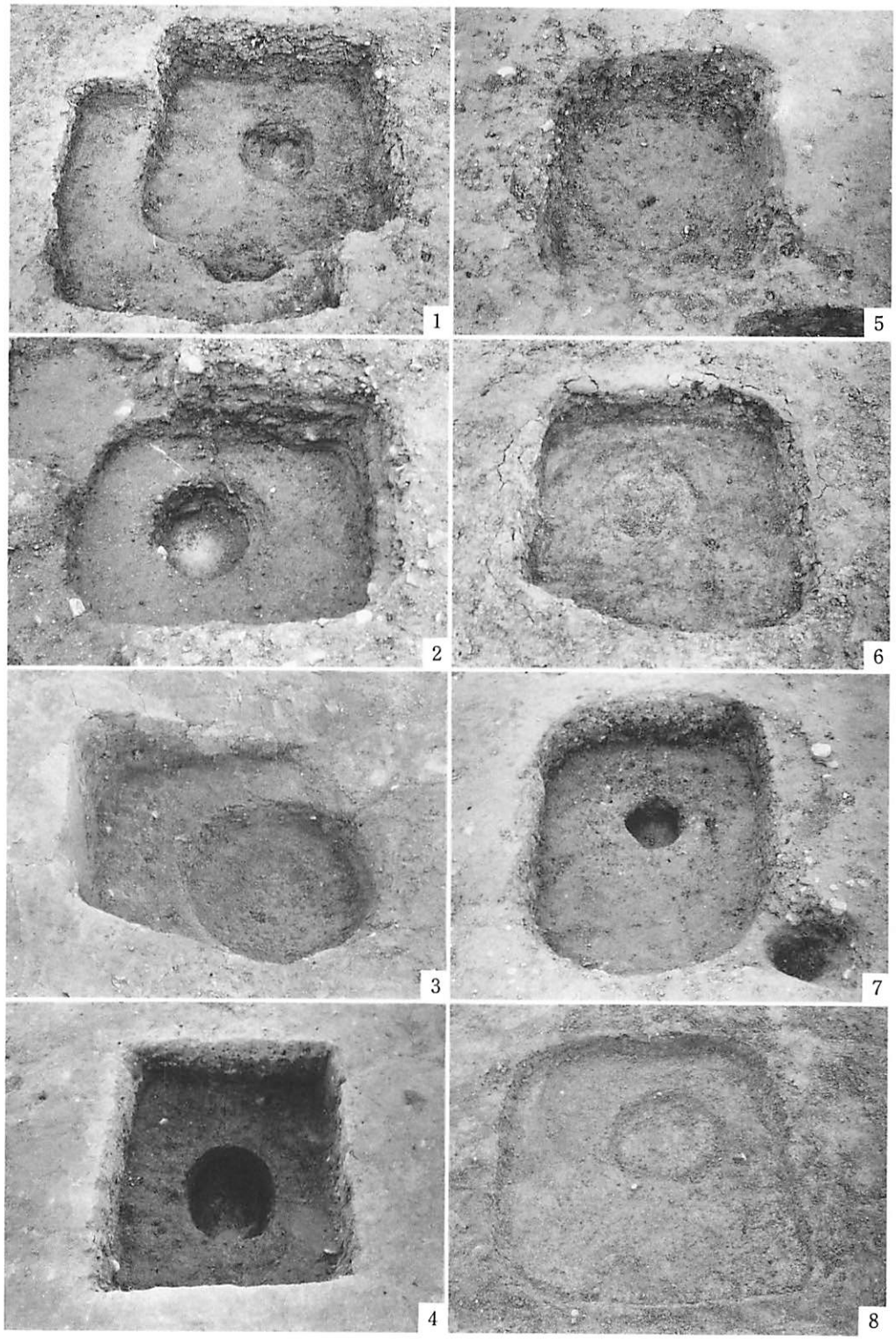


畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(4)　　掘立柱建物(4)
上：掘立柱建物6・11(南より)，下：掘立柱建物5・19(東より)



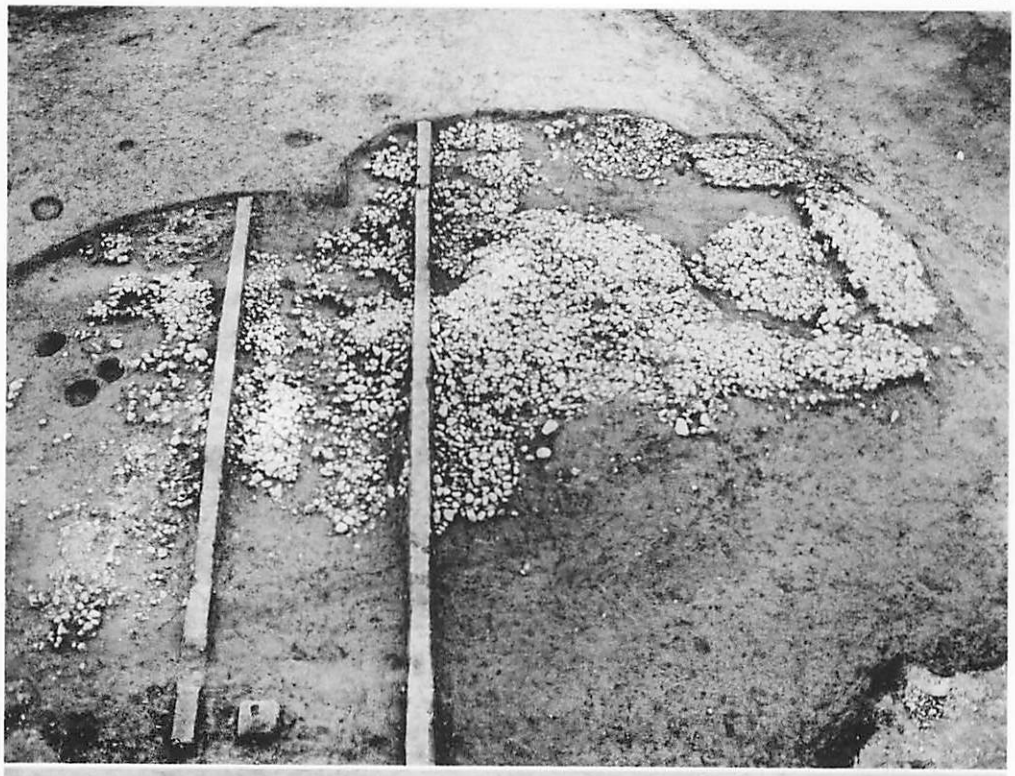
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(5)　　掘立柱建物(5)
上：掘立柱建物7（西より），下：掘立柱建物12（南東より）

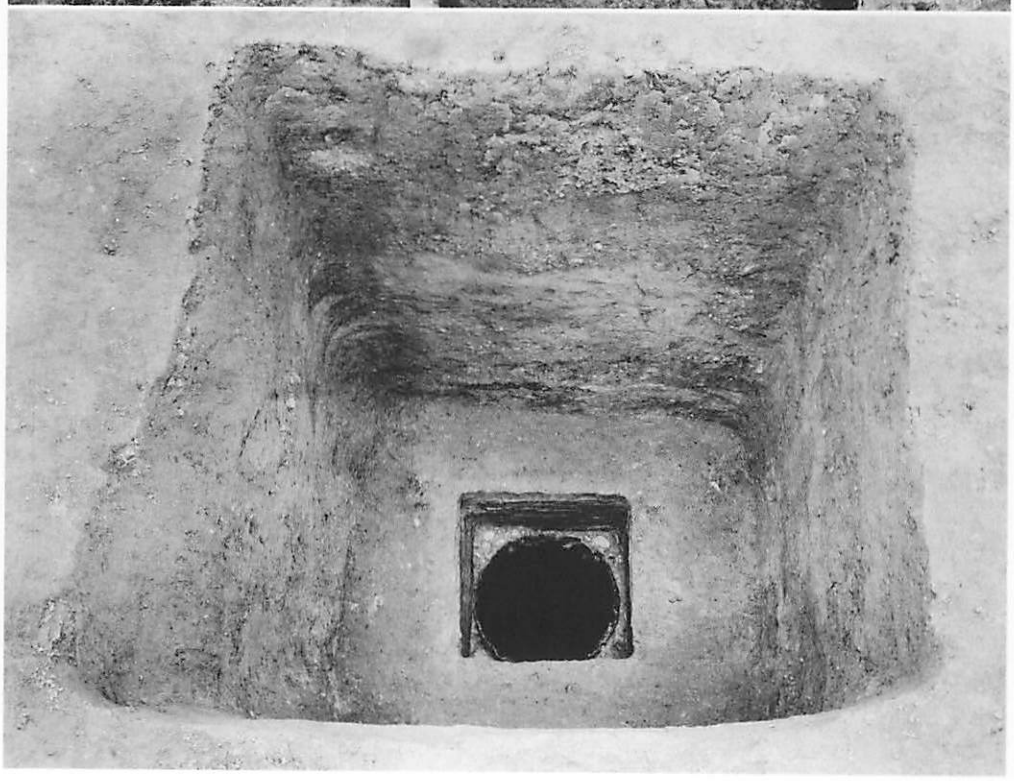
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(6)　　掘立柱建物(6)
上：掘立柱建物14・15(西より)，下：掘立柱建物15(東より)



畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(7)　　掘立柱建物柱穴

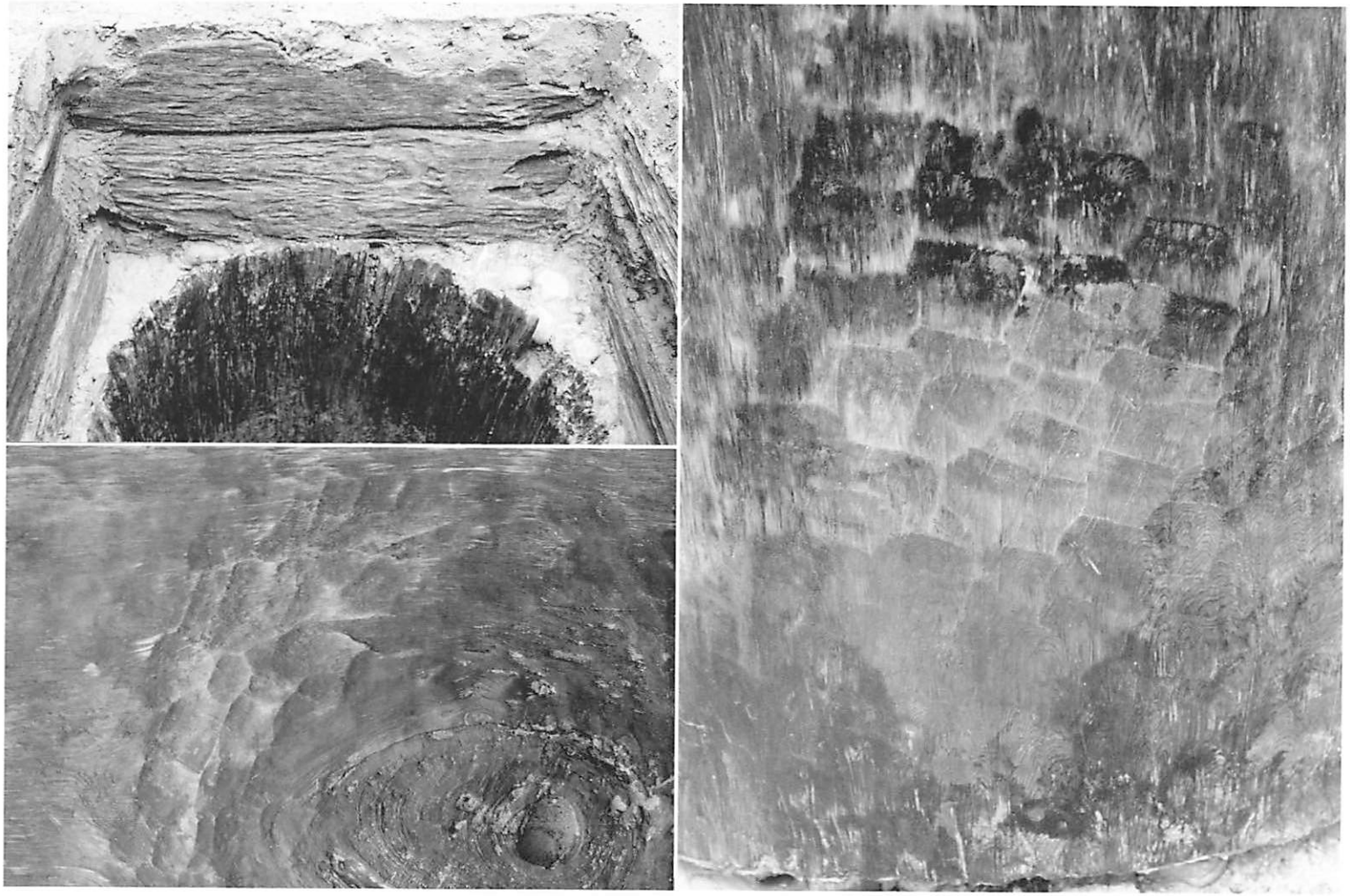
1：掘立柱建物1柱穴2・掘立柱建物16柱穴2(北より)，2：掘立柱建物1柱穴14(北より)，3：掘立柱建物2柱穴9(北より)，4：掘立柱建物3柱穴2(北より)，5：掘立柱建物7柱穴7(北より)，6：掘立柱建物10柱穴2(北より)，7：掘立柱建物12柱穴1(北より)，8：掘立柱建物14柱穴6(北より)



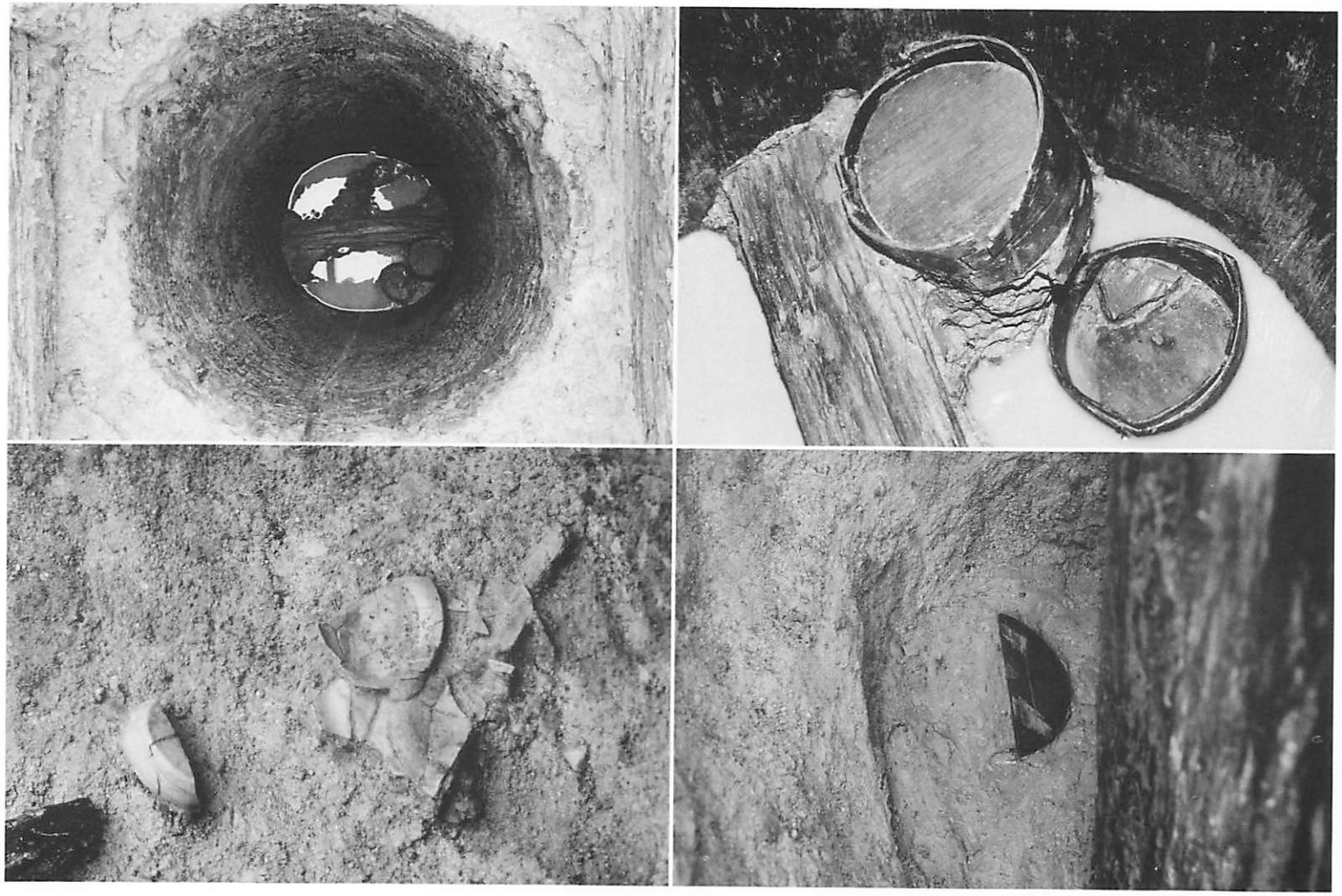


畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(8)　　5Ｈ井戸１(1)
上：検出前の小礫群(北東より)，下：井戸側検出状況(南より)

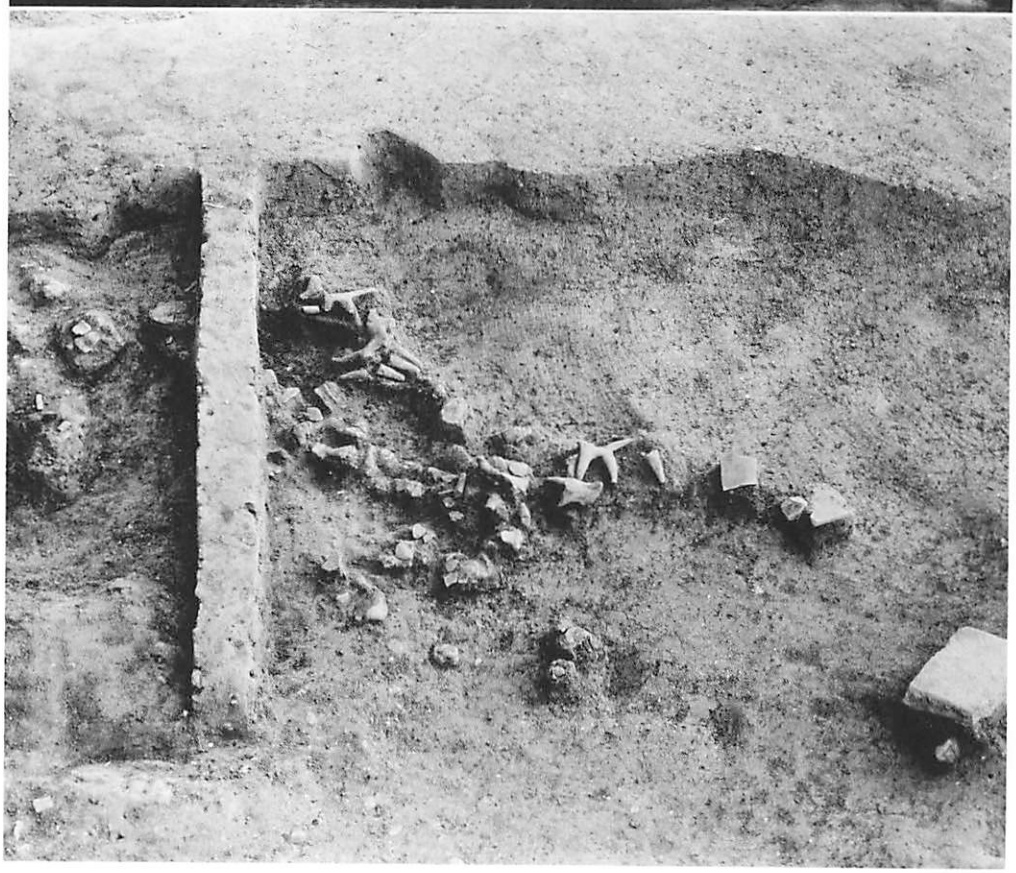
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(9)　　5Ｈ井戸１(2)
断ち割り状況(東より)



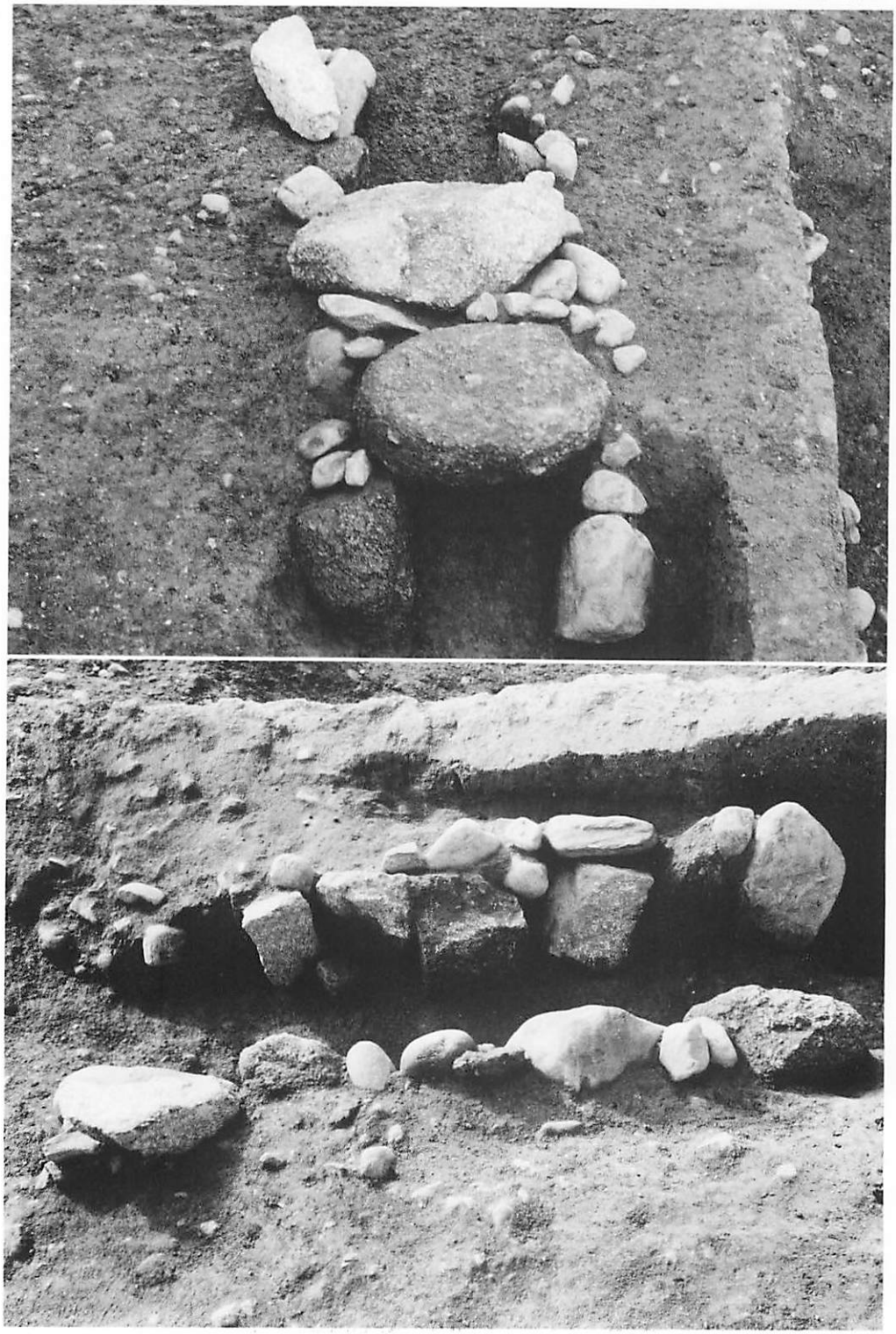
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構⑽　　５Ｈ井戸１(3)
左上：上部井戸側細部，左下：下部井戸側中央の手斧痕，右：下部井戸側下方の手斧痕



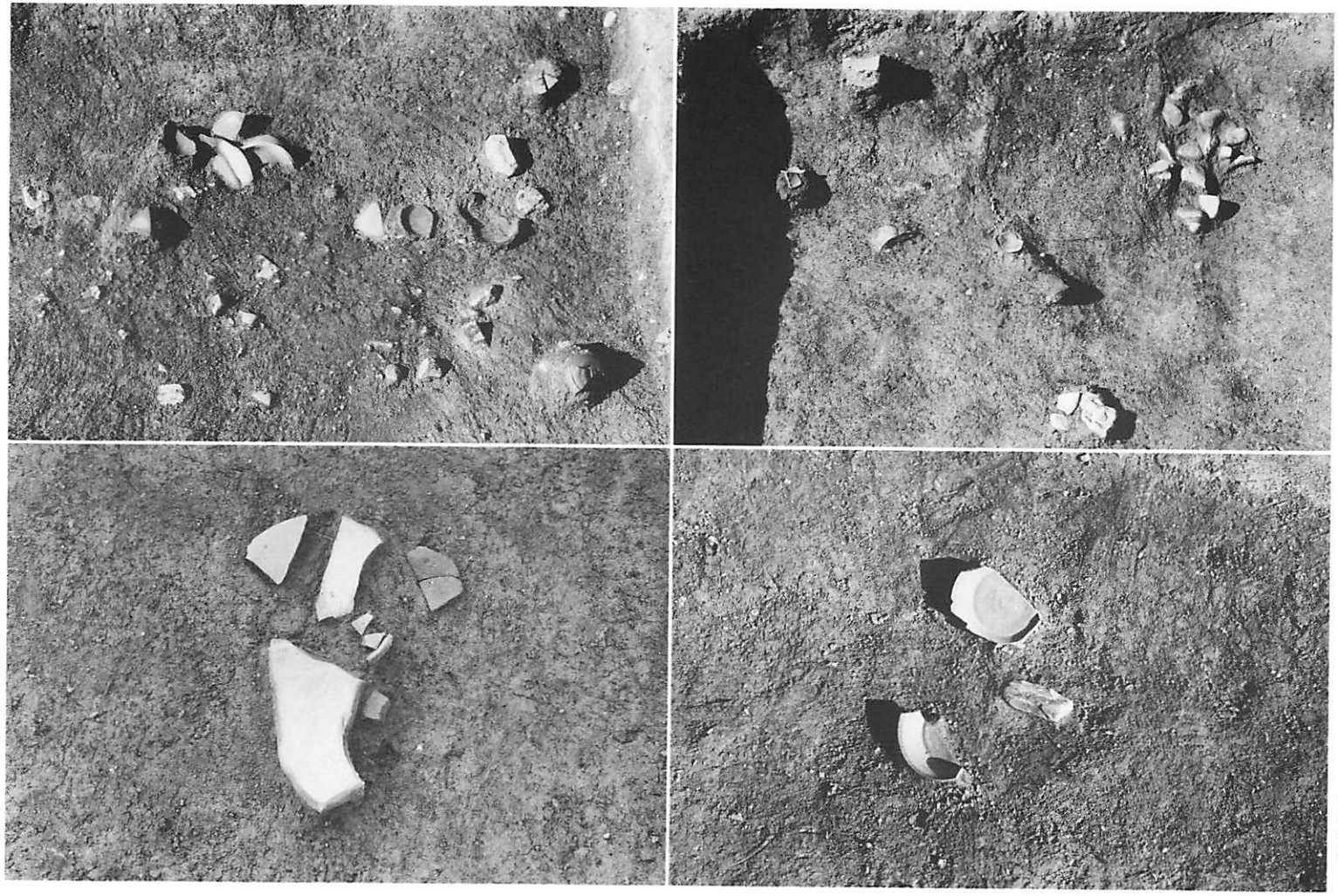
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(11)　　5Ｈ井戸１(4)
上左：下部井戸側内遺物出土状況，上右：同細部，下左：掘方内遺物出土状況，下右：同



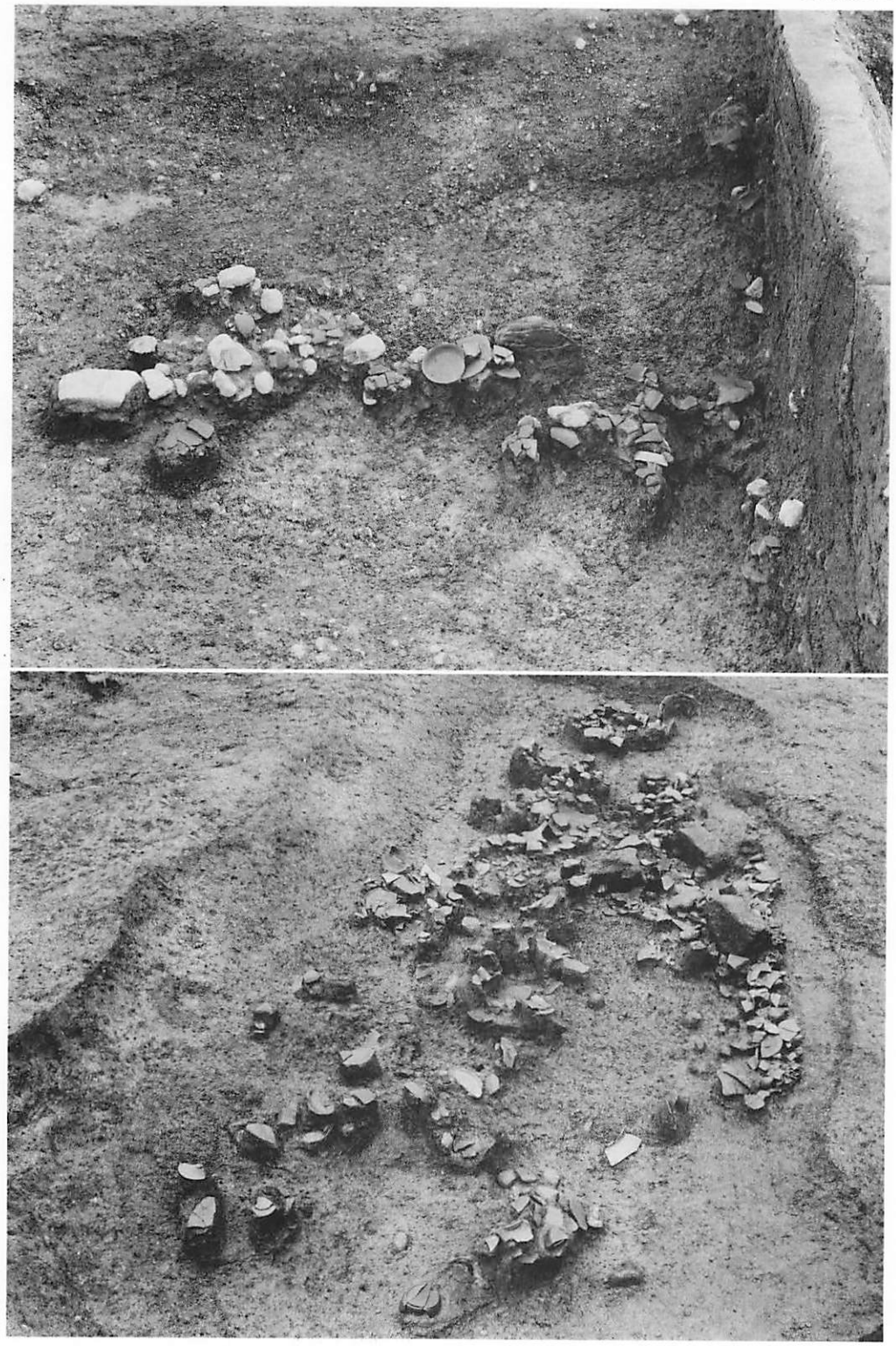
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構⑫　　３Ｄ溝１
上：全景(北より)，下：土馬出土状況(北より)



畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(13)　　5Ｆ石組溝
上：蓋石のある状況(西より)，下：蓋石を取り払った状況(北より)

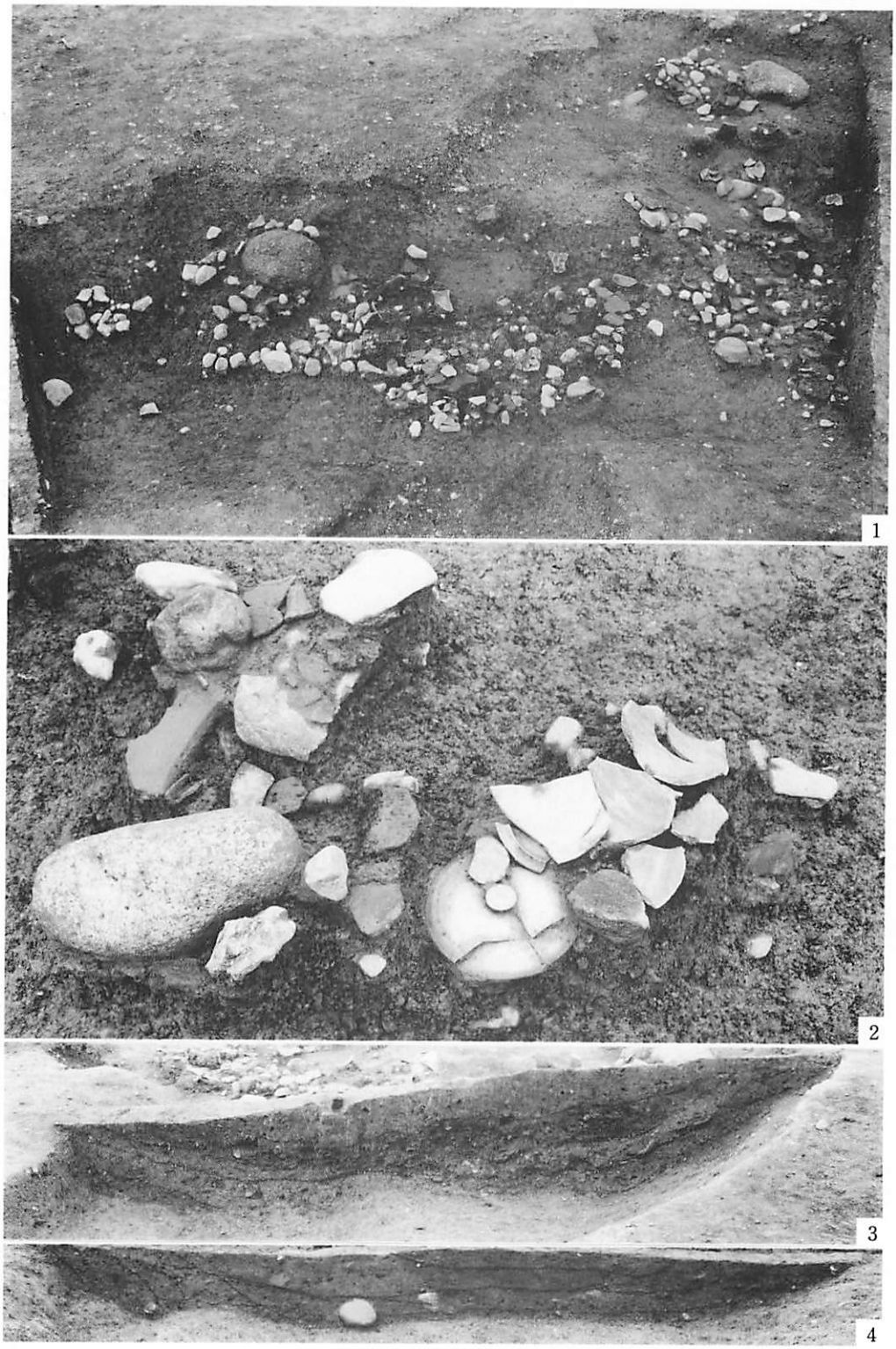


畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構14)　5Ｇ溝１
上左：遺物出土状況（５Ｇ13，東より），上右：同（５Ｇ８，東より），下左：同（５Ｇ13地山直上，東より），下右：同（５Ｆ23，西より）



畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(15)　　5号墳周濠(1)
上：遺物出土状況(5Ｇ5，西より)，下：同(5Ｇ15・6Ｇ11，南東より)

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構⑯　　5号墳周濠(2)
1：遺物出土状況(5G10最下層，東より)，2：溝断面(第119図B－B′参照)，
3：同(第119図A－A′参照)，4：同(第119図C－C′参照)



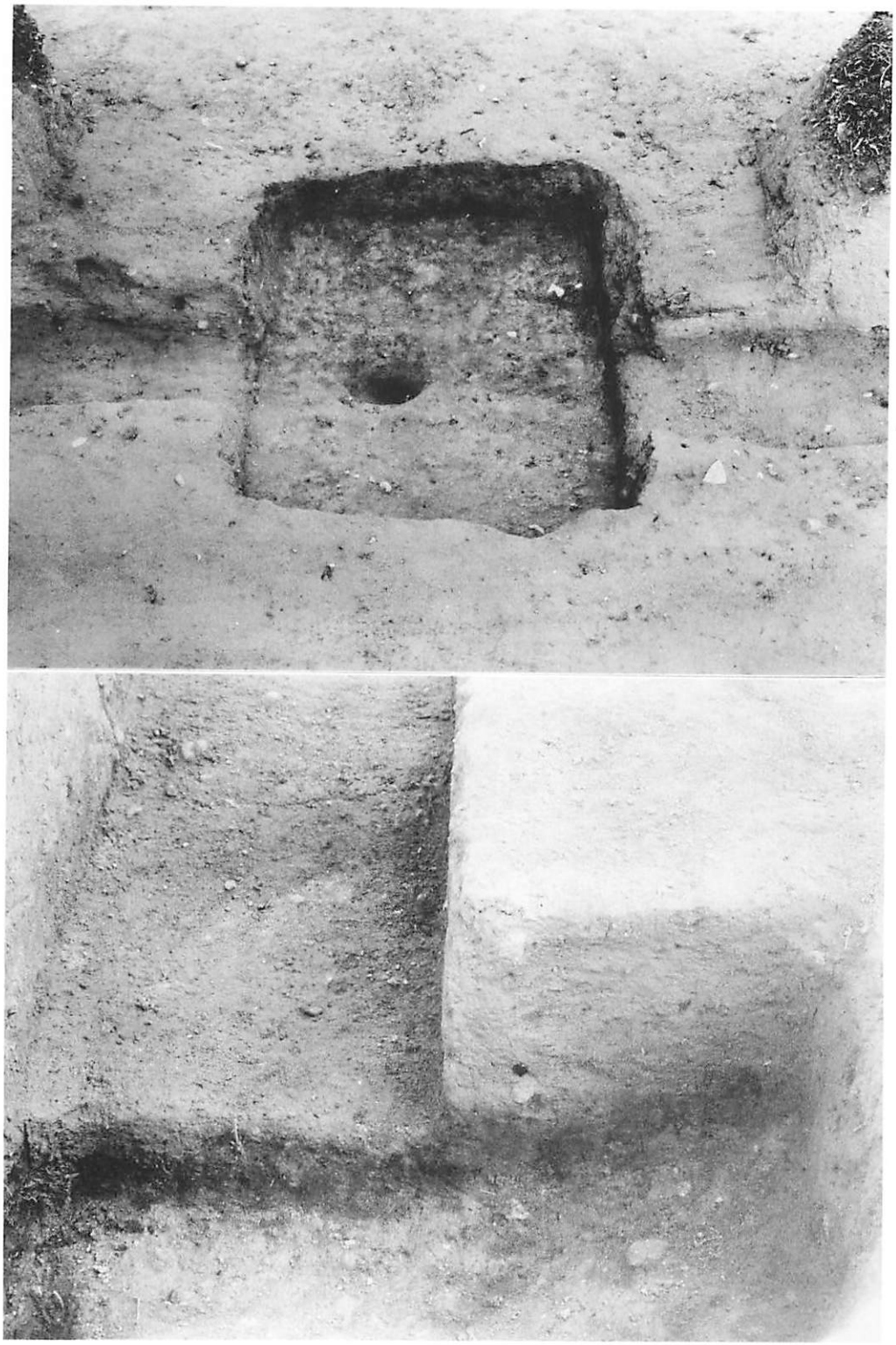
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構(17)　6号墳周濠
1：遺物出土状況(6H1・2・7，東より)，2：同(6H7，南より)，
3：溝断面(第121図E－E′参照)，4：同(第121図D－D′参照)

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構⒅　　7号墳周濠
上：遺物出土状況（5 I 10，南より），中：同（6 I 6，北より），下：溝断面（第123図C－C′参照）

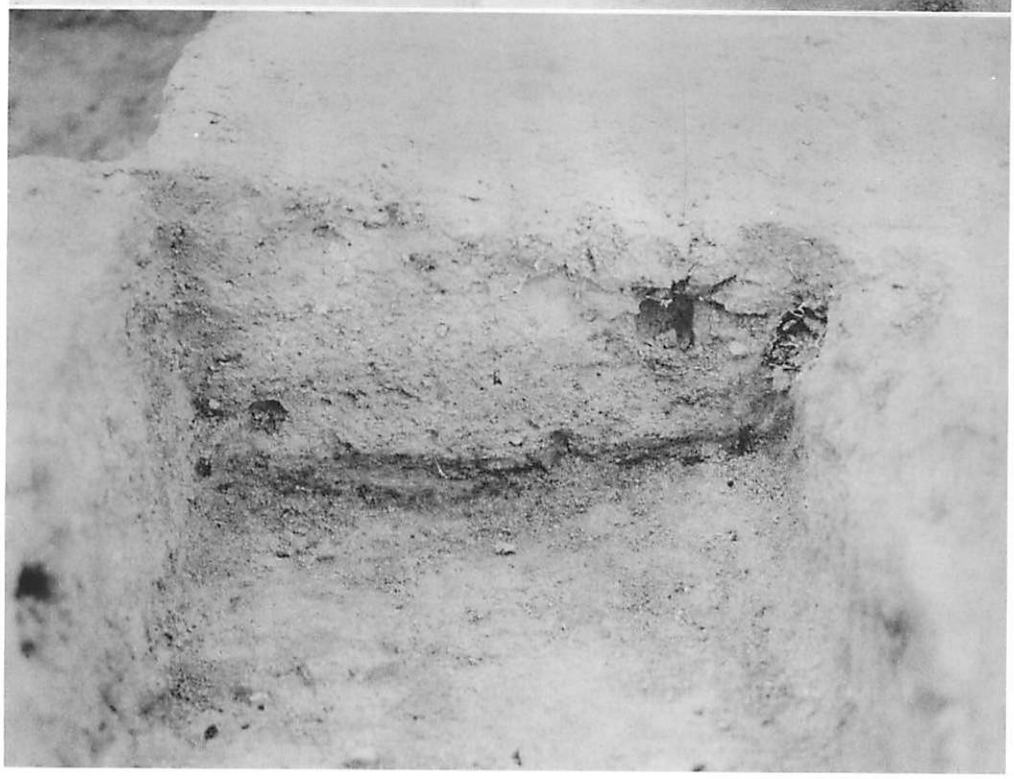
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構⒆　瓦を四隅に立てた土壙（２Ｇ土壙16）
上：完掘状況（北より），下：断面（北より）

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺構⑳　　５Ｆ溝２南・ほりこみ
上：遺物出土状況(東より)，下：同細部(南より)

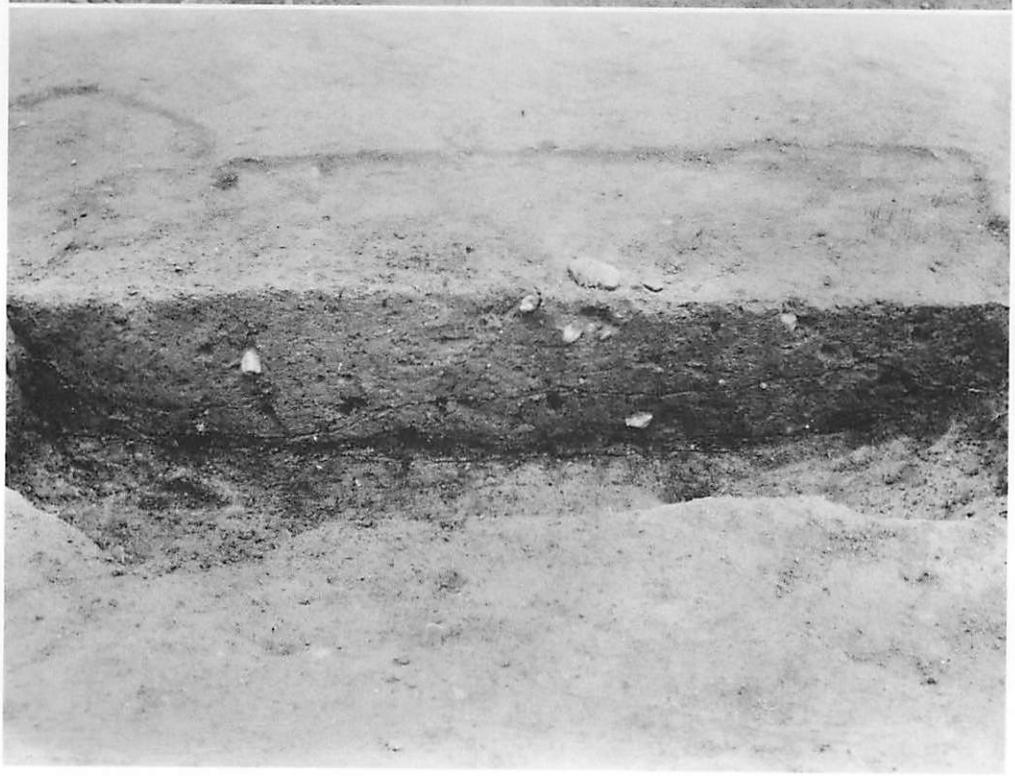
畑ノ前遺跡・奈良時代包含層遺物出土状況
上：６Ｇ１区包含層(南より)，下：６Ｆ６区包含層(東より)



畑ノ前遺跡・その他の遺構(1)
上：１Ｇ土壙２(南より)，下：同断面(西より)

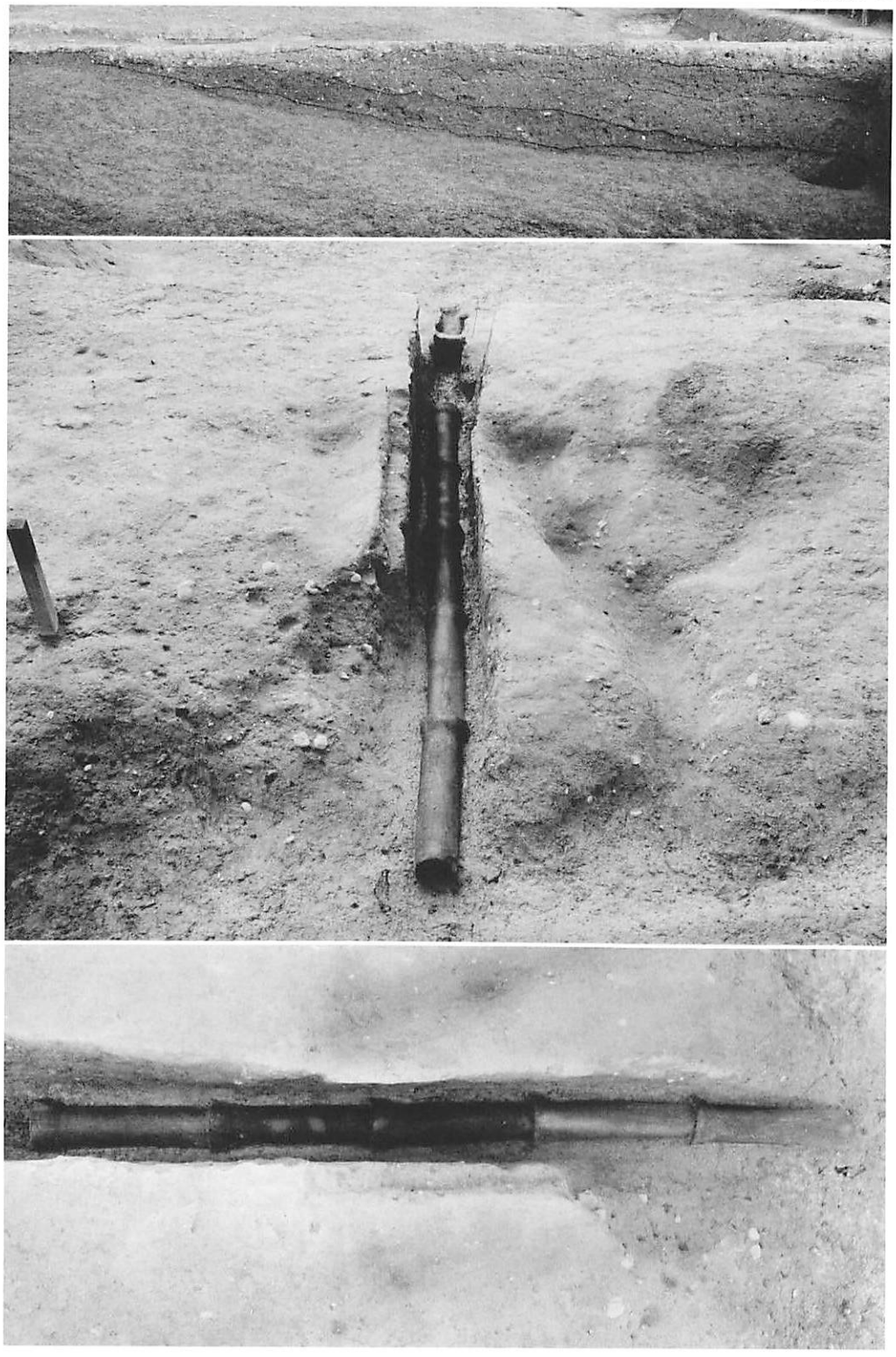


畑ノ前遺跡・その他の遺構(2)
上：２Ｇ６土壙３(北より)，下：同断面(東より)



畑ノ前遺跡・その他の遺構(3)
上：４Ｆ土壙１(北東より)，下：同断面(北東より)

畑ノ前遺跡・その他の遺構(4)
上：１Ｇ土壙１（南より），下：２Ｈ土壙１（北より）

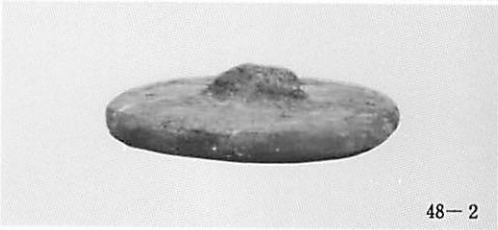


畑ノ前遺跡・その他の遺構(5)
上：中世溝状遺構6E・F区間断面(南より)，中：4H不明遺構1排水施設(北より)，下：同(東より)

44－5

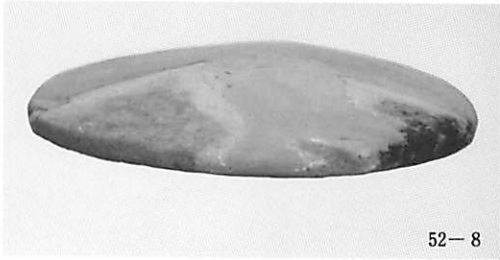
44－7

44－3


48－2

51－3

49－5


52－8

畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(1)

52—13

52—14

53—15

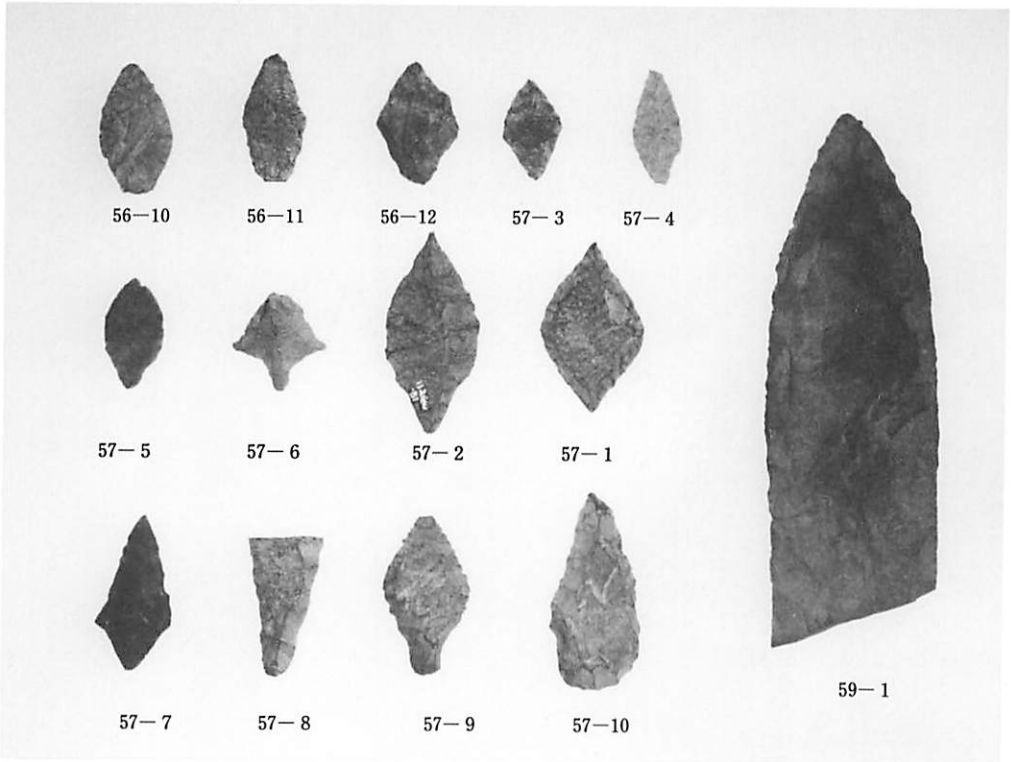
53—16

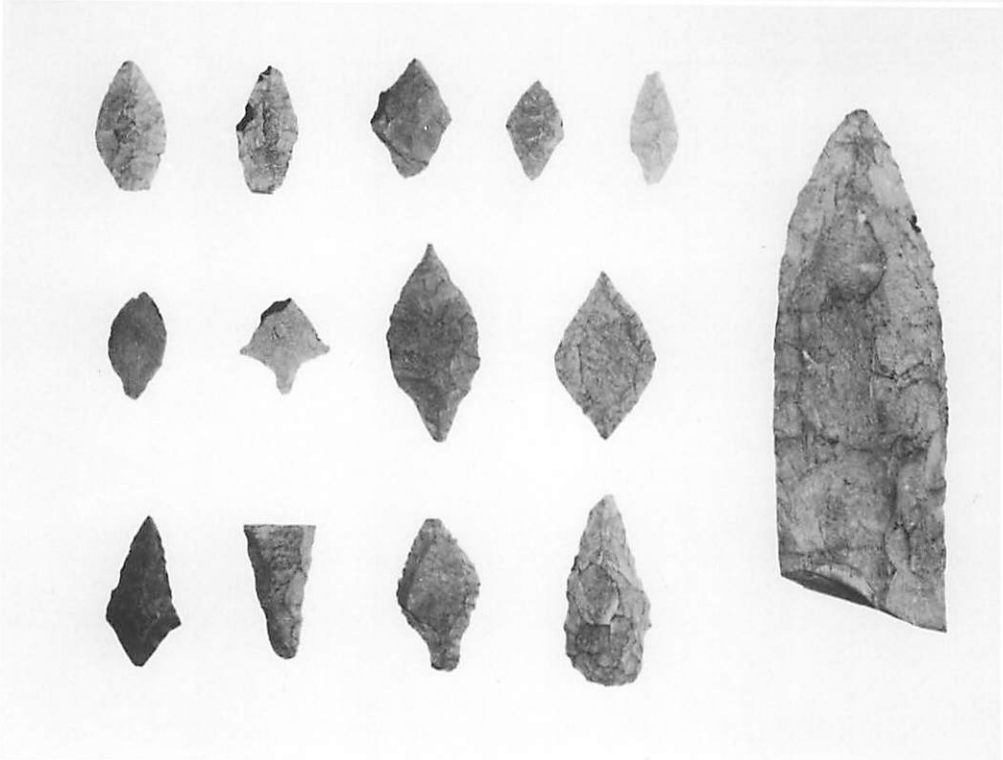
56—1　56—2　56—3

56—4　56—5　56—6

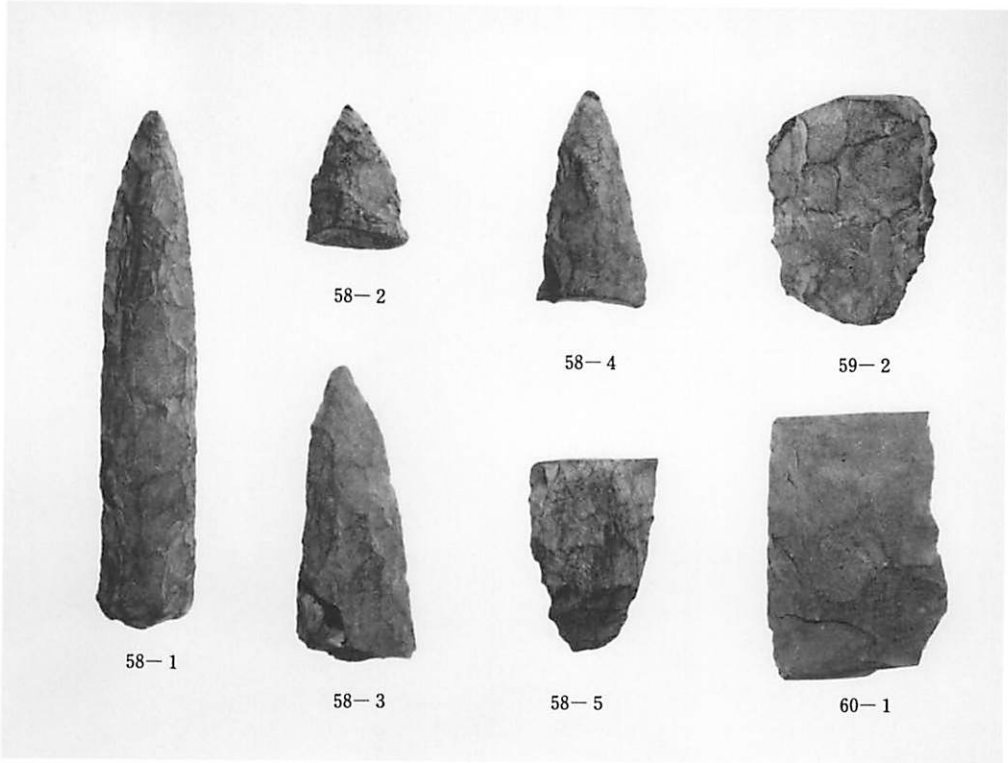
56—7　56—8　56—9

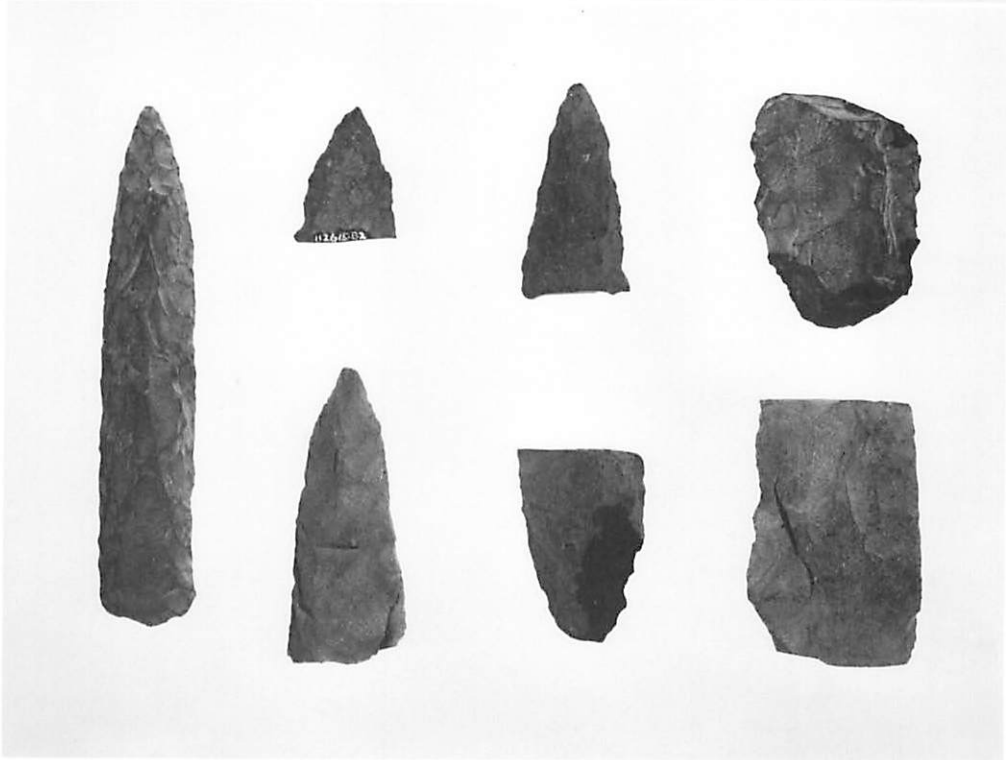
畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(2)



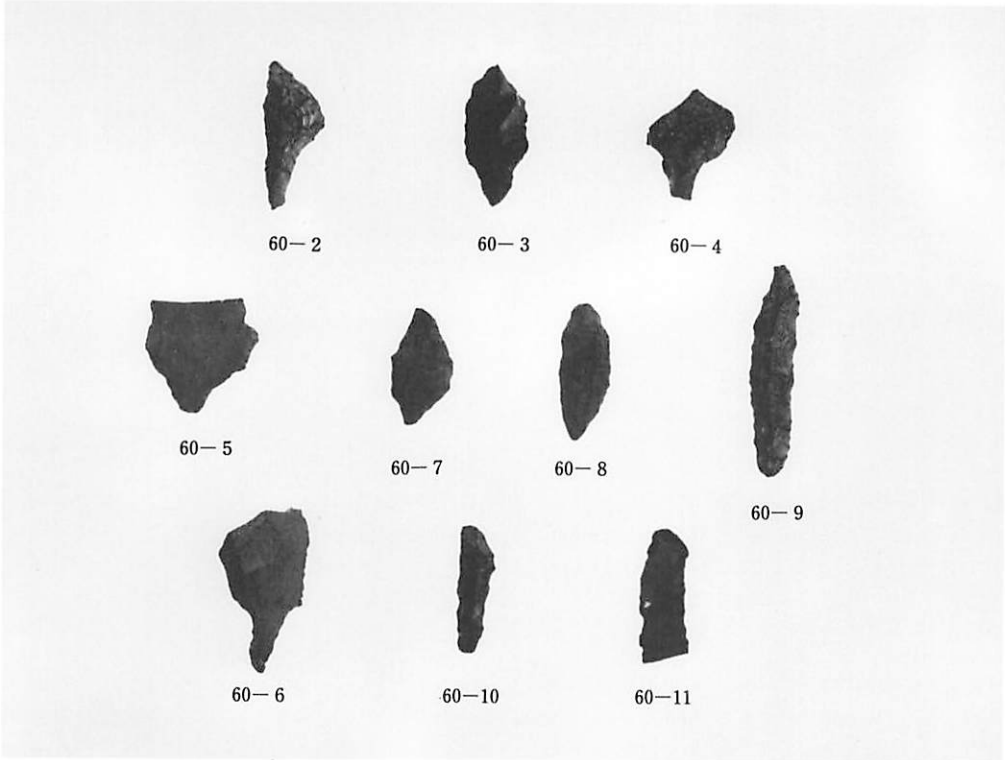


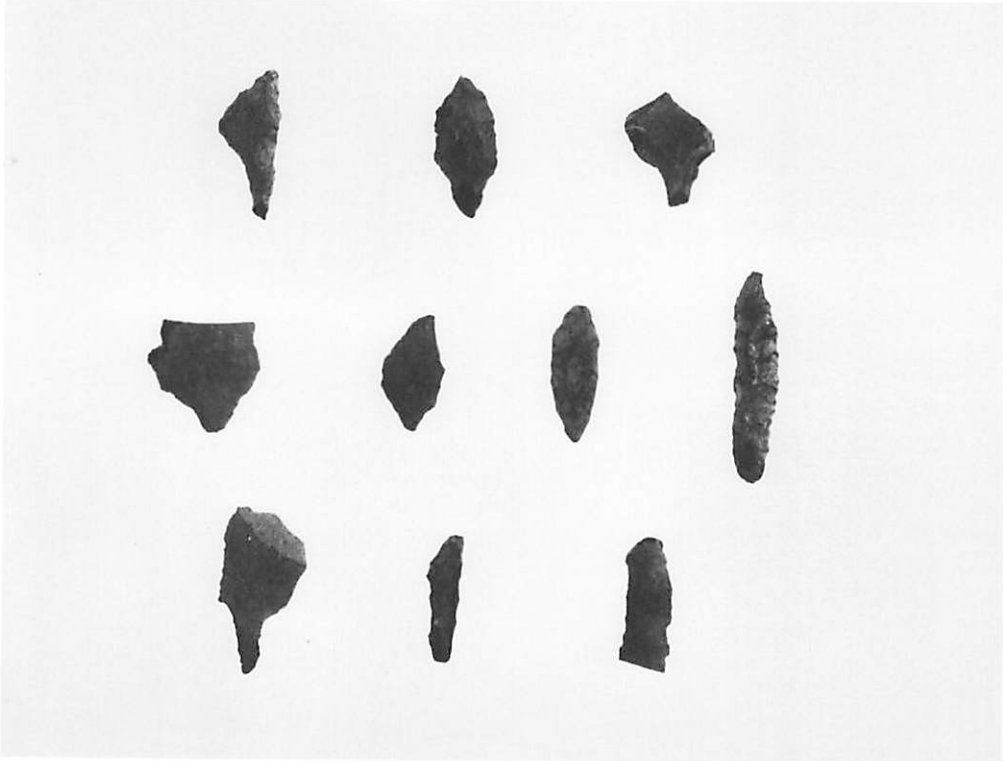
畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(3)



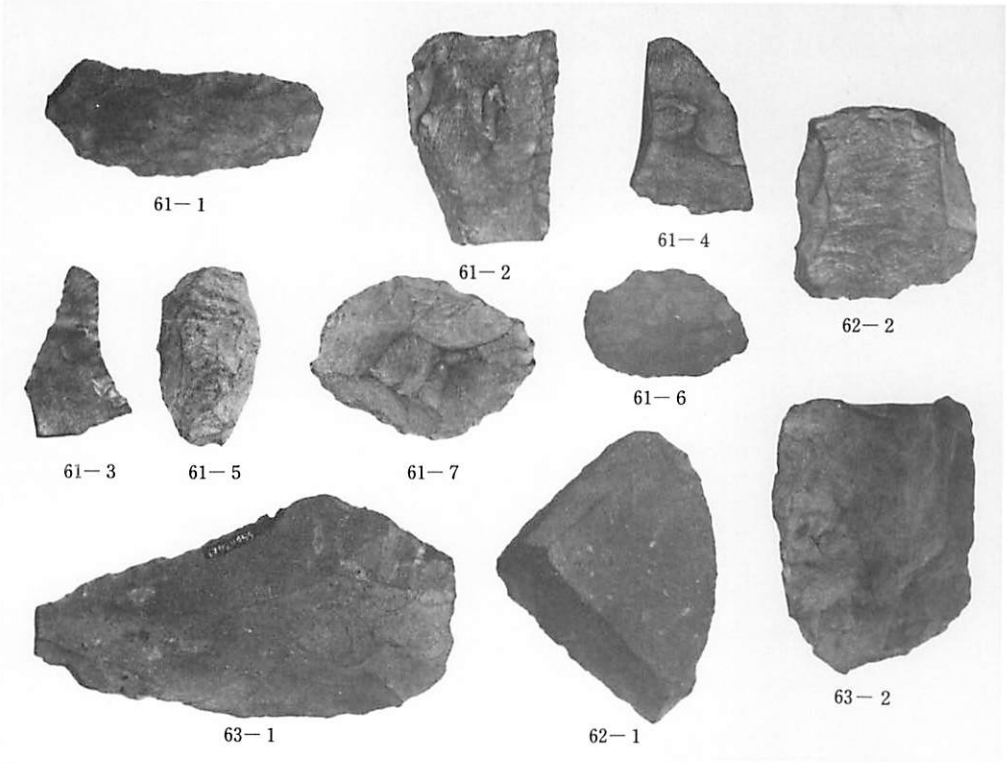


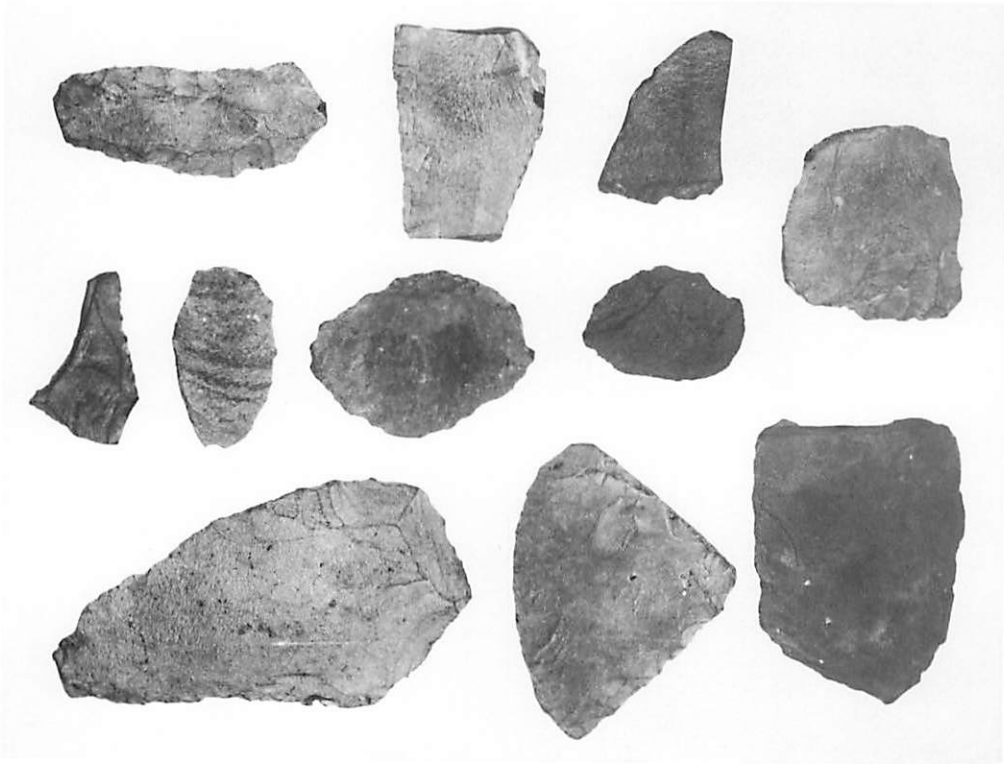
畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(4)



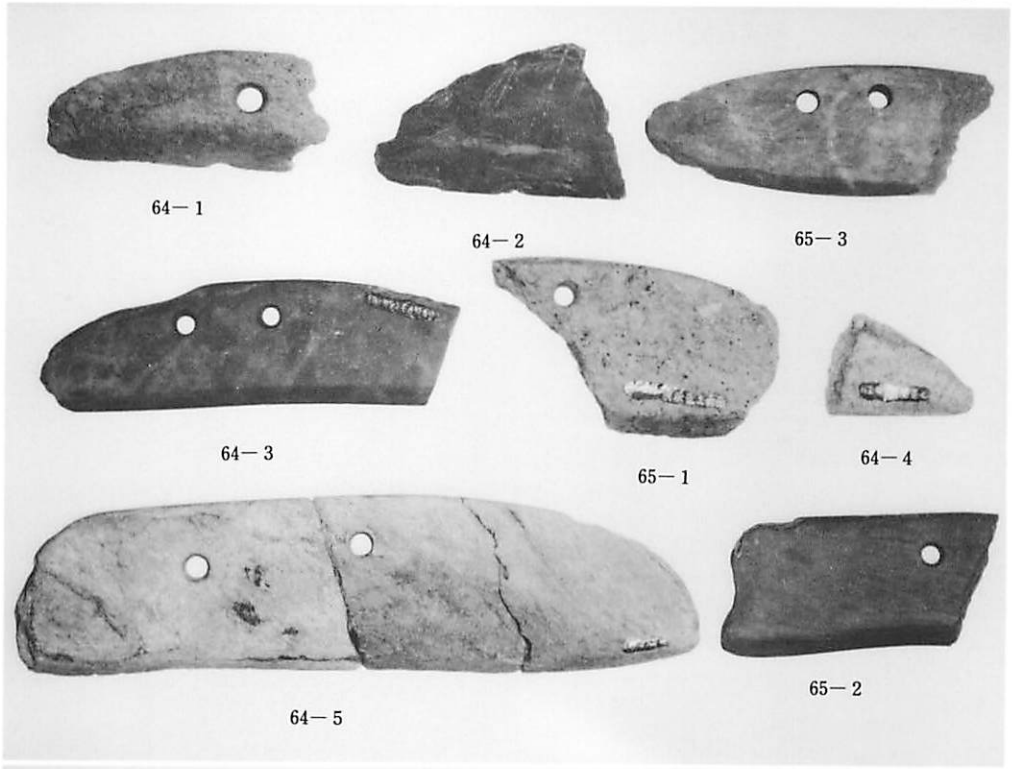


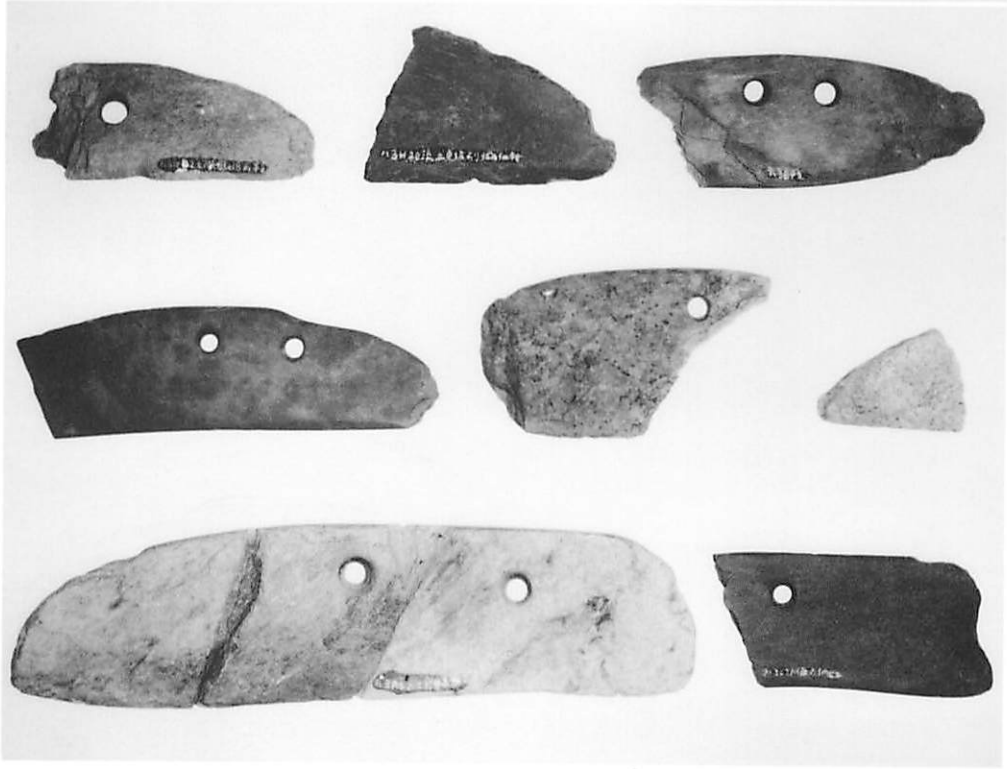
畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(5)



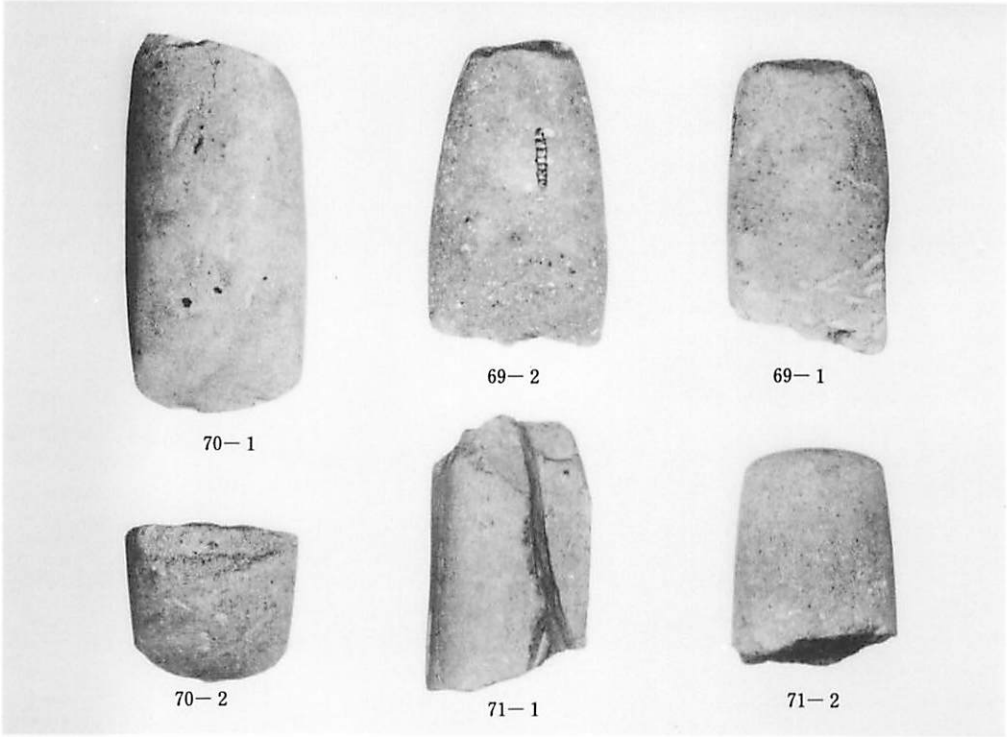


畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(6)

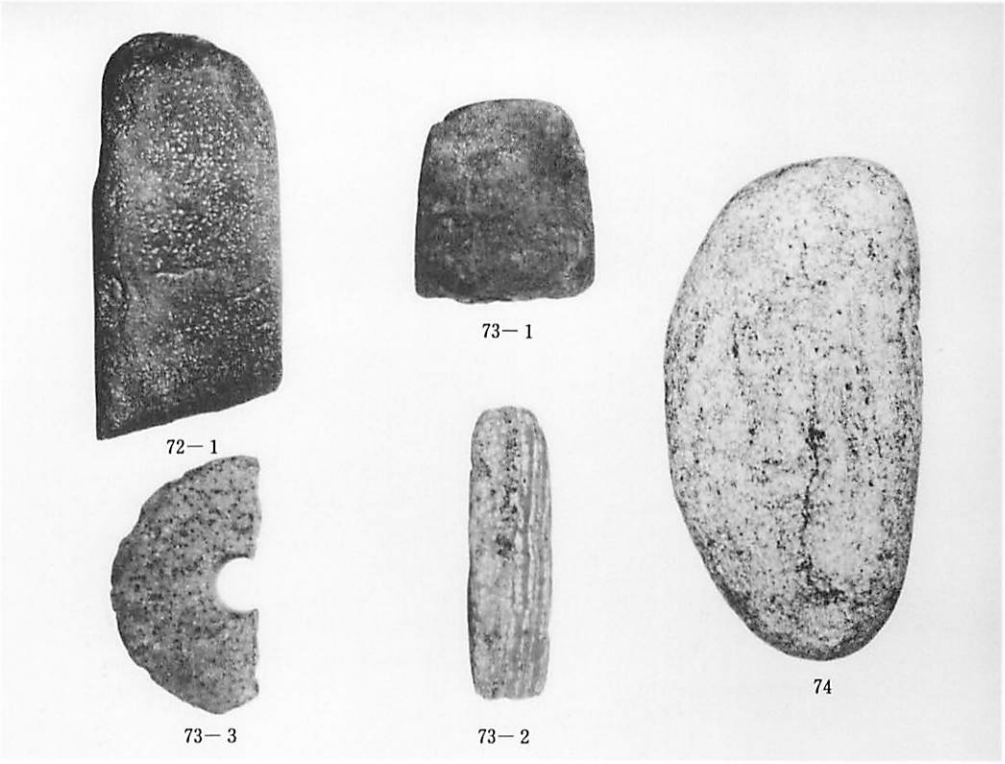




畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(7)



畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(8)



畑ノ前遺跡・弥生時代の遺物(9)

畑ノ前遺跡・古墳時代の遺物(1)　　4・6号墳出土遺物

87－2

87－6

87－8

87－1

87－9

87－5

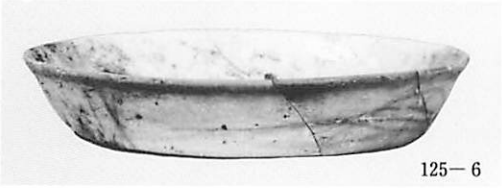
87－10

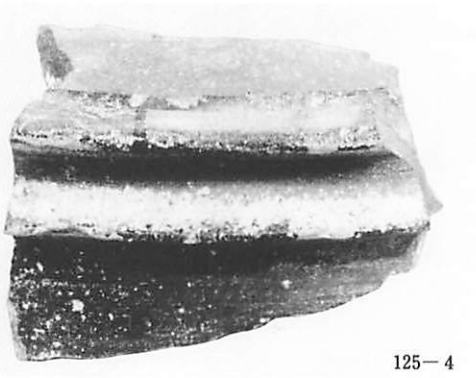
87－12

88

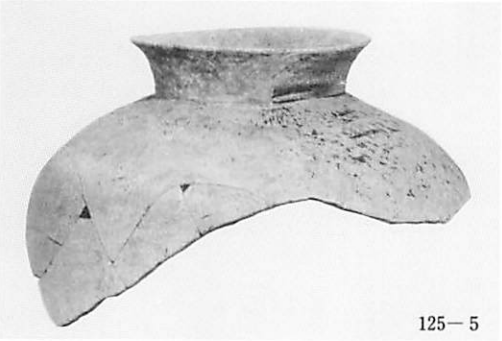
畑ノ前遺跡・古墳時代の遺物(2)　　7号墳・6Ⅰ2出土遺物

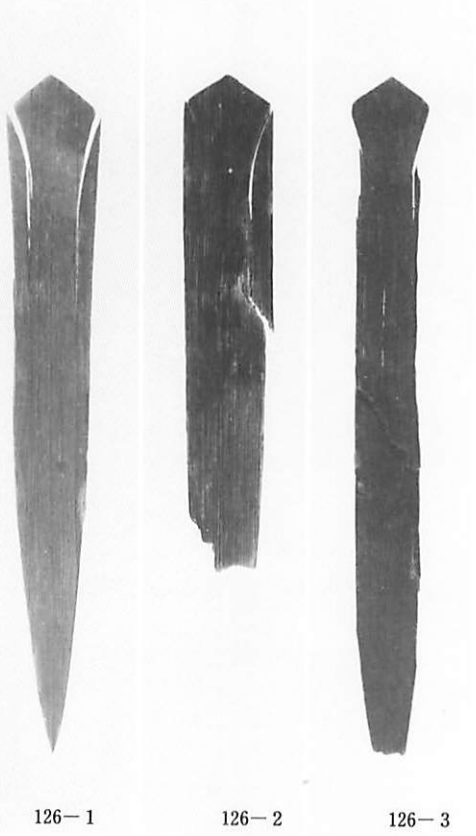
125－1


125－6

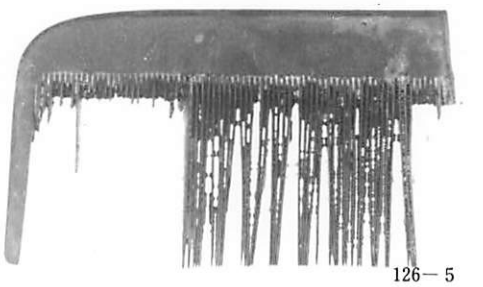

125－4

125－7


125－5


126－1　126－2　126－3

125－9


126－5

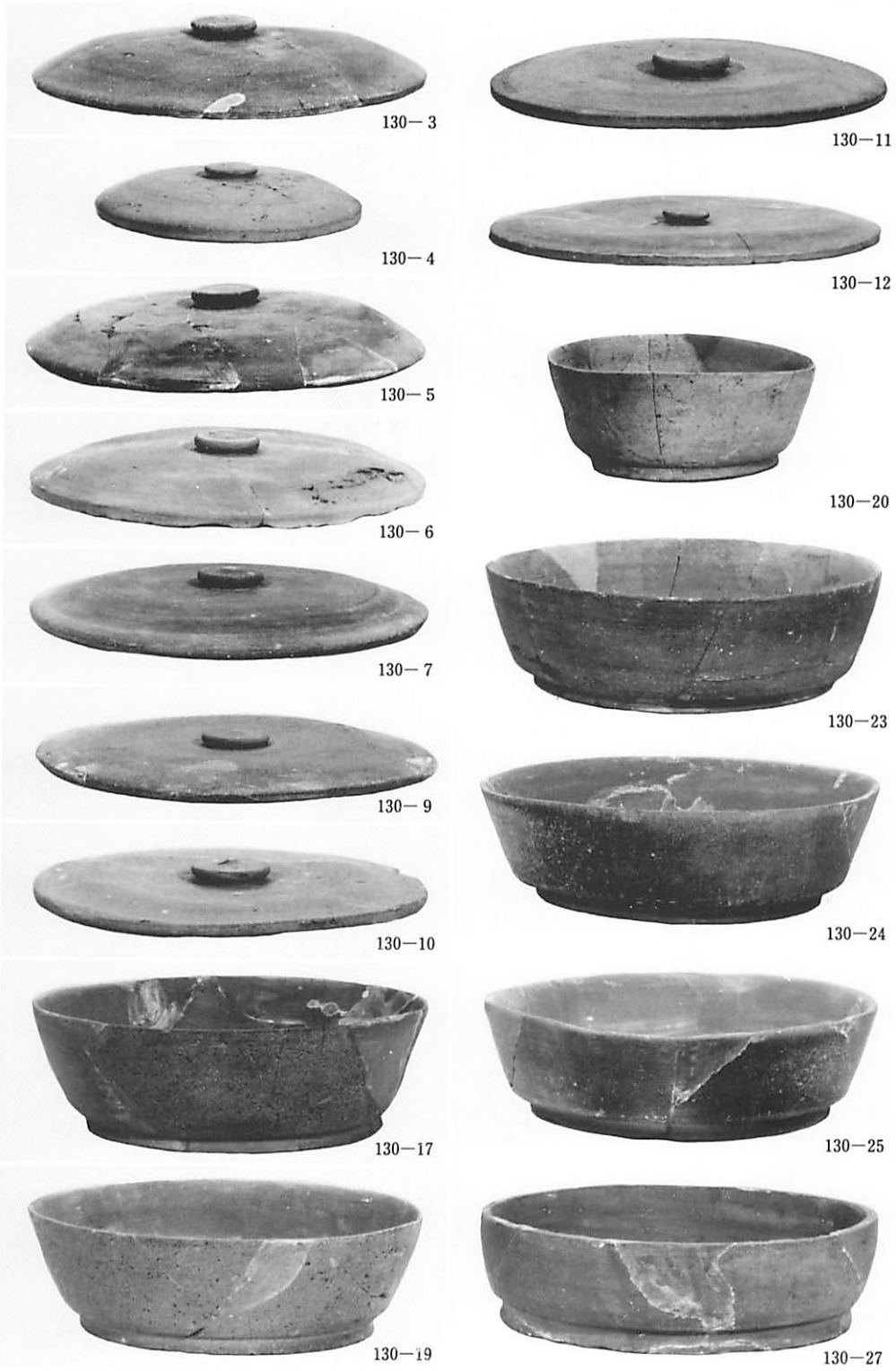
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(1)　　5Ｈ井戸１出土遺物

129－1

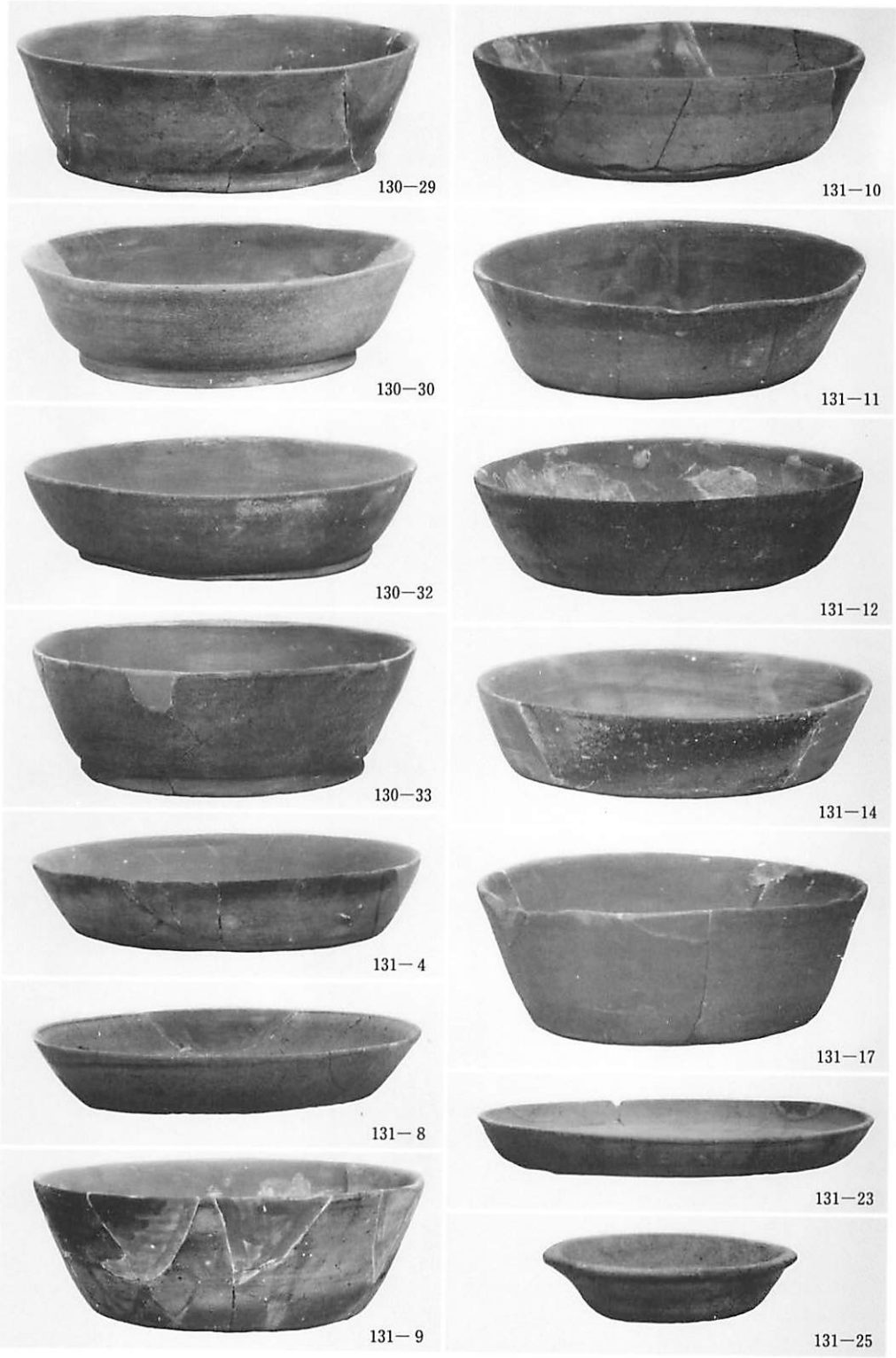
129－2

129－3

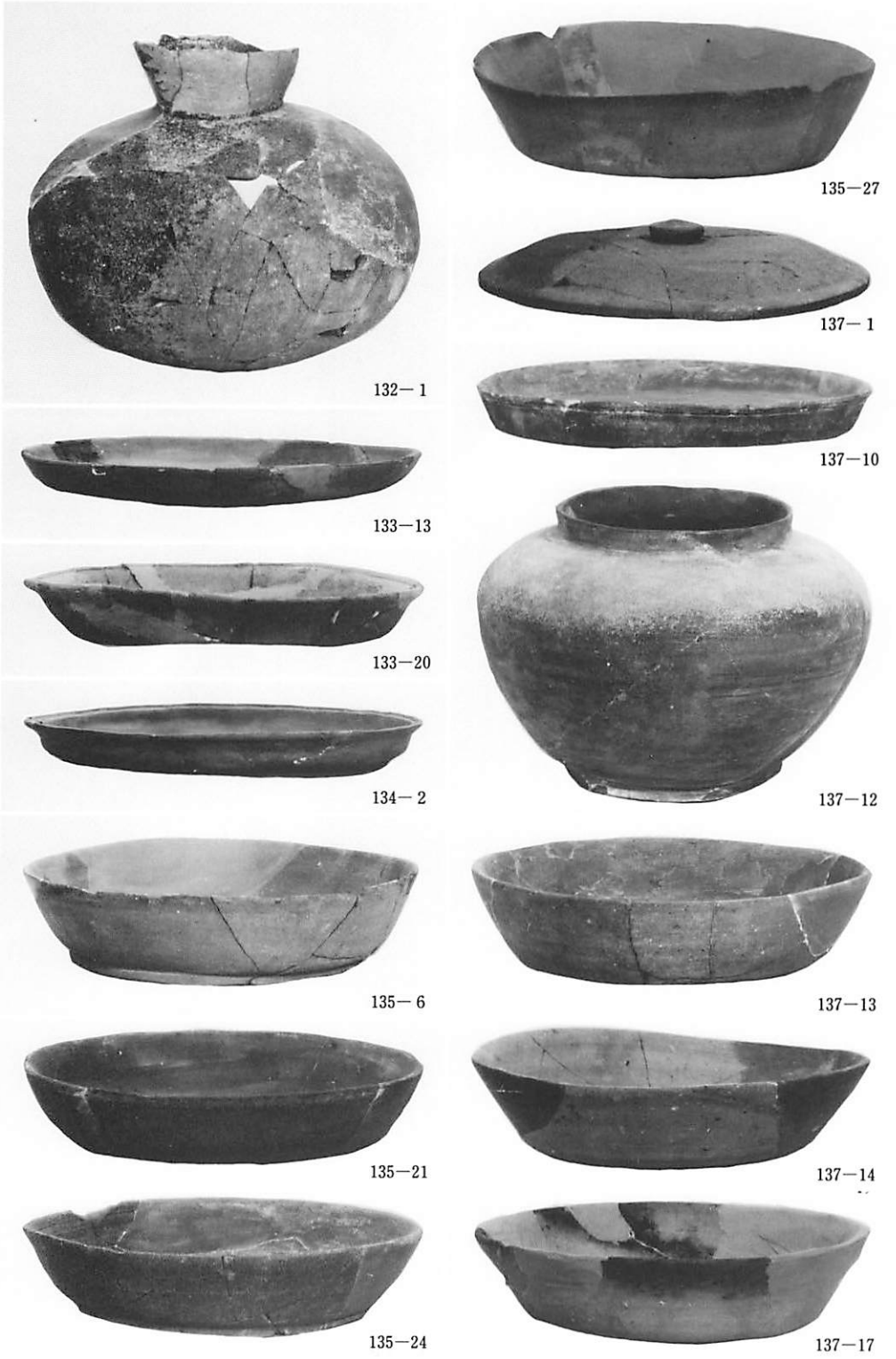
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(2)　　３Ｄ溝１出土土馬



畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(3)　5号墳周濠出土遺物(1)



畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物4)　5号墳周濠出土遺物2)



畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(5)　　5号墳周濠出土遺物(3)

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(6)　　6号墳周濠出土遺物(1)

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(7)　6号墳周濠出土遺物(2)

141－1

141－27

141－10

142－1

141－12

141－21

141－3

142－5

141－5

141－17

144

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(8)　　7号墳周濠出土遺物(1)

143－4

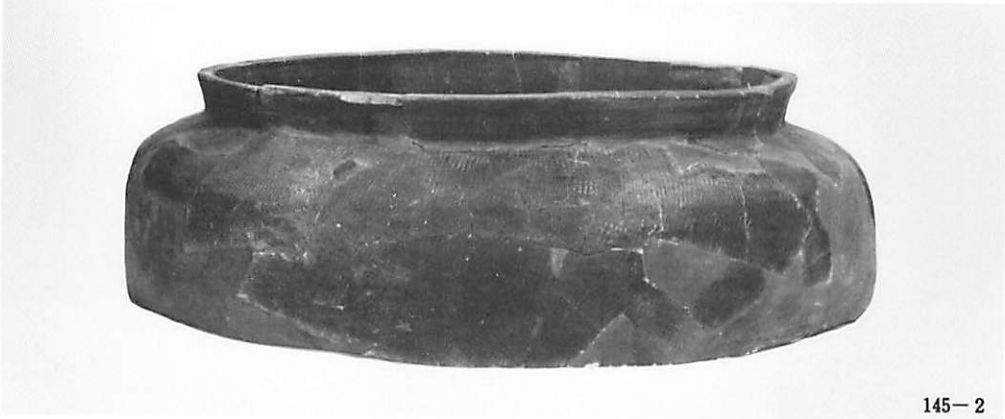
146－5

146－8

146－9

145－1

図未掲



145－2

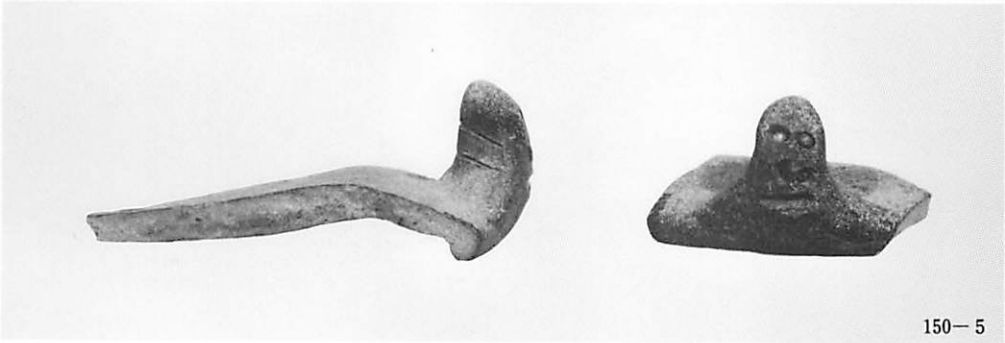
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(9)　　7号墳周濠出土遺物(2)

147－4

148－4

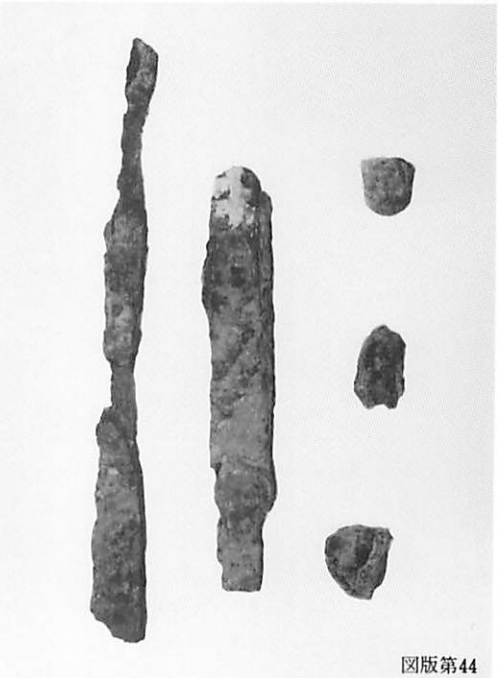
150－1

150－2



150－5

150－3



図版第44

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(10)　　土壙・包含層出土遺物

151－1

151－3

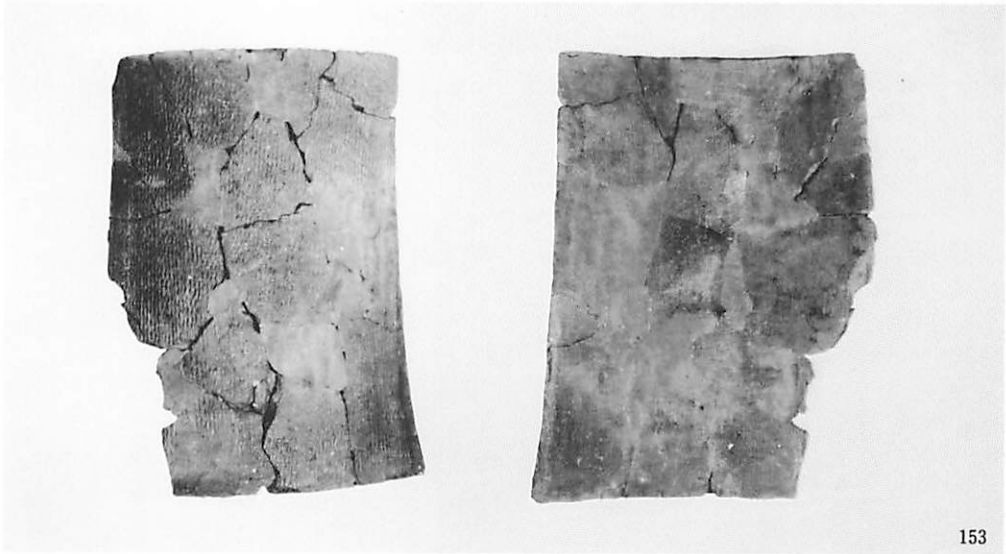
151－5

151－4

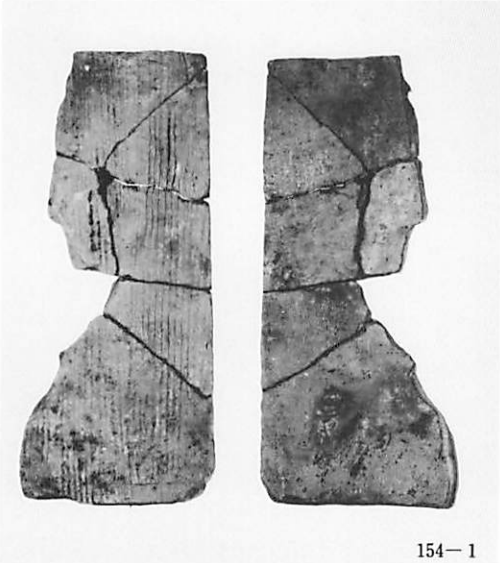
152－1

157－2

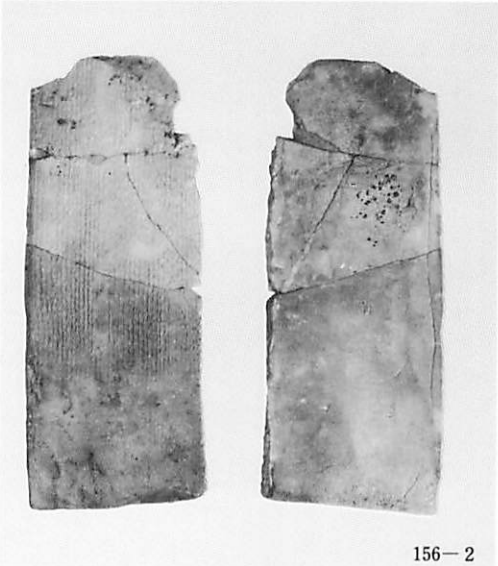
畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(1)　発掘区出土瓦(1)



153



154－1



156－2

155

畑ノ前遺跡・奈良時代の遺物(12)　　発掘区出土瓦(2)

2
3
A
A
B
B
C
C
D
D
3B土壙 1
3B土壙 2
3C7土壙 1
3D溝 1
3D土壙 1
3D24・25土壙 1
3E不明遺構 1
4
5
6
3号墳
0
20m

C
D
E
F
G
4
5
6
0
20m
3D溝1
3D土壙1
3D24・25土壙1
竪穴住居址5
3E不明遺構1
竪穴住居址4
3E土壙7
4E不明遺構1
2E土壙1
2E土壙30
2E土壙16
竪穴住居址3
3E土壙23
2E土壙28
1号墳
3号墳
古
墳
2号墳
5F溝3
6F土壙2
4号墳
6F井戸1
掘
立
柱
建
物
群
5F溝2南・ほりこみ
(5F溝2)
5F石組溝
中世溝状遺構
5号墳
群
4F土壙1
2F土壙1
1G土壙2
1G土壙3
1G土壙1
2G6土壙3
2G土壙3
2G土壙1
2G土壙16
2G土壙15
竪穴住居址1
(2G溝2)
3G土壙148
竪穴住居址2
3G土壙24
3G土壙7
3G土壙16
3G土壙81
3G土壙22
3G土壙237
竪穴住居址8
5G溝1
5G溝2
(6G溝2)
(6G溝1・2)
6G土壙4
6G溝

掘立柱建物群
墳
群
F
G
H
I
1
2
3
4
5
6
2号墳
4号墳
5号墳
6号墳
7号墳
5F溝3
6F土壙2
6F井戸1
5F溝2南・ほりこみ
(5F溝2)
5F石組溝
中世溝状遺構
5G溝1
(5G溝2)
(6G溝2)
(6G溝1・2)
6G土溝4
(6G溝1)
(6H溝1)
5H溝1
5H土壙1
6H土壙5
6H土壙3
5H井戸1
5H溝2
4F土壙1
2F土壙1
1G土壙2
1G土壙3
1G土壙1
2G6土壙3
2G土壙3
2G土壙1
2G土壙16
2G土壙15
竪穴住居址1
(2G溝2)
竪穴住居址2
3G土壙148
3G土壙1
3G土壙24
3G土壙7
3G土壙8
3G土壙22
3G土壙237
3H4土壙1
竪穴住居址8
竪穴住居址7
(4G溝1)
2H土壙1
3H13土壙1
4H不明遺構1
4H土壙3
4H土壙4
3H22土壙1
暗渠
5I土壙4
(6I溝1)
6I土壙1
(5I溝1)

京都府

(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書

— 煤谷川窯址・畑ノ前遺跡 —

発行日　昭和62年3月31日

編　集　平安博物館考古学第3研究室
川西宏幸・定森秀夫
同　考古学第4研究室
植山　茂・山田邦和

発　行　財團法人　古　代　學　協　會

604　京都市中京区三条高倉
振替京都8－850番
TEL　075(222)0888

印　刷　東　洋　紙　業　株　式　会　社

556　大阪市浪速区芦原1丁目3番
TEL　06(567)2111

THE REPORT OF EXCAVATIONS AT THE ESTIMATED PLACE OF SEIKA NEW TOWN IN KYOTO.

—— SUSUTANIGAWA KILN AND HATANOMAE SITE ——

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO, MCMLXXXVII